
Unnamed child — Magic Bomb —

sakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Unnamed child — Magic Bomb —

【Nコード】

N99560

【作者名】

sakura

【あらすじ】

改訂作業中のため、更新停止中。アリッサ・ノースウッド、その姿は少女でワシントンD.C.在住。彼女の周りには不穏に満ちている。裏社会と呼ばれる犯罪者たちと、そして、そんな彼らを利用しようとする者たち。過去の事件は、現在の事件へとつながり、そして、物語は世界という舞台を得て緞帳は巻き上げられる。

大幅改訂版はこちらです。↓「Unnamed child — 天の車 —」<http://ncode.syosetu.com/n0402x/>

【名前のない子供】シリーズ＋【キャラクター投票結果発表】

【名前のない子供】シリーズ

かつてマジックボムと呼ばれる殺人鬼がいた。世界を震撼させた「ケース・アングリーボマー」と呼ばれた事件から十数年。世紀の殺人鬼「マジックボム」に隠された秘密とはなんなのか。やがて、国家さえも巻き込んだ巨大な陰謀が姿を現す。そしてその中心には常にアリッサ・ノースウッドと呼ばれる金髪の少女が存在していた……。常時その行動をFBIやCIA、その他の多くの組織から監視される彼女とはいったい何者なのか。アメリカ全土にとどまらず、全世界を巻き込んだ陰謀と巨悪の舞台の幕が上がる……！

世界に生み出された「名前のない子供」たちと、その人間たちにまつわる不幸。

数多くの歯車が軋み、そうして回り出す。

【Unnamed child？ 罪と罰】

第一章 カルメン

第二章 ソシオパス

第三章 Serial killer

第四章 光と共にあれ

第五章 Mass Murderer

第六章 魔法の竜

第七章 マステマ

第八章 暁の夜明け騎士団

終章 地獄の水底へ

【Unnamed child? 天の車】連載中!

序章

第一章 運命の車輪

第二章 パンドラの箱

第三章 オーエン一家

第四章 スパイダー

第五章 Grimoire

第六章 殺人鬼とサイコパス

【短編】

冬の終わりに

昔日の盟約

ククルカン

名誉の在処

ろーるぷれい

【キャラクター投票結果発表】

キャラクター投票を行っています。

好きなキャラクターがいるよ! っていうかたは、よろしければ票をばちっといれていただけると嬉しいです。(＊・ω・)＊――)

<http://enq-maker.com/aokNqDF>

結果発表(2011/07/25)

ポイント<<<

アリッサ・ノースウッド 12票

ジョージ・リート 8票

綾瀬臣 3票

高崎千歳 1票

イーサー 1票

コメント<<<<

第一章 カルメン 1

> i 2 6 3 9 1 — 3 2 8 9 <

エレーネ。

キャサリン・キーン。

アリッサ・ノースウッド。

ニーシャ。

ツヴァイ。

マジックボム。

火の鳥。

多すぎるその名前は、全て彼女を定義づけるものだ。

たくさんさんの名前を彼女は名乗ってきた。

それらは全て、彼女自身である。

しかし、偽ろうとして名乗った名前ではない。

彼女にとって個体としての定義などを、名前に求めてはいなかっただけだ。

名前など、「人が人を区別するため」の記号でしかない。

「：わたしは」

深紅の光の中で彼女は手のひらを開いた。

鮮やかなブロンドの巻き毛は、白皙の肌を柔らかく包み込む。愛らしい水色の瞳は大きく、当たり前前のことだが睫毛も眉毛も金髪だった。

白い肌と整った顔立ち。

典型的なアリア人だ。

紅蓮の炎の中で彼女は目を上げた。

世界の全てが赤い。

その色に彼女は認識する。

「これは夢よ」

そのとき、声が聞こえたような気がした。
女の。

聞こえる…？

聞こえない…？

ここにいるの…。

ここにはいないの…。

それはどこ？

それはなに？

＊

「…ガール」

彼女はつぶやいた。

雲をつかむような自問自答を頭の中で繰り返しながら、少女の姿をしたそれはまぶたを開いた。

じんわりと額に汗が浮いている。

今日も、「また」目が覚める。

目が覚めるということに、彼女は安堵に近い嫌悪感を感じた。

「生きて」いるというのにこの嫌悪感は「何」だろうと、そこま
で考えて、眉をひそめた。

舌打ちをする。

「目が覚めたとたん舌打ちとは色気がないな」

穏やかな青年の声が頭上から降ってくる。

その声に感じたものはやはり不快感だ。次いで感じたものは後頭
部に感じた物へ対する不快感。

世界に存在するものの全てが不快だと思う。

なにもかもなくなってしまうばいいのに。

彼女はそう思った。

「かわいい寝顔だった」

真顔で言われて少女はようやくしてから上半身を起こすと膝枕をしていた男に一瞥をくれてから額にかかる髪をかきあげた。

リビングのソファでいつの間にか眠っていたらしい。

「名前、呼ばれた…」

ぽつりと独り言のようにつぶやいた彼女に、男は左右に首をふる。

「あんたはいつも目が覚めたときは機嫌が悪そうだな」

告げられて、少女は首をかしげる。

「…そう？」

「まるで、目が覚めるのが嫌いみたいだ」

「…ふーん」

青年に指摘されて彼女は睫毛を伏せる。

輝くブロンドが彼女の頬を覆うように緩やかに巻いている。

年の頃は十歳よりも少し下といったところだろうか。

ただ単に寝起きが悪いために彼女が機嫌が悪い、というわけではないことを彼は知っている。

「でも、どうだっていいでしょ、そんなこと」

「確かにな」

告げられた通り、彼女は目が覚めることが嫌いだった。

できれば永遠に目が覚めなければいいとさえ思う。

そう感じる。

だというのに、彼女はいつも目が覚める。

「名前を呼ばれたって…？」

新聞を読んでいた男がちらりと視線だけを上げたが、少女は肩をすくめてみせた。

「夢を見たような気がしたけど、もう忘れた…」

夢の内容など覚えていない。夢の中のことなど、彼女にはどうで

も良かった。

誰でもそうだろう。夢の内容など、起きればすぐに忘れてしまうのが人の常だ。

「夢なんて見ても、なにも変わらない」

冷ややかに告げた彼女はそうしてからテレビをつけた。

「テレビ好きだな」

「：暇なだけよ」

やることはない。

彼女はいつものことだが暇だ。

ボーイフレンドがいるわけでもない。

話す相手は同居している青年か、時折連絡が入る「依頼者」か、もしくは司法機関や警察機関の人間くらいだ。

彼女は特別だ。

少女は眉間にしわを寄せたままテレビの画面を見つめていた。

二時間ほどたったころだったか。

電話が鳴った。

もちろん、少女は無視だ。

電話になど見向きもしない。デジタルな呼び出し音が続いている。

「電話でて」

「：なんで俺が」

「わたしが出たくないからに決まってるでしょ」

彼女は電話にあまり出たがらない。

そもそも、彼女に電話をしてくる相手など、少女には心当たりがありすぎて受話器を取りたがらなくてもやむを得なかった。

そんな事情を青年は理解しているつもりだったが、理不尽だという思いからは離れられない。

彼女のすばらしく理不尽な回答に青年はため息をついた。

「相変わらず女王様でいらっしゃる」

命令口調を背中に、電話の応対のために立ち上がった彼はかすか

な違和感を感じたが、その違和感を口にするのではなく鳴り続ける電話の呼び出し音に受話器を取った。

その電話が全ての始まりになるとは知らずに…。

少女は、彼が電話の対応をしている声を聞きながら、テレビニュースを見つめていた。

彼女の頭の中に刻みつけられた映像が消えない。

映像はノイズのように、消えていかない。

まるでしじまにさざめくさざ波のようだ。

彼女は、眉間にしわをよせたまま手で握りしめた。

「そういう仕草が子供っぽいんだろ」

昔の仲間に言われたような気がする。

「子供だろうが、大人だろうが、個人の強さには関係ないわ」

そんなことを言った男に、少女はそう告げた。

思い出しながら苛立たしく彼女は親指の爪をかむ。

オレンジジュースを取ろうとして立ち上がった彼女は、すたすたと裸足で床を歩いていった。リビングに続くキッチンの片隅、大きな冷蔵庫を開いてジュースの入った瓶に手を伸ばす。

そのときだった。

本気のナイフが彼女の頭上をかすめるように飛んでいく。

しかし少女は動じない。

「…殺す気？」

言いながら振り返った。

手にしたオレンジジュースの瓶が緊張感を削ぐ。

「そんなもんであんたは死なないだろ」

青年の投げたナイフが壁に付き立つが彼女は不機嫌なままで頬をなでようとする大きな手を払いのけた。

「子供扱いしないで」

おまえの、どこにそんな権利があるのだと、彼女は告げる。

「はいはい」

大概のことだが、彼女はいつも機嫌が悪い。

そもそも機嫌が良いところを見たことがない。

「レオン」

突然名前を呼ばれて男は視線を向けた。

「おまえ、どうしてこんなわたしとつるんでいるの？」

正体不明の女。

青年の記憶にある限り、彼女と知り合ってから移行、少女の姿が変わったという印象がなかった。おそらく身長も変化がないだろう。一方的に青年、レオナルドだけの身長だけが伸びた。

「…さあ？ どうしてだろうな？」

真面目に尋ねられると返答に窮する。

少なくとも、彼は彼女が嫌いだとか、恐ろしいだとか、そんなことを考えたことがなかった。

「…怖くないの？」

怖くないのか。

気味が悪くないのか。

彼女はそう問いかける。

「別に、一緒にいるのが汚いホームレスとかじゃないからな。かわいい女の子なら別に問題ないだろ」

まるでそれだけのことだと言うかのような彼の言葉に、少女は不審の眼差しを向けた。

「ペド野郎って言われたらどうすんのよ」

「…少なくとも、あんたにアリスなんて堂々と言える奴なんて俺含めているとは思えないけどな」

彼女に、幼児だと面と向かって言える相手など何人いるだろう。

小さな愛らしい外見の少女。

容姿は確かに幼女でしかないが、彼女は見た目そのままではありえない。

「あんたはやめてって言ってるでしょ」

気分が悪いわ。

唇をへの字に曲げた彼女は肩を落としてからぶすくれた。

「わかったよ、アリサ」

アリッサ・ノースウッド。

それが彼女の今の名前だ。

本当の名前が何であるのかレオナルドは知らない。

なぜならそれについて彼女が言及したこともなかったからだが、
おおかた偽名であろうということは察しが付いていた。

「：それで、なんの電話だったの？」

「仕事の」

「そう」

短いやりとりで互いの言いたいことは伝わった。

「今度はどこにいくの？」

「んー…、お手伝いかな」

「へー」

お茶を濁したつもりだったが、アリッサにはバレバレだったようで、棒読みの返事を受けただけだった。

「気をつけなさいな、あの男、結構尻軽よ」

オレンジジュースをガラスのコップにつぎながら無表情で言った

彼女は部屋を出て行く後ろ姿を見送った。

「：信用すると痛い目を見てよ」

ぼそりと独白する。

冷たい氷のような水色の瞳がじつと水道の蛇口を見つめた。

ぽたりと水の滴がシンクに落ちる。

コップのオレンジジュースを飲みながら、ゆっくりと窓辺に歩み

寄ると窓外を眺めた。

なんの変哲もない静かなワシントンの住宅街。

変哲がなさすぎて嫌気がさした。

「：信用なんてできないわよ。誰も」

独白は室内へと流れて消えていく。

「信用なんてできない。誰も彼も…、わたしも」

そうして彼女は目を伏せた。

信用などしてはいけない。

信用をして、裏切られ、そうして多くの意味で傷つくのは自分だ。自分だけを信用するのだ、と彼女はひとりつぶやく。

幾度となく、そうして彼女は危機的な状況に陥り、そうして窮地を脱してきたのだ。

だからこそ。

「誰も信用なんてしてはいけない」

彼女はつぶやいた。

＊

機嫌などいつも良くもないし、悪くもない。

機嫌が悪く見えるのは、彼女が常に内側に不満を抱えているためだ。

彼女はいつものように日常に目を向けた。

早朝、小学校に登校するためにカバンを持った彼女は自宅のアパートメントを出た。

歩道をとことこと歩く少女はじっと考え事をしたまま車の走る車道に出た。

全くスピードを緩めずに横断歩道を渡ろうとする。

その瞳には、まるで信号など見えていないようだ。

傍から見れば、子供が考え事をしながら道を歩いている、そう見えただろう。

「危ない！」

見知らぬ青年の叫び声に顔を上げた。

同時に体を誰かに抱き込まれたと思った瞬間には、地面から足が離れていた。

太い腕に抱きしめられて、体が横倒しになる。

ひどい衝撃と、聞こえたのはブレーキの音。

そして怒鳴り声…。

「…危ねえだろう！ このくそガキ！！」

どこか呆然とその音は耳に入ってくる。

「危ないじゃないか！ 信号はよく見ないと！」

そもそもアメリカで信号など見たところで車道を見なければ意味もないのだが、お約束のように声があった。

スポーツ選手か兵士でもあるような、大柄の青年。

トラックに乗って彼女を見下ろしてなにかをがなり立てているのは柄の悪そうな中年男。

どこにでもありそうな平凡な光景だ。

彼女をのぞき込んだまま怪我のないことを確かめる青年は、ふと少女の体が小刻みに震えだしたことに気がついた。

ダンプロトラックにひかれそうになった訳だから、少女のその反応はごく普通のものだった。

青年の腕の中で恐怖に震えて嗚咽をにじませる。

堰を切ったように泣き声を上げた子供を抱きしめて、青年は歩道へと渡ると、落ち着かせるように軽く背中をたたいた。

「怖かったな、もう大丈夫」

しばらくしてから泣き声もおさまり、「気をつけて歩けよ」とおさまりの文句でお説教を受けてから、アリッサは赤くなった目元をぬぐいながら歩き出した。

アリッサにとって、日常生活とは計算尽くで占められている。

先ほどの交通事故も計算尽くであれば、あそこで青年が助けに入ることも計算していた。

ごく「まっとうな反応として」泣くことも彼女にとっては造作もないことで、そうやって「普通の子供」を演じなければならない。

彼女が「普通」に振る舞っていることは世間では不自然なことだった。

だからこそ、アリッサは計算する。

適度におしゃまで適度に不注意な子供。

それが少なからず面倒くさい、とも感じながら、アリッサはふとかすかな違和感を覚えて背後を振り返った。

先ほどの青年だ。

視線が重なる。

彼はアリッサを見ていた。

誰だ、と思う間もなく認識する。

数年前に出会った少年。

人間とはこうもあっという間に成長するものなのかと、アリッサは思った。

アリッサと目を合わせた青年は、慌てたように追いかけてきてから息を切らせて呼び止めた。

「待って！ ちょっと待って…！ 君、お姉さんから従姉妹でキャシって人いない？」

「…？」

呼び止められてアリッサは顔を上げた。

肩にかけられた手が重い。

「…いせんけど」

「君、名前は…？」

「アリッサ。アリッサ・ノースウッド」

思い出した。

アリッサがキャサリン・キーンと名乗っていたときに出会った野球少年だ。

なにかと彼女になれなれしく追いかけてきた少年。

「そっか…、似てると思ったんだけど…、気のせいかな」

苦笑した青年を一瞥して、少女はぺこりと頭を下げた。

内心で考えていることと彼女の動きは裏腹だ。

「先ほどはありがとうございました」

品の良い、礼儀をわきまえた子供を演出する。

造作もないことだ。

「どこの小学校？ 送ってくよ」

「あ、すぐそこです」

言いながら彼女は、視線の先にある芝生の向こう側の二階建ての

小学校を指さした。

並んで歩き出した青年ににっこりと笑ってアリッサは、用心深く相手を伺った。

確か、無駄に勘の良いところを持っていたような気がする。

「キャシーって人と似てるんですか？」

彼女は平凡を装って青年に問い返した。

「うん、気が強くて、生意気でさ。こまっしゃくれたところがあっていつもひとりでいた子だったんだけどすごくかわいい子で」

君みたいだね。

そう付け加えてから、青年はウィンクする。

「でも君は、あの子みたいに生意気じゃないね。すごく礼儀正しい」
生意気で気が強くて悪かったわね。

内心で毒づいてから、アリッサは困ったように微笑した。

実際困ってもいたがそれは口に出さない。

数メートル歩いて小学校の前についた彼女は、ぺこりと彼に一礼する。

「ありがとうございました、いってきます」

カバンを抱えて学校へと入っていく少女はそうして今日も変わらない日常生活をはじめめる。

そのはずだった。

数年前に出会ったはずの男との再会。

きつと意味などない。

たまたまだろう。

アリッサはそんなことを思いながら黒板を見つめた。

授業をする教員の言葉が耳に入ってくる。

ぼんやりとその言葉を聞きながら、彼女は気づかれないように軽くかぶりを振った。

出会いは偶然。

意味など必要ない。

彼女はそうして、平凡な日常を繰り返した。

数日前に仕事に向かったレ 変哲のない時間。

変哲のない生活。

アリッサにとって日常とは退屈なものでしかない。

退屈な時間の繰り返し。

昔のクラスメートに会ったという、アリッサにしてみれば至極珍しい事態が発生したこと以外に何一つ変わらない生活が続いている。レオナルドは二週間ほどまめに仕事に出かけて以来、連絡は一切ない。

もつとも、彼らのような商売をこなす者は、仕事が終わるまで連絡をしないことが当たり前だった。

連絡もないまま死ぬか、連絡も入れず戻れるか、ただだ。

だから、彼女は気にしない。

幾度となくそんな別れと出会いを繰り返した。

レオナルドやアリッサがいる世界は普通の世界ではない。

なにも事件の起こらない平穏な世界にはほど遠い。

「きつとまた、わたしはひとりで取り残されるのよ…」

わたしが、死ぬまで…。

リビングのテーブルで黙々と宿題をしながらアリッサは考える。

彼女にとって小学校の宿題などたやすいものではあったが、それは彼女が平凡な日常を送るためには必要不可欠な儀式。近所に住んでいるお節介な「普通のおばさん」に目でもつけられた日にはまた住む場所を変えなければならない。

アメリカという国には存外お節介が多い。

控えめなノックが響いた。

ドアフォンがあるというのに、わざとらしいノック。

ノックが四回。

それは「彼女」と「彼」の合図。

「…どうぞ」

「こんばんは」

彼の声ではない。

彼。

鉛筆をくるくると指先で回しながら彼女は考えた。

「…あいつは？」

「あの人は、明日くるそうです」

わたしはただのお知らせ役です。

固い声で青年が言った。

この家に彼女を訪ねて来ると言うことは、詳細とまでは聞かずとも、アリッサがどんな類の人間であるかは聞いているはずだ。

そうでなければおかしい。

彼は、アリッサを尋ねて来訪したのだ。

「あっそ」

あの人、という言葉にアリッサは片眉を上げたが、その言葉については追求せず鉛筆をノートに走らせる指をとめた。

「なにか厄介なことでもあったの？」

「それは明日に本人から聞いてください」

それだけしか言わないならばそもそも自分の所に人をよこす必要などないのではないか。

彼女は思う。

要するに、「彼」は「明日行くからよろしく」というくだらない伝言のために人をつかったということなのだ。

あまりにも馬鹿らしくて、アリッサは息をつく。

「あっそ、使えない男ね」

肩をすくめた少女はきつちりとスーツを着込んだ男を見つめてノートを彼の目の前に突きつけた。

「教えてよ、おじさん」

算数の宿題。

実際はおじさんと呼ばれる年齢ではないだろうが小学生から見れば二十歳以上の青年などおじさんとひとくくりにされてもおかしくはない。

「俺はおじさんじゃない」

「なんでもいいわよ」

「俺はまだ二十代だ」

「…だからなんだっていいって言ってんでしょ。おまえがおじさんだろうと、お子様だろうと、ね」

そう告げた彼女は苦々しい表情のまま、親切に算数の宿題につきあってくれる「おじさん」に内心で低く笑った。

彼女にとって、彼の年齢などどうでもいいことだった。

興味の無いこと。

真剣な表情で算数と格闘する社会人の青年の横顔を眺めてアリッサははっと息をついた。

最終的に、「おじさん」と一緒になって問いた算数の宿題をカバンの中にしまった。

目を伏せた彼女の横顔は、どこかぞつとするような色香を感じて、男は一瞬目を見張った。

彼の上司からは彼女の詳細は聞いていない。

彼女が何者であるのか。

彼女が何歳であるのか。

国家機密と目される彼女自身。

アメリカ合衆国はなにを隠蔽しようとしているのか。

「君はいったい何者なんだ…」

「秘密、よ…」

唇に人差し指を押し当てて、彼女はほほえんだ。

いつか、いやでも知ることになる。

小さく付け加えて、アリッサは微笑した。

「わたしなんてその程度の存在でしかない」

＊

たたん、たたん…。

線路の上を電車が走る音が響く。

そこは毎日何人もが乗車する電車の高架線の下に当たる。
彼女の暮らす街の一角。高架線の下の暗がりの中に黒い車が止ま
っていた。

どこにでもありそうなドイツ製の高級車だ。

ブーツと、ウールのコート。

グレーのコートにはフードがついており、ブロンドの巻き毛は無
造作に三つ編みにされている。

黒い革製のカバンはバンドで背中に背負っていた。

リボンの付いたカチューシャをつけているその姿は、どこにでも
いるアメリカの小学生だ。

アリッサ・ノースウッド。

「久しぶりだね、エレーネ」

男の声に彼女は乗用車の車体に無言のまま寄りかかった。

ややしてから彼女は視線を遠くに投げかけたままで口を開く。

「：ひとり？」

「エレーネと会うときはいつもひとりだ」

エレーネ。

そう呼ばれたアリッサは忌々しげに眉をしかめてから舌打ちする。

その名前は嫌いだ。

「レディらしくないな」

「：レディなんかじゃないわ」

「：エレーネ」

「それで、あんたがわたしに何のようもなく、久しぶりって言い
来ただけじゃないんでしょ」

わざわざ、人を使ってまで彼女を呼び出した。

何の用事もないということはまずあり得ない。

「今は、アリッサ・ノースウッド、だったか？」

彼がわざとらしく訂正する。

エレーネ。

その名前は思い出したくもない記憶を彼女に呼び起こす。

最初に、彼に呼ばれた名前もエレネだった。
生活をしながら幾度となく名前を変える彼女に、彼は困惑していた。

それゆえに時折意地悪でもするように、彼は彼女をエレネと呼んだ。

「それはガーゴイルが勝手に呼んだ名前で、わたしには名前なんてない」

忘れたくても、忘れようのない。

アリッサはじっと目を伏せる。

「レオナルドが捕まったらしい」

「…ふーん」

そんなくだらないことを伝えるためだけにこの街に来たのかと視線で問いかければ、スーツ姿の中年の男はやれやれと肩をすくめて見せた。

「降参だ」

「…最初からとっとと白状してればいいのよ」

「黒幕はイーサーだ」

「イーサー…？」

「そう…」

「あの馬鹿、イーサーに捕まったの…？」

がりがりと頭を掻いた少女はむつりと黙り込んでから、ため息をつくとも男が開いた車の助手席に乗り込んだ。

「それで、そのイーサーのことだけど、最近は生臭い噂は聞いてないわよ？」

「…あの男は尻軽だ、君も知ってるだろう？」

ボタンと音を立てて運転席に乗り込んだ男に、少女はちろりとまなざしを向ける。

「ええ」

おそらく、レオナルドが失敗したというのか。
そのために捕まった。

けれども、なにを失敗したというのだろうか…？

「ジョージ」

「…うん？」

「どこに行くの？」

「ホテル？」

短いやりとりにはアリッサは小さな拳を振り上げた。

「殺すわよ」

「…冗談だよ」

殺す、という物騒な物言いに苦笑した中年男はアリッサの金色の頭を抱き寄せてキスをした。

父親と娘、という間柄にしては年齢が離れすぎている。

しかし祖父と孫娘という間柄でもない。

どこか恋愛関係に近いような、保護と庇護による相互関係でもあるかのような。

「少し寝るわ…。ついたら起こして」

「了解」

目を閉じた彼女に男は肩のホルスターの拳銃を指先で確認する。

出会ってどれくらいになるだろう。

ぼろぼろの白衣を着た子供があてもなくさまよっていたことだけを覚えている。

「…アリサ」

今の彼女の名前。

彼女は何度となく名前を変えた。

眠る彼女は男が三つ編みをほどもなんの反応すら見せない。

無二の信頼に息を吐き出した。

「アリサ…」

子供のままの姿の愛らしいアリッサ。

信頼が重い…。

「…愛してると言ったら君はどんな顔をするだろうね」
いつか共に行動するようになった異端の犯罪者。

彼女の金髪に口づけてから、男は鼻を鳴らして灰色の髪をかきまわした。

自分が捜査官で、彼女が犯罪者でなければもっと違う道があったのかもしれない。

そこまで考えて、ジョージは笑った。

どちらにしたところで、アリッサがアリッサである以上はどんなことがあるうと甘い関係など望むべくもなかったのだから。

どこまで愚かしいのだろうか、彼は笑った。

犯罪者のアリッサと、捜査官のジョージ。

少女のアリッサと、中年のジョージ。

彼らを隔てる溝は深く、広い。

決してそれは埋まらない。

ジョージは自嘲するように口元だけで笑った。

どれだけの時間がたってからかジョージは隣で眠るアリッサの肩を揺すった。

裏の稼業をこなす者らしく、彼女はシートベルトなどしていない。彼の前では彼女は自分を偽らない。

到着したのはホテルの一室だ。

満ちるのは静寂。

「つれてきたぞ」

大男の背後からゆっくりと入ってきたのは小さな子供。

巻き毛のブロンドの、第一次成長期の始まる前のしなやかな子鹿のような少女。

誰もが目を疑った。

もちろん、彼女を知る者がいて、彼女が知る捜査官もいる。

しかし、それほど遠くはない昔日の彼女を知らない者もいる。

若い捜査官が数人。

「それで、なにが起こったの？」

あいているソファに腰を下ろした少女は、背中をもたれると体がソファに沈み込むため彼女は背筋を正して室内にいる男達をぐるり

と眺めた。

室内にいるのは四人。

ジョージを含めて五人。

今回の呼び出しにはレオナルドとイーサーが絡んでいることから国内の事件ではない。

イーサーは名前の通り、アジア出身でアジア在住の男だ。

「物騒なもんね」

揶揄するような高い子供の声。

ジョージは彼女の隣へと座る。

それについてなにか言おうとしたようだが、結局、何も言わずに少女は口を閉ざす。

かすかに笑いをにじませたアリッサの声に、ジョージは少女の肩を軽く押さえた。

「全員が見事に拳銃携帯でさ。わたしがそんなに怖い？」

くすくすと耳障りな笑い声。

「別に君が怖いから銃を持っているわけではない」

不愉快げに告げた男のひとりが、それでもなお訝しげなまなざしで少女を見つめている。

本当にこの小さな子供が伝説の殺人鬼なのかと。

伝説の殺人鬼。

彼女の本名は誰も知らない。もしかしたら、彼女自身も知らないのかもしれない。

「：通り名は、マジックボム」

君の名前だ。

十数年前に全世界を恐怖に陥れた殺人鬼。

しかしマジックボムのターゲットは無差別ではなかった。

彼女は狙った相手だけを殺した。

「でも悪いけど、あいつらまともじゃなかったわよ」

「だから殺していいわけじゃない」

ジョージがたしなめるが、アリッサは軽くにらみつけてからパチ

ンと指を鳴らした。

「ジョージはいつもそればかり」

「何人死んだと思ってるんだ！ 貴様のターゲットじゃない人間も大勢死んだ！ 警官も、消防士も、民間人も…っ！」

怒号が重なる。

アリッサはうんざりと天井に目を上げた。

「やめてよ、あんたたちわたしに説教をするつもりで呼んだの？ それとも協力させるために呼んだの？ どっちなの？」

説教も、なにもかもうんざりだった。

間隙をつくような一瞬の沈黙。

そこにアリッサは言葉を滑り込ませる。

残酷な、暗闇を。

「死ぬ奴は死ぬのよ。遅かれ早かれ、ね…」

その一言はぞっとするほど、深く、暗い。

「…正直なところ、どう思う？」

ジョージに促されて少女は立ち上がる。

ゆっくりと室内を歩いて、彼女は窓辺のカーテンに触れた。

「イーサーは、尻軽だけどアメリカを敵に回すほど馬鹿じゃない」

彼女はごく淡々と告げて、男達を見渡した。

「なにか引かかるのよね…。レオンは確かにひよっただけど、命がかかっている状況で失敗するほどアホじゃない」

独り言のようにつぶやきながら親指の爪をかんだアリッサは床を見つめて考え込む。

頭の中で鳴り響くのは警鐘だ。

「君に協力してもらいたい」

もっとも年長だと思われる男が初めて口を開いた。

鋭い眼差しがアリッサを凝視する。

その剣のように鋭い視線を受け止めて、少女は唇の端をつり上げる。

「…銃持って、威嚇しながら言う台詞じゃないと思うけど？」

「お噂はかねがね聞いている。君に、銃など無意味だろう」

拒否権はないのだとでも言いたげな男の言葉に、娘は失笑した。

「協力してもいいけど」

アリッサは肩をすくめる。

「君につけこむようで悪いね」

男の言葉に彼女は左手で片目を覆った。

彼女には別の世界が見えているのではないかと、男たちは思う。おもむろに銃を取り出した最年長の男は無言で撃鉄をおろした。まっすぐに銃口をアリッサに向ける男は片手で軽々と引き金を引いた。

至近距離からの射撃を、引き留める間もなかった。

「レイン！ やめっ…！」

ジョージの制止すら遅かった。

間に合わなかった。

右手の指を差しだしたアリッサは小さく息を吸った。

時間が止まる。

実際に時間が止まったわけではない。

時間が止まったように見えただけだ。

彼女の眼前でぴたりと止まった弾丸が真っ赤に発熱する。

「こんなもので、わたしを試せるとでも…？」

小さな手で発火した弾丸を握りしめたアリッサを中心に風が舞った。

「もちろん、思っていないさ」

勘が鈍っていないかと思っ

「帰る」

言い捨てて出て行くアリッサが手を開くと、砕けた鉛がばらばらと床に落ちた。

「彼女を試すようなことはしないという約束だったじゃないか…！」
レインと呼ばれた男にくっつかかるジョージを尻目に、アリッサの声が飛んだ。

「ジョージ！」

帰りたいのだと、その言葉が言外に告げていた。

「一緒にいくといい、君はお姫様の聖なる騎士だ」

ブロンドがふわりと宙に浮かぶ。

彼女の周囲が一瞬、赤色に染まったように見えたのは気のせいだったのだろうか。オナルドからは連絡はこない。

むっつりと黙り込んだアリッサは車の窓から外を見つめている。
流れていく風景と、風に巻き上がるブロンドにジョージは片目を
すがめた。

今は、声をかけてはいけない。

彼女は思考の谷間にある。

「…イーサー…」

つぶやいた彼女は、やはり黙り込んだ。

「イーサー…」

祈るような彼女の声。

「イーサーが気になるか？」

「…大嫌いよ」

独白するように彼女がぼやく

携帯電話が鳴った。

しかし、少女は出る気配がない。

「出ないのか？」

「出る必要はないわ」

ぞんざいにつぶやいたアリッサに、ジョージは片方の眉毛をあげ
た。

「イーサーに、会ったことある？」

「俺は犯罪者じゃない。あるわけないだろう」

「一度も？」

鼻を鳴らした娘は、右肘を車窓についてその拳に頬を乗せた。

「あいつさ、変態で嫌い」

まるで彼を知っているような口ぶりにジョージはステアリングを
操る手を止めないままなにか言いたげに唇を動かした。

「知っているのか？」

「何度かあいつから依頼を受けたことがあるの。自分じゃなんにも

できないくせに、権力があると心の底から信じている愚か者」

「だから嫌いなのか？」

「馬鹿なのよ、あいつ」

鼻から息を抜いた彼女は両目の上で指をくんだ。

「イーサーから依頼されてなにをしたんだ？」

「：ジョージはすぐ怒るから言いたくない」

無然とした彼女の様子に、ジョージは苦笑した。

そんな彼女がかわいらしいと思う。

「昔の事件だ、今さら怒ったりはしないさ」

昔の事件。

それを今さらなにを言ったところで過去は変えられない。

「本当に？」

「約束する」

視線をすべらせた彼女は肩をすくめてから、大柄なジョージを見た。まともに組み合ったらアリッサなど抵抗すらできないだろう。

しかし、アリッサは、圧倒的にジョージよりも優位にあった。

彼も彼女も、同様にそれを認識している。

「あいつの依頼で、メキシコにある麻薬組織を三つほどぶっ飛ばした。報酬はそれぞれ百億ドル。報酬は破格で成功報酬。依頼は成功してわたしは三百億ドルを手に入れた。最後に会ったとき、あいつなにをしたと思う？」

不穏な言葉。

ジョージは思わず路肩に車を止めた。

「なにをされた…？」

低くうめくように彼は問いかける。

強い力で彼女の肩をつかんだ。

痛いほどの力に、アリッサの顔が歪む。

「痛いってば…」

「なにをされたんだ！」

切羽詰まった男の声に彼女は動揺する。

彼の動揺した姿などアリッサは見たことがなかった。幾度か危険にさらされたときにも動揺したことがあったような気がするが、今のジョージのそれは以前の反応とは全く違った。

「：わたしがアルコール飲めないの知ってて、ジュースだしてくれただけど：、薬盛られて」

もちろん、彼女は飲まなかったが。

彼女の瞳に嫌悪の光がひらめいた。

「レイプされたのか：っ！」

「：違う。されかけたけど、半殺しにただけよ：」

至極冷静に。

彼女は告げる。

ほっとため息をついたジョージは、強い力はそのままに背中と頭を抱え込むように抱きしめた。

「：なんで言わなかった：」

「言ったところでどうなるわけでもないでしょ。それに、あいつはわたしが半殺しにした」

「：良かった」

「変な奴」

言いながら男の頬を両手で包み込んだ。

「わたしのことが心配？」

「：心配だ」

ジョージは彼女が子供のときから見守ってきた。

庇護してきた。

誰よりも大切な娘であり、大切な妹のような。

「心配でたまらない：。君が仕事しているときも、政府の依頼をこなしているときも：、いつも：」

「とりあえず、離して」

彼女は大男の胸を押し返してから、大きな水色の瞳でジョージを見つめた。

「あいつは…、イーサーは変態だけどアメリカを敵に回そうだななんて思っていない…」

そこまで告げてから車を降りた。

そして振り返りもせずに歩き出す。

車内には彼女の登校用のカバンだけが取り残されていた。

要するに、休学届けをしておけ、という命令だ。

「…アリサ！」

早足の後ろ姿にジョージは叫ぶ。

「いい？ わたしはイランに行く。ひとりで充分だからついてこないで」

振り返って唇だけが告げる。

ふわりと舞い上がった金髪が赤い光が彼女を包み込んだ。

異端の証拠。

アリッサはタクシーをひろうとどこかへ消え去った。

もつとも、ジョージにはどこに行ったのかと言うことはおおかたの検討がついていたが、それを追求することは彼女を信頼しないということになる。

彼女には彼女なりのコネクションがあったのだから。

少なくとも、政府に協力することはあっても、政府の犬ではない。

一匹狼だった。

それ故に、伝説の殺人鬼。

同じ頃、イランの首都テヘランの郊外にある屋敷の片隅で、男がひげを指でなでた。

「…マジックボムがでてきたか」

黒髪の、ひげを蓄えたアラブ人男性は困惑したように苦笑する。顔面の一部に火傷を負ったその男は、愛しげに火傷の痕をたどってから部下の男達を見渡す。

「…レオナルドとかいう男のことを知っているか？」

ボスの問いかけに、部下達は一樣にかぶりを振りながら口々に首

をかしげた。

「知りませんね」

「ひよっこだろう」

イーサーはテーブルの片隅に置かれた小さな写真立てを見つめてから優しげにほほえんだ。

彼も今回の事件を少なからず把握している。

自分の名前がアメリカで出たという異様な事態。

おかしい、と彼は思った。

「彼女はこちら側の存在だ。へまはしない」

「：ボス？」

明るく笑う少女。

ブロンドの巻き毛の…。

しかしその笑顔が向けられていたのはイーサーではなかった。相手の名前を呼んで、駆け寄ろうとしたその瞬間の写真だ。

「おそらく彼女はここへ来る。わたしが嫌いでも、な…」

そう告げて、イーサーは珍しくにっこりとほほえんだ。

真実を探しに彼女は彼の目の前にくるはずだった。

わかりきっていた事実。

アリッサが一級の犯罪者である以上、イーサーと決別することは困難である。

彼が彼女から決別することができないように。

彼が死ぬか、彼女が死ぬまでその相互関係は決して切れることはない。

もっとも、彼女はわざわざ仕事の依頼を受けなくても生涯生きていけるだけの金銭はあったはずだが、好戦的なのは生来の性格なのか困難な状況の依頼ほど好んで受ける傾向にある。

組織だって行動する傭兵とはまた異なる位置にあるアリッサ。

普通の戦争屋と彼女が異なるのは、彼女自身の特異性にあったのだが、それでも裏側の人間たちを動かすには莫大な金銭が必要だった。

だからこそ彼女への依頼は通常の裏社会の者たちに依頼をするよりも高くついた。

イーサーも、もちろん彼女の特異性を理解している。
彼女は特別だ。

「あの子は、良い子なんだよ…」

裏社会にあってあの容姿であるためか、そもそもまた別の理由からか。

薄汚れた世界で生きる大人たちから見れば彼女の潔癖さと、純粋さはまぶしく感じられるほどだ。

だからこそ、誰もが惹かれる。

その強靱さも相まって。

強さを求める男たちは、彼女の揺るぎのない強さに引きつけられた。

圧倒的な存在感と威圧感を持って、彼女はそこにいる。

「良い子すぎて、彼女は这个世界に似合わないね」

イーサーは誰ともなくつぶやいて苦笑した。

見目麗しい少女の中に存在するもの。

彼女の内側にあるのは激しすぎる怒り。

自分の怒りをどうすることもできずに、その感情をもてあます。

くつくつと笑ったイーサーはそうして目を閉じた。

＊

爆発音が響いた。

娘の背後にいる男は首をすくめてから自分の隣で巻き上がる炎を見やる。

長身の男は灰色の瞳をまたたかせてから、太い腕をまくりあげた。

「あんたは人使い荒すぎる」

「客に無駄口たたいてんじゃないわよ、ジョス」

ぞんざいな彼女の言葉。

「金払ってんだから文句言わないで」

「使用人料、だよな」

確認するように、ジョスと呼ばれた男は首をかしげた。

「あたりまえでしょ」

取り繕うということを一切しない彼女はきっぱりと言い放つ。

自分には航空機の操縦はできない。

それは知識的ではなく、身体的にだった。

小さな子供の姿のアリッサにはなにをするにも制約が大きい。

もちろん、重量のある武器なども扱うことはできないが、彼女はそれを自分にとって不利なことであるとは考えたことがないようだった。

彼女はスーパーマンではない。

一見すれば彼女は丸腰だ。

しかし、アリッサの恐ろしさを彼女に雇われた男は存分に知っていた。

この小さな子供が、敵として出会ったのではなくて良かったと思う。

「：あんたが敵じゃなくて良かったよ、全く」

まっすぐ歩く彼女の周囲には火柱が立つ。

空間を引き裂くような轟音だ。

おお、怖い。

男は口の中でつぶやくと、短機関銃を構えたまままたばこをくゆらせる。

「ま、久しぶりにばーつと暴れるか」

「暴れられないかもしれないけどね」

彼女の前に立ちはだかるのは武装した男達だ。

銃を持った屈強な青年たち。

そんな男をじっとにらみ据えたまま、ゆっくりと歩いて行く。

彼女は全く怯まない。

短機関銃を構えた男に、アリッサは右手を開くようにしてさしの

べた。手を空に向けて拳を作る。

数人は以前、イーサーの自宅で見たことがある顔だった。

「イーサーのところに案内しなさい」

命令する。

すでに何人の兵士が死んでいるかわからないような状況だった。

しかし、イーサーにとって彼らはただの手駒のひとつでしかなく、アリッサにとっては今まで殺した複数の人間の中の複数でしかない。

「アリサ…！」

同時に、ジョスの足が飛ぶ。

太く固い彼の足はアリッサを狙う銃に届いた。そのまま空を切つて重く蹴り上げる。

ジョスの突きだしたナイフがアリッサを狙う男の頭を貫いた。

肘で男の腹部をたたきつけて彼はアリッサの様子をうかがった。しかしアリッサはそれすらも計算内だと言いたげで、男はもう一度肩をすくめた。

「さすがに女王様だね」

「舌抜いてやろうか？」

「…」

真顔で告げた彼女の横顔にぞっとした。

強い眼差し。

誰をも魅了してやまない。

彼女は何でもできる。

彼女は誰でも殺せる。

「イーサーに会わせなさい。これ以上殺されなくなったらね」

どんな仕掛けなのか、彼女の周りでは確かに火の手が上がる。爆発と轟音。

それが彼女がマジックボムと言われる所以だ。

激しい怒り。

激しすぎる怒り。

彼女を支配しているのは怒りそのもの。

アリッサは明かりの付いたバルコニーを見上げて唇をかみしめる。
軽い頭痛がした。

そんなことに意識をとらわれていれば命取りになる。
ぎりぎりとお歯をかみしめてから、腕を振り上げた。
巨大な火柱が上がった。

＊

少女は目を覚ました。

「…う」

頭痛がする。

ひどい頭痛だ。

まるで後頭部をなにかで殴られたかのような痛みに眉をしかめる。

頭を抱えた少女は体を丸めた。

なにもかもうんざりだった。

「大丈夫か…？ うなされていたぞ」

いたわるような青年の手は大きくて硬い。

とっさに払いのけて、彼女はきつく目を閉じた。

「触らないで…」

触るな。

わたしに、触れるな。

男の体温が不快だった。

「気持ち悪い…」

つぶやいた彼女に、青年が目をすがめる。

しかし、彼はなにも言わない。

「…人間なんて」

吐き捨てるような彼女の言葉は、割り込む余地などない。

「わたしが人間だなんて…」

青年が肩に触れても、今度は払いのけたりはしなかった。

先ほどまで眠っていたというのに、なんという冷たさだろう。体温は完全に下がりきって冷たく感じるほどだ。

「人間ってなに…？ ガーゴイルたちとあんたとなにが違うの…？」
ガーゴイル…。

初めて彼女の口から聞いた名前だった。

「…ガーゴイル？」

「何が違うの…？」

彼女の言っていることがわからず、つかみかかる少女を青年が抱き留める。

「わたしはなに？ 人間ってなに…？」

冷え切った少女の体に、青年はただ彼女を抱きしめるしかなくて言葉を探す。

少女は何を求めているのだろうか…？

家族や、安心。

そんなものではないことはわかったが、それ以上のことはジョージには皆目見当がつかなかった。

それは彼の若さゆえだったのかもしれない。

灰にすすけた頬で、裸足のまま街をうろつく子供。

そんな子供をほうってはおけなかった。

よくみれば傷だらけでほうっておいたならば施設送りにされただろう。

「…君の名前は？」

「知らない…。ガーゴイルはそんなこと教えてくれなかった…！」

少女の言うガーゴイルがなにを指しているのかわからず、ジョージは首をかしげた。

ガーゴイルとはなんだろうか。

「落ち着いて…」

柔らかく背中をさすってやってジョージは目を伏せる。

切羽詰まった少女の眼差しに、どれほどの苦痛を味わったのかと思いをはせる。その苦痛を少女の年齢では言葉にすることなどでき

ないだろう、とジョージは思ったからだった。

「：大丈夫、僕は君を傷つけたりしない：」

彼女をなだめながら、しかしジョージは違和感を感じた。

それは、捜査官として精神病質者を相手にしているときの、その感覚だ。

かすかな違和感。

パチリ、と音がした。

「：？」

少女を抱きしめたまま彼は首を巡らせる。

ベッドの端に火がついていた。

炎の爆ぜる音。

呆然としたままジョージは少女を抱きしめる腕に力をこめる。

どうにかしなければならぬ、と頭では思うが、理解が追いつかない。

「離して：、殺す：。殺してやる：っ！ みんな殺すの：」

水色の瞳が狂気を宿してジョージを見つめる。

正気ではなかった。

長い時間をかけて少女の精神は腐食して、確実に病んでいた。

「みんな、殺せばいいの：、ガーゴイルもみんな！」

歌うように高らかに叫んだ少女の周りで爆発が起こる。

金色の髪が炎の赤を映して、美しく輝いている。

見開いた目はなにも見ていない。

目の前にいるジョージすらも。

わけがわからないまま、ジョージは叫び返した。

「やめろ、僕は君を傷つけない：！」

傷つけたりはしない。

何度繰り返しただろう：。

眠りから目を覚ました。

「永遠に君を守る：！」

叫んでから体を起こしたジョージの視界に最初に飛び込んできたのは灰色の天井。

炎にまかれた若い時代を思い出す。

「…アリサ」

殺されるようなへまはしないだろう。

わかっていた。

それでも、昔の夢を見たのは彼女がイーサーの話をしたからだろうか。

「どうか無事でいてくれ…」

親指と人差し指で目を押さえたジョージは長いため息をついてから首の周りの圧迫感に苦笑った。

ネクタイを締めたままで眠ったから余分な夢をみたのかもしれない、と…。

ぱたぱたと音がする。

重なるのは重いブーツの足音だ。

軽い足音とは真逆でその間隔は長い。

ゆったりと、軽い足音を追いかける。

ぱたぱたと走る足音を知っている。

イーサーは静かに笑った。

「…待っていたよ」

独白のようにささやいた。

同時に檜材の扉が爆発音と同時に吹き飛んだ。舞い上がる炎と黒煙。吹き上がる風は炎によるものだ。

熱い煙が巻き上がる。

イーサーはその煙に苦笑した。

以前と変わらない美少女振りに口元をゆがめる。

彼女は彼を嫌っているからだから良い顔をするはずもなかったが、イーサーにとってはそんなことはあまり関係がないことだった。

彼と彼女は、好きだとか嫌いだとかと言った関係では切れること

がない。

皮肉なものだがそれを双方が知っている。

「イーサー」

目が据わっている。かなり怒っているらしい。

しかし、なにに対して怒っているのか、イーサーにはさっぱり理解ができない。

いや、見当はつくものの、いつものクールな彼女がどうして怒っているのかわからない。

「姫、どうして怒っているんだい？」

少女の目がつり上がった。

「どうしたじゃないでしょ…！」

アリッサの気迫に押されるが、イーサーはそれでも動揺を隠した。怒った顔もかわいい、などのんきに考えていたわけではない。

少なくとも、殺人能力、という一点については彼女はその辺の殺人犯とは質が異なる。

それ故に、その点においては彼女は安易にイーサーを超えていく。だからこそ彼女には弱みを握らせてはならない。

イーサーが、アリッサに勝る点は組織力というそれだけだ。

「：レオナルドを知っているはずよ」

「…」

知っている。

名前だけ、は。

しかし、それだけのことだ。

「知っている、と言ったらどうするつもりだね？」

大きな手を伸ばしたイーサーに、アリッサは強くその手を振り払う。

「わたしに、さわらないで…」

触るな。

威嚇する少女に臆する様子も見せないイーサーに、アリッサに雇われた青年は眉を上げる。

「レオナルドはどこ？」

低く問いかける。

「知らないな」

素直な反応だがアリッサは納得していない。瞳に不審の色が濃く漂っている。

「わたしが短気なのは知っているわよね？」
脅した。

彼女はイーサーに譲歩を求めている。

「：知らないと言ったはずだ。それとも、真偽を見抜けないほど間抜けになったわけではなからう？」

揶揄する彼の言葉に、彼女は長いため息を吐いた。

「いやな男」

どっかりとソファに腰を下ろした彼女は巻き毛をくるくると指に巻く。

イーサーの部下たちからしてみれば、そこにいる小さな子供が先ほどまで殺戮を繰り返していたようには見えない。

それでも、彼らはたしかにその目で彼女が簡単に屈強な男たちをひねり潰す場面を目撃したのだ。

それが、彼女の実力。

マジックボムと恐れられる少女殺人鬼。

殺戮者。

「：まるでこっちを見透かしたような顔して」

苛立たしげにつぶやいた彼女が燃える絨毯を一瞥した。

その瞬間、炎は静まった。

「わたしは姫の力にいつでもなるから相談してくれば良かったじゃないか」

「：それだけは絶対いや」

全力でイーサーの言葉を拒絶して、アリッサは眉間にしわをよせた。

「わたしが君を好きだからか？」

「…」

心底、嫌悪に満ちた眼差しで彼を見据えてソファの背に、背中を深く埋める。

それは彼女がイーサーに対して危機意識を抱いていないからだ。いつでも彼に懐柔できると思っている。

「まったく、姫にはかなわないな」

苦笑した。

黄金の巻き毛と水色の瞳。

抜けるように白い肌はコーカソイド特有のものだ。

混血の進んだアメリカにあって、おそらく彼女は純血だ。

「あんたのことは、大嫌い」

きっぱりと言い放って彼女は眼差しを天井に向けた。

「変態だからか？」

「そう」

むっつりと黙り込んだ彼女は親指をかんだままなにもない空間を見据えている。

「なんか、納得いかないのよ」

不意に彼女がつぶやいた。

「ほう…」

ところで、とイーサーはほえんだ。

「相談に来るならもう少し平和的に来てもらいたかったものだね。」

姫君

「弁償しましょうか？」

「いらないよ。死んだ者は生き返らないし、わたしは姫君よりも金に困っていない。むしろわたしは君のパトロンになりたいくらいだね」

「…き・も・い」

無然としたまま告げた彼女はむっつりとしたままこめかみをおさえた。

納得いかない。

頭の隅で警鐘が鳴る…。

彼女は不機嫌な瞳を窓の外に向けた。

力が抜けたように深くソファに沈み込んだ彼女は長い睫を伏せたまま胸の前で指をくんだ。

「それで、姫君。レオナルドとは…？」

「最近、わたしのそばでうろちよろしてる新米よ」

ぞんざいな説明にイーサーはほほえんだ。

冷たいようで優しく、優しいようでいて残酷な。

冷徹な彼女。

そんな彼女をイーサーはよく知っている。

「君は心配しているのかね？ 珍しいね」

告げられた言葉に肩をすくめる。

「新米なんて厄介だから面倒なのよね」

なんでもない話をするように返答したアリッサは舌打ちする。

「…確かに、新米は厄介だな」

厄介だ、とい部分に声をあげて笑ったイーサーは、傍らに立つ女になにごとかを耳打ちした。

しばらくすると彼女の前にリングジュースとオレンジのタルトが現れた。

「…」

すばらしく不審げな眼差しを返されたのは無理もない。

イーサーは、アリッサの不審を受けて、もう一度笑った。

当たり前だ。

アリッサは他人の家で飲食をしないのは知っている。

しかし、彼女の勘の良さもまたイーサーにはわかっていた。

アリッサに偽りは通用しない。

それは子供らしい直感の良さから来るものだったのだろう。

もっとも、アリッサは子供扱いされることを大変嫌ったが、どちらにしたところでイーサーにとってアリッサが年少であるという事実には変わりがなかった。

「：毒も、おかしな薬もいれてはいないよ、姫」

仕事の依頼以外で、彼女は誰の手も借りないし、誰にも弱みを握らせない。

「そのケーキは、わたしなりのもてなしだ」

外見らしいというか、剛毅な印象とは裏腹にアリッサのケーキ好きは彼らの世界では有名なことだった。

姿が子供であるが故の制約も多い、彼女らしい嗜好品だ。

添えられたフォークでつんつんとケーキをつついた彼女は、ややしてから顔を上げる。

「それでレオナルドのことなんだけど」

「：わたしを姫の後援者にしてくるならなんでも協力しよう」

「：だから、どうしてそういう交換条件になるのよ？　ばっかじゃないの？」

あんたになんのメリットもないじゃないの。

付け加えてからアリッサは機嫌悪そうに眉をつり上げた。

彼女の後援者、という言葉にわずかに瞳を瞬かせたのはアリッサが雇った男だ。

「いいじゃないか、わたしのメリットは君のパトロンだという名声。君はいくらでも金が手に入る。それだけのことだ」

大したことでもなんでもなさそうに、彼は言う。

「：変なことしたら今度こそぶっ殺す」

強く言い放ったアリッサにイーサーは笑った。

「まあ、いいだろう。わたしはそのレオなんとかという子供のことを調べておこうか」

わけのわからない自己完結にアリッサは不審げな瞳のまま立ち上がった。

「頭痛もするだろう、部屋を用意するから休んでいくと良い」

さらりとイーサーに告げられた言葉に、アリッサは瞠目したがそれ以上の追求はせずにきびすを返した。

「こちらへ」

ひとりの少女と、ひとりの青年を女が案内する。

廊下に消えた二人の姿にイーサーは吐息をもらした。

「…策謀か」

レオナルドとやらを使ってイーサーと、アリッサを貶めるための策謀。

自分などどうでもいい。

犯罪世界に長くあっていつ死んでもおかしくない、ということだけは常に理解していた。

しかし、そんなイーサーもやはりただの男でしかない。

「おかしなものだ…」

何人も、女をとつかえひっかえしてきたというのに、彼女だけは死なせたくないと思うのだ。

彼女とて、イーサーと同じく裏社会に属する人間であることはわかっているというのに。

その感情は恋愛ではない。

「恋などではない…」

独白する。

彼女の強さに圧倒された。

あれほど強い人間はいない。

男にも、女にも。

表社会にも、そして裏社会にも…。

彼女の強さに魅了されたのだ…。

イーサーは半分になったリングジュースのコップを見つめた。

＊

思い出すのは、爆炎の中央に立つ少女。

ブロンドの巻き毛の、はっとするほどかわいらしい子供。

静かにほえんだ。

「…君は、誰なんだ？」

日本国首都東京の一角で、男はたばこをくゆらせる。

パソコンの画面を見つめた彼はそつと目をすがめた。

出会ったのは十年以上前だったか。

今では二十代半ばだろう…。

昔の美少女が、美女に成長するわけではないことを彼は知っている。

しかし、その写真の中にある少女から感じるものは微細な違和感。舞い上がる炎の中で、少女は全く動揺していない。そのかけらも感じていない。

「…子供の反応じゃない」

真っ赤なドレスに、真っ赤なキャプリーヌ。

白いハイソックスは灰でわずかに汚れている。

赤い靴はストラップがかけられ、その周りに巻く炎は少女を中心に渦巻いているようにも見えた。

別のファイルを立ち上げた。

大柄の白人男に守るように肩を抱かれた少女の後ろ姿。

少女の視線がわずかに振り返ったその瞬間の写真。

灰色の髪の子。

迷彩服を着ている青年兵士。

日本人ではあり得ない体格だった。

だからこそ、一目見た瞬間に彼が特別な訓練を受けている者であるということを見破った。

パソコンを眺める男はフリーの報道カメラマンだ。

日本人であるために、平和ぼけだのなんだのと悪態をつかれることも多いが、そんなことを彼は気にしていない。

ただ、写真の力で世界を変えたい。

そう願う。

いつかの紛争地帯で撮影したその数枚の写真は男の心をとらえて放さなかった。

出会ったのは一度きり。

地獄の業火の中心に在るかのような彼女にとらわれた。

腹の前で指をくんだまま男は目を閉じる。

佐々木和宏。

それが彼の名前。

「ここはやばい、佐々木、もう行くぞ……！」

夢中でシャッターを切り続ける佐々木に、護衛の男が怒鳴った。

しかし彼にはその声は届かない。

ひたすら写真を撮り続けるだけだ。

「おいっ！」

もう一度、怒鳴りつけられ、肩をつかまれて我に返った。

爆発はすぐそこまで迫っていた。

「……もうすぐここは戦場だ。そんなところにとどまってみろ、無駄に死ぬだけだ」

「……わかってる」

死んだらせつかく撮り続けた写真も無意味なものに変わってしまった。

引き際はわきまえているつもりだった。

戦車の影が見えた……

そう、そこは戦場だ。

頭の隅で鳴った警鐘は、しかし遅い。

どーん、という音と共に目の前が真っ暗になった。

土煙が上がる。

「……腰抜けがこんなところに入ってくるんじゃないわよ」

その言葉の一瞬前に中国語のような響きが聞こえたような気がしたが、青年の反応に、彼女は言葉を修正した。

流ちょうな日本語。

「……平和ぼけの日本人は、平和ぼけらしく後方にさがってなさい」
手を前に振りかざした瞬間に、舞い上がっていたはずの砂が一気に灼熱を帯びた。

全てを燃やし尽くす地獄の炎。

そんな様子に見とれているうちに、少女は姿勢を低くして腰に重

心を下げると同時に地面を蹴った。

特別に彼女が早いわけではない。

しかし、動きには無駄がない。

戦車の手前まで走ると、軽やかに跳び上がる。

重力など存在しないような彼女の動きに見とれた。

機関銃を構える兵士の頭上で手のひらを開いた少女は、機関銃を蹴り飛ばしながら何かをした。

それと同時に聞こえたのは悲鳴だった。

燃え上がる。

炎が、戦車も人も、全てを飲み込む。

全てを飲み込む炎を自在に操る人間兵器。

やがて戦車を一両かたづけた少女は炎の中でほほえみながら地面を見つめていた。

その姿を撮影したものだ。

ややしてから彼女に追いついたのは迷彩服を着た男だった。

片手に短機関銃を手をしている。

特殊な訓練を受けた戦闘員であることは見て取れた。

よろめいた少女をそっと守って立ち去る男。

どんな事態になったとしても、彼は少女を守ると背中が告げていた。

屈強な戦闘要員と人間らしからぬ少女。

「…あれはいつたいたなんだったんだろうな」

佐々木は考え込みながら苦笑した。

「…姫君」

ノックの音にベッドに転がっていた少女は頭を上げた。

「殺されにでも来たの？」

イーサーの声に、機嫌の悪そうな声を上げたアリッサは大きな枕を抱えたまま視線を上げた。

「…私の館だ。いつここへ来てもおかしくはないだろう？」

「レディの泊まってる部屋にずかずか入ってくるなんてちょっと無粋じゃなくって？」

「確かに君はレディだ。しかも最高の淑女だ」

「気持ち悪いこと言わないでよ」

うんざりとした面持ちでベッドサイドのレースのたくさんついた少女趣味な寝衣を蹴り落とす。

「だいたい、なんで私の服のサイズなんて知ってるのよ」

まったくもってうんざりだ。

そう言いたげな彼女の言葉に、イーサーは苦笑しながらベッドサイドに腰掛ける。

「前に君には殺されかけたからね。無粋なまねはしないさ」

「どこからどう見ればこれが無粋な状況じゃないって言えるの？」

「別に、姫君を襲おうなんて思っていない」

大きな手を伸ばしたイーサーはそっと彼女のブロンドを指に巻いた。

「さわんないでって言ってんでしょ」

乾いた音を立てて男の手を振り払った少女は上目遣いに男をにらみつける。

「私は、君の騎士様より役に立つよ…」

「ジョージは優秀よ」

「愛してるよ…」

「私には無用なものだわ」

そんなものはいらない。

拒絶する。

「それに。あんたは私に何を期待してるの」
言い捨てた彼女に男は微笑した。

「何って、ナニを期待してるんだがね」

「…もう一回半殺しにしてやろうか？」

額に口づけた男は小さな彼女を腕の中に抱き込んだ。

「愛してる…」

以前、彼女に手を出して殺されかけて以来、イーサーは彼女に行
為を求めない。

まるで淑女か娘を扱うように、彼は彼女を愛していた。

「それ以上なにかしたら…」

「なにもしない」

「…本当に？」

「本当に」

成熟した女に愛撫するように、腰を抱き首筋に口づけた。

だがイーサーは鉄の意志で欲望を抑え込んだ。

「…私は君を愛しているが、約束は守る」

「レオナルドのことはわかったの？」

「…調査中だ」

色気のかけらもない彼女の声色に、男は体を起こす。

ぽんぽんと頭をはたいた彼は、アリッサのさしのべた右手をとつ
て引き起こした。

「いつもそればかり。ただの時間稼ぎとか、冗談言ったらぶっ殺
す」

物騒な彼女の物言いはいつもこうだった。

「君は、脅し文句がそればかりだね」

「悪いわね。わたしのアイデンティティはそれだけなの」

他者に対して優位性を保つためには、アリッサにはそれしかない。
強さこそが力だ。

「私と、姫君に喧嘩を売る人間がいるとすればそれはごく少数だろ
う」

彼女を怒らせることも、イーサーを怒らせることも危険なことだ。
どんな報復が待っているか誰もが想像したくはない。

彼と彼女はそういう存在だ。

「…姫君を殺そうとしている人間はどれくらいいる？」

「あんたを恨んでいる人間もね」

さらりと言い返した彼女に、イーサーは床に落ちた寝衣を拾い上

げた。

「私は、姫にかわいらしい格好をしてもらいたいただけなのだがね」
「…」

絶句、というよりは呆れてものが言えないアリッサの腕の中に、
フリルのたくさんついた乙女チックな寝衣を手渡した。

「君を着飾らせることができるのがジョージだけは、全く残念だ」
言い置いて部屋を出て行く彼に、アリッサは肩をわなわなと震わせる。

「かわいい格好ですって！？ そんなもんくそ食らえだわ！」
投げつけた寝衣は軽すぎたために扉へも届かず床に落ちた。

愛していると抱きしめられた体に残るイーサーの熱が、アリッサを不快にした。

「大っ嫌いよ！」

叫んだ彼女は憤懣やるかたないといった様子でリボンタイを指に
巻いた。

少女の姿の彼女に好意を寄せる男たちの存在。

それが彼女には気持ち悪い。

なぜならば、彼女は好意を寄せられたことなどなかったからだ。
どこへ行っても恐れと恐怖の対象でしかなかった。

誰も彼女を愛さなかった。

だから、彼女は「愛される」ことを知らない。

「嫌い、嫌い、嫌い…。大嫌い、みんな死んじやえばいい…っ！
みんな殺してやる…っ！」

行き場のない怒り。

彼女を支配するのはそれだけの感情。

ただ怒りという感情に翻弄される。

枕に顔を埋めたアリッサはきつく目を閉じた。

その部屋が、彼女の体のサイズにぴったりにあつらえられたものであることにも気づかずに。

彼女の好む香りで満たされていることも知らずに。

全てが彼女のために用意された部屋であるとも気づかない。

廊下に出たイーサーは背中を扉に預けたままでそっと自分の左手の平を開いた。

そこにはなにもない。

自分の手相があるだけだ。

甘い少女の香りに苦く笑う。

触れた体温に感情が暴走しかけたのは事実だ。

「レオナルドか…。ヤキモチかな」

優しく笑って彼は歩き出した。

部下に指示を出して集めさせた情報に目を通すために。

殺すことが自分のアイデンティティだと彼女は言った。

「電話貸して」

「自分で持ってるんじゃないのか？」

「持ってきてない」

あっさりと告げたアリッサは肩をすくめてイーサーのデスクに手を伸ばした。

「ずいぶんとアンティークね」

ダイヤル式の古い電話に彼女は首をかしげた。

「…アメリカ住まいの君とは違う」

「ただのあんたの趣味でしょ」

一蹴して彼女は電話のダイヤルを回す。

「ジョージか？」

「そんなじゃないわ」

電話の相手はジョージなのかと尋ねられてアリッサはかぶりを振った。

ジョージではない。

「ビジネスの相手はいくらでもいる。アメリカ政府だけじゃない」

「また怖いことを言うね」

「わたしは戦争屋だもの。金さえ受け取ればどこへでも行く」

「なら、わたしが君を雇ってかわいらしく着飾ってほしいと依頼したらうけてくれるのかね？」

「…」

冗談交じりの男の言葉に、少女の目が据わった。

「…くそも食らえ」

ぼそりとつぶやいた彼女はブロンドの巻き毛をかき回した。

しばらく電話の向こうにいる人間とやりとりをしたアリッサはややしてから受話器を置いた。

「相手は？」

「神父よ」

「ああ、あの」

神父、という言葉だけで通じたのか、イーサーは首をかしげた。
イギリス在住の職業は神父というやや煙たそうな肩書きの男は情報屋として知られていた。

表の顔は神父。裏の顔は情報屋。

もっとも情報屋、というのもちまたでは表向きの顔ではないのか
と言われている男。

肩書きだけなら大変うさんくさい。

「：だが君の信奉者だったかい？」

「だからビジネスの相手だって何度言えばわかるのよ、タコ」
ぶつきらぼうな彼女の言葉にイーサーは笑うと彼女の鼻先に薄い
ファイル突きつけた。

「君の、要求していたレオナルドのファイルだ」

「サンキュー」

「見て驚くなよ」

「細切れ死体よりびっくりできる？」

「ミンチ肉なんぞ人肉だろうと牛肉だろうと関係ないだろう」

「まーね」

適当な相づちを打つアリッサに片目をすがめた彼は触れるでもなく、少女を見下ろしていた。

「わたしとしてはおもしろくない情報だったがね」

ファイルに挟まれた紙をめくる彼女の顔が、そつとゆがめられる。

「：共食いさせたかったのね」

狙いは、レオナルドではなく、アリッサとイーサー。

おそらく、武器商人として世界に武器を売りさばくイーサーがう
つとうしかったというところもあるだろう。

「安直すぎて逆に怪しいわね」

「神父はなんと？」

「…調べてくれるって」

ため息混じりにファイルを閉じたアリッサは窓の外に視線を投げかけた。頭痛は消えた。

そのときだった。

衝撃を感じてアリッサは瞠目した。

「え…？」

視線をおろす。

自分の胸から突き出された剣の刃に呆然とした。

気配すら感じなかった。

もちろん、今までで傷を負ったことは少なくはない。

「…お、まえ…？」

イーサーの横に立つ女。

黒髪の、東洋人。

「…マジックボム、おまえを殺すように命令されていたの」
冷たい眼差し。

特殊な訓練を受けた殺人者。

「…命令…？ あいつらに…？」

かすれた声でアリッサは笑う。

「あいつら、わたしにも同じように依頼してきたのよ…？ おまえも、使い捨てにされるだけよ…」

ヒューヒューと喉が鳴る。

「まあ、わたしがおまえを殺すけど…」

剣で貫かれた部位が熱い。

痛いのか、熱いのか、アリッサには見分けがつかなかった。

水色の瞳が光を放つ。

同時に、女の肢体が燃え上がった。背中から貫かれた彼女は胸から白刃を覗かせたまま重い腕をさしのべる。

しかし体を支えられたのはそこまでだった。

どさりと音を立てて床に倒れ込んだアリッサは小さく咳き込んだ。
「ジョージ…」

「姫…！」

抱き上げられた感触に少女は唇を震わせる。

「イ、サー…」

霞がかった頭で彼女は男の名前を呼ぶ。

「姫…、しっかりするんだ…っ！」

「だ、いじよぶ…」

大丈夫と彼女は言う。

しかし、ちっとも大丈夫そうには見えない。

医者を呼べ、と叫びながらイーサーはどかどかと大きな足音を立ててアリッサの部屋へ向かう。

途中でアリッサが雇ったという傭兵の男、ジョスリンとすれ違ったが、彼が何を言っていたのかイーサーの頭には入らなかった。

剣で貫かれたままの少女をそっとベッドに寝かせたイーサーはただ心配そうに彼女を見つめ、祈るように指を組み合わせた。

まさか、自分の傍らにいた女がアリッサを狙っていたとは思っても寄らなかった。

アリッサも、自分も邪魔者でしかなかった。

「姫…」

ベッドに投げ出された小さな手を取る。

正気の彼女ならはねつけただろうが、その時は違った。無意識からか握ったイーサーの手をきゅっと握り返してきた。

浅い呼吸を繰り返している。

「殺してやる、姫を殺そうとするなど…。地の果てまでも追って絶対に殺す…」

やがて医師が到着するとイーサーは部屋から追い出され、処置が始まった。

その時間は長くもあり短くもあっただろう。

待つだけの時間というのは、どうしても長く感じのだろうか。

助かってほしいと祈りながらイラン人の男は廊下を落ち着きもな

く歩き続けた。

女を使いアリッサを殺そうとした者への復讐を誓う。

「…姫君…」

目を閉じたイーサーはそうして深く息を吐き出した。

苛立ちが消えない。

少女は静かに眠っていた。

「姫君…」

包帯は白い素肌を際立たせている。

「すまない…」

彼の傍らにあった女が、アリッサを刺すまで気づくことができなかった不覚。

「…姫」

彼女が不死身でないことはイーサーは知っていた。

「死なないでくれ」

多くの傭兵を使い捨てにしながら、イーサーはアリッサに死なないでほしいと祈る。

布団の上に投げ出された白い小さな手を強く握る。

「…イーサー」

声に顔を上げる。

「イーサー」

かすれた声。

「…姫」

握った手に唇を押しつけたイーサーは小さく「すまない」とつぶやいた。

「…さすがに、ちょっと死ぬかと思ったけど」
殺されるのはごめんだわ。

弱々しく苦笑した彼女は唇に触れられた手を振り払おうともせず、小首をかしげた。

「愛してる…？」

「愛してるよ…」

アリッサの問いかけに応じたイーサーに、彼女はゆるくかぶりを振った。

「それなに…？」

愛しているとは、どういうことなのかと。

彼女は真顔で尋ねる。

「姫君は知らなくてもいい…。私が一方的にあなたを愛しているだけだ…」

「変な奴…」

「どうする？ 君をこんな目に遭わせた奴らを…」

疲れたように目を閉じたアリッサはそうして眠る。

「…少し、寝かせて」

その言葉に、イラン人の男は瞠目した。

その言葉の意味。

言い残して今度こそ深い眠りに落ちていく。

「姫は、ずるいね…」

アリッサにとってそこは安全地帯であるということを、彼女は言外に告げている。

安心して眠りについたのがその証拠だ。

「…アリサ」

滅多に呼ばない彼女の名前を呼ぶ。

正確には彼女の名前ではないだろう。

個人を判別するための記号でしかないそれ。

彼女は卑怯だ。

愛しているとどれだけ言ったところで、彼女には届かない。立ち上がったイーサーは鋭い瞳のまま部屋を出た。

自分たちをこのような事態に追い込んだ者たちに報復しなければならぬ。そうしなければ、彼女を守れない。

殺してしまえばいい…。

すでにイーサーの眼差しは裏社会に生きている犯罪者の顔だった。冷徹な男の眼差し。

冷酷な男。

武器証人と呼ばれる男は、自室にあるアンティーク調の受話器を手を取った。

「やあ、死天使……。君に頼みがある」

電話の向こうにでた女の声は若い。

二十代前半だろうか。

「：ああ、CIAに所属する男だ。アルベルト・ウィーバー」

「誰のために：？」

死天使と呼ばれた女は問い返す。

「：小さな姫だ。炎の使い手の」

「いいでしょう：」

「報酬は、千億ドルでどうだね？」

「：お金はいりません。どうしてもとおっしゃるのならばあなたのお気が済むように：」

誰のために自分は戦うのかと彼女は問いかけた。そして、イーサーも臆面もなく答える。

「明日には振り込んでおく」

電話は勝手に切れた。

そういえば、「神父」の信奉するのも死天使だった。

死天使はアリッサとは全く異なるタイプの殺し屋だ。

もっとも殺し屋という言葉が正しく彼女を定義するものとは思えない。

本名は綾瀬臣。

実業家であり日本有数の資産家の綾瀬幸太朗の末娘である。しかし、それはあくまで表の顔であり、裏の顔は誰もが恐れる一級の犯罪者だ。

過去に犯した犯罪は、留学先のアメリカで麻薬組織をひとりで壊滅させたというだけのことだが、それによって多くの犯罪者たちから綾瀬臣は命を狙われることになった。

そして彼女が知らないうちについた通り名が「死天使」。

アリッサが不可思議な力で戦うのとは異なり、死天使は必ず抜けた身体能力で戦うのだ。

そしてその死天使こそが、アリッサが最も心酔する犯罪者だった。裏社会と呼ばれる犯罪者の世界で、死天使を心酔する者は多い。だがイーサーは異なる。

単純にイーサーはアリッサを愛しているだけだ。

だからこそ、アリッサと同様に腕の立つ殺し屋を雇った、ただそれだけのことだ。

「…死天使」

表の顔も、裏の顔も同じように割れていながら、普通に生活をしているのは彼女くらいであろう。

電話が鳴った。

受話器を上げたイーサーの耳に飛び込んできたのは心地よく響く娘の声。

「明日にはつきます」

行き先はアメリカだろう。

それだけ言っただけで電話は切れた。

綾瀬臣。

死天使と呼ばれる恐ろしい殺人者。

彼女に会うために、イーサーは無造作に荷物をまとめた…。

アメリカへ。

＊

広い屋敷だ。

「行ってらっしゃいませ、お嬢様」

メイドらが深く腰を折る。

「高崎さん…」

「参りましょう…」

高崎と呼ばれた男は黒塗りの高級車に娘を導いた。

差しだされた手に娘はそつと手を重ねて長い睫を伏せる。

死天使と呼ばれる日本人の女。

本名は綾瀬臣。

年の頃は二十歳前後だろうか。

一目見て、忘れられないような絶世の美女だ。

ただし、美女だからといってマスメディアが簡単に手を出して良い女ではない。彼女に手を出そうものなら、綾瀬家からそれ相應の報復があると考えて良い。

禁断の存在。

彼女に手を出したが最後、世間的に抹殺されるだろうことは周知の事実で、それ故に誰ひとり彼女の存在には触れることはない。

「…お嬢様？」

「アメリカへ参ります」

「知っております」

彼女の言葉にはほえんだ壮年の男は、運転席に乗り込むとエンジンをかける。

「…お父様から言われたのですか？」

「いいえ、旦那様は関係ありませんし、報告するつもりもありません…」

「なら、どうして…」

自分の身は自分で守れますからご心配なく。

そう言って笑った高崎に、臣は困惑したように目を伏せる。

言いたいことを全て言えない彼女に、彼は吐息をついた。

「私は、お嬢様をお小さい頃から見守って参りました」
そうだ。

高崎は常に臣のそばにあった。

小さな子供の頃から、いつも彼女のそばにいた。

「わたしは人殺しです…」

その言葉に高崎は静かにほえんだ。

そんなことは知っている。

その現場に高崎もいたのだ。

「私の力が足りないばかりに、お嬢様に人殺しをさせてしまった」
そのことを深く後悔している。

「私が、お嬢様を守らなければならなかったのです。…この身に変えても」

それが悲壮な決意だという者もいるかもしれない。

だが高崎にはそれでも良かった。

初めて会ったのは、綾瀬臣が三歳の頃だった。

聡明な子供の守り役として、彼は選ばれた。

「そんな…、高崎さん」

ステアリングを握る高崎はなおも言いつのろうとする臣の言葉を軽く左手を挙げて遮った。

「私は旦那様から命じられたからお嬢様をお守りしているのではありません。きっかけは確かに旦那様から雇われたことでしょう。ですが今は自分の意志でお嬢様をお守りしているのです」

だから、臣がそのことについてなにかを感じることはないのだと、彼は告げる。

長い黒髪、漆黒の瞳の娘。

人の好みは様々だろうが、誰もが彼女を美女と呼んでふさわしい容貌の娘。

優しい人柄と、誰もが頷くだろう美貌。

加えて文武両道となればどの世界も彼女を欲するが、それでも彼女を手に入れることは不可能だ。

そんな彼女のそばにいろんことに対する誇り。

窓外に流れていく風景を見つめている臣。

知的な眼差しを高崎はどれほど誇らしく思っただろう。

やがて飛行場についた青空の下に、綾瀬臣の所有する自家用ジェット機が白銀に輝いていた。

「お待ちしておりました、いつでも離陸できます」
整備士が深く礼をした。

「すまん」

ジェット機から降ろされたタラップに向かいながら、高崎は綾瀬臣の手を引いて導く。

大きな手。

臣を導き、守り続けた高崎の手。

その手を握り替えして、臣は緊張を紛らわせるように息を吐き出した。

「非天は、機内に準備しております」

「ありがとうございます」

知っている。

普通の日本人であれば、彼のことをただの用心のボディガードでしかないと思うだろう。

しかしその実、彼の動きには無駄がない。

もつとも、彼が導く娘の所作もまったく無駄がなかったが。

そんなことは日本での日常生活の中では全く無駄なことは双方共に良く理解していた。

やがて空に飛んだ機内で、彼女は用意された和服に手早く着替えた。

雪の描かれた小紋だ。

後頭部に結い上げた長い髪に、高崎はじっと見とれた。

「…高崎さん？」

「いえ、あんなにお小さかったお嬢様が美しくなられたものだ…」

「いやだ…、やめてください…」

真顔で言われて頬を赤らめた臣は顔を背けた。

非天。

妖刀と言われた日本刀。

その刀を臣は振るう。

「お嬢様」

呼ばれて臣は振り返る。

「はい？」

「お嬢様が、死天使と呼ばれても、私はどこまでもお供いたします」
真剣な眼差し。

黒いスーツの壮年の男は、そう言ってから柔らかな笑みを浮かべた。

「ご心配召されませぬよう」

長い黒髪。

美貌の娘。

高崎は苦笑した。

絶対に守り抜くと心に誓った。

彼女が誰かを守るために裏社会の依頼を受けるのであれば、その彼女を守るのも高崎のつとめだった。

空港についたのは若い娘と、壮年の男だ。

若い娘はモデルのように長身でスタイルが良い。そんな若い娘が和服を着ていることに若干の違和感を感じた。

彼女を導くように腕を引く男も長身で、女よりも頭一つ分ほど上背があった。

とにかく、なにからなにまで目を引きつける二人だ。

アリッサとは異なる意味で、目立つ存在。

「君が死天使か」

「はい」

丁寧な物腰。

普通の家庭で育った女ではない。

そんなことは知っていたが実際に会うと、想像を遙かに超えた威圧感に圧倒された。

死天使。

その通り名に違和感を覚える優しい眼差しはわずかの不安に満たされている。

「初めまして…、綾瀬臣と申します」

「お嬢様のボディガードの高崎と言います」

壮年の男はスーツを身につけているが普通の男ではない。

よく鍛えられた体をイーサーは一瞬で見抜いた。

「本名など言っていないのですかな？」

イーサーの言葉に臣はほえんだ。

「わたし、死天使という名前が嫌いです…」

悲しげに目を伏せる彼女に、しかしイーサーの心は動かない。

「そうですか」

「今回は、彼女のためだからと聞いて、来たんです」

あなたにとって、わたしの名前などなんでもいいことでしょう。

殺人を嫌う殺人者。

優しい綾瀬臣。

裏社会に名前を連ねながら、表社会からも圧倒的な強さによって守られる異質な存在。

「彼女の怪我はひどいのですか？」

「当分起き上がれないでしょうな…」

「…そうですか」

「さて、仕事の話をしようか」

イーサーの高圧的な物言いに綾瀬臣は片眉をつり上げた。

片手に握る日本刀。

「君には…」

「アルベルト・ウィーバーを殺せばいいのですね？」

イーサーの言葉を制するように娘が告げる。

「話が早いな」

二人の裏社会の話を遮るでもなく高崎は黙っているが、その瞳はなにかを言いたげだ。

当たり前だ。

彼女のボディガードと自称する以上は、彼が心配しているのはイーサーのことでも仕事の内容でもない。

高崎が気にかけているのは唯一、綾瀬臣のことだけだ。

優しい眼差しは今は厳しい光がたたえられている。

「相変わらず剣だけでよいのですかな？」

「：殺すだけなら、武器は関係ないではありませんの？」

拳銃も、剣も彼女にとって大した変わりはない。人を殺すための道具、という点については大差がないのだ。

「シン」

名前を呼ばれて、彼女は顔を上げた。

「必要なものは全て私が用意しよう。だから、どうか：」

彼女を助けてほしいと：。

そうイーサーは願う。

「もちろんです、彼女はわたしの大切な友人です：」

「：お嬢様」

「大丈夫です、高崎さん」

案内されたのはマンハッタンのホテルの一室だ。

「アルベルト・ウィーバー：」

「知っているかね？」

「：ええ、何度か名前を聞いたことはあります」

もつとも、良い評判のほうではない。

「出世欲にとりつかれた人だという、そんな話を父から聞きました」

「：ほう、あなたのお父さんですか」

探るようなイーサーの眼差しに、臣はうつむいた。

「わたしを探るのはやめてください」

「これは失礼」

アルベルト・ウィーバー。

アメリカ中央情報局の局員の一人。

「彼がわたしの友人に、意図的に害を加えるなら、：それが本当のことなら、わたしは彼を殺しましょう：」

優しい綾瀬臣。

しかし、彼女は時として自分に与えられた才能を振るうことを躊躇しない。

外見からは想像も付かない、そんな冷酷さを併せ持つ。

だから、彼女は狙われる。

世界中から。

一部の者から、彼女の首には賞金さえかけられている。

「…あなたは、私の首には興味がないのですね」

「金など腐るほどある。君を殺したところで私には何も得がない」
あっさりと言いつつ男は低く笑った。

イーサーにとっては絶世の美貌を持つ綾瀬臣の存在も、アリツサの前では霞む存在でしかない。

「アルベルト・ウィーバーの所在はわかっているの？」

問いかけた臣に、イーサーは頷いた。

「今はマフィアに潜入しているらしい」

「マフィア、ですか…」

わずかに臣の表情が歪んだ。

「お嬢様…？」

そんな些細な変化も高崎は見逃さない。
気遣うような声色に、臣は頭を振った。

「大丈夫です…、ちょっと思い出ただけです」

「長旅で疲れているでしょう…、今晚はゆっくり休んでください」
イーサーは促して部屋を出て行く。

仕事の話が終われば、裏社会同士が同じ場所にいるのは危険なことで。

パタンと音を立てて扉が閉まったことを確認してから、綾瀬臣は
ようやく肩から力を抜いた。

長く息を吐き出す臣を見つめていた高崎は静かに、音も立てずに
絨毯の上を歩くと彼女の隣に腰を下ろす。

「お疲れでしょう…」

「飛行機に乗っていただけですから、大丈夫です」

そう告げる彼女の顔色はそれでもあまり良くはない。
眠っていないから当然だ。

「お嬢様…」

鼻から息を抜いた高崎は苦笑してから彼女を抱き上げる。

羽のように軽い体。

どこに日本刀を振るう力が内在しているのか不思議になるような彼女の体。

「高崎さん…」

「眠いでしょ、ゆっくり休んでください」

低い声で告げられて彼女は誘導されるように眠りの深淵に引き込まれていく。

運ばれているうちに力が抜けていく体に、高崎は厳しい瞳をマンハッタンの空を見つめる。

午後の日差しはまだ高いが、豪華なホテルの一室のベッドに眠る娘に彼は沈黙した。

殺人者としての道を選んだ、守るべき娘。

ふと思う。

イーサーと呼ばれたアラブ系の男も、彼と同じようになにかを守るために戦っているのかもしれない。

だからこそ、彼女は今回の仕事を請け負ったのではないか。

綾瀬臣が金だけの目的で仕事を受けることはほとんどない。

彼女自身は金になど困っていないのだから。

「思うがままに、道をお進みください。お嬢様」

彼女が子供の時から、高崎は臣を見守ってきた。

天才と呼ばれる娘。

自分の娘ではないが、自分の身内以上に愛おしい人。

男は黙ってカバンを開けると、ホルスターを肩に装備して銃をしまう。そして来室してきたときと同じようにスーツを着直すと、そのずっしりとした重さに瞳をひらめかせた。

自分の手を血にぬらしても、彼女を守るのだ、と…。

目を覚ました綾瀬臣はわずかに首をかしげた。

隣室によく知った男の気配を感じる。

いつも思うことだ。

「高崎さんはいつ休んでいるのですか？」

初めて聞いたのはいつだっただろう。

まだ彼女が中学生だったか。

「：私のことなどお気遣いされませぬよう」

優しい声色。

彼の声を低くてきれいだと、彼女は思った。

それを口に出して告げたときに、高崎に笑われたことも覚えてい
る。

臣にとって、高崎は父親代わりであり、それ以上に身近な存在だ
った。もちろん、父親は別格だ。

それでも仕事で家庭にほとんどいることがなかった彼との接触は、
子供たちには少なすぎた。

彼の娘のそれぞれにボディガードがついていたが、その中でも末
の娘、臣につけられたボディガードは別格だった。

なぜなら、末の娘が別格で扱われなければならないほど優秀だっ
たからだ。いづどんな事件に巻き込まれてもおかしくない自分の娘
たちを守ろうとするのは親の愛情だ。

日本人でありながら、平均以上の体格と射撃の腕を持つ高崎に、
綾瀬臣は託された。

「高崎さん」

小さな衣擦れの音を響かせて草履をすすめた臣は扉をくぐった。

「：お目覚めですか？」

「：」

「申し訳ありません。銃はお嫌いでしたね：」

「大丈夫です」

殺すことに恐れを抱く彼女を、高崎は知っていた。

音も立てずに銃をしまった彼に臣は左右に首を振る。

「：大丈夫です、高崎さん」

ソファの後ろからパソコンの画面を見つめた綾瀬臣は真摯な眼差

しで映されたデータに瞳の底をひらめかせる。

「ウィーバーは、相当腹黒いようですよ…」

高崎の言葉に、臣は眉をひそめる。

「麻薬組織…？」

「つながっているようですね、かなりの賄賂を受け取っています。お嬢様、どうなさいますか？」

「…レオナルド？」

臣がつぶやく。

レオナルド。

その名前に高崎は目を上げた。

「誰ですか？」

「…わたしの友人の。…アリッサを慕う人」

「誰かに捕まったらしいとは聞きました」

「…おそらく、ウィーバーでしょう」

「車があります？」

「イーサーが準備してくれたようです」

臣の言葉の裏にある意図を高崎は察した。

「…行きましょう、お嬢様」

ソファに置かれた日本刀を高崎はつかむ。

自分に必要な武器の入ったアタッシュケースも。

「自分で持ちます」

「お嬢様が持つ必要なんてありません。それまで、私があなたの罪を背負います」

高崎はそう言いながら、臣の手を引いた。

「お嬢様のお友達は目を覚まされるでしょうか…」

「あの人はとても強いからきっと…」

そう信じている。

その言葉に高崎は微笑した。

生涯、彼女を守ると心に誓った。

自分の一生の全てを捧げたとしても。

「お嬢様」

「はい…」

「私のことはお気遣いなく」

高崎は優しく彼女に笑いかける。

彼にひかれた手を、臣は強く握り替えして一つ息をついた。
ずっとそばにいてくれた男。

黒い車の前に立った彼女は右手を左の袖の袂に差し込んだ。

シュツと鋭い音をたてて白いたすきの端をくわえた彼女は手早く
和服の袖をまとめた。

「いつものように援護いたします」

彼の言葉に臣は後部座席に乗り込んだ。

運転席はもちろん高崎だ。

「はい」

緊張した面持ちの臣に高崎は視線だけを投げかけた。

指先に触れた日本刀に彼女は拳を作る。

そっとオートマチック式の拳銃を帯にしまった臣は睫を伏せた。

走り出した車に、臣は夜のマンハッタンの街に見入った。

これから人殺しにいくのだ。

その覚悟。

「ためらっていらっしゃるんですか？」

「…高崎さんは、ためらわないんですか？」

「お嬢様を守るためならためらいませんよ」

車内で穏やかな会話が続けている。

それが高崎と臣の関係だった。

「…高崎さん」

彼女が振り返った。

スモークガラス越しに感じるその不穏な気配。

感じるものは肌を感じる不穏。

総毛だった。

「つけられているようですね。振り切りますか？」

「いいえ、ほうっておいてください」

無用な混乱を巻き起こす必要はない。

簡単にわかることだ。

考えるまでもない。

綾瀬家が誇る末娘、臣が日本から出たとなれば誰もがその行動に注目する。

なにより彼女は賞金首だ。

誰だって彼女の命を狙う。

「…お嬢様」

高層ビルの前に自動車が止まった。

すでに臣の顔つきは変わっている。

背後から追ってきた黒塗りの車も停まった。

「しかし、映画のようなありがちなパターンですね」

くすりと笑った高崎に、綾瀬臣は小首をかしげた。

背後から走り寄る大柄な男にホルスターから銃を抜いた高崎は激鉄をおろす。

同時に臣が膝を沈めた。

草履をはいた足が裾をさばく。

日本刀を抜いた彼女は躊躇の一つすら見せずに切っ先を水平に空中に滑らせた。

正確に頸動脈を切り裂く。それと時を同じくして銃声が響いた。

間に激鉄を一度おろした音が挟まったが、臣はその一瞬の隙に刀を片手で軽々と頭上に振り上げた。

鬼気迫る表情で襲いかかる男を下から上に真っ二つに切り裂く。

ほんの数分もせずに追撃者の四人の大男を始末した二人は背中合わせになって肩から力を抜いた。

刀、非天の切っ先を汚した血の汚れを懷紙で拭う。

妖刀と呼ばれる非天。

一瞬赤く輝いたような気がしたのは目の錯覚だったか…。

「ご無事ですか？」

高崎に問われて頷いた彼女は高層ビルを振り返った。

「ウィーバー…」

摩天楼を仰ぐ。

「参りましょう」

娘の言葉に高崎は頷いた。

静かだ、と彼女は思った。

明るいニューヨークの空の下には月しか見えない。

明るい闇夜の下に、大きな月がぽっかりと浮かんでいる。

「お嬢様……？」

どうかなさいましたか？

呼びかけた高崎に、臣は我に返った。

「どう思いますか？」

主人と、従者。

その関わり。

「どう、とは……？」

逆に尋ねられた高崎はわかっていながら首をかしげて見せた。

彼女のことはよくわかっている。

彼女が子供の頃から見守ってきたのだ。

「わたしたちが、行くまで待っていてくださると思います？」

日本人の優等生でもあるまいに、そんなことがあるはずがない。

「……いいえ」

かぶりを振った高崎に、娘は微笑した。

最愛の娘。

「では、なるべくはやく到着できるようにがんばりましょう」

にっこりと笑う。

どんな困難な状況にあっても、彼女は優しく笑う。

彼女は全てにおいて恵まれてきた。

才能も、家柄も、性格も、周りの人間も。

なにからなにまで。

彼女を知る誰もが、文句もなく彼女を「天才」と呼ぶ理由。

一つだけ、彼女の障害になるとすれば、彼女が思いもよらず犯罪者に身をやつしたことだった。

それが彼女の意志であろうと、なかろうと、だ。

裏社会、と呼ばれる犯罪者たち。

犯罪者たちの社会をそう呼ぶこともあれば、犯罪者そのものを裏社会と呼ぶこともあった。

それ故に、彼女はトップクラスとも呼ばれる裏社会。

そしてまた、彼女の友人でもあるアリッサも裏社会だった。

「私は、そんなあなたを誇りに思います」

ゆっくりとビルの入り口に足を向ける彼女に従う。

古くさい、と言われたとしても、自分は綾瀬臣という娘の影であり、従者であればいいのだ。

それが平凡な自分に与えられた役目。

高崎はそうして彼女に付き従う。

かつて日本刀一本で麻葉組織をひねり潰した彼女だ。

「：あのとき、私がお嬢様をお守りすることができていれば…。お嬢様を犯罪者になどすることはなかったのです…」

「もう、そのことはいいんです」

人殺しは嫌いだった。

それでも、裏社会の一人として生きることを選んだ。

なにがあっても高崎は離れることはない。

そして、自分が綾瀬臣であるという事実も変わらない。

ビルのエントランス内に入っても、違和感を感じるほどの静寂を感じただけだ。

「エレベーターを使いますか？」

「電気止められて閉じ込められても困るんですけれどね…」

高崎の提案をやりわりと受け流した彼女は階段へとむかっていく。急ぐ、と言っておきながら悠長に階段を使う、というのは高崎でなければどこか矛盾を感じたのかもしれないが、男は無言でそれに従った。

彼女は知っているのだ。

自分自身の核爆弾のような存在感を。

誰もが、彼女を無視できない。それを逆手にとる。

自分自身をおとりにして虎の穴に入る彼女は無言で階段を上がっていく。

「…お嬢様」

階段上を見上げた高崎がスーツの下に装着したホルスターから銃を抜く。それ以上の言葉を連ねる前に、無言のまま踊り場に立つ男を撃ち殺した。

その動きは一瞬だった。

「高崎さん…」

「無駄な殺人をお嬢様が行う必要はありません」
罪をかぶる覚悟。

人殺しの覚悟。

「…」

なにか言いたげな臣を、微笑してその言葉を制すると、銃をしまった。

「大丈夫ですよ」

そうしてからどれだけ階段を上がっただろう。

目的のフロアに到着した彼女らは廊下にくる扉を開いた。

最初に見えたのは上質の絨毯だった。

そのフロアの所有者がどれだけ資産家なのかわろうと言うものだ。

あけた瞬間に響いたのは銃声だ。

音の連続性から判断するに、機関銃だろう。

全弾命中することなどほとんどないが、とりあえず当たったら危険である。

彼女は「うーん」とつぶやいてから首をかしげた。

「これでは進めませんね、どうしましょう」

「どうしましょうねえ…」

他人が見ればおちよくっているのかと思われそうなほどの落ち着きようだが、とりあえず臣も高崎も、一応真剣である。

「わたしが先行します。援護してください」

「わかりました」

日本刀を抜いた彼女は草履の足をすべらせて廊下に躍り出る。

死角などない一本道だ。

相手が曲がり角や扉の影に隠れているのが気に入らないが、お互

い命が惜しいのは一緒である。

地の利は最大限に生かすのが当然だろう。

少なくとも、自分が逆の立場であつたら同じようにする。

日本刀を手にする美しい娘に、動揺したのは彼女を阻止しようとする男たちだった。

銃を向けてもいいのかと…。

だが、確かに、彼女は武器を持って走っている。

ずば抜けた動体視力で弾道を見切る彼女は走りながら小さく刀を抜いた。

鋭い音を立てて刃に弾があたるが、殺人を嫌う彼女から恐怖はすでに消えていた。

「…死にたくなければどきなさい」

言い放つ。

それは、高崎に向けられることのない、高圧的な言葉。

機関銃から放たれる銃弾があたらないことをわかりきった上で彼女は走る。

背中に押しつけられる機関銃の銃身を左手でつかんだ彼女はそのまま勢いに任せて腕を引く。

同時に鯉口を切ったその棟の根本で相手の首筋を切り裂く。

一連の動作は鮮やかすぎた。

吹き出る真っ赤な血をすりりとかわした彼女は恐怖に凍り付いた男が投げようとした手榴弾に刀の切っ先をのぼした。

のど元に突きつけられる。

手榴弾のピンはすでに抜かれていた。

男も動かないが、臣も微動だにしない。

動いたほうが死ぬ。

臣は時間をはかっていた。

そしてその一瞬、彼女は刀をひいた。

投げ出すように非天から手を離れた彼女の体が宙に浮く。その体を飛び込むような形で抱き留めた高崎は、和服姿の娘を守るように抱き込んで床に滑り込む。

「…さすがに、手榴弾は驚きました…」

ぱらぱらと、天井からアスファルトのかげらが降ってくる。

粉々になった人間の肉。

その中に転がった非天を拾い上げて、綾瀬臣は眉根を寄せた。足元にバラバラになった人間の残骸。

「お怪我はありませんか？」

壁際に転がった漆塗りの鞘を拾い上げて、彼女は刀をおさめた。

「ありません」

分厚い壁に固められた、まるで灰色の墓石のようなそれ。

彼女は顔を上げた。

華奢な指先をそつと下唇にあてる。

「行きましょう」

弾丸にも、手榴弾にもひるまない彼女をどうすればいいのか、男たちにはわからない。

そもそも、彼らは知っているのだ。

綾瀬臣を殺せば、そこにあるのは自分自身の破滅だけだ。

現実の一般的な社会にも、裏社会にすら、多くの敵を作る。

それが言葉通り、ただの思想的な敵ならば恐れるに足らないが、この場合、言葉通りに敵を作ることになるから、これほど恐ろしいものはない。

彼女相手に戦ったところで、生き残ったとしても、待っているのは社会的な粛正と抹殺だけだ。

彼女の超人振りを見れば我先に逃げ出したところで、罪はないだろう。

綾瀬臣を殺そうとするのは、恐ろしさを知らないよほどの下っ端か、もしくは中途半端に己の力量を買いかぶった愚か者だけだ。

廊下の突き当たりにある扉を、彼女は開いた。

同時に爆音が響く。

高崎はとっさに臣の右腕をつかむとそのまま自分の下に引き込むような体勢で彼女を爆風からかばった。

広い胸に臣の細い体を抱きしめて、高崎はきつく目をつむる。

「…派手ですね」

「…本当に…」

黒いスーツが汚れていたが、それを気にするような高崎ではない。その程度のことを気にするような経済力ではなかった。

爆風に破られた窓は焦げたカーテンが揺れていた。

破れた窓からマンハッタンの夜景を眺めた彼女は、窓枠の上を見上げてから後頭部で結んでいた組紐をほどいた。

さらりと黒髪が頬を覆う。

黒い睫毛が繊細に揺れた。

「やはり遅かったようですね」

「…そうですね」

ばらばらとヘリコプターのプロペラの回る音が聞こえた。

屋上だろう。

わかりきっていたらしく、表情一つ変えない彼女を横目で見つめた高崎は、臣の細い肩を抱いた。

日本人離れた屈強な体。

そっと彼の体に体重を預けた娘は吐息をついてから音の気配を聴覚で追う。

そのとき、羽音を立てて一羽のカラスが窓辺に止まった。

「…」

にっこりと笑った。

白い羽を持つ、赤眼のカラス。

片目はつぶれていた。

彼女の笑みに飛び立った鳥は優雅にヘリコプターを追っていく。

「…ヒューイですね」

「そう、ヒューイよ…」

アルビノのカラス。

「あの子は強いわ…」

アルビノでありながら縄張りのカラスのボスを張る。

「どうやって追うんです？」

苦笑した高崎に、臣は人差し指を空に向けてくるくと回した。

大型のフクロウが二羽飛んでいた。

「サオリとサユリが案内してくれる」

共に半野生のフクロウだ。

臣が直接えさをやることはないが、野生の本能からか彼女にとって自分たちが必要なときだけ日本から彼女についてくる。

「健気なフクロウですね」

「ひとつだけ言うておくけれど、わたしが飼っているのは紅蓮だけです。」

紅蓮。

ベニコンゴウインコの若鳥だ。

「頭が良い鳥に好かれるのは結構なことです」

鳥たち。

ヒューイらは、良くも悪くも臣の手足だった。

目となり足となる。

「ヒューイは、以前もあなたを救ってくれましたね」

「きっと、哀れまれているのです…」

哀れまれている…。

野生を失った人間への哀れみ。

部屋を出た二人はフクロウが案内するまま車を走らせる。

「お嬢様、なにをなさっておられるのです？」

後部座席で、高崎の銃に鉛弾をこめる臣は目だけを上げた。

「見ての通りです」

淡々と告げる。

静かに、淡々と。

フクロウは旋回しながら車を案内していく。

控えめな追撃は、気がつく者などいないだろう。

圧倒的な存在感がありながら、静かに、至極冷静に死天使と呼ばれる裏社会はターゲットを追い詰める。

翼を持つ人。

そう呼ばれるのは彼女の目となる存在があつてこそだ。

「レオナルドは無事でいるでしょうか？」

高崎に言葉に綾瀬臣は眉をひそめる。

「わかりません」

ただ、無事でいてほしいと思う。

彼女が悲しむから。

「どうか無事で…」

「お嬢様」

目の前の電線から飛び立った白いカラス。

そして、カラスとすれ違うようにフクロウが舞う。

大型の二羽のフクロウはカラスが追跡した道を正確に二人に伝えていた。

しばらく走ったその先に、廃工場があつた。

「いかにもお約束…」

苦笑した彼女は車を降りると、ライフルを担いだ高崎に視線を流した。

しかし、なにも言わない。

「…とりあえず、ヘリは墮としておきましょう」

駐車場に降りたヘリコプターをスコープで狙った高崎は正確に爆破してから臣を追って歩き出す。

もう臣は振り返らない。

その潔さこそが死天使。

冷たい天使。

杉の木にとまったフクロウは静かに夜の街に紛れるように鳴き声を上げる。

歩きながら組紐で後頭部に黒髪を結い上げた彼女はしっかりと前を見据えていた。

まるで明治時代にタイムスリップしたような。

片手に日本刀を持った女。

「…わたしは人殺し」

口の中で独白した彼女はすでに覚悟を決めている。

殺したくないと揺らいでいた瞳はすでになかった。

雪の小紋。

左手にした日本刀。

かつて妖刀と呼ばれた刀。

「…かの剣は、臣お嬢様がお持ちになられてから人食いをやめたようですな」

いつぞや、非天を所有していた老人がつぶやいた。

刀に魅入られた。

非天に捕らわれた娘。

彼女はヘリコプターの爆音を背中にゆっくりと歩いて行く。

草履をはいた足は静かに音を消す。

「お嬢様…」

車のトランクにライフルを放り込んだ高崎が大股で走り寄った。

炎を巻き上げる強風に煽られた黒髪が、炎を映して赤に燃える。

殺されない。

殺されるわけがない。

彼女はそれを知っていた。

「あの日も、こんな夜でしたね」

ぽつりとつぶやいた彼女は高崎を見上げてにこりと笑った。

そっと右手を開いて視線を落とす。

そう、自分が殺したのだ。

「…殺した」

「…お嬢様」

その、細い手をとっさにつかんだ高崎に、臣は我に返る。

「大丈夫です」

大丈夫、と自分に言い聞かせた。

そのとき、彼女は人の気配に顔を上げた。

「まったくもって、あの化け物の仲間もまた化け物か…」

侮蔑の声色。

漆黒の瞳が闇を浮かべる。

ウィーバーだ。

「…化け物？」

「あの小娘だ…」

男の声に綾瀬臣は閉口する。

言葉を失った。

「いや、小娘の姿をした化け物、だな」

化け物…？

臣は口の中で何度も繰り返す。

「…EVE—000—782。君も知っているだろう」

「何が言いたいのですか…？」

すでに高崎は銃を抜いていた。

最愛の娘を守るために。

「出生も化け物なら生い立ちもまた化け物…、貴様と一緒にだ」

「お嬢様を愚弄するな…っ！」

男の言葉に高崎は奥歯をかみしめる。

「お嬢様…、お気になさらずに…」

化け物などではない。

偶然にも資産家の綾瀬家に臣が生まれたというだけだ。全てに恵まれた彼女がたまたま綾瀬家という恵まれた家に生まれただけのことだ。

たったそれだけのこと。

「綾瀬の犬か…」

綾瀬臣の忠犬

そう自分が呼ばれていることを高崎は知っていた。

「お嬢様を侮辱するな…」

「化け物を守る価値がどこにある？　そもそも貴様が守らなくても綾瀬臣、死天使は死なない。守る必要などどこにもない…」

彼女は死なない。

「なぜ死なない」

男が歌うように問いかける。

「…わたしが綾瀬家の跡取りだからです…」

美しい眼差しが白人男性を見つめている。

世界に誇る綾瀬家の全財産を受け継ぐ者。

だからこそ、彼女は全てから守られる。才能と、美貌と、家柄と、全てを彼女は受け継いでいる。

「…跡取りだと？　だから人殺しをしても許されると…？」

「そうです。わたしは全てから守られる。全てから許される。その権利がある」

矢継ぎ早に答えた彼女が、階段の上に立った男を見つめていた。

その瞳がまたいた。

優しい月のような臣の闇を映す瞳。

「わたしは人殺しなのよ…」

つぶやいた娘の瞳がじわりと潤んだ。

「でも、あなたがわたしの友人を貶めるために謀を企むのでしたら、わたしはあなたを殺します」

固い決意。

殺せばいいのだ。

「…だが、カタナでは銃には勝てない」

「ウィーバー、あなたはなにか勘違いしています」

男が構えた黒光りする拳銃。

正確に臣の顔に照準を合わせている。

「武器を捨てろ、死天使」

彼女の裏社会としての通り名を男が呼んだ。

「：カタナを捨てろ」

再び命令した。

「わかりました：」

がらんと音をたててアスファルトに転がった。その行動に臣自身も無表情であったが従者の高崎も無反応だった。

おそらく、彼女の恐ろしさを最も理解しているのは高崎だ。

「そっちの男も銃を捨てろ」

そうしてかわいい女の子が殺されるのを見ているがいい、と。

一瞬、ためらうような仕草は見せたが、高崎は銃を足元に投げ捨てた。余計なことをしてアルベルト・ウィーバーを刺激したくはなかった。

銃など捨てて、隙を探ればいい。

そもそも非天から手を離れたところで彼女が妖刀の呪縛から逃れられるわけではない。

「：大丈夫」

高崎は誰にも聞かれないように口の中だけでつぶやいた。

臣は死なない。

時間がとまる。

ウィーバーの指が引き金を引こうとしたその一瞬。

臣が動いた。

胸元に差し込んだ右手が短刀が閃いた。

バランスを失った彼女の体が膝を崩したように右に崩れていく。

ウィーバーの胸に突き立った短刀はしかし、致命傷ではない。

大柄な男の分厚い筋肉に守られた体に、多少の衝撃を与えたただだ。

よろめいた男と、その男が撃ち出した銃弾。

臣の肩をかすめた鉛玉に、彼女は次に帯の隙間に隠していた銃を抜く。地面に崩れ落ち、相手の照準をずらしながら安全装置をはずした。

彼女の動きは無駄がなく正確だ。
常に生死の境に晒されてきた彼女。

「…死ね」

引き金をひいた。

同時に男が悲鳴をあげて崩れる。

地面に転がった彼女を抱き起こして、ウィーバーに歩み寄った高崎は白人男の聞き手を踏みつけて自由を奪うとその銃を拾い上げた。

「…痛いでしょう」

冷静に彼女は告げる。

打って変わって凍り付いたような彼女の瞳は、優しい笑みをたたえるそれとは別人のようだ。

「死ぬのは怖い…」

「…なに、を…」

「死ぬのは怖いのに、偽善者は正義の鉄槌を自分が振り下ろさなければならないと信じている。人の命は普遍で、貧しくても、お金があっても、悪人も善人も関係ない。この世に生まれてきた人達全ての人、生き続ける義務がある」

いつの間に拾ったのか、彼女の手には非天があった。

「…EVE—000—782。知っているわ。彼女の名前…。いいえ、名前なんてない。わたしが知っている彼女の名前はツヴァイ。それだけ」

でも、彼女にも彼女の存在意義がある。

「あなたのような偽善者がわたしの友人を殺すというのなら、わたしはあなたを殺すし、わたしは偽善を許すことなんてできない」

それが自分の存在意義。

「…レオナルドはどこです？」

冷静に言い放つ。

「…さて、死天使が俺を殺すというならそんなことはどうでもいいだろう」

冷笑する男に、臣は表情を消した。

逆手にした刀を男の首筋に振り下ろした臣は、突き立ったそれをそのままに闇夜を仰いだ。

青年を隠すならどこに隠すだろう…。

言葉もなく思考を巡らせる。

「お嬢様？」

非天を彼女の手に握らせた高崎に、臣はそれを握り直すとまっすぐ顔を上げた。

「…」

銃声が聞こえた。

走り出す。

剣を振りかざして彼女は目の前の男たちを斬り殺していく。

血しぶきが舞うが臣はうろたえることなく工場内の廊下を走っていった。

白いカラスが鳴く。

独房のような頑丈な扉の前に旋回するアルビノのカラスに、彼女は引き金を引いた。

ドアノブを銃弾で破壊し、その扉を高崎が体当たりして打ち破る。

「…レオン！」

床に倒れた青年が、臣の悲鳴のような呼びかけにぴくりと指先を動かした。

「しっかり…！」

臣は男を抱きしめて高崎を振り仰いだ。

「お嬢様…、私が」

レオナルドを引き起こした高崎は肩を貸すようにして歩き出した。やがて、廃工場の外へとでた綾瀬臣と高崎の目の前に、灰色の髪の毛のスーツの男がいた。

「…殺したのか？」

灰色の髪の毛の男に尋ねられて、臣は無言で目を伏せる。

無言は肯定だ。

アリッサの保護者、ジョージ・リート。

「：死天使がでしゃばったと、報告すればいいんです」
それで通じると、彼女は暗に告げる。

「イーサーから聞いているとは思いますが、アリサが重症です。今はイランで療養しているそうです」

言いながら彼女は帯から小さな名刺を取り出した。

「連絡はいつでもこちらへ」

アメリカ政府だろうとなんだろうと受けてたつ、と彼女は言っているのだ。

「：とりあえず、報告書がすんだらイランに行つてあげるとアリサが喜ぶと思いますよ：」

優しい微笑。

「事の次第はわたしがいつでもご説明しますと、レインのおじさまにお伝えください」

名刺は綾瀬の家紋がエンボスされた和紙。

そしてそこに描かれた複雑な藤の絵は、綾瀬臣を特定するものだった。

彼女以外、綾瀬家で藤の紋を使つてはいけない。

それ故に名刺を見れば、名刺を持つ者が彼女に直接接したことを表している。

困つたように立ち尽くすジョージに、臣は会釈をひとつすると車に乗り込んだ。

＊

レインは報告を受けて頭を抱えた。

「：知っているのか？」

尋ねられてレインは眉をひそめる。

「知っているとも」

おじさま。

そう呼びかけて彼女は笑った。

覚えているのはほがらかな笑顔と天使のような声の日本人の少女。

「…おじさま、今日、学校でお友達ができたの」
電話の向こうで少女が笑っていた。

少女時代のほとんどをアメリカで過ごした彼女のボディガードが高崎、そしてプライベートで彼女の保護を託されたのがバート・レイン。

美貌の少女はその背中に名誉と、莫大な金銭を背負っていた。
彼女を誘拐して大金の身代金を請求できただろう。

だからこそ、腕の立つ男たちが彼女を護衛した。

「…おじさま、おじさま…」
そう言って笑っていた。

何度共に買い物に行ったり、休暇をとったりしただろう。

「死天使…」
まさか、その後彼女がそう呼ばれる裏社会になろうとは思わなかった。

そして彼女が「死天使」と呼ばれるようになったとき、彼女の父親はなにも言わなかった。

わかっていたのかもしれない。

自分の娘がどれほど犯罪者たちにとって重大な子供であるのかを。

「あの子は、死天使となった後もそれをずっと悔やみ続けていた…」
愛しい娘。

天真爛漫に笑った子供。

「わたしが彼女のそばにいた男と同じように、死天使を愛していたと言ったら君は軽蔑するか？」

自重したように笑うレインに、ジョージは肩をすくめた。

「いや…」

「愛しいと思う気持ちと、彼女自身のあり方を肯定することはまた違う」

そう、自分がアリッサを大切にしている気持ちと同じだ。

「…失礼する」

アリッサはイランにいます、死天使は言っていた。

もつとも、アリッサにそれを語れば目を三角にして怒るだろうが。なにせ、アリッサは臣が好きで仕方がないのだ。

「アリサ」

どれほどの傷を負ったのか想像もつかない。

しかし、彼女がどれだけ危険な立場にあるのか理解していないわけではなかった。

知っていた。

知っていても彼女を止めることなどできなかった。

「死天使と、レインか……」

綾瀬臣の名刺を出したジョージに、レインは鼻から息を抜いて苦笑した。

「……それは君が持っていてくれ。なにかの役に立つだろう」
自分には必要ないものだ。

レインには、アメリカ国内での地位と名誉。そしてなにより綾瀬臣との個人的な絆という何にも代え難い武器を持っていたから。だからこそ、綾瀬臣の名前を示すものなど必要ではなかった。

イラン、首都テヘラン郊外にある豪邸がイーサーの自宅だった。

「みつともない……」

無然とつぶやいたアリッサはベッドの中で視線を明後日に向ける。

「怪我をしたそうだな？」

「うっさいわね！ ちょっと油断してただけよ！」

確認するようなジョージの声がアリッサの逆鱗に触れた。

わかっている。

みつともないのは自分だ。

裏社会であるながら、同じ犯罪者の邸宅で勝手に油断した。そのつけた。ジョージの顔に思い切り枕を投げつけたアリッサは胸に走った痛みに顔をゆがめる。

「……アリサ」

痛みをこらえるように背中を丸めた彼女を氣遣って腕を伸ばすが、その手は乾いた音と共に振り払われた。

パンつと音が鳴る。

「同情しないで」

「…」

同情したわけではない。

ただ彼女が心配だった。

生き急ぐように、紛争に身を投じる彼女が心配でならなかった。

「…そういえば、死天使に会った。レオナルドを救出したのも彼女たちだ」

彼女たち、という言葉に反応する。

「…臣が来たの？」

「イーサーが依頼したらしい。君にこんなことをした男に復讐をするために」

「…」

絶句した。

「ずるい…」

しばらくしてから彼女はぽつりとつぶやいた。

「…ずるい？」

「ずるいじゃない！ わたしが臣を好きだってあんたたち知ってるくせにっ！ それでそのまま臣を日本に帰したの！？ 信じられない！」

力一杯怒鳴った彼女は、胸に走る衝撃に今度こそ体を丸めた。

「無理をするな、アリサ」

理不尽な怒りだが、そもそも自分の油断によって重症を負い、結果としてイーサーが依頼した死天使にあえなかったわけだから自業自得なわけだが。

理不尽な怒りだったとしても、それを誰かにぶつけずにはいられなかったのだろう。

むっつりと黙り込んでから、ベッドに潜り込んでしまった彼女に、

ジョージは上掛けをかぶった彼女の頭を優しくなでる。

自分がここにいて、とは言わない。

死天使にとつての高崎のように。

ジョージにそうあることは困難だったからだ。

「アリサ…」

呼びかけに彼女は答えない。

やがて、アリッサの呼吸が規則正しく深い呼吸に変わった頃、ジョージは頭をなでていた手を静かに止めた。

「君のそばでだけ、彼女は眠るんだな」

扉にイーサーが立っていた。

「俺だけじゃない」

「いや、わたしのようなトップクラスのそばでは彼女は絶対に眠らない。眠っても気配で起きる」

「…そりゃ、俺はFBIだからな」

肩をすくめた。

犯罪者ではありえないジョージのそばではアリッサは眠ることができる。

なぜなら彼は自分に害をなさないからだ。

だからこそ、彼女はジョージのそばで眠る。

彼のスラックスを小さくつかむ指。

信頼の証。

「嫉妬か？ 武器証人」

「嫉妬するね」

肩をすくめたイーサーはそうして部屋を出て行った。

ただ一つ納得いかないのは、アリッサが嬉々として暴れる様を見れなかったことだ…。

「どちらにせよ、少し身の回りの人間に配慮する必要があるな…」

独白したイーサーは長い間、そばにいた女を思い出した。

彼女が、アリッサに危害を加えたのだ。

幸いなことに怪我そのものは命に別状がなかったが、もしも万が

一彼女が死ぬようなことがあれば自分はまともでいられただろうか
…。

そこまで考えてイーサーはかぶりを振った。

アリッサと甘い優しい関係でいられるのはただ一人。

それは自分ではない。

言葉にはされない信頼が、彼はうらやましいと思った。

第二章 ソシオパス 1

黒い髪をくるくると指に巻く少女はむっとり黙り込んだ。

豪華なソファ。

大理石のテーブル。

どれもこれも嫌みなほど金がかかっている。

そんな「依頼者」を、嫌と言うほど見てきた。

目の前にいる女もそれと同種の人間。

「：で、何の用もなくわたしを呼んだ、とか言ったら殴るわよ？」

窓際に立つブルネットの女に、少女は告げた。

年の頃は四十代といったところだろうか。

「まさか。何の用もないわけじゃないじゃない」

用がなければわざわざ裏社会の人間を呼びつけたりはしない。

女が笑う。

ひっそりと。

「キャシーを呼びつけておいて、冗談でした、なんて…」

年齢のわりには美しい顔立ち。

しかし目をひくのはそんなものではない。

長い髪で隠した、ケロイド状の皮膚。

ブルネットの女に、キャシーと呼ばれた少女は片目をすがめた。

「：契約の内容をまだ聞いてないわ」

ぞんざいに少女が告げる。

「そうね、そっちが先ね」

二人の女。

片やは中年過ぎの美貌の女であり、もう片やは黒髪の東洋人の少女だ。

美少女と言うには、やや角が立ちすぎていた。

「：わたしのことが怖い？」

「別に」

女に尋ねられて、キャシーは肩をすくめた。

キャシーにとって恐ろしいものなどない。

いや、ひとつだけあるにはあったが、それは世間一般では恐ろしいと言われるものではない。

「権力に興味ないのよね」

キャシーにとって、権力などどうでも良い物の一つだ。

あっても困らないが、自ら率先してほしいと思うほどのものでもない。

ソファの肘掛けに右の肘をついた彼女は、頬をもたれて窓辺の女を見つめる。

女の様子をうかがっている。

「内容聞かないことには、契約するかしないか決めようがないわね」
「…あら、あなたは内容を聞かなくてもほとんどを受けると聞いたけれども？」

「買いかぶりすぎだわ」

誰も彼も、自分を買いかぶっている、とキャシーは思う。

「権力って言うのは不便なもので、人を傲慢にさせるくせに、それを握った人間を不自由にして、発想を貧困にさせる」

哲学的なキャシーの言葉に、女は頬を手のひらでなでた。

「わたしのこれに興味がある？」

これ、と指したもの。

ケロイド。

「あるわね」

少女は目を細めて女の火傷の痕を見つめてから、視線だけを投げ
てよこした。

「大した怪我じゃないわ、こんなもの」

女は笑う。

ブルネットの長い髪を揺らしてからキャシーを見つめた。

その冷たさに、キャシーは目を瞬かせる。

「…女って言うのは、顔に傷をつけられることを嫌うって聞いたこ

とがあるわ」

淡々とした彼女の声に、女はにこりと笑みをたたえた。

「あなたも女でしょう？」

「残念だけど、私は女にはならないの。永遠に」

そう、永遠に女にはならない。

好き嫌いでそれを選んだわけではない。

選びようもない運命を突きつけられた。

キャシーは特殊な子供だ。

「本当、あなたはあの子に似ているわね」

あの子。

その言葉に、キャシーは小首をかしげた。

含みをもたせた女の声を、少女は不審を感じ取った。

「あの子って？」

あの子とは誰のことなのか。

「：どうでもいいことよ」

問いかけたキャシーに、ブルネットの女はゆるくかぶりを振った。

「で、わたしは何をすればいいの？」

尋ねたキャシーの声は恐ろしいほど冷静だ。

「ある男を殺してほしいの」

殺せ。

殺してしまえ。

物騒な響きに、少女は目を上げる。

「：名前はポール・アダーニ」

知っているか？ と彼女は眼差しで問いかけた。

「へえ」

知っている。

遺伝子学の博士号を持つ男だ。

「で、そいつはなにをしたの？」

「契約するのに、契約主の事情なんて聞かないのが裏社会じゃなくって？」

「まあ、ほとんどの裏社会ならそうでしょうね」

自分が、トップクラスの裏社会であることを知っている。仕事の
内容も選べることも、だ。

裏社会に生きるトップクラス。

それは、キャシーのような裏の稼業を生業とする者たちにとって、
最高の称号だ。

彼らは地位も名声も求めない。

ただ、興味があるのは自分の行動によって成り立つ結果のみ。

「興味あるの？」

「：殺しに感情移入はいらない」

そう。

それだけ。

殺人という行為に感情移入すれば自分に待っているのは破滅だけ
だ。

「そうよ。感情移入すれば人殺しなんてできなくなる」

ほほえみながら女が言った。

キャシーはそれに応じる。

「普通は、ね」

普通の人間ならば、良心の呵責のひとつも感じただろうが、キャ
シーは違う。

「あなたは普通じゃない、とでも？」

ブルネットの女に、キャシーが冷笑した。

「普通の女に見えるんなら、あんたの頭はどうかしてる。：ねえ？
グレイシア？」

鼻から息を抜いて笑う。

この世に生を受けたときから、呪われた子供だと捨てられた。
見捨てられた。

それを、キャシーは知っている。

「普通の女の子…」

繰り返して、キャシーはキャハハッと声を上げる。

「気に入ったわ。殺してあげる」

殺してあげる。

殺してあげる…。

殺したい…。

キャシーは立ち上がった。

「報酬は前金で。振り込まれたらいつでも殺してあげる」

「…契約を破棄するつもりじゃないの？」

「その辺の雑魚と一緒にしないで」

にらみつける。

いつでも殺せる。

彼女の言葉にブルネットの女は笑った。

「疑ったわけじゃないのよ。こういう世界にいと、相手を信用できなくなるの。それだけ」

それだけのこと。

何度傷つけられ、裏切られてきただろう。

女は思う。

女であるからと言う理由だけで侮られた。

「まあ、誰も信じられないのはあんたに限ったことじゃないけどね」

侮蔑したキャシーは軽い足取りで部屋をでた。

ポール・アダーニ。

最低の科学者の名前だ。

コートをなびかせながら、少女は考える。

「もしかしたら、私がモルモットだったのかもしれないけどね…」

スラムの孤児。

いつ捨てられたのかも知らない。

気がついたときには、すでに一人きりで、犯罪者だったことを知る。

実の親から捨てられた。

「たったそれだけ」

優しく笑う。

なんとも言えばいい。

「：ソシオパス」

一陣の風が卷いた。

長い黒髪が巻き上がる。

キャシーと呼ばれる犯罪者はゆっくりとバス停に向かっていった。まるで息を吸うように人を殺す。

鼻歌を歌いながら、上機嫌で殺人を犯す。

そう言われてきた。

殺人をなんとも思っていない少女。

「：キャシー！」

名前を呼ばれて振り返った。

若い男の声だ。

「なによ」

呼びかけた男をにらみつける。

スーツでも着ていればそれなりにいい男なのに、とキャシーは思った。

呼びかけて、自分の腕をとった男が警官じゃなければ、違和感を感しないのだろうが。

そもそも街中で警官が少女を呼び止める、という異常な事態に通るすがりの者たちの誰もが注目した。

だから、いやなのだ。

うんざりと男の手をふりほどいた彼女はばりばりと頭をかき回した。

「今度は何だ」

彼の言葉に眉間を寄せる。

「今度はってなによ」

今度は、という部分に力を入れた警官の言葉に、キャシーはかわいらしく両手を腰に当てて胸を張った。

正直、彼女が「殺人犯」でなければ大変かわいらしい姿である。

しかし、男はだまされない。

キャシーは少なくともアメリカ犯罪史上最悪の殺人鬼のひとりだった。

「今度はなんだと聞いているんだ」

それとも言葉も理解できないほど君は退化したのか。

そう告げた彼に、少女は憤然と肩から髪を振り払う。

「だから、それが失礼だって言ってるのよ」

彼の胸に人差し指を突きつけて彼女は言い放った。

「君が動くときはだいたい犯罪絡みだ」

「それって偏見じゃないの？」

「そうかもな。だがだいたいあたっているだろう？」

警官の言葉に憮然とした彼女は、まったく、とつぶやいてから右手を肩の上で振ると歩き出す。

若い警察官の「君が動くときはだいたい犯罪絡み」という部分は遠からず当たっている。

根拠などないだろうが、キャシーが姿を消すときに限ってニースを殺人事件が賑わすのだから彼の言い分は普通に考えればわからなくもないことだった。

「それで、また話は警察署で、とか言うんじゃないでしょうね」

どうしてあんたはいつもこういうのよ。

「警察署は嫌いか？」

「大っ嫌いよ」

だいたいね！

言いながら顎をあげた彼女はキラキラと光る黒い瞳を瞬かせて睫毛を閃かせる。

「警察署にいらっしやいななんて言われて喜ぶカスがどこにいますっていうの！？」

見かけは美少女だが、残念なことに口が悪すぎた。

「相変わらずだな」

そりゃごもつとも。

肩をすくめた男に、キャシーは中空をにらみつけた。

「警察にはあいつがいるでしょ」
だから嫌いだと。

「俺は二の次かよ」

「あんたは二流」

ばっさりと切り捨てた彼女は、ビルの前に立つにこやかな男に眉をひそめた。

「やっぱり…」

「ご挨拶だな」

「言っとくけど！ 私はまだなにもやってないんだから！」
まだなにもやってない。

彼女は犯罪者でありながらそれを隠そうとはしない。
無邪気なほどあけすけだ。

「：一つだけ言っておくが、君は今までの前科で刑務所に送られてもおかしくないんだぞ？」

「そんな所いつでも脱獄できるから関係ないわ」

「君は強い。だが、自分の力を過信しすぎている」

「何が言いたいのか？ ピアス？」

目の前にいる男。

彼はピアスと言う。

「あーあ…、あんたに比べたらこっちの制服のほうがなんぼかましよ」

自分の後ろに立つ男を親指で指し示して、長いため息を吐きだした彼女は視線だけで目の前の男と背後の男を流し見た。

「ねえ、あんたたちさ。いつもいっつもどうして私のことをかき回るわけ？ 大概メイワクなんだけど」

「かき回られるようなことをしなければいいだけのことじゃないか」
ピアスは余裕を持って説得すれば、それに対して少女は向かいにいる男のネクタイを引っ張った。

ネクタイを引っ張られ顔を下げる形になった男は、唇に暖かい官

職を感じて目を見開いた。

「大好きよ、ピアス」

歪んだ自分を見てくれる。

ピアスも、背後にいる警官も。

彼らは彼女だけを見てくれる。

そんな彼らが好きだった。

「でもさ、あんたたちはなんだ言いながら私を見逃してくれ
るじゃない」

「…」

背後にいる男はその言葉に黙り込んだ。

「…マーク、ピアス。あんたたちにはわかってるんじゃない」
突きつけるのは現実。

彼女の仕事は、彼女が選択した結果だ。

かつて、彼女は初めてピアスに捕まったときにこう言った。

「おなかすいていたんだもの」

空腹だったから人を殺したのだと、平然と彼女は言い放った。

無邪気な殺人犯。

「おなかがすいたらいつでも警察署の俺のところにおいで、そうすればいつでも飯を食べさせてやるから」

ピアスの言葉に少女はあっさりと頷いた。

「うん！」

しかし、そう言って彼女は欲望のままに殺人を犯し続けていた。

おそらくピアスが知らないだけでその人数は軽く四桁は超えるだろう。

そんな無邪気な彼女が、ある意味では恐ろしく、ある意味では心配で仕方がなかったこと。

「ピアス、私を愛して…」

両手を伸ばした少女を、ピアスは抱き留めた。

「…私、ポール・アダーニを殺してくる。腐った豚野郎よ…」
腹黒い噂を多く持つマッドサイエンティストの名前。

ポール・アダーニ。

「今回だけだぞ」

「ありがとう」

今回だけ見逃すのだ、と告げたピアスにキャシーはにこりと笑った。

「行ってきます」

「無事で」

ひらひらと大きく手を振ったキャシーを見送った二人はそうして顔を見合わせると苦く笑った。

結局、いつも自分たちは彼女に甘い。

「キスされてましたね」

からかうようなマークの言葉に、ピアスは困惑したように笑った。「不思議な子だ」

やっていることは犯罪であるというのに、どこまでも天真爛漫。だけれども、少女にとってキスはピアスをつなぎ止めるための手段でしかない。

「愛して…っ！」

私を愛して。

私を好きになって…。

心が張り裂けそうなほどの絶叫。

「私を愛して…！」

悲鳴のように叫んだ子供の声を忘れられない。

ピアスはどうして唇に触れた彼女のぬくもりを感じるように自分のそれを指先で触れた。

「いいんですか？」

尋ねられてピアスは肩をすくめた。

「止めるだけ無駄だろう」

「確かに」

彼女を止めることができる人間などいるのだろうか。

金髪をかき回したスーツの男は、そうしてから立ち去っていく少

女の後ろ姿を見つめた。

カバンを背中に背負った後ろ姿は、小学生か中学生のようだ。だがその正体は恐るべき犯罪者。

アメリカ警察がとらえることが、事実上困難な殺人犯のひとり。ワシントンで監視下におかれているというマジックボムと同様に危険な存在。

いつ爆発するかもわからない爆弾を彼らは抱えている。

「…捕まえることができれば簡単なことなのかもしれないがな」

そんなに簡単に捕まえられれば誰も苦労しない。

捕まらないからこそその、一級犯罪者だ。

捕まえられない。

「彼女を捕まえようとした警官が何人犠牲になったか…」

彼女は悪だ。

それを知っている。

ピアスは自分の顎をなでてから、思いを馳せる。

これからも、同じようにキャシーを捕まえようとすればするほど、警官の犠牲者は増えていくだろう。

考えただけでもぞっとするような数字に、ピアスは肩をすくめた。

「子供の観念に善も悪もない。それに善悪の観念付けをするのは社会だ…」

それを現代社会が証明している。

キャシーの存在はまさしくそれだった。

彼女には善も悪もない。

「キャシーは、目の前の、自分の障害になるものを排除しているだけだ」

シンプルな理由。

それ故に大変面倒くさい。

やれやれ、と息を吐き出したピアスは右の拳でほとんど肩をたたいた。彼女を否定するものを、少女はたたきつぶしているだけのことだ。

彼女は言っていた。

ポール・アダーニを殺す、と。

警察関係者として、ここは上層部に報告するべき事態なのだろうが、わかっていてピアスは沈黙を選び取った。

「さてどうするかな」

表だって彼女を援護するわけにもいかないし、自分が職務放棄するわけにも行かない。

悲しき公務員というやつだ。

「まあ、俺がなにかできるわけでもなし。おまえも仕事に戻れよ」

「はい」

マークは敬礼するとピアスに背中を向けた。

そう。

知っている。

自分はなにもできない。

「私を、愛して…、か」

ピアスは苦笑した。

アパートに戻ったキャシーは浴室に直行した。

汗を流しひまわり柄のワンピース・ドレスをまとった彼女は黒い髪を手早く側頭部にツインテールを結ぶ。

ネックストラップ型のドレスから露出した滑らかな肩と、白皙の肌。

二次成長が始まるまえの彼女の体は、大人の女にはない色香を醸し出す。

ボレロに腕を通した彼女はカバンと日傘を手取る。

「さあ、待ってらっしゃい」

にやりと笑った。

少女らしい出で立ちはまるでバカンスにでも向かうようだ。

ツインテールをまとめる白いシュシュ。

「あーあ…、あいつらが公務員じゃなかったらめんどくさくないの

に」

両手の指を組み合わせて大きくのびをした彼女は自室をでた。

笑う。

静かに。

自分のそばにいる男が公務員、しかも警官じゃなければ、顎でこき使えた、と思うと面倒くさいと思うのは仕方ないだろう。

「ま、いっか」

階段を下りていく彼女は灰色の景色を見下ろして、そこに歩くのかつい男たちを眺めおろす。

彼らの眼差し。

異様なものを見るような。

すさんだ街に似合わない少女の姿。

だが彼女を見る彼らの瞳は畏怖に満ちあふれている。

誰も彼女を止めることはできない。

彼女の恐ろしさは、スラムの男たちは知っていた。

少女の姿をした殺人鬼。

「へへ、お嬢さん、お出かけですかい？」

隣の部屋に暮らすアルコール中毒の男。

「一緒に来る？」

「いや、やめときますよ。お嬢さんと一緒にどっかにいくなんざ、想像するだけでぞっとしますわ」

安物のウォッカの瓶を掲げた赤い鼻の男は酔いどれた眼差しのままでへらへらと笑った。

「案外楽しいものが見れるかもしれないわよ？」

「いやいや、俺なんざただのアル中です。お嬢さんの役になんてたちませんって」

いってらっしゃい、と笑う彼は、キャシーの正体を知っていた。

「キャシーさん」

背後から酔いどれた男が呼びかける。

「…」

「気をつけていつてきてください」

酔いに沈んだ彼の灰色の瞳の底で光がきらめく。

「グレイシアとか言いましてたっけ？ あの子、なにか裏がありますよ」

「…わかってる」

ふらふらと歩く男の姿を視界の隅で見やっってから、彼女は再び歩き出した。

クラクションの音を上げ、自動車がひっきりなしに通り過ぎる。

日傘を差しながらゆつくりと歩く彼女の姿。

まるでこれから訪れる混乱を予兆するかのように。

穏やかな世界。

彼女らの住む世界とは違いすぎる、穏やかな優しい世界。

それらに彼女は見向きもしない。

「薄暗い穴倉に暮らしていればいいのよ…」

つぶやいた彼女はそうして駅へと向かった。

窓外に流れていく風景。

電車内に乗った少女は膝をそろえて、その膝の上に両手をのせていた。

姿だけを見れば美しい少女で、誰も殺人犯を連想しないだろう。

そもそも、伝説となるほどの殺人犯の本当の姿を知る者など、実際にはほとんどいないのだ。

知らない。

知ろうとしない。

それはどれほど愚かなことだろうか。

思いながらキャシーは失笑した。

愛らしいワンピースを着た少女は、黙り込んだままで窓の外の風景を眺めやる。

不意に携帯電話が鳴った。

「…」

相手の番号はピアスだ。

「…ピアス？」

「やあ、キャシー」

携帯電話の向こうから聞こえた声に絶句した。

完全に言葉を失ったとも言える。

「…チャン？」

相手を呼び捨てにしたのは、当然のことだが電話の向こうの相手が大嫌いだったからに他ならない。

「…お父様にむかって呼び捨てはないだろう？」

「どこのどいつがお父様よ」

キャシーは目をつり上げる。

「…君のお父様だろう？ キャシー、いやアン」

「その名前はやめて！」

電車内であることも厭わず、彼女はとっさに叫んだ。相手の声を封じる。

その名前。

「アン・チャン。それが君の名前だろう」

「わたしの名前はキャシーよ。そんな名前知らない」

言い放った彼女は、苛立たしげに親指の爪をかんだ。

「そもそもなんだってあんたがピアスの携帯電話を持っているのよ」
もったもな疑問に、チャンと呼ばれた男は朗らかに笑った。

その明朗さに腹が立つ。

「：あんたなんて大っ嫌い」
嫌いだ。

唇の中で繰り返す。

「電話越しでは、さすがの君でもわたしを殺せないだろう」

だからこそ大胆なんだろう、と内心で吐き捨てて彼女はもう一度繰り返した。

「それで、なんだってあんたがピアスの携帯を持っているのよ」
今度は語調がやや強い。

どちらにしたところで、殺し屋でもなんでもない男が、殺し屋を刺激するのは得策とは呼べない。

「：借りたんだよ、もちろん」

「ピアスになにもしてないでしょうね」

「当たり前だろう。わたしが法律をねじ曲げたところで君のような特殊な能力もない上、虜囚となったら脱獄する力もないのだからな」
ピアスはどうしたのだろう、と彼女は思う。

「ピアスは…？」

そのことにチャンは答えていない。

「答えなさい」

高圧的な彼女の言葉に、チャンは電話の向こうで苦笑した。
あくまでも彼女らしい態度。

「ピアスは横にいるよ、それにそんなに野良猫のように毛を逆立て

るもんじゃない。かわいいのに台無しだ」

どこまでも人を食った男だと、キャシーは思う。

「それで、何のようよ」

「ポール・アダーニに用事があるそうだね」

どこから漏れたのだろう。

キャシーは思った。

もっとも、ピアスとマークに話した時点でどこから漏れるのは当然のこととも言える。そんなことを考えながら、ふと思いついた可能性に、キャシーは思わず電話の通話ボタンを押し込んだ。

「：あいつだ」

依頼者のあの女だ。

ピアスとマークがばらすわけがない。それは長いつきあいでわかっている。

だとすれば可能性はたった一つ。

そして、キャシーに一般人が接触する手段がピアスかマークに連絡を取ることなのだ。

それらのことを考慮すれば、依頼者の女から情報が漏れたということ以外考えられない。

苛だらしげに携帯電話の電源を切った彼女はぎりぎりと奥歯をかみしめた。

「君は短気すぎる」

ピアスの言葉を思い出した。

「短気だってなんだっていい：」

キャシーはつぶやいた。

エディ・チャンと言う名の男。

大嫌いだ、と彼女は思う。

スラムで生きるために犯罪を犯し、生きてきた彼女のまえに突然現れたあの男は、突然、自分が父親だと名乗った。

それが気に入らないことのひとつだった。

そして「君がかわいらしいから」とふざけたことを。

では、私の存在は何だというのだろう。見目がよくなければ生きている価値もないというのだろうか。そして、チャン家に誇ることができるのであれば生き続ける意味もないというのか…。

その真実が彼女を苛つかせた。

「ピアスとマークになにかしたらただじゃすまさないんだから…」
独語した彼女は強い眼差しを窓の外に向けた。

苛立ちから電車を破壊したい気持ちに駆られたが、それは目的地までの自分の足を奪うことにしかならず、彼女にとってなんの利益にもならないのだ。

「だいたい、ピアスもマークも使えなさすぎだわ。自分の身くらい自分で守りなさいよ」

自分とつながっている一般人、ということがどれだけ一般人にとって命取りとなるのか理解しているのかいないのか。

帰ったらとつちめてやる。

むっつりと眼差しを床に据えた彼女は、慚然としたままで舌打ちした。

思い出すのは、ピアスの声だ。

キャシー。

名前をつけたのは誰だったろう。

「君の名前は？」

尋ねられて口をついてでた。

「キャシー…」

少女は彼にそう言った。

自分の名前はキャシーだと。

まるですんなりと嘘でもつくように。

思いついた名前を言ったただけだ。

思いに沈むキャシーは、悲鳴と頭に押しつけられた鉄の感触に顔を上げた。

自分に向けられた悲鳴。

正確には、悲鳴は自分に向けられたものではない。

自分の頭に銃口を押しつける男に向けられたものだ。

外見上は驚いたような顔のままで、キャシーはぎこちなく首を回す。

「動くな！」

「な、に…？」

そもそものなんだろう。

この状況は。

列車に乗っていて、目的地への道中で銃口を押しつけられている。

大変、理不尽な状況だ。

列車ジャック、というわけではなさそうだ。

頭の中で冷静に状況を整理する彼女は、男の片手にあるボストンバックを視線だけで流し見る。

要するに、強盗らしい。

自分の悪い癖だ。

考え事に没頭すると周りが見えなくなる。

ため息をついた彼女は男の顔を見上げる。

「どうして…？」

声を震わせた。

三流の強盗などにわざわざ演技するのはしゃくに障るが、とりあえず不特定多数の一般人に自分を記憶されるのは厄介だと判断した彼女は無力な子供を演じる。

「来いっ！」

二の腕を捕まれて彼女は小さく悲鳴を上げた。

この馬鹿力。

内心で悪態をついてからキャシーは引きずられるまま歩き出す。とっさにカバンと日傘を胸に抱えた彼女は面食らっていた。

「こっちに来るな！ 来やがったらこのガキを殺すぞ！」

ひげ面の、ひどい悪臭のする男だ。

面倒くさいな、とキャシーは思った。

車両の隅に追いやられて少女は「きゃっ」と悲鳴を上げる。向け

られた銃口に怯える振りをする。

そうなるや強盗らしい男に向かつて拳銃を構えているのは警察かなにかだろう。

もしかしたら多少は銃を扱える一般人かもしれない。

どちらにしろ、自分を人質に取った強盗の男も、その強盗に拳銃を向ける男も、キャシーにしてみればはた迷惑なことこの上ない。

しかも、怯えた振りをしなければならぬことがさらに面倒くさい。こんなにギャラリーがいなければ簡単に殺せるのに。

再三、ため息をついたキャシーはそうして強盗に対して銃を向ける男の動向をうかがった。

そんな彼女の意識に、ふとなにかが引かかった。

鋭い眼差しを感じる。

しかし、彼女を盾にする強盗の男は気がついていない様子だった。鋭く研ぎ澄まされた意識。

まるで魂を削っているようなそれ。

キャシーが動いたのは、その意識が敏感に反応した瞬間だった。

銃声と同時に足をもつれさせるように飛び出した彼女のツインテールの片方のシュシュがちぎれた。

彼女は正確に意識を読む。

強盗の男の銃弾が彼女のシュシュをちぎったように見えただろう。そして、ほぼ時を同じくして別の銃声が響いた。

重い弾丸が飛ぶ。

その瞬間、キャシーは短く動作した。

自分の黒髪を指に巻き付けるとそのまま頭髪を一本引く抜く。混乱に紛れて頭髪が鋭く宙に浮かんだ。

わずかに弾丸よりも早く、強盗の男の額から一気に脳天を貫く。頭髪一本と、銃弾とどちらが早かっただろう。

床に倒れ込むような形になったキャシーは、強盗を追いかけていたらしい青年の腕に抱き起こされた。

「…大丈夫か？」

「は、い…」

面倒くさい…。

キャシーは小さく舌打ちした。

「追いかけてきたら、君を人質にされて焦ったよ」

「…怖かった」

焦ったのはこっちだ。

いきなり巻き込まれたのだから。

キャシーは男の腕の中で力を抜いて床に転がった日傘を引き寄せた。

「怖い思いをさせてすまなかった」

怖い思いですんでいれば警察いらないわよ。青年の言葉にいちいち突っ込みをいれつつ彼女は座っていた席へと戻る。

強盗を撃ち殺した男たちによって一切は始末されたが、彼女が行ったことはとりあえず露見しなかったらしい。

大して怖くなどなかったが、怯えたふりをしなければいけないことは彼女なりに面倒くさいことだ。

「本当に、君を巻き込んで申し訳なかった」

男の声に少女は顔を上げる。

「…いえ、大丈夫です…」

「お詫びと言ってはなんだが、俺は警官だ。困ったことがあったらいつでも連絡してくれれば力になる」

名刺を差しだした男の似非紳士っぷりに彼女は、思わず肩を落とした。

傍目には、人質に取られ銃を突きつけられ、自分に向けて銃を撃たれた子供だ。ほっとしたあまりに力が抜けたようにも見えたかもしれないが、もちろん、そんな理由で彼女が肩を落としたわけではなかった。

「…ありがとう」

また警察か。

ぶすくれた彼女は受け取った名刺をカバンにしまった。

しかもご丁寧にとなりに座って話しかけてくる。
すばらしく面倒な状況だ。

「…君は不思議な子だね」

「え？」

告げられて彼女は男の顔を見上げた。

ハニーブロンドの人好きのする青年。優しい笑顔。

そういえば、初めて会ったときのマークとピアスもこんな笑顔を
たたえていたことを思い出した。

「警官ってこんなのはっかり」

口の中で声もなくつぶやいた彼女は、とりあえず目をぱちくりと
瞬かせる。

「君の目は、とても冷静に見える」

「…そんなこと」

そんなことはない。

口ごもってつぶやいた彼女に、彼は笑う。

「…うん、普通の女の子が銃を突きつけられて冷静でいられるわけ
がないのに。こんなことを思うなんておかしいな」

勝手に自分のことを語る男に適当に相づちを打つ彼女は流れてい
く郊外の風景を見やっていた。

いつまでこの男の話は続くのだろう。

内心うんざりとしたものを捨てきれないまま、彼女は何度目かの
ため息をついた。

「とにかく、君を巻き込んでしまっただけに申し訳なかった」

勝手に話して、勝手に納得したその男はやがて到着した駅で降り
ていったが、そうしてやっと肩の力を抜いた彼女は、男の意
識に自分のことが刻み込まれていないかだけが心配の種だった。

ともかく。

派手に目立つことだけは避けたい。

似たような姿で、派手で目立つ存在がいればこそ彼女の存在がそ
の影に隠れていることができるのだが、キャシーとしては「面倒な

ことが大嫌い」なだけであり、余分な労力の消費を避けたかっただけである。

「さて、私もそろそろ行動を開始しないとね」

目的の駅についた彼女は相変わらず日傘をさして歩き出す。

とりあえず余分な事件に巻き込まれて目立ってしまったのは誤算だったが、先ほどの事件は「巻き込まれた」だけであって自分が引き起こしたことはないため、全くの不慮の事故でしかなかったわけである。

＊

レインは目を上げた。

彼女を陥れた者たちは死んだというのに。

苛つく心がおさまらない。

彼女は陥れられたのだ。

「死天使……」

そう呼ばれることになった娘。

「いっそ、私を責めてくれれば楽だったろうに……」

娘自身も、娘の父親も、彼を咎めなかったこと。

それが、彼自身を追い詰める。

追い詰められた。

「……おじさま」

声に我に返った。

「やあ、シン」

「お疲れですか？」

問いかける娘に、レインはほほえむ。

「……この程度で疲れるほどやわじゃない。それよりシンこそ疲れてはいないか？」

その言葉に、娘は苦笑した。

「わたしは大丈夫です」

娘の手を取ってその甲に口づけた彼に、臣は音もなく歩くと、促されたソファに腰を下ろした。

「おじさま？ わたしを呼んだのはどんなご用件ですか？」

「この間の報告を聞きたくてね」

「：それはCIAとして？ それともおじさま個人として？」

左の人差し指を唇にあてながら首をかしげた。

フレアースカートのラインが綺麗な上質のジャンパースカートにレースの縁取りがされた白いブラウスを着ている。

どこからどう見ても彼女は戦闘態勢にはいつていないが、彼女が得意なものは武術だけではない。

素手でもかなりの戦闘力を誇る裏社会の一員であることは、バート・レインはよく知っていた。

「そうだね、CIA、と言いたいところだが、今の私にとっては個人として、だね。シンが怪我をしなかったのが心配なだけだからね」

そう。

彼女が心配じゃなければそんなこと聞く必要がない。

「ですけど、おじさま。おじさまにはわたしのことなんて聞くなんて、おじさまの評価が悪くなるんじゃないやありませんの？」

心配げな彼女の瞳にレインは笑った。

「なに、心配はいらない。わたしが元々シンのボディガードだったことは周知の事実だ。今さら、私がシンと会っていたところで知己との再会くらいにしか思われんさ。もっとも、監視はつくがね」

「そうですね」

ちらりと窓外の黒い車に視線を投げかけた彼女は、にっこりと笑うとその車に向かって手を振った。

日本の資産家、綾瀬家の娘と、CIAにして元彼女のボディガードのバート・レインが接触するということは、裏を返せば公人と犯罪者が接触するようなものだが、バート・レインにはそのあたりに公人としての自覚が薄めであったし、綾瀬臣は綾瀬家から確実

に守られていたため、なんの根拠もなしに彼女をとらえることなど事実上不可能なのだ。

「…しかし、随分御気楽な身分だ」

くすくすと笑うレインに、臣は小首をかしげた。

「ですけど、わたし、普段はそんなに法律違反はしておりませんわ」

「知っているよ、だから、君には誰も手をだせない」

それこそが彼女の強み。

彼女は基本的に善良な一般市民であるから、法律違反はない。

もちろん正当な理由がなければ彼女は殺人に手を染めることもない。

「…わかっているよ」

「…おじさま」

自分に言い聞かせるようにつぶやいた彼に、臣はそつとレインの手に自分の細い手をそつと重ね合わせた。

「おじさまはまだあのことを気にされて…？」

「…当然だ。私が君を守れていれば、君は犯罪者などにはならなかったのだから…」

「おじさま…」

長い睫毛を伏せた彼女は無言でかぶりを振る。

「おじさまが悪いわけじゃありません…」

自分が弱かったからいけないのだ。

自分の判断の甘さが呼び込んだ事件なのだ。

「わたしは、おじさまに感謝しているんです」

「感謝…？」

「ええ、おじさまがいなかったら、わたしは日本に帰ることもできませんでしたもの…」

「そう言ってくれると、救われる…」

優しい彼女の微笑。

そうして、彼女はソファに座り直した。

「依頼を受けたんです」

「…依頼？」

「きっとおじさまが依頼した、マジックボムの件に関わることなんでしょうが、おそらく、アルベルト・ウィーバーはマジックボムとイーサーを陥れるために、マジックボムのそばにいるレオナルドを利用したのだと思われます」

短く事態を分析した彼女の言葉に、レインは「ふむ」と相づちを打った。

「…そして、わたしの友人のマジックボムはアルベルト・ウィーバーの手の者に殺されかけました」

「それでイーサーがシンにアルベルト・ウィーバーの始末を依頼した、とそういうことか？」

「そういうことになります」

イーサーは、彼が大切にするマジックボムを貶められたことに激怒した。

「…わたしは、CIAのために依頼を受けたわけでもイーサーのために依頼を受けたわけでもありません」

きっぱりと言い放つ。

「マジックボムのために…？」

「はい」

マジックボムのために彼女は刀を振るった。

ただそれだけのことだ。

「おじさまは、わたしを怒りますか？」

「…いや、あいつが麻薬組織とつながっていたことは後の内部調査でも判明した。シンが始末してくれたおかげでこちらも手を汚さずにすんだ。感謝している」

頭を下げたレインに彼女は慌てたように、かつてのボディガードの男の肩をおしとどめた。

「やめてください…。おじさまがわたしなんかには頭を下げる必要なんてないんです」

そう。

自分は犯罪者だ。

綾瀬家の跡取りであるという以前に、自分は犯罪者でしかないのだ。

「ところで、タカサキは元気かね？」

「ええ、相変わらず元気ですわ」

「あの男は銃の腕が昔より精度があがったようだね」

高崎とレインは良いライバルのようなものだった。

「おじさまだって相変わらずとお聞きしています」

「いやいや、タカサキほどじゃない。わたしの銃の腕は今のタカサキと比べられるようなものじゃない」

苦笑した彼に、娘は頬をゆるめた。

バート・レインは変わらない。

彼も、彼女を愛してくれる存在の一人だ。

「…おじさま」

彼を呼んだ臣に、レインは顔を上げる。

「…おじさま、どうか、わたしのためにもう贖罪はされなくてください。もうそんなことはやめてください」

自分のために、贖罪をしないでほしいと、彼女は言う。

「私は、君を守れなかったんだ」

「そんなことありません。わたしはこうして生きています」

自分の胸に手のひらをあてて臣は告げる。

それだけで充分だと。

自分は生きているのだ。

そしてその事件を契機に、彼女は「死天使」と呼ばれ、恐れられる存在となったのだということを。

「死天使、許してくれ…」

言いながら顔を覆ったレインに綾瀬臣は眉をひそめたまま無言で左右に首を振った。

「おじさま…」

死天使と呼ばれた娘は大柄な男の体をそっと抱きしめた。

もう、そんなことはとつくに許しているというのに、彼の中からは後悔の念が消えない。

「わたしは、おじさまが大好きですわ」

そう言って臣はほほえんだ。

ところで君は知っているかい？

そう告げられて臣は首をかしげた。

「知っている…？」

なにをですか？

彼女が問いかければ、レインは一枚の写真を示した。

「これだ」

「…これは、マジックボム？」

「そうだ。どうしてこんな写真が撮られたのかは不明だが、これが本当にデータが撮影者の手元に会ったとしたら厄介なことになる」

中東のどこかの国だろう。

赤いドレスを着た小さな子供と、迷彩服に短機関銃を持った屈強な男。

その写真を手にとってしげしげと見つめた彼女はかすかに首をかしげながら自分の知識を探った。

「でも、マジックボムがこのことに気がついてなかったとは思えませんが…」

「確かにな」

彼女は勘が良い。

気がついてないはずがない。

そうであるならば、わざわざこんな写真を撮影することを許したとすれば、どこにどんな意図があったのだろうか。

マジックボムはそれなりに計算をして行動している。

若干、短気なことが玉に瑕ではあるが、それを補ってあまりあるほど彼女は強く、なにより圧倒的だった。

綾瀬臣にしろ、マジックボムにしろ、「そう」だ。

彼女らは圧倒的であればこそ「許され」る。

世間はそれを不公平だと言うかもしれないが、そもそも世界の心理とは不公平なものなのだ。

臣は恵まれていたからこそ、れを知っていたが知っていたからこそ、彼女は世界の理不尽さを理解していた。

「なにかの脅しのつもりなんでしょうか…」

「さて」

送ってきたのは日本人だしな。

肩をすくめたレインに、臣は考え込む。

「わたしもこの件は探りをいれてみます。戦場に出る日本人のカメラマンなんてそうそういないと思いますし…。」

「頼んで良いかな？　まあ、こちらに関係のないことだったら報告の必要もない」

「わかりました」

写真を手にとるとカバンの中にしまった彼女はスカートの裾をつまんでバート・レインに会釈をした。

「いつか、もう一度君のボディガードに戻れたらと、そう思うことがあるよ」

ニコニコと笑う彼に、臣は照れたように微笑した。

「はい、そのときはお願いします」

彼は彼女を娘のように愛していたし、彼女も彼を大切に感じていた。

＊

「ピース！」

怒鳴りつけた。

電話に向かって。

「どうしてチャンなんか電話貸したの！」

「どうしてって…、貸してほしいと言われたからじゃないか…」

相手の間抜けにもとれる言葉に、キャシーはむっつりと眉間を寄せる。

「…だいたい、あんた、わたしがあいつを嫌ってるってしってるのに、嫌がらせのつもり!」

怒鳴りつけるキャシーの言葉に、やれやれとピアスは電話の向こうでため息をついた。

「あんまりかりかり怒るな。君に危害が加えられる訳じゃなさそうだったから連絡をつけたままだ。そもそも、君は隠し事をされるのがとても嫌いだろ」

「…そりゃそうだけど」

「俺は君を愛してるし、君が大好きだ。だから俺のことは信用してほしい」

どうしてこんなに高飛車でつんつんした子供を愛することができるのか、自分でも不思議に思うことがある。

彼女の罵倒が理不尽なこともわかっているが、彼女が愛しいことには変わりがないのだ。

「…本当に、好き?」

少女の言葉が和らいだ。

「もちろんだとも」

愛している…。

愛していなければ心配などしない。

「ピアス…」

「わたしが君を心配していることを、君はわかっているだろうが、あまり無茶はしないほしい」

「わかった」

彼女はなにやら納得して電話を切った。

いつもピアスとマークは心配してくれる。

それがスラム育ちのキャシーには心地よかった。

誰も愛してくれないと思っていた。

誰も愛してくれない自分を、補導したピアスは心から心配してく

れたこと。

「…誰よりも、好きよ…」

彼女はほほえんで日傘をさすと歩き出した。

彼女は床に座っていた。

膝を抱えて、虚ろな眼差しで。

「…君は、どうして…？」

彼女の周りには人間の死骸が転がっていた。

血の海の真ん中で彼女は虚ろな瞳のままで歌を歌っていた。

「おなかすいたの…」

ぽつりと少女がつぶやいた。

「…？」

痩せた小さな子供はのろりと顔を上げて首をかしげた。

「…おなかすいたの」

同じ言葉を繰り返した少女はつぶやいてから抱えた膝に顔を埋めた。

「おなかすいたよう」

虐殺現場に、残された子供かと最初は思われた。

空腹を訴える子供を警察署で保護し、パンとココアを与えると少女はやっと落ち着いた様子だった。

「…もう大丈夫だ」

「…？」

首をかしげた少女はキャシーと名乗った。

小さな子供。

少女は警察官からもらったパンに食いつきながらあっさりと自分のやったことを告白した。

「おなかすいたから、わたしが殺したの」

ニコニコと上機嫌に笑った彼女に、当時のピアスはぞっとした。彼女はソシオパスだった。

社会病質者。

「おじさんは怒らない？」

やせ細った子供。

ピアスは彼女にぞっとしたが、それ以上になにかの絆を感じた。

「：おなががすいたら、人を殺すまえに俺のところにおいで」

「うん！」

彼女は人を殺したくて殺しているわけではない。

そもそも、どうして自覚もないまま殺人を犯した小学生にもなっていないだろう子供を逮捕することができたのだろうか。

彼女が人を殺すために、殺したわけではないことはわかっていた。なにより、彼女が殺したのはスラムのチンピラだ。

「おなかすいていたのに、おじさんたちがうるさかったの」
だから黙らせたのだ、と彼女は告げた。

「：キャシー、いいかい？ このことを知っているのは俺だけだ。誰にも殺したことを言うてはいけない。わかったね？」

犯罪を告白してはならない。

彼は少女にそう告げた。

「：どうして？」

「どうしても、だ。そうしなければ君はたくさん大人のたちから狙われ、またおなががすいているのにたくさんうるさいことを言うからね。うるさくされたから黙らせたんだろう？」

「：うん」

合点がいけない様子の少女に根気強く言い聞かせるピアスに、やとしてから少女はにこりと笑った。

「わかった！ 言わない！」

「それとさっきも言ったけどおなががすいたらここへおいで」
「うん」

たくさんのパンを抱えてがつついていっている様子はほほえましいようなかわいらしさを感じた。

それが出会いだった。

「…ピアス、ピアス」

そんな出会いからどれくらいたっていからか、ピアスがスラムで麻薬組織の下っ端と銃撃戦になったときのことだった。

「…ピアス！　しっかりしてよ！」

防弾チョッキを着ていたため、マグナム弾を食らったが失神しただけですんだピアスの鼓膜を少女の怒鳴り声がたたいた。

「う…」

「ピアス、あんたなにしてんの！？」

「…キャシー？」

「…キャシー？　じゃないわよ！　このおたんこなす！」

彼女は思いきりピアスの頬をたたいた。

「怪我はないみたいね」

立ち上がった彼女は腰に両手をあててピアスを見下ろしたが、やしてから彼に手を伸ばした。

「ほら、立ちなさいよ」

いつまでそんなところで寝てるの。

少女に腕を引き上げられて、彼は体を起こす。

キャシーはそう続けて、あたりを見回した。

背中まで伸ばした長い黒髪は絹糸のように柔らかだ。

「ねえ、あんたの仲間ってあれ？」

指さした先の血だまり。

ピアスは絶句した。

彼と共に銃撃戦を繰り広げた仲間の警察官がそこに四人横たわっていた。

「殉職なんてするだけ無駄なのに」

ぼそりと告げた彼女の言葉には感情がない。

しかし、そのことを咎めることがどれほど無意味なことか、ピアスにはわかっていたからそこにはあえて言及しない。

「あいつら、まだ残ってるけど、どうするつもり？」

あんた、弾もないみたいじゃない。

彼女は冷静に告げて彼のそばに転がっている支給品の拳銃をつま先で蹴り飛ばした。

「…どうするかな」

このままでは命はないだろう。

「昔のさ、パンのお礼しとく」

彼女は言いながら足元に転がる革靴をひろうと路地に向けて投げ込んだ。

「どれくらい寝てた？」

「さあ？　銃撃戦がはじまって二十分くらいでわたしここにきたからそれくらいじゃないの？」

よく知らない。

肩をすくめた彼女は薄い唇に髪の毛を二本くわえた。

「さて、…殺人はだめとか無粋なのはなしよ？」

彼女は投げた革靴に向かって射撃の音がはじまった。

「…なにを？」

なにをはじめるんだ、と彼が言いかけたとき。

彼女はにたりと笑った。

彼女は丸腰だ。

少なくともピウスにはそう見えた。

ゆっくりと歩き出す。

「なんだ、ガキか」

口汚い罵り声に、彼女は冷笑した。

「ピウスを殺そうとして、あんたたち許さないんだからね」

おそらくこの街の人間ではない。

街に住むチンピラであれば彼女の姿は知っていたし、彼女がでてきたことで身の危険を感じたはずだ。

「…うるせえ！　ガキ！　死にたくなければさっさとサツを渡せ！」

「やだって言っただけの音が聞こえないの？　カス」

ゆっくりと歩く。

静かな威圧感に、ピアスは気がついていた。
なにをするつもりなのか。

そう思った矢先。

なにかが宙を舞った。

同時に男たちの首から血しぶきが上がる。

「うるさい！」

なにをしたのかと思う間もなかった。

首を切られた男たちもそう思っただろう。

頸動脈をなにかによって断ち切られたのだ。

一瞬で全てのチンピラを殺した彼女に、ピアスは呆然とした。

そう…。

彼女はこうして人を殺していたのだろう。

「…どうやったんだ？」

「…あいつら、ピアスを殺す気満々だったじゃない」

だから殺したのだ、とあっさり告げる。

どうやって殺したのか、という彼の言葉に少女は最後に倒れた男

のそばから黒い何かをつまみ上げた。

ひどく細いそれ…。

「髪？」

「そう」

私は自分の意志で髪を自在に操れる。

「念動力ってやつね」

「…超能力者？」

「そんなに大した力じゃないわ。小さいものしか操れない」

ただし、そのスピードは人間の視力ではとらえられないほど速い。

「わたしは殺せるの…」

「キャシー…」

人殺しをさせたくなかった。

ピアスは下唇をかみしめた。

「…ごめん」

ニコニコと笑っている少女を抱きしめた。

「ごめん…」

小さな体を抱きしめた。

そんなことをさせたかったわけではないのに。

ピアスの命を守るために彼女は人殺しを行った。その事実が、ピアスを悔やませた。

こんなことをさせたかったわけではなかったというのに。

名前を呼ばれたような気がして、ピアスは顔の上に乗せていた雑誌を上げた。

「：キャシー？」

気のせいかな…。

そういえば、彼女はポール・アダーニを殺しに行くと言っていた。

「いつも俺は無力だな」

苦笑う。

彼女を守ることなどできないのだ。

彼女は自由で、自分は公務に縛られている。

やむを得ないことだ。

ピアス、わたしのことを好きになって…。

彼女の言葉を思い出して、そうして彼は自分の顔の上に雑誌を乗せ直してから目を閉じた。

キャシーは以前聞いたことがあった。

彼女と同じように、少女の姿の殺し屋がいるという。

実際の年齢は不明、その詳細も不明。

ただ風の噂で、彼女はキャシーと同じように少女だと聞いた。

日傘をさしたキャシーは、背中に感じる視線を受け止めたまま歩き出す。

彼女は良くも悪くも一匹狼だ。彼女のそばにいる男たちが、いわゆる一般人では仕方のないことだろう。

そうであるから彼女は、たったひとりで行動する。

時に目立つこともあるが、大概の場合はほとんど目立たずに行動

することができるのは、子供の利点である。

しかし、今、背中に感じている違和感は普段感じるそれとは異なる。「かわいい女の子」という世間一般的な評価による視線でないことは明らかだった。

短いコンパスながら、背筋を正したその歩き方は美しい。

先ほどの銃撃を受けたために、一本になってしまったお気に入り
のシュシュでやむをえず、後頭部で長い黒い髪を一つに束ねた少女
は、結んだ根本をシュシュで飾った。

「…なんだって言うのかしら」

ぼそりとつぶやく。

彼女は振り返った。

子供ながらの鋭い感覚。

そう見えたかもしれない。

しかし、彼女の感覚はいわゆる勘ではない。

言ってみるならば、超感覚だ。

桎梏の瞳があたりを見回した。

「…なんなの？」

突き放したような彼女の言葉に、空気が揺れた。

ざわりと、空気が震える。

「おまえの知己か？」

目の前に現れたがたいの良い男。

スーツ姿の。

おそろく軍人だ。

なんだってこんなところに、というか、自分の目の前にいるのか。

「あんた誰？」

修羅場の数々をくぐり抜けてきた男だろう。

「…貴様の知己かと聞いているんだ」

丁寧な言葉使いなのかと思えば、どこまでも上から目線の言葉使
いに、キャシーは眉をつり上げた。

「…」

男が車の助手席から引きずり出した中年の男。

ひよろりとした、当然戦闘向きとは言えないひげ面の白人男性。いつも泥酔していた同じアパートメントの男。

「…ベルティ？」

「手荒にしないと白状しなかったからな。無理矢理聞き出した」

「ベルティになにをしたの？」

低く威嚇する彼女の言葉に大男が笑った。

「心配か？ サイコパス」

苛立つものを隠せない。

そもそもキャシーをサイコパスと呼ぶなら、無力な情報屋を殺す寸前までいたぶる男自身もサイコパスではないのだろうか。

そんなことを思う。

「言っておくけど、わたしはまともだなんて一言だって言ったことないわよ」

冷ややかに告げる。

そう。

自分は正常ではない。

そんなことは最初からわかっている。

「そうだな、貴様は自分のことをよく知っている」

だから、彼女は強い。

「なに？ あんたとわたしとどっちが強いか競争でもしようって言うの？」

尋ねた彼女に、軍人らしき男は鼻を鳴らした。

「…まさか、そんな野暮なこととはしない」

「はあ？」

男の言葉に、キャシーは本気で横に首を曲げた。

「なに言ってるの？」

「…なんだ？」

「あんたのやったことの、どこが野暮じゃないって言うの？」

彼女は日傘を肩にもたれさせると、長い睫毛を揺らす。

愛らしい子供。

「そいつただの情報屋じゃん。あんた、知ってんでしょ？」

「情報屋だろうが、殺し屋だろうが同じ裏社会だ。犯罪者である事実には変わりがない」

「なによ、ベルティは捕まって抵抗するようなたまじゃないわ」

飲んだくれだが、頭の良い情報屋だ。

機転もきき、無駄な悪あがきはしない男。

生き残る手段を徹底して探すだろう。

そのベルティが逃げる間もなくぼろぼろにされたのだ。

それがどういうことか。

キャシーにはわからないわけではない。

「ベルティと言うのか」

「なに白々しいこと言ってるのよ」

「…」

男はくつくつと笑った。

頭の回転が速く、機転が利く。

そして恐ろしく鼻のきく女だ。

サイコパス…。

「わたしが邪魔なら、殺せばいいでしょ」

「邪魔なわけじゃない」

「じゃあ、なに？ ポール・アダーニに依頼された？」

「違うな。確かに依頼は受けた。だが、面倒だから断った」

「…だから何が言いたいのよ？」

男の言葉が気味悪くて、キャシーは眉をひそめる。

「興味がある」

男は言い放った。

興味があると、彼は彼女に言った。

「へえ」

「なにをしようか」

なにやら突拍子もない言葉に、彼女は思わず肩を落とした。

：やっぱりこいつ変だ。

「結局、わたしになんの用なの？」

「貴様を観察したいただけ。別になにもするつもりがなかったのに、こいつが怪しがつて口を割らなかつたからちよつと痛い目にあつてもらつただけだ」

「そりゃね」

彼女の正体を知る者はほとんどいない。だからこそ、知られてはならないのだ。

彼は核心を突いた言葉を使わない。

それが無意味だと知っているからだ。

「邪魔したら殺す」

淡々と彼女が告げた。

「邪魔はしない」

「行為だけじゃないわよ」

「わかつてるさ」

にやりと男は彼女に笑つた。

「…車乗せて」

「いいぜ、連れて行つてやる。ポール・アダーニのところまでな」
「ベルティには謝っておきなさいよ」

氣を失っているベルティを尻目に、彼女は男の車に乗り込んだ。

「後でごめんなさい代でも払つておくさ」

「あーそう」

「腕の良い情報屋らしいな。だが身体能力ゼロじゃ不安にならんのか？」

「不安になるような間抜けじゃない」

あんたみたいな奴が強引にねじり上げない限り。

表社会では、ただの飲んだくれで通る男だ。

彼女の言葉に男は肩をすくめて見せた。

＊

ねえ。

「：聞こえてるでしょう」

彼女はガラス張りの部屋の中にいる子供に声をかける。

「聞こえているでしょう？ エレーネ」

「ガーゴイル：」

水色の瞳を少女が上げた。

美しいブロンドの巻き毛。

「ガーゴイル、わたしはいつここを出れるの？」

「：もっとエレーネが賢くなったらここを出られるわ」

ガーゴイルと呼ばれた女はにこやかにほほえんで、ブロンドの少女を見つめた。

「ガーゴイル、わたしがもっと賢くなればいいの？」

「そうよ」

頭の中に浮かんでは消えていく数字という数字。

知識という知識。

だが、しかし。

ガーゴイルは静かに笑った。

「あなたは、天才になる才能があるのよ」

強くなれる。

強くなればいい。

何度となく頭の中で繰り返される声に、女は頭を振った。

苦しい記憶。

苦しい。

どこかへ行きたいのに、彼女には行くべき場所がない。

「：っ！」

起き上がった彼女は息の上がった胸を押さえた。

思い出すのは事故だ。

表向きは事故ということにされていた。

何度も夢に見た。

「殺さないと：」

殺さないと…。
殺して…。

車のシートでうとうとと眠る。

キャシーは重いまぶたをあげて、不意に我に返った。

「どうした？」

尋ねられて彼女は叫ぶ。

「止めて！」

「…ああ？」

「止めろって言ってるの！」

高飛車に叫んだ彼女は道に向こうを歩く日本人に目を留めた。

「…どうした？」

大変、うるさい…。

ピアスも大概こうるさいが、この男よりでしゃばらないだけましだ。

「あの男、知ってる？」

「あれは…、なんだっけ？ 写真屋だろ」

「なにそれ、どこのフォトショップ」

冷静に突っ込んだ彼女に、軍人のような男が「ぷっ」と声を出して吹き出した。

「…冷静に冗談言うのがかわいいな」

「きもい…」

「なんだっけ、あいつは確かフリーのカメラマンだったな」

「…あいつ、確かマジックボムの写真持ってるのよね」

「有名だな、それ」

ちよつと裏社会に詳しい者ならば誰でも知っているだろう情報。

カメラマンの佐々木がマジックボムの写真を持っている。

おそらく、マジックボム当人もそれは知っているだろうが、それを放置している意図はどこにあるのか。

「自分の顔を知られるかもしれないとか、そういう恐怖感はないの

よね、マジックボムって」

だから自由自在に動くことができる。

もしかしたら自分などよりも、よっぽどマジックボムと呼ばれる殺し屋のほうが大胆なのではないかとさえ思うことがある。

しかし、それを認めれば、自分が「知られることを恐れている」と取られかねない。

それが面白くなって、キャシーは舌打ちした。

「…ところでさ、あんたなんなの？」

「なについて？」

「軍人？ 特殊部隊？」

「退役軍人だ」

しかし相当な訓練を積んだ者だろう。

「不名誉除隊かなんか？」

「まさか。俺は自分でやめたんだ」

「あっそ」

「貴様くらいの体格なら、簡単にひねり潰せる」

「やってみたら？」

挑発した。

首に回された腕が締め付ける。

「…絞め殺せると思う？」

「できるかもしれないな」

「わたしは、マジックボムほどの力は持ってない。もしかしたら殺せるかもしれないわね」

殺せる。

簡単なことだ。

首を絞めればいい。

強められた指に、彼女は自分の指で引きはがそうとするがそれはかなわない。

当たり前だ。

彼女が腕力で、軍人上がりの男に勝つことなどではしない。

「殺したければ殺せばいいのよ」

「殺しやしねえよ」

彼女の指も、腕も、首も。

全てが細い。

ひねり潰せばいい…。

そんなことは簡単なことだと彼女は告げた。

車内でシートに背中を預けている少女に、男は尋ねた。

「…いつもはどうやって現場まで行っているんだ？」

尋ねられて、彼女はけだるげな瞳を上げる。

「現場って？」

問い返す。

「殺しの現場にさ」

「…ああ、そういうこと」

肩をすくめた彼女はつま先で日傘を軽く蹴飛ばした。

「…仕方ないじゃない。運転なんてできないわよ」

どこかのを外した彼女の言葉に、男は横目を流す。

大概、自分も酔狂だと思うが、彼女のほうがよっぽどおかしい。

「…そういうことじゃなくて」

経験上、この手のタイプには口ではっきり言わないと伝わらない。

「なに？」

「貴様は殺すことが楽しいんだろ？」

「はあ？」

理不尽な言葉に、彼女は眉を引き上げた。

「それにさ、その貴様ってやめてくれない？」

貴様と呼ばれて彼女は不機嫌に眉をひそめた。

一挙一動。

全てに見とれた。

子供の姿と、サイコパスのアンバランスな精神が同居している。

その美しさ。

「じゃあ、なんて呼んだらいい？」

「好きに呼べば」

そっけない彼女の言葉に、大男は鼻を鳴らした。

「そもいかなだろう」

「なんだっていいわよ。どうせ、名前なんてその人を定義するひとつに過ぎないのよ」

「定義、ね」

「：名前なんて、たかが人を識別するための記号。それ以外なにかある？」

正論だ。

「ねーな」

「でしょ」

名前など意味がないことだ。

他人が他人を認識するための単語。

「じゃ、なんて呼ぶ？」

「くだいわね」

「名前なんてどうだっていいって？　じゃ、うんちとか呼ばれたらどうすんだよ」

「：キャシー」

いやそうに眉をひそめた彼女は、男が自分の頭に伸ばした手を鋭く振り払う。

「キャシーか」

「あんた、私の名前を知らなかったの？　追っていたのに？」

いい加減にもほどがあるだろう、と視線で非難すると、男は苦笑いした。

「あんたは他人から認識されることを恐れている、だから名前も姿も残さない。そして誰の記憶にも残らない。残るのは犯罪者としての通り名カーリー」

「：たまに聞いているけど、それ、わたしだったんだ？」

「そう、あんたはカーリーと呼ばれている。何でか知ってるか？」
どうしてカーリーと呼ばれるのかと。

「カーリーって、インドの神様だっけ？　よく知らないけど」

「そう、あんたを目撃した数人が、黒髪だけを覚えてた。それでつけられた通り名、それがカーリー」

誰もあんたの姿を知らない。

誰も彼女を知らない。

だから、「カーリー」と呼ばれる。

「人の名前勝手につけるなんて悪趣味じゃない？」

「なんでもいいんだろ？」

「今度殺るときは、名前残すようにするわ」

彼女の口ぶりからすると本気らしい。

「：名前を残すって。知られてもいいのか？」

「別に」

名前など大した意味はない。

だから彼女は告げる。

「名前を知られたからって捕まる訳じゃない」

「そりゃ、あんたならなにやってもつかまらんだろうさ」

「そんなことないよ。わたしはマジックボムとは違う」

マジックボム。

彼女よりもずっと優れた殺人者。

格上の女。

「人殺すのに、上も下もないだろ」

「そうかな？　わたしよりずっとやるのがスマートだと思うけど」

淡々と語る彼女の様子に、男は苦笑した。

「マジックボムも警察がつけた名前だ。彼女の本当の名前は知られていない。あんたも知らないし、もちろん俺も知らない。そして警察の連中も彼女のことは知らないだろう」

「で、結局、わたしとあの女を比べてるの？」

「比べてはいない。ただ、あんたは、マジックボムとは違って派手じゃない。それが気になった」

殺人に自己顕示欲を感じない。

感じるのは、自己顕示欲などではなく、子供ながらのひどく原始的な欲求だけだ。

「マジックボムは派手で、圧倒的な自己主張をする。あんたにはそれが無い」

それを感じ取った。

「…ふーん」

低くつぶやくと首をかしげた。

「それであんたの足りないおつむで考えてみてどう思ったの？」

「足りないって…」

男は絶句する。

「実際足りてないでしょ？」

そんな話をしている間に、現場に到着した。

巨大なビルを見上げて、彼女はのびをする。

「じゃ、いつてくるわ」

「ひとりでもいいのか？」

「別にひとりだろうとふたりだろうと何も関係ない」

彼女は言いながらすたすたとすすんでいく。

やることは一つ。

殺すことだけだ。

公園のように広い敷地は芝生で覆われ、美しく彩られている。

「…俺も行く」

男は車から降りた。

彼女の後ろから追いかける。

「いない」

素っ気ない彼女の言葉に、そうして彼は笑った。

黒い髪が舞う。

ひらひらと。

ひまわりのワンピース。

この姿が。

その後ろ姿こそ。

インド神話における死の女神、カーリー。

誰も彼女をカーリーとは知らない。

「カーリー…」

男は口の中でつぶやいた。

「さあ、待ってなさい」

彼は彼女を見つめた。

殺人鬼。

アメリカと言わず、世界を震撼させた殺人鬼がそこにいる。

けれども、どうして彼女が殺人鬼に見えるだろう。九九パーセン

ト以上のアメリカ人が彼女の外見にだまされる。

しかし彼女の犯行はひどく稚拙だ。

稚拙だというのに、彼女の持つ圧倒的な魅力はなんだろうか。

「なんだなんだ、なんでこんなところに幼稚園児がいる！」

大音声に、少女は顔を上げた。

「…幼稚園児じゃない」

言いながら彼女はお気に入りだったはずのシュシュをあっさり投げ捨てた。

ばさりと黒髪が彼女の背中を覆う。

「派手なのがお好み？」

「いや、俺はぼいんぼいんのかわいい大人の女が好きだね」

「べったんこで悪かったわね！　じゃ、あんたはどうして私に絡んできたの？」

「興味だね」

カーリー。

「わたしはキャシー。殺したいから殺すのにっこりと笑った。」

目の前に立つ青年に、彼女はバタフライナイフを開いた。背負った小さいサイズの籠ボストンからいつの間にか取り出したのだろう。

「幼稚園児は帰れと言ったんだ！」

「私のどこが幼稚園児よ！」

激昂した彼女は開いたバタフライナイフを投げ飛ばす。綺麗な線を描いて、空間を切り裂く。

「…わたし、念動力者なのよ」
そう。

だから捨てられた。

子供は生まれた瞬間に母親を切り裂いた。

「…だからわたしは捨てられた…」

自嘲気味に笑う。

額に突き刺さったナイフは、彼女が意識を向けて投げつけたものだ。

しかし、子供の腕力で頭蓋骨を割るのは困難だ。

もんどり打って後ろに倒れた男を飛び越えた彼女は、脇に立った瞬間にその額からナイフを抜いた。

血にぬれることも厭わない。

「…刺さった瞬間だけ、わたしは考えればいいのよ」
低く笑う。

悪魔の微笑。

血に染まったカーリー。

彼女は敷地を駆け抜けた。

元々、体格は小さな子供だ。

ほとんど目立たない。

「…ね」

くすくすと笑う。

彼女にとって、殺すことは生存本能だった。
生まれ落ちた瞬間に、赤子は泣く。

泣かなければならない。

泣いた瞬間に、彼女は母親を殺したのだ。

それが彼女の存在意義だと言うかのように。

「殺せばいい…」

なにかにとりつかれたように彼女は殺す。

殺し尽くせと…。

屈託もなく笑う彼女には似てもにつかない、残酷な一面を。

裏も表も同じ。

無邪気な子供だ。

「…で、どうする？」

「ポールが待ってる」

だからこそ、サイコパス。

「サイコって言えば？」

「言わない」

男は真顔で告げた。

「あんたは人殺しが楽しいか？」

「楽しくない」

きれいじゃない。

美しくない。

多くのことを彼女は考えながら、窓を蹴破った。

たぶん、八つ当たりだろう。

廊下の向こうから走ってくる男は、拳銃を構えていた。アメリカではよくあることだ。警察ではなく、警備員だろう。

「なんで警備が銃もってんの!？」

怒鳴った彼女に、キャシーの後ろの男は肩をすくめた。

「俺が知るか」

「あんたには聞いてない」

「はいはい」

止まれ！ と声が聞こえた。

しかし、少女はとまらない。

「止まれと言われてとまる侵入者がいるっていうの？」

彼女は床を蹴った。

男に襲いかかる。

右手で相手の顔を押さえつけた彼女は一気に男を押し倒した。ふわりと舞ったワンピースのスカートに男は目を細める。

「：パンツ見えるぞ？」

しかし、彼女はそんなこと気にしない。

キャシーにはどうでもいいことなのだろう。

膝で警備員のみぞおちを押さえ込みながら、彼女はナイフを振り下ろす。

首の頸動脈を切り裂いた。

そして、その血しぶきが降りかかるまえに再び走り出す。素早い身のこなしに、男は驚嘆した。

「：いつもそんな場所で人殺してるのか？」

「格好なんてどうでもいいでしょ？」

愛らしい、姿の子供。

「：っ！」

女がいた。

ファイルを抱えた女は悲鳴を上げて尻餅をつく。

その女にキャシーは大きく振りかぶった。

手には自分の黒髪が一本あった。

「：ひっ」

「ポールはどこ？」

「な、なに？ なんなの？」

どこにいるのかと問う。

「ポール・アダーニはどこにいてるかって聞いてんの」

「…さ、三階の執務室…」

少女の剣幕に圧倒された女は、かすれた声でポール・アダーニの所在を答えた。

確かに、全力疾走してきた少女に鬼のような形相で飛びかかれれば動揺のひとつもしただろう。

「そ、ありがとう」

一瞬、黒髪が鋼のように輝いた。

まっすぐに芯を通し、ワイヤーのように女の首筋を引き裂く。

無慈悲な殺し屋。

出会う全ての人間に殺しという洗礼を与えて、キャシーは走る。

その姿はどこまでも迷いがなかった。異常的な人格と言われたところでは得ない。

普通の傭兵や殺し屋とは異なるのだと実感させられる。彼女はそんな存在だった。

彼の名前は、アシル・ブラス。

だが名前などどうでもいいと、彼は思う。

人は名前などなくても生きていけるのだ。

実際、名前を持たずに生きている者も多い。

名前など、ただの記号でしかない。

符号。

曖昧ななにかを特定するための道具。

自分自身も。

他の誰かも。

全てが曖昧で、全てが意味がない。人間の存在そのものが曖昧なのだ。

存在を定義する。

自分という人間のアイデンティティとはいったいなんなのか。

自分は何者なのか。

それを自分自身に問いかける。

「…意味がない」

全て、世界に。

反社会的だと言われればそれだけのこともかもしれないが、自分は反社会的なわけではない。少なくともそう思っていた。

彼を駆り立てるのは殺人だ。

別段、性的興奮を求めているわけではない。

しかし、彼が着目したのは、そんなことではない。

ひとりの殺人者は自己顕示欲のために犯行を行い、もうひとり自分の本能的な欲求のために犯行を行う。

一見、関連性のかけらもない彼女ら。

しかし、彼は本能で感じ取った。

「二人は似ている…」

興味を持ったのは、彼女らがどこまでも純粹だからだ。

「…美しく、純粹だ」

口の中でつぶやいた。

「…初めまして、ポール」

彼女はにっこりと笑いながら扉を開いた。

たどり着いた執務室。

「…やあ、実験体になりたくてここに来たのかい？」

「やめてよ。別にモルモットになりたいわけじゃないわ」

吐き捨てるように答えた彼女は肩をすくめた。

「カーリー。それが君の名前だと聞いた」

「それ、わたしの名前じゃないわ」

素っ気なく否定して、彼女は男を見つめた。

「君にはとてもすばらしい素質がある。君のようなすばらしい子供を投げ出す親の顔が見てみたい」

「…異端児は、許されないのよ」

彼女はわずかに顔をゆがめた。

かすかに覚えている。

生まれたばかりの記憶があるのは、異端なことだ。

それだけではない。彼女の持つ超感覚が全ての感覚を研ぎ澄まされる。

「異端ならば、生きていく権利がない」

淡々と彼女は告げる。

おぞましいほど淡々としている。

「君を調べてみたいね」

「それでセックスしたいとか言ったらぶっとばすわよ」
すばらしく物騒な言葉に、彼は笑った。

「：ポール・アダーニ」

少女が言う。

「知ってるんでしょう？」

侮蔑のように。

「わたしは、あんたの作り出したあれと同じ」

「いや、違う。君は生まれながらの天才だ」

「馬鹿言わないでよ」

天才ではない。

そんなこと知っている。

「天才って言うのはね、死天使みたいな奴のこと言うのよ」

「：死天使」

単語を繰り返す。

「生まれながらの天才に興味ない？」

「ないね。天才でありながら生まれながらの異端。君のような子供こそ恵まれているんだ」

死天使。

世間で言う死の天使と同じ意味ではない。

「彼女」と言われる人間が「死天使」と呼ばれる理由。

死の天使。

人の死を司る。

「わたしの憧れの人よ」

自分のことになど興味はないのだと、彼女は告げた。

どんな力があつたって、彼女には関係もなく興味もない。
なんの力もない、死の天使こそが彼女の羨望であり憧憬。

「君の力を解明したいと思わないのか？」

「だから、興味ないって言ってんのよ」

一刀両断した彼女にポールは、椅子から立ち上がると彼女に近づいた。

「君は解明したくないのか」

「…さわらないでよ」

指が触れる一瞬前に、彼女はその手をたたき落とした。

「…くどいって言ってんのよ。わたしは自分の力の出所にも、なんにも興味ないの」

「依頼したのは、グレイシアかい？」

グレイシア。

ブルネットの女。

「グレイシア・ミューアヘッド。ま、それが本名かすら怪しいけどね」

この手の世界に生きている人間たちはほとんどの者が戸籍上の名前を明かさない。

「それはあんたも一緒でしょ」

ポール・アダーニが彼の本名ではない。

なんでもない。

興味がない。

「こつちの世界で名前をおおっぴらに晒してるのは、死天使くらいよ」

口元をゆがめた。

微笑する。

「君はわたしを殺すのかい？」

「…それが仕事よ」

「やりがいあるかい？」

「さてね、別におもしろくないし」

自分自身を殺そうとしている犯罪者に落ち着き払っている男は、おそらく、その手の犯罪者に数多く会っているのだろう。だから御せられている。

「…馬鹿ね」

くすくすと少女が笑った。

男の指が少女の唇に触れる。

唇の隙間に指を差し入れ含ませる。

「…君は、彼女とは違う。大人の女だ」

彼女…。

誰のことだと、キャシーは瞳で尋ねた。

鈍く空気を引き裂いた金属音。

「でも、殺す」

空気を切り裂いて、ナイフが飛んだ。

男は後ろに飛び退きながらそのナイフをかわす。

「君に私が殺せると思っているのか？」

「殺すわ」

ぶちぶちと、天井からなにかが引きちぎれる音がした。

がしやんと、ひどい音をたててシャンデリアが落ちた。

キャシーは笑っていた。

キャハハハハと、笑い声をあげる。

狂った笑い。

指の間に構えた銀色のバタフライナイフが次々と壁に突き立てられた。同時に、ガラスが割れる。砕けたガラスが一息に男を襲った。

念動力者。

世間一般にはそう言われる。

サイコパスであり、超能力者。

それが彼女の正体。

彼女の戦う様子を目の当たりにして、アシルは沈黙した。

どれほどまで彼女は強いのだろう。

戦いの中で、少女は限界を超えようとしている。

少女の姿をした「それ」は自分自身の外へと行こうとしている。たたきつけられる力の波動は、アシルには見えなかったがそれは確かなものだった。彼女は彼を倒すために限界を超えようとしているのだ。

「あんたどんな訓練受けてきたのよ…」

吐き捨てたキャシーにポールは余裕とは言えないが、冷静に彼女のうち放つ攻撃をかわしていく。

「訓練というほどのものじゃない」

「ただすこしだけ君のような子供を相手しなれてただけだ」

「ソリヤゴクローサマ」

割れるガラス。

抜けていく天井。

落ちたシャンデリア。

「殺してやる」

両手に構えたナイフに、彼は低く笑った。

「そううまくはいかんよ」

＊

帰ろう…。

その場所へ。

あるべきところへ。

帰りたい…。

帰る場所など知らない…。

「…幼稚だ」

なんとでも言えればいい。

ふわりと少女はほほえんだ。

「わたしは、誰？」

自問自答したのは過去の出来事。

そもそも彼女には「過去」「未来」「現在」というくくりがない。それがどういうことなのか、彼女も彼女の周囲にいる者たちも知らない。

考える必要などなかった。

それで良かった。

「キャシー、待ちなさい。そっちに行っちゃダメ。戻ってきなさい！」

「だっておかーさん。あっちに誰がいるよ」

「誰がいてもいいの、あなたはそっちに行っちゃだめなの！」
叱られる誰かの声が聞こえる。

どうでも良い夢の中の出来事のように。

聞こえる。

波紋はさざ波のように広がっていく。

ざわざわと世界は彼女を浸食していく。

最初の場所はただのゼロだった。

なにもない、真っ白な世界の中を黒く染めていく。

もしかしたら、その最初の白の世界でさえも黒かったのかもしれない。しかし、そんなことは少女は知らない。

「：わたしはキャシー」

名前など記号でしかない。

だからなんでも良かった。

「：わたしの名前はキャシー」

そこに意味などない。

「キャシー」

名前を呼ばれてはったように顔を上げた。

「ピース：」

「顔色が悪い、どうした？」

尋ねられて彼女はかぶりを振った。

「なんでもない」

「熱でもあるんじゃないのか？」

いちいち体調を崩していたのでは、スラム街で暮らす彼女にとってお話にならないことだった。

「…平気だって言ってるでしょ」

頭を引き寄せられ額を押しつけられる。

「熱はないようだな」

「…だから」

自分は大丈夫だと…。

ピアスの心配性は警察関係者特有のものなのだろうか？

そもそも、彼のような善良な人間だけが警察であるわけではないこともキャシーは知っていたが、彼女にとってそんなことはどうでも良いことで、目の前のピアスがうっとうしいだけだ。

「病気で寝込んでたほうがあんたは安心なんじゃないの？」

「それは確かにそうだが」

そこで否定しないあたりがむかつく…。

内心で毒づいてから、彼女はピアスの顔に手を伸ばした。

左の頬をつねる。

「あんたみたいな束縛だらけの男って、絶対結婚できなさそう」

正直な感想に男は首をかしげた。

「別に、束縛だらけってわけじゃないと思うが…」

「そもそもわたしの相手をしてるってだけで、まず恋人が逃げていると思うわ」

肩をすくめた少女は、男の手に手を重ねられてそのぬくもりを振り払った。

「わたしは別に君と恋人同士であるわけじゃないし、プライベートなこととは関係ないだろう」

「…仕事馬鹿ってそればかり！」

「馬鹿って言うほうが馬鹿なんだぞ」

真顔で告げられてキャシーは心底嫌気がさしたように眉間を寄せた。

「キャシー」

「なによ」

「：君は自分を過信するな」

それは忠告だ。

大人としての。

「識ってるわ」

わかっている。

知っている。

不意に閃くように蘇った記憶に、キャシーは我に返った。

高揚していたものが冷めていく。

「殺したいんじゃないのかな？」

声に、顔をあげた。

「殺すわ」

そこに彼女の意志はない。

依頼。

仕事。

それだけだ。

「殺してやる：」

黒髪を引き抜いた。

ナイフ以上の彼女の武器だ。

鋼鉄の糸のように鋭く全てを貫く。

「：君は念動力者か」

「だったらなに？」

男はにやりと笑う。

「あの子とは違うね」

「あんたの都合も、グレイシアの都合も知ったことじゃない」

生きるために殺すのだと。

彼女は言う。

生きることには彼女は貪欲だ。

生きたいと、彼女は願う。

「：グレイシア、か」

あの女なら俺を殺そうとするのも頷ける…。

独白にしてはやや大きいつぶやきに、少女は瞳をわずかに陰しくしたが、それ以上は語らない。

ポール・アダーニの殺害。

キャシーを縛り付けるものはビジネスとしてに契約だけだ。ただそれだけのこと。

少女は軽く頭を振ると男めがけて頭髪を投げつけた。投げるだけでいい。

ナイフと違って重量はない。

あとは意識を傾けるだけだ。

「君は賢明だ」

おかしい、とキャシーは思った。

男は「普通の」人間のはずだ。

そして自分は「普通」からかけ離れている。

異常な存在。

そうであるはずだというのに、その場の異常に少女は気がついた。否、少女の姿をしたそれは気がついてしまった。

「ちょっと!」

そこでぼーっとしてる奴!

背後で観戦している男に言い放つ。

「あ?」

「あ?　　じゃないわよ!」

「だからなんだよ」

少女は陰しい瞳のままポール・アダーニを見据えている。

「…五秒したらその窓から逃げるわよ」
危機感。

「殺すんじゃないのか?」

「…金は返せばいい」

素っ気なくつぶやいた彼女は口の中でカウントする。
きっかり五秒後。

少女は破れた窓から飛び出した。

そこが三階であるということも彼女にはどうでも良かったらしい。アシルもそれに続く。

同時に爆発音が響いた。

黙っていれば美少女なのに…。

アシル・ブラスはそんなことを考える。

「あんた、名前は？」

「…言ってなかったか？」

「聞いてないわ」

「アシルだ。アシル・ブラス」

「そっ」

言いながら炎上するビルの三階を見つめた。

「…あーあ。ギョラ返さないかね」

「律儀なんだな」

「信用問題になるからね」

「相手がいらなと言ったら？」

矢継ぎ早に尋ねられてキャシーはうさんくさげに目線をやってから息を吐き出した。

「…わたし、別に生活に困ってないの」

「あー、そう」

キャシーは顎に手を当てたまままで考え込んだ。

結局殺せなかった、と考える。

「追ってでも殺すべきだと思う？」

問いかけた少女に、アシルは炎を吐き出す部屋を見つめている。

「あんたの奇っ怪な能力で殺せないくらいならいったん引き上げるべきじゃねーの？」

「なんだ、結構まともなこと言うのね」

「あんたよりはなんぼかましなつもりだがね」

冷ややかに反応されて、キャシーは首筋をなでてからため息をついた。

それはそう。

自分は正常ではないということ。

「まったくだわね」

それを実感させられた。

普通な存在などではない。

「さて、帰ろう…」

燃え上がるビル。

鳴り響くサイレン。

少女は背中を向けて歩き出す。

その後ろに、アシルは従うように歩き出した。

外見上はともかく。

彼女は彼より上の存在だった。

「車乗るか？」

「…そうね」

血などほとんどついていないが、事件現場の近くで血にぬれた子供が歩いているとなれば問題だ。

心配されるだけだろうが、記憶に残ることはあまり好ましくない。

おとなしくアシルの車に乗り込んだキャシーはふとベルティを思い出した。

「…そういえばベルティはどうしたんだろ」

「さあな」

別に殺したわけじゃないし。

つぶやいたアシルに、キャシーは首をすくめた。

「キャシー」

運転席に乗り込んだ男が少女に血にぬれたバタフライナイフを二本差し出した。

「回収しておいた」

「…ありがと」

受け取ったナイフをハンカチで拭いてから刃をしまう。

ぱちんと閉じたナイフをバスケットにしまった彼女は、ハンカチ

を丸めて車内にあったゴミ袋に放り込んだ。

「：見つかったら俺が疑われるじゃねーか」

「そんなのわたしの知ったことじゃないわ」

突き放した彼女は冷笑した。

裏社会の殺人者。

犯罪者。

そんな人間が他人に気を遣ったところでどうだというのだろう。

「だいじょぶよ、見つからない」

それはキャシーの鋭い勘が告げている。

「まー、あんたがそう言うならそうなんだろうな」

「わたし、鼻はきくのよ」

「そうみたいだな」

バスケットを後部座席に放り込んだ彼女はフロントガラスの向こうを見つめたままで黙り込む。

話をする必要などないと言わんばかりの彼女の態度に、男は苦く笑った。

やがて眠りについた子供の姿の殺人鬼に、アシルは口元をゆるめた。

彼女はかわいいらしい。

「：かわいいな」

まさか子供の姿の殺人鬼がいるとは誰も思わない。

彼女は、愛らしい。

「しかし、全く…」

彼女の傍らにある男たち。

羨望を感じる。

サイコパスでありながら、彼女は人を引きつける人を引きつける魅力があるのだと…。

とてつもない憧憬。

「あんたにとって殺人ってなんなんだろうな」
殺す者と、殺される者。

彼は独白してから前方を見つめた。

時には運命をもてあそぶほど…。

ひやりとした空気を感じて、彼は睫毛を瞬かせた。

冷たい空気を感じても、恐ろしいほどの薄着で。

彼女は笑う。

「あんたを愛する男の気持ちがなんかちょっとだけわかった気がするよ」

愛する。

愛してる…？

一目惚れだと言ったら笑われるだろうか。

彼はそうして頬をゆるめた。

時は巡っていく。

人の思いとは関わりを持たず。

無慈悲なほどに平等に。

誰にも、彼にも…。

同じように…。

第三章 Serial killer 1

レオナルドは少女を空港で出迎えた。

「…お帰り」

「どっちが」

無然とした彼女の言葉に、青年は困惑して首をかしげた。

「心配かけんじゃないわよ、くそ坊主」

アリッサの言葉に青年はほほえむ。

「心配してくれたんだ？」

「…してない」

迷惑かけられるのがいやだっただけ。

「その割には重傷だな」

「そりゃ、この世界にいれば怪我の一つや二つするでしょ」

怪我の一つや二つ、というレベルの怪我ではないような気もしたがレオナルドは突っ込まない。

どうせ逆ギレされるだけだ。

「怪我はもう大丈夫なのか？」

レオナルドの言葉に、アリッサは視線だけを引き上げた。

「レオンも怪我はどうなの」

「俺はアリサほどぼこぼこにされてない」

「…別にぼこぼこにされたわけじゃないわ。ちよつと剣で一突きさ
れただけよ。だいたい、剣を使うなんてレトロよね、もう少し効率
の良い武器を使えばいいのにね」

冷静に分析する彼女はブロンドの巻き毛を揺らす。

頬にかかる長い髪を耳にかけてから、口元に手を当てた彼女は髪
と同じ金色の睫毛を揺らした。

「ぼこぼこにされるよりひどいだろ、それ」

「そう？ 大して変わらないような気がするけど」

大差がないと言い放つ彼女の様子に、レオナルドはじつとアリッ

サを観察した。

「：イーサーが、帰してくれなかったのよ。もう大丈夫だって言うてんのに」

「傷は？」

「すつかり。人より治るのが早いのが知ってるでしょ」

彼女の治癒力は高い。

だから、致命傷になっても発見が早ければなんとかなるのだ。

「：ジョージって男が来た」

「あいつ、心配性なのよね」

「ジョージって？」

「FBIのスナイパーで捜査官」

あっさりと答えた彼女にレオナルドはわずかに驚いた様子だった。

「知り合いなのか：」

「わたしが街をうろついていたときに初めて会った男よ」

過去を語りたがらないアリッサだが、言わないのは単に聞かれないからだ。

聞かれないから、積極的に話さない。

「：俺に会う前に知り合った男？」

「そうよ。初めて会ったまともな男」

彼女は淡々と告げてから、思いを馳せるように目を細める。

「捜査官なんかとつるんでて怖くならないのか？ 捕まるとか、心配になるとか」

「ならないわね」

ジョージ・リートは確かに捜査官だ。

だが、彼は確実に彼女の庇護者である。

「：彼は」

彼は、彼女を守る者。

「そして、政府とのパイプ役よ。わたしは政府の仕事も請け負っているもの」

裏社会の殺し屋でありながら、彼女は公的機関の依頼も受けてい

る。

「わたしは、犯罪者だけど異端者なのよ」

言葉にレオナルドは無表情のまま頷いた。

「レオン、とにかく。うっかり変な依頼を受けないようにね」

「…すまん」

「ごめんなさい、でしょ」

「ごめん…」

レオナルドはバツが悪そうにうつむくとアリッサに素直に謝罪した。

彼女はレオナルドよりも強靱だ。

それはマジックボムであるが故に。

「爆弾魔って言葉、素敵だと思わない？」

「あんたみたいにと派手で有名なら楽しそうだな」

しかもやりたい放題事件を起こしても、彼女は捕まらないのだ。

捕らえられない。

「…わたし、別に無差別殺人してるわけじゃないし」

彼女は殺し屋であり、傭兵。

「その辺の変質的な殺人魔と一緒にしないで」

「…しないさ」

彼女は無害だ。

少なくとも一般市民相手には。

だが、一般市民も必要とあらば殺す。

そんな無神経さも彼女は持っている。

それからしばらくして事件は起こることとなる。

「眠い…」

ベッドの中でぼんやりと目を上げた彼女は、自分を抱きしめる逞しい腕にぱちりと目を覚ました。

一瞬で頭が冴えていく。

そもそもアリッサの部屋には同居のレオナルドでさえ入ってはな

らないと言い聞かせてある。その彼女の部屋に、というか、彼女のベッドに男が寝ている。あり得ない事態だ。

「…ジョージ？」

思わず男の首を絞めてみる。

しかし子供の彼女の腕力などたかがしれていて、その締め付けに大男は目を覚ました。

「なんであんたがここにいるのよ！」

怒鳴りつけた声に目を覚ます。

「…首を絞めるな…、アリサ」

「いつの間に入ってきたの!？」

「三時頃かな、君はよく寝ていたけどね」

自分の部屋の自分のベッドで眠っていたのだから、多少、気を許していてもやむを得ないだろう。

フリルのついたかわいらしいパジャマ。

「着てくれてるんだな」

「…いつまで見てんのよ！」

横になったままの男の顔に枕を押しつけた彼女は、フンッと鼻を鳴らしてからベッドから降りる。

肘について彼女の後ろ姿を見つめるジョージの眼差しはひどく穏やかで優しいものだが、少女はそんな彼を認めたいと思わない。

「着替え見ても？」

「いいわけあるか！」

とっとと出て行け、と怒鳴りつけて彼女は帽子の箱を投げつけた。長いブロンドの巻き毛をふわりと揺らした彼女は男の目の前にドンツと大きな音を立ててコーヒーマグカップを彼の目の前においた。

テーブルについた男が二人。

どちらも平均以上の体格で、特殊な訓練を受けた男たち。

FBIと戦争屋。

「…戦争屋が二人、か」

「なによ、わたしが殺人狂みたいな言い方しないでくれない？」

自分にはオレンジジュースを注いで椅子に腰掛ける。

ぶらぶらと足を揺らした少女は両肘をついて顎を手のひらにのせた。

「その戦争屋になんのようよ？」

機嫌の悪そうな彼女の言葉に、ジョージはにこりと笑った。

「特に用はないよ」

「…」

君の顔が見たかっただけだ。

そう告げた彼の言葉に、アリッサはニットのワンピースの裾を指先でつまんで見せた。

「アリサ、ショッピングでも行こうか」

「…いや」

つっけんどんに彼女は不機嫌な瞳のままでクローゼットルームを親指でさした。

「あんたのせいでクローゼットがいっぱいよ」

ドレス、帽子、靴、カバン。

様々なファッション。

彼女の服のサイズは変わらない。

それ故に、流行が変わったところで服が捨てられるということは滅多にない。

服を捨てる原因になるのは大概汚れたときだ。

「流行のドレスを買いに行こう」

「…ドレスって」

「君に似合いそうなドレスが売っていたんだ」

レオナルドがいることにも気かけずに、彼は彼女を誘いかけた。

「…仕方がないわね」

肩をすくめてから、アリッサは男たちを見渡す。

ウキウキとアリッサの服を選ぶジョージを煙たい眼差しで見つめている。

精霊のような緑のシフォンのドレス。

もっともドレスと言っても、いわゆる正装にまつわるドレスではない。

「普通さ、女の子に緑のドレスはないんじゃない？」

はーっとため息をついた彼女に手渡されたカバンを肩につるす。

小さな姫君にそうするように、薄い若葉色のストラップの靴を彼女にはかせた。

「…わたしは貴族の娘でも、お姫様でもないのよ。そういうのやめてくれない？」

おとなしく靴を履かせられながら彼女はぼやいた。

「行こうか」

手をつなごうとする男の手を振り払って、彼女は歩き出す。

憤然とした様子だけがレオナルドにも伝わってきた。

「行ってくる、レオン」

高級子供服売り場で楽しそうにアリッサの服を選ぶジョージは傍目にはまるで父親が娘の服を選んでいるような風体だ。

白いひらひらのスカート、レースの襟のブラウス。

高価な子供の洋服を次々と買い求めながら、彼は少女に服を合わせた。

「お嬢さんは金髪だから白がよくお似合いですね」

手の上に積まれた洋服の山に、アリッサは内心でげんなりと首を傾けた。

この男はどうしてこう、楽しそうなのだろう。

ただの殺人鬼に楽しそうに洋服を買い求めるFBIなどどうかしっている。

「服買うの、そんなに楽しい？」

「楽しいね」

「それなら自分の服でも買えばいいじゃない」
あきれた様子のアリッサに、男は微笑する。

「男物の服なんて買ったって楽しくないだろう」

「あーそう」

きれいなドレス。

かわいいドレス。

かわいい彼女のために買うのだ。

「アリサ…」

名前を呼ばれた。

姿見の前に立つ少女に、ドレスを合わせて彼は愛しげに耳元に唇を寄せた。

「僕のために、かわいい姿をして…」

誰も、彼女を着飾らせることはできない。

誰にもそんな権利は与えない。

自分以外は許されない。

「そんなことよりさ。あんた、FBIなら例の噂知ってんでしょ？」

ジョージを一蹴したアリッサは、眼差しを上げる。

「…例の噂？」

「あれよ、連続殺人」

「ああ、あれか…。最近だと珍しいよな」

連続殺人。

小さな黒髪の少女ばかりを狙う連続殺人事件。

「…あんたのところになにか情報はいってきてないの？」

「俺はしがない射的屋だからなあ…」

大きな手で自分の顎をなでた彼は考え込むようにして首をかしげた。

「射的屋って…」

「…自分が狙われたらどうしよう、とか？」

視線をおろした男は冷静に告げれば、金髪の少女は姿見の中に視線を戻した。

「…それはないわ。わたしは金髪。殺人犯のルールから外れる」
それに外見年齢もね。

「なら良かった」

「なんか隠してんじゃないの？」

「…FBIから依頼だ」

彼女に隠し事などできない。

隠し事ができない、というよりは、ジョージはそもそもアリッサに嘘をつくつもりがないのだ。

「手伝えって？」

「そう」

少女の頭に帽子をかぶせてみたり、時計を合わせてみたりと買い物続けながら、彼は言う。

そう。

気がついた。

その店内には自分と、店員、そしてジョージしかいないこと。要するに彼が必要があつてその場を構成したのだ。

「手伝ってくれないかな」

「報酬は？」

「…軍用輸送機一機」

「わかったわ」

彼女は了解した。

殺人事件の捜査を請け負った。

「気をつけてくれ」

彼女はジョージの見繕った白いツーピースのドレスに着替えると、黒いミニハットをかぶる。

リボンを顎の下でリボン結びにして、白いハイソックスをはいていた。

黒いストラップの革靴に、ボタンは花の形をしていた。

上に羽織った黒いコートは、ドレスの形を損なわないラインだった。

愛らしい。

天使のような姿に見とれた。

「みとれてないで行くわよ」

「すまん…、真剣に見とれてた」

頭痛がしてきた…。

深々とため息をついた彼女は額を押さえてから店を出た。

ばさばさばさと紙の束が机の上から落ちた。

「…なんというかすごい部屋だよな」

「原因は半分以上あんたたちだけだね」

ジョージに対して複数形を使った彼女は目的の書類を見つけられずにヒステリーを起こす。

「ああっ、もう！」

苛立つように紙の束をまき散らした彼女はまとめて紙をゴミ箱に突っ込んだ。

「なにを探しているんだ？」

「二週間くらい前の新聞よ」

ぞんざいに答えた彼女は、室内を見渡す。

「…これか？」

毛布の下に埋まった新聞を引っ張り出したジョージに、「あー、それそれ」とつぶやいた彼女は長いブロンドをかきあげながらスパイパーの男から新聞を受け取った。

「この一面にあるのが最初の事件でしょ？ 実際起きたのはもっと前みたいけど」

彼の目の前に新聞を突きつけたアリッサは殺人事件の記事を指し示す。

「どれくらい前？」

「…五週間前だ。フロリダでビルの炎上事故があっただろ。その頃だ」

「わたしだと思ったんでしょ」

「…そりゃね、火と言えど誰だって君を想像する」

「想像力が貧困なんじゃないの？」

五週間前といったらアリッサはまだテヘランにいたところだ。

イーサーに半捕虜のように扱われていた。

「捕虜みたいにさ」

やだよだ。

肩をすくめた彼女は新聞の記事をじっと見つめてから鼻の頭を押さえた。

「…どう思う？」

新聞を見つめる少女を後ろからのぞき込んだ男に、アリッサは軽く頭を左右に振った。

「どうって？ 新聞のこと？」

「…そう」

「新聞なんて役にたたないわ、楽しそうに書いて世間を煽っているだけじゃない」

「そうだな」

新聞の情報など当てにはならない。

そういうことだ。

「…新聞が当てにならないのは、あんたたちが一番知ってるでしょ？」

愚問だとも言うかのように、彼女は独白する。

「では、裏社会として、君はこの事件をどう見る？」

「そうね…、裏社会の人間のやり方じゃない」

裏社会ではない。

犯罪者と、一言でくくるがその実態は簡単なものではない。

アリッサを含めた裏社会の誰もが、自分の命を危険にさらして戦闘に身を投じている。

中にはただの戦闘狂もいるが、戦闘に行くのが好きだ、というだけでは裏社会の犯罪者ではいられない。

それなりの悪運と、強運、そして正常な判断力が要求される。

それは表社会と同じ。

「これは、裏社会の仕業じゃない」

たぶん…。

つぶやいた彼女は目を伏せた。

「：犯人は普通の人間よ」

自分自身が裏社会だからこそ、わかる。

「理由は？」

「こんな小さな子供を殺したって、わたしたちにはなんの得もない。わたしたちは利害関係があるからこそ犯罪を犯す。それだけよ」

冷静に事態を分析し、理解する彼女の様子に男は舌を巻いた。

「普通、という言葉には語弊があるかもしれないけど、これは裏社会のやり方じゃない」

裏社会は、よほどの理由がない限り子供は殺さない。

殺す必要がないからだ。

「：だって金にもならないし」

殺人に、道義が必要だと思っているのは、一般的な人間だけだ。

傭兵や、戦争屋にとって殺人に道義は必要ではない。

人間の命を奪うことに理由が必要なのは、理由によってなにかから逃れたいと思う者だけだ。

「逃げたいとは思わないのか？」

アリッサの静かな眼差しに、ジョージは片目だけをかすかに細めて見せた。

「：思わない」

言い放つ。

「わたしは逃げたいなんて思わない」

「逃げたいわけじゃなくて、殺したい？」

彼女の巻き毛に触れると、アリッサは冷たい水色の瞳を閃かせた。

「わたしが何かを嫌っていると思ってるの？」

「思っね」

彼女の冷たいほどの怒り。

冷徹な怒り。

たとえるならば炎。

真っ青に燃える冷たい炎。

「君の怒りの理由を教えてほしい」

「：幼稚だとも言いたいわけ？」

「言いたい訳じゃないが、君の怒りは根が深い」

精神の底に張り巡らされたような根のような怒り。

その怒りに捕らわれる。

「俺はプロファイラーじゃない。でも：」

「やめてよ」

彼の言葉を制止した彼女は一つ息を吐き出した。

「アリサ、逃げるな」

「：逃げてないし、逃げるつもりもない」

キッとジョージをにらみつけた彼女は彼の胸ぐらをつかみ上げる。

それほど強い腕力ではない。

だが、ジョージは抗わない。

「ジョージ：」

「行こう、情報は向こうに全部ある」

彼女のコートを取り上げると大股に歩き出した。

アリッサが後ろからついてこない、という可能性を考えていない

彼の背中。

そんな彼に、彼女は悲しげに笑った。

彼に、全幅の信頼を寄せてもらう資格など自分にはないのだから、と…。

＊

ガーゴイル…。

窓の外を眺めた彼女はつぶやいた。

「：」

ちらりと視線だけを流したジョージに、アリッサは反応しない。

わかっていても彼女はあえて反応をしないことがままあった。

ファイルには要点だけが記されていた。

事件の概要。

事件の写真。

どこで誰が殺されたのか。

「見事に子供ばかり」

しらけた眼差しでアリッサはファイルを見つめて、事件の詳細を追っている。

「：わたし、血みどろ死体は好きじゃない」

「アリサは全部消し炭にするからな」

血だらけの子供の写真を、あたかも恐ろしいといった様子で見ているわけではない彼女の、その言葉の真実性はかなり疑わしいものだったが、ジョージはあえて車の運転に集中している振りをする。

「子供ばかり殺すのは、犯人に力がないのか、それとも：」
小児性愛者か。

腕力のない犯人であれば子供をターゲットに選んだのかもしれない。

しかし、それでは理由がつかない。

胸がざわざわとする。

「怒りのはけ口にする理由がわからない」

滅多刺しにされた少女。

黒髪の少女：。

ジョージはそんな写真を凝視する彼女の様子に、ほっとため息をついた。

「：君がターゲットにならないことだけを祈るよ」

「巻き込んでおいてその台詞はないんじゃないの？」

「巻き込んだのか、巻き込まれたのか、それとも自ら首を突っ込んだのか。微妙なところだな」

「ねえ：、わたしが黒髪に染めたらどうする？」

黒髪に染めると言った少女に、ジョージはぎょっとしたように目を見開いた。

「：勘弁してくれ」

「わたしがおとり捜査やったら犯人を消し炭にするから？」

全てを残さず、彼女は燃やし尽くす。

「俺は、君の金髪が好きなんだ」

巻き毛のブロンド。

大好きな少女。

「別に好きで金髪なわけじゃないわ」

「顔立ちも人種も選べないからな」

選べない。

生まれも育ちも。

選べないからこそ、苛つく。

「：きつと、この子たち、わたしよりずっと幸せだったんでしょ
うね」

静かに告げる。

血みどろの写真。

自分の手も、血に汚れている…。

自嘲した彼女は、鋭く息を飲むと身を翻すようにジョージの腕に
抱きついた。

「君は幸せじゃなかったのか？」

「わからない…」

時折思うのだ。

わたしはなに？

自分とはなに？

どうして生まれたのか…？

どうしてここににいるのか…？

どうして、どうして…。

自問自答する彼女の小さな体。片腕で強く抱きしめたジョージは、
アリッサの感情が伝搬したように目を細めた。

「：君がどんなに病んでいても、俺は君を支える…」

今までと同じように。

今までであり続けたように、彼女を守り続けたい。

「俺は、君を守りたい」

「守られなくてもいい…」

守ってほしい、守られたくない。

どうしたらいいのかわからない。

どうすればいいのかわからない…。

「…血を、超えないと」

乗り越えないとならない。

「だから、一緒に捜査する」

「一緒に超えよう」

彼女の弱さも知っている。

だから彼女を見捨てられない。

力強い彼の腕に、少女の姿をした殺し屋は身を任せた。

「…大丈夫だ」

「…」

彼女はそうして彼の腕の中にしばらくじっとしていた。

暖かい腕にほっとした。

「俺の腕が好き？」

ジョージの言葉には応えなかった。

暖かい腕。

心地がよいと、彼女は思う。

そうして、少女は眠りに落ちた…。

ひどく疲れた。

当たり前だ、彼女はマジックボム。脳が中心が軋む。

深い眠りに落ちていく彼女に、ジョージはため息をついた。

「少し休んで」

そうして明日から戦えばいい…。

幼い体で、脳を酷使しすぎる彼女は、疲労に耐えきれない。

「少し休もう…」

彼は微笑して片腕でアリッサを抱き直した。

「ああああー！ー！」

悲鳴。

悲鳴。

悲鳴…。

声は言葉にならない。

言葉にならない絶叫。

その声が、もはやなにを意味する音であるのか。

それは誰も知らない。

頭が割れるように痛む。

見開いた瞳はなにも映していない。

終わらない叫び。

全てを拒絶する音。

小刻みに震える肩。

悲鳴を上げた彼女は喉を張り上げる。

全て壊れてしまえと願い、祈る。

全て壊れることがかなわないのなら、自分が壊してしまえばいい

と、そう思った。

だから、破壊し尽くそうと。

そう願った。

「壊せれば、いいのに…」

大事なものも、そうでないものも。

全てを壊せれば良かったのに…。

なにも、大切ではないと思っていたのに、出会ってしまった…。

「なにもいらないと、そう思っていたのに…」

わたしにはなにもいらなかったのに。

顔を覆った少女は、優しい眼差しに触れて驚いたように目を見上げた。

「あなたは全てを受け止めてくれる…」

だから、大事だと思ってしまった。

だから、守ろうと思ってしまった。

存在意義を持たされた…。

生きるための意味を、初めて知った。

心臓にも、脳にも、体全てに。

負担がかかる。

しかし、それすらも心地よかった。

痛みを知って生きる。

自分は、痛みを感じているのだと、そう知覚することが心地よかった。

「…わたしが、絶対に守る…」

手を伸ばす。

けれど、彼女は知っている。

手を伸ばしたところで、触れることはかなわないと知っていて、それでも尚手を伸ばした。

「絶対に、守る…。絶対によ…」

愛してる。

誰よりも、愛している…。

「…一目でわかった。わたしは、あなたが好き…。大好きよ…」

手を伸ばしても。

自分のその手は、血に染まっていて触れることは許されない。

触れられない…。

彼女はそっと腕を引き戻すと、胸の前で拳を作った。

目を伏せる。

「わたしは、触れてはいけないの…」

だって、わたしがあなたに触れたら、あなたは汚れてしまう…。

そんなことは許されない。

「わたしはあなたに触れてはいけない…」

繰り返した少女は切なく、悲しく眼差しを落として、そうして黙

り込んだ。
罪深い…。

彼女が案内されたのは会議室だ。
FBI本部ビル内の会議室の一室が捜査情報の統括に使われていた。

「…なんだ、ジョージ。こんなところに子供なんて連れてきてどういうつもりだ」

多くの国の警察機構も含めて、アメリカ合衆国も同様だった。
名前だけが先行している。

マジックボム。

その名前をつけて呼んだのはそもそもこの機関ではなかったか。
少女は内心で侮蔑気味に息を吐き出しつつ、ちらりとジョージを見上げる。

別段、組織内でのジョージの立場をくんだわけではなく、余分な
もめ事を回避したかっただけである。

「…ジョージは所帯はもっていないはずだから、姪御さんかなんか
かね？」

尋ねられて、彼は肩をすくめた。

「ご希望の殺し屋さんですよ」

「初めまして、警察の皆さん」
にっこりと笑う。

ジョージの見立てたドレス。スカートの裾をつまんで貴婦人のよ
うに会釈した。

「マジックボムとあなたたちが呼んでいる殺人犯です」
年の頃は六歳前後だろうか。

しかし、外見には似合わない大人びた瞳。
冷静な。

だが、笑顔は小さな子供そのもの。
そこにあるアンバランス。

「…まさか」

正常な反応だ。

十年以上前に世界を震撼させた殺人鬼が今でも小さな子供の姿であらうとは誰が思うだろう。

「ここで誰かを殺してみせましょうか？」

冷ややかに、声が響く。

「アリサ…」

ジョージの咎めるような声に、アリッサは唇の端をゆがめた。

「いや、申し訳ない…。まさか、君のような少女がマジックボムだとは思わなかったものだから…」

マジックボムと個人的な接触が可能であるのは、FBIでもジョージと数人の捜査官だけだ。

まさかそのジョージがど素人の小娘をつれてきたとは考えられない。

やや突飛なところがあるが、ジョージは政府を裏切ったりすることはない。

「…小娘、と思っているんじゃないの？」

失笑する彼女の言葉に、ジョージの同僚とおぼしき男は、彼女に椅子を勧めた。

彼女が椅子に腰掛けると、二メートルほど離れたところでふたりは何か話し合っている。

内容は、アリッサにもおおかたの予想は付いたが言及はしない。今は政府の重要施設にきているのだ。

気に入らないからと言って、まさかFBIを吹き飛ばすわけにもいかない。

「…本当に」

「そうだ…」

切れ切れに言葉が聞こえる。

しかし、彼女の意識はすでにホワイトボードに貼られた写真に集中している。

テーブルの上におかれたファイルに勝手に手を伸ばす彼女は、ふとマニキュアを塗った女の指に視線を上げる。

「…」

視線が絡み合う。

「よろしく、わたしはエリザベス・マーレイ捜査官よ」

差しだされた右手に、アリッサは総毛立った。

反射的に手を引っ込めた彼女は、未だに同僚の捜査官と話を続けているジョージを見やる。

よろしく、と告げられてもアリッサは答えない。

茶色の髪の子。

エリザベス・マーレイ。

その名前には覚えがない。

誰だ、こいつは、と彼女は自答する。

「ベスは優秀な捜査官だ」

神妙な表情のアリッサに助けを出すようにジョージが少女に告げた。

「あっそ」

確かに、アリッサはジョージの私生活など知らない。

「…なにを怒ってるんだ」

少女にミネラルウォーターのペットボトルを差しだすと、彼女は素直にそれを受け取った。

「怒ってない」

そう、怒ってはいない。

なにかぞっとするだけだ…。

背筋になにか冷たいものが伝い落ちた。

「…怒ってない？ 本当に？」

「怒ってない」

わけがわからない…。

彼女は自分の手のひらを見つめてから、再びエリザベス・マーレイという女に視線を戻した。

「マジックボムよ」

首をすくめた。

彼女はエリザベス・マーレイをまじまじと観察する。

彼女はなんなのだろうか、と。

お互いを観察している。

ややしてから、ふわりとエリザベスが笑った。

「よろしくね」

すばらしい違和感だ。

捜査本部内にいる子供。

「やあ、レディ」

うるさいのがもう一人きた、とアリッサは思った。

「元氣そうでなによりだ」

「なによ、わたしのこといつつも監視してる男が白々しいわね」

ブレット・オルコット。

「今はなんと呼べばいいのかね？」

いつもそうだが、どうしてこうこの男は上から目線なのだろうか。

額に手を当てた少女は差しだされた手を握り返す。

「アリッサ・ノースウッドよ」

「そうか、よろしくアリサ」

さわやかな男の反応が本当にさわやかなわけではないと言うこと

を、アリッサは知っている。

「ハグしたがるくせに、なんでいつもホルスターが肩なの？」

ハグした男の胸に頭が当たった。

鉄の固まりが当たる。

「…銃が当たるのよ」

男の肩を押し返した少女は眉間にしわを寄せて、彼の左肩をたたく。

白髪交じりの金髪の男。

「悪かったね」

ごとりと音を立てて銃をもったいぶってテーブルにおくのが、わ

ざとらしくて少女はいやそうな顔をして彼の一举一動を見つめていた。

「…相変わらず、かわいいね」

「で、ブレット。あんたは捜査に加わってるの？ それともわたしを茶化しにきただけ？」

どっちなの？

問いかけた彼女に、ブレットは小首を傾ぐ。

「別に、私は君を監視しているばかりじゃないんだがね」

「そりゃそうでしょうとも」

銃を見つめている彼女の瞳に、ジョージは目を細めた。

拳銃などアリッサには珍しくないはずだった。

「しかし、いつもレディは私の銃がいやそうだね」

「あれだけ付け狙われれば嫌いにもなるでしょ」

むっつりと顔をしかめたまままで応じたアリッサは、視界の外にブレットの銃を押しやった。

「…なるほど」

雑談をしながら彼女は事件の情報に目を通している。

「ひとつだけ言っておくけど、わたし、捜査官じゃないわよ？」

「凶悪犯には、より凶悪な殺人鬼をぶつけたほうが早いだろう」

それに君はそっちの世界には鼻がきく。

男の言葉に、彼女は無表情のまま写真を眺めた。

どの少女も黒髪で、標準以上に愛らしい。

多すぎる捜査情報の数にげんなりした様子のアリッサはテーブルの上の皿におかれたサンドイッチを手にする。

犯罪者とは言え、空腹にはなるのだ。

「そんなに根を詰めると頭がパンクするぞ？」

隣に腰掛けたジョージに、少女はちらりと瞳を向けただけで紙の束を見つめることをやめない。

「全然根なんてつめてないし。この程度のことですわあたしの頭はパンクしない」

そう。

彼女が頭がパンクするのは唯一だ。
捜査官たちの異様なものを見るような視線は、アリッサには気にならない。

気にならない、というか、気にしないのかもしれない。

彼女と面と向かい合った人間は誰しもそうだ。

同じ反応をする。

頭の中は大人で、姿は小さな子供。

せめて思春期以降の姿であれば、侮られることも少なかっただろう。

誰もが彼女の扱い方を知らないのだ。どうすればいいのかわからない。

大人として扱えばいいのか、子供として扱えばいいのか。

「不思議な人ね、アリッサ」

エリザベスの言葉にアリッサは目を上げた。

「不思議って？」

「どうして成長しないの？」

どうして成長しないか？

そんなの知りたいのはこっちだ、と彼女は内心で吐き捨てて耳に金髪をかき上げた。

「知らない」

答えてアリッサは立ち上がった。

「現場につれてって」

立ち上がった少女は、スカートをぱたぱたと払った。

ピンク色のスカートと黒いブラウス。

同じくピンク色の皮のベストと淡いピンクのジャケット。

どこか小悪魔を連想させる、けれど少女らしいファッション。

「：コートも皮なのね、誰の趣味？」

並んで歩くエリザベス・マーレイが尋ねれば、少女はわずかに首をかしげた。

「わたしの趣味じゃないことだけは確かだわね」

自分の趣味ではない、と遠回しに告げて背後を振り返る。

「…アリサ」

呼ばれた。

ジョージの声。

「忘れ物だ」

「サンキュー」

投げられたカバンは革製で、コウモリの羽がついている。

きっと彼女のファッションのモチーフは悪魔。背中に背負ったその姿はカバンの翼がまるで彼女の翼のようにも映った。

「…高そうね」

「服の値段なんて知らないわよ」

エリザベスの言葉にどこか棘を感じたアリッサだが、それについては言及せずに少女は手渡されたファイルを受け取る。

「彼、なんて？」

「…どれのこと？」

男ばかりの世界で生活している彼女にはどの男のことを言っているのか、理解できない。

「ジョージ・リートのことよ」

「ああ…」

男ばかりの犯罪社会。

そして警察の世界も男ばかりの世界。

「…でもベス。あんたもかなり異端なんじゃないの？ 男ばかりでさ、こんな色気のない世界。普通、女の子が入りたがるところじゃないでしょ」

「男ばかり、か…。確かにそうかもね」

エリザベスの様子は、どこか自嘲的だ。

「わたし、悪い奴嫌いだし。正義面するってよく言われて馬鹿にされた」

「犯罪者は嫌い？」

「大嫌いよ」

「そう」

静かな言葉のやりとり。

「：ジョージはあなたを愛してるのね」

「子供として、ね」

そうだ。

子供扱いだ。

いつもいつも…。

「子供、として…」

アリッサの言葉を復唱したエリザベスは瞳を遠くに投げかけた。

「乗って、案内するわ」

助手席に乗り込んだ少女に、エリザベスは運転席に座った。

「本当に、子供としてなのかしらね」

口の中でつぶやいた女はエンジンをかけた。

アリッサは目を閉じる。

子供。

子供なのだ。

自分は永遠に少女でしかあり得ない。

なにも思い出したくない。

「あなた、自分が子供であることに後悔しているのね」

「わたしには、どうすることもできないことなのよ」

どうすることもできないから、彼女は逃れられない。

逃げ出したい…。

「わたしのこともあんなのこともどうでもいいわ。わたしは捜査協力で来ているのよ」

問いかける女の言葉を遮って、アリッサはカバンを抱え直した。

「そうね、考える必要があるのはあなたのことじゃない」

事件のことだと。

「そういえばあなたシートベルトしないのね」

「：シートベルト？」

シートベルトを指摘されて、彼女は胸をぱたんと軽くたたいた。
「そういえば…」

忘れてた、とつぶやいた彼女はシートベルトをつけてから笑う。

「わたし仕事柄シートベルトしないことが多いのよ」

いつでも逃げられるように。

彼女は最善の策をとる。

「やっぱりあなたは犯罪者なのね…」

侮蔑の声。

「：だったらなんだって言うの？」

アリッサは笑った。

「サイコ相手に、あんた程度の人間が自分を守れるとは思えないけど？」

だから自分が呼ばれたのではないか、と彼女は暗に告げた。

女の意味のない戯れ言につきあうつもりなどない。

「：ごめんなさい、ちょっと頭を冷やすわ」

エリザベスは車を走らせながら黙り込んだ。

「そうね。少し頭を冷やしたほうがいいわ。あんたみたいな石頭は特にな」

つぶやいてアリッサは笑った。

しばらく時間がたってからアリッサはエリザベスに告げた。

「地図」

手だけを閃かせる。

「：州内だけで？」

「州内だけのどうすんのよ」

言い放った彼女に、エリザベスは大きな米国内地図を手渡した。

「移動してるのね」

地図を見つめた彼女は、そうしてから顎を指先でつまんで考え込んだ。

「小児性愛者だと思う？」

「ベスはどう思うの？」

エリザベスの言葉を質問で返したアリッサは地図を見つめたままで首をかしげた。

「わたしは、小児性愛者の犯行だと思う。しかも、特定の相手に対するストレスを抱えている」

「ふうん…、まあ、そうなんでしょうね」

「ナイフで何度も突き刺すのは、挿入の疑似体験でしょう」

「レイプの痕跡とかはあったの？」

「あったわ」

子供相手にそんなことをするのは異常だわ。

汚らわしいものでもみたような眼差しのエリザベス・マーレイに、アリッサは無表情のまま唇をゆがめた。

「わたしは。…わたしには、わからないわ。性的衝動とか、そういうのは」

彼女にはない。

あるのは圧倒的な激情と、怒り。

そして怒りは、やはり圧倒的な暴力で表現された。

「…性的衝動がないというのは、見事な欠落具合ね」

「悪いけど、普通の人と一緒にわたしを考えると理解できないから狂うわよ」

淡々としている。

彼女の様子にエリザベスは軽く笑う。

「…人間の本能じゃない」

「そうね。…そうかもね」

人間の本能。

食欲、性欲、睡眠欲。

最も根源的な人間の欲求。

アリッサは、体が成長しないからか精神も成長が損なわれている。それをアリッサ自身も理解していた。

わかっていたから彼女はそれを認めた。

「ないものをねだっても仕方ないのよ」

そして、彼女にとって性欲などなくても困らないものなのだ。

「だから、悪いけどレイプ犯の気持ちはわたしには理解できない」
静かに告げた彼女に、エリザベスはわずかに顔を曇らせた。

人間としての欠陥品。

ひどく、異質な子供。

実際に子供なのか、それは彼女にはわからない。だが、エリザベスはアリッサを異質だと思った。

「一つ聞いてもいいかしら」
告げる。

「…なに？」

「…あなたをどのように扱えばいいの？」

「普通に子供として扱ってくれてかまわないわ」

みんなそうだ。

みんな、わたしを子供扱いする。

しかしそれでいいと決めた。

それでいいと、彼女は思った。

「そう」

フロリダから始まった殺人。

考え込んだままで彼女は首をかしげた。

「どこに行きたかったのかしらね」

フロリダからどこに行きたかった？

彼女は思う。

「わたしは、このときアメリカ国内にいなかったのよね」

「アメリカにいなかった、というのは？」

「イランで殺されかけてさー」

なんでもないことのようにぽつりとつぶやいた彼女に、エリザベスは驚いたように両目を見開く。

「殺されかけて…」

絶句した。

「まさか、あなたみたいな殺し屋が殺されかけるなんて…」

「あら、腕は認めてくれるんだ？」

くすくすと笑った彼女に、捜査官の女は瞳に剣を突き立てる。

「…あなたは一級の殺し屋なんでしょう？　だったらどうして殺されるほどの怪我を負うの？」

「わたしは、超人じゃない」

怪我だって幾度となくしてきた。

死にかけたことだって数多い。

「この世界は、弱肉強食。食うか、食われるか」

彼女は顔を上げる。

「…わたしよりあなたたちのほうが捜査のプロでしょう。犯行のいきさつはほとんど把握してるんじゃないの？」

「わたしはあなたの見解が知りたいのよ」

彼女の言葉に、アリッサは苦笑した。

「わかるわけではない」

わかることは移動していることだけだ。犯人の気持ちまではアリッサには理解できない。

小児性愛者の犯行。

それはわかる。しかし、そこにまつわる感情が理解できない。なぜならば、彼女には性欲がないからだ。

性欲がないから、その感情がわからず理解できないのだ。

「…その点だけ言えば、あなたは子供なのね」

まっすぐに純粹な。

怒りも、憎しみも、激情の全てがまっすぐに純度が高い。

まるで炎のように美しく、誰もが彼女にひかれるだろう。良くも悪くも、彼女にひかれる。

「きれいな怒りだわ」

彼女の根底を支えているのは怒りそのもの。

「でも、あげない…」

エリザベスの微笑に、アリッサは「は？」と顔を上げた。

「なに？」

「なんでもないわ」

「ベルティ」

「…あ、どーも…」

相変わらずの飲んだくれ男に、キャシーは肩をすくめてみせた。

「キャシーさん、仕事うまくいかなかったとかで」

「腐っても情報屋よね…」

あきれたようなキャシーの言葉にベルティはアルコールに濁った瞳でにやりと笑う。

先日、大男にぼこぼこにされたことはすでにどうでもいいらしい。

「そりゃ、一応俺も情報屋でさあ」

「お金は返したわよ」

「律儀ですなあ」

くっくつと笑う彼に、キャシーは「それよりも」と言葉が続けた。

「あんた、わたしの居所言ったでしょ」

「仕方ないじゃないすか。ついぼろつと出ちまったんですよ」

たぶん…。

なんだその曖昧な表現は…。

キャシーは内心であきれつつ、アパートメントの階段を上っていった。

「あ、そうそう。キャシーさんなら知ってると思いますけどね。連続殺人が起きてますから気をつけてくださいよ」

「なに？ わたしが殺されるとでも思ってるの？」

「いやいやいや…。そうは思いませんけど、キャシーさんとよく似た子たちが殺されたみたいなんで一応ね」

男の声に、キャシーは眉をひそめた。

「そいつ、頭おかしいんじゃないの？」

「さあ、どうでしょうね？ 俺はシリアルキラーじゃないですから、そういうのはわかりませんよ」

彼が知るのは情報だけだ。

「殺す方はキャシーさんのほうがお得意でいらっしゃるでしょ」
告げられて、彼女は「そういえばそうね」と相づちをうった。
部屋に入ってテレビをつける。

古いブラウン管のテレビだ。

黒髪を一つに束ねて、買ったばかりのシュシュをつける。

ニュースで流れる連続殺人事件の報道に、彼女は見入った。

フロリダの片隅でのビル炎上事件のすぐ後から始まった事件だ。

もちろん、その連続殺人にはキャシーは関わっていない。

「わたしと似てる…？」

そうかな。

ベルティの言葉を思い出した。

長い黒髪の東洋人の子供など山ほどいるだろう。

新聞のスクラップをひっくり返す彼女は犠牲者の写真を並べてみた。

確かに、子供は黒髪の東洋人の少女が多いが、中には白人の少女もいる。

「変なの」

つぶやいた彼女はベッドに転がった。

おそらく、警察関係者のピアスとマークにでも聞けば事件のなにかしらの情報は持っているだろう。

しかし、そんな事件の情報などキャシーには興味がなかった。

扉をたたく音に目を覚ました。

うるさい…。

「うるさいな…」

「キャシー、いるか？」

冷静なようでピアスの声は若干の危機感をはらんでいる。

「…なに？」

扉をあけるとやはりピアスがいた。

「…どうかしたの？」

あくびをかみ殺す。

「あんまりあんたみたいのがここに出入りすると危ないんじゃないの？」

「俺は大丈夫だ」

彼女のそばにいる者。

そのように認識されている。

絶対に安全という保証はないが、おおむね安全と言える。

「しかしなんてかつこしてるんだ」

「…」

あきれた様子のキャシーは男のネクタイを引っ張った。

「そもそもあんたと一緒にしないで」

眠い…。

目をこすりながら、彼女はスリッパドレスの上から肩を搔いた。

「なんて格好もなにも、ここはわたしの家で、わたしが午前二時にどんな格好をしていようがあんたには関係ないでしょ」

「…男に襲われたらどうするんだ」

眉をひそめた彼の様子に、キャシーは唇をゆがめて短く笑う。

「そしたらわたしが殺してやる」

殺してやる。

物騒な言葉に、ピアスは勝手に部屋に入ってくる。

「で、何のよう？」

「…大した用じゃない。なにか羽織ってくれ、目のやり場に困る」

「…困るっていわれてもねえ」

あくびを繰り返す彼女に、椅子の背中にかけられたストールを彼女の肩にかけた。

「風邪をひくぞ」

「平気よ」

そもそも目のやり場に困るというのはなんだろうか。

「ガキの裸なんて見たって欲情もなにもしないでしょ」

薄い胸はスリッパドレスの上からは全てが丸見えだ。

「色気がないな」

「悪かったわね」

ちっとも悪いと思っていない様子の彼女にピアスは彼女を背後から抱きしめる。

「心配なんだ。君のことが」

「うざいのよ」

男の腕をふりほどいて、少女は無然とした。

「あまり心配をかけないでくれ」

俺の心臓に悪い。

ため息をついた男は、そうして彼女に一冊のファイルを渡した。

「それを読んでおいてくれ。あと戸締まりには充分気をつけて」

「はいはい」

彼女は男にハグをした。

「本当に、冗談で言っているわけじゃないからな」

「わかってるわよ」

キャシーはそうして目を伏せた。

わかっているのだ、と。

「でも、殺されてなんてやらない」

耳をふさぐ。

目をふさぐ。

そうすれば、なにも感じずにすむ。

痛い、苦しい、おなかすいた。

笑顔なんて知らなかった。

誰も彼も冷たくて、何も持っていなかった。

「…目をふさいで、耳をふさいでしまえば、苦しくない」
つらくないから。

「…もう、大丈夫」

言われて少女は笑った。

「ほんとに…？」

「本当に」

大人のその人はそう言った。

「大丈夫だから」

血まみれの自分を抱きしめてくれた。

「おなかすいたらここにおいで」

彼はそう言った。

甘いお菓子を。

甘い世界を。

優しい思い出を…。

「そんなものが必要なら、全部壊れてしまえばいい…」

低くつぶやいた彼女は八つ当たりをするように壁に枕を投げつけた。

全部壊れてしまえ。

甘くて優しい世界など…。

世界は弱者にはどこまでも厳しいのだ。

どこまでも世界とは汚いのだ。

それを少女は知っていた。

「…キャシー」

「なによ！ まだいたの？」

叫んだ彼女に、ピアスは動じない。

「ホットミルクだ」

「…う」

甘いミルクの香りに、少女は言葉を失った。

「…あ、ありがと」

激しい感情を見せるキャシーだが素直な一面もあった。

この小さな犯罪者は、伝説の「ケース・アングリーボマー」の犯人とは違う。

ほとんど知られないことだが、ピアスはたまたまキャシーと関わったため、「ケース・アングリーボマー」の犯人であるマジックボムのことも間接的に知ることとなった。

ほんの偶然だ。

偶然と偶然が重なって、彼はキャシーを知り、マジックボムの存在を知った。

「テレビつけてもいいか？」

「どうぞ」

キャシーがマジックボムのことを快く思っていないのは知っていたから、その名前は口にしない。

「昨日、ベルティから聞いたけど連続殺人事件ですって？」

ホットミルクに口をつけながら少女が言う。

感情の波が激しく、どのように変化するのかわかりにくい彼女だったが、ピアスに対してはあまり攻撃的になることはない。

「…ああ、子供ばかりを狙う連続殺人犯だそうな」

「ふうん。黒髪なの？」

「そう」

「異常者なのかしら」

かわいらしく首をかしげた彼女に、ピアスは軽くその頭をはいた。た。

「どうだろうな」

唯一。

心配なことがピアスにはあった。

彼女は自分自身の能力に過剰なほどの自信を持っていること。

いつか、その自信が彼女自身を危うくするのではないかと。

それが心配で仕方がなかったのだ。

それに対して、人づてで聞いたところによると、マジックボムは自分を過剰評価しない。

どこまでも冷静に、怒りを体現する。

「…心配かけないでくれよ」

「大丈夫よ、わたしのことをなんだと思ってるの？」

「普通の女の子」

あっさりと告げたピアスに、一瞬だけしらけた眼差しを送ったが、

キャシーはそこで無駄な問答をするようなタイプではなかった。

意味がないことを知っていたからだ。

「君は自信過剰になるべきじゃない。普通の女の子なんだ」

「…サイコパスよ」

「違う」

苦虫をかみつぶしたような表情のピアスに、キャシーはホットミルクのカップをテーブルにおいて膝を椅子の上で抱えた。

「サイコパスよ…」

自分の魂の孤独。

誰も入ることなどできない。

ピアスも、マークでさえも。

「…サイコパスなのよ、生まれた時から」

殺すことに良心の呵責もなにも感じない。

悪いことをしている、という実感もない。

殺したいから殺すだけだと。

彼女は言う。

それが悲しいことだと言われればそれまでなのかもしれないが、元々、道徳的教育など受けてこなかった彼女だ。

そもそも彼女はスラム出身で、それなりの理解力をもっていること事態がある意味奇跡的だった。

「キャシー…」

少しでもなにかの助けになればと、ピアスが彼女に家庭教師をつけたが彼女はまるで白紙の紙でもあるかのように、下地の何もないところにつきつぎと知識を吸収していった。

ただひとつだけ、欠落しているものがあるとすれば、それは道徳観念だ。

彼女は人の道のあるべきところを知らない。

まるで呼吸をするように人を殺す、と彼女が言われるのはそのためだ。

それがピアスには悲しいと思う。

普通の子供のように、愛されて育てば人とは違う能力を持っている
ても優しい少女に育っていたのではないか、とも思う。

しかし、ピアスが彼女に出会ったとき、すでに遅かったのだ。彼
女の人格は、修正できないところまで確立されていた。

「大丈夫よ、ピアスもマークも殺したりはしないから」
にっこりと笑う。

そもそもそういう問題ですらないはずだが、ピアスは言葉を飲み
込んだ。

「とにかく。君はもう少し謙虚になったほうがいい」
自分の力を過信するなど、彼は言う。

「はいはいはい」

くどい親に適当な返事をするようなキャシーを気遣うように見つ
めてから、ピアスはそうして肩から力を抜いた。

彼女を信用するしかないのだ。

アスファルトを掘る。

ナイフで黙々と。

考え込んでいた男は、風が駆け抜ける音に驚いたように顔を上げた。

「こっちおいでよ」

「まってよ、早いわてば」

子供たちの声。

ビルの入り口の階段に座り込んでいた男は、子供たちの笑い顔に目を奪われた。

彼女は、傷つけられたというのに。

彼女は、恐怖を抱いたというのに…。

どうしてこの子供たちは笑っているのだろう…。

「どうして…」

若い男は目を伏せる。

アスファルトを手慰みのように掘っていたナイフをしまつて。

笑い声は風のように駆け抜けていく。

子供の特権だ。

誰よりも無邪気で、恐れを知らない。

あの子は、怖かっただろうに…。

誰に聞かれるわけでもなくつぶやいた青年はぼんやりと立ち上がった。

子供たちが駆け抜けた方向とは真逆に歩き出す。

ふらふらと歩く様は、アルコール中毒か薬物中毒かなにかのようだ。

フラッシュバックするのは、黒髪の少女の拳銃を突きつけた男。

怯えたように両目を見開いた彼女。ツインテールを揺らした東洋人の少女…。

「…怖かっただろうに」

どうして笑うんだ…。

どうして笑っていられるんだ。

ぞわりと背筋を走った違和感に彼女は振り返った。

視線ではない。

なにかが駆け抜けた。

「…アリサ？」

「なんでもない」

なんでもないと、彼女はつぶやいてジョージの運転する乗用車の後部座席に乗り込んだ。

助手席にはエリザベス・マーレイがいた。

同業者同士の話もあるだろう。

アリッサとしては気を遣ったわけではないが、傍目には子供が大人に対して気を遣ったようにも見えたかもしれない。

「…なにを知っているの？」

エリザベスの言葉に、アリッサはかぶりを振った。

「わたしは何も知らない、知りたいとも思わない」
それだけのこと。

黒いシルクハットをかぶった金髪の巻き毛の少女は、彼女にも彼にも眼差しを向けないまま車窓の外を見ていた。

燕尾服の上着と、ミニスカート。

あつらえられたブーツ。

かわいらしい姿。

「ジョージ」

捜査官同士の話が続く中、不意にアリッサは話の腰を折った。

「…うん？」

「車を止めて」

少女の言葉に、何の疑いもなく車を路肩に止めた彼に、なにか言いたげな瞳をエリザベスが向けたが、人間の心の機微に鈍いジョー

ジは気がついていない。それは良くも悪くもジョージ自身が気がついていることだった。

それはそう。

狙撃手に感情はいらない。

感情を持てば撃てなくなるから。

歩道に降りたアリッサはあたりを見回した。

ざわりと風が揺れた。

一陣の風が吹き抜ける。

瞬間、シルクハットが彼女の巻き毛から外れた。

獰猛な野生が彼女の中で目を覚ます。

大きな水色の瞳を見開いたまま彼女は立ち尽くす。

普段の姿が子鹿なら、今の彼女の姿は野生のジャガーか、もしくは獣ではなくハンターだ。

しなやかに変化する。

静から動へ。

「…血のにおいがする」

独白した。

ジョージの車に戻ることもしせずに歩き出した彼女。

その歩みは次第に早くなる。

追跡する。

「ベス、車を見ていてくれ」

「…え？ ええ？ 信じるの？ そんなこと…？」

「俺はアリサを信じる」

彼女の短いコンパスに、しかしなかなか追いつくことができない。

それほど彼女が早いのだ。

風の化身のように。

彼女の足元に渦が巻く。

乾いた音をあげて落ち葉が舞う。

しばらく歩いて路地に入った彼女は、かすかに片目を細めた。

鉄さびたにおいが鼻をつく。

「アリサ…」

「犯行現場はここじゃない。ここにおいていっただけ」
血まみれの少女の亡骸。

腹にはナイフ創。

憎しみを感じてでもいるかのように、何度も突き立てた痕跡がある。

「リートだ。被害者を発見した早くきてくれ」

携帯電話に向けて告げた彼にアリッサはようやく視線を戻した。
こわばった瞳が彼女の困惑を伝えていた。

「…アリサ」

名前を呼んで手を伸ばす。

「大丈夫…」

そうして少女は笑った。

宿泊中のホテルに戻ったのは夜も遅くなってからだ。

ホテルのベッドに沈んだ少女の姿にジョージは無言のままで見下ろした。

うつぶせに動かないアリッサのブロンドが乱れている。

「…血みどろ死体は嫌いだって、そう言ったでしょ」

「消し炭にすれば良かったのに、誰も見ていなかったから」

「あんたが困るでしょ」

のろのろと体を上げた彼女はぺたりとベッドに座り込んだまま乱れた髪を手櫛で整える。

燕尾調の上着を腕から抜いた彼女に、ジョージは長い腕を伸ばした。

細身の上着を受け取る。

「帽子、飛んでってしまったな」

「…うん」

「また買おう」

「いっぱいあるからいらないわ」

ひらひらと手を振った彼女に、ジョージはその手首を捕まえる。

「君が怪我しないで良かった」

「：そう」

顔色があまり良くない。

「：アリサ」

少し眠ればいい。

彼女はまぶたを閉じるように、瞳を覆われた大きな手にアリッサの全身が脱力する。

「疲れた：」

あたりまえだ。

小さな体で精神を酷使する。

そして、研ぎ澄まされた神経が、彼女の疲労を倍増させる。

「疲れただろう：」

ベルベットのベストは首で固定されてむき出しの背中が晒されている。

これが成熟した女性であれば色気の一つも感じるのだろうが、アリッサの姿では色気というよりも大人の格好をした子供、というだけだ。

「：おやすみ」

ジョージの腕の中で眠った彼女。

男は黙ったままでもき出しの背中をなでた。

少女は、長い、長い夢を見る。

疲れ切った体と脳を休めるために。

「：ここ、どこ？」

白い世界にいた。

真っ白な世界。

全てが白だ。

彼女はあたりを見回して首をかしげた。

「ジョージ：？」

呼びかけても答えはない。

「ここどこ？」

何度声を上げてても答えはない。

答えなどあるわけがないのだ。

わかつている。

彼女の精神世界だ。

自分の世界。

真っ白い世界の中に、そして足元に深い穴があった。

穴の中は闇ではなく、穴の中も底のない純白だ。

真っ白な、全てが真っ白な世界。

アリッサはその穴の中につま先を落としてみた。

底もない。

「…この穴、はいったらわたしはどうなるの…？」

独白する。

真っ白い穴。

落ちたその先にはどんな世界が広がっているのだろう。

アリッサは物思いに沈んだままでその穴とも呼べない穴を見つめていた。白い部屋のような世界は、しかし広すぎて果てもない。まるで自分の精神世界そのものだ、と彼女は思った。

「ジョージ…」

ふと視界の片隅になにかを見た気がした。

顔を上げる。

「…！」

手を伸ばして、彼女はとっさにその手を引っ込めた。

だめだ。

触れてはいけない。

それは、彼女が侵犯してはならない領域だ。

そこは深い眠りでありながら夢の世界。ありえないとわかつていて、彼女はそれでも尚理解する。

ここは夢だ。

目を覚ましたのはベッドの中だった。

昨夜と同じ服のままで彼女はベッドに横たわっていた。

暖かい腕枕。

のろのろと顔を上げる少女は、やはり眠る彼の寝顔に吐息をついた。

暖かい腕。

もう片方の腕が彼女の体を抱き寄せた。

性的な衝動からのものではなく、ただ優しく抱きしめるだけだ。

「…アリサ」

優しい声色。

彼の声に、少女は再び目を閉じた。

どろどろとした疲労感に引きずられる。

男の胸に額を寄せて彼女は再び眠る。

おそらくこれから来るもののために、脳も体も休ませなければならぬ。

頭の片隅で、好きなように動ける大人の体力をうらやましくも思いつながら、彼女は睫毛を伏せた。

眠りにつく彼女の耳に、かすかに音が滑り込んだ。

「…好きだよ」

告げた男も意識的なものではなく、聞いているはずの少女も眠りに落ちる課程でほとんど聞こえてはいない。

今度こそ本当に少女は深い暗闇の中へと引きずり込まれていった。大男に守られて少女は眠る。

彼女はかき慣れた男の香りに安心した。

感じるのは違和感だ。

「キャシーさん」

ベルティはアパートメントの階段に腰掛けたまま濁った眼差しを上げた。

「なに？」

「違和感を感じる、と言ったらキャシーさんは笑いますかね？」

「：別に」

そう。

ベルティの腕は確かだ。

疑いようなどない。

それを知っている。

「：本当にこれはキャシーさん絡みなんですかね」

「フロリダから始まってどっかいったんなら違うんじゃないの？」

少し調べればキャシーがフロリダ在住だとわかるはずだ。

「ですよねえ：。マジックボムと違ってキャシーさんは隠れようと
してませんしね」

腑に落ちない、というベルティの言葉にキャシーは片方の眉を引
き上げた。

「なんだっていちいちマジックボムが引き合いに出されるのよ」
無然とした彼女の言葉。

「：失礼、ちっちゃい殺人鬼って似てるなと思うと、つい、ね」
へらへらと笑う。

こんなところがベルティを憎めないところだ。

他の者とは異なる。

外見に似合わず彼はこびへつらったりはしない。

だから、力任せの手段に及ばれることもあるのだったが：。

「ベルティ、あんたそのくせやめないとそのうち本当に殺されるわ
よ」

「心配かけてすみません」

腕の良い情報屋だ。

確かにコンピューターが蔓延する時代になったが、彼の確かな腕
は誰かが頼った。

「：俺みたいな時代遅れの情報屋なんぞ、今時つかってくれるとこ
ろのほうが少ないっすよ」

アルコールを煽りながら彼は笑う。

「じゃ、俺はこれで」

ベルティは言いたいことだけを言い連ねて去っていった。
相変わらずのよろよろとした足取りに彼女は笑った。

違和感。

そう。

感じていたのは違和感だ。

肌がちりちりとするような違和感。

「どこに行くの…？」

誰を捜しているの…？

始まりは確かにフロリダだった。

例の、ポール・アダーニを殺そうとしたその直後から始まった。
しかしそれはたまたまの符合でしかない。

「…覚えられた？」

独白する。

違う。

そうではない。

なにかはわからないが、そこにあるのは確かな違和感だ。

「ピアス！」

キャシーは携帯電話に怒鳴りつけた。

「…ワシントンに行ってくる」

電話越しに告げられた彼は思わず「そりゃまた遠くなところに」
とのんびりと考えたが、そうではないことを一瞬後に察した。

「…ワシントンって、ちょっと待て！」

「なによ、わたしに指図するつもり？」

「違う、今、例の殺人鬼が現在進行形で殺人してるところじゃない
か！」

「…ゲロったわね」

「…む」

冷ややかに彼女は告げる。

「大丈夫よ、殺されたりはしないから」
たぶん。

そう、自分は人とは違うのだから、と。

同じ頃、ワシントンにキャシーと同じように黒髪の少女がいた。
高校生くらいだろうか。

幼さの抜けきらない顔立ち。

鏡台の前に座った少女はブラシで髪をすく。

年齢に似合わない真っ赤なドレスを着た彼女は、ゆっくりと絨毯の上を歩くとその窓を開け放った。

見下ろす摩天楼。

宝石のような街並み。

彼女は夜の空気を胸一杯に吸い込んだ。

彼女の細い腰を強調するようなそドレスの下にまさかレッグホルスターが装備されているとは思わないだろう。

「高崎様、お迎えにあがりました」

「ありがとうございます」

ヒールのついた靴でドレスの裾をさばく彼女の様子は社交界慣れた人間のもののようでもある。

しかしそうではない。

ふわりとやわらかなファーの上着をまとって、彼女は男のリードに腕を絡める。

「本当のわたしはこんなにおきれいなじゃない……」

ぽつりとつぶやいたその言葉は、しかし小さすぎて誰にも聞かれることはない。

シンと冷え切ったような空気に、彼女はあたりを見渡した。

「どうかなさいましたか？」

「いえ、なにも……」

彼女は影であり、番人。

分相応でなければならぬ。

「……おかしな方向に暴走しているような気もするけど、この国大丈夫なのかしら……」

彼女の耳にも連続殺人事件のニュースが入っている。

しかし、マスコミを見る限り、この国の警察組織がどれだけこの事件の本質を理解しているのか…。

黒髪に組紐を垂らして彼女は男の車に乗り込んだ。

「お嬢さんはかわいらしいですね。チャイニーズ？」

「…どこからどう聞けば依頼人がチャイニーズ？」

男の耳を容赦なく引っ張った彼女は、肩をすくめてから窓の外を眺めている。

「ジャパニーズでしたか…」

「コリアンとかいったらぶつとばそうかと思ったわ」

番人、そう呼ばれることを彼女は気に入っていた。

「お嬢さんはかわいらしいですが、瞳が少々物騒ですね」

くすくすと笑う男に彼女は肩をすくめた。

なにかが渦巻いている。

それを少女も感じていた。

同じくワシントンにいるアリッサも、そしてフロリダにいるキャシーも。

鋭すぎる犯罪者の勘が、彼女らに異常を伝えていたのだ。

＊

静かな部屋の中で彼女はソファに沈み込んでいる。

「血まみれの世界…」

流血沙汰が嫌いなわけではない。

彼女が彼に言ったのは偽りだ。

「殺すことなんて、どうということでもない」

そもそも彼女が誰かを殺すのは「殺したい」からではない。

殺すことに何の意味もない。

「殺す…、殺してやる」

それでも、彼女にはわからない。
とんとんと指先で肘掛けをリズムを持ってたたきながら、思いに沈み込む。

肘掛けにあった手を上げて、その手のひらをじっと見つめる。
そこにあるのはひたすらの虚無。

自分の中にあるからっぽ。

「血なんて見慣れていたはずでしょ」

そう…。

いつも見ていた。

血を見つめ続けていた…。

「勝手に入ってこないで」

背後に感じた人の気配に彼女はつぶやいた。

「ノックくらいするのが礼儀じゃなくって？」

背後の人影に告げた彼女は、ややしてからゆっくりと振り返った。

二メートルはあるだろうか。

大男だ。

若い頃はスポーツ選手だったと言っても通じるだろう。

「…ブレット」

「手厳しいな。別に年頃の女性の部屋に入ったわけでもなかろう」

「…ちっちゃくって悪かったわね」

ハグをして頬にキスをする男に、彼女は素直に頬を向ける。

「正直なところ、君が手伝ってくれるとは思わなかったよ」

「報酬に目がくらんだだけよ」

にっこりと笑う。

「ああ、あれか」

報酬を「あれ」扱いで一蹴したブレットは室内を見渡した。

そもそも、ホテルの部屋に彼女の私物があるわけがない。

せいぜいあったとしても服くらいだ。

「…味気ないね」

「ホテルの部屋に味気もへったくれもあるわけじゃないじゃない」

連続殺人など興味はなかった。

自分がターゲットにされたときならば、反撃すれば良いだけのことだ。

「ところで、レディ」

なに？　と言いかけた彼女にブレットは振り向く間すら与えずに銃を突きつけた。

ゴリと耳の上で音が鳴る。

骨に響いた音。

「…もしも君が政府に害をなそうとするなら、わたしはいつでも君を殺すよ」

「どうぞ御勝手に」

細く小さな腕が静かに上がる。

天使のようにかわいらしい服は軽い素材でできており、それが幾重にも折り重なったドレス。

まるで、聖書にでてくるエンジェルのような。

「…でも、無抵抗で殺されるとは思わないことね」

細い指がブレットの銃に触れた。

持ち上がった腕。

細い無力な。

銃身に触れる。

「わたしが、あんたを殺すかもしれない」

銃身を押さえたままでゆっくりと振り返る。

静かな微笑は、はたして何を意味するのか。

瞳の奥底にたゆたう不穏に、男は厳しい瞳を隠せない。

「君は獣だ」

秩序など知らない。

「そうよ。だったらなに…？」

だったら何だというのか。

アリッサとブレットはにらみ合う。

傍目にはおかしい光景だったろう。

二メートルの大男と、小学校に上がったばかりにも見える小さな少女。

「獣には獣なりの生き方があるのよ。あんたたちとは違う」

ブレットは無意識に少女に左手を伸ばした。

大きなその手が少女の首に絡みつく。

少女の首を締め上げることなど簡単だ。

力をこめる。

軽く上に持ち上げただけで軽いアリッサの体は宙に浮いた。しかし、抵抗しない。少女は左手で銃身に触れたまま、ブレットの暴力を受け入れる。

かすかに口元に微笑が浮かんだようにも見えた。

彼女の足元から風が巻き起こった。

熱風だ。

「…っ！」

ブレットは我に返った。

思わずアリッサを放り出した。

殺したかったわけではない。

「…う…」

壁にたたきつけられる形になった少女は低くうめいた。

互いがなにかに取り憑かれたように。

アリッサの首にはくつきりと赤い指の痕がついている。一気に流れ込んだ空気に何度も咳をする彼女は恨めしげにブレットを見上げて呼吸を整えた。

「…殺さないの？」

「すまん」

殺したかったわけではない。

無意識に腕が動いた。

「殺したかった訳じゃない。少なくとも、今は…」

「あっそ。まあ、どっちでもいいけど」

絞められた首を手でさすった彼女は、やがて長い息を吐き出して

からソファに座り直した。

「きつと、わたしが死ぬときはあんたに殺されるときなんでしょうね……」

苦笑した彼女に、ブレットはかぶりを振る。

「いや、私では役不足だろう」

おそろく殺すことができない。

そんなことは誰よりもブレット自身が知っていた。

「ブレット……？」

「私はそんなに自分を買いかぶってはいない」

「そのくせに、殺すとか言うんだ？」

「全力を尽くす、という意味さ」

そう。

それが彼の任務だ。

ケース・アングリーボマー。

そう呼ばれた事件以来、彼女の監視の担当は彼だ。

いくらジョージ・リートが彼女のそばにあったとしても、ブレット・オルコットの役目はまた異なるのだ。

「ブレット。今回の事件、ただの事件じゃないからわたしを呼んだんでしょ？」

ソファの後ろからでは彼女の姿は見えない。

完全にソファに沈み込んでいる小さな体。

見抜かれていた。

「……」

「……狙われているのは、本当は裏社会なんじゃなくって？」

「おそろく」

世界的に追われている少女殺人鬼は三人。

ケース・アングリーボマーの犯人、今現在はアリッサと呼ばれる通り名マジックボム。

スラム街の殺人鬼キャシー、通り名をカーリー。

そしてもうひとり、高崎千歳。

「黒髪ならわたしは除外される。でも同じ黒髪でもカーリーはアメリカ在住で、チトセは日本在住よ」

「五週間前、たまたま二人ともフロリダにいたことが捜査上にあがっている」

「：ふうん。でもそれはおかしいわね。チトセは死天使のボディガードのはずよ？　チトセがひとりでいるなんて信じられない。そのへんも捜査しているんでしょう？　どうなってるの？」

「君が倒れてテヘランにいる間、綾瀬臣が渡米していたのはほんの一週間だ。そのときチトセは来ていない。そして五週間前は綾瀬臣がアメリカにきていない。そう考えればチトセが個人で単独で動いている、としか考えられないんだ」

「本当に？　死天使はCIAと五週間前に接触しているのよ？」

「バート・レインだろう？　それは知っている。しかし、バート・レイン自身が死天使の元ボディガードで彼が日本に送り届けている。そう考えるとチトセが彼女についていたとは考えがたい」

黒髪の少女、と警察関係者がトップクラスの殺人鬼となれば思い浮かべるのは二人しかないのだ。

高崎千歳。

日本人の少女で、綾瀬家によって全ての情報を閉じられた殺人鬼。死天使以上に犯行が危険視される少女だ。

日本の裏社会から呼ばれる名は花鬼。

その名から、もじって世界ではこう呼ばれる。

「フラワー・デモンか…」

「チトセを追跡するのは簡単よ。なにせ、あの子は隠れようとはしてないから」

「：まいったな」

追うべき人間が三人いるとは。

ため息をついたブレットはアリッサの言葉に慌てたように携帯電話を取りだした。

「ブレット」

彼の名前を呼ぶ。

「なんだ？」

「ありがとう」

吹っ切れたわ。

彼女の言葉は謎めいていて、ブレットを困惑させたがそんなことを言っている場合ではなかった。

アリッサの言葉が本当ならば、今、ワシントンに三人の殺人鬼が集まろうとしているのだ。世界を震撼させた殺人鬼が…。

椅子に座ったまま渋い顔をつきあわせたのは捜査官らだ。

「…どうするんだ」

考えても、考えがまとまらないのだ。

「情報を整理しよう」

ブレットが告げた。

「まず、三人集まると言っても、マジックボムはこちら側だ。契約をしている以上はそれについては問題ないだろう。高崎千歳はアメリカ入りしているらしいが、動きは今のところ見られていない。カリーは情報の真偽を確かめにこちらに向かうだろうというのはマジックボムの言だ」

敵対するかもしれないのは三人中、二人だけだ。

そして、現在彼らが追っている事件は裏社会の事件ではない。

民間人の子供を巻き込んだ殺人事件であり、考慮すべきは一般庶民への被害と、万が一裏社会の殺人鬼たちの抗争になった場合の被害の拡大をいかに最小限に抑えるか、ということだった。

「…誰と誰を守れて教えてくれれば守るけど？」

ひどく限定的なアリッサの言葉に、別の捜査官が「そういう問題じゃない」とぼやいた。

要するに、言われなければ守るつもりなどかけらもない、と彼女は言いたいのだ。

「捜査官全員、と言えば君は守ってくれるのかね？」

ブレットが代表したように発言すれば、アリッサは肩をすくめた。「いやな予感がしたから頭は休ませてあるから半日くらいなら持つわよ」

冷静な彼女の言葉。

「…ベス、マジックボムについててやれ」

「えー」

ブレット・オルコット直々の指名に、不満を漏らしたのはアリッサ自身だ。

「ブレット、この子、実戦経験なんてあるの？」

それは戦場、という意味での言葉ではないだろうが。

明らかに面倒くさそうにつぶやいた少女に、エリザベスはむつとした。

「これでもわたしは捜査官よ。修羅場はくぐってきているわ」

子供扱いをしてかまわないと告げた相手に、思い切り馬鹿にされたエリザベスとしてはそう言いたくなるのもしかたのないことだったのかもしれない。

だから、大丈夫よ。

そう言った彼女を横目に眺めてから、アリッサは馬鹿馬鹿しそうに鼻から息を抜いた。

「そう…、大丈夫ならいいけど…。ま、大概、わたしと初めてくだ奴はぶっ倒れたり吐いたりするから覚悟しておいてね」

あっさりと言った彼女に、一瞬ジョージは困ったように首をかしげたが、白いスカートの巻かれた首にふと気がついた。

白いドレス。

彼女が愛らしい服を着ているのはいつものことだが、わざとなにかを隠すようにスカートを巻いていることが異質だった。

「アリサ、首どうした？」

「なんでもないわよ」

大したことじゃない。

剣で貫かれることと比較すれば、彼女にとって首を絞められたときの鬱血などまさしくどうでも良いことだった。

「すまん、俺が首を絞めた」

ブレットがあっけなく認めた言葉に対して、ジョージは一瞬驚いた顔をしたようだが当のアリッサにとってはなんでもないことだったようで淡々とした面持ちを変えなかった。

「なんて顔してんのよ、ジョージ」

「いや、ちょっとびっくりしただけだ…」

大人用の椅子では、アリッサにはあわず足をぶらぶらとさせているだけだ。

彼女の厳しい眼差しはエリザベス・マーレイを見ている。

おそらく、アリッサはアリッサなりに心配しているのだろう。

エリザベス・マーレイを…。

唇が動く。

静かに、ひっそりと。

「…大丈夫かしら」

彼女がそうつぶやいたようだった。

加速していく。

傭兵には、思想はない。

だから一般的な怨恨に関係する事件に裏社会に関わりがない。

殺害が加速している。

「…ピースとマークが付いて来れないって言うからさ」

「で、俺？」

アシル・ブラスは旅客機の席に座ったキャシーに首をかしげた。

「だって仕方ないじゃない」

彼女は新聞とにらめっこしたままで考え込んでいる。

もっとも新聞のほうは開かれているだけで読んではいないようだ。

「わたしだと思う…？」

「わたし？」

「ターゲットに決まってるでしょ」

「どうだろうな」

黒髪など山ほどいる。

フロリダ在住の黒髪の少女となれば、多少は数も絞り込めるだろうがそれでも膨大な数になる。

「頭が黒いだけじゃ分析しようもないだろう」

「まーね」

「違うだろ、あんたが気にしているのは殺人犯のことじゃない。殺人犯のことを気にしているわけではなく殺人犯が殺人をする理由に興味があるんだ」

悪意を感じ取った。

サイコパスの少女。

感じ取るからこそ、気持ちが悪い。

「気持ち悪い…」

自分ではないのかもしれないし、そうなのかもしれない。

彼はなにかを探している。

探し続けて移動している。

たったそれだけのことだ。

「サイコはサイコが嫌い、か…」

「サイコ同士がぶつかってたってお互い反発するだけのことじゃない」

声が聞こえるような気がする。

声が、聞こえる…。

殺せ。

殺せ、殺せ…。

殺してしまえ…。

「殺すと興奮するのかしら」

「あんたは？」

「…別に。力を使うときはすっきりするけど」

彼女の力を考えるとそう簡単に殺されるようなことはないだろうが、連続殺人のことを考えると内心穏やかではいられない。

穏やかでいられない、というよりも小児性愛者の気持ちが理解できずにぞっとするのだ。

「少女が好き、か…。気持ち悪くないか？ それ」

「うん、気持ち悪いわね」

しかも、少女相手に性行為を行っていない。

やったとしても死後だろう。

なにかがわかりそうで気持ちが悪い。

何度も何度も、刺し殺した。

まるで自分にはできない性行為の代償でもあるかのように。

そして、性行為の代わりに彼は彼女らを殺したのだ。

「あんたは、こんな小さい子供相手にセックスしたいと思う？」

新聞を突きつける。

直接的な彼女の言葉に、少しだけ驚いた顔をしたアシルは首を横に傾ける。

「何で俺に聞く？」

「…あんたならわかるかと思ったのよ」
子供。

「小児性愛ってよくわかんないわよね」

欠陥品。

キャシーも、アリッサも人間として欠陥品だ。

「そうだな」

小児性愛など理解できない。確かにアシルもかわいらしいとは思
うだろうが、セックスをしようとまでは思わない。

普通の人間であればそうだろう。

どうすれば性欲の対象にできるのだろうか。

そんなことを考えながらアシル・ブラスは肘をついたままで目を
伏せた。

横でなにやらキャシーがぶつぶつとお経を唱えていたようだった
が、考え込んだアシルの頭には届かなかった。

過信するなど、彼は言った。

彼女は過信していないと言った。

そして、彼女自身は犯人のルールからは外れると。

頭髮をくるりとまとめた彼女はエリザベスからカツラを受け取る。

黒髪のカツラ。

染めることはジョージに大反対されたため思いとどまった。

「…それっておとりになるってことでしょ？ 大丈夫なの？」

「大丈夫よ」

そもそも犯人が狙っているのは中学校に上がる程度の少女だ。アリッサは異なる。

「本当に不思議な人」

「ほめ言葉だと思っておくわ」

不思議な子供。

一般人の反応などそれでいいのだ。

彼女はそう思う。

「：おかしいわ」

「いいのよ、それで」

そう告げてアリッサは笑った。

黒いカツラの上に白いミニハットをくくりつける。

カツラが飛ばないようにという彼女なりの配慮だが、ミニハットをくくりつけるリボンでどの程度留められるかはたして謎だ。

白いドレス、白い靴、白いミニハット。

まるでベールガールのようだ。

「本当に、あなたが殺人鬼だなんて思えない」

「殺人鬼っていい方やめてくれない？ わたしはただのマーセナリーよ」

殺人狂ではない。

一般人も殺したことはあったがそれは意図的ではない。たまたま巻き添えになっただけだ。

「わたしたちにはどっちも同じよ」

彼女はこれから殺人を犯すのだ。

もう腹をくくっている。

「だいたいさ、迷惑なのよね」

しかめつらしい顔をした少女にエリザベスは視線を投げかける。

「迷惑？」

復唱した。

「そう。迷惑なのよ。だいたいこんな事件が起こるたびにわたしは

ちはなにもしてないのに引っかかり回される。それが迷惑以外の何だ
って言うの？」

すばらしく独善的な理論だが、それは確かにもっともだ。

エリザベスはなにやら感心した。

「なるほど、そういう考え方もあるのね」

「なるほどじゃないわ。ただでさえジョージとかブレットとか面倒
くさいのにいつも監視されてるこっちの身にもなりやがってよ」

面倒くさい、という言葉で一つにまとめられた二人の捜査官たち。

その言葉に、エリザベスは瞬きを繰り返した。

「あなた本当にジョージのことなんとも思っていないの？」

「思っていないわよ、最初に会った男ってだけ。あいつ、昔から面倒
くさくってさ、本当にいやになっちゃう」

肩を落とした彼女は肩の上でぱたと手を振った。

「…」

黙ったまま彼女を見つめるエリザベスに、アリッサも目をぱちぱ
ちと瞬いた。

「なに？」

そもそもアリッサに恋の駆け引きなど無謀というものだ。

自分ですら自分の感情を理解できていないのだ。

「なら、わたしがもらってもいいの？」

「は？ なんのこと？」

「ジョージのことよ。わたしがとってもいいの？」

直接的に言わないと通じないらしい。

あきれたようにエリザベスが告げれば、アリッサは「ああ」と言
って廊下を歩く。

「どうぞどうぞ。あいつ野暮天だからはっきり言わないと通じない
わよ」

傍から見ても野暮天ではあると思うが、こうまではっきり野暮天
と言い放たれるジョージはどうも本当にわかりやすい性格らしかつ
た。

「確かに野暮天ね」

くすくすと笑ったエリザベスに、アリッサは「でしょ？」と相づちを打った。

「まさか、あんた、たかがそんなことでわたしに風当たり強かったわけ？」

「：だって、彼、あなたにはとても優しい目をするじゃない」

「わたしが子供だからじゃないの？」

しれっとした表情のままアリッサが応じれば、エリザベス・マーレイは口元をゆるめる。

「まったく：」

ひとりできりきりしていた自分が馬鹿みたい。

エリザベスはほえんだ。

ジョージ・リートはいつもアリッサに会うわけではない。

だからこそ気がつかなかった。

彼には、仕事が恋人なのだとエリザベスは思っていた。

同僚思いで、優しく、正義感の強い捜査官。

FBIの女性捜査官からはひそかに人気があるのだ。

どれほど彼が優しい瞳をしても彼には恋人がいないのだと思うとなぜか安心した。

「さあ、行きましょう。あなたの野生の勘とやらの期待させていたたくわ」

これ以上の犠牲を出さないためにも。

世界は不公平だ。

傷つく人がいるのに、笑っている人がいる。

それが不公平だ：。

不公平だと思う。

「：畜生」

畜生畜生畜生：。

「不公平だ不公平だ不公平だ：」

何度も何度も繰り返す。

傷ついたというのに。

あの子は傷ついていたのに…。

コートポケットにナイフを忍ばせて彼は外に出た。

次の獲物を探すために。

＊

のんびりと買い物続ける彼女らはあたりを警戒した。

もちろん、彼女らの周りにはさりげなく男性捜査官も配置されている。

もったもそんな存在よりもアリッサ自身が一番の武器だ。

「不公平だ…」

ショッピングモールのざわめきの中でアリッサの耳が音を拾った。

「…?」

声は小さすぎて音としてしか認識できない。

「レジ行ってくるね」

エリザベスの声に我に返った。

「あ、うん」

犯人の行動範囲はだいぶ狭まっていた。

誘拐を狙うならば人混み、もしくは人気の少ない場所だろう。

だから、アリッサは派手な格好でいながら清楚な少女らしい服を選んだ。

カツラの黒髪がひどく映える。

「…いつてらっしゃい」

手を振った彼女はのんびりと服を見て回る。

もったも婦人向けの洋服売り場だ。

彼女に合う服などありはしない。

自信はあった。

いつでも反撃などできると…。

突然、頭に衝撃を感じたのは一瞬。なにか固いもので殴られた、

と認識する。

しかし衝撃が強すぎて意識を保っていることができない。ぐらりと傾いだ体を誰かの腕が支える。全身の知覚を総動員させて彼女は情報を集める。

筋肉はそれほど付いていない男の腕。薄い胸。

こんなくだらない男に不意をつかれたのかと思うと、なにやら腹も立つ。

そんなことを考えるが後の祭りだ。

そもそも気がつかなかったのはなぜだ…。

そこまで考えたアリッサは、再びなにか固いもので強く殴られて今度は完全に意識を失った。失態だ、と彼女は薄れていく意識の下で思った。

思ったような気がした…。

再び、真っ白の世界に引き戻された彼女は、金色の睫毛を上げた。

「…ここ」

自分の心だ。

アリッサはそう思った。

色のない世界。

なにもない世界。

「お似合いだわ」

苦笑う。

なにもない、からっぽ。

なにも必要としない、ひたすらの無。

「わたしの声は届いてる…？」

ぼんやりと浮かび上がる影に彼女は眉をひそめた。

悲しい…。

「わたしの声は届いてるの？」

言葉を繰り返した。

何度も手を伸ばした。しかしそのたびに彼女はとっさにその手をひいた。

どうすればわからなかった。

自分が求めてはならない存在に懂れる。

恋い焦がれる。

喉がひりついた。

絶叫した。

喉をかきむしるようにして、声にならない声を上げる。

叫びはとまらない。

暴走する。

彼女は純白の世界の中で何度も意識を失い、そうして何度も絶叫した。

それを幾度となく繰り返して、そうして完全な闇の中へと落ちていく。

誰も必要とされていないなら、なぜ自分は生まれてきたのだろう…。

そんなことを思った。

「…違う」

わたしはそんなこと思っていない。

なにも思っていない。

少女は顔を上げた。

黒髪の彼女は立ち止まる。

「…先に帰ります」

彼に告げると、少女はさっさと歩き出した。

社交界。

自分には必要だと、彼女の雇い主が告げたため、やむを得ず参加したのだ。

そもそも自分は社交界になど出たくなかった。

そんなものは必要ないと思っていたから。

「必要ではないのに」

自分などがいなくても彼女の雇い主は危険にさらされるようなこ

とはないだろうが、彼女の気分は重い。

彼女の足音がないのはいつものことだ。

足音も気配も感じさせない彼女。

「…なにかしら」

ホテルのそばのショッピングモールに歩みを向けた彼女は緊迫した空気に息を詰めた。

おかしい…。

切迫した空気をを感じる。

「もののしいわね」

あちこちにさりげなく立っているのは捜査官か警官だろう。

もっとも制服組ではなさそうだ。

そうしてから彼女は赤いドレスを着た少女は上着を肩にかけてから軽く自分の腰に触れる。

大きな花をかたどったベルトがアンバランスながら美しい。

「…誰？」

目が合った。

上背の大きな、瞳が印象的な狼のような男。

手首をねじり上げられる。

「…痛い」

ひどく冷静に彼女が告げる。

「君は、裏社会だな」

裏社会。

「…違います」

自分は裏社会などではない。

周りとはともかく、彼女自身は自分は裏社会ではないと認識していた。

「…高崎千歳、か？」

「どちらさま…？」

「俺は、FBIの捜査官ブレット・オルコットだ」

「はじめまして」

彼女は思考を巡らせた。

最近捜査官に追われるようなことをした記憶がそもそもない。
殺人はこの数年していないはずだ。

「…捜査官のオルコットさんが、わたしになにかご用ですか？」
ねじり上げられた手首を離してもらいたくて彼女は睫毛をまたたかせた。

「あの、離していただきたいんですが…」

「君は、高崎千歳だな」

「…はあ」

後ろめたい気持ちがないからこそ、彼女は本名を名乗る。
花鬼、と呼ばれることもあるが、それがあまり好きではなかった。

「…今、ワシントンがどんな状況にあるか知っていて来たのか」
「だって…、パーティーに出ないといけないから…」

困り切ったため息をついた彼女は、男に引きずられるまま歩き出す。

「あの…！ わたし別に人殺しするために来た訳じゃないんですけど…！」

小さく告げれば、ブレットは足を止めた。

「…フラワーデモン」

「はい？」

「高崎千歳だな」

「…はい」

千歳はすでに反論する気力もない。

騒動を大きくしたくないという彼女の思いもあった。

「日本に帰りたいんですけど…」

「今、連続殺人犯のおとり捜査中だ。だいたい君みたいな子に今ワシントンに入ってこれると我々がこまるんだ」

なにやらすさまじく上から目線の彼の言葉に、高崎千歳はぶすくれた。

「わたし、ものすごく関係ないような気がするんですけど…」

そもそも、ショッピングモールに出たのは、いやな気配を感じたからでしかない。

物事を引っかかり回す趣味は持ち合わせていない。

細い手首を捕まれて早足にブレットを追いかける彼女はそうして彼の後ろ姿を見上げた。

「君らのおかげで黒髪の女の子の殺人事件が相次いでいるんだ、反省して協力しろ」

「…はあ？」

なんだそれは、と言いかけるが男の形相に言葉を飲み込んだ。

殺人能力はそれなりだと思うが、自分の意志で彼女は人をあやめるわけではない。

「…別にわたし傭兵じゃないですし、殺し屋とかでもなんでもないんですけど」

ぼそぼそと言いつつ訳するが、彼にとってそんなことはどうでもいいことらしい。

「なぜ殺す」

後ろ姿のまま彼が尋ねた。

「…それは」

それは。

「わたしはあの方の番人だからです」

彼女のために人を殺す。

彼女を守るために人を殺す。

それだけのことだ。

彼女は、それだけの価値がある。

そして、高崎千歳は生まれた時から運命づけられた。たったそれだけのこと。

「わたしは花鬼なんて名前じゃないです…」

むすっと頬をふくらませた彼女は、それこそ鬼のような形相で振り返られぎよつとしたように足を止めた。

「…なんでもいい。協力するのかしないのか」

「…わたし、キャシーやマジックボムみたいに得体の知れない力をもってませんよ」

暗にそいつらに協力させればいいじゃないかと言った彼女に、男は「もうやっている」と言った。

どうしてもブレットが苦虫をかみつぶしたような表情になるのは、高崎千歳のその反応ゆえだ。

気まぐれな、自己本位な女子高生のような態度。

マジックボム。アリッサという規格外の犯罪者とのつきあいが長いせい、この高崎千歳の反応についていけないのだ。

「…オルコットさん。わたしに協力させたいのなら、わたしの雇い主に電話してもらえませんか？」

そうしなければ彼女は動けない、と高崎千歳は言う。

「わたし、無契約で動いているわけじゃないんです」

「…君の、契約主というのは…」

「知っているはずです」

時代錯誤な。

黒髪に飾られた組紐。

そこに下がる組み木細工で作られた御紋。

装飾性も強い飾り紐のなかに、異質な雰囲気醸し出す。

「…」

今度はぎょつとしたのはブレット・オルコットのほうだ。

藤の御紋。

彼女の雇い主は、死天使だ。

「…まさか」

「まさかものにもそんなのそっちで知っているんじゃないんですか？ わたしの情報は綾瀬家で管理されている。それがどういことなのか」

機嫌が悪そうな彼女の眼差しはブレットを見つめている。

「…わかった」

死天使を守る番人。

それが花鬼だと。

「離してくださらない？」

力尽くで捕まれた手首は内出血していた。

乾いた音を立てて彼の腕を拒絶した高崎千歳は懽然とした表情のままドレスのベルトを直した。

死天使の所有物。

それが千歳の誇りだった。

高崎千歳という個人でなくいいと思った。

いつか彼女の兄は、綾瀬臣よりも先に死ぬ。そのために彼女は教育された。高崎千歳はそういう存在だった。

それ故に、彼女は自分のために人殺しをしているわけではないのだと…。

目を覚ました。

顔を上げる。

背中が痛い…。

「…」

いつだったか戦場で野宿する羽目になったときも、アリッサの体をジョージが苦痛から守ってくれていた。

ここはどこだ。

彼女は視線を巡らせる。

同時に頭が冷静に回転をはじめた。

とどのつまり、拉致されたわけだ。

「それにしても…」

ここはなんだ。

人の気配のないビル。

本当に人がいないのか…。

彼女は首をかしげた。

足かせと手かせ。

はめられたそれに彼女は耳障りな音を上げる鎖に眉をつり上げた。

「なにこれ」

枷をはめられた足首は、ぴったりと肌に鉄が張り付くほど細い。

要するに、その状況を分析するに、彼女が枷をはずそうそうとして力をつかえば自分自身も大やけどを負いかねない状況だ。

獣を収容する檻。

なにもない部屋。

「君はかわいいね…」

だけど、彼女には及ばない…。

ぼそぼそとスピーカーから聞こえた声と、天井に取り付けられた定点カメラに気がついた。

「なに？ 泣き叫ぶと思ったわけ？」

不機嫌な表情のまま告げた彼女に、男らしい人物はスピーカーの向こうで笑ったようだった。

「…君は、今までつかまえた子たちよりもずっと危険だ。それくらい僕にだってわかる」

馬鹿にするな。

なぜだろう、ひとりで勝手に納得して勝手にしゃべっているような印象の話し方をする男だ。

おそらく拉致されたときに感じた腕を持つ男だろう。

「…君は危険だ」

壊れたラジオのように勝手に話す。

「だから閉じ込めた…」

足かせをして。

カッラは外れていないらしい。

アリッサは黙ったままでカメラを見つめていたが、苛立ったようにカメラを破壊した。

ぱちんと、焦げた臭いをたてて煙をあげる。

彼女はパイロキネシス。

炎を操る。

「そんなことしても無駄だよ…。君は逃げられない。君の危険性はわかってる」

あちこちにおいてあるスピーカーから時間差でずれた音が聞こえた。

カメラもいくつか設置してあるのだろう。

自分の映像などどうするのか、アリッサには想像も及ばない。

「君の肌は滑らかで心地が良かった…」

うつとりとした声に、アリッサは顔色一つ変えずにあたりを見回す。

普通であれば、「気持ち悪い」とでも反応するのだろうが、残念なことに彼女は普通ではなかった。

「ビルごとぶっ壊そうか…?」

「できるならやってみればいい」

君ならわかるはずだ。

このビルを壊せば君自身だって危ない。

煉瓦造りの恐ろしくレトロな建物だ。

苛立たしげにあちこちに意識を向けた彼女は窓を割っていく。

市街地であればその爆破音で誰かが気がつくだろう。

天井を貫く。

「まあ、ゆっくりしていけばいいよ…」

微笑する気配が伝わってきた。

水も食べ物も与えられず、少女は檻の中に。

男は鑑賞するだけだ。

まるで水槽の魚が弱っていく様を見つめるように。

どんな強靱な意識を持っていたとしても毎日がそんな調子では活気も失われていく。

口渴と空腹。

彼女は檻の中で体を丸めた。

消耗を少しでも最小限におさえようと彼女は眠る。

手かせをはめられた腕も足も思うように動かせない。

触れられた指に彼女は鎖の音を上げて足を引っ込めた。人に触れられることを初めて気持ち悪いと思った。

「…抵抗できないだろう」

そうしなければ、君に触れることもできない。

相変わず一人でしゃべっているが、アリッサはつかまれた足首に硬直する。

「離して」

ばかりと火花が散った。

危機感を感じると同時に、彼女の頭は冷静だった。

「わたしを殺せると思ってるの?」

男の頭髮が焦げた臭いがする。

しかし発火には至らない。

もう何日たっているだろう。時間の感覚はすでに失われていた。

「離しなさい」

檻の鍵が開けられる音がする。

「かわいい服だね、誰が選んでくれたの？ お父さん？ お母さん？」

上半身を半端に起こした少女の腰を男が押さえつけた。

のしかかれる。

六歳ほどの小さな体。

黒いおっぱいのカツラに触れられた。

「…なんだ、これ…」

カツラじゃないかと。

「ご愁傷様、わたし金髪なのよ」

男が黒髪に触れようとした瞬間にあっさりとはずれたカツラに、アリッサが嘲笑した。

「なんだ！ 金髪じゃないか！ あの子と同じだと思ったのに！」

あの子と同じだと思ったのに！」

怒りにまかせて殴りつけた。

頭も。

腹も。

「…金髪なんて下劣だ！ 品性も何も感じられない！ 売女の持ち物だ！」

好きで金髪なわけじゃない。

内心思うが、能力が使えなければ非力なものだ。

空腹にぎりぎりまで体力を削られたアリッサには抵抗するすべがない。

ただ無力に殴られる。

そんな危険性は最初から知っていた。

だから危険地帯に向かうときは誰かしら大人を雇った。

意識を失うまで殴られた彼女は、ぐったりと檻の中で倒れ伏した。
「：こんなにかわいいのに、黒髪じゃないなんて：」

悲しげに黒髪のかつらをアリッサの頭に雑に乗せると、その体におおいかぶさった。

首筋に鼻を押しつけ、肌に舌を這わせる。

白いドレスを丁寧に脱がせていきながら、男は意識のない少女の裸体を抱きしめる。

「：どうせ勃たないんでしょ。このインポ野郎」

水色の瞳が開いた。

いや、それは幻覚だ。

裸の子供の体を抱きしめたまま男は硬直した。

あわてたようにズボンの前をくつろげようとするがうまくいかない。

当たり前だ。

彼にはできない。

フラッシュバックするのはかつてのガールフレンドだ。

「なによ、へたくそ。できもしないなら誘わないでよ、馬鹿」

怒って立ち上がったかつてのガールフレンド。

金髪だった。

「僕は：！　僕は：！」

ちゃんとできるんだ、ちゃんとできる。

少女の体には下半身を押しながら彼は唱えるように体を前後に動かした。

「ちゃんとなんてできてないじゃない、このヘンタイ」

声が響いた。

鋭く空気を引き裂く音。

バタフライナイフが開かれた音だ。

「あんたのはね、突っ込んでるって言わないのよ。それこすりつけてるだけだから」

はつきりとした声音に、男は虚ろな目を見開いた。
彼女に恋をしたのだ…。

電車の中で出会った彼女。

彼女も自分を愛しているはずだと。

両手に下げたバタフライナイフが二本。

ゆっくりと歩み寄るキャシーは汚らわしいものでも見るように両
目を細めた。

「わたし、あんたなんて大嫌いだし」

知らないし。

「殺しちゃだめって、おじさんが言ってた」

キャシーの後ろからついてくるのは姿だけは三人の中で最年長ら
しい高崎千歳だ。

「わかってるって」

二人の黒髪の少女に見とれてる痩せた男。

そんな男が十数人の少女らを殺したとは考えられない。

拳銃を構えた高崎千歳と、バタフライナイフを下げたキャシー。

どちらも犯罪者特有の暗い美しさを感じさせた。

「こ、ころすぞ！ それでもいいのか！」

腕に抱えた少女を殺すと、彼は言う。

しかし、二人の黒髪の少女は無言で肩をすくめるだけだ。

「どうぞ」

殺したければ殺せばいいという彼女らに、男は狼狽した。

「：殺してやる殺してやる殺してやる！」

叫んで、男がナイフを振り上げた瞬間だ。

千歳の銃が火を噴いた。

同時にキャシーのバタフライナイフが男の肩を捕らえる。

もんどり打って倒れた男に、キャシーは嬉々として飛びかかった。

「サイコ同士、楽しく遊びましょ」

どっちが上か。

彼女は笑う。

男に放り出された裸の白人の少女に、千歳は興味もなさそうだ。そもそもかけてやる上着すらもっていない。

「…アリサ！」

声が響いた。

「お早いおつきですこと」

皮肉混じりにつぶやいた千歳の言葉は、日本語だったためか駆けつけた男には届かない。

駆け寄りながらスーツの上着を脱いだジョージは他の誰が近寄る前に、アリッサの体を上着で包み込んだ。

「アリサ…」

蒼白の顔の少女。

脱力した体は、限界まで力をそぎ落とされた彼女の姿だ。

「アリサ…」

強く少女をかき抱いて、彼はブロンドの巻き毛に顔を埋めた。

呼びかけても少女は答えない。

汚らわしい他の男の性器などをこすりつけられて。

現場はキャシーと高崎千歳しか見ていないが、男の様子と少女の状況から見て取れる。

キャハハハと笑い声を上げるキャシーが男の片目に指を突き入れ、男が悲鳴をあげたが今のジョージには全く聞こえていなかった。

ベッドサイドの椅子に座る男は、もう二晩眠っていない。

点滴を通された彼女の細い腕。

うなだれた男の背中を見つめるのは高崎千歳だ。

病院のベッドで眠る小さな子供。

これが本当の意味での子供であったなら痛々しいもののひとつも感じただろうが、そこに眠っているのはそういった意味での「子供」ではない。

「…出て行ってくれ」

出て行ってほしい…。

ジョージが告げた。

その言葉に、千歳はかすかに瞳を閃かせる。
小さな手を握る男の姿に、千歳はかすかに笑った。

「…わたしは向こうにいます」

高崎千歳は会釈するときびすを返した。

アリッサは目覚めない。

彼女は、普通に生活しているだけでも疲労に耐えられないのだ。
それをジョージは知っていたはずだ。

「あんな報酬…」

自分はしがない公務員だ。

上層部の命令には従わなければならない。

彼女は報酬に目がくらんだ、という表現をしたがそうではないことをジョージは知っていた。

アリッサが仕事を受けたのは簡単な理由だ。

ビジネスとして、それを捕らえていなかったのだ。

だからこそ、それをなによりも知っていたのはジョージであったはずだというのに…。

「俺が悪かったんだ…」

大切な人。

愛すべき子供。

小さな子供の姿では、彼女の体力などたかがしれていた。
だというのに。

彼は、彼女にビジネスを突きつけた。

知っていたというのに…。

「…アリサ」

「…わたしは、サイコパスじゃない…」

ソシオパスでもない…。

ぽつりと声が響いた。

「わたしが捕まったのはジョージのせいじゃない」
目玉だけを動かして、少女がほほえんだ。

弱々しい微笑。

いつかの過去に見た彼女のほほえみ。

「アリサ」

「わたしがサイコパスじゃないから、わからなかった…。ジョージのせいじゃない」

自分が標的を理解し切れていなかったのだと彼女は言う。

「わたしなんか、性欲の対象にもならないのに…」

馬鹿な男。

そうつぶやいて彼女は目を閉じる。

力のない彼女の声は、ジョージに不安を与えた。

先日、彼女はイランで殺されかけたばかりだ。

イーサーによって保護されていたものの、実際に会うまで生きた心地がなかった。

そんなことがあったばかりとなれば、ジョージが不安になったところで仕方はない。

「心配ばかりかけないでくれ…」

「なに馬鹿なこと言ってるの、FBI」

そつと首を向けた彼女はにこりと笑った。

「相手が、サイコじゃなかったら、負けなかった…」

たぶん。

アリッサがもっとも不得手とする相手がサイコパスだ。

「…ごめん」

ジョージの言葉に、アリッサはもう一度笑った。

「…なんで謝るの。こっちは自分を、あんたたちは報酬を提供している。正式なビジネスよ…」

大きな両手に、アリッサは自分の手を包み込まれて抵抗をすることもなく彼をぼんやりと見つめていた。

「わたしは、あんたたちはなにも間違っていない…。これはビジネスなのよ」

もっとクールでないとあんたが疲弊してしまう…。

「アリサにあんなことをして…」

性欲の対象にした。

汚れてはならない。

汚してはならない…。

「守れなかった…」

後悔に満ちた彼の言葉を、少女は聞き流す。

守る、ということなど意味があるとは思っていない。

「…こ」

つぶやきかけた彼の唇を細い指が遮った。

ジョージの唇を押さえる。

「言っではいけない」

いつ死んでもおかしくない世界で生きている。

イーサーの邸宅で生き残ることができたこと自体、奇跡的なことだ。

「誰に見捨てられてもおかしくないのよ」

「アリサ…っ！」

彼女の腕をそのままひっぱった。

ただただ抱きしめる。

強い腕に、少女は嫉妬する。

「うらやましい…」

自分にはないものだ。

大人の体…。

もっと強ければ誰にも頼らずにすんだかもしれないのに。

ジョージに抱きしめられたまま、力の抜けた体はそうして眠りに落ちていった。

意識を失って深い眠りへと沈んでいくブロンドの巻き毛の少女。

アリッサが完全に回復したのはそれから一週間ほどたってからだ
った。

「…いつともいつとも、痛い思いして、損をしていいところもって

かれるのはわたし」

むっつりと黙り込む少女はふてくされた表情で、自宅のソファにいた。

目の前にいる男、ブレット・オルコットとエリザベス・マーレイから報告を受けていた。

「：報酬の書類だ」

「む」

目の前に出された権利書に、彼女は目を通した。

相変わらずだが、アメリカ政府というのは気前がいいのかお節介なのか堅物なのかいまいちわからない。

「：君が湾岸戦争のときにいたらよかった、だそうだ」

「そういえばあのときは思いっきり敵だったわね」

肩をすくめた少女に、エリザベスが苦笑する。

自分が痛い思いをする、という気持ちのアリッサにはないわけではないのだ。

しかし、ビジネスとしてそれはやむを得ないという気持ちもある。

「：ジョージは仕事？」

「ああ、君と正式に接触するのは私の役目だからな」

ブレットの言葉に、アリッサはつまらなさそうに眉をひそめた。

「まあ、いいけど。それで、ベスはジョージに告ったの？」

ぞんざいな彼女の言葉に、エリザベスは目をぱちくりとさせた。

まさか、この場でその話がでてくるとは思わなかったのだろう。気まずい沈黙が流れる。

「あー：、では我々はこれで」

困ったようなブレットの言葉に、アリッサが笑い出した。

「あんたたち最高、いいわ、今度は無報酬で仕事受けてあげる」

涙をこぼしながら腹を抱えて笑う彼女は、人差し指で涙を拭いながら肩を震わせていた。

＊

ワシントンのカフェでケーキをつつく二人の少女。

片やははっきりとした顔立ちの中国系の少女。

片やは流し目の印象的な日本人の少女だ。

もつとも傍から見れば、どちらも東洋人の少女という認識だ。

「帰らなくていいの？」

先に口を開いたのはキャシーだ。

「なんだか疲れてしまったので…」

ほとほと困ったような高崎千歳に、「ふうん」と相づちをうつ。

「結局、わたしたちボランティアだったわけよね」

「まあ、別にお金に困ってる訳じゃありませんし、いいんじゃないありませんか？」

ココアに口をつけた千歳は小首をかしげる。

「そりゃあんたはそうでしょうとも」

綾瀬家子飼いのボディガードだ。

「…えーと…」

なんと返せばいいのか考えあぐねているらしい。

「…キャシーさんは、どうしてあの犯人のことがわかったんですか？」

マジックボムにも。

もちろん、高崎千歳にもわからなかった。

その連続殺人犯の居場所をあつさりと言い当てた。

「…うーん、なんだろ」

ケーキにフォークを突き刺しながらキャシーはつぶやいた。

「わたしがあいつならそうするって思っただけ、かな」

強いて言うならばサイコパスとしての勘だ。

獣のような。

「…サイコってすごいんですね」

なにやら誤解を招きそうな彼女の言葉に、キャシーは笑う。

「わたしより、あんたより、マジックボムのほうがすごいし、死天

使のほうがすごい」

キャシーと高崎千歳がほぼ同格と考えるならば、マジックボムと死天使はそのさらに上だ。

その程度の認識ならばキャシーにもあった。

「：あたりまえじゃない！ わたしたちよりずっとお嬢様のほうが上に決まっています！」

その言葉に思わず、千歳が声を荒げる。

世間では、全米のマスコミを賑わせた連続殺人犯が確保されたことについて連日報道がくまれていたが、彼が探していたのがこの少女らの片方だとは世間もマスコミも知らない。

ごく一部の者だけが知る事実。

ワシントンに安穩とした時間が訪れる。

殺人鬼たちにすらも。

平等に：。

シャワーの雨の音がする。

アリッサはシャワーの湯に打たれたままで目を開けた。

まだ青い内出血が数カ所残っている。

腕、腹、脚。

あちこちに。

意識がない間になにかあったらしいが、彼女には正直なところどうでも良い。

やがて、体が温まった頃、浴室から出ようとした彼女の目の前で勢いよくガラス戸が開いた。

レオナルドは外出中であるから彼のわけがない。

思わず身構えるが、アリッサには相手が誰かわかっていた。

「：ジョージ」

幼い体を隠すこともせず、それこそ、うんざりとした眼差しを上げる彼女の瞳に映ったのはジョージの姿だ。

もちろん、彼女は目をわざとらしくそらすことはない。

自分の家に彼がいることは突っ込まない。

「アリサ」

きまじめな彼の瞳。

ふわりと笑った。

少女の姿の彼女を抱きしめる。

「ごめん…」

彼女の体のあちこちについた内出血の痕をたどる彼の指。

「…何言ってるのよ、しっかりしなさい」

ぎゅうぎゅうと彼の耳をつまんで引っ張る彼女のぬくもり。

まるで何でもないことでもあるかのように。

ふたりはその関係を受け入れる。

それでも、ジョージは知っていた。

男女の関係ではありえないこと。

その関係が保たれれば、彼女は逃げていけないから…。

5 (後書き)

第三章完結です。
次回から第四章に突入します。

第四章 光と共にあれ 1

静謐な空間。

静かな、薄暗い空間。

薄暗い部屋というものは安易な錯覚を生む。

電話が鳴る。

「…」

びくりと顔を上げた。

「おはようございます」

受話器を上げる。

「…お久しぶりです」

微笑する。

相手は知っていた。

彼も電話の相手を知っており、電話の相手も彼のことをよく知っている。

「お元氣そうでなによりです」

しばらくの会話の後、彼は微笑を浮かべたまま受話器を置いた。

＊

礼拝堂で祈りを捧げる彼の元に同僚の神父が一通の手紙を持って彼の前に現れた。

インターネットが普及した現在にあってえらくレトロだと感心しながら、彼は小首をかしげる。

「ありがとう」

金色の封蝋がされた手紙。

「…ほう」

「いつもの手紙、か？」

尋ねられて男はほほえんだ。

彼が司祭でなければ女性たちからひっきりなしにデートの誘いで

もきただろう。

しかし、残念なことに、彼は司祭であり神に仕える者だ。
とりあえず、そういうことになっている…。

「そのようですネ」

「神父様ー！」

格好いい神父がいる、という噂でその教会には学校が終わる頃は
女学生が集まることが多いが、彼女らにしても、彼にしても恋愛対
象になっているわけではない。

わかつているから彼女らは学校が終わった午後教会を訪れるの
だ。

「神父様、今日、学校でね」

「神父様、わたしの話が先」

変哲のない子供の会話。

彼、クリストファー・ジェファーソンはニコニコと笑顔のまま子
供たちの話を聞いている。

神父様、と繰り返されることに苦笑する。

そうして太陽が傾き出す時間になってようやくジェファーソンが
少女らを教会から急かす。

「ほら、そろそろ帰りなさい。おうちの人心配する」

「教会にいるって知ってるから大丈夫ですよ」

ああ言えばこう言う。

そんな年頃の少女たち。

「家につくまでここにいられるわけじゃないでしょう。本当に帰り
なさい。夜は物騒だ」

少女らは「大好きな神父様」の言葉に、「はい」と首をすくめ
た。

憧れの神父様に教会への出入り禁止を言い渡されるのではないか
と思えば、彼の言葉も聞こうというものだ。

「わかりましたー」

間延びした言葉だが、ジェファーソンは彼女らの遊びたい盛りの

気持ちも理解している。

あたりまえだ。

今の時代にあって、信仰など古くさい面も持ち合わせている。
それを彼はわかっていた。

「気をつけてお帰り」

「さよならー、神父様ー。また明日ー！」

「また明日いらっしゃい」

穏やかに手を振る彼に、少女らは笑顔でぶんぶん手を振っている。

かわいらしいものだ。

どこか、天井から世界を眺めている様子の彼。

金色の髪の毛、青い瞳の。

「…ちよつと出かけてきます」

「ほいよ」

行ってこい。

同僚の男は片手を上げた。

「…しかし、おまえは堅苦しい奴だな」

あきれたような彼の言葉にジェファースンは口元に微笑を浮かべる。

「しかたない、これが私だ」

「なるほど」

ジェファースンにしろ、その同僚の男にしろ、彼らは普通の司祭ではない。

もっとも司祭であるから「未婚」ではあるのだが、そういう問題ではなかった。

ローマンカラーを脱いだクリストファー・ジェファースンは黒いスーツに着替えた。

彼は、神父の顔をしてはいけない時があった。

それは彼の同僚の男もよく知っている。

そもそも、知っていると言うこと自体、その同僚自身が似たよう

な立場にある、とも言えるのだが彼らはそれについては言及しない。彼の自室にはなぜかバーベルが置いてあるが、それを知るのはごく一部の人間だ。

静かな音が響く。

水の音だ。

小川の流れる音。

「このようなところで、どうなさったのですか？」

初老の男。

若いジェファースンと同じように静謐を絵に描いたような男だ。

「：知っているだろう」

「：」

つまり、そういうことだ。

「魔女、ですか？」

「そうだ」

魔女。

初老の男の言葉に、ジェファースンは視線を落とした。

「詮索してよろしいですか？」

「かまわんよ」

「：どのような大罪を犯したのです？」

「信徒の、殺戮だ」

短い男の言葉に、彼は目を剥く。

「相手が信徒、ですか：？」

「そう、しかも信徒らの金を目的にした、最悪の男だ」

「：無辜の民でしょうに」

ターゲットが犯罪と関わりを持ち、その犯罪が犯罪者同士の間で行われたものならば言うまでもない。

「司祭の身でありながら、奴は略奪し、女性に暴行をした：！　そのようなこと許されるわけがない：」

怒りに肩が震えている。

許し難い行為だと非難する彼に、ジェファースンは「それで」とつぶやいた。

「まさかヴァチカンがその男に手を出せないと…?」

「そうだ」

その男は、裏社会を雇い自分の護衛をさせているのだと、初老の男は言う。

圧倒的な暴力を振るいながら、圧倒的な暴力で身を守る男。

現代のヴァチカンでは手を出すことすらできない。

カトリック教会は暴力の機関ではない。

少なくとも、今現在は。

「：わかりました」

それが手紙の内容なのだと言彼は理解する。

「頼むよ」

胸の前で十字を切った老人はそうして歩き去っていく。

スーツの内ポケットから手紙を出した。

そこに書いてあるのは名前。

マッチを取り出したジェファースンは手紙に火をつける。

静かに、風を流すように燃えだした便せんに、彼は目を細める。

おそらく、老人の出した指示はそれ以上の意図があることは彼には理解できた。

なにかが絡んでいるような気がする。

そんなことを思いながら、便せんが燃え尽きるのを見守った。

胸ポケットからサングラスを取り出した彼はそれをかけて歩き出す。

優しくて格好いい神父様、などではない。

冷徹な、教会の暴力を一身に負った者。

それが彼の正体だった。

「執行官」

とあるホテルの一室で告げられて彼は目を細めた。

「執行官、掛けてくれ」

「：彼はなにをしたのです？ ただの略奪行為ではないでしょう」
尋ねるジェファアソンに、目の前の男は厳しい眼差しのままで書類を投げた。

「なにをしたかはそれを読むといい。君は執行官として命令に従えばいい」

命令、と彼は言った。

「わかりました」

ファイルを取り上げた彼は、相手の言葉を了解してきびすを返した。

金色の髪を額からかきあげながら、彼はファイルを開いた。

麻薬の売買、違法取引。

プライヴェートでは彼は、ターゲットを自殺にまで追い込みそして全財産を奪っている。あきれた強欲司祭だ。

司祭という立場を利用して犯罪を犯している。

それがジェファアソンの気に障った。

司祭が人を殺すために武器を扱う。そんなこと許されるわけがなかった。

だが、それを言うならば彼も同じだった。

ジェファアソンも同じように帯銃を許可されていたが、彼の場合はかなり特殊な立場にあった。

「司祭、か…」

聖職者。

どれだけの人間が聖職者という立場を隠れ蓑にして非道な行いをしたというのか。

それを思うと彼は背筋を正す。

あつてはならないはずの事態。

「：私は」

それを正すために任命された。

「ひとつだけ、よろしいですか？」

背中越しにジェファアソンが口を開く。

「誰に協力を要請してもかまわんよ。それがたとえ裏社会であつても」

「はい」

「君ひとりではさすがに荷が重いだろう」

「わたしはいつも自分を買いかぶつてはおりません」

「…そうか」

買いかぶったりはしない。

自分は凡人だ。

彼は思う。

「…そうだったな」

クリストファー・ジェファーソンはいつの時にあつても冷静だ。

冷静すぎるほどに。

だからこそ、執行官として任命を受けた。

「…君は、神の名において断罪する者」

並大抵の司祭ではそんなことできはしない。

なぜならば躊躇が生まれるからだ。

誰かを殺すことに対して。

人の命を奪うことに対して、だめらっているようでは執行官はつとまらない。

「刑を執行する。それが君の任務だ」

「はい」

死刑執行。

ヴァチカンの暴力を担う者。

それが彼自身の役目。

「…だが、君が我々の知らないところで誰に協力を求めても、我々は関知しない」

「ありがとうございます」

彼の殺人は、許されるのだと。

「…あなたに、神の御加護がありますように」

一人、歩道を歩きながらジェファーソンは独白した。

思い出すのは、それこそ聖職者にも近い慈愛の心を持つ乙女のことだ。

優しくほほえむ姿はまるで、東洋における仏教の菩薩のようだ。ジェファアソンは典型的なクリスチャンだが、カトリックの教義を他教者に押しつけたりすることはなかった。そして、若者に信仰に無関心な若者に押しつけることも好きではない。

そんなことをしたところで信仰には意味がないことだ。信じる心とは、考えることではない。

彼はそう思っていた。

そして、彼女はクリスチャンではないにも関わらず、どんなときでもジェファアソンを信じた。

誰よりも強い女であるはずなのに、彼女は彼を頼った。

まるでそこにある信仰心に救いを求めるように…。

彼は彼女を不幸だと思う。

全てにおいて恵まれておりながら、その実、彼女の精神のなんと孤独なことか。

彼女の孤独があまりにも哀れでならなくて、そう彼は手をさしのべた。

「：愛されているというのに」

あなたはなんと孤独な人だろう…。

そこにある孤独を誰も取り除いてやることができないのだ。

天才であるが故に彼女は誰よりも孤独だ。

祈りを捧げるようにしてから、彼は教会に戻った。

「お帰り、どうだった？」

「どうもこうもないですね、相変わらずです」

淡々とした彼の言葉に同僚の司祭は肩をすくめた。

「相変わらずっていうとー、また君のファンに怒られるのは俺か…」
ファン、というのはジェファアソン目当てに教会に通ってくる少女たちをさしていたが、どちらにしたところで「えー、ジェファアソン神父様いないんですかー？」と言われるのは同僚の彼の役目だ

った。

「頼みますよ、アレク」

苦笑した彼に、アレクと呼ばれた男はもう一度肩をすくめて見せた。

アレクとジェファースンは上下関係はない。

正確に言えば執行官の彼を補佐するのがアレクの仕事だった。

「：君の腕は信用しているが、気をつけてくれよ」

「わかっています」

ヴァチカンの命令はいつも困難がつきまとう。

単純に、誰かを殺せ、という類のものであれば容易だが、彼は表向きは聖職者であり、ヴァチカンに属している。

その名前を貶めることは絶対にあってはならないのだ。

＊

夢を繰り返す。

天涯のついたベッドで眠る彼女は夢にうなされる。

顔をしかめ、上掛けをつかむ彼女は呼吸を乱す。

夢が終わらない。

永遠に取り憑かれる。

娘は両手で顔を覆った。

「殺したくないのに：」

血に染まっている。

自分の手は、血で汚れている。

どんな命も、他者が奪って良いものではない。

そんなことは誰も許されない。

「殺したくないのに」

誰の前にも晒されることはない彼女の弱さ。

その心は誰よりも強く、そして誰よりも弱く脆い。

「許して：」

許してほしい。

どうか許してほしい…。

心はすでに麻痺していて、彼女は涙すら流せない。

痛みは、彼女自身を支配している。

痛みが自分なのか、それとも自分が痛みなのか思い出せない。

ただ、覚えているのは、人を斬ったときの感触だ。

「助けて…」

目の前に広がった死体の山。

血の海。

足は重くて、その泥濘から抜け出せない。ずぶずぶと自分が底のない沼にはまっていくのがわかる。

彼女は目を見開いた。

目が覚める。

一瞬、そこが現実なのか夢なのか理解できなくなる。

「…あ」

上掛けをつかんだまま上半身を起こした彼女は目を見開いた。

とっさに枕のしたに手を差し込んだ。

そこにあるのは短刀。

護身用だ。

「…お嬢様、どうなさいました？」

インターホン越しに声が響いた。

「大丈夫です」

彼女は、その辺にいる富裕層の子女ではない。

ある程度ならば自分の身は自分で守ることができる。

だからこそ、彼女は傍らから武器を離さない。

綾瀬臣。

それが彼女の立場だ。

決してそれ以外ではない。

最も巨大な権力を持ち、最も危険であろうと目される娘。

「お嬢様」

お召し替えの時間です。

使用人に告げられて彼女は立ち上がった。

「お願いします」

絨毯に足をおろす。

毛足の長い絨毯は最高級のもので、当たり前のように彼女の周囲にあるもの全てが素晴らしい品質のものばかりだった。

着替えをするときでさえ彼女は指一本動かさない。

まるで時間を超えて中世の貴族の姫が蘇ったようだ。

彼女はそうして睫毛を伏せる。

自分に対する容姿への賛美も、才能に対する賞賛も。

彼女には意味のないもの。

「お嬢様……？」

「なんでもありません……」

夢が繰り返す。

子供の頃から、同じ夢を幾度となく。

もっと人間として冷酷でいられたならば、彼女は傷つかずにすんだのかもしれない。

なんでもないと彼女は口の中で繰り返した。

彼女の思いは、誰にも共有することなどできない。

同じ日本人としても。

そして、同じ裏社会としても。

誰も彼女を理解などできない。天才であるが故の孤独に捕らわれている。

「……お兄様は、またお嬢様を悲しませるおつもりですか？」

身を乗り出すようにして告げたのは千歳だ。

背中まで伸びた黒髪を、後頭部で一つに束ねている。

「千歳、おまえもわかつているはずだ……」

彼女は守られる必要などないのだ。

すくなくとも、自分ごときが彼女を守ろうなどとは、思い上がり

もいいところだ。

「：お兄様！」

目をつり上げた彼女は膝の上で拳を作った。

「ところで、お母様はお元気でいらっしゃるか？」

「：お母様はいつもお兄様と臣お嬢様の身の安全を案じていらっしゃいます」

高崎家は、綾瀬家の当主の付き人を輩出してきた家柄だ。

綾瀬家という巨大な光を支える影。

その番人。

年の離れた兄妹は共に臣の付き人である。

「：そうか」

「お兄様、お兄様はもう少しお嬢様のことを大事にしてあげてください：」

深い傷を負った臣の心を、千歳は知っていた。

「：無理を言うな、私はただのお嬢様の付き人だ」
付き人として、彼は彼女に最善をつくしている。

そのつもりだった。

そして千歳も、彼女の兄が最善を尽くしていることは知っていた。
それでも、臣の心が傷ついていることを思うと悲しくてたまらなくなる。

「お兄様も、お母様も、お父様も：。そして旦那様も、お嬢様も：」
みんなわたしを咎めない：。

「わたしがもっと強ければ：！」

お嬢様を傷つけないですんだ。
悔やんでも悔やみきれない。

「お嬢様は誰のことも責めておられない、自分を責めるのはやめなさい。千歳」

「：ですけど、お兄様っ！」

「いいんだ、お嬢様がお許しになっている。それでいいんだ：」

兄と妹は、臣を守るためにその身の回りにいる。

かつての事件が大切な主人の心に暗い影を落としていることも、彼らは知っている。

誰もが自らを至らないと責めた。

だというのに、彼女は全てを許した。

「いいんだ…、お嬢様がお許しになっているのだから」

下唇をかみしめたままうつむいた千歳の肩をなでる兄は、悲しげに微笑した。

「変わらずに、これからも守ればいい」

「ごめんなさい、一番おつらいのはお兄様なのに…」

最も、臣に近い者。

それが高崎だ。

千歳ではない。

そして千歳は彼の妹であればこそ、一番つらいのが兄だと知っていた。

「…お兄様、ところでこんな噂をご存じですか？」

ふと話題を切り替えた妹に、兄は片目をすがめた。

「どんな噂だ？」

「ジェフリーなんとかという男が、お嬢様に接触しようとしている、という噂なのですけれど…」

なんとも曖昧な言葉に、兄は首をかしげた。

ジェフリーだけでは誰なのか特定しようがないではないか。

いや、特定しようと思えばできる。

しかし不穏な噂に時間を割いている余裕などないのだ。

「…姓はわからないのか？」

「確か、ジェフリー・シエルダン…」

「…あいつか」

苦々しい。

見目の良い女が好きただけの色狂いの司祭だ。良い噂を聞いたことがない。

「屋敷に戻る」

「はい、お兄様」

高崎千歳の家を出た兄はそうして車に乗り込んだ。

綾瀬臣とジェフリー・シェルダンを接触させてはならない。
なにをされるかわからない相手だ。

ただでさえ、臣は人を傷つけることを極度に恐れている。

これ以上、彼女の心を傷つけてはならない。

瞳を陰しくしたまま、高崎は奥歯をかみしめた。

「…お嬢様」

呼びかけようとして、彼は立ち止まった。

温室のソファで眠る娘。

長い黒髪を背もたれに流す姿は浮世絵のようにも見える。

そこに存在するだけで凄絶な存在感を他者に与えながら、それでいて尚、彼女は菩薩のように慈悲深い。その存在こそが奇跡的な娘。

全てにおいて恵まれた人間などいない。

容姿、才能、家柄、全てにおいて彼女は恵まれていながら、彼女の心は常に孤独だった。

全てにおいて恵まれながら、彼女の心は誰も理解することができない孤独を抱えていた。

それは、高崎にも、その妹の千歳にも。

そして両親、姉妹、全ての者が理解することができない苦しみ。
眠る女の睫毛が震えた。

「…高崎さん」

「起こしてしまいましたか、申し訳ありません…」

「…いえ、うとうとしていただけですから」

緩慢な動作で体を起こした彼女はふと表情を引き締めた。
彼女は他人の変化に敏感だ。

そうでなければ生きていけなかった。

か弱い子供のころから、命の危機にさらされてきた彼女。
生きていくために。

生き残るために…。

「お紅茶をいれましょう…」

にっこりと笑う高崎に、臣はうなずいた。
近づいてはならない距離感。

ふれあってはならない。

「…どうかなさいましたの？ 高崎さん」

怖い顔をしている。

「いいえ、なにも…」

彼の言葉に、臣が目細める。

裸足で立ち上がった。

「おみ足が汚れます」

高崎の制止を、臣は聞かない。

「高崎さん。なにがあっただんですか…？」

静かに、問い詰める彼女に高崎は黙り込んだ。

「…お嬢様、ジェフリー・シエルダンをご存じですか？」

「ジェフリー・シエルダン？」

繊細なデザインの陶器製のポットで紅茶をいれる彼の背中を見つめた臣はわずかに首をかしげた。

「カトリックの司祭様、でしたか…？」

つぶやいた彼女に、男はうなずく。

「…表向きは、そうなります」

「表向き、は…」

「お嬢様」

「なんですか？」

「お気をつけください」

気をつけろと言う彼の言葉に、女は長い指を顎に当てた。

容姿、顔立ち。

全てが規格外だ。

「あなたはお美しい…」

誰に狙われてもおかしくはないから、と。

「…わたしは、そんなに魅力的ではありませんわ」

彼女は、自分を卑下しているわけではない。

心の底から臣はそう思っているのだ。

だからこそ、彼女は心底不思議そうな顔をする。

「わたしが美しいなどと言ってくださるのは、高崎さんだけですわ」
その声は高くもなく低くもない。

耳に心地よい彼女の声に高崎は笑みを深くした。

「…本当ですよ」

「そういえば千歳さんはお怪我などされていませんか？」

「ええ。あの子はちよつとやそつとでは怪我などしませんよ」

「千歳さんはとても強いですから…」

あなたには及ばない。

うれしげに語る彼女の言葉に内心で肯定して高崎は息をついた。

「ジェフリー・シエルダン is 危険な男です。何人もの女性を暴行している」

「高崎さんがそんなことをおっしゃるなんて」

彼が危険なのはそれだけではないのですね。

真剣な眼差しの彼女に、臣は指先を閃かせる。

その指にティーカップを手渡しながら、高崎は彼女を伺った。

「ジェファーンソン神父様に電話をしてみます」

「そうですね、ジェファーンソン司祭なら知っているかもしれませんね」

テーブルの上に置かれた電話の受話器を上げた綾瀬臣はその瞬間はっとして顔を上げた。

温室の天井が割れた。

ガラスが降ってくる。

「…お嬢様！」

とっさに上着を脱いだ高崎は臣をかばうように彼女を抱き寄せるとスーッと頭上をかばった。

不協和音が響く。

彼女は体を小さくして男にすがりついた。
爆発音。

ガラスの降り注ぐ中、彼女は腕を伸ばす。
日本刀をつかんだ彼女は柄に手を掛けて目を上げた。

「危険です、お嬢様」

「大丈夫です」

大丈夫。

呪われた刀に彼女は守られる。

奇跡的な、と言ってもいい。

ガラスのひとつかけらも彼女らに突き刺さることはない。

「高崎さんはわたしが守ります…」

彼が彼女を守るように。

彼女もまた、彼を守る。

そうしてガラスが降るのがやんだ頃、彼は臣を抱き上げるとガラスを踏みつけながら温室を出た。

「お怪我はありませんか？」

「大丈夫です」

白く細い手足。

軽々と抱き上げられた臣は高崎の肩に、自分の体を支えるようにして腕を巻き付けた。

ドレスを着た女を抱きかかえる男。

どちらも標準以上の上背と、標準をはるかに超えた美貌。

まるで神話のモチーフにした彫像がそのまま人間に姿を変えたようだ。

しかし、その美しいふたりを見る者は誰もいない。

「…お嬢様、お怪我はありませんか？」

尋ねた高崎に、臣は頷く。

「大丈夫です」

床におろされた彼女は、象牙色の指でそっと毛足の長い絨毯をなぞる。

殺されかけたことなど一度や二度ではない。

「ご無事で、本当に良かった」

高崎は胸をなで下ろした。

彼女は、規格外なだけでモンスターではない。

傷つけられれば怪我をするし、血も流す。

「お嬢様…」

「…」

ぞっとするほど冷たい。

瞳。

闇のような漆黑。

暗闇を捕らえる。

「わたしは、何度も殺されかける…」

彼女は歌うようにつぶやいて、指をさしのべた。

その手を彼が取る。

「…死なせはしません」

絶対に死なせはしない。

高崎は言って、使用人呼び寄せ彼女の着替えを指示した。

「なにがあっても、死なせはしない…」

綾瀬臣の着替えが終わるまで廊下で待つ彼は、自分に刻みつける

ようにつぶやいた。

それが自分に与えられた使命であり。

そして、それが自分に与えられた生きる意義。

床を歩くハイヒールの音が響いた。

規則的な音。

「…あなたは」

「ハニー、ミスター」

にっこりと笑った女性。

黒髪の、白い肌のそばかすのある女。

茶色の瞳が残酷な聡明さをたたえている。

肩の上でそろえられたおかつぱの髪。

しかし、左目が金色だ。

「…オッドアイのサラ」

サラと呼ばれた女は高崎の唇に口づけた。

「いやね、それはただのあだ名よ」

くすくすと笑う。

彼にしてみれば、サラの容貌もなにもかもがどうでもいいものでしかない。

「サラ、茶化しにきたのか？」

「そんなわけないじゃない」

サラは肩をすくめる。

「わたしはただの手紙屋さん」

そう。

彼女はポストマン。

「あなたにお手紙と、あなたの大事なお嬢様に二つお手紙。どっちが見たい？」

ニコニコと。

底抜けの明るさは、彼女特有のものだ。

彼女には善も悪もない。

まるで傭兵に善悪がないように。

彼女は神出鬼没だ。手紙を持ってどこへでも行く。

「…私宛の手紙？」

「そっ！ あなた宛の手紙」

「お嬢様宛の手紙とはなんだ？」

「…それはあなたに言うべきことじゃない。あなたのお嬢様に言うべきことよ」

さらりと告げた彼女は薄い色のサングラスをかけ直した。

「…サラ・エンヴリー」

声が響いた。

優しい声色。

「お久しぶりね、シン」

裏社会の中でも臣を死天使と言わないのは数少ない。

ほとんどの裏社会たちは彼女の本質を知らない。

知らないからこそ、彼らは彼女を「死天使」と呼んだ。

「シン、あなたにお手紙よ」

「ありがとう」

ほえんだ彼女に、サラは臣の首筋に抱きついた。

耳打ちする。

唇が告げる。

抜群の記憶力を持つ彼女は、手紙と称した言葉を依頼主から伝える。それが彼女の仕事だった。

「…そして！」

元氣よく高崎を振り返ったサラは、今度は彼の首筋に抱きつく。

今度の声は、その場にいる全ての者に聞こえた。

「あなた、殺されるわよ」

殺される。

「これは、わたしからのお手紙。わたしはシンが好きだから教えてあげるの」

指先で天井を指し示す。

「シンを殺すには、まずあなたたちが邪魔なの。だから、最初に狙われるのは、あなたかあなたの妹。充分に気をおつけなさいな」

言いたいことを言い置いて、彼女はくるりときびすを返した。

綾瀬臣の顔が青ざめた。

ざっと音をたてて血の気がひいたようだった。

臣の膝から力が抜けた。

「お嬢様…！」

意識を失った彼女の体を彼が抱き留める。

「…ちよつとシンには刺激が強かったかしら」

「少しは場をわきまえてくれ」

脱力した彼女の体。

「…シンはあなたがとても好きなのね」

サラはそうしてほほえんだ。

「…プリンセス」

臣の黒髪に指を差し入れた女は切れ長の目をそっと細めた。

「…サラさん」

「サラで良いのよ。大学時代と同じ」

マニキュアを塗った指を自分の口元にあてて、肩の上でそろえたゆるいウェーブのかかった黒髪を揺らす。

「呼び捨てなんてしたら、お父様たちに怒られてしまう」

「いいじゃない、わたしとあなたはクラスメートよ。何の遠慮がいるって言うの」

日本の大金持ちの娘。

飛び級で幼くして大学に進学した彼女の初めての友人だ。

ベッドの中でサラに背中を向けて体を丸めた彼女は、考え込むような気配を感じさせる。

「ほんつとに、あなたは昔っから変わらない…。ちょっとはその物事を重大に考え込む癖は改めたほうがいいわよ」

「サラさん」

「あなたはいつもそう。人に遠慮してばかりで、謙遜してばかりで。自分のことは二の次三の次、無欲で、自己主張なんて全然できなくて…」

サラは続ける。

臣はなにも言わない。

彼女の言葉の続きを待つ。

「そんなだからあなたは他人に振り回されてばかりなのよ」

年下の女の長い黒髪をなでるサラは思い返すように目を細めた。

「…死なせたくない」

「ミスターのことね…」

思い出すのは、華奢な少女だ。

今と同じようにまっすぐな黒髪を揺らした少女。

聡明な眼差しは、しかし控えめすぎるほど控えめで、極度に自己主張をしない子供。

彼女の後ろには常に同い年の少女が影のように控えていた。

そして街中ではさらに加えて二人の男が彼女を警護していたこと。彼女のそんな様子から誰もが彼女を異端と忌避した。

「日本の綾瀬家の娘ですって」

「なーに？ あの嫌みな感じ。いつもボディガードがいるなんておかしくない？」

綾瀬臣と高崎千歳。

大学内では有名な少女らだった。

サラが出会ったのは偶然だった。当時からバイト代わりと称して今と同じように通信屋をしていたところを綾瀬臣に目撃された。

後にも先にも、サラに取って足が付いたのはそれだけだ。

「…ご、ごめんなさい」

告げた少女が顔ばかりか耳まで真っ赤にしてうつむいた。

大きな本を抱えた中学生ほどの少女。

彼女の背後に控えていたもう一人の少女が、対をなすように無表情だったことが印象的だった。

「ハ―イ、キスを見るのは初めて？」

日本の大昔の映画に出てくるような初心な子供の反応に、サラは笑ってしまった。

「…あ、あの…」

困ったように固まって、本で顔を隠してしまった少女。

「いいのよ、邪魔されたからって気にしないわ」

別段キスをしようとしていたわけではなかったのだが、日本人の彼女にはそう見えたのかもしれない。いけしゃあしゃあとそんなことを告げる彼女に、男はなにかを言いたげに眉をひそめたがそれっきり無言が続けた。

「…大学に子供がいるなんておかしくないか？」

男のそんな言葉に、サラは喉の奥をならして笑う。

「なに馬鹿なこと言ってるのよ。あの複合企業の綾瀬財閥の会長の御曹司に決まってるじゃない。新聞とかで有名でしょ」

「…日本に財閥はありません…」

サラの言葉を蚊の泣くような声で訂正した臣に好感を抱いた。

そつと顔を隠していた本から目だけを上げた少女は、男に絡みついたらまのサラを見るやいなや、再びうつむいてしまったが、それがかわいらしくていつまでもからかい気分だったこと。

「あ、そうだったわね。かのマッカーサーが解体したんだっけ」

あっけらかんとしたサラ。

「あの…！」

赤面したままで固まっている少女に変わって口を開いたのは背後に控えていた高崎千歳だった。

「…お嬢様の前で、いつまでもそんなはしたない格好でいなくてもられますか？」

大きな目を見開いて怒っている。

あまりの彼女の気迫に、さすがのサラも男の体に巻き付けていた腕をほどいて沈黙する。

しかし、気圧されたからの沈黙ではない。

拳を唇に当てて笑いをこらえていたが、数秒の沈黙の後、盛大に大爆笑した。

「な、なんですか！ 失礼じゃないですか！」

臣と違って千歳ははっきりと物事を発言するタイプだった。

「ご、ごめ…。やだ、あんたたちかわいすぎ…！」

本当はお嬢様ごっこでもやっているのかと思った。優秀すぎる頭脳を持った二人の少女。

千歳のほうは、臣よりわずかに下だっただろうが、主人の姫君と同様に飛び級する程度の頭脳を持ち合わせていた。

それをサラは見抜いた。

本棚に向かって爆笑している彼女に、千歳は大切な主人の手を引

いてくるるときびすを返す。

「…お嬢様、行きましょう」

「千歳さん…」

つかつかと歩き出した千歳を追って歩く臣。

二人の愛らしい少女たち。

「…待ってよ」

低く言い放つ。

「シン・アヤセ、チトセ・タカサキ」

二人の名前を呼んだ。

日本人の少女たちが振り返る。

サラはウィンクした。

「よろしくね、わたしはサラ・エンヴリー。サラって呼んで」

七歳離れた友人。

物怖じしないサラの性格故だったのかもしれない。

思い出して、サラは小さく息をつく。

「サラ…」

名前を呼ばれて視線をおろした。

当時と比べて、遙かに女性らしく成長した美しい友人。

「なに…？」

「死んだの…。お姉様たち、わたしがまだ小さなときに…、わたしの身代わりとなって殺されたの…」

「…っ！」

臣の手が色を失ってシートをつかんでいる。

サラは絶句した。

「…お姉様たち、わたしが臣だって言ってた…。臣はわたしなのに、どうして？ ってそのときに思ったの…」

震えている。

綾瀬家の全ての財産を受け継ぐ者。

綾瀬家の御曹司。

「わたしの、目の前で殺されたの…！」

叫ぶように告げた彼女は、かちかちと奥歯を鳴らす。
自分の上半身をかき抱いた臣の脳裏で幼い記憶がフラッシュバックした。

「わたしは綾瀬臣よ」

ベッドに押し倒され、男の両手で首を締め上げられた娘。

長女の死に顔は安らかだった。

そして、臣が隠れていたクローゼットに横目だけを流して、瞳の奥ではほえんだ。

優しい微笑。

長女の香は十四歳で死んだ。

「…臣？ わたしですけれど、なにか？」

その半年後、次女の雪が十二歳で死んだ。

覆面をした男が臣の目の前で雪をナイフで刺し殺した。

その現場を取り押さえたのが、当時、屋敷の警護にあたっていた高崎だった。

絶叫することもできず震えていた三歳の幼い臣。

赤く染まっていく視界。

倒れる二人の姉。

それを最初から最後まで見ていた。

「殺されるのはもういや…」

もういやなの…！

悲鳴のようにつぶやいた彼女に、サラはとっさに抱き寄せる。

重い。

重すぎる記憶。

「死なせるのはもういや…。わたくしのために誰かが死ぬのはもう見たくない…」

重い記憶を背負った彼女は泣けない。

泣く涙など、とうの昔に枯れてしまった。

「高崎さんも、千歳さんも……。お姉様たちも……。みんな死んでしま
うの？　どうして……？　どうしてわたくしなんて守るの？」

訴えるように言葉を連ねる彼女は小刻みに震えていた。

「……ミスター！」

サラは部屋の外に叫んだ。

同時に扉を蹴破る勢いで高崎が入ってくる。

「ごめんね、シン」

臣の首筋に手刀をたたき込んだサラは、再び意識を失った彼女の
体をその腕に抱き留める。

「お嬢様！」

「……」

高崎の腕に臣を託したサラは立ち上がる。
厳しい眼差しのまま。

「……シン、わたくしって言ってた……」

ぽつりとつぶやいたサラ・エンヴリーに、高崎は目を剥く。

「……まさか」

言葉が出てこない。

二人は意識のない臣を見下ろしている。

「クロアゲハ……」

サラはオッドアイを見開いたままで呆然とつぶやいた。
女は廊下にでると、厳しい眼差しのままで高崎を呼ぶ。
彼の守る娘。

高崎はおそらく臣の全てを知っていた。

臣が眠る寝室により近い別室で、彼と彼女は向かい合った。

「……クロアゲハ」

つぶやいた彼女は胸の前で指を組み合わせた。

「あなたも知っているんでしょう」

冷やかな彼女の言葉。

「クロアゲハなどいない……」

高崎は言葉を返した。

クロアゲハが何者なのか、そんなことを彼は考えない。

高崎にとってそんなことはどうでも良いことだ。

彼が仕える主人。

その出会いなどどうでも良いこと。元の出会いは誰かに仕組まれたものだったのかもしれない。それでも彼は彼の意志で彼女を選んだ。

「あの方は、あの方だ」

どんなことがあっても、彼女は彼女だ。

彼女が求めた導きに、彼は手をさしのべ続けた。

「おかしい人ね」

くすりとサラが笑う。

盲目的なのかと思っただけではなく、肯定的なのかと言われればまたそうでもない。

彼は彼女を否定しないが、決して全肯定するわけではない。

「：私がお嬢様の何に対して従っていると思ってるんだ？」

「盲目的なくらい、愛しているのかと」

彼女は言う。

「英語をそのまま訳さないでくれ」

彼はぴくりと眉を引き上げる。

そう。

簡単に言えるほど彼女に対する愛情は浅いものではない。

どれだけの長い時間を彼女を見つめてきたというのだろうか。

ぬるぬると暖かい粘液の中に漂う感覚だ。

臣は指を動かした。

ここは、安全な場所だと。

彼女はそう認識した。薄く目を開く。

ここはどこだろう…。

考えるのも億劫で彼女は再び目を閉じる。まどろむように膝を抱える。

そこがどこなのかわからない。けれども、ここは安全だ。
浅い眠りから、深い眠りへと落ちていく。どこまでも底のない谷
に落ちていく。

＊

臣は目を覚ました。

起き上がる。

首の裏側が痛む。

ややしてから口元に指を当てた彼女は一つ呼吸をおく。

「：あ」

声を上げた。

不意に電話が鳴った。

躊躇する。

受話器を上げてでもいいのだろうか、そんな思いに捕らわれる。

「もしもし」

「先ほどはお電話をありがとうございました」

「ジェファーンソン神父様：」

ふわりと臣は笑った。

「先日、お怪我をされたと伺いましたが、大丈夫なんですか？」

尋ねる彼女に、電話越しに男が微笑する。

「半年も前のことです、心配は無用です」

「ところで、どうなさったんですか？」

小首をかしげた彼女に、ジェファーンソンは声をひそめた。

「ジェフリー・シエルダンという司祭をご存じですか？」

「先ほど、高崎さんと彼のことを話していたところです」

「なるほど：」

「：わたしは、シエルダン司祭のことはよく存じ上げませんが、芳
しくない噂は少々はいってきております。その一件について、で
すか？」

裏社会。

そちら側にいればいやでも耳に入ってくる噂もある。

特に、大きな金の動きがあった際はどう遮断しても情報は入ってくるというものだ。

クリストファー・ジェファアソンとはまた異なる立場にあるからこそ、彼女のところに入ってくる情報はある。

巨大な権力をバックに、自らも巨大な権力を抱える。

それは、一国の政治家程度のものではない。

鶴の一声で世界が動く。

彼女はそんな存在だ。

だからこそ、誰もが彼女を否定する。

「…世界は、あなたの敵です」

ジェファアソンに告げられて、臣は息を飲んだ。

「それはきつとあなたが一番ご存じでしょう…」

綾瀬臣は世界を敵に回すようさだめられて生まれてきた。

誰もが彼女の存在を認めない。だというのに、誰もが彼女という存在を欲する。

「神父様…、わたし、怖い…」

恐ろしい…。

ベッドに座り込んだままぎゅっと電話の受話器を握りしめた彼女は眉を寄せる。

「臣お嬢様」

ジェファアソンは静かに彼女に呼びかける。

「世界はあなたの敵です。ですが、あなたはなにより大きな財産を抱えていらっしゃる。それを決して忘れてはならない。そして、それらを決して手放してはならない」

それがあなたの生きる道だ…。

言葉を続けたジェファアソンに、臣は悲しげに睫毛を伏せたままで頷いた。

「…はい」

泣きそうになっても、彼女は涙を流せないから。

「：はい、神父様」

世界は、自分の味方などではない。

そんなことは彼女は三歳のときに理解していた。

頭では理解できなくとも、確かに知っていた。

彼女を、そんな暗闇から救い出してくれたのが高崎だった。

真っ赤に染まった最悪の暗闇から、彼は彼女を救い出した。

「ありがとうございます、神父様」

「大丈夫ですよ、世界のほとんどの人があなたの敵でも、あなたは神に愛されて生まれてきたのです：」

世界の祝福を受けて生まれてきた。

優しく告げる。

誰よりも、なによりも世界というものから愛されて生まれてきた娘。

だというのに、その世界に住む人間たちはなにより彼女に残酷だ。それが、彼には悲しい現実。

どれだけの聖職者たちが彼女を愛するだろう。いや、愛することなどできない。

なぜならば、彼女という存在は理解の枠を大きく外れていたから。人間は理解できないものに対して感情移入することなどできないし、ましてや愛することなど不可能だ。

だから、彼女の存在はひどく悲しい。

暗闇をただよう。

ゆらりゆらり、と。

手を差し伸べた自分は、確かに自分で。だというのに、この非現実感は何んだと言うのだろう。

不安定な場所にいる。

「暗くて、光が見えない：」

ため息のようにつぶやいた臣はかじかんだ指先に息を吐きかけた。
寒い：。

自分の上半身を抱きしめてから体を丸めた。

＊

「…お父様」

父親のデスクを両手で打った彼女は漆黒の瞳に強い光を閃かせる。いつかは父親の自分すらも超えていくだろう娘。

「お父様には罪悪感はないのですか」

低く抑えられた声には怒りが満ちていた。

「臣、おまえは自分の立場がわかっていないんだ」

父親は革張りの椅子に座ったまま窓外を見つめている。

「お父様の娘で、日本人でそれ以外なにあるって言うんですか」
静かな、彼女の怒りが伝わってくる。

しかしその父親にとっては、彼女の怒りなどそのまま受け取ってよいものではなかった。

「おまえがなんと言おうと、香と雪は、臣のために死んだんだ」
現実を突きつける。

年若い娘に、残酷なことを宣告している自覚は彼にはあった。
それでも、彼は彼女に突きつけなければならない。

「おまえは特別だ。姉さんたちとは違う」

「…」

ゆっくりと告げる父親に、彼女は言葉を失った。

「違う…」

違う…。

「違う、わたしは特別ななんかじゃない、わたしは普通よ…」
愕然と。

頭を抱えて首を振る。

普通だ。

そう思い込んでいたかった。

「…ならば、なぜ非天に選ばれた？　ならば、なぜ、おまえを世界

の誰もが殺そうとする？ 無力なおまえなど、高崎がいなければ今、この世にいまい」

男が静かに振り返る。

貫禄に満ちた男の姿に、少女は凍り付いた。

父親と娘。

その関係性。

「おまえがなにも反駁することができないのは、おまえが自分の特殊性に気がついていないからじゃないのか？」

冷ややかに彼は言う。

「ですが、そんなわたしの影武者としてお姉様たちを危険にさらすなんて、そんなひどいこと……」

口ごもった彼女は立ち尽くす。

背の高い父親を見上げた彼女は、そのまま男の眼光に硬直した。

まだ、彼女は自分の特殊性を理解していなかった。いや、理解していたのかもしれない。それでも彼女は認めたくなかったのだ。

「ひどい？ ひどいことをしているのは私ではない。おまえだ」

おまえが姉たちを殺したのだ……

「……嘘」

ぽつりと少女はつぶやいた。

「嘘嘘嘘……っ！ わたしは、人と同じよ！ 普通なのよ！ お父様、

ひどいこと言わないで……！」

大きな闇の瞳に涙が浮かぶ。

涙の滴はやがて大きくなり、こぼれる寸前、別の少女の声によっ

て臣と父親は現実に戻された。

「旦那様、おやめください！」

おかっぱの少女は両手を拳にして、精一杯男を見つめる。

「千歳、おやめなさい……」

少女の後ろに追いついたのは中年すぎの女だった。

身のこなしは一分の隙もなく、彼女が武道の達人であることは見て取れる。

「お嬢様！ 旦那様の言うことなど気にすることございません、お嬢様はお嬢様の道を歩めば良いだけです」

大変、正論だったが小学生ほどの少女に言われても迫力には欠けるというものだ。

「：千歳」

困ったように自分の娘を見下ろす母親は、やはり困ったように男を見つめた。

男は肩をすくめる。

「申し訳ありません、旦那様」

「お母様！ わたしはお嬢様の番人です。旦那様に義理立てするつもりは毛頭ありません」

そうだ。

千歳と、千歳の母では立場が違った。

千歳は臣の付き人であり、その母は臣の父親、綾瀬家現当主の付き人。

「まいったね、確かにその通りだ。千歳君」

千歳の言葉に苦笑する。

「旦那様は、臣お嬢様に厳しすぎます。もう少し、臣お嬢様を慈しんであげてください」

はつきりと物事を告げ、現実的に見極める。

それが千歳に備わった状況分析能力。

言いたいことを言いたいだけ言うと、千歳は臣の手をひいてさっさと歩き出す。

付き人の少女にとって、父親と臣の確執などどうでも良いことではない。

少女二人が消えたことを確認してから、和服姿の女は後れ毛を耳にかき上げた。

「：様子さん、私は厳しいと思うかね？」

様子と呼ばれた女は小さく苦笑してから小首をかしげた。

「旦那様が心配されていることを、わたくしは存じ上げているつも

りでございます…」

「…」

「ですから、旦那様はわたくしの娘を選ばれた…」
なにをおいても、全てにおいて臣を優先せよと。
彼と彼女は幼い千歳にたたき込んだ。

「そうだ。あの子らは死ぬまで一緒だ…」

臣は狡猾だった。

成長するにつれ、自分の姉たちが自分の影武者であると知った彼女は、自ら才能を世界に発揮して全世界のメディアに自分の存在を知らしめた。

姉たちが標的になることを最小限にできるように。

姉たちが影武者である必要などなくなるように。

「臣は、私の意図など軽々と超えていく」

小さな子供には残酷な現実だったろう。

そんなことは父親たる彼にはわかりきっていたことだった。

できれば平凡に生きてくれればそれで良かったのだ。

しかし、そうはいかなかった。

彼女がまだ生まれて半年ほどの後、綾瀬家で保管されていた日本刀、非天に選ばれた。

「…お嬢様の存在を、非天は数百年もの間待ち続けていたのですね」
祥子の言葉に彼は目を閉じた。

人の魂を食らう刀。

その刀に選ばれれば、生涯刀の呪いから逃れるすべはなく、死ぬまで奴隷とされる。

「綾瀬では、あの刀に選ばれたのは過去三人。臣で四人目だ」
その四人の全てが一樣に人間という枠を超える美貌と才能を持っていた。

伝説などではない。

非天は人の命を食らっているのだ…。

運命づけられた生。

もっともそればかりではないだろう。

彼女自身の幸運もあわさって、彼女は特別な子供として日々成長していった。

「ですけど、旦那様」

にこりと祥子はほほえむ。

「きつとあの子たちは大丈夫。呪いもなにもかも、全て乗り越えていく」

ひとりではないから。

「しかし…」

「旦那様もおっしゃったではありませんか。旦那様の意図も、臣お嬢様は軽々と飛び越えて行かれる、と。ですから、きつと大丈夫ですわ。あの子たちは超えていきます。どんな荒波も、どんな苦痛も、全てを」

大丈夫。

そう言って笑った祥子はそっと右手を差し伸べた。

彼の頬を包み込む。

その手の温もりに身を任せるように頬をすり寄せた彼は痛みをこらえるように目を閉じた。

「ご安心くださいませ」

女の指がぴくりと動いた。

「：お嬢様、お気づきですか？」

ソファに座って読書をしていた千歳が音もなく立ち上がった。

彼女は兄とは違う。

母親によく似て武道の達人だ。

しなやかな山猫のような身のこなし。

眠る彼女のそばにいるのは、綾瀬臣の屋敷の中では千歳だけだ。

男は眠る彼女のそばにつくことはできない。

「大丈夫です：」

「サラは帰りました。しばらくお兄様となにか話していたようではございますけれど」

「そう：」

千歳にとってサラは年長者だが同格の存在、という定義が彼女の中ではされている。

黒髪が螺旋を描く。

それは、臣の中にある深部を思わせるようで、千歳はかすかに片目を細めた。

「高崎さんと：」

繰り返した彼女はベッドに手について体を起こす。

「そうですか」

静かな声が響く。

「：そうですか」

繰り返す。

「もう、誰も死なせたりはしない：」

両手で顔を覆った。

二度と自分のために、身近な人が死んでいくのはごめんだ。
固く誓う。

「お嬢様…」

「千歳さん…」

「…お嬢様、わたしは」

言いかけた千歳に、臣はかぶりを振る。

「わたしは、後悔していません」

指の間から覗いた瞳。

暗黒の。

深く闇に沈み込んでいくような、彼女の瞳。

それは悲しく、そしてぞつとさせるほど冷たい。

「…千歳さんを助けられたんです」

わたしはそれを後悔してはいない。

美しい黒髪と、暗黒をたたえる瞳。

それは確かに日本人のものであるというのに、そこにいる女は人種や性別を超越した美しさをたたえる。

時折、幼い頃から彼女のそばにいる者たちですら、綾瀬臣という女を恐ろしいと感じさせるのはその暗さのせいだ。

底抜けの明るさは決して感じない。

たとえるならば、春風のような女でありながら、彼女の底は知れないほど深く、そしてその底にたゆたうものは普通の人間が考えられるようなものではない。

どこまでも深い暗闇を感じさせながら、春風のようにしなやかでそして穏やかだ。

それゆえにどこか恐ろしい。

そんな存在感を持つ彼女。

「千歳さんも、高崎さんも、みんな…」
殺させない。

絶対に守ってみせる。

彼女はそうつぶやくとほえんだ。

＊

「…簡単なことだ」

「殺せばいい」

「しかし、彼女の側近は腕もいいし頭も切れる」

「側近、か…」

暗闇の中で、男たちの顔は判別できない。

しかし話の内容は不穏なものだった。

「…殺せばこの世の連鎖は終わる」

「あの小娘が全ての中心だ」

彼女の一声が世界を動かす。

しかし、彼女はわかっていながら声すら上げない。

優しく微笑して沈黙を守る。

「…なにに義理立てしてると言うのか…」

まったくもってわからん。

世界を動かし、世界の紛争ですら左右できるだろうに。

「…いつだったか、あの娘の側近の子供を拉致したら、ひとりで乗り込んで組織を壊滅させたか」

そうだ。

彼女は恐ろしい。

しかし、彼女はその力を振るわない。

頭脳と美貌を持ちながら彼女はそれらを否定する。

そして、彼女自身を利用しようと企む者たちをも間接的に否定することとなった。そのために彼女は知らないところで不興を買った。

「彼女の手を取ることがするのは彼女の側近の男だけとはな」

侮蔑したように笑う。

「…ならばどうする？」

「いらないならば消してしまえばいい」

争いも、悲しみも知らない貴婦人のように振る舞う彼女。

その手を取る男。

そして彼女に付き従う少女。

「：殺せ」

誰を、とは言わない。

「綾瀬臣。どれほど天才であっても所詮は人間だ」

隙はどこかにあるだろう。

どれほど優れた才能の持ち主であろうとも、どれほど天運に恵まれていようとも。

彼女は人間でしかない。

闇の中に立っていた男が、その言葉を聞いて静かに退室する。

それを見送ったローマンカラーの初老の男は満足げに笑う。

卑しい笑いを、当の臣が見たらどのように感じるのか、自分勝手な男は考えない。そして、彼女が彼女以外の運命を変えていく引き金であるとも知らずに。

良くも悪くも彼女という存在は人の行く末を変える。

彼女の意志にかかわらず。

ローマンカラーの男の頭の中は、卑猥な妄想で満たされている。

清楚で美しい彼女が、寝台でどのように乱れるのか。

どんな声で鳴くのか。

それしかなかったのだから。

愚かな妄想、と言えばそれだけだったろう。

しかし、自分の妄想を愚かだと思える程度には考えが足りない。どうせ立場を利用して側近の男にかわいがられているのだろう、としか考えていないのだ。

日本人離れたスタイルと美貌。

渴いた唇をなめたジェフリー・シエルダン は色欲に満ちた瞳をわずかに細めて息をつく窓の外を見つめた。

するりと腕が伸びた。

まるで、パントマイムでも演じるように。

長く細いしなやかな腕だ。

指が日本舞踊の舞い手のように反るが、彼女は舞い手などではな

い。

睫毛が震える。

「殺してしまえばいいの……」

幻聴のように声が響いた。

「誰です？」

暗闇から姿を現したのは若い女だ。

影を体現したような、そんな女。

ファッションモデルか、それ以上の、規格外な美しさを持つ。

「……臣お嬢様」

「お久しぶりです」

女が笑った。

綾瀬臣。

その人。

どこか常人離れた。

「……心を傷つけられているのではないかと心配していました」

男の言葉に、「臣」が目を伏せた。

口元が笑みをたたえる。

彼女は、標準的な日本人を基準にしても内に秘める印象が強い。

それは、言葉が狂気となる自分自身を知っているから、とも言える。

「神父様、心配には及びません」

底知れない恐怖感を人に植え付ける。

「お側仕えのかたはお見えではないのですか？」

尋ねられて、娘は青白い炎を瞳に閃かせる。

それは、まるで閃光のようだと言え、ジェファースンは感じた。

彼女が何を感じているのか、彼は知らない。

「いつもそばにいるわけではありませんから」

ふと響いたのは冷やかな響きだ。

誰かが、なにかを手放している感覚。

追求してはならない、ジェファースンは直感でそれを感じ取った。

小紋をまとった娘。

数本の飾り紐でまとめられた黒髪に視線が行った。
そこに存在しているのは違和感だ。

「それで、今日はどんな御用事ですか？」

クリストファー・ジェファースンが滞在中のホテルに突然現れた娘。

どこにも情報は流れていなかったはずだ。

その現実には動揺する。

「…ご存じのほうです」

静かな声。

「あなたは…」

彼の言葉に、臣は片目の眼球だけを動かした。

ぎよろりと、動いた目玉にジェファースンはとっさに腰を浮かしかけた。

それは本能で感じる恐怖だ。

暗闇をまとう目玉に、彼は息を飲む。

「なにか？」

満面の笑み。

しかし、眼差しは笑っていない。

「いいえ、なにも…」

「ジェフリー・シエルダンという男を知っていますか？」

「…その男は」

「あなたが追っている男だと、存じ上げております」

戦場で男たちが感じる高揚感とはまた別個の、暗くたゆたう静かな感情の波。

おそらく彼女はこういうわけか一人でイギリスまで来たのだ。

成人した女がひとりで航空券をとることなど簡単であったし、なにより彼女は自家用ジェット機を持つ人間だ。世界中どこへでも飛んでいける。

「あなたはなにを望んでいらっしゃるのですか？」

彼女は相変わらず唇だけで笑っている。

「さて…」

自分の意見は小首をかしげながらはぐらかして、飾り紐を揺らす。綾瀬臣という女は得てして同じような手段を使う。

自分自身を標的にする。誰も彼女を無視することはできない。廊下で物音が響いた。

「…」

臣が動いたことにより、彼女を狙う者たちも動いたのか。

そんなことをジェファーンソンは思った。

少なくとも、自分が執行官であるということは知られていないはずであり、ジェフリー・シエルダンが彼を狙うことなど考えられないからだった。

銃を構えたジェファーンソンに、臣が右手を挙げて彼を制する。

丸腰に見えるが彼女は武器を隠し持っている。

そうしなければ彼女は自分自身を守ることができないからだ。

滑らせるように草履をはいた足で絨毯を伝う。

音もなく彼女が動く様は壮観だった。

「…しーっ」

自分の口元に指先を押し当てた彼女は彼の胸を細い腕で軽く押さえたまま様子をうかがっている。

「どう思います？」

ジェファーンソンに尋ねられて彼女はかすかに目をすがめた。

「どうでしょう？」

ソファの影に身を潜めた臣は、ジェファーンソンを手招いた。

それとほぼ同時にノックの音が響いた。

返事はしない。

問いかけてもない。

静かにドアノブが回っていく。

覆面をした男が扉から姿を現した。

なんとも個性のない姿だ。

臣とジェファーンソンの感想はそんなものだった。

扉に背中を向けて立つ男に、臣は意識を集中させる。

「誰に用事なんですか？」

銃を構えた男に娘が立ち上がる。

ジェフアーソンが制止する間もなかった。

あまりにも無防備に。

「側近はいないのか」

側近。

確かに、彼女をよく知らない者はそう思うだろう。

しかし、彼女を守る者たちは側近ではない。

しわがれた男の声。

それに皮肉げに笑ったのは臣のほうだ。

一気に間合いを詰める。

手のひらを上に向けて男の顎を捕らえた彼女はもう片方の手で後頭部をつかんだ。悲鳴を上げさせることもなく力を込める。

力点を考慮した、効率的な力の入れ方。女の細腕で、と思えるような殺し方だ。

一息に力を集中させた彼女の腕が太い男の首をへし折った。

高崎がそれを目の当たりにすれば眉をひそめただろう。

大切なお嬢様がその腕で人を殺したなど。

「相変わらず、鮮やかですね」

あきれたような彼の言葉に、臣は無表情のままだった。

彼女の中にあるなにかが、彼女自身を突き動かしている。

「神父様、ジェフリー・シエルダンのところへ案内してください」

振り返った彼女の瞳に、ジェフアーソンは呆然とした。

彼女の瞳の奥に別人を見たような気がしたから。

長い黒髪がなびく。

彼の隣に座る女はまっすぐフロントガラスの向こうを見つめている。

おとなしやかに見えるその美貌の女は天才だ。

「…ジェフリー・シエルダンと何の話をしにきたのですか？」

「神父様に関係のないことですわ」

見たところ刀はないようだが、ジェファアソンは知っていた。彼女が人殺しに及ぶ際、日本刀が必ず必要なわけではないと言うことを。それを知っていたからこそ、彼女が刀を持っていないことに対して無条件に安心することはできないのだった。

「臣お嬢様」

ジェフリー・シエルダンを殺しに来たというのならば、無用だと言いたかったが、臣の眼差しに凍り付いた。

黒い、漆黒の闇を写しとったような瞳の奥に、青白い光が揺らめく。

「…なにか？」

ほほえんだ。

誰よりも優美に。

誰よりも優雅に。

「いえ、なにも…」

暗闇の中を車を走らせる。

彼女が単独行動をするなどまだだ。

それほどまで追い詰められている、ということなのだろうか？
違う。

彼女を追い詰めることができる人間など数えるほどしかない。

ジェファアソンが知っているジェフリー・シエルダンは良くも悪くも凡人だ。

その凡人の男が綾瀬臣を追い詰めることができるのはとても思えない。

そんなことをクリストファー・ジェファアソンは考える。

「ジェファアソン神父様は、怖いと思ったことはありませんか？」

女が問いかける。

彼女の言葉がなにか不思議に感じて、ジェファアソンはステアリングを操りながら横目で彼女を見やる。

「…それはどういう？」

「言葉通りの意味です」

臣の声に迷いは聞こえない。

「あります、任務にはいつも危険が伴う」

なによりも殺人とは神の意志に反しているのではないかとも感じる。

それでも、執行官という立場は彼に逃げることを許さない。

「お嬢様はどうなのですか？」

臣は黙り込んだ。

死天使。

死を呼び込む天使。

死を招く天使。

そう呼ばれる女とは思えないほど穏やかで静かな横顔。
誰もが彼女を愛する。

「：わかりません」

それはそうだろう、とジェファースンは思う。彼女は、ジェファースン以上に簡単に人を殺す。

葛藤や良心の呵責など、殺人を犯す直前の彼女にはない。そうでなければ、素手で人を殺すなど年若い娘にできはしない。

「あなたは不思議な人だ」

「そうでしょうか…」

自分の中にあるからっぽが彼女には理解できない。

自分というものが、自分ではなくなるような。そんな感覚にとらわれる。

彼らがついたのは豪華な邸宅だった。

「ふむ、金持ちというだけはある」

ジェファースンは誰にともなく独り言をつぶやいた。

その視界の隅で、臣が身じろいだ。

帯の背中に手を伸ばした彼女が取り出したのは懐剣だ。

いったいどこかところに武器を隠しているのかやや不安になるが、帯から剣がでてきたということは、剣だけではすまない、とい

うことだろう。

鉄製の門扉をくぐった瞬間、黒服の男たちに囲まれた。

自分はまだ防弾チョッキを着ているからなんとかだろうが、ほぼ確実に綾瀬臣はそんなものの着てはいないだろう。

「…何者だ」

「…」

尋ねられて、なんと返答しようかと一瞬考え込んだジェファースンの耳に女の声が割り込んだ。

流暢な英国英語だ。

「自分たちのターゲットの顔すらわからないんですの？」

どこか挑発的な響きを帯びた声に、ジェファースンは思った。

彼女は、いつもの彼女ではない。

「…臣お嬢様」

「わたしが、死天使です」

自分の胸に手のひらをあてて名乗った彼女の様子。

強い意志を秘めた彼女の瞳。

「ジェフリー・シエルダンのところへ案内してください」

雪模様の小紋に、誰もが目を奪われていた。

誰も、彼女を天才的な殺人鬼だとは思わない。

優雅に。

「…わかった、案内しよう」

「ええ」

言いかけた男に、臣は笑みを浮かべた。

いつの間に関合いを詰めたのか、男の首筋に小刀を押し当てる。

軽く皮膚に食い込んだ。

いつもの彼女ならばそんなことはしないはずだった。

「…案内してくださいな」

音もなく歩を進める。

限らない静。

侘び寂びという言葉を体現するならば、彼女こそがそうではない

かとも思う。

しかし、その行為はあまりにも血なまぐさい。

「け、剣をひいてくれ…」

「お黙り」

ぴしやりと男の言葉を一蹴した。

「ジェフリー・シエルダンのところへ案内してください、と申し上げています」

言葉は丁寧だがやっていることはあまりにも乱暴だ。

ゆつくりと彼が歩く。

誰も彼女に逆らえない。

静けさに満ちた迫力に圧倒される。

歩きながらも小刀はゆつくりと男に食い込んでいく。

まるで計算でもしているようだ…。

やがて、男たちがジェフリー・シエルダンのもとに案内し終わった頃、その小刀は男の首を器用に致命傷を与えることもなく貫いていた。

恐ろしい計算だ。

彼女は男ひとりを容易に見せしめとして危害を加えた。

しかも、男たちに明らかな恐怖を植え付けながら。

「あなたが、ジェフリー・シエルダン司祭？」

「そうだ…」

その男を離してやってほしい。

ジェフリー・シエルダンの言葉に、綾瀬臣は口元だけでほほえんだ。

「案内、ありがとうございます」

女は、男の首を貫いていた小刀を一気に横に引いた。

頸動脈を掻ききった彼女に、屋敷の護衛をしていた男は自分の手のひらと吹き上がる血しぶきにおろおろと視線をさまよわせた。よるめいてから力を失った男は大量の血を流しながらすぐに動かなくなった。

「ひどいことをするね」

「：わたくしは、黒揚羽。臣じゃない」

ニコニコと笑っている。

残酷な天使。

「：だが君は今ひとりだ。君を手に入れたと思う者のところへひとりでくるなど無謀ではないのかね？」

「あら、ジェファーン神父様がいらっしゃいますわ」

彼女は器用に血にぬれた絨毯をよけながら移動する。

狂氣的な彼女の様子に、ジェファーンと臣、そしてジェフリー・シエルダン以外の人間は絶句していた。

屋敷の警護にあたっていた男たちも完全に色を失って彼女を見つめている。

遠目に彼女を見つめて、形だけは銃を構えていたがすでにそれどころではない。

隙があるならば逃げ出したい、というのが本音だった。

綾瀬財閥のお嬢様だというから、もっと生ぬるい相手だと思っていたのだ。

しかし、その正体はいとも簡単に銃を持った男たちを無力化し、残酷に生きたままなぶり殺しにできる悪魔のような女。

本能的に恐ろしいと、彼らは感じた。

血にぬれた、極東の島国に生まれた天使。

世界が。

神が、世界に産み落とした告死天使。

深い慈愛と、残酷さを秘めた墮落者を潰える者。

それが、綾瀬臣。

「：ジェフリー・シエルダンって知ってる？」

品の良い老人を問い詰めるブロンドの巻き毛の少女がいた。

その手の世界では有名な少女だ。

誰もが彼女を恐れる。

少なくとも、少し情報の入る人間で三五歳以上の人間は誰でも知ってるだろう。

かつて世界を震撼させた殺人鬼。

「…司祭だが、どうかしたのかね？」

「…どうしたもこうしたも」

彼の反応に、ブロンドの少女はがりと頭をかき回す。

「わたしはね！ もうわたし以外の誰かばかり得するのはまっぴらなの！ わたしだって死天使に会いたい！」

すばらしいほど身勝手でご機嫌斜めな台詞に、背後のレオナルドは左肩を落として脱力した。

拳で机をたたいた彼女はにらむようにして相手の男を見ている。

凄んだ彼女は目の前の老人を睨み付けた。

「殺されなくなったら白状しなさい」

身も蓋もない彼女の言葉。

すでに自分が殺し屋であるということを隠してはいない。

そして、目の前の男も、彼女がマジックボムであると言うことを理解している。

だから彼女を一蹴することもかなわないのだ。

そんなことをすれば本当に殺されかねない。

「ジェフリー・シエルダン、今、こちらの執行官が暗殺に向かっている…」

絞り出すように告げた彼に、アリッサはひらりと身を翻した。

「ありがと」

ぱちんと指を鳴らす。

老人の目の前に赤い花が咲いて一瞬で消えた。

それすらも、彼女の発火能力。

臣と行動を共にできるのは、臣と同程度、もしくはそれ以上の能力を持った者だけだ。そのあたりを考慮すれば、彼女と動くのは自分のほうが適任なのではないかと、アリッサは思う。恐ろしく自分勝手だが彼女は自分の実力を性格に把握していた。

だからこそ、彼女らは恐れられる。

そうでなければ、同行者は彼女の身体能力と発想について行くことなどで気はしない。

そう考えると、彼女と共に行動をしているのが、付き人の二人ではないと考えると、ほかに考えられる人物はかなり限られてくる。

アリッサは親指の爪をかみながら考え込んだ。

「どこいったと思う？ レオン？」

「どこってあの話の流れだと、執行官とやらといっしょにジェフリー・シエルダンのところじゃないのか？」

「そうなるわよねえ、やっぱり：」

彼の言葉に相づちを打った少女はレオナルドが回した車に乗り込んだ。

「だいたいさ、ずるすぎだと思わない？ 男ばかり言い思いして！」

差別よ、偏見よ！

なにやらそれこそ偏見に満ちた発言をされたような気がする。

「やっぱり女の子ならいい男と行動した方が楽しいんじゃないか？」

「はあ？ 人殺しに行くのにいい男も悪い男もあるもんですか。だいたい、殺すか殺されるかってときに、そんな関係ないでしょ？」

まあ、彼女のこの調子はいつものことだ。

「とっととジェフリー・シエルダンの家まで飛ばしてくれない」

「了解」

ハイウエイを飛ばすレオナルドに、アリッサは無言だった。

アリッサが本当にただの子供なら天使にも見えただろうが、その正体は恐ろしい殺し屋だ。

朗らかな笑顔がかえって不気味でレオナルドは沈黙する。

裏社会にあってはひよっこの彼にとって、いまだに彼女らトップクラスの行動は多くの謎に包まれている。

「：なに？」

横目に視線を向けていた彼に、アリッサが問いかける。

「いや、よくわからんと思っただけ」

「わたしなんてわかりやすいほうよ。カーリーと同じ」
自分の気分で動く殺し屋。

わかりやすく言うだけだ。

わかりづらいのは彼女のようないいタイプではない。

言うなれば、わかりづらいのは花鬼や死天使だ。

思想はないが感情で動く。

その基準は当人にしかわからない。それが最も厄介なのだ。アリ
ツサは言う。

「そうじゃない？ 傍目に明確な基準がないって言うのは、とても
危険なことよ」

危険だ…。

だからこそ死天使は危険人物。

だからこそ狙われる。

その特異な存在も相まって…。

「それでもアリツサは綾瀬臣が好きなんだろう？」

「そう！ 強くてきれいで、優しい！ 完璧なお嬢様だわ」

だから大好き。

そう言ってアリツサは笑った。

ジェフリー・シエルダンの屋敷に着いたアリッサとレオナルドは、高い塀とその上に張り巡らされた鉄条網にため息を吐き出しながら頭を左右に振った。

「：警戒心の強い男よねえ」

はーっとため息をついた。

「どうする？　俺はこれだけ高い塀なんて単身で乗り越えられないぞ？」

「：じゃ、そこで待ってなさい」

少女は、汚れも気にせず車の上に乗り上げた。

「中からあけてくれよ」

「足手まといだから、イらない」

あっさりと彼女は冷ややかな声を放つ。

とんと車屋根を蹴った。

ふわりと彼女の体が舞い上がる。

鉄条網をよけて直接コンクリートの塀に手をついた彼女は、そのままの勢いで塀を跳び越えた。

動きの邪魔にならないように、レギンスにスニーカー、シースルのワンピースを着ている。

彼女が、塀の奥に消えた瞬間。

爆発音が響いた。

スニーカーをはいた足が軽快に走る。

風のように。

少女が指を閃かせただけで、爆炎が上がった。

「殺せ！　あのガキは危険だ！」

悲鳴のような叫び声が聞こえる。

彼女が視線を向けた、

「ガキ、じゃないわよ」

苛立たしげに言い放つ。

「わたしはマジックボムって言われてる…」

少女は冷ややかに笑う。

口元だけで。

マジックボム。

最悪の殺人鬼にして、最強の殺し屋の一人。

それが少女の正体。

「さあ、世紀の火遊びを始めましょう」

歌うように叫んだ。

黄金の巻き毛が赤い炎を反射させて輝いた。

どこまでも艶やかに。

両腕を横に広げ、両手の平は開かれて上に向けられた。

「：ひとりじゃなにもできないだろう？」

声が響いた。

二階の窓から顔を出した男に、少女はにこりとほほえむ。

彼が言っているのは、ワシントンで起きた連続少女殺人事件のこ

とだろう。

そこでアリッサは失態を犯した。

情報伝達が発達した現代では、大事件が起こると世界中に広まる

のもまた早い。

「この間は、おなががすぎすぎて動けなくなっただけよ」

ごく最近の失態を指摘されてもアリッサは目を細めた。

しかし、彼女は動じなかった。

アリッサにとって、例の一件は恥じ入るべき失態ではないのだ。

「どうして、君たちのような一級の殺人鬼たちは、こうもそろいも

そろって美しいのだろうね」

「なに寝言言ってるのよ」

少女は思いつき眉をしかめた。

アリッサは綾瀬臣が大好きだ。

彼女の言によれば、ジョージ・リートよりも、なによりも綾瀬臣が大好きだ。

世界で最も綾瀬臣が好きなのは自分だ、という自負がある。そもそも、この男が、とアリッサは思う。

「：臣になんかしたら許さないんだから」

わたしの大好きな臣に、指一本でも触れてご覧なさい。

アリッサは人差し指を突きつけるように、宙を指し示す。

「君でもいいんだがね」

「あんた、頭おかしいんじゃないの？」

侮蔑するように、アリッサは指を鳴らす。

轟音が鳴った。

炎が燃え上がる。

美しく。

「：炎はわたしの下僕よ」

そのときだった。

ジェフリー・シェルドンの胸を、懐剣が貫いた。

背後にいる、死天使の剣によって…。

「殺しましょう：」

優しい笑顔。

臣の優しい微笑。

「臣…！」

死天使。

大好きな綾瀬臣。

アリッサは彼女の名前を呼んで大きく手を振る。

まるで友達に久しぶりに再会したかのような反応である。

嬉しそうにアリッサは笑う。

そして、死天使と呼ばれる裏社会の女は柔らかく笑みを返した。

「：早く帰りましょう、そしてディナーにするの。たくさんお話をしましょう」

矢継ぎ早に告げるアリッサはそうして嬉しげに笑うと、次の瞬間

に彼女の瞳は「無」となった。

爆発音が響く。

コンディションが良ければ彼女は平然と屋敷一棟くらいならば容易に吹き飛ばせる。

身軽に二階の窓から飛びおりた臣とクリストファー・ジェファースンに、少女は軽く安堵するとくると屋敷に背中を向けて走り出した。

それほど遅くない時間に、警察と消防が到着するだろう。

もめ事に巻き込まれるのはごめんだし、彼らは正規の司法機関に発見されるのはお断りだった。

「指紋でたらどうするのよ？」

指紋。

アリッサに告げられて、ジェファースンと綾瀬臣は顔を見合わせた。

「もみけせば、いいんじゃないの？」

「もみけせばいいんだろう」

言葉がそろった。

「…あー、あー…」

アリッサは嫌そうに眉をひそめる。

「…これだから権力者って嫌いよー」

「ごめんなさい…」

困ったように臣は笑う。

「いいのよ、わたしがなにも持っていないのは臣のせいじゃないもの」
自分のせいではない。

嬉しげに、アリッサは臣に抱きついてから、彼女はふと両目を細めた。背後の屋敷を振り返る。

彼女はなにを見ているのか。

アリッサの様子を見やった臣もそうして、屋敷を仰いだ。

レオナルドの車に乗り込んだのは四人。

モデルのような美貌の女、ブロンドの巻き毛の少女、そして大柄

な白人男二人。

ジェフアーソンの車はすでに爆発に巻き込まれて乗れる状態ではなかったのだ。

「…黒揚羽」

つぶやくようにして、アリッサは長身の女を見上げた。

長身で、手足が長く、腰の位置も高い。

頭は小さくて、九頭身だ。

体格だけを見ても、抜群のスタイル。

誰もが彼女に憧れる。

しかし、彼女は世間の憧れの対象であるはずなのに、憧れの職業にはついていない。

それが恨みを買うのだ。

美貌とスタイルを兼ね備えながら、彼女はモデルでもタレントでも、役者ですらない。

「なに？」

「臣のこと、好き？」

「大切よ…」

そう言っただけで黒揚羽と呼ばれる女は柔らかに微笑した。

二人は、ジェフリー・シェルドンの別邸に潜入していた。

高崎と、その妹の千歳。

片腕に吊した日本刀を、彼女はツインテールの黒髪を揺らす。

コツンとブーツの足音が響いた。

赤いリボンがひらりと風に揺れた。

まるで蝶のようだ。

少女のような。

「花鬼…」

いつか、そう呼ばれるようになった。

「なんとでも呼べばいい」

着物に、袴とブーツ。

コツコツと靴音が床に響く。

まるで大正時代の女学生がそのままタイムスリップしてきたよう
だ。

高崎千歳。

麗しい少女。

少女はすらりと音もなく抜刀する。

「わたしは、あのかたを守るために生まれたのです」
睫毛が揺れる。

切れ長の目が彼を見つめた。

「わたしと、お兄様を殺して、そしてお嬢様を殺す……」
皮肉げに口元をゆるめた。

「千歳、無事か？」

追いついてきた彼を、千歳は長身の兄を見上げた。

「もちろんです」

リボルバー式の拳銃を構えた彼は妹の背中を守るようにしてあた
りを伺う。

彼女は横から伸びた太い腕を、体を沈めて躲すとそのまま刀の柄
を男の肘にたたきつけた。

ごきりと鈍い音が響いた。

悲鳴が響く。

骨折程度で悲鳴を上げるとは軟弱者だ、と、千歳は眉をつり上げ
る。

そもそも、彼女と彼が不機嫌な理由はほかにある。

誰よりも大切なお嬢様を殺すために自分自身たちを殺そうとする
など……

「手荒いことはするな、千歳」

「わたしのやったこととお兄様は無関係ですので、お気になさらず
に」

花鬼、と呼ばれる殺人鬼。

花鬼は殺人鬼、高崎は綾瀬臣のボディガード。

それが明確な立場だ。

「千歳…」

綾瀬臣は彼ら二人よりも強い。

死天使とマジックボム。

この二人はともに優劣のつけがたい殺人者である。

自分たちよりも強い者に、どうしてボディガードが必要なのかと思う者は多いだろう。

死天使は、彼ら二人を併せた以上に強い。

誰よりも強い彼女を守る者は彼女と同等に強いものでなければならぬ。しかし、彼女以上に強い者などいないことから標準以上に強い人間たちを数人従えなければならぬのだ。

「不愉快だわ…」

犯罪者たちが綾瀬臣に手を出すことなど決して許されない。

世界中が許しても、千歳は絶対にそのようなことを許すつもりはない。

刀を振り上げた彼女は銃を構える男に間合いを詰めた。

しかし、と高崎は思う。

どれほど千歳が「花鬼」と呼ばれるほどの殺人鬼であろうとも、その動きは臣のそれには劣る。幼い頃から彼女に付き従い、共に武術をたしなんできた身の上でありながら、やはり素質の違いなのだろうか…。

高崎は最も近い場所で千歳と臣を見てきた。

共に並ぶほど強いのだが、千歳は臣に及ばない。

「お嬢様は天才ですもの…」

千歳はそう告げると笑った。

だからこそ、死ぬわけにはいかない。

死んではならない。

自分と兄が死んでしまったら、誰が彼女を守るというのだろう。そのときだった。

天が赤く輝いた。

まるで爆弾でも爆発したような明るさだ。

高崎から連絡を受けていた綾瀬臣の案内によって、クリストファー・ジェフアーソンとレオナルド、アリッサと綾瀬臣がその別邸に到着したのは夜も更けてからだった。

「黒揚羽、ジェフアーソン？ あんたたち、援護はしてくれんのよね？」

にやりとブロンドの巻き毛の少女は唇の端をつり上げる。

不敵な笑みに、千歳と高崎は顔を上げた。

「ご苦勞様、ボディーガード」

アリッサにとっては、高崎も千歳もどうでも良いことであつたが、「臣のためにがんばっている二人」に加勢するのは彼女として当然のことだったようだ。

ごうごうと音をたてて炎が舞い上がる。

パイロキネシス。

ぱちりと、彼女の耳元で炎がはじける。

すさまじい力。

悲鳴を上げる間すらなく、ジェフリー・シエルダンの手下を焼き殺すマジックボムの手際は鮮やかだった。

「ジェフリー・シエルダン。先ほどのあれは、影武者ですね……」

先ほどの男。

ジェフリー・シエルダンと名乗った男が影武者であることを綾瀬臣は見破った。

アリッサの背後から、臣がゆっくりと歩み寄る。

長い睫毛を伏せたまま彼女は熱風の中に黒髪をたなびかせた。

「……お嬢様」

高崎が彼女を呼んだ。

空中に抜き身の日本刀が舞う。

妖刀、非天だ。

空中に舞い上がった非天を掴んだ彼女の瞳の奥に、なにかが閃いた。

草履を履いた足が走り出す。

炎の間を縫って彼女は血しぶきを上げる。炎をまとった刀身が男たちを刺し貫いていく。

炎が巻き上がる中を、臣と千歳、そして高崎とジェファアソンが立ち向かう男たちをたたきのめしていった。

中には死んでいる者もいるだろうが、彼らとしては殺したくて殺しているわけではなく、たまたまうっかり死んでしまったというだけのことだ。

「…どう思いますか？」

ジェファアソンに尋ねられて、アリッサは小首をかしげた。

「…たぶん、影武者だわね」

ジェフリー・シエルダンならば自分そっくりの影武者を作り出すことくらい造作もないことだろう。

それが、アリッサには不快だった。

「死天使、マジックボム、花鬼。そして執行官。雁首を並べてよく来たものだ…」

声が響いた。

声…。

スピーカーを通した音声に、アリッサはぴくりと青筋を立てた。

「むかつく…」

わかりやすい罵声に、スピーカーの声は沈黙した。

「臣を、狙って…。臣に、色目を使って…」

精神の底から感じる不快感。

アリッサはゆっくりと歩みを進める。

怒りだ。

恐ろしい怒り…。

「…お嬢様っ！」

高崎はぴくりと顔を上げた。

綾瀬臣の体を抱き上げるとそのまま体を翻した。

本能で感じるのは危険だった。

「千歳、退くぞ！」

「…はい」

数メートル走って物陰に体を潜めた高崎と千歳は、誰よりも切なお嬢様を抱きしめて彼女をかばった。

そんな彼らの様子に、クリストファー・ジェファースンも彼らと共に走り、頭をかばいながら体を丸めた。

爆発だ。

世紀の火遊び。

アリッサのパイロキネシスが臨界点で爆発する。

全てを焼き尽くせ、と。

まるで火の悪魔か、火の神のようだ。

＊

ジェフリー・シエルダンの別邸に潜入していたのは、高崎と千歳だった。

綾瀬臣とは別行動だったが、彼らは彼女を誰よりも信用していた。

「…見事に、丸焦げですね…」

翌朝、彼らはホテルの窓からジェフリー・シエルダンの別邸のあった方角を見やった。

未だに黒い煙が上がっている。

とりあえず鎮火したらしい。

「そりゃ、臣が早く火が消えるように火をつけるなら良いって言うからさ…」

アリッサはジェラートに舌を滑らせながら肩をすくめた。

だから燃やし尽くしたのだ、と。

「…やりすぎじゃないですかね？」

臣と、ボディガードの少女の千歳は同じベッドで丸くなるようにして眠っている…。

「…いいなあ」

その二人を見やってぼそりとアリッサがつぶやいた。

「わたしだって臣と一緒に寝たい…」

日本人のかわいらしい少女と、美貌の女性が眠っている。

「いつもわたしばかり貧乏くじ」

ジェラートをなめながらため息をついた彼女はそうしてソファに深く沈み込んだ。

「ま、いっか。あの色好きダヌキ、殺せたし」

物騒なことを明るく言ってからアリッサは天井を見上げた。

教会の懺悔室に、女はいた。

誰もが目を見張るアジアン・ビューティー。

美しい、などという陳腐な言葉で片付けられる程度のものではない。
い。

絶世の美女。

好き嫌いは分かれるだろう。しかし、彼女が美女であるということとは誰もが納得する。そんな圧倒的な存在感。

「…なにかも、わたしのせいなんです」

自分の存在感が全てを狂わせる。

世界の全てを狂わせる…。

「わたしが悪いんです…」

彼女は泣きそうな瞳を揺らした。

そう、本来、彼女は異教徒である。

けれど、彼女は彼に許しを請う。

宗教概念の薄い日本人にとって、「異教徒」という言葉は聞き慣れないものである。

信仰が異なると言うことが区別につながる日本国以外の国の人間にとって、日本人の感覚こそが異端な訳だが、人にとって「普通」という感覚は自分を取り巻く環境によって構成されるのである。

「…後悔していらっしゃるのですか？」

問いかけた青年司祭に、女はうつむく。

長い沈黙が流れた。

言葉を探しているのか、言葉を失っているのか。

長い、長い沈黙。

しかし、どんなに泣きたくとも、彼女は泣くことができない。

泣けない…。

「どれほど罪をあがなえば、わたしは許されるのでしょうか…」

長い時間の後、彼女はぽつりとつぶやいた。

「あなたは、罪だと感じていらっしやるのですか？」

尋ねられて、女は再び沈黙した。

「…罪は人が作り出すものです」

青年司祭の言葉が響く。

「罪を犯さない人間はいません。その罪をどのように心に抱えて生きていけるのか、そこにその人の価値が生まれるのではないのでしょうか」

どのように受け止め、どのように心にいだいて生きていけるか…。うつむいた彼女は言葉を探す。

わかっている。

どうすればいいのかも。

どのように生きればいいのかも…。

わかっている、どうすることもできない。

「…あなたは、これまで最善の方法を選択してきたはずですよ」

彼女の背中を押してやる。

クリストファー・ジェファーソンは格子越しにそっとほほえんだ。

「あなたはご存じのほずです」

生きる道を。

生きていくすべを。

知っているはずだ…。

彼女は愚かではない。

「あなたは、全てを許されてこの世に生を受けたのです。そして全てを与えられた。それこそがあなたの存在証明ではありませんか…」

彼女は全てを許されて生まれた。

その先にある道も、全てを。

全てを与えた神が彼女の生きる道を知らないわけではない。

高い踵の靴が石畳を打つ。

モデルかハリウッドの女優のようだ。

誰もが目を見張る。

寒空の下に、組紐で肩に釣った総絞りのドレスは膝の上でぎっくりと切り込みが入り、美しい脚線美を見せつける。

風を味方にしたような軽い素材で作られたドレスは、ジャパニーズ・カルチャーの一端を感じさせる上質のものだ。

北風に彼女は舞い上がる頭髪を押さえた。

「…綾瀬臣様」

背後から呼び止められて彼女は振り返った。

視線が交差する。

ローマンカラーの長身のハンサムな司祭と、女優のように美しい女。

細い腰骨に肘をかけて腹の前で指をくむ。頭が全く揺れない彼女の動きはどこまでも静寂を身にまとう。

「あなたは、光の中に生を受けられた」

光。

誰よりもまばゆい光の中にいる。

「あなたは、光の中を進むべき価値がある…。どうぞ、その光をお忘れになりませぬように…」

「神父様…」

彼女はそれだけ言って言葉を詰まらせる。

「ありがとうございます…」

告げて深々と頭を下げた。

そのとき、一台のリムジンが教会の前に停まった。

後部座席の扉が開き、運転席から男が現れた。

「…高崎さん、千歳さん…」

「お迎えに上がりました、お嬢様」

黒いリムジンの後部座席から現れたのは、袴姿の少女だ。

日本のボディガードの中では最高の腕を持つだろう。

「帰りましょう…」

高崎が彼女に手のひらを差し伸べる。

「はい」

ほほえんだ彼。

綾瀬臣は彼と、彼の妹にほほえみ返し、ハイヒールを鳴らした彼女はリムジンに乗り込んだ。

その姿を見送りもせず、クリストファー・ジェファースンは体を翻した。

光あるべき時に、光の中を進めばいい…。

彼女には誰よりもその権利がある。

神から愛された娘。

全てに恵まれたために、そのために誰よりも苦しむことになった娘。

「光と共にあれ…」

青年はそうしてつぶやいた。

第五章 **M a s s M u r d e r** 1

花鬼が正常者の殺人者であるならば、カーリーは典型的な社会病質性の殺人者だ。

どちらも、いわゆる大量殺人者で、シリアルキラーである。

この二名と、死天使とマジックボムはまた異なる大量殺人者だった。

どちらも共に正常な思考能力と、正常な判断能力と知性を持つ。

特に、死天使の知能指数は高く、世界でも屈指の頭脳を有した。

誰よりも、全てに恵まれた美しい殺人者の死天使。

マジックボムについては、出自が明らかではなくいつからか彼女は世界を震撼させる殺人者として名を馳せるようになった。

いつか国際的な司法組織、各国の司法組織、裏社会など多くの組織から追われることになりながら、彼女らはそこにいた。

美しくも可憐な殺人鬼たち。

ひとつの謎は彼女らの四人のうち、三人までが外見の変わらない異常者であったと言うことだ。

死天使は年齢相応の美しい女であったが、四人の中に同質として並べると逆にそれが異常にも感じられたほどだ。

マジックボムは六歳を過ぎた年頃の少女。

カーリーは十歳すぎの年頃の少女。

花鬼はカーリーよりも少し年上に見える程度の年頃の少女。

そんな彼女らが、どうして成長することがないのか、という議論はあちこちでされたが、結局、その疑問の解決はされなかった。

可憐な少女たち。

少女らの実際年齢は、その外見よりもずっと上だ。

実年齢は謎のままであったが、彼女らが外見以上の年数で殺人を行っている、という事実は消せないのだ。

当初、未解決事件のシリアルキラーの再犯ではないのかと言った

説もあったが、実際は現場に多くの場合、少女たちが絡んでいたことから司法機関、もしくは各国警察当局は少女らを裏社会に関連するシリアルキラーであると断定した。

それほど少女らの殺人歴は長かった。

最も短い死天使で十年弱、最も長いのはマジックボムで軽く二十年を超える。

そしてその犯罪の凶悪さと、情報を裏で掴む正確さとで未だに彼女らは虜囚となることもなく今に至っている。

「それっていつの話だっけ？」

きょとんと目を丸くして少女は捜査官を眺めた。

FBIに所属する捜査官のひとり。

若い男は神経質そうな目をさらに細めた。

表向きは尋問ということになっているが、その部屋はただの会議室で、少女は拘束は全くされていない。

手錠もなく、のんきにオレンジジュースのストローに口をつけた。

「十五年前、三月四日の事件だ！ おまえがやったことだろう」

「おまえって呼ばないで。それにだいたいいいいちいち、いつどこで誰を何人殺したか、なんて覚えてられるわけないでしょ」

オレンジジュースを差し入れたのは同じくFBIのブレット・オルコットだ。

同僚の若い男にはコーヒーを。

ブロンドの巻き毛を揺らした彼女は、鬼のような形相でにらみつける青年を一蹴して足を組む。

そのテーブルの横の折りたたみ式の椅子に座ったブレット・オルコットは、少女姿の殺人鬼と青年捜査官の様子を眺めている。

彼女は、かつてアメリカ政府と取引して以来、世界を震撼させるような大事件は起こしていない。

マジックボムの監視役、ブレット・オルコット氏は彼女の言葉を、とりあえず信用していた。

少なくとも、結果論でしかないが彼女はその言葉を裏付けるよう

に行動していたのだから。

「嘘付け！」

青年がどんっと音を立ててテーブルを殴りつけた。
音が響く。

ブレットも思う。

彼女が「いつどこで誰を殺したのか」覚えていないはずがないと思っただ。

彼女はおそらく覚えている。

全て、なにかもを。

忘れてはならない記憶の一端として。

「…もう、勘弁してよ。おとなしくしてんだからさ」

おとなしくしている、とはよく言ったものだ。

先日のイギリスでの大騒ぎについてはすでに世界中の警察組織の知るところだ。

ある筋の発表に寄れば、彼女単独の犯行、ということになっている…。

「貴様のせいで、何人巻き込まれたと思っている」

警察官、警備員、そして消防士。

捜査官に問い詰められてアリッサはブレットに助けを求めるように視線を向ける。

「知らないわよ、丸焼きにしてるところに勝手に入ってきて勝手に死んだのはあっちじゃないのさ」

なるほど、わかりやすい言い分だ。

「それに！ 貴様とかおまえ、とかいい加減にしてくれない？」

「…アリッサ」

ブレットは少女の名前を呼んだ。

「別に過去の事件を今さら掘り起こそうと思って呼んだ訳じゃない」

「じゃあ、なんなのよ」

ふてぶてしい少女の態度に、青年捜査官は明らかに不機嫌な表情を隠せない。

「：イギリスでの一件は、おとがめなしの約束よね？」

だいたいなんでこの目の前の男は十五年前だの二十年前だのと、そんな古い事件を持ち出すのだ、と彼女は思った。

「爆弾魔がでた」

「わたし、ここ二ヶ月くらいなにもやってないわよ？」

最後に彼女が殺人を犯したのは二月のイギリスでやったジェフリ・シエルダン邸放火事件だった。

「君の信奉者か、もしくは模倣犯だと考えられる」

「：はあ？」

信奉者か模倣犯。

「君が沈黙している間に、君の手段をまねた者があちこちのビルを破壊している」

「：わたし以外がやったなら、火薬とかでてくるからすぐわかるんじゃないの？」

彼女のように身一つで乗り込む殺人者はほとんどいない。

ほとんどいない、と言うか彼女だけでも言えるかも知れない。

大柄な男の殺人者ならばともかく、彼女の姿は小さな子供だ。

そんな幼い子供がほとんど丸腰に近い状態で殺人をするなどあり得ないことである。

その、彼女の手法をまねた殺人犯。

「へー：、わたし、そんなに有名人なの？」

彼女は肩をすくめる。

「いい加減にしろ！」

青年に怒鳴られて、彼女はぴくりと眉を上げた。

「帰る」

不意に立ち上がった彼女は、ドアノブに手をかけた。

「まだ帰っていいとは：」

青年は、彼女の恐ろしさを知らない。

不遜で傲慢な殺人鬼。

「止めるな」

ブレット・オルコットが口をはさんだ。

止めてはならない。

少なくとも、彼女は政府との約束を守っている。

それだけで今のところは充分だ。

「後で君の家に行く」

話がある。

ブレットがそう付け加えると、彼女は嫌そうに眉間を寄せただけで扉の向こうに消えてしまった。

青年は苛立たしげにドアをにらみつけている。

若いというのは、良いことだとはブレットは思わない。

「彼女を刺激するな」

「しかし…！」

なにかを言いつのろうとしている彼を、ブレットはたしなめた。

「自分の命に危険が及ぶぞ…」

彼女は恐ろしい。

マジックボムが犯罪を始めたばかりの頃にブレット・オルコットは彼女を知った。当時、世界を震撼させ、全世界を恐慌に陥れたブロンドの少女。

「あの子は、全てにおいて我々の理解の範疇を超えている…」

君と彼女の過去にどんな確執があったのかは知らない。

しかし、彼女を不用意に挑発してはならない、とブレットは告げる。

「大丈夫だ、彼女は自尊心が強い…。自分の模倣犯がでたことを快く見過ごせるほどお人好しじゃない」

なにか言いたげな瞳の青年に、古参のFBI捜査官はそう告げた。世界など壊れてしまえばいいと彼女は思う。

世界など、壊れてしまえ…。

世界を呪い殺す。

「…あんな子供のどこが恐ろしいんです？」

青年に問われて、ブレット・オルコットは目を細めた。

「子供に見えるのは外見だけだ。マジックボムをなめるな」

非力な子供に見えるのは外見だけ。

アリッサがアメリカ政府と取引した今も、恐るべき殺人者であるという事実は変わらない。

「：君は見たことがないんだろう」

彼女の殺しの手段を。

彼女がいかにして他者を殺すのかを。

だからこそ、無責任な発言ができるのだ。

「彼女を無責任に刺激してなんになる？　またあの地獄が舞い戻るだけだ」

ブレットはそう告げてため息をついた。

「君は、一対一でマジックボムと相對する度胸があるならやつてもかまわないが：。君の発言はただ混乱を招くだけだ」

彼女を止めることができる者などいはいはない。

ブレットも。

ジョージ・リートも。

誰も、彼女を止められない。

ただし、ブレット・オルコットは、彼女を止めるために自分の命を犠牲にする覚悟はできている。

自分だけの命ならいくらでも差し出せる。

その覚悟がないならば、アリッサをむやみやたらと刺激する権利などない。

「：それこそ、また多くの犠牲者が出ることになる」

死天使に並ぶ一級の犯罪者。

もっとも、彼女の存在は今では犯罪者というよりも「傭兵」と言ったほうがより近いだろう。

「とにかく、君はもう少し相手を選んで非難することだ。あの子は他の殺人者と同じように脅せばなんでも言うふぬけではないぞ」

ハンドバッグを持って彼女は街を歩く。

小さな子供が小悪魔のような格好をしているのはなんとかかわいら

しいことだろう。

「：マジックボム」

青年はつぶやいた。

カフェテラスでカフェオレを飲んでいた彼は思わず立ち上がった。かわいらしい少女。

それは表の顔でしかない。

カフェテラスで立ち上がったものの、ふと思い出すのはブレット・オルコットの言葉だった。

「覚悟がないなら、彼女に関わるな」

捜査上、FBI本部で彼女に関わることと、私的に関わることは違ふと彼は言う。

FBIにいる限りは彼女は政府との約束を守って手出しをしないが、プライベートでとなると話が違ふ。

彼女は危険人物なのだ。

だから、私人としては決して関わってはならない、と。

「アリサ」

声をかけた男がいた。

金髪の、若い男だ。

しかしその瞳の鋭さを見る限りまともな世界の人間ではない。

「：遅いからとっつかまったのかと思った」

「誰がつかまるって？」

剣呑とした声を上げた彼女に、若い男は苦笑いする。

「まあまあ。そう威嚇しなくても」

「レオン、あんた、ひよっこなんだからわたしのことなんて心配しなくて良いのよ」

腰に両手を当てて仁王立ちになった彼女は若い男をにらんだ。

「：ひよっこ」

そりゃそうだろうけどさ。

彼女と会話をしている男は肩をすくめる。

「ところで、何の話だったんだ？」

離しながら歩きだす彼女らに、青年捜査官は二人を遠巻きに尾行する。

「なんか、わたしの模倣犯が出没してるらしいって話」

「…そういや、最近ニュースで爆発事故が相次いでるって言ってなかったか？」

「あー、あれのことだったの」

あんまり人為的すぎて、わたしの真似だなんてこれっぽっちも思わなかったわ。

続けてつぶやいた彼女は首をかしげた。

「…いや、アリサの殺し方も充分人為的だと思うが…」

「そうじゃなくて」

アリッサはレオナルドと呼ばれた青年を見上げてにらみつける。
つくづく、いつも彼女は不機嫌そうだ。

「そうじゃなくて、人為的っていうのは、わざとらしいって言い
いのよ」

彼らのように、殺人を生業にする者たちは、もっとやり口がスマ
ートだ。

それこそ、空気でも吸うように殺人を犯す。

それを誇るのもどうかと思うが、そもそも往来でそんな話を普通
にするのも問題があるのではないか…。

「それよりなんかついてきてるのがいるけど、アリサの知り合いか
？」

「…知り合いなわけないでしょ！　どこの馬鹿が警察に尾行されて
喜ぶと思ってるわけ！？」

レオナルドに怒鳴りつけた彼女はくると背後を振り返ると、遠
巻きに彼女らを見つめていた青年捜査官をにらみつける。

「ちよっと、そのポリス。出てきなさいよ！」
怒鳴りつけた。

周りに一般庶民がいようとおかまいなしだ。
その場の誰もがどよめいた。

自分を偽らない。

自分を覆い隠さない。

それが彼女の強さだ。

指を突きつけるように青年捜査官を指し示した彼女に、彼は固まった。あまりにも派手な彼女の様子には隣にいたレオナルドが「おいおい」と額に手をあてた。

とにかくすばらしい自己中心振りだ。

そんな迫力に満ちたアリッサの様子に、逃げ出すこともできないまま青年捜査官は硬直している。

「：アリサ、そんな風に人前で脅すもんじゃない」

ぽんぽんと頭の上に手が振ってきた。

「なによ、わたしを尾行してくるほうが悪いんじゃない」

むっかーと目を三角にする彼女に、ジョージ・リートは笑った。

「そう怒るな。あいつは若いから君の恐ろしさに無知なだけだ」

「なに？ それ。わたしが手当たり次第人殺ししてるような言い方しないでくれない！」

怒鳴りつけようとした彼女の口に、ジョージは手のひらを当てて声を封じた。

「とりあえず、ここは人が多い。どこか静かなところでも行こう」

彼女にそんな力業で黙らせることができるのは、FBIの狙撃手、ジョージだけだ。

「おい、セルヴィツジも来い」

背後で硬直していた青年捜査官に呼びかける。

だいたいなんなのよ、むさ苦しいわね。

うっとうしげに独白した彼女に、さすがのジョージとレオナルドも苦笑してしまった。

確かに、強面の男が三人と、小さな子供がひとり、というのは傍目には少々奇異なものに映ってもやむを得なかっただろう。

機嫌の悪そうな瞳でアリッサは目の前の男たちを見つめた。

彼女は裏社会だ。

機嫌の一つも悪くなるというものである。

目の前の男たち、三人のうちの二人がFBIともなれば。

一人は腰巾着であったから、すでに眼中に入っていない。

…というよりも、自分よりも実力が遙かに下の、ひよっこ犯罪者など、彼女にとってすでにどうでもいい存在でしかない。

「別に、普段は普通の女の子なのに…」

ここ二ヶ月ほど、なにもやっていない自覚があるからこそ、目の前の二人のFBIの存在に嫌気もさそうというものだ。

「…まあ、ぱっと見普通だな」

ジョージは相槌を打った。

もっともらしい言葉に彼は肩をすくめる。

アメリカ政府と彼女が行った司法取引。

彼女は、それなりに守っている。

もつとも、現在の彼女の立場は、傭兵であるといっても正しく、裏社会の一端でありながら、正確には裏社会ではないと言えるのかもしれない。

目の前に出されたドーナツを指先で転がしながら、アリッサは額を押さえた。

そもそものなんだというのだ。

この状況は。

ニュースで散々やっているのは自分の模倣犯で。

「ぶっちゃけると、わたしはなにも関係ないじゃないの」

文句の一つも言いたくなるのがまともな神経だろう。

ごもつともなぶっちゃけ振りだが、ジョージの隣に座った青年捜査官はどこか納得できない表情で彼女を凝視していた。

もちろん初めて彼女を見たときの驚きといったらほかにたとえばうなどないものだったが、アリッサの不遜な態度を見ると彼女が年齢相応の子供ではなく、修羅場をくぐり抜け続けてきた殺人鬼であると納得せざるを得ない。

「関係ないですむものか…」

低く告げる男に、少女はドーナツに食いついて首を傾げた。

「どうしろって言うのよ。言っておくけど、わたしは別に例の爆弾魔にやり方を指南もしてないし、接触もしてないわよ？」

だいたい男に接触するなんて面倒くさいし、むさ苦しいからイヤ。むさ苦しいと一蹴する彼女にジョージとレオナルドは苦笑いを浮かべた。

確かに、彼女が誰よりも好きなのは死天使で、ほかの全ての人間はそれ以下の扱いでしかない。

アリッサにとって、死天使は絶対で、その他は遙か下に位置する「それ以下」なのである。

どうでもいい存在。

ジョージやレオナルドですらも。

彼女にとっては知人である彼らすらその程度の存在でしかないのに、見も知らぬ人間の存在意義などアリッサにとってはたかが知れている。

冷たいと思われるかもしれないが、彼女にとってはそれがごく「当然」のことなのだ。

生きる意義、意味が人間にあるとすれば、アリッサにとって「死天使のため」に生きていくことなのだ。

そのために生きる。

そのために殺人に手を染める。

彼女は死天使のために遙か彼方へと手を伸ばすのだ。

「わたしは、人間なんて大嫌い」

世界も、なにもかもをたたきつぶしてやりたい。

全てを壊し尽くせ。

頭の中に反響するノイズのように。

…消えない。

「消えていかない…」

アリッサはぼつりとつぶやいた。

誰よりも人間が大嫌いな彼女がはたして、信奉者、もしくは模倣

犯と目される者に犯行手段を指南するだろうか？

ジョージはそんなことを思った。

彼女の人間嫌いは、なによりもジョージ・リートが知っているはずではなかったか。

アリッサのその性質故に、誰にも心を許さない殺人鬼であるということを。

そのときだった。

頭上で鈍い音が響いた。

低く、なにかが這うような音。

一拍おいて、少女が目を見開いて顔を上げた。

地響きのような、低く重い音。

「…っ！」

アリッサが目を見開いたまま微動だにしない。

天井を見上げた彼女の周りを包む緊迫感。

彼女の目にとらえたのは砂埃だった。

「…アリサ」

ジョージが、アリッサの尋常ではない様子を感じ取った。

彼女の反応。

覚えがある。

それは想像もできないほどの災厄を目の前にしているような。

アリッサは答えない。

一瞬後、恐ろしい事態を青年捜査官とレオナルドは見た。災害の規模は大きかったが、ジョージには覚悟があったらしい。

空気が渦巻いた。

ひゅうひゅうと音をあげて、アリッサのブロンドの巻き毛が舞い上がる。

熱風だ。

しかし、彼女は動かない。

いや、動かないのではない。

動けないのだ。

「もう、間に合わない」

彼女はつぶやいた。

立て続けに起こる爆音にアリッサはテーブルについていた手を大きく横に払った。

それとほぼ同時に、頭上でさらなる爆音が響く。

「アリサ！」

「無理よ」

叫んだ男に少女は小さくつぶやいた。

男の意図はわかっている。

しかし、とアリッサは思う。

無理だ。

ビル内にいる全ての人間を救うことなど無理に等しい。なにより、自分の真上から降ってくる粉塵に意識を集中している。

へたをすれば自分も危険な事態だ。

建物全体にビシビシとイヤな音が響く。

ビルが、倒壊する。

今の彼女にはパニックに陥った市民の声など聞こえていないだろう。

タイミングを計る。

そして、ドオンと轟音が鳴り渡る。

どこまで鳴っただろう。

その瞬間、少女の周囲が真っ赤に輝いた。

それが彼女の能力。

自分の身を守っていることが、建物の外にいる人間にはわからない程度に力をおさえつつ倒壊するビルの鉄筋やコンクリート片を燃やしつくす。

その微妙な力のコントロール。

衝撃にとっさに顔をかばったレオナルドと青年捜査官はいつまでたっても自分にコンクリート片が降ってこないことに不審をかんじておそるおそる目を開いた。

微動だにしないまままでテーブルに手をついている彼女は虚空をにらみつけていた。

自分たちの周りにあるのは赤い壁。

ゆらゆらと揺らめく炎の壁。

「…なん、だ、これ…？」

手を伸ばした青年捜査官に、ジョージの厳しい声が飛んだ。

「さわるな！」

びくりと手を引っ込めた彼は首をすくめる。

「…さわるな、それは触れたものの全てを飲み込む炎だ」

その壁が彼らを守っていた。

一方のレオナルドは、彼女の能力はそれなりに把握はしているらしく、驚いた表情ではいるものの冷静さは欠いていないようだった。全てを飲み込み、全てを焼き尽くす炎。

アリッサはやがて、視線をおろした。

舞い上がる砂埃が届かないカフェでアリッサは、ぐったりと頭を抱える。

自分ひとりならばともかく、他の人間も守らなければならなかったのだ…。

降り注ぐ鉄筋とコンクリートを焼き尽くしたのだから。

頭痛がする。

彼女は頭をおさえたままで、男たちを一瞥した。

「自分たちがなにかやったわけでもないのに、なんて顔してんのよ」未曾有の大惨事に直面した捜査官二人と、裏社会の男。

レオナルドは裏社会とは言え、さすがにビルが倒壊するような事故に直面するなどまれなことだ。

「…そりゃ、疲れもする…」

主に心労だが。

「一番疲れてるのはわたしなんだけど…」
疲れた…。

屋敷ひとつ焼き尽くすことは神経など使わないが、特定の人間を

守らなければならないのは神経を使う。

それが彼女を疲弊させた。

「寝たい」

ぼそりとつぶやいた彼女は、そうしてよろめくように倒れ込んだ。その彼女を、FBIの狙撃手は腕の中に抱き留める。

「：無理をさせたな」

独白するようにつぶやいたジョージは息を吐き出した。

小さな体。

その体では、彼女が力を使えば心身の全てに負担がかかる。

規則的な寝息をたてて眠る彼女の頬にかかる金髪の巻き毛を指先で払いのけて、そっと抱き上げる。

小さな子供。

かわいらしい彼女はとても殺人鬼には見えない。

「リート捜査官、その人は：？」

「：彼女は、約束は破らない」

そっとジョージは彼女の背中を抱きしめる。

「君は、彼女に不信感を感じているかも知れない。だがアリサは別に無差別殺人を犯していたわけじゃないんだ」

彼女の過去を唯一知っているのがジョージだ。

監視役のブレット・オルコットすら知らない真実を彼は知っている。

「：小さいだろう？」

視線を彼は少女におろした。

「だから、マジックボムと呼ばれるんですね」

「そうだ」

「：こんな小さな子供が、マジックボムとは思えませんでした」

「アリサは全てを背負っているんだ：。俺たちのような、普通の間が想像もできない事態を」

重たいものを背負っている。

「俺も、セルヴィッジ、おまえにも想像できないものを背負ってい

る…」

力の抜けた彼女の体を抱いたまま、ジョージは歩きだした。

「どこに行くんですか？」

「アリサが疲れている、少し休ませないとだめだ」

肩をすくめた。

近場のホテルに部屋をとった彼は彼女をそのベッドに連れて行った。

上掛けをかぶせたジョージは、ベッドに乗り上げたまま少女の頭をなでる。

どこか眉をひそめたように、彼女は眠る。

昏々と…。

「…無理ばかりして」

いや、無理をさせたのは自分だ…。

彼女のパイロキネシスを当てにしすぎた。

「すまん…」

アリッサを抱きしめて眠ったジョージも、やがて眠りの深みへと落ちていった…。

＊

ガンガン、と音がする。

耳障りな音が聞こえる。

彼女はガラス張りの部屋の中でアリッサはぼんやりと目を開いた。

アリッサ・ノースウッド。

「…違う」

アリッサではない。

「わたしに名前なんて…」

「エレーネ」

声をかけられて、彼女は目をまたたいた。

「ガーゴイル…」

女はほほえむ。

ブルネットの女だ。

「…いつもすごい形相をしているのね」
くすくすと笑う。

「ここから出して」

「それはダメ。でたらあなたは暴走する」

繰り返される実験。

繰り返され続ける虐待に近いそれ。

小さく笑うと女は廊下の先に消えていく。

「…嘘つき！」

ごうっと炎が渦巻いた。

彼女の力をもってしてもその部屋は破れない。

感情に任せて炎を巻き起こす。

怒りに心をゆだねる。

ガーゴイルはたくさんのことを教えてくれた。しかし、彼女はなにもしてくれなかった…。

助けてくれなかった…。

嫌い、嫌い…。

大嫌い…。

唱える怨嗟の声。

「…大嫌いよ」

ぽつりとつぶやいた彼女は目を開いた。

目の前にあるのは広い胸。

「…ジョージ？」

深い眠りの底にでもいるのか。

そもそも犯罪者の前で爆睡する捜査官もどうなのだろうか…。

少女はため息をついて男の胸に額を押しつける。ひたすら眠かった。

数時間前のビル倒壊の際に、脳を酷使しすぎたか。けだるい体を男の体に任せて彼女は再び眠りへと落ちていった…。

炎の悪魔か、炎の使者か。

もしくは、彼女の存在が炎なのか…。

ハーバート・セルヴィツジは物思いに沈み込む。

ホテルのロビーについたのはビルの倒壊事件に巻き込まれた翌日のことだ。

あいにく、と言うべきか、マジックボムと呼ばれる少女は自分が目撃したことを話すつもりはない様子だった。

コービーに口をつけるセルヴィツジは虚空をにらみつけたままで思い出した。

昨日の彼女のことを。

ファンタジー映画に出てくる魔法かなにかのようだと思った。

異なるのは、漫画のように呪文を唱えないことだ。

ざわめきは昨日のビルの倒壊事件のことで持ちきりだ。

耳元で静電気が弾けるような音が聞こえた。静かな自己主張に、彼は顔を上げた。静電気のような小さな物音はざわめきの後に消えていく。

彼女は、決して自己主張をしようとしているわけじゃない。

確かに、彼女の犯行は自己顕示欲が強いとも言える。

認められないから彼女は犯行を犯すのではない。

誰かに救ってもらいたいから彼女は拳を振り上げるのではない。

そうではない…。

しかし、セルヴィツジにはそれがわからない。

炎を操り、彼と、ジョージ、そして自分の友人と自分を守った少女。

全てを焼き尽くす、それがマジックボム。

ブレット・オルコットが言うように、彼女の犯行手段を知らなければ粛々と皆殺しにされるだけだろう…。

「なんて顔してんのよ」

たばこを彼の唇から奪い取った少女は、灰皿に押しつけてもみ消すとアリッサは彼を覗き込んだ。

「昨日のあれがそんなに怖かったの？」

「：何人も死んだんだぞ、へらへらしてられるか」

「何人も、ねえ」

気のない相づちを打った彼女は、セルヴィツジの隣に座ると目の前にある新聞を手にした。

「知り合いでもいたの？」

大きな水色の瞳をまたたいて彼女は問いかける。

自分が、火に油を注ぐ発言をしている自覚がアリッサにはない。

「おまえは：っ！」

怒鳴りつけようとした男に、彼女はかすかに瞳の底に光を閃かせた。

「静かにしろ、ここでアリッサがマジックボムだと大声で言ったらパニックは広がるばかりだ」

彼女はマジックボムだ。

しかし、今回のビル爆破事件は彼女の犯行ではない。世間は昨日の事件をマジックボムだと信じているのだ。

ならば衆目で彼女がマジックボムだと公言するべきではない。

「：アリサ、君もセルヴィツジを不用意に刺激するな、わかっているんだろう？」

大柄な狙撃手の男に諭され、アリッサは片方の眉をつり上げる。

「知らないわよ、本当に」

セルヴィツジがどうして自分にこうも敵愾心を持つのか。

彼女には全く心当たりがない。

肩をすくめた彼女は苦虫をかみつぶした表情になっているセルヴィツジを横目で見やる。

彼は相変わらずなにかが言いたいらしいが、その言いたい言葉を見つけれない。

確かに、そこにいる彼女は「悪」ではないのだ。

かつての彼女は犯罪者だったかもしれない。明らかな「悪意」であつたのは確かだが、今の彼女はそうではない。

「：リート捜査官は、この子を信じているのですか？」

尋ねられて彼は肩をすくめた。

「：どちらかと言えば、信じたい、かな？」

信じたいのだ。

彼女を。

彼女のまつすぐな瞳を。

この子、という言葉葉にアリッサは口を開きかけたが、結局はなにも告げないまま口を閉ざした。

マジックボムの犯行だ：。

あれは、マジックボムのやり方だ。

「：わたしに、濡れ衣を着せるなんて、度胸があると思わない？」

彼女は窓枠に寄りかかったまま窓の外を見つめている。

アリッサの小さな背中。

誰よりも頼りになる、誰よりも強い少女。

彼女と何度か戦場を共にしてきたジョージは、この小さな子供がどれほど強靱であるのかを知っていた。

「君は強い」

しかし、と彼は思う。

「君は自分の弱さも知るべきだ」

「知ってるわよ」

短く彼女は応じる。

自分の弱さももちろん知っている。

「だからわたしは、一人じゃ動かない」

そうでしょ？

くるりと振り返った彼女は、ジョージとレオナルドを見た。

セルヴィッジのことなど眼中にないようだ。それはそうだろう。

彼女はセルヴィッジの実力など知らないし、相応の実力を持つ捜

査官ならば、裏社会は彼を知っているはずだ。

愛らしく、危険な少女。

「アリサ、手紙が」

レオナルドの声に、彼女は首をかしげた。

「手紙？」

手渡された封筒を彼女は切った。

内容は簡潔だった。

アリッサは不愉快げに目を細める。

「なんて？」

ジョージとレオナルドは、彼女の頭上から手紙を覗き込んだ。

「：くだらないわ」

手紙を丸めた彼女は屑籠に放り込む。

放物線を描いたそれは、屑籠に入ることもなく籠の端にあたって床に落ちる。

「まったくもってくだらない」

手紙には短く書かれていた。

マジックボムは、わたしだ。

そう書かれていた。

「マジックボムなんて名前、いくらでもくれてやるわよ」

眉間を寄せた彼女は憮然としてソファに座り込んだ。

その部屋は彼女の隠れ家の一つだ。

彼女は世界中にいくつかの家を持っている。

ほとんどが、FBI所属のジョージ・リート名義だが支払いをしているのは彼女だ。

「面倒くさいわね」

手紙が彼女宛に届いたと言うことは、知られたということだ。

その部屋を使っているのが、マジックボムであると。

知られてしまった。

もっとも、そうだからといって彼女は逃げるつもりなど毛頭ない。単純に面倒くさいと思っているだけだ。

「ほんつとうに、面倒」

ブロンドの巻き毛を揺らした彼女はくしゃくしゃと髪を指先でかき回す。

「…しっぱ出すかしら？」

彼女は誰にともなく問いかけた。

「どうだろうな。少なくとも、奴は今のところ証拠を残さずに犯行をやり遂げている。今後今までのようにやっていくのか、それともしっぱを出すのか…」

ジョージの言葉に、アリッサは視線を滑らせる。

「ぼろを出すに決まってんでしょ」

「どうかな？」

「だって、人間よ？ 証拠を残さないでいられるわけないじゃない」
上から目線の彼女の言葉にジョージが眼差しをゆるめた。

「それは、君が証拠を残さない努力をしなかっただけじゃないか？」
圧倒的な力を持つからこそ、彼女は強かった。

そして強いがゆえに証拠隠滅しようという努力をしなかったのだ。

「…むかつく」

ぼそりとつぶやいた彼女は背中をソファに預けるとため息をつきながら額に手を当てた。

＊

自分の犯行に自信があるのだろう。

ブレット・オルコットは思う。

そうでなければ、天下のマジックボムに喧嘩を売ろうとする者がいるわけがない。

たとえば、裏社会にあっても、表社会にあってもその立場から恐れられる綾瀬臣、死天使のように。

かつて、正体不明と言われた爆弾魔。

そして、爆弾魔であり、正体不明であるからこそ、「マジックボ

ム」と呼ばれた。

「しかし、参ったな」

彼女を刺激するのは、できれば避けたいところである。それこそ爆弾を素手でつくようなものだ…。

思い出すのは、マジックボムと呼ばれ始めたばかりの頃だ。

炎の中から現れた少女のこと。

巻き毛のブロンドを業火に晒した少女。

当時の名前は忘れてしまった。

「…わたしに、名前なんてない…」

低く笑った子供は灰ですすけた白いワンピースをまもっていた。

最初は真っ白だったのだろうが、すっかり灰色になってしまっている。

「好きな名前で呼べばいいわ」

言いながらなにかを思い出したのだろう。かすかに目を細めた彼女

は忌々しげに舌打ちする。

「なにをした…」

呆然と、炎の柱を見つめたブレットに少女は静かに足を踏み出した。

「…なにも。見ての通りよ」

死にたくなかったらどけ、と彼女は告げる。

言葉ではなく、少女の瞳が語っていた。

口の中がからからだ…。

目の前の存在から感じるのは明らかな脅威。

緊張から額に汗が浮かぶ。

「邪魔しないで」

踏み出した彼女の足元でアスファルトが歪んだ。

高熱で陽炎がたちのぼる。

そのときだった。彼女の頭上でビルの壁が崩れた。

鈍い音をたててコンクリート片が降ってくる。眼差しを上げた彼女は降り注ぐそれらを見つめた。

正直なところ、意外だった。彼女のような姿の小さな子供が、まさか世界を震撼させる犯罪者だとは。いわゆる爆弾魔を探していたのでは彼女に行き着くことなどできなかっただろう。

「…爆弾魔、か」

口元をゆがめて少女は笑った。

「わたし、爆弾魔に見える？」

くすくすと耳障りな笑い声が聞こえる。

その声を聞いてブレットは思った。

彼女は爆弾魔などではない。

もっと異質なものだ。

思い起こしたブレットは足音に我に返った。軽い足音の歩幅は短い。

「ブレット」

声だ。

彼が最も恐れる相手。

オフィスを訪れた小さな子供。

彼女の背後には若い青年捜査官ハーバート・セルヴィッジと狙撃手ジョージ・リートがいる。ブロンドの巻き毛が印象的な美少女だ。

「…どうした？」

尋ねられて彼女はジョージに顎をしゃくった。

セルヴィッジが未だに納得いかないと言った顔をしているのは、彼女を受け入れられないからだろう。

もちろん、ブレット・オルコットに青年の気持ちがわからないわけではない。

彼が、少女に対してそこまで敵愾心を抱くのはおそらくなにかの理由がある。

セルヴィッジが警察関係者で、アリッサが犯罪者であるという単純な理由だけではないだろう。ハーバート・セルヴィッジはおそらく別のなにかを抱えている。

「珍しいな、捜査官二人もつれて」

「なんか連行されてるみたいで、こういうのって嫌い」

視線だけを背後にやってマジックボムは肩をすくめた。

ひらひらと彼女は白い封筒を振ってから視線を天井に向ける。

彼女の身長では天井は異常に高く見えるだろう。

「それは？」

「邪魔するなってさー」

言いながら手渡されたそれに、ブレットは首をかしげた。

しわくちゃになった封筒もそうだが中身の紙もしわくちゃだ…。

「捨てたんだろう？」

「…うるさいわね！　わたしはいらないのにジョージが拾ったのよ！」

途端に機嫌悪くなった彼女の様子に、ブレットの顔に場違いな微笑が浮かんだ。

聞き分けのない子供を相手しているような気分になるのは彼女の容姿のせいなのかもしれない。

「マジックボムは、わたしだ…、か」

中に書かれた綴りを読みながら、ブレットは顎に指をあてて考え込む。

「これは君に対する挑戦、ということになるのかね？」

問われて、彼女はあいている椅子に腰をおろして膝をそろえた。

「なんでもいいわよ。そもそも、今まであった何件だっけ？　四件？　五件？」

「六件だ」

ジョージに出された助け船に、少女は「そうそうそれ」とデスクの上にある書類をちろりと流し見る。

「…わたしのやったことになってるのがちょっと気に入らないんだけど」

要するにそういうことらしい。

「その手紙について調べてくれない？　どうせなにも出てこないだろうけど」

肩をすくめた彼女はブレットを見つめた。

「なにかわかったら連絡をいれよう」

「サンキュー」

手紙をおいてオフィスを出た彼女は、ふとなにかの気配を感じたように振り返った。

「：アリサ？」

「なんでもない」

アリッサ・ノースウッド。

オフィスを出て行った少女姿の殺人鬼を見送った女はにんまりと唇をゆがめる。

「：お話はおしまい？」

おかつぱの黒髪と茶色と金色の瞳。

オッドアイが印象的な白人女性。

「どう思う？」

「わたし、別に情報屋でもなんでもないんだけど」

黒髪の女はかぶりを振ってから、壁に預けていた背中を起こして耳に頭髪をかける。

「しかし、情報を預かる身だろうか？」

「まーね」

でも、と彼女は言葉を続ける。

「：でも、わたしはああ言う子たちとは違うから。危ないところは嫌いよ」

ニッコリと笑う。

笑顔が朗らかだ。

「死天使、か」

「彼らは特別よ。マジックボムも死天使も含めてね」

ブレット・オルコットがたばこをくわえたのを見やった女はライターを差しだす。

「すまん」

「いえいえ。ところで写真のこと、知ってる？」

「…写真？」

サラはぼつりとつぶやいた。

「写真が紛失したのよ」

当時のことだから、写真はアナログ。

ネガも紛失。

「…サラ？」

「だから、マジックボムの写真が紛失したのよ」

「…な」

サラ・エンヴリーの予想外の言葉に、ブレット・オルコットは言葉を失った。

マジックボムの写真が紛失したと、彼女は言った。

「まさか…？」

「本当」

彼女は背中を壁に預けてからうんざりとしたように髪をかきあげる。

「マジックボムは、警戒心がなさすぎるわ」

自分の強さに溺れている。

しかし、溺れるほど彼女は強い。

「マジックボムは強い…」

強いが故に彼女は弱い。

紙一重の強さと弱さ。

それは背中合わせだ。

「その写真というのは…？」

「日本人のカメラマンが撮ったものらしいわ。数枚あったらしいけど、全部なくなったらしいの」

それが万が一公開されれば、マジックボムはおしまいだ。

おそらく、飼い殺しにしていたアメリカ政府は汚名を晴らすために、彼女を全力でつぶそうとするだろう。

そしてその被害はおそらく、想像もつかないほど大きなものになる…。

ブレットは背筋を這い降りた冷たい感触に身震いする。

「：もしも、マジックボムを殺すなら、もっと穏便にやらないと、アメリカは大きな被害を被るわよ」

そういうことだ：。

彼女を殺すならば、アメリカ政府が直接関わったことを知られてはならない。

誰にも。

アメリカ政府にも、世界にも。

「アメリカ政府が直々にでてくれば、それはマジックボムが抵抗する公明正大な理由を作ることになる。いつか、彼女が例の生態研究所をまるまるつぶしたときのように：」

被害が出たとしても、政府は公にすることなどできるものか：。

彼女の存在を：。

彼女の存在した理由を。

それは、アメリカ政府を根幹から揺るがせる。

それだけの事象だ。

「アルカイダみたいになんか」

「：洒落にならん」

サラの言葉に、ブレットは首筋を大きな手のひらでなでた。

「：洒落なんかじゃないわよ」

息を吐き出した彼女は、立ち上がると肩の上でひらひらと手を振る。

「じゃーね」

「：待て」

立ち去ろうとした彼女に、ブレットは制止の声をかける。

振り返った。

オッドアイが煌めく。

「：どうしてその情報を俺に？」

「そうねえ、どうしてかしらね：」

彼女は肩をすくめる。

長い間考え込んでから、彼女は睫毛を上げた。

「：マジックボムは、シンにとって大事な人だから、かな」
ふわりと笑う。

価値基準などそんなものだ。

「シンが悲しむから、マジックボムを殺したくない」
それだけだ。

そう彼女は告げた。

サラが告げる「シン」とはおそらく「死天使」のことだろう。
綾瀬家の跡継ぎの女。

「君の基準も、死天使か：」

「そうよ、わたしが大事なのはシンだけ」

それにあの子のことを死天使だなんて言わないで。

彼女は言う。

サラは告げると今度こそ本当に踵を返した。

ひらりと体を翻す。

マジックボムが大切なのではない。

サラは思う。

そして、サラの行動範囲がアメリカであるのは、アメリカには綾瀬臣がいないからである。

「大切なよ」

ぽつりと彼女はつぶやいた。

マジックボム。

ひらりと、彼の手の中で写真が翻る。

大男に、守られるように背中を守られた彼女。

「：魔法の爆弾」

そう呼ばれた少女…。

ブロンドの巻き毛。

爆弾魔と彼女が呼ばれない理由…。

彼女が爆弾魔であるならば、彼女は「マジックボマー」と呼ばれ

るはずだ。

しかし、彼女は「マジックボム」と呼ばれる。
その理由。

彼女自身が爆弾なのだ。

「きれいで、かわいい……」

ずっと、彼女は変わらない。

男はテレビの明かりだけで写真を見つめた。

「かわいい……」

巻き毛の少女。

これほど愛らしい子供が、世界を震え上がらせた殺人鬼なのだ。

＊

アメリカ政府の根幹を揺るがすほどの、彼女の存在。

彼らは、識っていて、それを飼い殺しにした。

飼い慣らしているつもりなど毛頭ない。

彼女は飼い慣らされるほど、なまかな存在ではないのである。

アリッサ・ノースウッドと名乗る爆弾魔は決してなにかになびく

ことはなく、自身の足で立つ。

爆弾魔と言う呼称は正しくはない。

彼女は爆弾魔ではない。

特別であるがゆえに、彼女は異質だ。

人ならざるもの。

もっとも彼女は異質であることを誇るわけでもない。

人と異なることは彼女のアイデンティティではありえない。

「……アリサ」

呼びかけられて少女は水色の瞳をあげた。

少女のままの肉体のアリッサにかかる負担は相当なものだ。傍目には想像もできないほどの負荷が体にかかっている。

大人ではない彼女の体力。

「なんでもない」

眉根を寄せたままのアリッサはどう見ても「なんでもない」ようには見えないが、彼女がそう言ったが最後、追求したところで決して口は割らないだろう。

「…」

「なによ、その顔は」

「いや…」

ジョージはなにか言いたげであったが、アリッサはふいっと目線を背けた。

気に入らないから殺すのだと、彼女は言う。

理由などほかにいない。

理由などそれだけでいい。

自分という人間を、定義するもの。

「自分がどうして生きているのかとか、なんのために生きているのかとか。そんなくだらないことを考えるのはどうかしている」

平凡に暮らせる人間の方がよほど幸せだと彼女は考える。

それは、自分のためではない。

彼女は綾瀬臣を見ていたからだ。

生まれたときから平凡に生きることなど許されずに、人生を送ってきた悲しい女を見てきたからだ。

自分は、自分のやりたいように生きている。

その自負がある。

しかし、綾瀬臣と呼ばれる女はどうだろう。

普通であることも、犯罪者として裏社会に生きること許されない。

誰よりも異端で、誰よりも悲しい。

絶世の美貌を持つ女。

「わたしは、誰よりも悲しい人を知ってる」

「アリサ？」

「…なに」

剣を持った彼女の声に、ジョージは再び黙り込んだ。

「写真が紛失したらしい、という話は聞いたか？」

尋ねられて彼女はぽかんと目を開いて長身の男を見上げた。

「なにそれ？」

自分の写真、ということすら耳慣れない。

しばらくしてから首をかしげた彼女は眉間にしわをよせて虚空に視線をさまよわせた。

「写真……」

もう一度つぶやいて、やはりわけがわからないのか首を傾げる。

「いつの写真？」

「アフガンかそのあたりじゃないのか？」

「ああ、あのころか」

納得したような、そうでもないような、と言った表情で相槌を打った。

彼女が東南アジアの紛争地帯に傭兵として雇われていた頃だ。当時は毎日が戦争だった。右を見ても、左を見ても砲弾が飛び、銃撃戦が繰り広げられた。

彼女らはそんな世界に暮らし、生きている。

およそ一般の人間には理解できない暮らしだろう。

何日も人間らしい生活もせず、泥や砂埃にまみれて生きる生活だ。普通の女の子の生活ではない。

もつとも、アリッサはどうてい「普通の女の子」と言うにはほど遠い。

紛争地帯など世界中には多すぎてどうてい覚えきれないのも事実。

「……人間って、馬鹿よね！」

言い放つ彼女をジョージは見やる。

「それは、自分も死天使も、という論理にはならないのか？」

ジョージの言葉に、アリッサは片方の眉をつり上げた。

「臣の、悪口言ったら殺す……」

アリッサにとって死天使は絶対者だ。

少女の瞳の冷たさに、ジョージ・リートは息を飲み込む。

「脅しじゃないわよ」

気に入らないものの全てを圧倒的な暴力で一刀両断する。

強さと、脆さの共存。

アリッサはそうして、殺してきた。

気に入らないものを、なにもかも。

なにかが焦げるような臭いが漂う。

「…あー、ところで、この間みたいなのはやめてくれよ。心臓に良くない」

無理矢理に話題を変えたジョージに、アリッサは訝しげな眼差しを返した。

「この前って…？」

「ワシントンでの事件のことだ」

「ああ、あれか」

少女は肩をすくめる。

「別にどうだっていいじゃない、あんなこと。何だって言うの？」
欠陥品。

人としてあり得ない。

アリッサの周囲にある人間たちのなかで最もつきあいの長いのはジョージだが、彼にとってもいまだに不明な点が多すぎた。

人間として、なにかが欠落している。

「いや、なんでもない」

言ったところで彼女は理解などできないだろう。

すくなくとも、ジョージはそのことだけは理解していた。

「あっそ」

「…心配させるな」

それだけだ。

金髪の巻き毛の頭にぽんぽんと手のひらを乗せた彼に、うつとうしげな様子を見せた彼女は苛立たしげに鼻から息を抜く。

実際の所、苛立たしいのかも知れない。

自分が、気を緩めたことがいけないのだ。
自己責任。

そんな言葉を、姿通りの子供であれば適用されなかりうが、アリ
ツサはそうではない。

「うるさい」

男の大きな手のひらを払いのけた彼女は苦虫をかみつぶしたよう
な表情になってから舌打ちした。

自分を、超えていけばいい…。

言葉で言うのは簡単なことだ。

しかし、彼女の能力はすでに限界値に近い。

それを超えると言うこと。

「…でも、超えなければ」

自分自身を。

大きな水色の瞳を見開く。

「超えればいいのよ」

全てを破壊し尽くす力を望む。

「わたしが強ければ、死天使を傷つけずにすむ」

彼女の望みはたったそれだけ。

魂の全てを傾けて彼女を愛している。

「アリサは、死天使が好きだな」

寂しげなジョージの瞳を、少女は理解していない。そもそも理解
するつもりなどない。

決定的な差異がそこに生じている。

「死天使を守るために、地球上全ての国家も、全ての人間も、全部
敵に回してもかまわない」

狙撃手の男は、そっと少女姿のアリツサを背後から抱きしめた。
生き急いでいるような錯覚さえも受ける少女を。

「畜生っ」

乱暴な独白が響いたのは東京の片隅だ。

フリーのカメラマンの男は苛立たしげにイスを蹴りとばす。

機密の漏洩だ。

そもそも安穩とした空気に慣れすぎていた自分も悪いのだ。

そんな自分すら苛立たしい。

わかっている。

自分が悪い。

「安全な」日本にいるからと油断していた。

時には写真という武器に、極秘事項すら握るカメラマンの写真たち。

世界に。

地球上に、絶対の安全などあり得ないことを知っていたというのに。

それを、見謝った。

カメラマン自身は、それを機密と思っていなくとも、世界での扱いはそれ以上であったりすることも、ままあるということを理解していたはずであったのに。

失念していた。

呆然とした佐々木は、ひっかき回された机を見下ろす。

写真がない。

古い写真だ。

それはネガごと盗み出されていた。

紛争地帯などを含めた海外、もしくは事件があれば日本国内どこへでも飛んでいく。

そんな彼にの撮影した写真。

夢中でシャッターを切った、不思議な少女の写真だけが紛失して

いた。

それほど重大な秘密を握っていたものであったのかと。

彼は思う。

「…しかし、またどうして？」

首を傾げた。

その手の犯行を行う者の中では、盗難者はいくつかの種類に分けられた。

自分の秘密を握られる者がいて、秘密を握りつぶしにきた場合。

もしくは、秘密を握ろうとする者。

少女の写真については、この場合、後者であるような気がする。気がする、というのは、その写真を撮影したことを少女自身が知っていることから、本人が盗み出しにきたとは考えがたいのだ。

本人がやるとすれば、もっと前に盗みに来るだろう。

「あの子は、何者だ？」

つぶやきは乾いた空気の隙間に消えていく。

彼女は何者だろう。

考え込む彼は、パソコンに向かった。

幸いにして中のデータは盗まれておらず、閲覧されただけのようだった。

パソコンに光ディスクを差し込んだ彼は、デジタルデータ化された少女の写真を呼び出す。

彼のデジタルデータは年代ごとによりわけられているため、撮影した本人でなければどこになにがあるのか全くわからない状態になっている。

それは盗難防止であるというよりも、彼がずぼらなだけなのだが、彼の大雑把さが幸いしたと言えるのかも知れない。

苛立つ気分のまま煙草に火をつけた彼は苦々しげに眉をよせた。

何者なのだろうか。

「…畜生」

大人げない悪態だったかも知れないが、彼はそれほど自分をまと

もな人間だとは思っていなかった。そもそも、一般的にまともな人間だったならばフリーのカメラマンなどやっていないだろう。

身の安全の保証があるわけでもなく、どこでのたれ死ぬかもわからない生活。

カメラを抱えて戦場を駆ける。

そのときだった。

ノックの音が静かに響く。

びくりと、男の肩が揺れた。

「はじめまして、こんばんは」

静かな声で。

少女の声色。

「どちらさまで…、って…」

驚いた様子の、彼の瞳が捕らえたもの。

黒い髪を揺らした少女。

どこの中学校の制服ともつかない、シンプルなセーラー服をまとっている。

「うわっちちち」

自分の手の甲に落ちたたばこの火に、佐々木は悲鳴を上げる。

「…花鬼、さん？」

「その呼び方はやめてください」

殺人鬼の少女。

「高崎と言います」

少女は告げた。

目の前にいる少女。

高崎千歳と呼ばれる名前の殺人鬼。彼女は静かに男の部屋の玄関に上がる。

確かに目の前の少女がアパートの前にいる、などということはいろいろな意味で危険だ。

どこで誰が見ているかわからない…。

要するに、彼女と関わったことが悪意のある人間に知られれば最

後、自分自身の身に危険が及びかねない、ということなのだ…。

花鬼と関わりと言うことは、死天使と関わりと言うことである。彼は安易に「彼女ら」に関わるほど愚かではなかった。

「…高崎、さん？」

「本日は、わたくしのお仕えするお嬢様の言伝により参りました」
本名を高崎千歳。

いつから続いたのかわからないほど長い家系の綾瀬家の側近として知られる武道家の一族だ。

一族の人間はそろいもそろって鬼神のように強い、と言われている。

高崎千歳の通り名を、花鬼と言い、その姿に似合わず世界を股に掛ける殺人鬼の一人である。

「…お嬢様、の？　ですか…」

彼女の言う「お嬢様」は綾瀬晋之助の末娘、臣のことだろう。

「はい」

まっすぐ目を背けずに高崎千歳は彼を見つめた。

正直なところ、アイドルと言ってもおかしくないだろうそれなりの美少女にじっと見つめられるというのはなにか気恥ずかしいものも感じる。

「その、お嬢様が俺みたいな一介のカメラマンにどんなご用件で？」
玄関に立つ少女が無言で眉尻を引き上げる。

「…すみませんでした」

そもそもどうして自分が外見は少女でしかない彼女に謝っているのだろう。

佐々木はそんなことを考える。

花鬼を茶化して部屋に死体を一体残していく結果になるというのもぞっとするというものだ。

厄介な来客に佐々木はため息をつきながら首筋に手のひらをあてた。

佐々木の目の前には一人の少女がいる。

殺し屋の少女。

「…あの？」

「単刀直入にお聞きます。あなたが撮った金髪の女の子の写真を
どうなさいましたか？」

尋ねる。

「…金髪？ え？ …え？」

「…金髪の巻き毛の女の子です」

淡々と、冷静すぎるほどの眼差し。

「その情報は、外部には漏らしていないはずだ…」

ややしてからつぶやいた彼に、黒髪の少女はそっと白いスカーフ
を指先で直す。

うっかりすれば殺されかねない相手だ。

さすがの佐々木も慎重になろうというものだ。

「…わたしたちには、そんなことは関係ありません」
裏社会。

「…情報を漏らさずとも、漏れるものです」

それを悪用しようという意図を持つ者。

「わたしは、回りくどいことは嫌いなんです」

彼女は告げる。

冷静な言葉。

「…」

「…答えてください」

「…盗まれた」

ぽつりとつぶやく。

彼はやっとの思いでつぶやいた。

嘘ではない。

盗まれたのだ…。

「そうですか…」

驚くほどあっさりと納得した彼女は体を翻した。

逆にそれが不気味で、佐々木和宏は彼女を呼び止めた。

「嘘だとは思わないのか？」

少女の肩を手で押さえた彼に、高崎千歳は眉をひそめる。

「…なぜです？」

逆に、問われて彼は口ごもった。

「わたしをただの筋肉馬鹿とでも思っているんですか？」

そういうわけではない。

筋肉馬鹿であつたならば、世界から負われることなど可能であるはずがない。

「あなたが嘘を言っているとは思えませんから」
それだけです。

彼女はそう告げると佐々木の部屋を出て行く。

いくら美少女と部屋に二人きりだからと、世界でもトップクラスの殺人犯に手を出すほど佐々木は愚かではない。

一応、分別はわきまえている。

そもそも、引き際を知らなければ、命を失うのは自分だ。彼はそういう世界で生きているのだ…。

少女が玄関先から消え、そしてゆっくりと気配が遠ざかっていく。やがて、彼女の気配を感じなくなってからやっと彼は大きなため息をつくとその場に座り込んだ。

失態だった…。

自分の写真を盗まれるなど。

「…俺のせいなんだよなあ」

状況を思い起こしてみても、ため息しか出てこないのはそういうことなのだが…。

日本が安全であるという根拠などどこにもないのだ。

アパートの玄関先にしゃがみこんだまま彼はもうひとつため息をついた。

重い腰を上げてから彼は散らかったデスクを見やる。

おそらく、高崎千歳はそれも見ていた。

彼の口から出た「盗難」という言葉にそれほど反応を見せなかつ

た理由はわからないが、「平和な日本」で一枚の写真のために綾瀬臣が動くと言うことはそれなりに重要ななにかを孕んでいたからに違いないのだ。

「参ったな…」

世界でなにかが起きている。

凡人の彼にはとても想像もできないような事態が。

金髪の美少女の写真が盗み出され、そしてそのために「花鬼」と呼ばれる高崎千歳が動いた。高崎千歳は、主人の命令意外で動くことはない。そこまで考えれば、情報に疎い素人でもなにかとつもなく恐ろしい事態が進行しているのではないかと思うというものである。

「あんまりあっちの世界には名前知られたくないんだけどなあ…」
一般人が裏社会に名前を知られたところで、死亡率が飛躍的にあがるだけだ。

身を守るすべがないのならば手を伸ばす世界ではない。

本当に、殺されるかと思った…。

首筋に刃物を当てられるような感触。外見のかわいらしさにかかわらず、彼女はやはり噂されるように殺しのプロフェッショナルなのだ。

決して迷わない。

そのとき、電話が鳴った。

跳び上がるほど驚いた彼だが、ディスプレイに表示される番号は知らない相手だ。

通話ボタンを押す。

「ハロー」

「やあ、久しぶりだね」

ハローと告げた彼に、流暢な日本語で話しかけたのはイランの武器商人だ。

声でわかった。

実際に話したのは数回である。

「俺、英語も話せるんですけど」

「そうか、日本人はほとんどが英語をわからないと聞いていたからね」

ペルシア語でいいかね？

そんなことを告げられてげんなりと佐々木は息を吐き出した。

「ペルシア語なんてもっとわからんですよ」

「：そうか、ところで君は、わたしが電話した理由はわかっているだろうね？」

尋ねられてうっかり頷いてから、電話口で相づちを打った。

「例の写真の一件ですかね？」

今の段階では、誰が写真を盗み出したのか、佐々木には皆目検討がつかない。

「そうだ」

「あの写真の女の子はなんなんですか？」

率直な彼の言葉に、電話の向こうで相手が黙った。

「：特殊な子だよ」

そう。

君も見ただ。君も見ただ。

破壊の天使。

炎の使途。

「そんなこと一目見ればわかりますよ」

彼が聞きたいのはそんなことではない。

「アメリカの、傭兵で、殺人鬼だ」

殺人を犯す者。

武器商人の言葉に、佐々木は「また、それか」と内心で息をつく。自分の周りで起こり始めた不可解な事件。それは、おそらく、かつて戦場で彼女と出会ったときにすでに始まっていたのだ。

運命の齒車は回り出す。

ゆっくりと、さび付いた時計が動き出すように。

「アメリカが情報を握っているんですか？」

尋ねた佐々木に、電話の向こうの男は苦く笑った。

「：まさか」

彼女は運命を政府になど左右されない。

「彼女は、彼女だ。通り名を、マジックボムという」

金髪の巻き毛の少女。

出自は一切が不明。

それを知る者のほとんどがすでに死んでいるというもっぱらの噂だ。

男はやや訛りの感じられる日本語で語る。

「もっとも、これを知ってしまえば君も晴れて裏社会の仲間入りだ」
笑う男の声。

正直、げんなりする。

「勘弁してくださいよ、平和に生きたいんですから」

佐々木の本音だった。

平凡な、平和を愛するフリーの報道カメラマン。

どんな因果で裏社会のお仲間認定されなければならないのか。

わかっている。

このイランの武器商人の話を聞いてしまった以上、もう後戻りなどではしない。

「マジックボム：」

独白にイランの男は声を静めた。

「厄介なことになっている、とりあえず、ワシントンに早急にきたまえ」

「：はあ？」

いきなり航空チケットをとれといわれても、しがないカメラマンには厳しい話だ。

「心配ない、私が全て手配する」

素晴らしく、一方通行な会話に、佐々木和宏氏は額に手を当てた。
ここまでくると、凡人の彼に、どう逃げ道があるというのだろうか。
「わかりました！ わかりましたよ…」

完敗だ。

どうすることもできない。

拒否すれば、誰か裏社会の手によって殺されるだけだ。

カメラマン程度を殺すのに、トップクラスの裏社会の殺人鬼など必要ではない。

ならば簡単だ。

戦場や、混乱した現場を駆け回る報道関係の人間ならば、その程度の危機意識をもっていて当たり前だろう。

気の毒な佐々木和宏は、こうして巻き込まれたのであった。

佐々木は毒気を抜かれたように呆然としていた。

理由は、もちろん、目の前にいる面々のせいである。

「…あ」

ホテルのロビーにいるなにやらいかつい集団。

ぱっと見ただけでは普通だ。

上流階級の人間だろう、ということは見分けがつくが、一般人から見ればその程度でしかない。

しかし、佐々木は一応、ジャーナリズムの一端を担っているわけで、危険か安全かの見極めができなければ生きていくことも困難な世界に片足を突っ込んでいる身としては、毒気を抜かれてもやむを得なかっただろう。

思わずカバンが手から離れかけるが、しかし、そこはいっぱしのカメラマンである。

慌てて商売道具の入ったカバンを持ち直すと、改めてその場にいらる彼らを見回した。

なんというか、改めて見てもすごいメンツがそろっていると言いか言いようがない。

しがないカメラマンでしかない佐々木和宏から見てもそのメンツの恐ろしさはわかろうと言うものだ。

「…えっと」

とりあえず、目の前に袴姿の少女がひとり、それは高崎千歳だろう。

その隣、場の中央にいる黒髪の美女は綾瀬臣だ。

その綾瀬臣から一步ひくようにいる男は彼女のボディガードだろうか。日本人離れた長身が目を引く。

綾瀬臣と談笑するのはひとりのブロンドの巻き毛の少女だった。

既視感を感じる。

大きな水色の瞳を瞬かせて、彼女は振り返った。

「ハイ」

明るい笑顔。

ブロンドの巻き毛の少女の周りにいる男たちも普通ではない。

屈強な体格の白人系の男が三人。そのうちの二人は若い、一人は中年だろう。

佐々木は後ろにいるはずのアラブ系男性を振り返った。

「：えーっと、俺は、この集団でなにをすれば？」

わかるのはとりあえず、目の前にいる七人の男女が尋常ではない身体能力を持っていると言うことだ。

「事実関係を確認したかっただけよ」

金髪の少女の口からそんな言葉が飛び出した。

「君は：？」

「写真撮ってくれたでしょ？」

少女がニッコリと笑う。

紛争地帯で出会った少女。

見間違いでなければ、うり二つ、というかおそらく同一人物だろう。

「えと：」

「さっきから、あんたえーっととか、えっととかしか言っていないだけ」

不愉快げに眉をひそめた少女。

美男美女の集団だが、ひどく目を引くのはなぜだろうか。

「こんなところで話をするのも、あれね。部屋に行きましょう」
くるりと身軽に体を翻した。

ホテルの部屋で明かされたのは、そこにいた女たちがそれぞれ「死天使」「花鬼」「マジックボム」と呼ばれる殺人鬼であり、中年の日本人男性との白人男性が一級の狙撃手。若い白人男性はひとりが裏社会であり、もうひとりがFBIの捜査官ということだった。

佐々木を招いたアラブ系の男はイーサーと言い、武器商人だ。とにかく、存在感が圧倒的だ。

簡単に言うならば、どれだけ美男美女であってもあまりお近づきになりたくない。

「…」

絶句している彼は呆然としたまま困惑していた。

この非現実的な状況の中に、どうやって困惑しないでいられる日本人がいるだろう。

いや、日本人じゃなくとも困惑するだろう。

八人の彼らが困惑していない方がおかしいのだ。

「マジックボムって…」

世界を震撼させた殺人鬼。

その犯行はアメリカ国内にとどまらず、世界の警察機構を翻弄し続けた。

それくらいは一般常識だ。

「なに突っ立ってるのよ、座れば？」

彼を促したマジックボムと呼ばれた金髪の少女は、名前をアリッサというのだと聞いた。

「あなたの写真のことだけど、どうなったか教えてくれない？」
単刀直入なアリッサの言葉に、佐々木は緊張の面持ちのまま固まっている。

よく考えれば、目の前にいる三人の女性陣たちは、その存在だけで小さな国家の政府ならつぶせるのではないだろうか？

もちろん、綾瀬臣の性格を考えればそのようなことはあり得ない

のだが…。

「盗まりました…。でも、デジタルデータは盗まれていません」

緊張のあまりカチコチになる佐々木の立場を、一般人が見れば大変気の毒に感じただろう。

「CIAの情報通りだったでしょう？ ツヴァイ」

「…うーん、そうみたい」

面倒くさいなあ、とつぶやきながらがりがり頭を掻く彼女に、FBIの狙撃手の男が苦笑う。

ピンク色のツーピースを着たアリッサは大きく息を吐き出した。ツヴァイ。それはマジックボムの名前の一つだと説明された。

そして、彼女をツヴァイと呼ぶのは綾瀬臣だけだとも。

「わたしより、臣のほうが強いもの！ だから、わたしは世界で二番目！」

世界で二番目に強い。

その自負だ。

謙虚なのか、傲慢なのかいまいちわかりづらいアリッサの言葉に、高崎千歳が眉を動かしたが結局沈黙を守った。

なにか言いたかったのだろう。

内容は、なんとなくわからなくもない。

「臣はどう思う？」

アリッサは目の前に出されたペットボトルのオレンジジュースに口をつけながら臣に話を振った。

「…犯行声明もないのでしょうか？」

首をかしげる彼女に、アリッサは頷いた。

「うん、面倒くっさいよねー」

アメリカのテロ事件。

それに現在、彼らは関わっているというのだが、自分の撮影した写真が盗まれたからという理由で事件の、しかも超危険人物に囲まれているという事態は納得いかない。

平和に、とは言わないが、それなりに平凡に暮らしていたいもの

だ。

普通のカメラマンとして。

「わかんないのがさらにむかつく…」

自分の名前を名乗ってテロ活動を行う相手がいておもしろいわけがない。

しかも、自分でやった記憶がないからなおさらである。

「なんかおもしろいことないかな」

「ストレス発散にビル破壊とかはやめてくれよ」

ジョージの言葉に、アリッサは頬をふくらませてむくれた。

「わかってるわよ。ま、このホテルが爆破されなければいいけどね！」

物騒なことを言いながら肩をすくめた彼女に、若いFBI捜査官以外は苦笑した。

少女は長い睫毛を伏せる。

出自すら不明の殺人鬼。

佐々木和宏に限ったことではないが、世界中のマスメディアの間にとって、ある意味、マジックボムことアリッサ・ノースウッド程正体不明な殺人鬼はいない。

綾瀬臣も、高崎千歳も、同じように出自もなにもかもが明らかだ。

しかし、アリッサは異なる。

なにがどう、という説明はうまくできないのは、彼女があまりにも未知であるからだ。

「…なに怯えてるの？」

ニコニコと笑っている。

金髪の少女。

日本人が想像する西洋人の美女と言えば、一般的に金髪碧眼で、フランス人形のような人を想像するだろう。

確かに、彼女が成長すればそのまま、まさしくフランス人形のように見えるかも知れない。

しかし、彼女は、佐々木が初めて遭遇したときから何一つ変わっていない。

恐ろしげな。

そんな存在だ。

「別に、取って食いやしないわよ」

肩をすくめた少女に、長い黒髪を揺らして綾瀬臣はほえんだ。

「ご安心なさって。一般の方には絶対危険を及ばないようにいたしますから」

完全無欠な笑顔が逆に恐ろしい…。

というか、佐々木程度では普通に考えれば話すらすることができない相手だ。

特に、綾瀬臣が。

「…はあ」

すでになんと返答したらいいのかまったくわからなくなっている彼に、アリッサが力強く相づちを打った。

「そうよ！ わたし、臣の嫌いなことはしない主義なの！ 臣の前では！」

言い切る前提がなにやら違うような気がしたが、とりあえず、泣く子も黙る殺人鬼の前だ。

佐々木は余分なことは言わない。

「アリサは、レディが大好きだな」

苦笑したジョージは、アリッサの頭に手をやった。

「気安いのよ」

喝いた音を立てて、大きな手を払いのけた彼女は頭上にあるジョージをにらみつけた。

そんな様子を、綾瀬臣はほえんで見つめている。

アリッサが動ならば、綾瀬臣は静だ。

相対的な、二人の存在。

世界の中心がそこにあるのではないかと、思えそうなほど。

「…わたしは、臣が好き。臣のためなら、世界を敵に回してもいい」

きっぱりと言い放つ。

三文映画か、漫画ででてきたような陳腐な台詞だが、ブロンドの少女が言うとなにやら恐ろしく感じさせられる。

「心配なんてしなくていい」

アリッサが、佐々木に向かって言い放った。

「殺そうと思えばとっとと殺せるのよ」

今でなくても。

殺さないとは、そういうことなのだ。

彼女は告げる。

「レオン」

「うん？」

「…あんた、この日本人を守っておいて」

命令する。

そして、白人の若い裏社会は異を唱えない。

「わかった」

彼女の言葉は絶対だと言うように。

「イーサー、情報を集めておいて」

死天使に協力を自分から依頼しておいて、なにも解決できませんでした、では、アリッサの沽券に関わる。

メンツなどどうでも良い。

彼女の本音は簡単だ。

綾瀬臣に格好良いところを見せたいのだ。

「素晴らしい自己中っぷりだ…」

あきれたのはジョージ・リートだ。

天をも恐れぬ殺人鬼にそんなことを平然と言える人間はそうそういない。

ため息混じりの感想に、イーサーは立ち上がった。

「良からう、情報を集めておこう。他ならぬレディの頼みだ」

「違うわ」

頼みではない。

「頼みなんかじゃない。命令よ」

彼女は瞳を光らせた。

恐ろしい少女。

「どちらでもいい」

イーサーが瞳に暗い影を落としてひっそりと笑う。

彼らは、曲がりなりにも裏社会の頂点に君臨する者たちと、その世界に最も近い者たちだ。

だからこそ、アリッサの危険きわまりない発言に誰ひとり怯まない。

いや、怯んでいた者はいた…。

若いFBI捜査官と、そして佐々木和宏だ。

それだけ、危険な事象を企てようとしているのだ。

佐々木の背筋をぞくりとなにか冷たいものが走り抜けた。とんでもないものに関わってしまったのではないかと言う危機感。自分程度の者が関わって良いものではなかったのではないのかと。

憧れは、崇拜になった。

やがてその崇拜は歪な妄想へと発展していく。

しかし、彼はそれが歪んだものへと変化していつていることにきがついていなかった。

そして周りの人間たちも。

誰ひとり気がつけなかった。

まさか誰が思うだろうか。

彼が、かつて殺人鬼として恐れられた「マジックボム」を崇拜しているなどということ…。

「マジックボム…」

まさかこれほど愛らしい少女とは思わなかった。

もっとも、カリスマ的な犯罪者に惹かれる者がいることは珍しいことではない。

彼らは崇拜した。

超人的な犯罪者たちを。

世界に名を馳せる殺人鬼。

「俺が、彼女の代わりにやってやるんだ…」
爆発させるのだ。

全ては彼女のため。

男は呪文のように唱える。

爆弾を前に笑う。

「…彼女のためなんだ」

彼女ができないならば、自分がやるのだ。

指を組んで彼女は目を閉じる。

寝台に横になったアリッサは仰向けのまま呼吸を静めた。

まるで、その姿は、棺の中に眠る亡骸のようだ。

ベッドの横にいるのは中年の白人男性だ。

ソファには若い女がひとり。

黒髪の、黒い瞳の。

楚々とした美しい女だ。

「…お嬢様」

黒髪の若い女に耳打ちしたのは、少女とも言っていいただろう袴姿の日本人だ。

ぴんと張り詰めた空気に、男と女、そして二人の少女は、ほぼ同時に顔を上げた。

そのときだった。

ガラスが割れた。

神経質な音に誰もが悲鳴を上げようとはしなかった。

少女たちですら。

爆風に、長い髪が乱れた。

黒髪の少女は、若い女、綾瀬臣を守るようにしてその体を抱き込むと、ソファの影に隠れるように身を潜めた。

同時に響くのは機関銃の音。

上半身を起こした少女は、軽く窓の外を眺めやる。

軽く目線をくれた程度だ。しかし、それだけで充分だった。

「むかつく…」

イライラする…。

彼女は巻き毛のブロンドをかき上げると、ベッドの真下におかれた靴をはいた。

「…被害は最低限度でいいわ」

臣がつぶやく。

途端に、我に返ったように鋭い眼差しから解放された彼女は、こつくりとうなずいた。

綾瀬臣を狙う者の数は多い。しかし、それにもまして自分を恨む者は多いのだ。

夜のとばりに包まれた摩天楼を見下ろしたアリッサは、ヘリコプターが飛んでいくのを見送った。

「いつも思うわ…。とても、ワシントンの夜景は美しいわね」

音もなくアリッサの隣に立った綾瀬臣は無表情ともとれる瞳のままで息を吐き出した。

その吐息はまだ白い。

アリッサと同じように、彼女は孤独を抱えている。

その孤独を埋められたらいいのに、と、アリッサは思う。

しかし、どんなに彼女の傍らにあって、どんなに彼女に近い殺人鬼たちであっても、誰も彼女を理解することなどで気はしない。

決して、誰ひとり…。

まるで、綾瀬臣はひとりで音のない世界に存在しているようだ…。

「臣…」

呼びかける。

決して手の届かない人。

呼びかけに、綾瀬臣はひっそりと笑うとゆつくりと顔をアリッサに向けた。

「…わたし、思うの」

ぽつりと金髪の少女は告げた。

「なにを？」

柔らかに問いかける彼女に、アリッサは自分の目の前で手を開いた。まるでその横顔は幼いエンジェルようだ。

「…わたしが、こうして生まれてきたのは臣と出会うためよ。臣の悲しさを感じるためよ…。だから、泣かないで…」

泣かないで…。

勝ち気で強気なアリッサが、こんなにも優しい笑顔を浮かべる。

誰よりも愛しているのだと。

誰よりも好きだと…。

そんなブロンドの巻き毛の少女を見つめていたジョージ・リートは、ふと思った。

アリッサからこんなふうにあえられる綾瀬臣がうらやましいと思った。

おそらく、綾瀬臣とアリッサが出会ったよりもずっと長い時間を共有してきているはずであったというのに、ジョージは彼女からそんな信頼を受けたことはなかった。

「…大丈夫よ」

ふわふわと…。

わたしは、大丈夫。

綾瀬臣はそっと黒い瞳を破れた窓の外を見つめた。

月が輝いている。

不意に、低く、地響きが響く。

それは、周囲に気を配っていなければ、ほとんど気がつかないような類のものだ。

もっとも、本当にビルが爆破されたならばホテルの上層から街を見下ろしている彼らが気がつかないはずはない。

「…地下鉄」

高崎千歳がつぶやいた。

その瞬間、アリッサの優しい表情が一変した。

まさに、ほんの一瞬でその空気が変わった。

「ぶち殺してやる」

殺してやる。

彼女は白いマントを手にとると歩きだす。

早足だが、所詮少女のコンパスだ。

追いつけないわけがない。だというのに、彼女のことをジョージは追跡することができない。

追いかけてようとしたジョージ・リートを日本人の絶世の美女が腕だけで制した。

「：大丈夫です。彼女はわたしがおいますから」

にっこりと微笑した。

きれいな人だと思う…。

…が。

彼女は誰がなんと言おうと美しいし、それは文句のないことである。

しかし。

そう、しかし、がつくのだ。

綾瀬臣はアリッサ・ノースウッドに並ぶ殺人鬼だ。

「：あなただけですよ、アリッサがあんな態度を取るのは」
彼女は全てを恨み、全てを蔑んでいる。

「ツヴァイは、あなたのことも、大切に思っていますわ」
だから心配しなくてもいいと、彼女は言う。

微笑して。

完璧な美しいお嬢様。

「だいいいがな」

肩をすくめたジョージに、綾瀬臣は音もなく踵を返した。

その後ろに、花鬼と呼ばれる少女殺人鬼が続く。

彼女らは天才だ。

綾瀬臣が、その気になれば国家転覆すら可能だろうが、彼女はそれをしない。

綾瀬臣が恐れているのは、「自分」だ。

絶対、とっつかまえてやる！

アリッサは内心でつぶやく。

もつとも、現場にたどり着いた場所で、彼女が犯人を捕らえられる可能性は今のところない。

「：風が」

空気が熱を孕んでいる。

もちろん、彼女がわからないはずがない。

彼女は炎の支配者だ。

アリッサの足元から炎が巻き上がった。

ぐるりと彼女を囲むように、熱風が螺旋を描いていく。

事件とも事故とも言えないその状況に、喧噪が響く。

地下鉄の構内から立ち上る悲鳴と熱風。

アリッサは水色の瞳をそっとまたたかせて、口元を歪ませた。

警察、消防、救急。

多くの人間たちがごった返していた。

「入るな！ 危ない！ 離れろ！」

怒声と、悲鳴と、声が混じり合う。

彼女はもちろんそんなものに怯まなかった。

熱と炎の渦巻く地下鉄に彼女は足を踏み入れた。

「なにをやってる！ 離れろ！」

怒号：。

「：離れなさい」

消防士の男に、告げた少女がいた。

日本刀が闇の中に煌めく。

「あの子は大丈夫よ」

きれいな英語に、消防士の男は息を飲み込んだ。

「：う、あ：」

彼女を知っている。

誰だと、聞かれれば、公的機関の関係者であれば誰でも彼女を知っているだろう。

「：フラワーデモン」

花鬼、と呼ばれる少女。

「これは忠告よ。あの子を追うのはやめておきなさい、あの子を追うのはあなたの勝手だけれども、あの子はあなたが想像している者とは違う」

想像を絶する場所にいる。

世界を、高い場所から見つめている彼女。

花鬼は知っている。自分では、アリッサを止められないから。だから、彼女はアリッサを追わないのだ。

「追うことなどできない：」

わたし程度では。

誰も、彼女に追いつくことはできない。

だからこそ、綾瀬臣はマジックボムの理解者であり逆もまたしかりだ。

炎の支配者。

彼女のことを、誰がそう言い始めたのか、彼女は知らない。

「：この子供はいつか、人類史上、戦争を影で決定づける存在となるかもしれない」

独白した男の言葉をアリッサは覚えている。

いつ聞いた言葉だろう。

彼女は考える。

「まあ、そんなことはどうでもいいけど」

アリッサはぽつりとつぶやくと、崩れそうな地下鉄駅の構内を見渡した。

死体が転がっている。

外傷がほとんどない亡骸はおそらく煙を吸い込んだことによって、一酸化炭素中毒で死んだのだろう。

どうせ、普通の人間が爆弾を爆発させるときに爆発現場にいるこ

となどありえない。

アリッサはそれを知っている。

ゆっくりと歩く彼女は、正確に爆破の中心を見極める。

静かな世界だ。

炎が渦巻いて、黒い煙が巻き上がる。

その高揚感。

彼女はかすかに眉をひそめた。

じつくりと駅構内を確認したアリッサはやがて地上へと上がった。
よろよると、煙に巻かれた子供が地下鉄の駅から上がってきた。

白皙の肌は煤で汚れ、黄金の髪も黒く汚れている。

「大丈夫か！」

生存者だ！

早く、救急車を！

声が聞こえる。

「怪我はしていないか」

問いかけられて、彼女は頷いた。

男が誰であれ彼女には関係ない。

事件に巻き込まれた子供、衰弱していてもどこも怪我はないようだった。

ぼろぼろの子供は救急車に乗せられた。

「…怪我はないみたいね、大丈夫よ。もう、大丈夫」

搬送先の救急病院で看護師の声が聞こえる。落ち着かせるような
声に、アリッサはひっそりとほほえむ。

「…大丈夫、看護師さん」

アリッサはつぶやいた。

少女は手を握ってきた看護師に微笑すると、むくりと起き上がった。
た。

唐突に。

まるで死体が起き上がったような動き。

「大丈夫よ、心配いらない」

「…え？」

「ありがと、帰る」

ひょいっとベッドから飛び降りると彼女は歩きだす。
当たり前だ怪我などない。

さて、どうしたものか。

彼女はごしごしと頬の煤を服の袖でふきとろうとしながら考え込んだ。結果として、拭き取ろうとする行為は煤を塗り広げるだけの結果に終わったが、アリッサはあまり気にしていないようだった。

「…爆弾魔、ねえ」

「爆弾による犯行を行う者は、得てして自己顕示欲が強い」

「…なによ、わたしが自己顕示欲が強いって言いたいのか？ ジョー
ジ」

頭上から降ってきた男の声に、アリッサはうんざりとした様子で顔を上げる。

見上げないと男が見えないのが不愉快だ。

「そうは言っていない」

男の腕が視界の隅で揺れる。

アリッサはそれを眺めてから歩くスピードを早めた。

「アリサ、君は強いが万能じゃない」

「…心配？」

気遣うような彼の声に、アリッサは肩をすくめた。

「心配だ」

ジョージ・リートは彼女が心配だった。

小さな体の、愛らしい少女はともすれば小児性愛者の標的になりかねない。しかし、彼女は平凡な子供ではない。

そもそも、子供と言って良いものであるのか。

それすらもわからないのだ。

「…ジョージ」

「…？」

どういうことだ、と彼が眼差しを向けると、ブロンドの巻き毛の

少女は息を吐き出してから夜空を見上げた。

「わたしのことよりも、自分たちの身の安全を考えなさい」
司法関係者のほうがよっぽど危険だろう。

彼女はそう通告する。

「俺のことを心配してくれているのか？」

「：馬っ鹿じゃないの」

冗談交じりのジョージの言葉にアリッサは鼻を鳴らした。

問いかけた彼も、彼女の意図は知っていた。

わかっていた。

それでも、冗談でまぎらせなければならぬほど、彼らは切迫している。

「わかってるさ」

ぼつりと、彼はつぶやいた。

わかつている…。

彼女は今は、犯罪者ではない。

かつては殺人鬼であったが、今はそうではない。

アリッサは、政府側の人間だ。

「：だって、面倒くさいでしょ。死んだ人間が増えれば増えるほどわたしに対する警戒が強くなるのよ。わたしはただのんびり生活していただいだけ。それだけなのに」

むつつりと彼女は外をにらみつけた。

「それもそうだな」

ジョージはそつと少女の手を握った。

さりげなく。

驚いた様子で目を上げた彼女は、ジョージの横顔を見つめた。
穏やかに彼は彼女を見つめる。

視線が交錯した。

「俺は、君を信じている」

「あっそ」

大柄な男。

彼はそつと腰をおろした。

彼女に目線を合わせる。

アリッサが見下ろされるのを嫌うことを知っているからだ。

「…アリサ」

「なによ」

彼女の頬に片手で触れた。

愛しい少女。

「…無茶だけはしないでくれ」

小さな体を抱きしめた彼はそつと目を伏せた。

出会って何年になるだろう…。

もう二十年以上も前だ。

彼と彼女が出会ったのは、かの有名な「ケース・アングリーボム」の前のことだ。

まだ、当時、彼女はマジックボムという通り名を持たず、エレーネと名乗っていた。

「エレーネと呼ばれてたの」

彼女はそう言った。

当時、彼女は自分が七歳だと言った。

七歳という年齢にしてはませていて、どこか深い年輪を感じさせる。

そんな不思議な少女だった。

「…不思議な人だ」

君は、とても不思議だ…。

ブロンドの巻き毛を布団に乱れさせて彼女は眠っている。

深い眠りだ。

「本当の君を見てみたい…」

全てを偽り、全てを消し去った彼女。

当時、ジョージは彼女を育てようと思ったただけだ。

「独り身だし、子供ひとりくらいなら育てられる」

簡単にそんなことを思ったのは、今から考えると単純すぎだった

ような気もする。

水色の瞳をまたたかせた彼女が成人した姿を想像した。自分は中年になって、娘がひとり。そんな父親の感覚。

少女の成長がないことに気がついたのはいつ頃からだったか。しかし、「どうして」と思っても彼女にそんなことは聞けなかった。聞いても無意味だと思ったからだ。

そうこうしているうちに始まったのが、かの有名な「ケース・アングリーボマー」である。

「怒りの爆弾魔事件」

そう呼ばれた。

なぜそう呼ばれたかと言われれば、彼女の犯行には強い怒りを感じられたからだだった。

そして、彼女がその事件に絡んでいるとジョージが気がついたのはまもなくのこと。

「爆弾魔？ わたしが？」

一笑に付した彼女はジョージの顔を見やった。

「わたし、爆弾なんて作ったこともないわ」

どこか、なにかが欠落した少女の瞳。

「君はなんなんだ？」

「わたしは、エレーネというの。それだけよ」

人殺しなどやってはいけないことだと、説得した彼に、彼女は聞く耳を持たなかった。

その後、彼女は幾度となく殺人に手を染めた。

なにかの怒りを訴えるように。

誰にも彼女の怒りを理解できるわけがないとでも、告げるように。それ故に、彼女の起こす事件は「ケース・アングリーボマー」と呼ばれることとなる。

そして通り名を、殺人鬼「マジックボム」。

＊

袋袖になった白い木綿のパジャマをまとったアリッサ・ノースウッドはサンダルをはいたままバルコニーに出た。

空気はまだ冷たい。

白み始めた夜の空に、彼女は視線を上げる。

「…風邪をひくぞ」

日本人カメラマンの護衛についているためレオナルドはいない。

イーサーも情報収集で飛び回っていることだろう。彼は、情報屋ではないが、武器商人である彼の元には多くの情報が集う。

かけられた声に、少女は眼差しだけを肩越しに背後に向ける。

「きつと、俺は、君に初めて会ったときに恋をしていたんだ」

「なに言ってるのよ、中年」

にべもない彼女の言葉にジョージは低く笑う。

「本当だよ」

「…あーっそ」

背後から抱きすくめられて、彼女は抵抗しない。

抵抗などいくらでもできるから、無駄な体力の消耗を避けただけなのかもしれない。

「離して」

「…いやだ」

彼女に恋をしている…。

しかし、それははっきりと口に出すことはできない。

彼は、アメリカ合衆国の司法機関の一員であるから…。

少女を抱き上げた彼は冷たい空気の屋外から、室内へと戻る。

触れた彼女の肌は少し冷たい。

甘い少女の香り。

彼女の首筋に唇を押しつけたジョージは複雑な表情で睫毛を伏せる。それ以上の行為など許されない。

愛していたとしても、許されない。

「…ふ」

息と共に声を吐き出した彼女の背筋を長い指でたどり、彼女のブルンドの巻き毛を指に巻く。

アリッサの反応が、ジョージの色欲を煽った。

「…」

抱きたい…。

しかし、そんなことは許されない。

寝台に彼女を横たえた男は、じっとアリッサを見つめた。

長い髪を指で梳いた。

少女姿の彼女に、「愛している」などと告げるのはアメリカでは決して許されない。

「：君には休息が必要だ。ゆっくりと休みなさい」

「命令しないで」

「君が寝ている間は、俺が守るから」

俺が守る…。

眠りに落ちていく彼女を見守るジョージは金色の髪を指で梳く彼はため息をつきながら彼女の額にキスをした。

思うままに彼女を抱ければ、どれほど良かっただろう。

「罪人だ…」

彼女は罪だ。

愛していたとしても、それは許されなかった。

決して許されないからこそ、夢想する。

彼女が乱れた姿を。

アリッサの成長した姿を見たことがない彼は、幼い彼女の姿から夢想するしかない。

額とうなじの髪の生え際をたどるジョージは目を伏せる。

いつだったか、イーサーが彼女を襲ったと聞いたときはひどく取り乱したが、もしかしたらイーサーも今の自分のように劣情を押さえることが必死だったのではないだろうか…。

息を吐き出した彼は、膝でベッドに乗り上げた。

ぎしり、とベッドのスプリングが軋んだ。

アリッサの香りに誘われるように唇を寄せる。

うなじに唇を寄せた彼は彼女の腰を大きな両手でたどるようになぞった。

「…ん」

眠る彼女はくすぐったそうに身をよじって逃れようとするアリッサが愛らしくて、ジョージは行為をとめられない。

抱きしめた体は小さく、細くて、一見すればひどく頼りない。たくし上げたパジャマからちらりと見える腰がなまめかしい。

そこに、ズボンの上から勃ち起った腰をおしつける。

性器をこすりつけながら、彼は目を伏せる、

ゆっくりと前後させるのは彼女を起こさないようにするためだ。

背中と腰、彼女をゆっくりと抱きながら、男は少女が感じやすい部分を探り出す。

「あ…」

本音を言うならば、彼女に挿入して快楽を得たい、という欲望はある。

しかし、アメリカでは小児性愛はもってのほかであったし、そもそも、子供の姿の彼女が、スポーツ選手のように長身の男を受け入れることなどではしない。

それこそ流血沙汰が目に見えている。

強気で勝ち気な彼女。

そんな彼女を苦しめたいわけではない。

やがて、男のほうにも限界が訪れる。

ため息のように息を吐き出した彼は少女から、自分の体を離れた。ベッドから裸足でおりた彼は浴室へと向かっていく。

その性器は未だに猛るままだが、それを誰に見られるわけでもない。

彼女を愛していたから。

「…君が、ちゃんと大人になれる女性なら良かったのに」
ぽつりとつぶやいた彼は浴室へと消えていった。

シャワーから戻ったジョージは寝息すら立てずに眠る彼女をじっと見つめた。

彼女は、いつも「そう」だ。

彼女は、まるで獣が息を潜めるように眠る。

そんな彼女の眠りを守ってやりたいとさえ思うのに、アリッサは彼のその好意を嫌って押しやる。

「…なぜ？」

彼は言った。

眠る彼女の黄金の髪に触れようと手を伸ばしかけて、ジョージは指をひいた。

触れていいものか躊躇した。

そうしてから彼は触れる。

彼女に。

野生の獣、という言葉がふさわしい少女。

眠りへ落ちていく子供をあやすように。

眠りの沼底にひきずりこまれる子供に物語を聞かせるように。彼の穏やかな低い声音はアリッサの鼓膜を通して脳裏へと反響する。

「危険だと、わかっていて…」

まどろむアリッサの意識化へとすり込むように、ジョージは問いかけた。

もちろん彼は少女の答えを期待などしていない。

「…危険だと、そうわかっていて。どうして君は爆発現場などに足を踏み入れた？」

問いかける。

わかっていた。

彼女は、炎の支配者だ。

誰よりも炎を識り、炎の傍らにある。

しかし、彼女はそれ以前にひとりの人間であり。

人間、つまるところ、ホモ・サピエンスという動物の種のひとつである以上は、無意識下にある動物としての炎に対する絶対的な恐怖心が存在するはずだった。

だというのに。

彼女にはそれがない。

どういったいきさつかからか、彼女にはそれが欠落している。

そもそも炎に対して、アリッサが怯んだところすら見たことがない。

もっとも、そうだからといってアリッサに危機管理能力がない、というわけではなく、おそらく彼女の危険に対する嗅覚は裏社会の中にあってトップクラスであろう。

ブロンドの巻き毛を枕にまき散らして、彼女は眠る。

アリッサの寝顔につられるようにしてまどろみへと捕らわれていくジョージはそうして目を閉じた。

気に入らない。

何より、それが彼女の振るう暴力の最大の原因で、理由のひとつ。しかし、「気に入らない」という、至極シンプルな理由だけで、状況判断しているわけでもないらしい彼女は常人には理解不能のなにかしらの判断基準を有していると考えていいのだろう。

だから、ジョージには理解できない。

気に入らない、という不愉快な事態を。

彼女は、驚くほど大局的にその目で世界を見下ろしている…。

＊

女の腹から生まれたわけではない。

染色体はXXだが、アリッサにとってそれは繁殖活動を示唆する遺伝子情報ではなく、「個体の特徴を定義する」だけのものではない。

アパートメントの屋上に立つ彼女は、忙しなく自動車が行き交う道路を見下ろしていた。

見る者がいれば、自殺するために屋上に上がったように見えたかもしれない。

だが、今の時間帯は忙しい早朝だ。小さな体の少女がアパートメントの屋上にいることに気がつく者などいない。

都会の人間は誰も彼も、無関心だ。

それに対して嫌悪感を感じる者もいるかもしれないが、アリッサのような人種にとってはかえって好都合だ。

流れていく川の中に沈み込む小石のように。

彼女はその流れの中へと、身を潜め、息を詰める。

「自殺は、罪だそうだ」

低く響く声に、アリッサは振り返った。
罪。

その言葉に失笑した。

「罪なんて、今までいくらでも犯してる」

言いながらアリッサは目を伏せた。

感情の読み取りにくい水色の瞳と、その横顔。

長い睫毛が一瞬、震えたように見えた。

白色人種特有の抜けるように白い肌。早朝の冷氣に血の色を失っているようにも見えた。

「わたしは、存在しなきゃいけないのよ。本当は……」

意味深長は彼女の言葉。

「……」

彼女の言葉にジョージは沈黙する。

「アリサ……」

彼女がなにを思っているのか、彼にはわからない。

ジョージは少女の名前を呼んで背後から抱きすくめた。

その瞬間。

少女の足元でゴオッと音を立てて強い風が吹き上がる。ビルの谷

間を駆け抜けた風がアリッサの足を捕らえた。

強風にバランスを崩した少女の体が傾く。

とっさにジョージの逞しい腕が彼女の体を支えた。

いくらアリッサとは言え、ビルの屋上から落ちてただですむはずがない。

驚いた顔でジョージを見上げたアリッサに、狙撃手の男はほっと息をついた。

「危ないだろう」

苦々しげな彼の言葉に、彼女は両目をまたたかせてから小さく舌打ちした。

「うん：？」

彼女の体を、屋上に引き上げたジョージはそうして腕を放すと首をかしげる。

アリッサの舌打ちが、彼に向けられたものではないとわかっていたからだ。

「なんでもない」

ひどく忌々しげにつぶやいてくるるときびすを返したアリッサの姿はまるで風のように屋内へと続いているはずの階段へと消えていく。

水色の瞳。

アリッサは左手の平で、左目を覆った。

女の腹から生まれたわけではないアリッサ。

自殺が罪だと、神は言う。

では：。

生まれたことこそが罪そのものであり、汚れた存在でしかない彼女自身はどうすれば救われるのだろうか？

「救いなんて：」

独白する。

自嘲した。

「求めてはいないの：」

救済などいらない。

彼女の感情の根底にあるのは、誰も知り得ない、深すぎる怨嗟と怒り。

誰にも心を開かないと決めた。

誰のことも好きにならないと、誓った。

深く、冷たく、そして切実に、彼女は呪詛を祈った。

世界など「いらない」と。

しかしそんな彼女の純粹さに惹かれた者も多かった。

彼女は嘘はつかない。

凶暴だが純粹で、無垢な魂を持った残忍な天使。

否、そもそも、天使とは残酷で人間を滅ぼす存在だ。

金色の髪と、水色の瞳の殺人天使はまるで、そう。

炎の守護天使、ミカエルのごとく。

「…だめよ」

声が響いた。

音をたてて階段を駆け下りるアリッサの視界に、ひとりの女が立っていた。

黒髪の、死の天使。

「臣…」

優しくほほえむ美女。

手を伸ばす。

長い腕が中空に差し伸べられた。

「だめ…」

悲しげにつぶやいて、臣は笑う。

「墜ちてはいけない…」

「…うん」

差し伸べられた臣の腕に少女は駆け込んだ。

誰よりも大好きな臣。

誰よりも大切な臣。

彼女のために命を捧げようと、そう思った。

自分よりもずっと悲しい瞳を知ってしまったから…。

跪いてアリッサを抱きしめた臣のその姿。

優しい、まるで菩薩かマリアのようだ。

彼女の存在の全てを受け入れることができるのは、アリッサと同様に人外のような女にしかできない。

理解できない。

その存在を。

「大丈夫…」

綾瀬臣のささやきにアリッサは花のように笑う。

そんなふたりの姿を、二人の男と一人の少女が見守っていた。

ジョージ・リートと、高崎和徳。そして高崎千歳だ。

「大丈夫よ。心配しないで…」

暗闇からアリッサを救い出したのは、光の中に存在している女。

誰よりも深い闇と、まばゆい光をたたえた。

アリッサという殺人鬼が、暗がりの深淵にいる者ならば、綾瀬臣は対極なのだ。

「大好きよ…、臣」

彼女が悲しむから、アリッサは決して言わない。

自分は臣のために死ぬのだ。

彼女のためであれば死ぬる。

アリッサを抱きしめた綾瀬臣は、ジョージに視線を移すと柔らかくほえんだ。

剣をまとったとがった、まるで氷塊のようなアリッサの気配を、

綾瀬臣は春風のように優しく溶かした。

一瞬で。

それは綾瀬臣の才能だ。

「ツヴァイ、リートさんが心配していらっしやるわ」

「…ごめん、ジョージ」

綾瀬臣に告げられて、首を回したアリッサはバツが悪そうにつぶやいた。

大好きな臣の前で格好悪いところを見せたくないのだろう。

そんな少女に、ジョージは苦笑した。

つい、今さっきまで、綾瀬臣には絶対になわなないと嫉妬さえ覚えていたというのに、アリッサのかわいらしさはなんだというのだろう。

「なによ！」

「なんでもないさ」

怒った顔もかわいいと思うのは、惚れた弱みというやつだろうか。そんなことを考えながら、ジョージは彼女に春物の桜色のコート投げてよこす。

「そんな格好で出かけると風邪をひく。着ていけ」

「なによ！ この趣味悪いマント！」

桜色のマント。

思わず床にマントをたたきつけそうになるアリッサに、綾瀬臣がころころと笑った。

アメリカではピンクは女性にタブーだ。

しかし、ジョージはあまり気にしないようだ。

「別に似合うものがピンクならかまわないじゃないか」

というのが彼の持論、らしい。

男女差別に厳格なアメリカでは女の子にピンクを着せることは、性差別を助長させるらしいのだが、その場にいる者たちはそれほど気に留めていなかった。

「気をつけて」

「わかってる」

結局、おとなしくマントを着たアリッサは、ふわりと金髪とマントをたなびかせて歩いて行く。

初春の早朝の霧の中を少女が消えていく。

「いいのですか？ あんなかつこで行かせて？」

ふと口を開いたのは綾瀬臣だ。

「どうせ、次に会うときは全部ぼろぼろだ」

肩をすくめたジョージに、臣はぷつと吹き出した。

「そうね、あの人はそんなにおとなしくありませんものね」

くすくすと笑う彼女に、心底楽しそうだ。

もつとも、綾瀬臣自身は人が死ぬような事件を心楽しく思っているわけではない。

その解決を切に願っている。

「ツヴァイに任せておけば、きっと大丈夫……」

笑いを納めてから、真面目な表情に戻った彼女はそうしてつぶやいた。

そのつぶやきは風の方へと消えていく。

そう、願う……。

ジョージは臣の言葉に応えるわけでもなく、アリッサが消えていった方角を見つめて唇を動かした。

その言葉は声にはならない。

その祈りは、アリッサには届かない……。

破壊衝動。

世界の全てを呪った少女。

彼女は、そこにいる。

ぼんやりとアリッサ・ノースウッドは送電塔の上に立つ彼女は鉄骨に寄りかかった。

ブロンドの巻き毛、大きな瞳と長い睫毛。

整った顔立ちの少女は街を見下ろしていた。

ぱたぱたとスカートの裾がたなびいて、アリッサは物憂げに目を伏せた。

どうして自分はここに存在しているのだろうか、と。

「壊したい……」

壊したい。

壊し尽くして、なにもかもをなかったことにしたい。

「……なかったことにしたいのよ、わたしは」

眉をひそめたアリッサは柵に背中を預けたままで座り込んだ。

かつて、凶暴だった頃の自分を思い出す。
額を押さえて彼女は前髪をかき上げた。

「なにも、なかったことにしたい」

なにもかもを消し去りたい衝動に駆られる。

どうしたらいいのかなどわからない。

ただ、単刀直入に言えば魂の底からわき上がる衝動だ。

獰猛な野生の。

指先が震えた。

なにかの禁断症状のようだ。

なにか、別次元の、生物のようだ。

「：まだ寒い」

桜色のマントを羽織った少女はことんと鉄骨の上で目を閉じる。
目を閉じる。

どこででも眠れる。

アリッサはぽっかりと雲の浮かんだ空を見上げた。

世界には自分ひとりしかないような錯覚にとらわれて、青い空
へと精一杯手を伸ばした。

白いスカートとピンク色の薄でのニット。

胸元に飾られているのは白い小さなコサージュだ。白いベレー帽
がアリッサの黄金の髪を際立たせた。

「まだ寒い…」

昔は、寒くなかった。

寒くなんて感じなかった…。

目を閉じた彼女は体を丸める。

小さく、震えるように。

まるで小動物のようだ。

自分は弱くなってしまったのではないかと、そんな気持ちにさせ
られる。

全てを壊せと、訴える彼女の内側にあるもの。

「わたしは、弱いのか？」

桜色のマントを着た彼女は小さく震えていた。

「…違う」

弱くなんてない。

弱くなんてならない…。

「違うの…」

どれだけ眠っていただろう。

アリッサはその体に這うような衝撃を感じて目を覚ました。

目の前に迫るちぎれた太い電線に、目を見開いた。

それはなんだ、と、認識する間もなかった。

自分の視界をかばうようにして手を差し伸べた。

頭の中が真っ赤になった。

どうしてここにいるのか、とか。

どうしてこんなことをしているのか、とか。

そういった全ての疑問が一瞬で頭の中に巻き起こるが、それもほんのわずかの間に、全てが赤く焼き切れていく。

どうして、などという問いかけは何の意味も持たない。

「…これが、わたしよ」

それだけのこと。

真っ赤になった電線が一気に蒸発する。

その瞬間、理性が焼き切れた。

「馬鹿にしないで」

アリッサは頭の上から降り注ぐ鉄骨をなぎ払う。

炎が彼女の頭上で帯になった。

爆発が続く。

ちぎれた送電線がプラズマを放つ。

炎が渦巻いた。

「爆弾ごっこなんてしてないで、でてらっしゃい」

傾いた送電塔の鉄骨を手で押さえていたが、ぐらりと揺れた拍子に手を離した。

一息に鉄塔を駆け下りる。

彼女が駆け下りた瞬間だった。

大きく傾いだ鉄塔が、一気に崩れた。

「彼女はそれを見上げる。まさか、鉄塔が爆破された現場に少女がひとりいるなどとは誰も思わないだろう。

地面に手をついた彼女は息を吸い込んだ。

「…忘れてた」

自分の存在意義を、忘れていた。

目の前が真っ赤に染まる。

「いやね…」

くすくすと笑い出す。

目の前に鉄塔が倒れてきているというのに、大した余裕だ。

彼女の呼ばれる名前こそ、マジックボムだ。

それを忘れていた。

火柱が上がった。

全てを燃やし尽くす炎。

土も、岩も、全てを巻き込んで彼女は咆哮した。

ひゅうひゅうと音をたてて、彼女の周りで風が卷く。炎が渦巻い

て、彼女のマントをかすかに焦がした。

まだ買ったばかりだったろうはずのアリッサの衣服。

かわいらしい服を汚したら、また、ジョージが寂しそうな顔をするのだろうか。

そんなことをふと思って、アリッサは顔を左右に振った。

「…」

なんでもいいじゃないか、と…。

そう。

なんでもいい。

嫌な音をたてて炎が舞い上がる。彼女はそのまま燃えさかる鉄塔に背中を向けて歩きます。

その瞳は静かに決意をたたえていた。

「そうよね、…そうするわよね」

声を上げて笑う。

そうだ。

自分だって同じだ。

狂ったように笑い続ける彼女は、腹を抱える。

「ビル、地下鉄、そう続けてればもっと大きなことをしたくなる」
人間とはそういうものだ。

彼女はやがて笑いをおさめてから、口元をゆがめた。

「…そうよ」

彼女にはわかる。

あたりをつけたのも自分だ。

「まさか、あの爆発で生き残る子がいるとはね…」
声が聞こえる。

ゆっくりと歩く彼女は、目線を上げた。

「あんた、誰…？」

男がいる。

しかし、男が爆弾魔、というわけではなさそうだ。
なさそうだ、というのはその風貌のせいもある。

「…？」

「君、何者？」

ハイキングにきた、というわけでもなさそうだ。

「あんたこそ、なんなのよ」

街外れの辺鄙な送電線を訪れる奇特な者もないだろうに。

「…ただの鉄塔マニアさ」

ふざけた男の言葉に、少女は瞳を陰しくする。

「死にたいの？」

「君は…」

「殺人鬼よ」

むっつりと黙り込んだ彼女は、片手を振った。
ぱちりと火花が飛んだ。

「…まさか？ 君みたいなかawaii子が？」

「見かけと、中身は関係なくってよ。だいたいあんたこそなんなのよ」

彼女が飛ばした火花にすら、全く怯まない男。

彼の容姿は少女の記憶にない。

「：ストーカーさ。君の、ね」

男がくすりと笑った。

「はあ？」

なんなのだ、と言いたげな彼女の横顔に、男は手を伸ばした。顎を捕らえる。

「：まだ、男も知らないのか？」

いやらしい男の声。

彼の声に少女は眉をひそめた。確かに、目の前にいる男は彼女を知っているのだろう。しかしその男の姿に彼女には覚えがない。

彼の正体がわからない。

「何が言いたいのか？」

男の指を払いのけたアリッサの腰を男の腕が抱きしめる。するりと足の間に男の腕が入り込んだ。

「さわらないでっ！」

下着の上から少女の秘裂に触れた男の腕に、アリッサは相手の頬に爪をたてる。

予告もなしに男の指が少女の体内に入り込む。

「ストーカーだと言っただろう……？」

耳元に温かい呼吸を押しつけながら彼は笑う。

「驚いたよ……君の姿が全く変わっていないことにね……」

二本の指をそろえて彼女の内側をまさぐる男に、アリッサは固く目をつむった。

力が抜けていく。

アリッサは男の指になぶられながら、必死の思いで首を振った。

「：君の力は危険だ」

耳たぶをかむ男は笑いながら彼女の首になにかをおしあてる。か

ちり、とアリッサの耳に音が響いた。

「…え？」

同時に彼女の体内をなぶる男の指の動きが激しくなってそちらに意識を取られる。

ふと彼女の意識が男の声に気がついた。

「…そうだ」

覚えている。

「あんた、ガーゴイルといっしょにいた…」

「よく覚えていたね」

なめるように自分を見ていた男。

かつて、彼女がジョージと会う前に何度も彼女を組み敷いた男だ。体格差からか、挿入されることはなかったが、彼は若く優秀な男で、他のスタッフたちと比べるとひとときわ年若かった。

「…僕は、君の全てを知っている。君の力の抑制の仕方も、ね。別れた時と比べたらそれでも少しは成長したかな。今なら入るかな…」
耳障りな男の声。

少女の足を広げて男は股間の凶器を押しつける。

「…っ」

アリッサが低くうめいた。

みちりと軋んだ音をたてる下半身が痛む。

無理に挿入しようとしているのだから当たり前だ。

いくら彼女の体が、当時と比べて少しは成長したとはいえ、男の性器を受け入れるなどどだい無理な話なのだ。

それでも、彼女の力は爆発した。

男をはじき飛ばす怒りの炎。

よろりと揺れる自分の体を支える。

両の足で地面に立つ彼女は数メートルほど吹き飛んだ男を見つめた。

首に感じた違和感に、指を押し当てる。

鏡など持っていないからわからないが首輪かなにかのようだ。ア

リッサはそう認識した。

途端に、フラッシュバックした。

「これ…」

昔、彼女の力を抑制するために使われていた電気信号を脳へ送る首輪の一種だろう。

こんなものをされては、ビルなど吹き飛ばすことはできない。

多少のパイロキネシスを使うことはできるが、力のほとんどを抑制される、と、そういった代物だった。

そんなことを思い出した彼女の意識に、別の思い出が蘇る。

もちろん、良い思い出などではない。

青年の姿だ…。

ベッドに転がした小さな少女にのしかかり、その足を広げて幼い性器に舌を差し入れる。もう片方の手は自分の性器をしごき、マスターベーションにふけた。

「や、やだ…」

少女の声になど全く聞く耳を持たない白衣の青年。

彼にとって少女は体の良い実験体でしかなく、ものでしかない少女は彼の異常な性欲を満足させる道具でしかなかった。

その事実を知っても、彼を止める者は誰もいなかった。

ガーゴイルでさえも、彼の行為をのぞき見ながら止めることはなかった。

彼らにとって、アリッサはただの研究の道具だったからだ…。

思い出した忌まわしい記憶に、アリッサは総毛立つ。

怒りという怒りに、彼女が支配されたとき。

再び少し離れた送電塔が傾き、それを見守る間に音をたてて倒れた。

思い轟音が響く。

小さく舌打ちすると、彼女は歩きだした。

そうだ。

今はそんなことにかかずらっている場合ではない。昔の記憶など

どうでも良いことだった。

倒れて動かない男に見向きもせず彼女は歩きだす。

どうせ、しばらくたてばそこは火の海だ。

男が死んでいようが、死んでいなかろうが彼女にとって関係のないこと。

アリッサは考える。

そう言えば何人取り逃がしただろうか、と。

何人か取り逃した記憶がある。

かつて、彼女が「マジックボム」と呼ばれ、彼女が起こした事件が「ケース・アングリーボマー」と呼ばれた時代。

今は自分の名前を語る爆弾魔を追わなければならない。

そちらが先決だった。

爆弾魔。

その単純な名前が嫌いだ。

アリッサはそんなことを思った。

「不愉快だわ…」

苛立たしげにつぶやいた少女は首につけられた金属製の首輪を指先でもてあそぶ。

「よう、久しぶりだな」

かけられた声に、少女は顔をあげた。

ハーレーダビッドソンに乗った若い男。

しばらく前、彼女がテヘランを訪れた際に、航空機の操縦のために雇った傭兵だ。

「…ジョス」

「FBIの捜査官から連絡が入ったんだ」

「ジョージ・リート？」

問いかけた彼女に、屈強な男は肩をすくめた。

「いや、そっちじゃない」

「…？」

「ブレット・オルコットのほうだ」

「…ふうん」

ブレット・オルコット。

意外な名前に、アリッサはわずかに眉を上げる。

「なに考えてるのかしら、あの男」

考え込んだ彼女の小さな体に、大男が腕を伸ばした。

軽々と抱き上げた体をバイクの後ろに乗せる。

「なにすんのよっ！」

「歩いて爆弾魔を探すつもりなのか、アホ」

言いながらバイクのエンジンを吹かした。

「捕まってるよ、あんた軽いからすぐ吹き飛ばされちゃうからな」

「余計なお世話よ！」

怒鳴りつける彼女にジョスと呼ばれた大男は豪快に笑った。

小さな体の少女。

その姿のどこに、あのような破壊の力が隠されているのかと思うと不可解に感じる。

「あんた、例の爆弾魔の居所はわかってんのか！」

大声でエンジン音に負けないように声を張り上げた彼に、彼女は甲高い声をあげた。

「知るわけないでしょ！ わたしはエスパーなんかじゃないわ！」
金色の髪を風にたなびかせる彼女は男のライダースーツにしがみつく。

振り落とされないように、男の腰に回した腕に力を入れた。

ぎゅっとしがみついた少女の体からかおる甘い香りに、ジョスはほえんだ。

二時間ほど走った頃だろうか、ポトマック川を超えてから路肩にバイクを止めた彼は体をよじってアリッサを振り返る。

「そのの、ぼろ屋だ」

彼が目を向けた先に、白く塗られた木造家屋があった。

古い作りの家だ。

「へえ」

そうよねえ…。

男の腕に支えられたまま、少女は自分の顎に指を当てた。

「あんた、どうする？」

「ああ？」

「破格で雇うけど？」

身軽な動作でバイクから飛び降りた彼女に、大男が苦笑いする。

「この程度の仕事、あんたひとりで充分だろ」

告げられて、アリッサは胸元で固定したマントのボタンを外すと、ジョスに押しつける。

「ジョス」

「あん？」

歩きます。

「…誰から聞いたの？」

「ブレット・オルコットだって言っただろ」

「そう…」

おそらく、大本の情報を探し出したのはイーサーだろう。

イーサーが情報を集め、それはジョージ・リートによってFBIのブレット・オルコットに流されたのだ。

そんなところだろう。

その情報を裏社会の犯罪者のひとりを通じてアリッサに回した。

回りくどいが、彼女を動かすために司法機関が直接動いていることを悟られてはならないのだ。彼女に協力すると言うことは、公的機関の人間にとっても鬼門である。

「ほんと、あいつらっていちいち面倒くさいわよね」

「仕方ないだろ、あんたみたいにシンプルな理由で動ける人間のほうが珍しい」

「送ってくれて、ありがとう」

「かまわんさ」

歩道を越え、古びた家の芝生を踏んだ。

木製の柵を押し開ける。

軋んだちようつがい、キィと耳障りな音をたてた。

その家は、適度に広く、適度に古い。

近所からは「幽霊屋敷」と呼ばれていたが、そんなことアリッサの知ったことではない。

伸び放題の芝生と雑草。

しかし、それらはわずかに踏み荒らされている。

ごく最近、誰かが踏んだ様子が見て取れた。

夕暮れ時、日差しはオレンジに染まっている。

「ごめんください」

少女の声が夕闇の中に響いた。

しかし反応はない。

「こんばんは」

誰かいませんか？

言いながら彼女は扉を開けた。

鍵はかかっていない。

家の中は薄暗い。ほこりっぽいが確かに人が住んでいる気配を感じさせる。

床についた足跡は、大きな靴跡と小さな子供の靴跡。

子供の靴跡はおそらく肝試しにでもきた子供のものだろう。

そんなことを考えながら彼女はゆっくりと慎重に歩を進める。

もっとも、子供向けの番組でもあるまい。別に壁や床に仕掛けがあるわけではないだろう。

廊下を抜けて彼女は居間にたどり着いた。

つけっぱなしのテレビが青白く光り、昼間に起きた送電塔の事故が中継されている。

少女は黙り込んだまま唇に指をあてた。

考え込む。

火薬の臭いがする。

アリッサは火薬の臭いをたどるように歩きだした。

階段を上り、部屋を進む。

「待っていたよ、マジックボム」

屋根裏部屋に上がった彼女は背後から聞こえた粘着質な男の声に、やれやれと肩を落とした。

白いボードに貼り付けられた自分の写真。

おそらくカメラマンの日本人、佐々木の家から盗み出されたものだ。

どういったいきさつからか、この男、マジックボムの名前を騙る者の手に渡ったのだろう。

「あんたこそ、誰？」

問いかける。

「僕は君に憧れた男だ……」

「へえ、真似しか取り柄のない男が寝言言ってるじゃないわ」
冷ややかに告げた彼女に青年が笑う。

「君のように、ビルを爆破してみてよくわかった……」

性感からは得られないような強烈な快感。

やみつきになる。

爆破せずにはいられない。

蛇のように、彼の視線が彼女を凝視する。

なめ回すように。

「わたしの、名前を騙らないで」

振り返った彼女は男をにらみつけた。

「僕は、君のことを知リたかった……」

どれほどの犯罪者なのか。

かわいらしい姿の凶暴な殺人鬼。

「だったら、もっと手っ取り早く呼べばいいじゃない」

吐き捨てた彼女は、至近から覗き込む男の、アリッサの顔をなでようとした手を振り払う。

「想像通り、かわいいし、素敵だ……」

「迷惑だって言ってるのよ」

自分の名前を騙る凶悪犯など、なにがおもしろいものか。

そんなことを考える彼女の唇を、男の指が触れる。

この偽マジックボム。

内心でつぶやいた、アリッサは相手をにらんだ。

「君は、気持ちがいいんだろう？ 破壊が…」

破壊が快感なのだろう…？

彼が笑う。

蛇のような笑いがアリッサの勘に触った。

破壊することが、彼女のアイデンティティなのだろう。

それが彼にはわかった。同質の犯罪者であるから。

「君を殺して、君に成り代われればどんな快感だろう…」

そう、想像したんだ…。

首に回された成人男子の手が、少女の首を締め付けた。彼の年齢では、彼女がマジックボムと呼ばれていた時代はまだ小さな子供だろう。

彼女の犯行をリアルタイムでは知らない世代だ。

男の手に、彼女がパイロキネシスを発動させようとしたそのときだった。

少女の指先でプラズマが散って消える。

「…え？」

思うように火が操れない。

以前、同じ首輪をはめられていたときも、彼女は強力なパイロキネシスを使えることはなかったが人間をひとり殺すくらいは余裕であつたはずだ。。。

「どうしたの…？」

耳元で尋ねる男は高まるエクスタシーに駆られて少女の首を絞める指に力をいれた。

息ができない。

苦しさに男の指を引きはがそうと爪をたてるが子供の力では大人の力にはかなわない。

「…パイロキネシスが使えなければただちよつと頭がいい子供でし

かないさ」

昔、言われた言葉が頭の片隅に蘇る。

そう…。

自分は、こんなにも脆い。

「かわいいね…」

耳の奥に声が反響する。

声が聞こえる。

ばちばちとアリッサに指先で音が響いた。

「君を殺したら、僕は君になれる…。君になれば、僕はイけるかな…」

性的快感。

急激な酸欠から息がでなくなった彼女の指が力を失った。

引き上げられた体が宙に浮く。

彼女にもわかった。

「…あんたの、目的…」

そう、自分だ。

彼が求めていたのはアリッサだ。

アリッサの殺害こそが彼の目的。

かすれた声でつぶやいた彼女はもがくが、アリッサの非力な腕力だけではどうすることもできない。こんなとき、自分の子供の体力が恨めしいと思う。

送電塔で例の研究員に会ったことがまずかった、と彼女は思う。

しかし、後悔しても現状を変えることなどで気はしない。

もう、ダメだ…。

さすがのアリッサもそう感じたときだった。

「おいおい、なにやってんだよ」

ジョスの声だ。

ゴツリと鈍い音が聞こえた。

同時に男の指から力が抜ける。

少女の体が床に落ちた。

「：ジョ、ス」

気道に突然流れ込んだ空気にアリッサは強く咳き込んだ。

両肩で息をする少女は、ジョスと比較すれば貧弱な青年と、そうして彼に銃口を突きつけるジョスを見上げる。

「なんか静かだから入ってきたら、ピンチじゃねーの」

煙草をくわえた男が低く笑っている。

どういつもこいつも、とアリッサは思った。

どうしてこうも自分の周りにいる人間にはろくな男がいないのだろうか。

深々とため息をついた彼女にジョスはにやにやと笑っている。

アリッサに恩を売るのが楽しくて仕方がないらしい。

「：素直に、ありがとうございましたって言えよ。子猫ちゃん」

そりゃそうだろう。

いつも高飛車で、自分よりも強いはずの彼女がピンチに陥ることなどまず滅多にない。

恩を売るのも効果的に売らなければ意味などない。

「アリガトウゴザイマシタ」

心の全くこもっていない彼女の言葉に、だが男は満足して笑う。言わせた、という行為が楽しかったらしい。

「ほいほい」

短くなった煙草を床に捨てた彼は靴の先で踏みつぶす。

「どうする？ これ」

見たところ自爆用の爆弾も持っていないシャツにジーンズの青年。若い男だ。

「：んー」

銃口を突きつけられて抵抗もできない彼に、少女は目を伏せた。

なにかが、引っかかる。

精神の奥底に滞留するような、そんな不安感。

眼差しを上げたアリッサと、偽マジックボムの青年の視線が交錯した。

その時だ。

ドンと地響きのような音が腹を穿った。

同時に、アリッサの足場がバランスを崩す。

斜めになった床に、彼女はバランスを取ろうとして立ち上がった。その腕を引っ張ったのは青年だった。

偽マジックボムとなった彼は彼女の体を引く。

「…大好きな、マジックボム」

憧れた少女。

憧れたカリスマ的な殺人鬼。

殺せないなら、共に逝こう…。

男の腕にひかれて少女の体が階下へと落ちようとした。

「アリサ！」

ジョスが叫んだ。

落ちかかる少女の腰を抱き留め、彼は銃弾を青年の頭に撃ち込む。即座に絶命した男は声もなく埃と煙が上がる階下へと落下していった。

少女の体を抱き上げたジョスは傾く窓から飛び降りる。壁と屋根を伝って駆け下りながら爆破の衝撃に巻き込まれないようにバイクを止めた地点まで駆けていく。

古びた屋敷は地下でもあったのか、爆破によって地中へと沈んでいく。幾度か誘爆を繰り返しながら隣家を巻き込んで爆発の余波は広がっていく。

救急車と、消防、パトカーのサイレン。

ジョスはアリッサを自分の後ろに乗せてバイクのエンジンを噴かした。

ハーレーダビッドソンのエンジン特有の音をあげながら走り出す。事件現場に長居は無用だ。

ただでさえたたけばたたくほど埃が出るのだ。警察になどつかまりたくはない。

「…大丈夫か？」

尋ねられて少女はバイクの風に煽られながら無言で彼の背中に顔を押しつける。腰に回された少女の細い腕に男は小首をかしげた。

「ジョス」

「ん？」

「わたしの家知ってる？」

「知ってるが…」

「連れってって」

ビルの建ち並ぶ細い路地に入った。

アパートメントの前に停まったバイクから少女は降りる。

「…ありがと」

「アリサ」

言い置いてうつむきがちに歩いて行く彼女に、ジョスは声を投げかけた。

「その首輪…」

前回会ったときにはなかった首につけられた金属製の輪に、ジョスが不審を抱いた。

「なんでもない」

眉をひそめた彼女はかぶりを振った。

こうしてケース・アングリーボマー・セカンドと呼ばれた事件は終結した。

アリッサは疲労からかそれからしばらくの間眠り続けた。

「…姫」

眠り続ける少女の髪に手で触れたイーサーは彼女の布団をかけ直す。

ジョージ・リートは事件の事後処理で忙しく、裏社会の彼女に接触している暇はない。

そのままFBIに戻った彼は多忙なことだろう。

「姫、君はどんな夢を見ているのだろうね…」

風の噂で、彼女が今回も死にかけたと聞いた。

大概、彼女はひとりで行動するときに限って、死にかけているよ

うな気がする。

そうだ…。

彼女は、無敵ではない。

怪我だってすれば血も流す。

ごく平凡な体を持つ人間。

「…う、ん…」

彼の気配にか、アリッサが小さくうめきながら寝返りを打った。
桜色の唇がイーサーを誘惑する。

そっとその唇に引き寄せられるようにイーサーは唇を重ねた。
触れるだけの口づけ。

そうして体を離れた彼は立ち上がる。

彼女の名前を騙ることなど許されない。

その事件が終結したこと。

それを安堵する。

「わたしも帰るとしよう」

死天使の一派はすでに日本へと帰国した。

イーサーもテヘランへと帰る手はずを整える。

アリッサが目を覚めたのは三日ほどたってからだだった。

時刻は夜八時過ぎだ。

「…うー、よく寝た」

言いながらリビングに現れた彼女にレオナルドが目に向けた。

「おはよう」

かけられた声に彼女が息をつく。

「事件の顛末はどうなったの？」

「政府が緊急事態宣言を解除したそうだ」

「ふーん…」

あっそ、と相づちを打って彼女は手渡されたオレンジジュースの
ガラスのコップに唇をつけた。

「腹減っただろ。コーンフ레이크でも食うか？」

「うん、ありがと」

白い袋袖のパジャマがかわいらしい。

「興味なさそうだな」

「ないわね」

皿に盛られたコーンフ레이크にホットミルクをかけたものとスプーンを手渡されてアリッサはテレビの前に座った。

ニュースでは「ケース・アングリーボマー・セカンド」の特集がくまれていた。

多くの被害と人的損失をだした事件。

かつてアリッサが行った事件を引き合いに出して、その犯行と犯人像を比較している。

もつとも実際のケース・アングリーボマーの主犯、アリッサの正体は不明とされていたから、実際の報道は適当なものでアナウンサーの女はマイクを持ってテレビカメラに向かっていている。

「今回の連続爆破事件は、かつてのケース・アングリーボマーの模倣犯であるというFBIからの発表がありました。しかし、今回の事件の犯人は死んだとの情報ですが、かつてこの連続爆破事件を引き起こしたマジックボムはまだ逮捕されていないままです。こんなことで良いのでしょうか！」

そんな正義感ぶった女の言葉に、アリッサはチャンネルを変えた。全米で人気のあるドラマが放映されている。

あれだけ世間を騒がせた事件も終わってしまったえばあっさりとしたもので、日常がすでに街には戻りつつあった。

「…そういえば、例のカメラマンは？」

「ああ、死天使がつれて帰ってたぜ」

コーンフ레이크を口に運びながら、アリッサは自分の首にはめられた金属の首輪に指先で触れる。

自分の力を抑制する、忌々しい装置。

この首輪の件が解決するまでしばらくおとなしくしているか、と、

ため息をついて彼女はソファに寄りかかった。

「レオン」

「…？」

「明日は映画でも見にいかない？」

「いいが、興味あったか？」

映画など、彼女は興味もたなかったはずだ。

そんなことを思いながら、レオナルドは首をかしげればアリッサは肩をすくめた。

「…いろいろ問題があるのよ」

彼女の言葉に追求はせずに彼は彼女のからになったコップにオレンジジュースをつぎ足してやった。

日常が戻ってくる。

そんな気配を感じてアリッサはソファに座ったまま目を閉じた。膝の上にコーンフレークの皿をおいたまま眠りにつきそうになる少女がうつらうつらと船を漕ぐ。

そんなアリッサを背後から見やったレオナルドは彼女の手からこぼれそうになるスプーンと皿をそっと取り上げた。

ソファに座っていた体が力を失ってことごとく横倒しになる。

毛布をかけてやったレオナルドは少女の規則正しい寝息に苦笑した。

食事をして眠ってしまったところを見る限り、本当に疲れていたのだろう。

「…おやすみ」

そうして事件は終結した。

第六章 魔法の竜 1

真っ暗闇の中にテレビがついていた。

リビングのソファに座る少女は膝を抱えてじっとテレビを見つめている。

夜半も過ぎた時間だ。

普段であれば彼女は眠っているはずだ。

つきっぱなしのテレビは男と女が絡んでいる。

喘ぎ声のあがるスピーカーと、卑猥な映像。

しかし、彼女の見開かれた瞳はそんなものを素通りしている。

大きな水色の瞳は瞠目したままで、ただソファで膝を抱えて微動だにしない。

ぼそりと声が響いた。

先ほどから聞こえていた声だ。

彼女の声。

「…弱い」

「ここは寒い…」

「寒い…」

ケース・アングリーボマー・セカンドと呼ばれた事件が終結して以来、アリッサの様子がおかしい。

学校にも行かなくなった。

元々、彼女の精神はひどく不安定だ。

病んでいる、というわけではないが、不安定なのだ。

事件以来、彼女のその不安定さに拍車がかかっているような気がする。

「真っ暗なのよ…」

「ここは、光がない」

「光が見えない…」

ぼそぼそと独白を続ける彼女は抱えた膝に額を落とした。

眠っているようで眠っていない。

まるで手負いの獣のようだ。

野生の肉食獣。

触れてしまえば、波紋となって崩れてしまいそうな、彼女にレオナルドは声を掛けることすらできない。

くしゃくしゃになった金髪を乱れさせて彼女は規則正しい呼吸をたてる。

「…アリサ」

それでも、彼女を放っておけない。

手を伸ばした彼にアリッサは突然顔を上げた。

一瞬、彼女の周りで火花が散った。

「…なんだ、レオンか…」

「なんだはないだろう」

彼の姿を確認して彼女は威嚇するように力をいれた肩から、そつと力を抜いた。

「寝るんなら、ベッドで寝てくれ」

「寝てないから」

「…」

だろうな、とは言えなかった。

彼女が眠ってなどいないことはわかっていた。

しかし、元々体力のない彼女のことだ。こんな生活を続けていれば体をこわすだろう。

「…寝なくてもいいからベッドで休んでくれ」

肩をすくめたレオナルドに、アリッサは睫毛を伏せた。

金色の睫毛が揺れる。

「命令しないで」

「あのな、同居人が心配するのは当たり前だろうが」

「うるさい、ひよっこ」

冷徹な彼女の言葉。

横目で彼をにらみつけた彼女はテレビの画面に目を戻した。

その瞳は、テレビの画面を見ているようで見ていない。

「…わかったよ」

リビングを出た彼は、ため息をついた。

そう。

レオナルド程度には彼女を動かすことなどではしない。

裏社会のトップクラスに、彼女に体を大事にするよう言うてもらうという手もあるかも知れなかったが、そんなことをすればアリッサの不興を買うのは目に見えている。

彼にはどうすることもできないのだ。

気になるのは、彼女につけられた首輪だ。

ケース・アングリーボマー・セカンドが終わる前、彼女はあんなものをつけていなかったはずだ。

それでは誰がつけたというのだろう。

そもそも、彼女の知己であるFBIがつけたとは思えない。根拠などないに等しいが、FBIごときが彼女を制御できるとはとても思えないのだ。

もちろん、彼らが属する裏社会ですら。

アリッサ・ノースウッドと呼ばれる少女を制御することなどくだい不可能である。

扉のガラス越しに、少女は猥褻映像を見つめ続けるかのように、テレビを見つめている。

膝を抱えて、体を小さく丸めて。

まるで手負いの獣だ。

「どうすればいいのかなんて、俺にわかるわけが…」
ないのだ。

わからない。

あんな状態になった彼女を彼は知らない。

アリッサはいつも自信に満ちあふれて、まっすぐに前を見つめていた。

そんな彼女があればどこまで憔悴しているところなど見たことがな

かった。

「：くそっ」

つぶやいた彼は壁に拳をたたきつけた。

どうすればいいのかわからない。

彼女を助けてやりたいとすら思うのに、その方法はわからないのだ。

＊

「だから、言っただろう：」

大きなため息をついたのはジョージだ。

彼女は確かに裏社会トップクラスの犯罪者であるが、約束は反故にしない。

それは彼女がビジネスに向かい合う際、信用問題になるからである。

なにより、彼女が今回の爆破事件に関わっていたのであるならば、真っ先にジョージが気がついたはずだった。

だからこそ、彼女との関係性は否定したというのに。

大多数の捜査官たちは、彼女の犯行として考えた。

「：まあ、あれだけ派手な事件なら誰だって同一犯だと思うだろう」
そんなことを言うブレット・オルコットだが、彼こそ、彼女の犯行ではないと確信していた人間のひとりでもある。

「そりゃそうだろうけどな：」

「今の捜査官たちの若い連中は、彼女の犯行を伝説と記録でしか知らんからな」

ブレットの言葉に、ジョージは頷いた。

そうなのだ。

アリッサの犯行を直に知っている捜査官のほとんどは四十代を超えていた。

最前線で彼女を追っていた捜査官はほとんど引退している。

ジョージの携帯電話が鳴った。

知らない電話番号だ。

「…ハロー？」

通話ボタンを押した彼に、電話の向こうの相手はなにとも言わない。一瞬、いたずら電話かとも思ったが、なにやら腹の底に冷たいものを感じた。

「…誰だ？」

「…」

相手は答えない。

答えることもなく、電話は一方的に切られた。

なにかを言いたかったのかも知れない。

なにかを言おうとして、結局、言えずに電話を切った。

「どうした？ ジョージ」

ブレットに問いかけられて、彼は携帯電話を握ったままで低くうなった。

嫌な予感。

はつきり言えばそれだけだ。

しかし、私的な時間を割けるほど彼は暇ではない。

「…わからない」

やっこの思いでそれだけを絞り出した彼の様子に、ブレットもなにかを感じ取ったようだ。

ジョージ・リートの次に、ブレット・オルコットはアリッサを理解している。

その「理解」がたとえ正反對の理由からであっても。

「アリッサになにかあったのか？」

「わからない」

ただ、なにかがあったとしか考えられない。

「アリッサ…」

ジョージはうめくようにつぶやいた。

自分がFBIの捜査官でなければすぐにでも飛んでいくのに。

彼女の暗闇に手を差し伸べてやることもできない。

そんな自分が口惜しい。

はやる気持ちを抑えながらその日の勤務を終えたジョージは、ブレットと共にアリッサの自宅を訪ねた。

「アリサなら朝、出かけましたよ」

洗濯物を取り込んでいたらしいレオナルドにそう告げられて、ジョージの顔から血の気が引いた。

やはり、仕事中のジョージに電話をかけてきたのはアリッサだったのだ。

「このところ、様子がおかしくなかったか？」

ジョージがレオナルドに問いかければ、彼女と同居している青年は軽く肩をすくめた。

「あんたがもっと早く来ればなにも問題なんて起こらなかったんだ」
吐き捨てる。

青年の様子に、ジョージは思わず息をつめた。

「なにがあった」

「なにもないですよ、ただ、例の事件が終わってからアリサはずっと様子がおかしかった。ろくに寝てないし、夜中なんてひとり深夜番組見てぶつぶつなんかつぶやいてるし」

彼はそう言って目を伏せた。

彼女は明らかに様子がおかしかった。

「…アリサはどこに行った」

「知らないですよ」

知るわけがない。

彼女がどこに行ったのかなどわかるわけがない。

「…アリサ」

アリッサは追い詰められていた。

アリッサにしろレオナルドにしろ、彼らは互いに干渉しない。それが彼らのやり方だ。

「最近学校には行っていなかったみたいですよ」

普段の生活が破綻するほど、彼女が追い詰められていたと言うことだ。

彼は考える。

ジョージは考え込んだ。

彼女は何をしようとしていたのだろう。

彼女は、どこへいこうとしていたのだろう。

「：アリサ、君はどこでなにをしようとしていた」

アリッサの部屋にはいったジョージは、ぐると彼女の部屋を見渡した。

いつものことだが、紙の山でゴった返している彼女の部屋。隣室のベッドルームはここ数日眠っていた気配はなかった。

ただ、トランクとカバンがなくなっていた。

どこかへ行ったのだろうか。

そんなことを考える。

「レオナルド。アリサがどこに消えたか知らないか」

「だから知るわけがないと言っている」

彼女が失踪した。

カバンを持って出かけるなど珍しいことだ。

アリッサは仕事に赴く際、私物などもっていかない。

ならば、カバンをもって出かけたということは、どういうことか…。

それを考えた。

「：アリサ」

祈るように彼は目を伏せた。

アリッサは空港にいた。

チケットを握りしめた彼女はジョスリンに寄りかかる。

「：ひとりでもいいのか？」

「放っておいて」

低くつぶやいた彼女はコートを取るとため息をついた。

「…あんまり投げやりになるなよ」

なんだかよくわからんが。

彼はつぶやいた。

「あんたと出会ったときのこと、思い出した…」

「アフガンか」

「火の鳥ってジョージがつけたのよ」

「…？」

思い出を探るような彼女の言葉に、ジョスリンは目をすがめた。

「あれはすさまじかったな」

「わたし、火の鳥って呼ばれてた時に戻れるかな」

「今だって、火の鳥だろ」

火の鳥。

そんな暗号名。

彼女の名前をつけたのはジョージ・リートだ。

「…わたしは道具じゃない」

ととととつぶやく彼女は、旅客機の搭乗アナウンスに立ち上がった。

「…チケットとってくれてありがとう」

形ばかりの礼を告げた彼女はそうして、搭乗口に消えていった。

＊

暑い。

インディラ・ガンジー空港に降り立ったアリッサは息をついた。

三月の終わり、インドの首都ニューデリーはもうすぐ夏を迎える。ぎらぎらと照りつける太陽。この時期のインドの降雨量は一年を通じてもかなり少ない方である。

スーツケースとカバンを持って彼女は空港を出た。

タクシーを捕まえようとして、しわがれた声に我に返った。

「ナマステ、ニーシャ」

ニーシャ。

それは彼がつけた彼女の名前だ。

「：シャンカル」

「わたしをそんな風に呼び捨てにするのはニーシャくらいだ」

言いながら老人は闊達に笑う。

黒髪の、ヒンズー教の高僧だ。

「シュリ・シャンカルって呼ぼうか？」

「やめてくれ」

苦笑して彼は肩の上で軽く手を振った。

シュリ・シャンカル。

インドでは有名なヒンズー教の高僧で、彼に生意気な口をきくのは彼女くらいだろう。上下関係の厳しいインド国民たちは彼に敬意を持って接している。

そんな二人の様子を見て、多くのインド国民たちがざわめいた。

「：思い詰めた顔をしているね」

ふと真面目な顔に戻った彼は少女を上から見下ろしてつぶやいた。

「：シャンカル」

黄金の巻き毛の少女。

水色の瞳が、かすかに歪んだ。

「泣きたい時は泣いていいんだよ」

柔らかな老人の声に、アリッサはワンピースのスカートの裾を強く握った。

「わたしは世俗に疎いから君がなにをしているかなんて知らない。

だが、君は我慢しすぎだ」

シャンカルの言葉を鵜呑みにしたわけではない。

しかし、今のアリッサにはそれを考える余裕などない。

うつむいた肩が震える。

小刻みに。

「：ニーシャ」

シュリ・シャンカルの痩せた手が彼女の肩に触れた。

押し殺したうめき声が上がった。

彼女はこらえているのだ。

「ニーシャ」

何度も、彼は彼女を呼びかける。

優しい声。

彼は彼女の唯一無二の理解者でもあった。

ずっと以前から。

知り合ったのは彼女がまだ子供の頃だ。幼い頃に彼女は彼に出会った。

まだ「殺人鬼」と呼ばれていた十数年前。

「：君は、夜の化身だね」

そう言った彼は、名前がないと言った少女に「ニーシャ」と名付けた。

インドに逃げ込んだ殺人鬼。

シュリ・シャンカルはその正体にうすうす感づいていただろうというのに、彼女をかばった。

「知りませんな。この子は、孤児だ」

そう告げて彼は司法機関から少女を守った。

彼がバラモン出身であるということが大きな功を奏したのだろう。なにより、彼は誰からも敬愛され、誰も尊敬していた。

まさか彼が殺人鬼の少女をかばっているとは誰も思わなかっただろう。

「シャンカル：」

つぶやいた彼女の水色の瞳から一筋の涙が伝い落ちた。

「：ニーシャ」

彼は腰を落として彼女の白皙の頬に触れた。

そっと包み込むように彼女の瞳を覗き込む。

穏やかな優しい瞳。

黒い理知的な瞳が少女を覗き込んだ。

「君は、今も昔も変わらない」

優しい、しかし怒りに満ちあふれた少女。

彼女の黄金の髪に指を差し入れて自分の胸に抱き寄せる。
押し殺した嗚咽。

小刻みに震える肩と背中を抱きしめて軽くたたく。

しゃくりあげるアリッサに、シュリ・シャンカルは眉をひそめた。

「泣いていいんだよ」

シャンカルの腕の中で少女は長い間泣き続けた。

「泣いていいんだ」

シュリ・シャンカルは知っていた。

彼女が殺人鬼であることも、そして傭兵として各地で人殺しを生業としていたことも。

しかし、彼は彼女の中にある孤独も知っていた。

悲しみも、なにもかも。

「シャンカル……」

何度も彼女は彼の名前を呼んだ。

「ニーシャ……」

彼女の泣き顔など見たくない、そう思っていた。

だというのに、彼女は泣くために時折インドを訪れた。しかし、彼女の泣き顔など見たくないとなっていて、アリッサに「泣いたところなど見たくない」などと言えなかった。

もしもそれを言ってしまう、彼女を追い詰めるだろうことは知っていたからだ。

それを言ってしまう、彼女は泣く場所すら失ってしまうのだ……。

＊

死に場所を探しているのか。

それとも、生きる道を急いでいるのか。

それは彼女以外にはわからない。

誰も彼女を知らない。

ジョージ・リートはファイルをめくって息をついた。

「マジックボム、か」

犯罪者としての通り名をマジックボム。

そして傭兵として各地の紛争地帯を渡り歩いた時の名前を火の鳥。どちらも、炎の使い手としての名声をほしいままにする。

「火の鳥」

マジックボムと彼女を名付けたのは誰だったのか。

しかし、彼女に「火の鳥」と名付けたのはジョージだ。

「火の鳥？ わたしが？」

大きな水色の瞳をぱちくりと瞬かせて彼女は驚いた顔をしていたことを覚えている。

「だってそれって神様の名前でしょ？」

甘ったるいアイスクリームをスプーンですくって口に入れた彼女は、溶けたクリームを頬につけていた。

「いいじゃないか、似合うぞ」

そう告げた彼に、彼女は沈黙してから小首をかしげた。

「クリームがついてる」

指先で彼の頬を拭いてやると、アリッサはくすぐったそうに首をすくめた。

そんな彼女がかわいらしいと思った。

「火の鳥って、古代アステカ王国の、人に火をもたらした神様よね？ ケツアルコアトルだっけ？」

「火の神……。素敵な名前だろう？」

ほほえんだ彼に彼女は嫌そうに眉をひそめた。

「どこが？」

まだ、当時は彼女に恋愛感情など抱いていなかった。

庇護すべき大切な子供。

その感情が決定的に変化したのは、彼女の傭兵としての強さを目の当たりにしてからだった。

彼女は強かった。

誰をも圧倒する強さを鎧にして、彼女は決然としてそこにいた。
古代アステカ王国の火の神。

その名前を、暗号名として持った娘。

彼女の名前も、素性も、なにもかも知らないまま、彼は彼女に恋をした。

恋などしてはならないと、わかっていたというのに。

司法機関の人間が犯罪者などに恋をしてはいけないとわかっていた。
て。

「…トップシークレット」

彼女の存在は秘められていた。

わかっていた。

「アリサ…」

つぶやいた彼はファイルに口づける。

そのファイルに彼女の写真はない。

漏れてはならないことだ。彼女の素顔は知られてはならない。

どうしてかはわからないが、アメリカ政府のもっと高い場所から、
その存在は極秘事項とされていた。

彼と彼女をつなぐもの。

ジョージは自分の左耳に触れた。

リングピアスがつけられている。

その片方は、アリッサの右耳につけられている。

随分昔に彼が彼女につけたものだ。アリッサはなにも言わないが、
それを外そうとはしなかった。

本当に気に入らなければ外していたはずだ。

装飾性も素っ気のかけらもないプラチナのピアス。

どうか無事でいてほしい。

そう願う…。

目を閉じた彼は息を吐き出して立ち上がった。

「守る者、か…」

ブレットは、ジョージの背中を遠目に見て肩をすくめた。

同じピアスをジョージ・リートが左耳に、そしてアリッサ・ノースウッドが右耳にしていること。

その意味をアリッサ自身は考えたことなどないだろう。しかし、彼女に近しい者はごく一部が気がついていた。

ジョージは守る者、そしてアリッサは守られる者。

そこに存在しているのは確かな思い。

アリッサは守られるほど弱くはない。しかし、彼女が確かに強いわけではないのだ。

それをブレットは彼女を追い続けて知った。そんな、アリッサのそばにありつづけた狙撃手の男。

犯罪者を、愛した男だ。

「…ジョージ」

呼びかけたブレットに、FBIでも随一に入るだろう狙撃手の男は振り返った。

彼の手の中にはアリッサのファイルがあった。

トップシークレットとスタンプが押されている。

「追わなくていいのか？」

「追いたくても、居場所がわからないさ」

彼女を守る誰かがいる。

彼女の協力者がいる。

自嘲するように笑ったジョージはため息をついた。

「みんな俺を買いかぶりすぎだ」

彼女の一举一動を知るわけではない。アリッサは誰よりも自由だ。

「俺はマジックボムのお守り役じゃない。監視なら、俺よりおまえのほうが得意なんじゃないか？」

言葉を振られて、ブレット・オルコットは苦笑した。

言われてみれば確かにそうだ。

ジョージはただの保護者で、追跡者ではないのだ。

「…とりあえず、俺はアリサの足取りを追ってみるさ。余分な犯罪をおこして余罪が増えるのは厄介だからな」

彼女に罪を犯させてはならない。

「愛しているから？」

尋ねられて、ジョージは無言だった。

ややしてからかぶりを振る。

「愛してる…、か」

本当は、その感情が恋愛感情なのかすらわかっていない。

ジョージは目を伏せると自分のデスクに座り直した。

正式に彼女を追うには命令が必要になる。

アリッサは犯罪者であり、そして、ジョージは捜査官だった。

夢を見た…。

「…我慢して」

少しでも我慢をして…。

ささやきかけてジョージは彼女の耳たぶに舌で触れた。

愛撫するように小さな耳たぶをなめて、彼は針を手にする。

「…少しでも痛いけど、我慢して」

ベッドに彼女の小さな体を押し倒して、その右耳に針を通した。

「やっ…！」

いやがって彼の体を押しのけようとした少女の手首を捕らえて、

そっと抱きしめ、その耳に針を通して、穴を開ける。

そうして、消毒したプラチナのピアスを通した。

「…少しでも、我慢して」

ささやきかけながら、彼はいやがる彼女を抱きしめて眠った。

どういった因果か、彼女の体は治癒能力がひどく高い。

そのおかげか、致命傷を受けてもそれが致命傷にはなりえなかった。

「…おそろいだ」

ほほえんだ彼に、少女は眉間を寄せて黙り込む。

「なんであんなみたいなの中年とおそろいのピアスなんてしないといけないのよ」

彼女は腹をたててそう言った。

夢を見た…。

夢の中の彼女はふわふわと笑いながら彼を見ていた。

何度も彼女の金髪にキスをした。

ピアスにごまかして彼女にキスをした。耳たぶを味わうようにジヨージは愛撫を施して。

彼女は男からの愛撫になど慣れていなくて、くすぐったそうに首を振るばかりだったが、逆に彼女のそんな性的快感にも疎いアリッサが愛らしくて仕方がなかったこと。

好きだよ…。

言いたくて言えなかったその言葉を。

彼は夢の中で告げる。

「君を愛している…」

抜け殻のように、少女はシュリ・シャンカルの屋敷の庭を見つめている。

ぼんやりと、揺り椅子に座った彼女は穏やかな呼吸を繰り返す。手元の丸テーブルにはみずみずしい果物がかごにつまれていた。しかし、彼女は見向きもしない。

「…ニーシャ」

ぼんやりと目を開いているが、まるで眠っているようだ。

そっと彼女の金色の髪に触れると、ぴくりと少女の肩が揺れた。

「ニーシャ？」

彼の瘦せた腕に、少女はそうして目を閉じる。

張り詰めた彼女の神経が彼の温もりにやっと安堵する。

ことりと、彼女の頭が揺り椅子に寄りかかる。

穏やかな歌声。

少女は耳の奥でその歌を聴く。

子守歌のようだ…。

眠っていたわけではない。

彼女の頬に涙の滴が伝った。

小さな子供を寝かしつけるように、シュリ・シャンカルはゆつくりとしたリズムで彼女の頭をなでる。

その心地よさに、アリッサは詰めていた息を吐き出す。

「シャンカル…」

インドを訪れた日から、彼女の緊張は途切れることがない。

シュリ・シャンカルの歌う子守歌や、彼の指先が触れることによって時折、緊張がやっと途切れる程度だ。

どれだけ彼女が過度のストレスに晒されていたのかが伝わってくる。

「眠りなさい、ニーシャ」

言いながらもわかっていた。

アリッサは眠れないのだ。

眠ろうとしても眠れない。

シュリ・シャンカルの僧衣の裾を掴んだ小さな手。彼はそれを拒絶しない。

高僧であるゆえに彼は多忙でもあったが、それでも遠いアメリカからどうすることもできなくなって逃げてきた彼女を突き放すことなどできなかった。

「…眠れないの」

目の下に隈があった。

どれだけ眠れていなかったのだろう。

「無理に眠らなくてもいい…、ゆっくりしていきなさい」

彼女の目を、シュリ・シャンカルの大きな手がそっと覆った。
疲弊した彼女の肩。

「…」

揺り椅子に座り規則正しい寝息をたてる少女を。

彼女を見つめたシュリ・シャンカルは、その手の中に、香りの良いレモンを持たせると、手織りのレースで作られたショールをかけてやる。

小さな体の、うちひしがれた彼女。

なにかが再び彼女を傷つけた…。

「君を心配している人はたくさんいるだろうに…」

口の中でつぶやいた彼は、そうして吐息をついた。

傷つきすぎた猛獣。

彼女の流す血の涙は止まらない。

「シャンカル。わたしは弱い…?」

「…ニーシャ」

「弱い人は嫌いよ…」

弱者は泣くしかできない。

なにかをしようとして、できずに泣くばかりなどごめんだ…。

「弱い人なんて大嫌いよ…」

吐息をつくようにつぶやいた彼女は、瞳を閉ざすシュリ・シャンカルの手のひらをぬらす。

アリッサにとって、泣くこととは自分自身を否定することだ。

泣けば泣くほど、彼女は自分自身を否定する。

そして、追い詰められていくのだ。

ああ、と声が漏れた。

泣いて、強くなれる人間ではない。

「…弱い人は嫌い」

大嫌い…。

何度も繰り返す彼女は老人の腕にしがみついた。

彼女を守る人間は、もしかしたらどこにもいないのではないだろうか、と。

そんな思いに駆られた。

誰も、彼女を振り向かない。

誰も、彼女を顧みない。

彼女は、そこにいない…。

だというのに、彼女は確かにそこに存在していて。

「破壊者として、生まれに罪科があるわけでもあるまいに…」

彼は、アリッサに聞こえないようにひっそりとつぶやいた。

口の中で。

世界から否定された子供。

世界から見放された子供。

「…ニーシャ、今はゆっくり眠りなさい」

初夏のニューデリーはすでに暑いほどの日差しが降り注ぐ。

風が吹き抜ける北向きのテラスで、少女は椅子に揺られながら眠っている。

穏やかな昼下がり。

刻みつけられた記憶。

彼女の痛みを、知っているのはシュリ・シャンカルだけだ。

アリッサはため息をついてふらりと庭に出た。

眠っていたわけではない。

眠れない…。

それだけだ。

眠れずに、穏やかな風の中でまどろんでいただけだ。

「…アリサ」

一陣の風が吹き抜けた。

少女は巻き上げられたブロンドをおさえて彼女は空を見上げた。

「…なにも、見えないのよ」

悲しげにつぶやいた彼女は夕日に染まった空の下、庭の真ん中にへたりこむように座り込んだ。

「なにもわからないのよ…」

うつむいて、顔を覆ったアリッサは慟哭するように嘆いた。

彼女が住むアメリカとは違い、インドは平和すぎて、彼女は悲しくなる。

自分の居場所がなくなるから…。

「誰か…、助けて…」

なにもない、無為の時間がすぎた。

シュリ・シャンカルの周りに流れる独特な空気感は、狂った彼女の歯車を静かに、しかしゆっくりと確実に補正していく。

あるべきものを、あるべき場所へ。

そっと優しく置き換えていく。

「…夕食にしよう、ニーシャ」

長身の老人はリビングから、彼女に声をかけた。

インドについて以来、二日たったが、彼女は一切食事をしていない。

別段、断食をしているわけでもなからうが、おそらく体が食事を受付ないのだろう。

「…」

彼の声に、しかし、彼女はぼんやりと地面に座り込んでいる。

シュリ・シャンカルは、長い息をつくと修行僧のひとりに、告げてパラソルと椅子と机を彼女の傍らに用意させた。

「あまり食べないと体を壊す。ここは、寒いワシントンとは違う…」
彼女の腕を取ったシュリ・シャンカルは、強引に椅子に座らせると彼女の前に湯気のアがる白粥をさしだした。

アリッサの様子から察するに、彼女はほとんど食事などしてはいはずだ。

胃に負担のかからないものでなければ、彼女の体は食事を受けつけない。

「食べなさい」

強い言葉で告げられて、少女はゆっくりと腕を動かした。

しばらくそうして湯気のとつ椀の中を見つめていた。

食べなさい、と再び告げられて、彼女はそっとスプーンで粥をすくった。

口に運ぶ。

ほとんど水に近い白粥を飲み込んだ。

同時にのどの奥からわき上がる吐き気に、彼女は口を押さえると椅子から立ち上がった。

力を失った体は、砂の舞い上がる地面に転倒する。

唾液と、胃液を吐き出すアリッサの背中が激しく咳き込む。

「…ニーシャ、ゆっくりでいい」

時が止まったように、長い年月を重ねるインド。

時間は山ほどある…。

ヒンズーの時間は長く、長く積み重ねられたものだ。

深く、重い歴史を背負う国。

苦しげに息をつく彼女は、そうしてシャンカルの腕にすがりついた。

まるで救いを求めるように。

「インドは、君もなにもかも受け入れる…」

強さのかけらも感じられない彼女は、ひどく衰弱していた。
あたりまえだ。

ほとんど食事らしい食事もしていないうえに、睡眠もろくにとつてないのだ。

そんな状況で彼女ほどの体力で、体を壊さないでいるとしたら、そのほうがおかしいのだ。

「大丈夫。ニーシャ…、君はこの世界にいていいんだ…」
破壊者。

ヒンズーの神には、破壊の神も、殺戮の神もいる。

それらを受け入れるヒンズーの教え。

だからこそ、彼は彼女を受け入れられる。

「夜の姫君…」

「居て、も…、いい…?」

問いかけた彼女の体から、突然、がくりと力が抜けた。

まるで魂が抜けたように、彼女はシュリ・シャンカル腕の中で意識を失った。

「…大丈夫」

ここにいて良い…。

彼はほえんだ。

意識を失った彼女から初めて張り詰めた空気が消えた。

インドを訪れてから、彼女の精神は触れれば途切れてしまいそうな緊張感に包まれていた。

それが、やっと消えたのだ。

シュリ・シャンカルはほっと息をついた。

かつて、出会って以来全く姿の変わらない彼女を、平然と受け入れられる人間はそう多くはない。

誰だって思うはずだ。

不気味な子だ、と。

きつく彼の腕を掴みしめる彼女の指。

「…ベッドを用意なさい」

遠巻きに彼らを見つめていた修行僧たちに命じて、シュリ・シャンカルは彼女の体を抱き上げると立ち上がった。

広いベッドに移された少女は、そうして、四日間もの間、目が覚めることもなく眠り続けた。

シュリ・シャンカルの客人として、彼女は眠り続けた。

どれだけの傷を負ってきたのか、それは誰もわからない。

破壊者として、世界から拒絶されたこと。

そんな運命に生まれた彼女を、シュリ・シャンカルは悲しいと思う。

深い眠りのなかで、あり得ない夢を見た。

「…赤い」

紅蓮の、世界。

燃え上がる炎の中に彼女はいる。

「意志を持つ、殺人兵器だ…」

「兵器…？」

殺人兵器。

そう告げられて、彼女は「わたしは生き物じゃないんだ」と思った。

それが最初の彼女の自己認識。

「最高傑作だ」

告げられた言葉に傷つくわけでもなく、ただ「自分は兵器だ」と認識した。

他の誰かと、関わることもなかった発達期の子供にとって、そのように存在意義をつきつけられれば、そうあるべきと示されたものを認識するだけのことだ。

閉ざされた紅蓮の世界で、彼女は自分のことを兵器であると認識した。

「わたしは、兵器なのよ…」

それが自分の定義。

彼女は目を伏せた。
長い睫毛が震える。

「…ここは、暗いの」
ぽつりと彼女はつぶやいた。
紅蓮の闇の世界。

その中心に、アリッサはいた。

「…大丈夫」

胸の前で指を組み合わせて、彼女は独白した。

大丈夫、と…。

紅蓮の世界がある。

そこは、彼女の世界だ。

彼女が支配する世界。

アリッサと、彼女が名乗る前。

まだ、彼女に名前がなかった頃。

彼女は、兵器だった。

「…君は、そんなことをしてはいけない」

まだ善悪の概念すらもなく、感情のままに生きていた彼女をたし
なめたのは、彼だった。

「ドウシテ…？」

なぜ？

わたしはなに？

どうして殺してはいけないの？

問いかける彼女に、彼は告げた。

「君はモノじゃない。人だ…」

人はそんなことをしてはならない。
そう言った。

人とはなにかと、アリッサは思った。

「…絶対的な、力を…」

わたしに…。

名前をもたなかった。

「兵器に名前などいらないのよ」

そう告げて彼女は笑った。

笑ったのは、誰だったか、と少女は思う。

誰でもない。

自分だ…。

「…力が全てなのよ」

ほかのものはなにもいらない。

花の香りに目を開いた。

どれだけ眠っていたのか。

そこまで考えて、彼女は肘をついて上半身を起こした。

ジュースのはいったポットと、カットされた果物がガラス製の皿に盛られて、テーブルの上におかれていた。

サイドテーブルにおかれたカードには丁寧なアルファベットが並んでいる。シュリ・シャンカルの子だ。

「目が覚めても、ゆっくり休んでいるように」

柔らかな彼の言葉に、アリッサは首をかしげた。

首に感じる、金属製の首輪に異質なものを感ずる。

かつて、彼女はそれと同じモノをつけられた。その不快感を思い出す。

衰弱した体は上半身を支えきることができずに、寝台の上に倒れ込んだ。

疲弊した身体は彼女を再び眠りに引き込もうとする。

アリッサは重いまぶたを上げようと睡魔に必死で抵抗するが、甘い誘惑から逃れられそうにない。

「…アリッサ」

声が聞こえる。

誰かの声だ…。

自分をアリッサと呼ぶ人間はそれほど多くはない。

そんなことを考えながら、彼女は柔らかな枕を腕につく。
眠ってはだめだ…。

「ニーシャ」

寝台の上でもがくように体をよじる彼女は届いた声に瞳をあげた。

「…シャンカル」

「…おはよう」

につこりと笑う彼に、少女は闇の中に墜落するように眠りに落ちていく。

眠りへ。

深い眠りの底へ…。

落ちていく。

シュリ・シャンカルはそうして微笑した。

どこまでも、彼女は彼女のままだ。

世界を震撼させた事件を思い起こす。

当時の彼女は荒んでいた。まるで怒り以外の感情を知らないような、野獣のような少女。

「…名前なんてない」

小さく縮こまった彼女は裸同然の体に僧侶から奪った衣服を身につけていた。

傍らには、焼け焦げた人の死体。

なにをどうすればそんな死体ができるのか、彼にはわからなかったが、ただひとつ、シュリ・シャンカルにわかっていたことがあった。

それを行ったのは、目の前で牙を剥くように威嚇していた少女だったと言うことを。

「…わたしは、名無しよ」

告げた彼女の周りに熱風が舞い上がった。

まるで渦が巻き上がるように。

黄金の巻き毛が舞う。

「だが、君は意志を持つもの、だろう…？」

差し伸べたシュリ・シャンカルの手に、少女は水色の瞳をまたた

かせた。

誰も彼女を支配することなどできない。

それを、彼は知っていた。

「…君は、なにを探しているんだい？」

「焼くわよ…」

低くうなり声をあげるような彼女の言葉に、シュリ・シャンカルは笑みをたたえた。

「君がそうしたいなら、そうするといい」

シャンカルという名前とは裏腹に穏やかな声色に、少女は探るような眼差しのまま軽く体をひく。

水色の瞳の、黄金の髪の、白人の少女。

「君は追われているのだろう…？」

「だったらなに？」

「わたしは警察でも軍でもない」

やんわりと告げた彼に、彼女は小首をかしげた。

「…はつきり言って」

「ふむ…」

ひどく訝しげな眼差しの彼女に、彼は笑った。

そう。

わかっていた。

彼は、彼女が殺人者であることを。

しかし、その反面、シュリ・シャンカルは宗教家のひとりとして、今、彼女を見捨てることはできないと思った。もしも、今彼女を見捨てれば、世界が破滅すると思ったからだ。

「…はつきり言わないとわからんか」

遠回しな言葉では彼女には伝わらない。

それを察した。

「おいで」

告げて、彼は彼女を抱き上げた。

いくら戒律によって肉食を禁じられた高僧であるとは言え、彼は

かつてのカースト制によってバラモンと定められた家柄に生まれた人間である。

一般的なインド国民たちと違って体格に恵まれている。

長身で大柄な彼は痩せているがそれなりに体格に見合った腕力もある。

「離してっ！」

叫んだ彼女に、シュリ・シャンカルは明るい笑い声をあげた。

就学年齢にあがったばかり程の体格の少女など、軽々と抱き上げられる。

「君は、まだ子供だろう。子供は大人の言うことを聞くものだ」

明るい彼の声に、少女は怒りをおさめた。

彼にとって、実際の所、彼女は子供でしかない。

外見同様の年齢ではないのはわかっていたが、それでも彼の目には、こまっしやくれた子供にしか映らなかった。

勝ち気で、強気な少女。

愛らしい、外見の。

まるで子供の豹のようだと、シュリ・シャンカルは思った。

「わたしは君を告発する気はない。ゆっくりしていきなさい」

修行僧に告げて、僧侶の亡骸を葬儀の準備をさせる。

誰の仕業かなど、そんなこと彼には意味のないことだった。

目の前の少女が行ったこととはいえ、彼が彼女を告発したところで死んだ僧は生き返らない。

それだけのことだ。

生死は普遍だ。

「わたしは君を裏切らない」

黒い瞳に見つめられて、少女は腕の中でぎよつとしたように動きを止めた。

殺人の能力すらもたない男に、そんなことを言われるのは初めての経験だったのだろう。

「…どうして？」

それだけをやつと彼女は言った。

「君を見放せば、世界が壊れる」

そんな気がする。

彼はそれだけ告げた。

「殺せるのに…」

わたしはいつでもあんたなんて殺せるのに…。

彼女は何度も、シュリ・シャンカル腕の中でつぶやいた。
どうして告発しないのかと。

人殺しだと知っていて、どうして警察に突き出さないのか。

「君が求めているのは、そんなものではないだろう？」

日焼けしたヒンズー教の高僧は腕の中の小さな殺人鬼に微笑する。

「わたしが、ほしいもの…？」

「ほしいものすらわかっていないのか」

彼女自身がほしいものを、彼女はわかっていなかった。

しかし、シュリ・シャンカルにはわかっていた。

彼女が欲してやまないもの。

なにを求めているのか。

彼は知っていた。

「君は…」

彼女の耳にささやいた彼に、ささやかれた少女は愕然とした。

「違う…」

「そうかね？ それならそれでも良いが…」

腕の中に殺人鬼を抱きしめて、彼は泰然と笑っていた。

殺人鬼マジックボム。

彼女にそんな態度をとることができる人間は当時、彼ひとりだけだった。どこの宗派の聖職者も彼女を受け入れなかった。

だから、彼女は立ちはだかる全ての人間を虐殺してきた。

それが彼女にとって正義だった。

生き残るために。

生きるために、殺し続けた。

そこに、正義も悪も存在しない。

「：シュリ、このあたりに金髪の殺人鬼が逃げてきたはずだ」

インドの司法当局に問い詰められた、シュリ・シャンカルはさらにしらを切って見せた。

「知りませんが、最近は何人かの少女を保護しましたが、あの子は孤児でしたからな」

肩をすくめた彼に、政府の人間たちはなおも言いつのつたが、彼のバラモン階級という特異な出自とヒンズーの高僧であるという点から鑑みても、それ以上追求することはできなかった。

特権階級の人間。

未だに、インドは特権階級に対する畏怖を感じている。

しかもヒンズーの高僧ともなれば手出しできる相手ではない。

「：どうして？」

寺院の片隅、隠れるように小さくうずくまった彼女は司法機関の人間を追い返したシュリ・シャンカルに疑いの目を向けた。

膝を軽く折り曲げてほほえんだ彼は、彼女に告げる。

殺人鬼だと知っていて、どうして自分などをかばうのか…。

当然の疑問だろう。

「言っただろう、わたしは嘘はつかないと、ね」

ニコニコと、バラモン出身の高僧は笑った。

彼と彼女の間に交わされた密約。

「わたしは決して君を裏切らない」

深い信念をたたえた黒い瞳に、金髪の少女は飲み込まれた。

彼は、彼女に初めて人間らしい感情の波を与えた者と言って過言ではなかっただろう。

温もりも、人の思いも何も知らなかった彼女の全てを受け入れた。ジョージ・リートにすらできなかったことだ。

「神々に誓おう：」

創造神ブラフマーに。

維持神ヴィシュヌに。

破壊神シヴァに。

神々に誓う…。

「夜の姫…」

彼女に出会った全ての者が、その恐ろしさに戦慄した。

その反応が彼女にとって当たり前だったのだ。

しかし、シュリ・シャンカルだけは違っていた。彼女のあるがままを受け入れ、彼女の存在を容認した。

「世界になくて良いものなどないのだよ…」

体に合わない僧衣をまとった彼女は膝を抱えて、時には寝転がったまま、シュリ・シャンカルの教義に耳をかたむけていた。

低い彼の声を黙ったまま聞いて、いつの間にか眠っていた。

誰もが敬愛する高僧の背中に寄りかかって、金髪の少女は恐れることもなく眠っていたこと。

恐れも、なにも知らない純粹な魂を、シュリ・シャンカルは愛した。

色とりどりの花が咲く。

庭の見えるリビングで彼女はぼんやりと椅子に揺られている。

「食事を少しはとれるようになったのかね？」

尋ねられて、彼女は顔を上げた。

「…首輪のせいで力が出せない」

「なるほど」

愛らしいワンピースとは不似合いな金属製の首輪に、シュリ・シヤンカルはそれをじっと見つめてから、いつもの調子でカッカカッと笑う。

「しかし、どうして。君は、どうせ普通に暮らすことなどできないのだから、たまにはいいんじゃないかね？」

あまりにも楽観的な意見に、アリッサは首をすくめた。

シュリ・シヤンカルがマジックボムをかばっていることが知られれば、それはそれで問題なのだ。

彼女の命を狙う者は数多い。

なにより、裏社会の人間が、ヒンズーの高僧だからとその矛先を向けないとは限らないのだ。

彼女をかばっている限り、シュリ・シヤンカルの身も危ないのだ。

彼は愚かではない。

そんなことは最初から理解しているはずだった。

「…なに、わたしのことは心配いらない。自分の身くらい自分で守れる」

バラモンに生まれた以上、そのくらいの能力がなくては困る。

「ふうん…」

そんなものかと、首をかしげた彼女にシュリ・シヤンカルは手編みのレースのショールを手渡した。

「動けるようになったら街でも歩いてきなさい」

気晴らしになるだろう。

彼はほほえんだ。

「…ありがとう」

日傘とシヨール。

白人の少女に、インドの日差しは強すぎる。

わずかに色が入った子供用のサングラスと一緒に手渡されたそれらに、アリッサは素直に礼を告げた。

「シャンカル…」

「なんだね？」

揺り椅子に背中を向けた彼を、彼女は呼び止める。

「…」

言いかけた言葉が出てこない。

彼女は口ごもってうつむいた。

「…ニーシャ」

彼が笑う。

穏やかな老人の笑顔。

「…わたしは、かつて言ったはずだ」

ゆったりと踵を返して彼女の頭に触れる。

「わたしは、君を裏切ったりしない」

告げられた約束。

創世神の名にかけて誓う。

そんな彼の言葉に無意識に頷いた少女はそうして再び椅子に揺られたまま目を閉じた。

そこは、神が支配する国。

＊

「俺が、知るかよ」

ジョスリンは雑巾を手にしたままで肩をすくめた。かつてアフガニスタンで出会った男だ。

当時は、彼が傭兵だと思っていたが、後になって彼は政府の人間だと判明した。

それ以来、ジョスリンとジョージ・リートの腐れ縁は続いているのだが、当のジョスリンのほうは彼を快くおもっていない。

なぜなら、ジョスリンは犯罪稼業に手を染める裏社会の人間である。一方、ジョージは警察関係者だ。

馬が合わなくて当然だった。

「いや、おまえなら知ってるはずだ」

ジョスリンは、アリッサの数少ない知己のひとりだ。

彼が、アリッサの行き先を知らないわけがない。

「そんなむちゃくちゃな」

「…言え」

「いやだね」

彼女の行き先を告げたくない。

そんな気持ちに駆られるのは、アフガニスタンの紛争地帯でのジョージ・リートを知っているせいもあったのかもしれない。

彼は、彼女を追い詰める。

そんな気がした。

根拠はない。

そんな気がしただけだ。

「あんたは、あの子を追い詰めるだろう」

「…そんなことはしない」

「あんたにその気はなくなたって、あの子は追い詰められる」

押し問答のようなやりとりだ。

自慢のハーレーダビッドソンの車体を丁寧にワックスで磨きながら彼はジョージを凝視した。

正義感面した彼が、彼女を追い詰める。

「ずっとあの子のそばにいて、あんたは気づいてないのか？」
むっつりとジョスリンはつぶやいた。

彼も彼女も気がついていないのだ。

彼の関わりが、彼女を傷つけるのだということ。ジョージ・リートは確かに彼女を大切に思っているのだろうが、アリッサの未発達な精神はそれを受け入れることができない。

アリッサの心は、傍から見てもあまりにも未成熟で、あまりにも危なっかしい。

その危険性を、ジョスリンは彼女との関わりの中で感じ取った。

ジョージ・リートという狙撃手の存在は、アリッサの中で確かに大きなものであるはずなのに、それでもその存在を、彼のその気持ち、彼女は受け入れられない。

そして、彼の存在がアリッサを傷つけた。

「……とんだFBIだな」

吐き捨てた彼に、ジョージは思わず胸ぐらを掴み上げた。

「なんだよ、俺はなにもしてないぜ」

少なくとも今は。

ただの自動車の修理工だ。

一般人を無下に逮捕する資格などFBIの捜査官ごときがもっているはずがない。

「たたけば埃はいくらでも出るだろう」

すぐむジョージに、ジョスリンは唇をゆがめた。

「はっ、あんたたちはいつもそうだよな」

たたけば埃はいくらでも出る。

もつともな台詞だ。

ジョスリンは殺し屋だ。

簡単に殺し屋と言えば、恐ろしい殺人者を想像するかもしれないが、彼の存在はどちらかと言えば、殺し屋というよりも一介の傭兵に近い。

金によって雇われる私兵。

傭兵に、思想はない。

「お好きにどうぞ」

それでもジョスリンは、アリッサを売らない。

火の鳥と、名付けられた傭兵。

彼女の人とは思えない戦い振りを見たときに、ジョスリンは彼女に心を揺さぶられた。

あのときに震えた魂の戦慄を未だに忘れることができない。

「：俺は、火の鳥の従属者だ」

どんなに対等に見えたとしても、彼は彼女に隷属する。

ジョスリンの精神は、アリッサの支配下にある。

彼女に魅入られた。

それだけの強さを彼女は持っていた。

野生の本能を刻み込まれた男たちは、誰よりも強い者を見抜く。

より強い者へ、彼らは隷属する。

群れの意識だ。

ジョスリンは、彼女を自分よりも強者であると、そう認めたのだ。強いジョスリンの瞳に、ジョージは息を吐き出した。

「：頼む、教えてくれ」

心配なのだ。

彼女のことが心配なのだ、彼は言う。

「あんたじゃ、火の鳥は御せないぜ」

告げた彼に、ジョージは頷く。

そんなことはわかっている。

「わかってる」

それだけつぶやいた。

そんなジョージの様子に、ジョスリンはもう一度ため息をつく、ハーレーダビッドソンに寄りかかったままで口を開いた。

「火の鳥ならニューデリーにいった」

「：ニューデリー？」

「インドの首都だ」

言われなくてもわかっている。

一般常識だ。

「すまん」

そう言ってジョージは彼はジョスリンの務める修理工場をでていった。

そんなFBI捜査官の背中を見送って、ジョスリンは息をつく。なんというか、ジョージ・リートもそうだが、アリッサにしたところで相当に不器用だ。

「あの人たちは、どうしてこう一方通行なことしかできんのかね」お互いに見当違いなすれ違いを生んでいる。

ジョージ・リートはアリッサを大事に思いすぎて。

そして、アリッサは世間とどのように関わればいいのかわからずにいる。

生まれた歪みは、正されることもないまま時間を刻む。

「火の鳥…」

ククルカンとも、ケツアルカトルとも呼ばれる火の神。

「まったく」

ぼやいたジョスリンはくしゃくしゃと頭をかきまわしてからそうして、仕事に戻った。

傭兵とは言え、普段の生活がないわけではないし、一生を戦場で過ごすわけでもない。

好きこのんで戦場を走る傭兵たち。依頼を受ければどんなに劣悪な戦場にも赴く。

自分自身の命をかけて。

彼女も、彼も戦い続ける。

雇われ兵として。

手帳のなかにはさまった古びた写真。

ジョージと、ジョスリンの間にはさまって少女が笑っている。

金色の髪の毛、汚れたドレスを着たブーツをはいた少女。

砂の街で彼女は笑っていた。

「俺たちは、あんたの笑顔が見たいだけなんだ…」

写真にむかってつぶやいたジョスリンはそうして目を伏せた。

アフガニスタンの紛争地帯で戦い続けていた頃、ジョージもジョ

スリンもまだ若かった。

あれから十年以上たつというのに、彼女は変わらない幼い姿のまま。

愛らしく笑っている写真。

火の鳥、と、畏怖をもって呼ばれた少女。

彼女の笑顔が見たいと、ジョスリンは思った。

気晴らしに街を歩いてくるといい、と言われたものの、出歩く気にもなれないまま、アリッサは相変わらずぼんやりとシュリ・シャンカルの家で暮らしていた。

ニューデリーには多くの近代的なビルが建ち並ぶ。

しかし、その郊外。

オールドデリーによりちかい場所に、シュリ・シャンカルの屋敷はある。

広大な敷地を持つ、邸宅と言っても過言ではない。

その屋敷は、シュリ・シャンカルがバラモンの出身であることを如実に語っている。

屋敷の、不思議な客人はそうしてシュリ・シャンカルの書斎で日がな読書に没頭していた。

彼の屋敷にはコンピューターなどおかれていない。

情報と言えば、テレビのニュースと新聞くらいである。

しかし、シュリ・シャンカルにとってはそれで充分なのだ。

不思議な金髪の客人は、なにをするでもなく自由気ままにシュリ・シャンカルの屋敷で生活していたが、当の屋敷の主人はそんなことを気にも留めていないようだった。

その屋敷で、主人以外に彼女に絡もうとする者は誰もいない。

当然と言えば当然だ。

シュリ・シャンカルと対等に話をする子供などインドのどこにもいない。

誰もが、彼に畏敬の念を感じ、頭を垂れた。

大人であろうと、子供であろうとも。

床にひいた絨毯に寝転がって読書をしていたのか、シュリ・シャンカルが帰宅すると、少女は開いた分厚い本を枕にして眠っていた。彼女がやっと眠れるようになったのは、インドに到着してから一週間以上の時間が経過している。

少女の目元から隈はそれでもとれない。

苦笑したシュリ・シャンカルはそつと少女にショールをかけた。

少女の指先がぴくりと震える。

まるで無防備な子供に見えるというのに、どうして彼女はそれほどまで強さに固執するのか。

無論、彼にはその理由も何とはなしにわかっている。

彼女の強さは、その特別な能力ゆえではない。

揺るぎのない精神力からもたらされるものだ。

「：特別な者だから強いわけではない」

かつて、インド独立の父とうたわれたモーハンダース・カラムチヤンド・ガンディーのように。

「君は、決して特別な子供ではない」

ごく普通の。

彼女を世界の誰もが拒絶したとしても、世界は彼女を愛した。

そうでなければ、彼女がこうして世界にいるはずがない。

そして、なによりも、自分と出会った理由がある。

そんなことを考えながら、シュリ・シャンカルは目を伏せた。

静かにそつと眠る彼女の傍らに腰をおろして、横に積まれていた本を手を取った。

ヒンディー語の本を難なく読破する彼女に頭が下がる。

彼女はというわけか数カ国語に精通していた。

小さな子供であったはずの、昔の彼女ですらインド国民顔負けのヒンディー語を操った。シュリ・シャンカルの前では英語とヒンディー語しか話さないが、彼女が使える言葉はそれだけではないはずだった。

「：普通である、ということは、どういふことなのだろうね」
苦笑する。

波打つ巻き毛を彼はなでながら、眠る彼女に歌を歌ってやった。
子守歌を…。

ベッドに移されても、気がつかないほど深い眠りの中にいた。
精神も、肉体も、全てが疲弊している。

彼の胸に頭を預けて、抱き上げられた小さな少女。

薄暗い廊下を客間に向かって歩く彼は、不意に背後に感じる気配
に総毛だった。

「：動くな」

くぐもった英語で命じられる。

「その娘をよこせ」

少女を抱いたまま、シュリ・シャンカルはわずかに目を開く。

「動かないことと、この子をよこすことと、どっちをしたらいんだね…？」

声がこわばるのはやむを得ないことだったろう。

彼は戦闘能力などありはしない。

ただの僧侶だ。

「：その娘をよこせ」

再び男は言った。

ゆつくりと、シュリ・シャンカルは振り返る。

黒いマスクをしたいかつい男だ。

鍛えられた筋肉がそれなりに訓練を積んだ者であることを伝える。

軽機関銃らしいものを持っているが、一介の僧侶である彼には銃

器であるということくらいしかわからない。

どちらにしろ、自分を殺そうとしているのだということだけははつきりしている。

「眠っていればただのガキにしか見えんな」

吐き捨てるような男の声が不快だった。

男が、少女の胸ぐらに手を伸ばす。

彼女が彼の手に渡れば殺されることなど目に見えていた。

思わず腕に力がこもったシュリ・シャンカルに、男がぎらりと強い瞳でにらみつけた。

そのときだった。

眠っていたはずの少女が目を見開いた。

細い手が伸びる。

直に、彼女の犯行を見た者でなければ、マジックボムの恐ろしさを身をもって知らない。

なぜならば、彼女の姿は愛らしい人形のような白人の少女だからだ。

水色の瞳が黒いマスクの男を見つめている。

両手を伸ばす。

男の頬にその手が触れた。

ばかりといやな音がした。

炎をまとった指先が、男の頸動脈を切り裂いた。

金属製の首輪が彼女のパイロキネシスを制御しているのか、わずかに眉をひそめたアリッサは強く右腕を床に向かって振り下ろす。

一気に発火する。

侵入者が悲鳴すらもあげられないほど一瞬の出来事だった。

紫色の炎が燃え上がる。

やがてその色彩は、緑から青に。

高温の業火。

肉の焦げるいやな臭いがあたりに漂った。

巨大なたいまつのように男の体が燃える。

全てを燃やし尽くす青い炎。

彼女が、火の鳥ともマジックボムとも呼ばれる所以。

「ニーシャ…」

少女の表情は冷静だった。

彼女は淡々と炎を見つめている。

「シャンカルに銃口を向けるなんて百万年早いだよ」

言い捨てる。

冷たい彼女の瞳。

「…ニーシャ」

「…途中から目が覚めてはいたのよ。様子をうかがってただけ」
彼女が告げる。

そうだ。

彼女は愚かではない。

誰よりも、聡く戦場を駆け抜けてきた戦士だ。

「ニーシャ、ありがとう…」

水色の瞳を覗き込むシュリ・シャンカルに、少女は瞳をそらした。

「…シャンカルは、昔からそう…」

ぽつりと、彼女は言う。

「…なんだい？」

「人殺しをしても責めない…」

「正当防衛じゃないか、どうして責めないといけないんだね？」

にっこりと笑う彼に、アリッサは困惑した表情で彼を見上げる。

「さあ、寝なさい」

君はまだ体力が万全ではない。

「でも…！ あいつが潜入してきたってことは、シャンカルの家に
裏社会の人間が誰でも入れるってことよ」

なおも言いつのろうとする、彼女に老人は静かに瞳を廊下の向こ
うの扉に向けた。

「ニーシャはわたしを買いかぶっているね」

確かに彼は高僧である。

しかし、バラモンの彼がきれいなことを積み重ねて今の地位にい
るわけではない。

かつて彼が若い頃。

シャンカルの名前のごとく恐れられた。

バラモンの、資産家であるということから幾度となく命を狙われ
た。

実際、彼の両親は盗賊に殺された。

「身を守るすべくらいなら、わたしは心得ている」

低く言い放った老人の瞳の強さに、少女は驚いたように両目を見開くとなにかを言おうとして口を開いては閉ざす。

「：だから、君がわたしのことを気にすることはしない」

バラモンの家に生まれた彼の宿命。

「さあ、寝なさい。君がわたしのことを心配することなどない」

骨すらも残さずに燃え尽きた侵入者に背中を向けた、シュリ・シヤンカルの冷徹さを、インド国民たちは知らない。

わがままな子供に言い聞かせるようにして彼は彼女を客室のベッドへと運んだ。

豪華な客間のベッド。

そうして、少女は眠りについた。

翌日、早朝にシュリ・シヤンカルに朝市に連れ出された。

にぎやかな朝市を見て回る彼は昨晚、彼女の殺人を見たとは思えないほど落ち着いている。

思えば、彼はヒンズー教の高僧である。

殺戮の神すらも信仰する彼ら。

抱えきれないほどの果物や、茶を振る舞われながら、少女は朝市の人混みにもみくちゃにされた。

シュリ・シヤンカルは多くの信者らに拝まれるが、それらを穏やかにやりすごして小さな彼女と朝市を楽しむ。

「相変わずね」

あきれたような彼女の言葉に、老人が笑った。

「つれているのが妙齡のご婦人だったらいろいろ大問題になるだろうがね」

闊達な彼に少女は、くるくると日傘を回す。

どこからどう見ても小さな子供でしかない彼女は、特別、僧侶が愛人を連れ歩いているようには見えない。

「：あーあ、わたしが年相応ならおもしろかったのに」

肩をすくめた彼女は、サングラスを少しだけずらして長身の高僧を見上げた。

「こちら」

黄金の巻き毛の、白人の少女。

ヒンズーの高僧につれられた彼女は屋台を覗いたり、八百屋をのぞいたりしている。

人混みの中をすすむ彼らは、やや目立つ二人だった。

人混みの遠くから、少女を呼ぶ男の声は届かない。

再会は、人並みの向こうにあっけなく散った。

「シャンカル様」

「シャンカル様」

人々は高僧の名前を呼んでごったがえす。

「アリサ：！」

少女は、声が聞こえたような気がして振り返った。

「どうしたんだね？」

頭上から降ってくる彼のシュリ・シャンカルの声に、アリッサはかぶりを振る。

「ううん、なんでもないの」

そう言って、彼女はシュリ・シャンカルについて再び歩きだした。

腕を振る少女の周りで小さく火花が散る。

アリッサは金色の髪を揺らして、不意に真後ろから飛んできた拳をとっさに躲す。

「あっぶないなあ」

とんとんと、身軽にアリッサは背後に飛び退いた。

「なにすんのよ」

男の腕がするりと金色の髪をかすめる。

彼女は相手を確認してから肩を落とした。

「…サンディープ」

「久しぶりだな、ニーシャ」

明朗な青年に、彼女は肩をすくめた。

シュリ・シャンカルが護衛に雇っている腕の良い傭兵の一人だ。傭兵、というよりはボディガードに近いだろう。

「：相変わらず、切れがいいな」

にやりと笑う青年、サンディープにアリッサはツーピースにボレロという格好をしている。

おおよそアクション向きの格好ではない。

サンダルをはいた彼女は用心するように青年を見つめる。

この青年は昔から好戦的で、なにかとアリッサにつっかかっていた。

当時はアリッサのほうが実力は上であったが、今となっては体術だけならば、すっかり青年で体力の盛りにある彼にはかなわないかもしれない。

その上、彼女はなんと言っても病み上がりだ。

「ひよっこ傭兵に負けるほど落ちぶれてないわ」

言い放った彼女は、素早く横に飛んで彼の下段蹴りを難なくよける。

空中で回転した彼女は地面に手をつきながら素早く体を起こした。

「体術だけならどうだろうな？」

青年の笑顔がひどく不愉快で、彼女は肩にかかる金髪をはらった。指先で光が舞う。

「あんたなんか、瞬殺にしてやる」

物騒な物言いにサンディープは余裕で笑っている。

彼は、少年の頃から彼女とこうして体術の訓練を積んでいた。

少年であったサンディープにとって、時折、インドを訪れるアリッサは良い遊び相手だった。

同じ年頃の子供で彼に体術でかなう相手はそうそういなかったのである。

だからこそ、サンディープはアリッサを恐れない。

「…おお、怖い」

逞しい青年と、小さな少女。

拳を突き出し、蹴り上げ、蹴り飛ばし。

お互いに体術をかわす。

もちろん、重量の軽いアリッサはそれだけとってみても充分不利と言えるが、アリッサはそんなことを気にしない。

青年の肩に手について、彼の拳をいなしたアリッサはそのままの勢いで彼の背後にまわると勢いよく蹴りを繰り出した。

アリッサが優れるのはなにもパイロキネシスだけではない。

突出した運動神経とバランス感覚。

それゆえに、彼女は自分よりもずっと体格の良い男たちを容易にやりすごした。

まるで彼女の体術は、日本における柔術のように相手の力をいなしでやりすごす。

体の小さな彼女故だ。

そのために、「体術だけ」ならばどうかはわからないのだ。

彼女が全神経を研ぎ澄まして戦いの場にあるときは、相応の武器を持っているからだ。

ほとんど丸腰に近いとはいえ、やはり普通の戦争屋として武器も携帯することがある。

「…忌々しい首輪」

「へえ、あんた、そんなものに負けるんだ？」

揶揄する男の言葉が不快だ。

苛立たしく舌打ちした彼女は熱く熱気を持った指先を男の首筋に突きつける。

「ちょ…っ！ それは反則だろ！」

「戦闘に反則もへったくれもないわ」

冷静な彼女の言葉。

サンディープは彼女の手首をつかむと一気に投げ飛ばした。

しかし、もちろん彼女のおとなしく投げられるわけではない。

手首を翻して重心を背後に移すと、受ける衝撃を最小限におさえて砂の舞い上がる地面に手について受け身をとった。

互いに容赦のない体術の応酬をシュリ・シャンカルはリビングから微笑して見つめていた。

アリッサの動きに鋭さが戻ってくる。

彼女は元々、根っからの戦争屋だ。

サンディープをたきつけてアリッサに絡ませたのは功を奏した。

そもそも、彼は昔から「あの女の子がきたら絶対に俺に教えてくださいね!」と言っていたほどである。

彼のアリッサへの執心は筋金入りだ。

楽しい遊び相手。

サンディープにとってそれだけでしかなかった。

彼が成長していくというのに、時折、インドを訪れる少女が全く変わらないことに、サンディープは何一つ疑問を持たなかったし、そして、彼女のことを追求することもなかった。

希有な青年。

アリッサのほうも、サンディープに対して面倒くさい、と感じてはいるものの、特別に嫌悪を感じるということでもなく、シュリ・シャンカルと同じように彼女を受け入れる青年をなんとはなしに受け入れていた。

そして、やがて彼は少女を追って傭兵となった。

シュリ・シャンカルのボディガードを本職としながら、傭兵稼業につく。

「:あんたも大概、体固いんじゃないの?」

嫌みのひとつも告げる少女に、日焼けした男は口元で笑う。

「あんたいみたいな軽い女の子は、いろいろ吹っ飛ばされるから大変だよなっ!」

言いながら腕を伸ばす。

もちろんその程度で彼女はつかまらない。

軽々と青年を飛び越えた彼女は、後ろ手に青年の黒髪を軽く引っ

張る。

その彼女の人差し指を青年がつかんだ。
勢いのままに指を強くひいて腰を抱き寄せる。

「つかまえた」

朗らかに笑う青年に、少女は眉を寄せる。

「まあ、あんたは本気じゃなかったしな」

彼女が本気で組み手をするときは、相手を殺すときだ。

それを彼は知っている。

サンディープ相手には、少女はいつも全力で戦っていない。

「：当たり前でしょ、あんた程度に本気だしてどうすんのよ」

彼女が吐き捨てた。

「昔から思ってたけどさ、白人て、みんなあんたみたいにかわいいのか？」

「白人って：、あんたの頭の中はどんだけ肌の色だけでひとくくりにしてんのよ」

彼は、少女の体を抱きしめて彼女の瞳を覗き込む。

「それに、かわいいって。頭腐ってんじゃないの？」

あきれかえった彼女の言葉に、青年は笑った。

「：そうか？ デリーに観光にきてる欧米の連中と比べたりとかってあんまりしないしなあ。俺らと比べるとみんな白くてきれいだしな」

強い日差しのせいでインドの国民は日焼けしている者が多い。

「色なんて、何色だって関係ないじゃない」

頭をかき回した彼女に、青年は嬉しそうに彼女を抱く。

「ニーシャは昔と変わらない」
すごくかわいい。

彼にとって、シュリ・シャンカルの傍らにいる強い少女は憧れの対象だった。

かわいくてしかたがない。

まだ、彼が子供だった当時、サンディープはいつのまにかシュリ・

シャンカルのおそばからいなくなっていたことを残念に感じたものだ。そうして、時折彼女がシュリ・シャンカルの元を訪れることを知ったときに、高僧にねだって彼女が来訪したときはよく一緒になつて組み手の相手をしてもらったものだった。

「俺は、ニーシャに憧れてこの道を選んだんだ」
にこにこ笑う。

彼は、彼女に憧れたのだ。

そうして、アリッサと同じ道を選択した。

「あんたはずっと変わらないけど、俺はあんたのことがずっと好きだし、だから俺はあんたの代わりにシャンカル様を守るんだ」

暗黙の約束。

そうだ…。

サンディープがいたから、アリッサは安心してインドを離れた。

サンディープが自分と同じ道を選んだことに、どうしてか安堵した。

これで、シュリ・シャンカルを危険から守ることができるようなのだ。

「サンディープ…」

呆然と彼女は青年を見つめた。

知らないうちに、彼はこんなにも成長した。

遅しく、精悍な男になった。

…人とは成長するもの。

そして、アリッサは時間に取り残された者。

「…ニーシャ」

腕の中に抱きかかえた少女の顎を引き上げる。

硬直したまま固まっている彼女に、口づける寸前、ふとシュリ・シャンカルの咳払いが響いた。

咳払いに、サンディープが我に返ったように彼女から腕をほどくと、わずかに赤面をして顔をそらした。

「まあ、若い者の恋路を邪魔はせんが、相手の意向くらいは確認した方が身のためだぞ」

「：すみません、シャンカル様」

怒られた子供のような表情をした青年に、アリッサが吹き出した。
「ニーシャ、サンディープ。そろそろ食事にしようか」

シュリ・シャンカルが告げた。

穏やかな午後。

彼らの平穏な時間が過ぎていく。

二人に背中を向けたシュリ・シャンカルはほほえんだ。

彼は、サンディープがアリッサを慕っていることも知っていたし、アリッサが彼を決して嫌っていたわけではないことも知っていた。

アリッサにとって、サンディープは彼女を恐れない貴重な一般人だったからだ。

「：ニーシャ」

サンディープが彼女の耳にささやいた。

頬に口づける。

まるで、子供のキスのようだ。

戒律の厳しいインドで育ったサンディープは、シュリ・シャンカルの意向に背くことなどではしないのだ。

彼にとって、シュリ・シャンカルは父親のように大切な存在なのだ。

好きだよ…。

ささやいた彼に、少女は頬をおさえて水色の瞳をあげた。金色の睫毛をまたたかせて。

アリッサはサンディープを見上げた。

シュリ・シャンカルの周りを流れる時間は独特な空気感を漂わせる。

少女はソファに腰掛けたままであたたかた寝ていた。

その後ろ姿を見つめて、サンディープはため息をついた。

まだ、彼が少年だった頃。

彼女は彼とそれほど年齢が変わらないように感じられた。組み手の相手をしてもらえることが楽しくて乱暴者と呼ばれた少年は、喜んで彼女につかみかかった。

まだ子供だった彼は、彼女が恐ろしい殺人鬼だとは思いつた。

乱暴者。

彼女は、彼に唯一暴力で対抗できる子供だった。

子供であると、そう思っていた。

サンディープは、シュリ・シャンカルに彼女の名前をニーシャだと教えられた。

白人の、美しい少女がどうしてヒンディー語の名前を名乗っているのか、それを不思議に思いもしたが、それを高僧相手に質問する勇氣などなかったことを覚えていた。

「…ニーシャ」

少女の体が揺れて、ソファに横倒しになった。

その衝撃で目を覚ます。

「…ん？ サンディープ？」

目をこすりながら彼女は体を起こした。

「寝てていいよ」

話しかけて、サンディープは彼女の隣に腰掛けた。

「目が覚めたから、もういい…」

つぶやいた彼女に、彼は苦笑した。

上背のある男を見上げた金髪の少女。

彼は少女の眼差しに目線をおろすと、彼女を見つめる。

「…ニーシャ」

「なに？」

純真な眼差し、金髪の少女。

汚れを知らない、子供。

サンディープは少女の頬に無言のまま触れた。

顔を傾けて、腰をかがめる。

彼女は驚いたように彼を見つめていた。

唇が重なる。

青年の重みを受けて彼女はソファに押し倒された。

小さな体の、少女のままの彼女。

強い彼女は呆然としたままでサンディープを凝視している。

たくしあげたワンピースを、少女の胸元を晒した彼はそつとふくらみもない胸に舌を押しつける。

「…あ」

小さく声が漏れた。

彼は彼女が自分を殺さないことを知っている。

「かわいいね、ニーシャ」

ささやかれた声に、彼女はかぶりを振った。

小さな、愛らしい彼女。

成人して、彼は彼女が殺人鬼だと知った。

しかし、彼にとってはそんなことどうでも良かったのだ。

ニーシャと呼ばれた少女は、彼が敬愛するシュリ・シャンカルが庇護する少女。

そして、彼女はシュリ・シャンカルを守る。

「…かわいい」

何度も何度もその耳元にささやいた。

そのとき、ふと、体を感じた振動に、サンディープとアリッサは顔を上げた。

「なんだよ、いいところだったのに」

ぼやいた彼は黒髪をかき上げた。

精悍な横顔が厳しさをたたえる。

青年がソファから足をおろした。

立ち上がる。

重いブーツの足音が響く。

サンディープは足早に部屋を出て行った。

一方の少女はうんざりとしながら、ため息をつく。床に足をつけた。壁際におかれたトランクを開いて身軽な衣服を取り出した。

ホットパンツをはき、Tシャツに腕を通す。

テーブルの上に置かれたナイフを手にとって彼女はそれを背中に固定した。

「どうしたんだね？ ニーシャ」

部屋を飛び出していく彼女にシュリ・シャンカルが声をかける。

体にぴったりとはりつくようなTシャツと足をむき出しにしたホットパンツというスタイルはどう見ても臨戦態勢だ。

「なにか起きたのよ」

言い放って彼女は屋敷を出て行った。

風のように。

アリッサの存在はまるで風のように。

「しかし、サンディープも困ったものだね。あれではニーシャが困ってしまうじゃないか」

年寄りの気苦労だ。

彼女はサンディープを殺さない。

それは、シュリ・シャンカルのためだ。

風を部屋に入れる。

「サンディープ！」

少女の声に、青年は振り返った。

「あ、ついたか」

振り返ったインド人の青年は、しなやかな子鹿のような肢体の彼女にそっと目をすがめた。

長い金色の髪を緩く三つ編みにしていた。

「…なにがあったの？」

アリッサが問いかける。

「わからない」

サンディープが暗闇に目を細める。

「…あの振動、爆発よね」

少女の言葉に、彼が相づちを打った。

「たぶん」

かすかな振動を彼らは気がついた。

そしてその振動が、地震などのそれとは異なることもわかっている。

腰を落とした彼女が地面に耳をつけた。

アリッサがパイロキネシスの使い手である、と言う以外はごく普通の感覚しか持っていない。

「なにか聞こえる」

つぶやいた彼女は眉をひそめた。

「ニーシャ…？」

「さっきのは貸しにしとく」

むっつりとつぶやいた彼女はそうして立ち上がった。

「戦車が来るわよ」

「どうしてわかんだよ」

「あんたと比べてわたしが一流だから」

きっぱりと言い放って彼女は闇を見据えた。

どれだけ時間がたってからか、アリッサの言うとおり戦車のキラピラの音が聞こえてきた。

アリッサはナイフ一本。

サンディープは武装しているとはいえさすがに戦車を破壊するほどの火器は持っていない。

だが、彼も彼女も動じない。

理由はそれぞれ異なる。

アリッサには戦車など恐れる理由がなかったし、サンディープにいたっては百戦錬磨の「火の鳥」と呼ばれる傭兵がそばにいるのだから恐れる理由がなかった。

「：怖くないのか？」

若干、緊張をにじませるサンディープに、アリッサは失笑する。

「地獄なんていくらでも見てきてるわ」

そう。

生まれた時から地獄にいた。

だから彼女は恐れない。

サンディープは彼女と言葉を交わしながら、眼差しを目の前に戻した。

月明かりの中に浮かび上がる戦車の影。

「：射程にはいったっばいけどどうする？」

尋ねられてアリッサは背中に固定したナイフを抜いた。

手に余る、ファイティングナイフだ。

「：そんなの使えんの？」

彼女の小さな手で、扱えるのだろうか。

そんなことを思った。

「いちいちわたしに合わせて作ってくれる訳じゃないわ」

言い捨てて、アリッサは戦車の砲台が動き始めたのを確認した。

できれば相手の戦力を正確に把握したいところではあるが、暗くてよく見えない。

相手はおそらく暗闇でも動けるように装備を調えているはずだ。

そうなると地の利は向こうにある。

しかし、アリッサはそんな絶望的な状況の戦場を幾度となく駆け抜けた。

「だいたいこんな市街地に、なんで戦車なんて……」
ぼやいた彼女は息をついてから地面を蹴った。

走り出す。

月明かりの中に、銃声が響いた。
軽い連続音。

彼女の動きにはサンディープなどついてこれるわけがない。

暗視装置もあるだろう完全武装の相手に、丸腰同然で立ち向かえる人間などアリッサくらいだ。

「：アリサ！」

そのときだった。

声が響く。

よく見知った声だ。

「：ジョージ？」

二メートルほどもある大柄の白人男が目に入った。

ご丁寧な拳銃を構えている。

「：とりあえず、話は後だ。なんだ、あいつらは」

ジョージの声に、アリッサとサンディープは顔を見合わせる。

「知るわけじゃないじゃない」

邪魔をするからぶちのめすだけだ。

シンプルな理由。

「：まあ、味方とは思えないな」

「でしょ」

武装グループ。

どこからどう見ても道案内をしてくれるために現れたとは思えない。

アリッサは首に感じる金属製の輪が気になって仕方がない。忌々しげに首をかしげてから、彼女は走り寄った戦車に手のひらで触れた。

一気に鉄が高温になる。

あっという間に真っ赤になった戦車の側面。

闇の中で彼女は天使のように顔の前で手を広げた。

神経を研ぎ澄まして気配をたどる。

「被害は最小限にな…！」

怒鳴り声はジョージのものだ。

彼女を中心に轟音が響いた。

連続して、アリッサの周りで音が鳴り響く。

悲鳴と、混乱。

土煙が上がり、火柱が立つ。

「…すっげ」

それを目の当たりにしたサンディープが独白するようにつぶやいた。

「わたしを相手に戦車持ってきたんでしょうけど、甘いのよ」

上司に言っておけ。

彼女の言葉が響く。

恐怖に染まった男たちが尻餅をつくように腰を抜かして彼女を見つめていた。

許してください、許してください。

頭を抱えて、子供のように許しを請う。

「誰だか知らないけど、帰って伝えなさい」

すっかり怯えきった男の胸ぐらを掴んで少女が言った。

「わたしを殺したいなら、もっと本気で来いってね」

戦車程度では殺せない。

彼女にとって戦車など見慣れた兵器だ。

かすれた悲鳴を上げて走り去っていく男たちを肩越しに見やっ
てから、彼女は燃え上がる戦車に背中を向けた。

「…アリサ」

サンディープと、ジョージに歩み寄ろうとする彼女に、動いたの
は白人の大男だった。

「…アリサ！」

駆け寄って抱きしめられる。

「ずっと探した…」

強い腕に、アリッサは眉をしかめる。

抱きしめる腕が強すぎて、体が軋む。

「痛いってば…」

「心配かけないでくれ…」

「…もう大丈夫よ」

彼の強い腕を押し返したアリッサは痛ましげな眼差しのジョージを覗き込んだ。

「わたしのことは、心配しないで」

子供ではない。

彼女の言葉に、ジョージは目を伏せた。

「突然消えて、どれだけ心配したと思ってるんだ…」

「…突然消えるのなんて今に始まったことじゃないじゃない」

膝について小さな彼女を抱きしめるジョージの耳を軽くつねって、彼女はため息をついた。

「あー…、その、さ」

ふと、困惑したサンディープの声が響いた。

「俺もいるんだけど…」

「…あ、こっちの中年はジョージで、この子はサンディープ」

二人にそれぞれを紹介した彼女は屈託のない笑顔を浮かべた。

＊

少女に笑顔が戻った。

首の金属製の輪は相変わらずだったが、それでも、シュリ・シャ
ンカルのそばにあって彼女の内側で軋んだ音を立てていた歯車は補
正されたようだった。

ぎしぎしと、軋んだ音をあげる。

誰も、彼女を顧みない。

誰も、彼女を振り返らない。

だから彼女は自嘲するように笑う。

低く声を上げることもなく彼女は笑った。

「善も悪もない」

シュリ・シャンカルはつぶやいた。

「彼女にそれを求めるのは無意味なことだ」

自分自身が、何者なのかすら知らない子供に、そんなことをつきつけたところでどうなるというのだろうか。

「しかし、あの子供は殺人者ではないんですか？」

問いかけられて、高僧は修行僧に対して微笑した。

「そうだな。確かに彼女は希有な犯罪者だ。しかし、だったらどうだというのだね？ 彼女は我々に刃を向けたわけでもない。ただ救いを求めに来ただけだ」

昔と同じように、彼女は彼に救いを求めた。

彼女の手を取ることは、シュリ・シャンカルにとって必然だったのだ。

たったそれだけのこと。

それ以上の意味などない。

「救いを求めて、飛び込んできた小鳥を、見捨てるのは神が認めても、人道に反しているとは思わないか？」

静かに彼は問いかけた。

殺戮の女神、カーリー。

破壊の神、シヴァ。

戦闘の神、ドゥルガー。

数々の非道徳的な神を崇拜さえもするヒンズーの教え。

「：しかし、かの犯罪者をかくまえば、シャンカル様の身に危険が及ぶのではありませんか？」

彼女は危険人物だ。

殺人鬼と呼ばれる少女を庇護すると言うことは、自分の身も危険にさらすということではないのかと、修行僧は言いつのる。

どんなに善行をつんだとしても、命はひとつしかないのだ。

一世紀前の未開の地ではない。

彼ら、宗教家たちもとんでもない伝説を信じているわけではない。彼らが信じるのは人の心だった。

人の心のありかたを思う。
信仰とはそういうものだ。

「信仰とは、魂に刻まれるものだ」
考えるものではない。

禪問答のようなやりとりだ。

昼前の日差し寺院。

強い日差しが影を作る。

「…シャンカル」

細い手足の影が落ちた。

シフォンを幾重にも重ねた白いワンピースをまとった少女。

抜けるような白皙の肌が印象的な彼女は、金色の巻き毛で側頭部におだんごをつくっていた。

愛らしい少女。

しかしその本当の正体は殺人鬼だ。

通り名をマジックボム。

「…っ！」

シュリ・シャンカルを、殺人鬼の件で問い詰める修行僧は、その声と姿に驚いて腰を浮かし書けた。

ある意味、シュリ・シャンカルの周りでは彼女の存在は有名だった。

ただし、シュリ・シャンカルによって他言を禁止されている。

少女の背後には大柄な男がいた。

白人の大男だ。

「これはこれは、よくおいでくださった」

シュリ・シャンカルが笑う。

白人の大男は恐縮したように軽く会釈した。

「…ジョージ・リートよ、わたしの友人」

肩をすくめたアリッサに、シュリ・シャンカルは片手を差し出した。

握手が交わされる。

「わたしはヒンズーの僧です。いつもニーシャがお世話になっているとか」

ニコニコと笑うヒンズー教の高僧からは、しかし、普通の人間からは感じ取れないような圧倒的な威圧感を感じた。

彼が高僧であるというのは、伊達ではない。

その存在すら異質。

高僧と呼ばれる人々のほとんどにあてはまる。

彼らはどこか人間界から超越していた。

「：ニーシャ？」

「ああ、失礼。わたしはいつも彼女をそう呼んでいるのです」

言いながらシュリ・シャンカルは片手で軽々と少女を抱き上げた。ジョージ・リートの訝しげな表情に高僧の老人は闊達に笑った。

「ヒンディー語で、夜を指す女性の名前です」

修行僧に目配せした老人はそうして、ジョージ・リートをつれて歩きます。

「彼女はまだ病み上がりですから、もう少しデリーでゆっくりしていてももらいたいのですが、どうですか？」

穏やかな彼の声に、ジョージは困惑する。

まさか、アリッサがヒンズーの高僧に保護されているとは思っていなかった。

「心配いらないわ、ジョージ」

「：リートさん、この子には休息が必要だ」

俗世から切り離されて休まなければならない。

暗に告げる彼の言葉に、ジョージは思考に沈んだ。

何と答えて良いのかわからなかった。

心配のあまりアメリカから直行して探し出した彼女。

大切な娘のようなアリッサ。

シュリ・シャンカルの言う「休息が必要だ」という言葉もわからなくもない。

いや、むしろわかっている。

彼女に必要なのは煩雑な世間から切り離されて休息を取ることだ。CIAやFBI、もしくは州警察から常に監視され、裏社会から見張られている彼女はアメリカにいる限り休むことなどできない。わかっていたから、ジョージは口ごもった。

彼女をワシントンに連れて帰りたいという気持ちも大いにあるのだ。

彼女と帰りたい。

しかし、彼女に休息を与えてやりたい。

相反する感情に揺れ動く。

どうすればいいのかもわからない。

少なくとも、シュリ・シャンカルは単純に好意から、申し出ている。

インドの、シュリ・シャンカルの周りに流れる特異な空気感。

優しいシュリ・シャンカルの手には少女はうつらうつらと眠り出す。アメリカにあって彼女がこれほど安心して眠ることは見たことがなかった。

「リートさんもおわかりでしょう。彼女の神経は疲れ切っている。

ニーシャは休ませなければならぬ」

そうだ。

彼女は長いアメリカでの生活で常にストレスに晒されていた。

だからこそ、彼女は破綻した。

「：納得できない顔をしていますな」

シュリ・シャンカルはジョージに向かって苦笑した。

ジョージの気持ちがわからないわけではないのだ。

むしろ痛いほどよくわかる。

彼は、アリッサを大切に思っている。

心配でたまらないというのに、アメリカと一緒に帰りたいと思う。長身の高僧と、白人の大男。そして高僧の腕に抱かれて船を漕ぐ小さな少女。

写真にすれば絵になるだろう。

「…わかつてはいるんです」

頭ではわかつている。

アリッサには休息が必要だ。

ゆっくりと精神を休めなければならない。

立て続けに起こった事件にアリッサは巻き込まれ、そのうち二回ほど死にかけた。

肉体的にも精神的にも、彼女はぼろぼろだ。

それを精神力だけで支えていた。

緊張した精神力だけで支え続けるそれは、脆い。

しなやかな柳は強くしなやかに強風を受け流すが、こわばった枯れ木は衝撃に弱い。

今のアリッサは、こわばって水分を失った枯れ木だ。

衝撃を受け続けられ、やがて壊れてしまうだろう。

人の心とはそういうものだ。

「わかつてはいるんです、彼女は、長く休息をとらなければならない。アメリカは、彼女が犯罪者であることを逆手にして頼りすぎる」だから彼女がぼろぼろになるのだ。

暖かな空気の中で守ってやりたいとすらジョージは考えるというのに、アメリカで暮らす以上、それはかなわない。

彼女は大きな陰謀と事件に巻き込まれ続ける。

「アメリカが彼女を追いつめてはいるんです…」

そのアメリカに伴って帰ることは彼女をさらに破綻させることになる。

「…いや、それは違いますな」

高僧の老人はぼつりとつぶやく。

「…アメリカ政府も、彼女を必要としている。彼女はアメリカにとって必要不可欠な存在だ」

祖国があなたに何をしてくれるかを尋ねてはなりません、あなたが祖国のために何をできるか考えて欲しい。

シュリ・シャンカルはかつての大統領の言葉を思い出す。

アメリカとはそういう国だ。

人類「共通の敵」と戦うために、彼女はアメリカ政府に利用されている。

おそらく、彼女だけではない。

だからこそ、アメリカ合衆国の国民は、彼女と同じように強いストレスに晒されているのではないかと懸念する。

「アメリカにとって、彼女は必要な人間なのだ」

それがどんな形であれ。

腕の中で眠る彼女を穏やかにシュリ・シャンカルは見つめた。

それでも、わずかな時間を、安らかに眠ってもらいたいと思うのは、シュリ・シャンカルのわがままだっただろう。

「わたしだってそれくらい国際事情はわかります」

痛ましく目を伏せたシュリ・シャンカルは、彼女の身を案じた。

彼女の心が壊れていく。

戦いの中に身を投じて、犯罪者であると蔑まれ、異端であると貶められる。

彼女の評価はつねにそうだった。

誰も、彼女の心の孤独を知らない。

だからアリッサはつけ込まれる。

「人を信用することもできない子供にしたのは、我ら大人なのかもしれないね」

彼女の心の平穏を奪った。

泣くことすらできずに立ち尽くすしかない彼女を誰も受け止めてやれない。

「…わたしは、せめて彼女がインドにいるときくらいはなににも心配せずに眠ってくれればと思うのです」

彼女の心に安らぎは決してこない。

哀れな子供。

「…アリッサを、お願いします」

ジョージは深く高僧に頭を下げた。

彼女の心を守ってやれるのは自分ではない。

それがジョージの心を重くした。

「大丈夫ですよ。彼女は昔からよくインドに来ています。心配はいりません」

帰りたくなったら勝手に帰りますよ。

朗らかに笑うシュリ・シャンカルに、ジョージは踵をかえした。今、彼女の隣にいてもなにもしてやることができない。

そうだ。

彼女は帰りたくなれば勝手にアメリカに帰ってくる。

わかっていた。

「ん…」

シュリ・シャンカルの肩にもたれて眠る少女の唇から声が漏れた。小さな子供。

誰にも愛されることを知らずに育った異端児。

そんな彼女の横顔に、ジョージは手を伸ばした。

シュシュを外して側頭部に結ばれたお団子をふたつほどいてやった。

そうして、彼はシュリ・シャンカルのそばから立ち去った。

そんな彼の後ろ姿に、高僧の老人は眉を下げた。

「君を心配してくれる人はいるんじゃないか…」

ひとりごちた彼は、屋敷に向かって歩きだした。

客間に直行した彼は、彼女をベッドに横たえて布団をかけてやると空調システムのスイッチをいれた。

愛情を注いでもらったとして、彼女はそれを受け入れられない。

そういったものを受け入れるほど発達した精神をもっていない。

感情の嵐の中で、彼女は翻弄されて、受け入れられずに破綻していくのだ。

「…ゆっくりしていきなさい、ニーシャ」

部屋の明かりを消して、客間を出たシュリ・シャンカルはそうして息をついた。

外見も、精神も幼いまま。

彼女の心は発達しない。

かつてのままの純粹さで、世間の汚染の前に晒されるのだ。それがどれほどの歪みを生むのか。

「：シャンカル様、ニーシャは？」

青年の声に、シュリ・シャンカルは顔を上げた。

「客間で眠っている」

「そうですか、迎えの人がきてたから帰ったのかと心配で…」

サンディープの言葉にシュリ・シャンカルが苦笑した。

青年はそっと客間の扉を開いて、室内を覗き込んだ。

ベッドで眠る小さな少女。

ブロンドの巻き毛が枕に散っているのを見て、彼は安堵のため息を吐き出した。

「ニーシャは、いつも疲れていて、思い詰めた顔してたけど…」
今回はひどかった。

シュリ・シャンカルから連絡を受けて駆けつけた、屋敷にいた彼女は亡霊のように椅子に座って揺られていたこと。

そんな彼女を見て、サンディープはなにも言えなかった。

その強さに憧れた存在がそれほどまでに打ちのめされていたことを。

「…ニーシャの心は、我々よりもずっと脆くはかない。おまえもそれを理解してあげなさい」

シュリ・シャンカルは青年に告げると彼を促して歩きだした。

閉ざされた客間の扉。

彼女を守る唯一の空間。

サンディープは誰もいない廊下を振り返った。

サンディープはナイフで木の枝を削りながら庭を見つめていた。

シュリ・シャンカルの屋敷を訪れて以来、常にアリッサがいる椅子は今は主人がいない。

手編みのレースのショールと柔らかなクッションが二つが無造作におかれていた。

「…ニーシャ」

彼女が眠っているのでは、組み手の相手もない。

拗ねた子供のように床に座り込んで、窓の外を見つめている。

「ニーシャが起きないとつまらないかね？」

「…寝てるあの子を起こすほど命知らずじゃありません」

ため息混じりの彼の言葉に、シュリ・シャンカルは苦笑した。

青年は賢い。

自分の身の置き場くらいは理解している。

そして、どんなに弱っていても彼女は彼よりも格上だと言うことを。

「あの子みたいな裏社会はめったにいません」

彼女は、カリスマだ。

犯罪者の中でも誰の憧憬も集め、そして恐れられる。

それが、火の鳥とも、マジックボムとも呼ばれる彼女の存在。

サンディープも、他の者と同じように彼女に惹かれた者の一人だ。

強く、強く惹かれた…。

「…俺も、彼女を追い詰めるんでしょうか。あの男みたいに…」

木の枝を黙々と削りながらつぶやいた彼は、切なげに目を伏せた。

「もしも、俺がニーシャを追い詰めてしまうなら…」

身を退こう…。

そうつぶやきかけたサンディープの言葉を、シュリ・シャンカルは遮った。

「大丈夫」

立派に成長したかつての青年に、老人は笑った。

「あの子にとって、おまえを含めて、インドという場所は特別だ」
特別なのだ。

だから、彼女はどのような心傷を負うと、そこを訪れるのだ。

シュリ・シャンカルの元に。

「大丈夫だ：」

彼女は脆く儂い、しかし、それ故にタフだ。

相反しているようで、それらは彼女の中に同居している。

「ただし、わたしの屋敷で夜這いするのは遠慮してくれ」

なにげないシュリ・シャンカルの爆弾発言に、サンディープはぎくりと肩を揺らした。

「：すみません：」

「いやいや、若い者は元気があったほうがいい」

相変わず、底の見えない笑顔で彼は笑った。

そうしてインドの夜は更けていく。

静かに、穏やかに時間を刻んで。

シュリ・シャンカルが、彼女をアメリカに帰したがらなかったことには理由があった。

アリッサに笑顔らしいものが戻り、動きの切れも戻ったがそれだけで彼女の精神的な安定が取り戻せたわけではないと言うことを知っていたからだ。

だから、彼はアリッサをジョージと共にアメリカに帰すことを決めた。

彼女を心配していればこそである。

ジョージも同様に彼女を心配していたのだろうが、その心配とシュリ・シャンカルの心配では質が違った。

シュリ・シャンカルから見れば彼などまだまだ人生のひよっこで、不安定になった未発達達の心を受け入れることなどできないとわかっていただけだ。そんなことができるのは一部の宗教家か、もしくは心理学者の一部くらいだ。

「ニーシャの部屋の前にいるだけならいいですか？」

「夜這いしなければなんでもかまわんよ」

サンディープが、シュリ・シャンカルの了承を求めれば、彼はあっさりと許可を出す。

「：しませんよ」

彼女の部屋の前で彼はナイフの刃を見つめていた。
光を跳ね返すナイフ。

廊下に座り込んで時間がたつのをぼんやりと追っていた。

彼女が苦しんでいるというのに、自分にはなにもできないのだ。
それが口惜しい。

アリッサが苦しんでいる。

それがわかるのに、なにもできない。

夜半も過ぎた頃だった。

アリッサの眠る客間からすすり泣くような声が響いた。サンディ
ープは耳をすます。

客間の扉を開くべきか迷った。

「：ニーシャ？」

わずかに扉を開いて彼は彼女を呼ぶ。

天涯のついたベッドの中で、彼女は起き上がって震えていた。
心に負った傷は、そう簡単に癒えはしない。

「ニーシャ：」

シフォンのドレスを着た少女は頭髪を乱れさせて顔を上げる。
薄暗い部屋の中で目が赤く染まっているのが見えた。

「：なにも見えない」

ぽつりとつぶやいた。

どうすればいいのかわからない。

自分がなんなのかわからない。

呆然と。

「：ニーシャ」

とっさに、サンディープは少女に駆け寄った。

ブーツも脱がずにベッドに上がる。

「：大丈夫だよ」

抱きしめて彼は少女の黄金の頭を強くかき抱いた。
彼女の強さに憧れた。

けれども、気がついた。

腕の中の体は細く、華奢で儂い。

その細い肢体でどれだけの重荷を背負ってきたのか。

サンディープの胸にしがみついた彼女はそうして目を閉じた。

震える肩を抱きしめたまま、サンディープは上掛けをかけると目を閉じる。

アリッサの心の傷は消えない。

おそらく一生。

マジックボムと恐れられる殺人鬼は、そうして血の涙を流し続ける。

シュリ・シャンカルがアリッサを起こしに客間に入ると、カーゴパンツにノースリーブのシャツという格好の青年がシフォンのドレスを着た少女を抱きしめて眠っていた。

彼女は、強く彼にしがみついて眠っていた。

頬には涙のあとがあった。

それを見たシュリ・シャンカルは、アリッサをアメリカに帰さなくて良かったと思った。

眠りから醒めて、泣いているような状態では帰すに帰せない。

彼女が帰るときは、戦いに再び身を投じるときだ。

「：ゆっくり眠りなさい」

天涯を静かにおろしてレースのカーテンでベッドを覆う。

そうしてシュリ・シャンカルは静かに客間を出た。

歌を歌う彼女はまるで人殺しのものには見えない。

木の幹に寄りかかった彼女は空を見上げている。

おしゃまなアリスのような、そんな彼女。

「ニーシャ」

呼びかけたサンディープに、彼女は目を上げた。

金色の巻き毛と水色の瞳。

広い庭先で彼女は首の後ろでリボンを結んだワンピースを着てい

た。

「：サンディープ」

近づこうとした彼に、不意に彼女の声が飛んだ。

「：来てはだめよ」

それはだめだ。

彼女は告げる。

その落差はなんだと言うのだろう。

弱く儂いと思えば、逆に鋭く恐ろしいほど冷静。

彼女の中に存在するギャップ。

「：来てはいけない」

そう告げて、彼女は自分の唇に人差し指で触れる。

「ここは、まともな人間の来るべき場所じゃない」

彼女は言った。

まともではない。

まともな世界ではない。

彼女が選んだのはそういう世界だ。

「：わたしのいる世界に来てはいけない」

少年に向かって彼女は言う。

「：どうして？」

問いかけた彼に、少女の姿をしたその女はひっそりと笑った。

「それがわからないほど愚かではないはずよ」

冷たく響く声に、少年は硬直した。

彼女は特殊だ。

再び先ほどと同じ歌を歌い始めた彼女に見とれた。

金髪の、彼とは違う世界に生きる少女。

恋い焦がれて、手を伸ばした彼を彼女は認めなかった。

「：だから、俺は、自力で這い上がったんだ：」

サンディープは思い出して、独白した。

彼女の世界を知りたかった。

どれほど傷ついて、どれほど過酷な世界にいたのかを知りたかつ

た。

「君を知りたかった。君の痛みを知りたかった……」

彼女の世界を知るために、裏社会へと足を踏み入れたことを、サンディープは後悔していない。

親からも、兄弟からも恥知らずと罵られたが、それでも。

それでも尚、彼は彼女の世界を感じたかったのだ。

「……わたしの生きる世界は、そんなに生やさしいものじゃない」

かつて彼女が言った言葉を覚えている。

死ぬか、生きるか。

まだサンディープが子供だった頃から、シュリ・シャンカルの家敷の庭は変わらない。

変わったと言えば、庭の木々が少しだけ高くなったことくらいだ。

思い出して、彼は小首をかしげた。

庭に続くリビングのガラス戸の向こうから歌声が聞こえてきた。

昔と何ら変わらない彼女の高い歌声だ。

ベトナム戦争の頃に反戦歌として有名になったフォークソングだ。

サンディープが驚くほど、アリッサは多くのことを知っている。

「パフ……か」

彼女の歌だ。

まるで彼女の存在のようだ。

歌に出てくる魔法の竜のような、時間に取り残された少女。

彼女はなぜその歌を歌うのだろう。

そんなことを思う。

少女の歌声。

不意に嗚咽が混じった。

永遠の命を持つ無敵のドラゴン、パフ。

ドラゴンの悲しみを誰も知らない。

「……ニーシャ？」

そっとリビングから庭を覗くと、彼女は庭木に寄りかかったまま

でうつむいていた。

それだけでは彼女が泣いているとは思えない。

彼女にとって、全ての人間が「ジャッキー・ペーパー」なのだ。サンディープがそつと近寄ると、突然彼女が顔を上げた。

大きな目を瞬かせる。

「：っ！」

彼女の眼光に青年は息を飲んだ。

ざっと音を立てて彼女の周りで熱風が渦を巻き上げた。違う。

彼女はこんなものではない。

彼女はもつと恐ろしい。

おそらく無意識だったのだろう。

少女の巻き毛が舞い上がる。

美しい少女。

「なんだ、サンディープか：」

つぶやいた彼女は首をすくめてみせた。

「泣いてみたいだから：」

彼の言葉に、アリッサはわずかに驚いた顔をしたが、苦笑してからサンディープを見上げると片手を伸ばした。

「わたしが泣くと、あんたが悲しむの？」

少女が問いかけた。

差し伸べられた手首を、サンディープがつかんだ。

腰を抱き寄せて細い体を抱きしめる。

「：俺は約束する」

彼女の耳元にささやきかけた。

「俺は、あんたとの約束を守る。絶対に」

「：そうよ」

約束を守れば良いの。

アリッサは告げた。

彼と彼女の間に交わされた約束。

「シャンカルを守って…」

つぶやいて、彼女は不意に彼から体を離れた。
連続性のある銃撃音。

ドンっと、彼女の周りで空間が歪んだ。

「…わたしは負けない」

なにからも。

何者にも。

負けたりはしない。

「…強さが正義なのよ」

力なき正義など、正義ではない。

それをおそらく、シュリ・シャンカルは否定するかも知れない。

「力のない正義なんて、なにもできないのよ…」

彼女の開いた手が空間を引きさく。

ワンピースのスカートをたなびかせて走り出した彼女の足には、

黒いブーツがはかれていた。

無敵の火の鳥。

銃を構える男たちが屋敷を包囲している。

彼女は塀に跳び上がると、彼らを見下ろした。

暑さを伴った風にワンピースのスカートがたなびく。小さな体の

傭兵に一斉に銃口が向けられた。

彼女はそれをひどく冷静に見つめた。

自分の首につけられた首輪の存在など気にも掛けていない。

「…わたしを敵に回すことがどれだけ恐ろしいことか、わかってないみたいね」

冷ややかに告げる。

かつて、アメリカ政府すら恐れた殺人犯。

身軽に塀から飛び降りた彼女の姿は、しかし、愛らしい子供でしかなくて、銃口を向けた男たちは困惑した。

ターゲットは、ブロンドの巻き毛の少女。

年齢は六歳か七歳ほどの白人。

ターゲットとなる相手が大男であれば、殺す覚悟もできただろう。しかし、示されたターゲットは小さな子供。

白人のフランス人形にも似た愛らしい娘なのだ。

どうしてそんな純粹とも言えるだろう子供を殺さなければならぬのか。

誰だって、子供に武器を向けるのはためらうだろう。

だからこそ彼らは動揺する。

目の前にいる子供を本当に殺して良いのだろうか。

さざめくようなざわめきに、アリッサは唇をつり上げた。

「：殺すつもりならもつと覚悟を決めておきなさい」

殺す相手をよく知っておけ。

彼女は告げる。

「：うっとうしいのよね」

独白すると、彼女は指先で首輪に触れる。

かすかに眉をひそめた彼女は長い睫毛を伏せた。

「：こんなもののせいで、思うように動けなかったなんて思うと」

彼女の指先で金属製の首輪が発火した。

軋んだ歯車は補正され、そうして一気に燃え上がる。

パイロキネシスなどという生やさしいものではない。

それはまさに人体発火。

「さあ、遊びましょう…」

ゆらゆらと陽炎が揺らめく。アリッサは手を広げた。

ほほえんで。

空を仰いだ彼女は、そうしてそつと目を閉じる。

同時に立て続けに爆音が響いた。

ばちりと音を立てて彼女の首筋から金属製の首輪が外れた。

髪の毛の先に走るのはプラズマだ。

「わたしは負けないし、シヤンカルに手を出すのも許さない」
爆音と悲鳴。

男たちにはすぐにわかった。

彼女はどうかしたことか正確に包囲する男たちの場所を爆発させたのだ。

どうしようと、全てを溶かし、流れるマグマのように。そうして彼らを飲み込む。

「：限界を、超えたか」

その様を屋敷の四階から見つめるシュリ・シャンカルは、ため息をついた。

彼女は殺人鬼だ。

強さをアイデンティティだと言い放つ彼女。

炎を操る彼女は、自分の頭の中がひどくクリアであることに気がついていた。

まるで、天上から見下ろすかのような感覚だ。

人の気配も、意識も彼女の内側に流れ込んでくる。

鮮明なそれに、彼女は空に両手を広げた。

自分に対する敵意を拾えば、余分なものを焼かずにすむことが、今の彼女にはわかっていた。

精神をとがらせなくてもわかる。

誰かの私兵だろうということはわかる。

しかし、恨みなど買いきりすぎてもはや誰から恨みを買っているのか、アリッサにはわからない。だがどんなに屈強な男たちでも、あまりにも異常な強さを見せつける小さな異端の子供の姿に、腰を抜かして後ずさる。

次々と燃えていく人間の松明。

中には恐ろしさのあまりに失禁する者もいた。

それほどまで彼女の存在は恐ろしさを伴う。

「わたしは、火の鳥」

ぽつりとつぶやいた瞬間。

不意に、彼女が倒れた。

アスファルトに倒れ込んだ彼女は腹から血を流していた。

「…あ」

銃声は聞こえなかった。

そうして、二度目の衝撃を胸に感じて「無敵のドラゴン」は目を閉じた。

4 (後書き)

R18バージョンはこちらです。内容が過激なほうを移動しました。
http://novel18.syosetu.com/n74
27w/

第七章 マステマ 1

世界は、誰のために回っているのか。
そもそも世界とは「何」であるのか。

「…世界ってなに？」

彼女が彼に問いかけた。

世界とは、なにか。

それはとても曖昧な表現だ。

彼女にとって、「世界」というものは言葉上の存在でしかない。

「世界って、なーに？ ジョージ」

ソファに転がって本を読んでいたジョージに少女が言った。

金色の巻き毛を揺らして、彼の顔を覗き込んだ水色の瞳。白皙の肌に、金色の睫毛がまたたいている。

レースがたくさんついたワンピースのようなネグリジェを着た少女は、彼を見つめる。

白いドレスにも似た寝衣はまるで貴族の子供のようだ。

「…アメリカ人で、デントーってやつ大好きよね」

王族とか、貴族とか！

それも彼女が言った台詞だ。

「…アメリカには歴史がないからな」

苦笑したジョージに、少女は首をかしげた。

「教えてよ、世界ってなに？」

彼女の頭脳に刻まれた膨大な知識。

彼女は規格外だ。

「…世界っていうのは」

説明しようとして、彼は言葉を飲み込んだ。

その言葉の意味を、ジョージすら理解などしていなかったのだから。

「世界のなかが大切なの？」

どうして人は人を殺してはいけないの？

彼女は矢継ぎ早に問いかけた。

膨大な知識と、欠落した感情。

真面目な顔をして問いかける彼女に、ジョージは言葉を詰まらせる。

彼女は理解などしていない。

自分の持つ知識を、「自分が生きるため」に活用しているだけだ。

「…君は、俺を殺そうとは思わないんだな」

「だって」

少女の腰を抱き寄せて、彼は金色の髪にキスをする。

「…殺す理由がないじゃない」

それは殺人が悪徳だとわかって言っているわけではない。彼女にとってまさしく言葉通り。

彼女には彼を殺す理由がないのである。

「ジョージはわたしに危害を加えない」

だから殺す必要がない。

ひどく理由はシンプルだ。

「それとも、殺してほしいの？」

「…いや」

口ごもった。

確かに、彼女に殺されたいと思っているわけではない。

しかし、彼女が人殺しに至るいきさつがわからない。

「君は、なぜ世界中を回ってまで殺し続けるんだ？」

尋ねられて、彼女は首をかしげた。

大きな水色の瞳を宝石のようにまたたかせて。

「わたしには、殺す理由があるからよ」

殺さなければならぬ。

そうしなければいけない。

まるで念じるように彼女は言う。

「…わたしは、殺さないといけないのよ」

感情を抑えた瞳が彼を見つめていた。

まだ、その頃、ジョージは彼女に庇護愛しか感じていなかった。だからこそ、それ以上の心配をしたことがなかった。

「しかし、それでは君が大きくなったときに困るんじゃないか？」
人殺しとして捕らえられれば、彼女は監獄にはいることになる。

「：なるべく早くやめるべきだ」

アメリカ合衆国の警察関係者として彼が説得すれば、小さな幼い少女でしかない彼女は唇の端でかすかに笑った。

「説教なんてたくさんよ」

感情が欠落した瞳。

善も悪も、それらの概念は彼女の中にはない。

そして、時を経て、彼女は戦争屋になった。

姿はかつてから変わらず、声の高さも同じ、服のサイズも変わらない。

「：アリサ」

ジョージがぼつりとつぶやいた。

なぜか突然、昔の記憶が蘇った。

まだ彼女に恋愛感情を抱いてなかった頃の記憶。

常に危険な事件と、そして危険な任務の中に晒されてきた彼女。

今はアリッサ・ノースウッドと名乗る。

不意に彼の自宅、暖炉の上にあるアリッサの写真立てが倒れた。

まるで風でも受けたように、ぱたりと音をたてる。

写真が伏せられるように倒れたそれに、ジョージはなぜかぞつとした。

背筋に寒気が走った。

凍り付いたまま、倒れた写真立てを見つめる。

なにかが恐ろしいような気がして、彼は暖炉に近寄れない。

風もないのに倒れた写真立てが、なにか不吉な事態を告げているように彼は硬直する。

＊

「わたしを誰かと比べないで…」

「わたしと一緒にしないで」

「わたしとマジックボムと一緒になんてしないで」

彼女はつぶやく。

黒い長い髪、象牙色の肌のアジア系アメリカ人だ。

「…いつもいつもわたしはマジックボムと比べられる」

機嫌の悪そうなキャシーの声に、ピアスは苦笑した。

暖かなニットのワンピースを着た彼女は首にラビットファーの襟飾りをつけている。

「似ているからだろ？」

そう言われて、キャシーはさらに眉間に刻まれたしわを深くする。

「女の子がなんて顔してんだ」

「…あんたはいつも説教臭いし」

むつつりと、唇をへの字に曲げた。

「年上に向かってあんたはないだろう」

「あんたなんてあんたで充分よ！」

通り名をカーリーと呼ばれる少女。

「マジックボムも、女の子だそうじゃないか」

「…そうよ、あっちは金髪碧眼。六歳くらいじゃない？　わたしと

は全然まったく似ても似つかないわ！」

言い放った彼女に、ピアスは首をかしげた。

まるで知っているかのような口ぶりだ。

「…知ってるのか？」

「この間、ワシントンで見たわ」

「ほう」

「…あれで殺人犯だって言うんだから、誰だっただまされてるでしょうね」

昼食のハンバーガーにかじりつく彼女はかすかに目を細めた。
まるで思いを馳せるように。

「…会った、じゃなくてか？」

「あれは、体力ゼロね。小さすぎる」

ピアスの言葉に應えるわけでもなくつぶやいた彼女はコーラのは
いった紙コップに手を伸ばした。

「キャシーだってそう変わらないだろう」

「はあ？ あんたの目どこについてんのよ！ わたしのどこが小学
校上がったばかりの幼稚園児に見えるっていうの！」

怒鳴りつける彼女に、ピアスは思わず耳を押さえた。

「耳元で怒鳴らんでくれないか」

彼にとってみれば小学校上がりたても、中学校上がりたても大し
て変わらないのだが、当人にしてみれば大問題だったようだ。

憤慨して、眉をつり上げている。

「…ともかく、わたしはマジックボムと比べられるのは迷惑。大迷
惑なのよ！」

言い放つ。

確かに、本人からしてみれば小学生上がったばかりの幼稚園児と
一緒にされるのは不本意なのだろうが、いかんせん東洋系の人間は
西洋系から比べるとかなり幼く見えるため、ピアスの素直な評価も
やむを得なかっただろう。

「…まあ、たしかに六歳かそこいらじゃ体力はないだろうな」

一般的なその年頃の少女を思い浮かべる。

手足は細く、まるでゴムまりのようなしなやかな肢体。

「でもあれは成長すれば相当美人になるタイプだったわね」

「おまえは、人の顔になんて興味なさそうだが」

「そうね、顔なんて他人と識別できればそれでいいものね」

冷ややかに告げる彼女は、皮肉げにほほえむ。

殺戮の女神の名前で呼ばれる彼女。

キャシーと自称する少女は、典型的なアメリカの貧民街育ちだが、

その正体と言え、どこか謎めいていた。

彼女は姿こそ愛らしいが、マジックボム同様アメリカ国内でも群を抜いた殺人鬼の一人で、犯罪史上に名前を残す凶悪犯であった。

マジックボムの犯行がきわめて自己顕示欲が強い事実に対して、カーリーと呼ばれる殺人犯の犯行は動機にどこか稚拙な面が多く垣間見られた。

それゆえに、カーリーの犯行はいわゆる無秩序型に分類されることが多いが、彼女が殺し屋、もしくは傭兵として犯罪行為に及ぶときは、無秩序型のそれとは言い難いところを持ち合わせている。

「わたしのこと、マリー・ベルだと思ってる？」

問いかける。

彼女が。

「スコッツウッドの事件か……」

言われて、彼は目を伏せた。

遠い昔、イギリスで起きた事件だ。

「……君はマリー・ベルじゃないだろう？」

尋ねる。

「そうね、邪魔する奴は面倒くさいけど、ガキなんて殺したってつまらないし」

いけしゃあしゃあと告げた彼女に、ピアスは目を細めた。

彼女の殺人には動機がある。

キャシーはそれを超えてまで人殺しはしない。

キャシーと自称する少女、カーリーと呼ばれる殺人犯は時としてひどく冷静に犯行に及ぶ。

天使のように愛らしい彼女は、無邪気に殺人に手を染めた。

コントロールしきれない幼稚な感情にとらわれた殺人を行う反面、彼女は冷静に、そして計画的に殺人を犯す。

それが、カーリー。

カーリーにしろ、マジックボムにしろ、彼らの犯行には、成人した人間が犯すような殺人の特徴が見られなかった。

それゆえに、結果的に捜査陣を混乱させることになるのだが、
当人たちにとってはどうでも良いことだったのだろう。

彼らの犯行には、性的な衝動が存在しない。

時として犯罪分析官のプロファイリングを混乱させ、事件は泥濘
に潜り込む。

そして、彼らが犯行を重ね、時間の経過と共にマジックボムとカ
ーリーの犯罪はその性質を見抜くことが容易とされる意見が多く出
るようになった。

彼らはアメリカ国内で世間一般的に考えられる犯人たちとは全く
違う殺人の癖を持っていた。

彼女らの犯行は、残虐だが効率が良く、そして冷徹だ。

相手を苦しめるために殺していたわけではない。

いわゆる快樂殺人の類を全く連想させることがなかったのだ。

彼らの殺人の手際の良さは超一流だった。

マジックボムもカーリーも自分自身がオルガスムスを感じるため
に殺すのではない。

オルガスムスを感じるために結果的に殺害するという行為に至っ
たわけではなく。

彼女らは「人の命を奪うために殺して」いるのだ。

人の命を奪うために殺す。

それが良いか悪いか、という問題はとにかく、彼女らは殺すこと
が快樂なのではない。

それはピアスにはわかっていた。

一般的に、女性の大量殺人者はまれであると言われていたが、こ
れもふたりの殺人鬼にはあてはまらない。米国犯罪史において最悪
最凶の殺人鬼と呼ばれる理由はこれらの「分析にはあてはまらない
性質」と「規格外のポテンシャル」による。

彼女らはアメリカ当局を恐怖のどん底に陥れたのだ。

そうして、凶悪犯罪者たちは今日も逮捕されることなく暮らし
ている。

警察当局を、軍部を返り討ちにする強さを彼らは持っていた。

この二人の少女殺人鬼にはひとつの共通点があった。

突然ぴたりと殺人をやめたり、しばらくたってから再び殺し始めるという脈絡のなさがある。

なにかが彼女らを突き動かす。

そのなにかが、彼女らを追う者たちにはわからないのだ。もっともわかったところで、普通の人間には彼らを止めることすらできないのだ。

それをピアスはわかっていた。

彼らの強さ故に。

まさしく、鬼神のごとく。

黒髪の少女は、ピアスを見つめた。

「…なんだい？」

「べっつに」

拗ねたように目を背ける。

「とにかく、大嫌いだわ。マジックボムなんて」

「君より強いからか？」

告げられて、黒髪の少女は肩をいからせた。

「大嫌いよ…」

そう言ってソファに沈み込んだ。

そうだ。

マジックボムは強い。

それをキャシーは認めている。

しかし、彼女がマジックボムを嫌うのはそういった理由からではないのだ。

小さなフランス人形のような少女。

自分よりもずっと愛らしく、強いマジックボム。

「死天使と、同じほど強い人なんて、いいいいわけがない」

暗く彼女は言い放つ。

マジックボムと呼ばれるアリッサがそうであるように、キャシー

もまた裏社会において死天使の信奉者のひとりだった。

「許されない…」

目を落とした彼女がつぶやいた。

「だめなのよ」

綾瀬臣はカリスマ。

彼女にはどういうわけか、人を引きつけずにはいられない魅力があった。

キャシー自身にとって、綾瀬臣にかなわないこともマジックボムにかなわないことも興味の無い事柄のひとつでしかない。

彼女にとって問題なのは、マジックボムがキャシーよりも格上であるということではない。マジックボムと死天使が同格であるということが問題なのだ。

死天使は、至高でなければならぬ。

それがキャシーにとって最も大切なことだった。

彼女は世界でたったひとりだ。

世界に生まれた天才。

ひろった新聞で、キャシーは綾瀬臣の存在を知った。

もうどれほど前になるだろうか。

新聞に載った二人の日本人の少女。

その片やに目が釘付けになった。

「綾瀬家のご令嬢がひとりで少女を救出！」

大きな見出しに飾られた、黒髪の少女。

疲れ切った一人の少女に肩を貸しながら歩く綾瀬臣の姿に目が離せなかった。

その日の街頭テレビでもそのニュースは終始流されていた。

インタビュアのマイクを向けられながらほとんど語らない彼女。

意志の強い眼差しの、まさに美少女。

まるで雷に打たれたような衝撃を感じたことを覚えている。

「…なに？ これ…」

新聞を持つキャシーの手が震えた。

写真から目が離せなかった。

その崇高な行為のためではない。

そんなことはない。

自分の生命すら危ないだろうに、単独で少女がマフィアに乗り込むなど無茶すぎる。しかし、彼女は躊躇しなかった。

新聞には本当のことなど書いてはいない。だが、キャシーは正確にその意味することを読み解いた。

彼女は自分自身の危険すら顧みずに少女を助けにいったのだ。

どうしてそんなことができるのか。

どうすればそんなことができるのか。

キャシーには理解ができなかった。

人道上、などという言葉で片付けられる行為ではない。人道的にどれほど正しかったとしても、自分の身を危険にさらしてまで人質にされた人間を助けにいく者がどれほどいるだろう。

いや、ほとんどいないだろう。

誰だって自分の命は惜しいものだ。

だからこそ、彼女の行為に衝撃を受けた。

当時、彼女はまだ「死天使」とは呼ばれていなかった。

綾瀬臣が死天使と呼ばれるようになるのはその後だ。

そんな疲弊した少女に肩を貸して歩く彼女に駆け寄る二人の男。

黒髪の日本人の男と、金髪の男。

どちらも素晴らしく体格がよく、双方が戦闘の達人であることはニュースの映像からも見て取れた。

日本人の男は助け出された少女を抱き上げ、もうひとりの白人の男は綾瀬臣を守るように抱き留める。

報道の目に触れないようになにか長い物を隠したようだったが、そんなことにキャシーは興味がなかった。

そしてその映像は、かくて綾瀬家によって隠蔽される。

写真も、動画も全てが隠された。

今ではその事件を正確に記憶している人間はほとんどいないだろう。

う。

一般人ではその詳細を聞かなければわからないかもしれない。それをキャシーは覚えていた。

鮮明な映像として。

魂が歓喜する。

出会うべくして出会ったのだと。

「わたしは、あの子が好きよ…」

大きな黒い瞳を瞬かせた彼女は写真を見つめてにっこりと笑った。大切に、大切に額にいれてかざった大切な写真。

「大好き…」

直感だった。

絶対に、自分は彼女を好きになる。

そして彼女のために生きると。

「…大好きよ」

胸の震えを、キャシーは覚えている。

あれから何年たったか。

そうして綾瀬臣は、それ以来「死天使」と呼ばれそして絶世の美女に成長した。

しなやかな肢体と耳に心地の良い声色。

切れ長の目は思慮深く睫毛が長い。

モデルかハリウッドの女優でもあるかのような、決して豊満ではないが美しすぎる肉体美はしなやかな獣のようだ。

八頭身半はあるだろう文句のないスタイルに、美女の条件たる長い手足を持つ。

日本人どころか、アジア人離れた美しいその人は優雅に世界の頂点に立った。

あろうことか、そんなキャシーが大好きな死天使と、マジックボムと呼ばれる毛唐が同格なのだ。

そんなこと許されて良いはずがない。

「あんなユーロトラッシュ！」

正確に言えば、マジックボムはユーロトラッシュなどではないが、典型的なアーリア人の風貌の彼女であればそのようにとられたところで仕方なかっただろう。

もつとも、そんなことを本人の目の前で言えば半殺しにされかねない上、逆にチーノと嫌みを言われるだけなのだがそんなことはキャシーの知ったことではない。

「：こらこら、知らない相手をユーロトラッシュ呼ばわりはないだろう」

そもそも、外見が典型的なアーリア人のアメリカ国民など山ほど居る。

元来、アメリカ合衆国は移民の国だ。

「：だって、ピアス」

唇をとがらせる少女の頭をぽんぽんと軽くたたいたピアスに、彼女はなおも言いつのろうとする。

そんなところは大変かわいらしいのだが：。

大変かわいらしいのだが、残念なことに彼女は善良な小市民ではなく殺人鬼であった。

「ピアス、だってずるいと思わない？　世界で一番死天使がきれいなのに、死天使とマジックボムが同格だなんてありえないわよ。絶対！」

理論が破綻しているが、そんなことはキャシーにはどうでもいいことである。

彼女にとって、綾瀬臣が何よりも「一番」でなければならぬのだ。

同格の存在など許されない。

いいはずがない。

親指を爪をかんだキャシーはそうして眉をひそめた。

「ピアスだって知ってるでしょ？　死天使が一番なの。それ以外認めないわ」

認めない。

少女はそつと身を乗り出して、ピアスを見つめた。
唇が触れそうになるほど近い距離に、ピアスは焦る。

「人目があるところでそういうのはやめてくれ。俺がクビになる」
ため息をつきながら、キャシーを押しつけた彼は彼女の鼻先にコーラのはいった紙コップを突きつけた。

彼はまがりなりにも警察官で、そして今ふたりが食事しているのは警察署にほど近いハンバーガーショップだ。

アメリカは小児性愛者には厳しい国である。

ピアスにその気がなくとも悪意のこもった通報などいくらでもあるのが現状だ。

「なによ！ つまんない男ね！」

吐き捨てた彼女の言葉は、まるで成人した女のものだが、十代そこそこの少女が告げた台詞にしては少々重々しかった。

「認めるよ、綾瀬臣は素敵な人だ」

誰もが目を背けることができない。

無視などできない。

良くも悪くも、彼女は人の目を引きつける。

「でしょ？」

彼女は素敵なのよ。

ニコニコと機嫌がよさそうに彼女は告げる。

「ねえ、ピアス。ピアスはあのとき、死天使はなにをしたかったんだと思う？」

あのとき。

曖昧な彼女の言葉。

キャシーは黒い大理石のような瞳に光をちらつかせた。

誰よりも強く、誰よりも素敵な綾瀬臣。

彼女が心から慕う女。

「俺は捜査に加わってたわけじゃない。新聞以上の情報を知るわけないだろう？」

告げた彼に、キャシーは喉の奥でくつくつと笑った。

「そうじゃないの。情報なんて意味がないの。そんなものいくらでも書き換えられるのよ」

大切なことはたった一つ。

キャシーが笑う。

「あの子がなにをしたかったか考えればいいだけなのよ」

駆け寄った男たちが二人。

どちらも同様に戦闘のプロだ。

身のこなしをみればそんなことは素人でもわかる、とキャシーは思っている。

だが、その身のこなしだけでどれだけの人間が彼らを戦闘のプロフェッショナルだと判断できただろう。

それは、キャシーの戦闘に対する異常な嗅覚が勘付かせたにすぎないのだが、彼女自身はそれに気がついていない。

「あの子は、彼女を助けたかっただけなの。死なせたくなかっただけ。それだけなのよ…」

にっこりと、キャシーが笑った。

「あの子はね、普通じゃないの」

凡人になど理解できない。

「ただ、助けたくてそれだけの思いでマフィアを皆殺しにしたの」
歌うように言った。

まるで当たり前のように。

「それでいいのよ…。殺したければ殺せばいいの。なににも捕らわれず、なににも縛られず。彼女の魂は自由なのよ」

物騒なことをなんでもないことのように言って笑う彼女は、ピアスを見つめた。

可憐な彼女。

しかしキャシーの存在は可憐などと呼べるそれではない。

「キャシー…」

「素敵じゃない？」

彼女の存在が素敵だと、キャシーは言う。

人殺しの脳内など、ピアスには覗けないが、彼は彼女が今でも真
つ当な人生を歩むことを望んでいる。

希望を捨ててはいない。

「君は、どうしてそんなに人を殺したいんだ？」

飲み込まれそうになる。

「それが存在意義だからよ」

ピアスに答えてキャシーが言った。

殺人こそが、彼女の存在意義。

それをなくせば自分は自分でなくなる。

だからこそ、彼女は殺し続ける。

「鳥が歌を歌うのと一緒よ」

彼女は完全無欠の笑顔でそう言った。

確かに、彼女が殺人鬼でなければまさに天使の笑顔だっただろう
…。

鳥が歌を歌うように、自分は人を殺す。

ただそれだけのことだ。

彼女は告げた。

キャシーとピアスがそんな不毛なやりとりをしている頃、世界は
暗澹たる地へと落ちていこうとしていることなど、誰ひとりしらな
かった。

フロリダに住むキャシーも、日本に住む綾瀬臣も。

誰も、世界の行く末を知らない。

それからしばらくして、裏社会の情報網を駆け巡ったのは、「マ
ジックボム」の訃報だった。

殺されたと。

死んだのだと。

「…はあ？」

キャシーは間の抜けた顔で訃報を耳にした。

「なんでよ？」

死んだという情報に対して「なんで」という反応もおかしなものだったが、彼女にしてみればまさに青天の霹靂であって、マジックボムが死ぬことなど考えられないことだった。

ありえないこと。

「どうもこうもない」

アメリカ合衆国の上層部、とは言ってもごく一部がだが、その情報のおかげで大混乱が引き起こされていた。

そもそも、アリッサ・ノースウッドと呼ばれる少女が死ぬと言うことがどうしてアメリカ政府を大混乱に陥れるのかは警察関係者も司法関係者らも知るところではない。

とにかく彼女が死ぬ、ということはアメリカ政府にとっては大変なことだった。

「…ふうん。政府の犬がねえ」

ぼそりとキャシーはつぶやいた。

「…どういう意味だ？」

キャシーのその言葉に眉間を寄せたのはピアスで、少女にしてみれば彼の反応のほうがよく、ほど意外だったらしい。

「言葉通りよ。あいつ、政府の犬じゃん」

ぱつさりと一刀両断したキャシーは、自宅のベランダで風にあたりながら首をかしげた。

「それは政府に協力していた、という意味か？」

「違うわよ」

言葉通りだ、と彼女は言った。

「…？」

疑問をうまく言葉にできないピアスに。キャシーは笑う。声を上げた。

「違うわ。そのまんま、言葉通りあいつは政府の犬なのよ。表向きは連続殺人鬼であり大量殺人犯。でも、ならアメリカ政府が世界中の国の警察も司法も、法律も刑法も。全部ねじまげたのはなぜ？」
彼女が口元で聡明な微笑をたたえた。

キャシーは単純かと思えば、真逆に思慮深さも垣間見える。

そのギャップにピアスは時折ついていけない。

「あいつはね、政府が飼ってるのよ」

そして彼らは互いに利益を得る。

共犯関係だ。

「だから躍起になってるんでしょ。アメリカが」

その理由は知らない。

しかし、キャシーは気がついた。

アリッサ・ノースウッド。

マジックボムと呼ばれる大量殺人犯は、アメリカが子飼いにしているのだ。

マジックボムが死んだというのに、キャシーは全く嬉しそうでもない。

そもそも嫌っていたのであれば、何らかの反応をしてもおかしくないというのに、キャシーはなにも言わない。

警察関係者や、彼らと同業の人間にとって、マジックボムとカーリーにはそれほど違いがない。

どちらも少女の姿をした異端の殺戮者であるということ。

「アシル！」

手を振った少女にアシルと呼ばれた男は目を細めた。

茶色の瞳をすがめた。

キャリーバッグをひっぱる少女は完全に国外逃亡の姿である。

「電話は？」

「ないわ！」

きっぱりと言い切った彼女に、男は肩を落とした。

なにやら、カーリーと呼ばれる少女に興味を持って以来、引っ張り回されているような気がしないでもない。

「あ、これ、あんたのぶんね」

ぽんつと彼にクレジットカードをつきだした彼女は伸びをした。

「あー、良い天気ね！」

逃げ出すにはちょうど良いわ。

彼女は言いながらサングラスの下から黒い瞳を覗かせて笑う。

「逃げ出すって？」

アシルが問いかけると、少女は肩をすくめた。

「今からあんたの雇い主はわたし。報酬は出すわ」

「…金も使いたい放題か」

「良い条件でしょ」

ニッコリと彼女は笑った。

「…それで、雇われるのはわかったが、どうして国外逃亡だ？」

「んー。マジックボムが死んだでしょ？　ってことはよ。わたしにお鉢が回ってくるってわけでしょ！　そんなのごめんよ」

どこをどうすれば「マジックボムが死んだからカーリーに仕事が回ってくる」ことになるのか、いまいちアシルには理解できないが、彼女は要するにそのためにアメリカの外に一時的に出国しようとしている。

「なによ、あつたま悪そうな顔してるわね」

遠慮もなしにずけずけと発言するキャシーに、アシルは彼女の細い腰を抱き寄せた。

軽い体は簡単にアスファルトから足が離れる。

「だいたい年頃の娘が若い男をおちよくるもんじゃないぜ」

「…できるもんならやってごらん」

ふふんと鼻先で笑った彼女は、近づいたアシルの唇に自分の唇を一瞬だけ重ねた。

恐れを知らない殺戮者。

「ぶっ殺してやる」

きつい黒の瞳が、煌めいた。

キャシーの物騒な台詞は、しかし本気だ。

世界のトップクラスに君臨する殺人鬼のひとり。

「わたしが殺すと言ったら、絶対なのよ」

「たまに殺し損ねるけど？」

「…う」

アシルの鋭い突っ込みに、彼女は言葉を詰まらせる。

そんなどこか子供じみた反応がかわいらしい。

「わたしは、裏社会の二流だから仕方ないでしょ！」

言いながら彼女はアシルの耳たぶにかみついた。

まるで抵抗する子猫のようだ。

しかし、キャシーが裏社会の二流であるならば、誰が一流と呼べるのだろうか。

彼女の殺人屋としての成功率はそれこそ裏社会では上位にあるだろう。だからこそ、彼女への依頼は高額である。

「いててっ！」

「今度くだらないこと言ったら食いちぎるわよ」

そんなことを考えていたアシルに言い放った彼女はそっと体を離して地面に降りた。

傍目には兄と妹がじゃれているようにしか見えないが、いかんせん、男が白人で少女が黄色人種だったため若干悪目立ちした。

「とにかく！ コンゴに向けてレッツゴー！」

彼女は言いながらにこりと笑った。

「なんでコンゴ…」

「面白そうだから！」

彼女は完全無欠の笑顔で告げる。

面白ければなんでもいいらしい。

とは言っても、内線が停戦状態にあるとは言え、危険な国のひとつであることに変わりはない。

「あんた、フランス語話せるっけ？」

「ちよつとだけならね！」

どうしてこう、裏社会トップクラスの殺人者というのは無駄に言葉が堪能なのだろうか。

「英語も通じるわよ？」

「…さよで」

アシルは、終始彼女のペースに巻き込まれながら大きなため息をついた。

「しかしわざわざ世界一治安の悪いところに行かなくてもいいだろうに」

「…別に、治安なんてどこだって似たりよったりでしょ」

それより、絶えず身の危険にさらされることに彼女は興奮する。

「そうか？ 少なくともアメリカよりずっとやばいと思うが…」

「襲われたら返り討ちにしてやるわよ」

低く笑う。

彼女はむき出しの肘を折ってガッツポーズをして見せた。

確かに彼女ほど強ければ、襲われたところで返り討ちにする可能性のほうが高いだろう。

面倒くさいことは嫌いだと、彼女は言うが、自分が楽しめることならば内容は問わないらしい。

「知ってる？」

ふと彼女は小首をかしげた。

「…なにをだ？」

「…マジックボムの弱点はね。幼すぎるのよ。どんなに強大なサイキックを持っていたって、それを扱える体力がなければ無意味なの。どんな事情であの容姿なのかは知らないけど、あれじゃ、ガス欠になったら殺してくださいって言ってるようなもんだわ」

キャシーが言い放った。

彼女の瞳は強い。

「けど、キャシーだって似たようなもんだろ」

「そうかもね。だから、あんたたちを雇うのよ」

彼女は静かに冷笑する。

キャシーはマジックボムと比較すれば大柄だ。

もちろん、肉体の年齢が止まった時期が違うためでもある。

マジックボムはずっと早い段階で止まってしまった。

キャシーは違う。

少なくとも、月経はないが、その前までは成長している。

「…わたしは生理はないのよ」

にやりと笑った。

男相手に持ち出す話題でもなさそうだが、無遠慮なアシルは彼女の物言いに興味を抱いた。

「なんでだよ？」

「わたしはね、女にはならないの」

そう決めたの。

踊るように歩きながら彼女は笑う。

「だって、そんなもの来たら、不便でしょ？」

戦うために彼女は時間を止めた。

「たぶんね、花鬼もそうなのよ。戦うために。それを選んだ代償」
ずっと戦い続けるために、女であることを捨てた。

彼女らはそういう存在なのだ。

「でも、マジックボムは自分で選んだ訳じゃないわね。もっと違う
なにかで時間が止まってる」

マジックボムは、キャシーや花鬼と比較しても異端なのだと彼女は言う。

「：そうじゃなかったら、あんな幼くして普通は止めない」

まるで自分の意志でそれを止められるかのような発言に、アシルは首をかしげた。

不思議な少女だ。

「キャシーは何歳なんだ？」

当初から感じていた疑問。

「二十六歳よ」

振り返って彼女は断言する。

「：たぶん」

よく覚えてないけどそれくらい。

彼女は言った。

よく覚えていない、というのは、彼女はスラム街の孤児だからである。

親がいなければ正確な年齢など覚えていなくてあたりまえだ。

時間を止めてしまった彼女に年齢など意味はない。

「驚いた？」

啞然とした。

仕草や、言葉使いが幼いからもっと年下かと思っていたのだ。

「：嘘だろ？」

「ほんとーよ」

彼女が笑った。

「もっと色気だせよな」

額に手を当てたアシル・ブラスは完全に困惑した。
自分の意志で成長を止める怪人。

「色気なんてくそでも食らえ、よ」

薄い胸、細い手足。

全て、彼女自身が選り取った結果だ。

「もし、これから本当の女になりたいと思った時、あんたは成長で
きるのか？」

素直な疑問を口にする、小さな彼女は哄笑した。

「無理ね」

もう、無理だ。

「わたしの体は歪んでる。もう、なんにも選べない……」

自分の人生の全てをかけて、彼女は人殺しであるという道を選んだ。

それが自分の未来にどう影響するかなど、当時も考えなかったし、
今でも考えていない。

「わたしは、人であることを捨てたのよ」

マジックボム。

花鬼。

同じだ。

彼らと同じ。

彼女らは結果として同じ道を選んだ。

「……もう、後戻りなんてできないのよ」

それが自分の選んだ未来だ。その事実をキャシーは理解していた。
あっけらかんと話す彼女は麦わら帽子をくるくると回した。

「あんたは、こんなわたしに、それでも興味ある？」

すがめた目でキャシーが問いかければ、アシルは無言のまま息を
飲み込んだ。

残酷な流血の茨の道を。

彼女らは選んだ。

本来、女とは生命を次代につなげ、はぐくむことが役割だというのに、彼女らはそれを知りながら放棄したのだ。

その強靱でタフな精神に、彼は屈服する。

「：興味あるね」

男がにやりと笑う。

空港内でそんな物騒な会話を交わす彼らは、周りの空間から切り離されてでもいるかのようだ。

それは、ソシオパスのキャシーの才能。

彼女自身は自覚もしていない。

「しかしすげーな」

こんなにも凄絶な女を見たことがない。

誰よりもまっすぐで、誰よりも明るい。

「まあ、こんなところでこんなくだらない話してても仕方ないわね」

彼女は言ってからほえんだ。

傍目には小さな子供にしか見えない彼女に、このとき、アシルは初めて強く引きつけられた。

人間が、人間に惹かれるということが、どういふことであるのか、彼は今まで知らなかった。

「あんた、男には興味ないのか？」

問いかける。

くだらない疑問。

「ないわ」

即答した彼女は、そうしてから少しだけ考え込むような所作を見せる。

「人間には、興味あるけど。生殖活動には興味ないわね」

彼女の物言いは終始こうだ。

色気のかけらもない。

そして恥じらいもない。

だからこそ、聞いていて心地よい。

そこには男だとか、女だとかといった線はないのだ。

「アシルがわたしに聞いているのはそういうことでしょ？」

彼女は目線を滑らせた。

そうだ。

彼女に聞きたかったのはそれだ。

自分の時間を止めてまで彼女が選んだ世界を知りたかった。

アシルはそっとキャシーの肩を引き寄せた。

軽い体は簡単に彼の腕の中に転がり込んだ。

「：俺が教えてやろうか？」

甘くささやきかける。

「：ぶっ殺す」

見上げた端正な少女の顔。

象牙色の肌の、黒い瞳。

そんな彼女の目に、ぷっと吹き出したアシルは彼女の体から腕を

放すと腹を抱えて笑い出した。

「わかったよ、冗談だ、冗談」

性を感じさせない、少女とも少年とも言える無垢な色香。

彼女の額にキスをした彼はそうして自分の荷物を抱え直した。

キャシーとコンゴに向かうために。

男の足を思い切り踏みつけた彼女はそうして長い黒髪を買ったば

かりのシュシュで緩く束ねた。

「いてっ！」

天使のような、無垢な魂を持つ彼女はそうして空港の出入り口を

振り返った。

「バーイ、アメリカ」

彼女は笑った。

マジックボムが死んだために自分に仕事が無い込むことを考慮し

た彼女の逃亡だった…。

コンゴ民主共和国。

世界第十二位にも位置づけられる広い国土を所有する中央アフリカの国家である。

かつて、ザイルと呼ばれたことは耳に新しい。

過去はベルギーの植民地であり、首都はキンシャサ。公用語はフランス語。国民の六十パーセントはキリスト教カトリックの信徒だった。

気候帯は熱帯に分類された。

そんなコンゴ民主共和国は、世界でもソマリア、アフガニスタン、イラクなどと同様におかれる危険な国家として知られている。

退避勧告を出された地方が大半を占め、首都キンシャサすら十分な注意を必要とされる危険地帯だ。

内戦は停戦状態であるものの、そんな事情から発展途上国であることにはかわりがなく、先進諸国の平和ボケした観光者が気軽に遊びに行けるような国ではない。

そんな危険な国に「面白そうだから」の一言で渡航を決めたキャシーの肝は据わっているのかも知れない。

もつとも、キャシーにしろ、マジックボムにしろそんな危険地帯に乗り込んでいるのだから彼女らの規格外振りには誰もが舌を巻いた。

「…面白いことは大好きよ」

ニコニコとしている彼女は本当に楽しそうだ…。

彼女の旅に同行しているアシル・ブラスなどからしてみれば、それが逆に恐ろしい。

天使のほほえみと言うが、本当に恐ろしいのは、天使が本気で人間に制裁を下そうとするときだ。

そちらのほうが彼としてはよっぽど恐ろしいのだ。

「顔だけはかわいいのにな」

彼女と知り合ってからすでに四ヶ月がたった。

さすがに好き放題発言するようになったアシルだが、相変わらずに思うのはそれだ。

顔はかわいいのだ…。

性格が残念すぎた。

残酷なソシオパス。

うっかり気を抜けば自分自身の身すら危うい。

その危機感に、アシルは背筋を正す。

自分とはとんでもないものに関わってしまったのではないかとすら思う。

しかし後戻りはできない。

ソシオパスの彼女に関わってしまった以上、振り返ることなどで気はしない。後ろなど振り返っていれば待っているのは身の破滅だけだ。

「…顔がかわいいんだからいいじゃない」

彼女はそう言った。

自分がかわいい、というのは自覚しているらしい。

ある意味、最低の悪女だ。

「ぶっさいくでさ、性格も最悪とか、終わってるでしょ」

「顔が良ければ性格が悪くても許されると…」

あきれかえったアシルの言葉に、キャシーは微笑した。

「あたりまえじゃない」

おまえはなにを言ってるのだ、と彼女は目をまん丸にした。

文句なくかわいらしい彼女に脱帽する。

これで性格が良ければそれこそ、本当にかわいらしく、言葉通りの天使のような少女であるのに、彼女は別の意味で天使のような女だ。

残酷に、彼女は神の使いの天使のごとく。

人間を殺戮する。

「顔が良ければ性格悪くても許されるのよ」

言いたいことを言う彼女は、それでもやはりかわいらしい。

もっとも、彼女が裏社会で優しくてかわいらしい性格など言ったらそれこそあり得ないのだが。

「死天使」のような性格の裏社会のほうがよく珍しいのだ。誰にも優しく、そして残忍な、死天使。

その噂は表社会にすらとどろく、暗黙のタブー。決して触れてはならない。

法の上に死天使がいるのではない。

死天使が法なのだ。

だからこそ、誰ひとり彼女に触れない。

彼女は恐れられる。

しかし、目の前にいるキャシーは異なる。

そういったことから恐れられるわけではない。

ソシオパスであることから誰よりも残忍で残酷な裏社会。

大概の裏社会たちは、ソシオパスやサイコパスではない。

死天使、花鬼、そして不法が届いたマジックボムもそうだが、彼女らは精神病質者ではない。

「わたしは特別な」

膝の上に麦わら帽子を乗せた彼女はアシルを見上げた。

静かな旅客機のさなかである。

彼女は病んでいるわけではない。

恐ろしいほど冷静だった。

冷静に、冷酷に。彼女は殺人を犯す。

「誰にもわたしの代わりにはなれないの」

意味深長な彼女の発言に、彼は首をかしげた。

「アシル」

呼びかける。

「どうしてわたしなんかに興味を持ったの？」

しなやかに強靱な魂を持った少女。

伝説のように、まるで密やかな噂でもあるかのように。彼女はその名前を知らしめた。

殺戮の女神、カーリー。

「我を恐れよ…」

ぼつりとキャシーがつぶやいた。

アジア系の顔立ちであるにもかかわらず、彼女は自信をキャシーと名乗る。

その真意を知りたいと思った。

「：なんで、キャシーなんだ？」

「覚えてないなあ：」

そう言えばなんでだっけ。

彼女は首をかしげて彼の言葉を繰り返した。

誰かにつけられた名前でないことは確かだと、キャシーは言う。

「たぶん、自分でつけたんだと思うけど」

それまで、彼女はスラム街のオヤジたちから「嬢ちゃん」と呼ばれていた。

「なんでそんなこと聞くの？」

「いや、その顔でキャシーって変わってないか？」

「そうでもないわよ。香港とかいっぱいいるわよ」

言ってキャシーは肩をすくめた。

これから危険地帯に赴こうというのに、さすがの裏社会トップクラスである。

全く恐れを見せていない。

「怖くないのか？」

「なんで？」

あっけらかんとキャシーが瞠目した。

「：なんでって、一応危険地帯だぞ。国中が」

そうだ。

コンゴ民主共和国は国土のほとんどが嚴重注意が必要な地域だ。

「だったらそれがなんだって言うの？ わたしは裏社会で、誰も怖くないの。わたしを殺したいならいつでもかかってくればいいし、わたしはいつでも相手してあげるわ」

そうだ。

マジックボムはそれこそ世界中の紛争地帯で戦ってきたのだ。

それを知れば知るほど、キャシーは行かなければならないと思う。
マジックボムが大嫌いだから。

彼女はその気持ちを絶対に曲げない。

「わたし、世界で死天使が一番好きで、世界で一番マジックボムが大嫌い」

静かにつぶやいた彼女。

目が据わっている。

「…だからわざわざコンゴ？」

「まあ、それだけじゃないんだけどね」
告げて彼女はほえんだ。

「昔さ、約束したんだ。こーんなちっちゃい男の子と」

そう言って小さな子供の身長を手の高さで表した。

一メートルと少しだろうか。

確かに小さい。

「…お姉ちゃんはずっごくつよいナイトだから、僕が危険になったら助けに来てね！ って」

誰よりも強く、誰よりも印象を残す少女。

それが、殺戮の女神カーリィ。

「…女の子がナイトね」

興味なさそうにつぶやいたアシルに、少女はぼろぼろの手紙をカバンから取り出した。

ところどころどす黒い液体がついている。

「…手紙がきたの」

見ればわかる。

たどたどしいフランス語だ。

「頑張って書いたのよ。わたしの名前と住所と、手紙は一言。助けてっね」

鋭い光が彼女の瞳に閃く。

キャスリン・スタンフォード様。

「キャスリン・スタンフォード？」

「縮めてキャシー」

宛名を読み上げたアシルに、キャシーは鼻から息を抜いた。確かに「キャシー」だけでは手紙の出しようもないだろう。

彼女は、正式にはキャスリン・スタンフォードと名乗っている。割とわかりやすく偽名だ…。

「だってわたし、名前つけてくれる人なんていなかったし」

「そりゃ、スラム育ちじゃな」

「でしょ」

どこをどうすれば「でしょ」になるのかいまち理解しかねるが、そこはアシルもあえて突っ込まない。

ソシオパスの裏社会トップクラス相手では、自分の命が誰でも惜しいのは当たり前だ。

「キャス」

アシルが彼女を呼んだ。

顔を上げた彼女の瞳が物騒だ。

彼女はべつにアメリカから逃げ出すためにコンゴに行くわけではない。

もちろん、それも一理あっただろう。

しかし、本意はそこではなかった。

「わたし義理とか人情とか大っ嫌いだから」

にべもないキャシーの言葉に、アシルはなぜだかほほえましくて苦笑した。

彼女の黒い頭をかき回す。

「やめてよ。頭がぐしゃぐしゃになるでしょ」

「あんたさ」

言いかけた。

見上げた黒い瞳。

「…かわいいな」

「…なに寝ぼけたこと言ってるのよ」

キャシーは肩をすくめた。

恐ろしくも愛らしい殺戮者。

自分には義理も人情もないのだと言いながら、助けてと言われれば助けにいく矛盾。

きつと、彼女自身はそれに矛盾を感じていないのだろう。

だから彼女は、不思議そうな表情をたたえる。

ああ、そうか。

そうアシルは思った。

マジックボムや、死天使に取り巻きがいる理由を。

彼らは、彼女に惹かれるのだ。

命を削るように輝くように生きる彼女らに。

生き急ぐ。

「手伝うさ」

それが契約。

まるで彼女らは暗闇に浮かぶ炎だ。

その力強さと、儚げな光に男たちは呼び寄せられる。

誰もが、彼女らに引き寄せられる。

「…でも、あんたもそんな死天使に引き寄せられたんだろうな」

口の中でつぶやいた彼はそうして目を伏せた。

彼に寄りかかるようにして目を閉じた少女にさりげなく腕を回した。

夢を見る。

ゆらゆらと。

これは、夢だと認識した。

少女は、ガラスの床の上に立って足元を見下ろしていた。

人形のように真っ白い飾り気のないワンピースを着た彼女は、不思議の国のアリスがそうするように、そっと下を見下ろした。

不思議の国のアリスと違うのは、彼女は西洋人ではなく、象牙色の肌を持つ黒髪の東洋人の少女だと言うことだ。

「…わたしは、アリスじゃない」

彼女の性格の歪み。

歪んだそれは、ピアスとマークが出資して学校に通わせたが、彼女の歪んだ感覚はすでに修正不可能だった。

それゆえに、ソシオパス。

一般的に、サイコパスはソシオパスと呼ばれることを嫌い、ソシオパスはサイコパスと呼ばれることを嫌うと言うが、その一般論はここでも彼女には当てはまらなかった。

「：サイコだの、ソシオパスだの好き放題言われて嫌じゃないのか？」

尋ねたピアスに、キャシーは苦笑した。

「要するにさ、あいつらはわたしが異常だって言いたいんでしょ。なら呼び方が変わったってどっちも同じよ」

異常人格だと。

しかし、サイコパスにしろソシオパスにしろ。

彼らは異常なようできて異常ではない。

異常に見えて正常な異常者。

精神病質と社会病質。

「：わたしは異常なんだってさ」

差しだされたベージュルにかじりつきながら彼女は笑う。

キャシーにしてみれば、「自分以外の他人」が自分のことをどう評価したところで関係がないことだ。

どうでもいい、と言うとひどく投げやりに聞こえるが、キャシーにとって自分が努力したところで結果がでるわけでもないことについて問答するのが面倒くさかったただけだろう。

「ピアスはどう思う？」

真顔で聞かれた日には、ピアスもうっかり頷いたが、彼女はそれについては咎めることもせずニコニコと笑っているだけだった。

キャシーにとって特別な人間は今のところ三人だけだ。

州警察の人間であるピアスとマーク。

そして、日本人の美女、綾瀬臣だけだ。

キャシーが殺さないと「決めた」人間。

「：いいのよ、わたしは異常なんだから」

まだ彼女が幼かった頃、キャシーは「おなかがすいた」という理由だけでスラム街のチンピラ共を殺戮した。

彼女にとつてたったそれだけのこと。

「Today is a very good day to Die」

彼女はそう言って笑った。

今日は死ぬにはもってこいの日。

容貌は東洋人のそれだが、彼女は完全なアメリカ人だ。

アメリカで生まれアメリカで育った。

生粋のアメリカ人。

「：生と死は裏表なの。世界がわたしのためにあるの。世界はわたしのためにあるの。わたしは世界に生まれたの。わたしと世界は裏表なの。人がわたしであり、わたしが人なの」

歌うように彼女は言って笑う。

世界と裏表に生まれた。

命とはそういうものだ。

キャシーはスラム街で育ち、無教養な人間かと思えば真逆のことをも言つてのける。

「わたしを取り巻くのは世界の声よ。わたしに殺せと言っているの。生まれるものへ賛美歌を歌って、祝福を授けるの」

それがわたしの役目だ。

キャシーが言う。

アメリカに生まれ、アメリカに育った。

彼女の精神にも、アメリカ・インディアンの思想が息づいている。「わたしはインディアンじゃないけど、その精神はわかつているつもり。世界は人のためにありながらそうではない。だから敬わなければ、そうしなければなにかも失ってしまうわ」

どこか哲学的な彼女の言葉。

それをただの妄想だと言うにはたやすいだろう。

しかし、アメリカで生まれたアメリカ国民の精神に深く根付いているのもまたアメリカ・インディアン思想だ。

深く、暗く根を下ろす。

だからこそ、アメリカ・インディアンは忌避される。

「…わたしはイエローよ。黒とかインディアンとかそんなの興味ないの。わたしにとつて、問題なのはたったひとつ」

彼女は大きな黒い瞳を見開いて、ピアスに告げた。

「殺すべき相手か、そではない相手か」

たったそれだけだ。

彼女は告げた。

桜色の唇ではほえむ。

アメリカに存在する、恐ろしい殺人鬼のうちのひとり。

「…殺してしまえばいいのよ」

彼女はまるで写真モデルの少女がふわりと笑うような、魅力的な笑顔でつぶやいた。

「俺たちのことはどうして殺さないんだ？」

常にかけていた疑問を告げれば、彼女は首をかしげながら瞳を天井に向けた。

愛らしい仕草にだまされてはいけない。

彼女は殺人犯を超える殺戮者だ。

「…だって、殺して得になる訳じゃないし。あんたたちを殺したらわたし、なにか楽しい？」

疑問に疑問で答えた彼女は、真面目な顔をしてマークとピアスを見つめた。

殺す必要を感じない。

それだけのことだ。

そこまで思い出してから、キャシーは再びガラスの床の下の世界に目線をおろした。

女が居る。

出産の様子だ。

足を折り曲げ、赤子を産み落とそうとしている。
全身で力んで、彼女は分娩台の上にいた。

「…醜い」

キャシーはそれを見下ろしてつぶやいた。

何度となく、彼女が夢に見た場面だ。

幾度となく血に染まった世界。

長い時間をかけて産み落とされた初産の赤子。

しかし、赤子は泣かない。

赤子の背中を軽くたたいてみたり、胸をマッサージしたりを繰り返しながら、産婦人科の医師は汗を拭う。

子供が泣かないことに、母親らしい女は困惑した様子だった。

しばらくしてから、赤子が泣いた。

それが、全ての始まり。

臍の緒を切り取った産婦人科医師は地獄を見た。

子供が泣いた瞬間に、斬撃が走ったようだった。

子供を抱いた母親が最初に切り裂かれた。空気のナイフ、まるでかまいたちのようだ。

次に、悲鳴も上げることなく一瞬で血まみれになった母親に手を伸ばした助産師の手首が切り裂かれた。

ごとりと音を立てて手首から先が床に落ちた。

血にまみれた母親の上で子供は泣き続けた。

まるで子猫の鳴き声のような。

「…世界はなんて醜いのかしら」

彼女はつぶやいた。

腰を抜かした産婦人科医師が助かったのは本当にただの偶然だった。

赤ん坊に善も悪もない。

ただ泣くだけだ。

彼女はそうして産み落とされた。

「…それがわたし」

刻みつけられた記憶。

消えることのない記憶。

彼女はそうして、恐ろしい力を持ったために悪魔と呼ばれ、実の父親の手によってスラム街のゴミ捨て場に捨てられた。

キャシーはそれらを全て覚えている。

自分のやったこともなにもかも。

しかし、いまだに彼女には理解などできてはいない。

「それはいけないこと、なの？」

首をかしげた。

どうして殺すことがやってはいけないことなのか。

どうして、そのために捨てられなければならないのか。

キャシーには理解できない。

「どうして、ダメなの？ 教えてよ……」

なにがいけないの？

ピアスの顔を彼女は両手で包み込んで真剣な眼差しで問いかける。しかし、彼女の真摯な質問に答えられるほど、警察の関係者すらご立派なわけでもない。

無垢な天使の魂は、残酷な場面に捕らわれた。

生まれた直後に、彼女の視界は深紅に染まった。

それゆえに、彼女は殺戮者であり、カーリー。

どうして殺してはいけないのか、彼女にはわからない。

わかるわけもない。

彼女には、それらを道徳づける概念がないのだ。

信仰も、秩序すらもない。

彼女が彼女であると言うこと以外に、キャシーは何も持っていない。

たったそれだけのこと。

キャシーは旅客機の着陸アナウンスで目を覚ました。
長い夢を見ていた。

ここのところ、久しく見ていなかった幼い頃の記憶。

「：いやな夢」

ぼやいた彼女は長いため息をついた。

生まれた直後に、彼女の行く末は運命づけられた。

キャシーの思考には「捨てられなければまともな人生があったかも」とか「捨てた親が悪いのだ」と言ったその行為を責めるものはない。

なぜならば、彼女にとってそれはあったはずのあたりまえの現実であり、彼女が意識することもなく受け入れてしまっていたものだからだ。

通常の道德観念など彼女には存在しない。

「そろそろヌジリだ」

頭の上から降ってきた男の声は低く耳に心地よい。

「：うん」

ヌジリ国際空港。

コンゴ民主共和国、首都キンシャサにある国際空港であり、一九九四年にコンゴ航空とザイル航空、ザイルエクスプレスの三社が合併して設立されたヘワ・ボラ航空のハブ空港でもある。

世界一危険な国家の一つ。

そこに彼女は降り立つ。

犯罪史に名を残すだろう殺戮者カーリー。

アナウンスに従ってシートベルトをかけ直した彼女は上背の高い男を見上げて口を開いた。

どこまでいっても彼女は余裕の表情を崩さない。

「ついたら車レンタルしてね」

「ほいほい」

ベージュのショールを肩にかけなおしたキャシーは男の腕に寄りかかって睫毛を伏せた。

「あんまりくつつくと襲うぞ」

「：」

その言葉に視線を上げた彼女の瞳の冷たさに、アシルは息を飲み込んだ。

「…すまん」

「別に」

なにか言いたげな彼女の瞳。

ぶっきらぼうに目を背けたキャシーに、アシルは他の客からは見えないようにして、彼女の上半身を抱き寄せる。

手で口元を覆うようにして唇を重ねた。

舌を差し込む。

驚いて舌をひいた彼女のそれをよく動く自分の舌で捕らえて、彼は薄く目を開いた。

突然の男の行為に驚いて押しのけようとする少女の手首を捕らえた。

なにかを言いたくて言えない彼女の瞳に気がついた。

キャシーは常に愛情に飢えているのだ。

誰も自分のことなど愛してくれないと信じ込んでいる。

短いが濃厚なキスを交わして離れたアシルの唇に、キャシーはやや呆然と彼を見上げた。

ぽんぽんと彼は彼女の頭をはたく。

「…心配するな。大丈夫だ」

わたしを愛して…!

彼女の悲鳴を聞いたような気がした。

突然、キャシーの瞳が涙で潤んだ。

一筋の涙が頬を伝う。

温かい涙に気がついたのか、彼女は驚いて涙を手の甲で何度もこすった。

「…べ、別に、キスなんて…」

口ごもる。

誰かに与えられる無償の愛に飢えていた。

「大丈夫…」

穏やかなアシルの声に、キャシーは彼の腕に顔を押しつけた。

「ベルナール！」

少女はカバンを放り出すようにして地面におくと目の前の黒人の男に飛びついた。

長身の男は、長い腕でキャシーを抱きしめた。

「久しぶり！」

身長はアシルと同じくらいだろう。

アシルと比較すると若干華奢に映るのは人種差によるものだろう。肌は漆黑。

目はまるで宝石のように美しい。

張りのある筋肉は見とれるほどだ。

放り出されたキャリーバッグを手にしたアシルはそんな黒人の男をじっと観察した。

アシルの視線に気がついて、ベルナールと呼ばれた男は小さく会釈した。

おそらく、彼はアフリカ大陸でも少なくなった真性ニグロイドだ。余裕で八頭身を超え、手足が長い。

素晴らしいスタイルだ。

「彼はベルナールよ」

無造作に腰にさしたナイフは、しかしコンゴ民主共和国というお国柄、用心するに越したことはない。

「…ベルナールだ」

手を差しだした黒人男性はにかりと笑った。

「なんだ、現地にお仲間がいるなら別に俺をお供にする必要なんてなかっただろ？」

訝しげに問いかけたアシルに、キャシーは肩をすくめる。

「ベルナールは、たまたまこっちに入ってただけよ」

「…俺、学がないんで」

たどたどしい英語でつぶやく彼は、キャシーの荷物をその長い腕で受け取った。

筋骨逞しい白人男と、黒曜石のような瞳を持つ真性ニグロイドの男。

そして、東洋人の少女というやや珍しい人目を引く集団は、「よそ者め」というコンゴ人達の白い目を向けられることになるが。それらの眼差しをいっこうに気にする様子もなく談笑する。

「ベルナールはナイフ戦闘の達人よ」

素っ気のない紹介に、ベルナールは照れたように頭を掻いた。

「こっちはアシル」

か弱い少女を連れた男が二人。

異国の人間達の姿に街の男たちが殺気立つ。

子供から女まで犯せる者は誰でも犯すような輩がいる国だ。

しかし、少女はてらいもなく笑っている。

街中の男たちの下卑た眼差しの一部も、殺気立った眼差しも彼女は肩で受け流す。

肩から落ちたショールを拾い上げようとした彼女が腰を落とした瞬間、男がひとり長い腕でショールを掴んだ。

コンゴ人の男がにやにやと笑いながら細くしなやかな肢体の少女をなめ回すように見ている。

「…ありがとう、それ返して」

にっこりと笑った彼女は、無垢な天使のようだ。

「…返してやるからケツ貸せよ、お嬢ちゃん」

にやにやと笑う。

しかし、彼女は動じない。

やめとけばいいのに、とぼやいたアシルの声が聞こえたような気がした。

彼女の顔見知りだろう男たちは、二人の間に割ってはいいることなく彼女の様子をうかがっていた。

まるで息をつめるように。

空港前のタクシー乗り場で、空気が凍り付いた。

そこは熱帯の国だというのに。

「ケツ？」

ニコニコと笑いながら、彼女はショールを掴む男を見返す。

誰もが固唾を呑んでそのいきさつを見守っていた。

気の毒に目をつけられてしまった、アジア人の少女。

街を行き交う女達や、善良な男たちはそう思っただろう。

「ケツだよ、ケツ。わかんדר？」

いやらしい笑いを浮かべる男。

彼女はかすかに片目を細めた。

「：返せって言うてんよ、かす。それとも痛い目に会わないとわかんないほど間抜けなんじゃないでしようね」

少女は告げると、男の股間を握りつぶす。

「：それとも、ケツを貸してもらうかわりに、不能にでもなりたいどM希望者なわけ？」

なんともかえるのような悲鳴が響いた。

彼女の周囲が冷たく感じるほどの圧迫感だ。

アシルとベルナールは同時に肩を落とした。

さすがに入国した瞬間にやってくれる…。

ベージュのショールを放り出して逃げていったコンゴ人の男の後ろ姿を見やった彼女は、それを拾い上げてから、男の股間を握った手のひらをじっと見つめる。

そもそも、嫌ならやらなければいいのだが、彼女にとって実力行使はしなくてはならないこともあるのだ。

ため息をついてから、ベルナールのジーンズに手を伸ばした彼女は、彼の太腿のところの布で手をごしごしと拭く。

「：キャシー…」

「なに」

短く機嫌悪そうに眉を引き上げたキャシーに、ベルナールは彼女の目の前にミネラルウォーターを差しだした。

キャップを外して少女の手のひらを引き寄せる。

水を上から落とした。

小さな手を洗ってやってから自分のシャツの裾で彼女の手を拭う。

「嫌になるならやらなきゃいいだろ」

「…だって、うざいんだもん」

確かに行動としてはわかりやすいが、なにも初対面のチンピラ相手に急所つぶしもないだろう。

そんなやりとりをする彼らの前に、一台のライトバンが停車した。運転席から若い女が顔を出す。

栗色の髪の白人女性だ。

どうしてこうも、彼らの周りには目立つ人間が集まるのだろうか…。

「…ハ―イ。なによ、あんたたち、珍しいところにいるのね」

珍しいところに、珍しい人間が集まっている。

しかも偶然だ。

「おい、キャシー」

少女の名前を呼んでアシルが彼女の肩を引っ張った。

すっと軽い体は彼の腕の中へ落ちていく。

「…知らせてでもいたのか？」

「そんなわけないでしょ」

ひそひそと問いかける男の言葉を、キャシーはにべもなく一蹴した。

「だってここはコンゴよ？　戦争好きが集まってたっておかしくなんてないじゃないのさ」

彼女の言葉はひどくあっさりとしている。

戦争好き、という言葉は語弊があるが、確かに彼女の言葉は一理ある。

紛争地帯に傭兵の出番は多い。

ありとあらゆる意味で。

ちよっとした用心棒から、護衛、その他戦闘活動まで幅広く彼ら

は雇われる。

そんな内緒話をするようなふたりに、ライトバンに乗った女はサングラスを指先で押し上げながら小首をかしげた。

「ほら、そのアベック。目立つから車にのりなさいよ」
鋭い英語で指示をする。

「誰と誰がアベックよ」

即答したのはキャシーだ。

この手のやり返しは大したものだ。

「そのアシル・ブラスとキャシーよ！」

言い返して、白人の女はにやりと笑った。

筋肉質だが、女性らしさを欠かない程度の肉付き。

白い肌と栗色の髪。紺色の瞳。

彼女の名前はエリヴィラ・シャミナ。

元ロシア軍の特殊部隊員だが、自由を求めて亡命し、現在はフリーランスの傭兵で、暗号名を「ミネルヴァ」と呼ばれる。

キャシーが世界中を戦慄させた殺人鬼であるのに対して、エリヴィラはごく普通の傭兵だ。

ただし、その評価はそれなりに高い。

市街戦や、ゲリラ戦では相応の結果をたたき出す。

秩序だった作戦行動は得意ではないため、彼女は組織からの依頼はほとんど受けることがない。

なぜか今現在の国籍はイランで、武器商人イーサーとも太いパイプを持つ女である。

要するに正体不明だ。

「…で、その黒人も乗った乗った」

明るい笑顔で彼らを促すエリヴィラは手招いた。

栗色の頭髮の紺色の瞳。

さっぱりとした明るい笑顔の美人だ。

傭兵でなければ尚良い…。

彼女の運転により、なぜか空港前から移動することになった一同

だが、彼らは一様に顔を見合わせる。

「それで、あんたたち、いつのまにそんなに仲良くなったの？」
首をかしげた女に、キャシーは眉をひそめた。

「誰が仲良くよ」

「だって、あなたいつもひとりで動いてたじゃない。そうじゃなかったら、あのフロリダの警官とさ」

エリヴィラは傭兵だが、女特有なのか小さくてかわいいものが大好きだった。

それゆえに彼女はキャシーのことも大好きだった。

「：別に、俺は雇われたただけだが：」

アシルの言葉になど、エリヴィラは耳を貸さない。

「それとこれは別よ、別！ キャシーは嫌いな人とは一緒に仕事もしないし、私的な依頼もしないわ」

キャシーのそばにいてそんなこともわからないの？

まるで一方的なロシア人の女の罵倒に、アシルはなにかを言いかけた。

確かに自分は、彼女のことをよく知らない。

だからこそ彼女に興味を持ったのだ。

「無駄口はいいわ、エリヴィラ」

それよりも。

そうキャシーが告げた。

「エリヴィラ、ベルナル。状況を教えてちょうだい」
厳しい眼差しが向けられる。

キャシーは長くアメリカ国内にいた。

コンゴ民主共和国の詳しい事情など知るよしもない。

「：そうね、相変わらずよ。危険な国」

端的な言葉でエリヴィラは状況をまとめた。

「強盗殺人、殺人、レイプ。ありとあらゆる事件が毎日起こってる」
もちろん、国民はそんな荒くれ者ばかりではない。

善良な、力のない人間達は虐げられる。

それが今現在のコンゴ民主共和国の現状である。

「：でも、キャシー。あなたは、そんなことに興味があつてこつちに来た訳じゃないんでしょ？」

エリヴィラは肩越しに振り返った。

栗色の髪が揺れる。

「手紙がきたのよ」

「：ふうん」

短くもあり、長くもある沈黙にベルナールは視線を投げかける。

「手紙？」

「：ベルナールは覚えてるでしょ？ 四年前、ルワンダの近くの小

さな村よ」

「ああ、あの：」

ひどい戦闘が一ヶ月に及んで続いた。

その後半、二週間ほど、ベルナールとキャシーは傭兵として参戦した。

南キプ州の小さな村の近くで戦闘が起こり、たくさんの子供や老人、女たちが犠牲になった。

ひらひらとキャシーの手の中で舞った古い封筒。

しかし、どす黒い血痕は最近のものだ。

「：コフィから手紙が来たのよ」

「コフィ：」

学がない、と自分で言ったベルナールはそうつぶやいてからわずかに首を傾けた。

確かに四年も前の出来事を思い出すのは難儀なことだろう。

そもそも、コフィなどという名前のコンゴ人男性は山ほどれいる。

一瞬で思い出せ、と言うのも無理な話だった。

「：コフィ、ああ、あの子か」

戦闘で母親を亡くした少年だ。

独り言のように言ってから、そうしてベルナールはキャシーの手の中の封筒に改めて視線を戻した。

そこについた血痕。

「なにかあったのか？」

合点した。

「そうみたい」

「：様子を見に行くのか？」

ベルナールに問われて、キャシーは頷いた。

「約束もあるしね」

こっくりと。

彼女は両目をすがめて車窓の外を眺める。

「：キャシーは律儀だね」

ベルナールはそう言って微笑した。

「とりあえず、今日はホテルで休みなさいよ。わたしは別に部屋を借りてるし、そっちの黒人も部屋はあるんでしょ？」

エリヴィラは近場の適当にこぎれいなホテルを見繕う。

「明日、朝九時頃に迎えにくるから」

「なに？　ついてきてくれんの？」

「昔のよしみよ」

キャシーの言葉にロシア女は笑った。

「ともかく、一晩ゆっくり寝て、食って、体力取り戻しておきなさいよ」

ホテルの前に三人をおろした女は言いたいことを言うだけ言って、ライトバンを走らせて街中に消えていった。

裏社会の女達は一様に、肝が据わっている。

大したものだ。

もちろん、裏社会である以上はそこに、男も女もないことはわかっていたのだが、それでも男たち顔負けに肝が据わっている。

キャシーはキャリーバッグを引きながらホテルのロビーに入った。よそ者の客。

視線が剣のように突き刺さった。

「部屋をとってくるが、シングルでいいのか？」

「なんでも」

尋ねたアシルに短く応じる。

「…と、シングルのはずいな。ツインにしておく」

十代そこそこの容姿の少女をシングルの部屋にひとりで放り込むわけにもいかない。

無論、心配したのはどちらかと言えば死体の量産を心配しただけである。

カウンターに向かっていくアシルの後ろ姿を見つめた、少女は後ろから近づく気配に、おもむろに拳を振り上げた。

小さな指輪をした拳が、思い切り男の顎を殴り上げた。ゆったりと振り向く。

彼女の眼差しがコンゴ人男性を認めた。

先ほど、空港前で彼女に絡んできた男ではない。

どれだけ他人に絡むのが好きなお国柄なのかと、彼女は思ったがそれは口に出さない。

「わたしに手を出したら火傷じゃすまないわよ」

冷ややかに告げた。

彼女はそうして男を撃退すると、ソファの背中に寄りかかったまままでアシルが戻るのを待った。

少女が眠る。

ベッドに。

アシル・ブラスはシャワーから出てみれば東洋人の少女はスリッパドレスを着たままで上掛けもかけずに眠っていた。

規則正しい寝息が聞こえる。

金髪をタオルで拭きながら彼は彼女を見下ろす。

欲情しようにも、キャシーは色気がなさ過ぎた。

天使のような無垢な心地よさは感じるがそれだけだ。

男が、女に抱くような肉欲は感じない。

細い右腕を腹の上に乗せて、投げ出された足はわずかに膝が開い

ていた。

左手は顔の横に肘を折られている。薄い胸板が静かに上下している。

男は煙草に火をつけてから長く息を吐き出した。

姿勢だけならば保護しなければならぬか弱い小さな少女だ。

白い枕の下にはナイフの柄が覗いていた。

テーブルの上におかれたカバンには荷物の整理をしたらしい痕跡が残っている。

ピンクの布製のカバンに無造作に突っ込まれたベージュのショールがはみ出していた。

眠っていてもうかつに近づいてはならない。

それはアシル・ブラス自身がよく知っていた。

眠っているように見えても、彼らの感覚は鋭く研ぎ澄まされている。

無防備に見えるときほど、気配を殺してはならない。

「危険、だ…」

彼女は危険だ。

煙草の煙が室内に揺れるのをアシルは見つめた。

彼女は今、どんな夢を見ているのだろう。

もしくは夢すら見ていないのかも知れない。

彼女は眠る。

無防備に。

しかし、決して安堵してはいけない。

彼女はソシオパス。

ややしてから彼は自分もベッドに潜り込んだ。

少女に寝息を聞きながら眠りにつく。

夢とはどこまでが自分の意識に捕らわれるものなのだろうか…。アシルは思った。

そこは自分の夢であり、集合的無意識と呼ばれる空間なのかもしれ

れない。

そこに女がいた。

黒髪の、ストレートの長い、象牙色の素肌の若い女だ。

横顔は見えない。

うつむいた口元に長い黒髪が揺れる。

桜色の唇。

化粧気のない横顔。

どこかで見た記憶がある、と彼は思う。

「おまえ、誰だ…？」

問いかけは声にならない。

彼の言葉に、彼女は口を開いた。

「…わたし、は…」

告げる。

彼女が言う。

ふわりと花びらのようにほほえんだ。

わたしは…。

彼女は笑みをたたえながら何度も自分の名前を告げた。

何度も。

幾度となく。

両手をいっぱい差し伸べて、彼女は笑っていた。

しかし、顔が思い出せない。

彼女が誰なのか、アシルにはわからない。

かつてベッドを共にした相手ではないことだけは確かだが、それ

以上は思い出せない。

「誰だ…？」

そんな問いを重ねながら、やがて彼は深い眠りに落ちていった。

しかし、その眠りは命のやりとりをする者のそれ。

ひどく情勢の不安定な場所で安心して眠りにつけるほど、彼の感覚は腐っていない。

翌朝早くに彼は目を覚ました。

時計で目を覚ますような生活をしているわけではないから、時間がくれば正確に彼は目覚める。

ベッドから体を起こすと、子供の姿をした少女は未だに眠っている。

枕に沈み込むようにして、バスタオルにくるまっていた。

黒い髪の手だけがぴよこんと枕から飛び出している。

「…器用な奴だな」

おそらく、彼女がひいている枕の下にはナイフがある。

そのナイフを全く気にすることもなく彼女は眠っていた。

「…キャシー、朝だぞ」

「うー…」

うめくような声が聞こえた。

少女の寝ぼけた声にアシルは苦笑した。

しかし、安易に近づいたりはいしない。

「もうちょっと…」

どこの寝起きの悪い主婦だと、彼は思った。

「九時に迎えが来るんだろ」

「うん…」

ため息をつきながらアシルがキャシーを真上から覗き込むと、彼女はもぞもぞと寝返りを打ってバスタオルの中から瞳を開いた。

そうして彼はようやく彼女の肩に手をかける。

相手が戦争屋ともなれば、はつきりと意識がないとわからない限り手出しなどしたくもない。

無意識にどんな攻撃がとんでくるかわからない。

特に、キャシーのような百戦錬磨の傭兵相手などぞつとする。

「…起きたか」

「…起きた」

言葉を繰り返すようにして彼女は頭を上げるとバスタオルをはぎ取る男に、けだるげな眼差しのまま肘をついて上半身を起こす。

「まだ眠いか？」

「大丈夫よ」

ベッドの上で大きく伸びをしたキャシーはあくびをしながら立ち上がった。

無造作に着替えをとると浴室へと消えていった。

一応、男の前で着替えない程度の良識はあるらしい。

もっとも、それはもはや良識というのかさえ、彼女の場合あやしいものがあつたが。

黒いワンピースに、黒い薄でのカーディガン。

足元はブーツだがそれは彼女が戦闘準備だからだろう。

ワンピースとブーツというなにやら妖しげな出で立ちだが、どちらにしたところで、コンゴでは誰もその格好に疑問など持たないだろう。

持ったとしても、単純に「変な格好だ」と思うだけのことだ。

「：荷物はどうする？」

「エリヴィラが預かってくれるわよ」

約束の時間に正確にホテルの前に出たキャシーとアシル・ブラスは相変わらずコンゴ人の奇異な眼差しに晒されていたが、どちらも傭兵であり犯罪者である以上、そんな眼差しには慣れっこだった。

当たり前のように眼差しをやりすごして、キャシーはあくびをかみ殺しながらアシルの背中に寄りかかる。

これが、成人女性なら「重い」と文句の一つも出ただろうが、なにぶん、第二次成長期前の体だ。

重たいはずがない。

全身でキャシーが寄りかかってきたとしても重さなどほとんど感じないだろう。

それだけの体重差が二人の間にはあつた。

「寝起きが悪いんだな」

あきれたような彼の言葉に、少女が身じろぐ。

「だって、別になんかやってるわけじゃないし。朝、早く起きない

といけない理由がないでしょ」

「：ナイフは手放さないのに、か？」

「こんなところで、安心して眠れるほど平和ぼけしてないわよ」
ぞんざいな彼女の言葉に、アシルは苦笑する。
もつともだ。

彼女の告げる言葉は、傭兵としてごく当たり前のことだ。

自分の命は、自分で守るのが戦場だ。

戦場ではごく当然のこと。

誰も信用してはならない。

自分の命が惜しければ誰も信用するな。

それが傭兵の世界だ。

そんなくだらない話をしている間に、エリヴィラが昨日と変わらずライトバンを運転して現れた。

他愛のない話をしながら、エリヴィラに荷物を託するキャシーにロシア女が笑う。

「：いいわよ、預かってあげる」

「ありがとう」

彼女はひねくれているわけでも、意地が悪いわけでもない。

ただ、生まれた時から病んでいただけだ。

歪んだ性格は元に戻らない。

だから、彼女はちゃんと自分が必要だと思えば謝罪すること
もできるし、礼も言える。

無神経な人間に対して彼女は牙を剥く。

なぜならば、彼女は自分がトップクラスであることを知っている
からだ。

だから、彼女は自分よりも格上だと認識した人間には頭を下げる。
それができる。

「お礼はいらないわよ」

言いながらエリヴィラはにっこりと笑った。

「だって、わたしはキャシーが好きだし、キャシーは良い子だから

裏切らないしね」

キャシーがソシオパスだとわかって言っているならば大したものだが、アシル・ブラスの見る限り、エリヴィラ・シャミナはキャシーが社会病質者であることを理解している。

知った上で、彼女はキャシーが好きだと言うのだ。

「：女っていかれてるよな」

肩をすくめたアシルは視線をあさってに向けたままではやいた。

その言葉は風に乗って消えていく。

女とは恐ろしい。

そう思う。

命を生みだし育みながら、正反対の女が居る。

殺戮に手を染め、血の海で笑う。

彼女らはいったい何者なのだろうか。

「：アシル、車乗って。ベルナールを拾って荷物おいたら出発するわよ」

出発するまでにやることがやや多いような気がする。

そもそも、自分たちを迎えに来る前に、ベルナールを拾ってくれば良かったのではないかと思うが、アシルは言葉にしない。

女たちに言葉でやりあったところで面倒くさい事態が待っているだけであることをわかっていたからだ。

エリヴィラとキャシーはなにか会話しているが、キンキンと響く女たちの声をアシルは聞く気などなかった。

どちらも戦闘のプロだ。

これから始まるのは殺戮の儀式。

むしろ殺戮そのもの。

彼は予感して背筋を正した。

キャシーがいて、ただですむわけがない。

「：で、結局あんたたちつきあってるの？」

とんでもないことを、エリヴィラが言った。

「は？」

「…あ？」

キャシーとアシルがほぼ同時に素っ頓狂な声を上げる。

アシルにしてみれば、社会病質者で傭兵の殺戮者の恋人などまっぴらごめんだっただし、なによりも性格がまず彼の好みではない。なにより、姿が幼すぎる。

キャシーからしてみれば、恋人など煩わしいだけでしかない。お互いにただ契約している、というだけの間柄だ。

「…違うの？」

「あんた、馬っ鹿じゃないの？」

キャシーは深いため息を吐き出した。

「あらあ、違ったの？ てっきりつきあってるのかと思ったわ」
ごめんなさいね。

そう言ってエリヴィラはころと笑った。

「ほら、キャシーはいつも自分が気に入らないと絶対にそばによせつけないじゃない？ そんな人が自分の周りにわざわざ呼ぶんだから、好意があるのかなあって誰だっと思うわよ」

的外れなようで、彼女は冷静にキャシーの周辺を見抜いていた。

キャシーにしろ、アシルにしろ迷惑だとは思っていなかったが、エリヴィラには確信があった。

「どうしてそう思った？」

アシルが問いかける。

「女の勘よ」

素晴らしくうさんくさい。

女の勘ほどあてにならないものはない。

キャシーのほうはというと、エリヴィラとアシルを何度か見比べながら首をすくめた。

東洋人の少女は自分の限界を知っている。

とりあえず、無敵の笑顔で言葉を綴るエリヴィラになにを言っても無駄なことは理解していた。

「だいたいさ、入国した途端、絡まれてチンピラ相手に金玉つぶしとかそうそうないわよね」

あっはっは、と大笑いするエリヴィラに、少女は眉をひそめた。もちろん、あけすけな表現に対してではない。

キャシーはそんな言葉で傷つくような人間ではなかった。

「…笑い事じゃないだろ」

アシル・ブラスの言葉に、エリヴィラは目尻にたまった笑い涙を拭きながらつぶやいた。

「笑い事よ。だいたいこんな面白いこと滅多にないわよ」
運転しながら大笑いするのは勘弁してもらいたいものだ。

アシルは思った。

「面白すぎて大笑いよ」

「…エリヴィラ、ところで」

言いかけたキャシーに、エリヴィラは手を挙げた。

言葉を制止する。

今の今まで笑っていたエリヴィラの瞳が厳しいものに変わっている。

「ちょっと待ってね」

言葉は決して軍隊に所属していた人間を感じさせない。

柔らかな響き。

彼女は臨機応変にその姿を変える。

それが女の強みとも言える。

時にはか弱い振りをして、監視をかいくぐる。

女子供であるというのは便利なものだ。

もちろん、女たちもそれを理解している。わかっただけで、彼女らはそれを利用する。

「…エリヴィラ？」

「あんたなにしたのさ」

厳しい声が問いかける。

「さてね。恨みはいくらでも買ってる」

皮肉げなキャシーの言葉にエリヴィラは唇の端をつり上げた。

「それは素敵」

言いながらエリヴィラはアクセルを踏み込むといきなりハンドルを切った。

ヒステリックなタイヤの音を上げて路地を曲がる。

「おい、道はわかってんのか？」

「二年くらいここににいるから、だいたいはわかってる」

アシルの言葉に応じたエリヴィラはバックミラーを見やった。

「キャシー」

「真後ろのやつ？」

「そっ！　できる？」

「おっけー」

言いながらキャシーは窓の外に体を乗り出した。

乱暴なエリヴィラの運転にキャシーは片腕で体を支えながら片手でナイフを握る。

細身の短剣、ステイレットのようだ。

彼女のバトルスタイルはナイフが中心だ。なぜなら、重量のある武器を彼女は体格的な問題から扱えないからだ。

「ステイレットとはまたまた、古風な武器を使うこと」

「仕方ないじゃない、銃が使えないし！」

片手でステイレットを構えた彼女は大きく揺れるライトバンの窓に腰掛けるように体を支えたまま、目だけを細かに動かしている。まるで照準を定める狙撃手のようだ。

投げつけるように肩の上で短剣を振り上げた彼女は真後ろにつく車に狙いを定める。

追っ手らしい車からも銃口が覗いているが、そんなことをキャシーは気にしない。

荒っぽい運転で、電柱の横を通り抜けようとしたエリヴィラに、キャシーは不満を漏らした。

「ちよっと！ 頭ぶつけたらどうすんのよ！」
まったくだ。

高速で電柱にぶつかったら、キャシーなど即死だろう。

「その程度、事前に回避できるでしょ」
エリヴィラが言い返す。

車内にいるのは三人とも戦闘のプロだ。

金で雇われるゆえに、その手腕は確かなもの。
誰も疑いようがない実力。

その中でも、キャシーの実力は正体不明の部分が大きい、人殺しの数も半端ではないために多くの人間から恨まれた。

「まったく…」

ぼやいたキャシーはそうして再び上半身を車外に乗り出した。

今度は一瞬で照準を定めた。

体重と意識をステイレットに乗せて投げつける。

彼女の意識を乗せたステイレットは追尾システムを持つミサイルのようなものだ。

ごく一部のキャシーに近い人間しか知り得ないが、だからこそ彼女の短剣術は恐ろしい。

ステイレットは正確に追っ手の車の運転手の顔を直撃した。
それで充分だ。

そもそも銃で超能力者に立ち向かうというのが、剣と銃で格闘するほど無謀なものなのだが、それをキャシーに近い者以外は知らない。

ほとんどの者が、ナイフ戦のプロだと思っているだけだ。

「…ドカンってね」

大通りにでたエリヴィラはぼそりとつぶやいた。

運転手を失った車は路地裏で住宅に突っ込んだ。

壁に激突したような音が聞こえた後に遅れて爆発音上がる。

あまりにも派手な爆発音に、キャシーとエリヴィラは同時に肩をすくめた。

「何積んでたんだか」

「さーね、迫撃砲でも積んでたんじゃないの」

興味なさそうにキャシーが言うが、エリヴィラとアシルは思わず「そんなわけあるか」と同時に突っ込んだ。

キャシーとアシルの荷物をかたづけたエリヴィラはそうして、途中のレストランでベルナールをひろった。

もちろん、キャシーの信奉者であるベルナールは文句など言わない。

彼は彼女を疑わない。

決して。

それはかつての戦場で結ばれた絆だ。

「武器なんて、みんな一緒よ。結果的に殺せばなんでもいいの。あとは当たるか当たらないかだけ」

「でも核はあたらなくても死ぬでしょ」

「そんなもん、個人的な戦闘で使う馬鹿じゃないし、自分の身だって危うくなるからゲリラ共が使うような代物じゃない」

国家が保有してこそ意味がある武器だ。

もちろん、戦闘で使えば効果は絶大だが批判も免れない。

現代において核兵器、並びにそれに準ずるミサイルの系統の武器のほとんどは、その国家の仮想敵国相手に対する威嚇のために所有されることが多い。

「それもそうね」

キャシーの言葉に、エリヴィラは単純に頷いてから首をかしげた。「ナイフはいい……」

ぼそりと、ベルナールがつぶやいた。

厚い唇が語る。

「……殺したことを実感できる」
そう。

白兵戦は実感できるのだ。

殺したことによって、自分が相手の命を背負う。

「…ナイフは殺しの罪を負っていることを実感させてくれる」

決して許されない人生に足を踏み入れていることを感じさせる。

「そうね」

黒人青年の言葉にエリヴィラは頷いた。

「わたしたちは、人殺しなのよ」

そこにどんな大義名分があったとしても、殺人を生業にしているという事実は疑いようのない現実だ。

「大義名分、ねえ…」

キャシーは首をかしげて見せた。

おそらく車中にいる四人の中でそんなものを感じていないのはキャシーだけだ。

東洋人の少女にはそんなものを感じる感性はない。

必要ないのだ。

「…キャシーは、特別よ」

だいたいあんたにそんなもの期待してないし。

エリヴィラがほほえむ。

「まあ、わたしたちは傭兵で、いちいち感傷に浸ってたら自分がおだぶつだものね」

にらむようにほこりっぽい街中に視線を戻す。

土の色の街。

舗装されていない路面。

街を行き交う黒人たち。

そこが異国なのだと感じさせる。

「…さて、どこ行けばいいのかな？」

エリヴィラが尋ねた。

「ブカブよ」

「あー、あそこか」

南キブ州、キブ湖畔にある大都市である。

キンシャサと比較すると危険度は高い。とは言っても、一般庶民が暮らしているわけだから、戦闘状態にあるというわけでもない。

「ラジャー」

エリヴィラは笑った。

丘から湖を眺める美しい都市ブカブ。

危険だと言われているが、美しさも持ち合わせる中央大陸の街。

キャシーはシートに背中を預けて、籠バスケットの中の荷物を整理している。

中には現金と、短剣が入っている。

物騒なものだが、危険地帯に傭兵がいるのだから短剣くらいはごく普通だろう。

「どれくらいあれば足りるかな」

ぽつりとつぶやいてキャシーは首をかしげた。

「まあ、いっか」

現地で補充すれば。

彼女は一人で納得して窓の外に視線を移した。

実際に特殊な状況下で戦闘を決するのはナイフ一本であったりする。

彼女はそれを知っている。

「ベルナール、エリヴィラ」

キャシーは二人の名前を呼んだ。

「…なんだ？」

ベルナールがつぶやく。

「たぶんだけど、ひどい戦闘になると思う」

黒いドレスを着た彼女は、同様に黒い麦わら帽子をかぶって目線をそらした。

「わかってる」

黒人男は言葉少なく同意した。

彼女は信頼できる戦闘員。

一匹狼とも言えるキャシーにだってできないことは多々ある。

だからこそ、協力を要請する。

カーステレオから聞こえてくるラジオの音に、キャシーは目を閉じた。

肩にまいたベージュのショールに日差しがあたった。

眠りによせる。

彼女は籠ボストンに手を乗せたまま横に座るアシル・ブラスの肩にもたれた。

まるで彼女は丸腰に見える。

美しい東洋系のアメリカ人少女。しかしその正体は残忍な殺人鬼。恐ろしい凶悪犯だ。

「なんで、キャシーはコフィにこだわるんだ？」

ベルナールが不意に尋ねた。

「別に」

短く彼女は応じる。

「こだわってない？」

「わかんないけど」

ベルナールの言葉にキャシーは首をかしげた。

「なんでかしらね」

首をすくめた。

「わかんないわ……」

約束をした。

かつて、戦場で。

倒れた母親のそばに泣いていた子供と、約束を交わした。

「わたし、約束は守るのよ」

「知ってる」

キャシーは必ず他人との約束を守る。

だから、彼女はめったに約束などしない。

「約束は守らなければならないのよ」

「そうだね」

ベルナールは相づちを打った。

誰よりも強く残酷な殺人鬼は、それでも、誰よりも純粋な少女。
世界とは普通の人間たちが考えるよりも残酷で冷徹だった。
世界が彼らを殺す。

「わたしたちは人殺しに殺されるわけじゃない」
もっと違うものに殺されるのよ。

彼女はつぶやいた。

「ベルナルも、エリヴィラも気をつけなさいな」

世界はただひとつだ。

それでも、彼女は世界の中でたったひとり取り残される。

血の海の中に彼女はいた。

戦場でキャシーは立ち尽くしていた。

手に余る大きなナイフを持ったキャシーはそうして彼を振り返る。

「わたしは大丈夫よ」

彼女は言った。

血の雨を降らして彼女は世界を駆け抜けていく。

「わたしのことは心配しないで。ベルナル」

スラムの少女は膝を抱えたまま震えていた。

逃げ場もない。

どうしたらいいのかもわからない。

「助けて…、兄ちゃん…」

助けて…。

助けて、助けて…。

恐怖に支配される。

覚えているのは、血に染まった兄だ。

兄が託した。

一通の手紙。

慌てて走り書きした封筒と便箋。

「…怖いよう」

必死で逃げた。

彼女が逃げ出せたのは偶然だった。

小さな子供。

彼は彼女に逃げ出したらブカブに逃げろと言った。

だから、ブカブに來た。しかし、ブカブに來たからと言って彼女は
どうすればいいのかわからない。

兄に託された手紙を投函しただけだ。

「怖いよう…、兄ちゃん」

暗い部屋の片隅で、少女は膝を抱えた。

どうすればいいのかわからない。

彼女には字など書けないから、兄が託した手紙の内容すら知らな
かった。

彼が誰に手紙を出したのかなど。

少女にはわからない。

兄は死んだのだろうか。それとも生きているのだろうか。

「…助けて」

部屋の外に足音が聞こえる。怯えて身をすくめた少女は、体を縮
めて耳を塞いだ。

どうすることもできない。

もしも、万が一、故郷の村を襲った男たちが訪れたとき、少女で
はどうすることもできないのだ。

自分は殺される。

家族と同じように、なぶり殺しだ…。

ヒステリックに扉をたたいて叫んでいる。

「…もうやだよ」

扉を蹴破る音が聞こえた。

ひっと悲鳴を上げて少女は硬直した。

＊

キィキィとさび付いた蝶番が神経に障る音をたてている。

軋んだ床板を踏む彼女はブーツの踵を鳴らす。

ベッドに放り出された死体。

残された陵辱の痕。

小さな子供にすら容赦しない相手。

表情ひとつ変えないキャシーとは対照的に、眉間にしわをよせたのはベルナールとアシルだ。

一番後ろからついてきたエリヴィラは、キャシーと一緒に表情を全く変化させていない。

「この手の殺しに、男のほうが過剰に反応するわよね」

キャシーは冷静につぶやいた。

彼女は振り返って見てもいないのに、まるで感情を読み取ったかのような。

腰まである長い黒髪を揺らして、キャシーはベッドの上を眺めた。虚ろな目を開いて少女が死んでいる。

彼女の言葉にしかし、男たちはなにも返さない。

ブーツの音も高らかにベッドに歩み寄った彼女は、長い睫毛を伏せて少女の右手を取った。

ややしてから、キャシーは立ち上がる。

床を蹴りつけた。

「行くわよ」

声にかすかな怒りを孕んでいるのを、エリヴィラは気がついた。

キャシーが髪の毛を引き抜きながら少女の亡骸に背中を向ける。

それと同時に、ことは起こった。

音を立てて、ベッドに転がる少女の亡骸が血の雨を降らせた。

正確には血の雨ではない。

弾けたように、ベッドの上に赤黒い染みを残す。

肉塊すらも残さず消えたように見えた。

キャシーが部屋をでるとみしりと壁がいやな音をたて軋んだ。その音に慌てたのは二人の男だ。

ベルナールとアシルは部屋を出る。廊下を歩く少女の小さな背中。

彼女は多く語らない。

「：キャシー」

エリヴィラが少女の名前を呼ぶ。

同時に、足元から重い衝撃が伝わった。

おそらく少女の亡骸があった部屋が崩れたのだ。

階下に人がいたら残念なことになっていただろう。そのあたりの事情をキャシーは考えない。

葬送を…。

死んだ少女に送る。

ざわめきと悲鳴が聞こえた。それらの声を背中に受けながら、四人はライトバンに乗り込んだ。なんでもなかったように。

「：しかし、子供相手にひどいもんだな」

「コンゴじゃ当たり前よ」

アシルの言葉にエリヴィラは応じる。

ロシア女の言葉に、苦々しい表情を浮かべながら無言で頷くのはベルナルだ。

死線をくぐってきた。

「：アマのところにいつてくれない？」

「：アマ？」

「そう」

街外れに住む占い師の女だ。

売春の斡旋もしている。

「あー、あの女ならなにか知ってそうね」

とんとんと指先でリズムを取りながら考え込んだエリヴィラは、なるほど、と頷いてエンジンをかけた。

ブカブの外れにアマの家はあった。

キブ湖を見下ろす丘の上だ。

窓際で刺繍をする女はエンジンの音に顔を上げた。

黒い瞳がそっと細められる。

印象を言うならば、蛇のようだ。

刺繍を刺す女はそれをテーブルにおくと立ち上がった。

「：あら、珍しい顔ぶれなこと」

バルコニーに出てきた女は四人を眺めてから首をかしげた。
すらりとした長身の黒人女。

アマと名乗る女だ。

「コンゴには何年ぶり？　キャシー」

にこにこ笑っている。

「四年よ」

知ってるんでしょ。

キャシーは言いながらツンと顎を上げた。

「それで、なにが知りたいの？」

アマは四人を居間に通すとアイスコーヒーをいれてきた。

ちなみにキャシーにはジュースだ。

物腰だけでは彼女が裏社会のひとりには見えない。

もっとも裏社会と言っても、殺人を生業にする者たちばかりではない。
ない。

彼女や、アメリカのベルティのように表立って戦闘に参加しない
者も多くいる。

「マイマイのことよ」

マイマイ。

コンゴ民主共和国で活動する武装組織である。

「マイマイ、か：」

「あいつら、相変わらずなの？」

その名前に眉をひそめたアマも、同じように武装組織の戦闘で幼
い頃に両親を失っている。

「相変わらずね」

「さすがにこれだけの人数じゃつぶせないかな」

キャシーの言葉に、アマは相づちを打った。

「でしょうね」

「ブカブに、マイマイの一派が入ってるらしいけど、隠れ家の見当

はつく？」

問いかけた。

「つぶすの？」

「…それだけならできる」

さすがに四人で六千人は相手にできないが、武装組織の一個小隊程度の相手なら余裕だ。

「教えてあげるわ」

でも、どうして、ブカブに入ってるのが一個小隊程度だって思ったの？

アマが尋ねれば、キャシーはにたりと口元だけで笑う。

「わたしだってその程度はできるのよ」

「そうだったわね、忘れてたわ」

言いながら黒人女性 は地図を広げた。

ブカブ市内の地図だ。

彼女は占い師であり、売春婦であり、そしてコンゴで一番の情報屋だ。

「…根城はここ、ブカブのど真ん中よ」

スラム街の入り口を細い指でさした彼女は、何うように四人の傭兵を流し見る。

「でも、あんたたちが失敗すればわたしもただじゃすまない。それだけは忘れないで」

暗に、殲滅しろと、彼女は言う。

「大丈夫。この地図もらっても？」

「どうぞ、市内の地図なんていくらでも手に入るから」

言いながら彼女は赤いペンでぐるりと根城になる場所にマルをつけた。

「あいつらの情報なんて流して、大丈夫なの？」

エリヴィラに尋ねられて、アマは蛇のように笑った。

「大丈夫よ、あんたたちがその一派を殲滅すれば、わたしの後ろにはカーリーがいると思われるだけ。失敗すれば、殺されるけどね」

だから失敗するな、と彼女は言う。

アマが印をつけた地図を握りしめたキャシーは足早に部屋を出て行く。

その後ろ姿を見つめて、アマはつぶやいた。

「随分お怒りみたいね」

「：あの子は素直だから」

応じてエリヴィラが苦笑する。

多くの意味でわかりやすい。

「でも、だから強い：」

女たちのやりとりに、ベルナールが割ってはいった。
そうだ。

だからこそ、彼女は強い。

しなやかに、まるで豹のようだ。

「行かないと、キャシーが怒るんじゃないの？」

四本のミネラルウォーターのペットボトルを渡してアマは笑った。
彼女は短気だから。

本気で、彼女はつぶそうとしている。

ブカブにいるマイマイの兵隊たちが集結するかも知れないという
予想はもちろんしているだろう。

だが、キャシーは怯まない。

まっすぐに目的を見据える。

「見誤らなければいいのよ」

アマはつぶやいた。

目的を忘れなければいいのだ。アマの言葉を受けた三人の傭兵たちはぱちくりと目を見合わせるとあわててキャシーの後を追いかける。

彼女に八つ当たりされるのはまっぴらごめんだ。

感情の起伏が激しい東洋系アメリカ人の少女は、時折、彼らが思いも寄らない行動にでる。

「じゃーね、アマ」

手を大きく振ったエリヴィラに、アマは肩の上で手を振る。

地図を一目見て、エリヴィラの頭には根城だという場所がインプットされた。

土の臭いが風に乗る。

茶色の街。

エリヴィラは装備を確認して車に乗り込んだ。

これからはじまるのは戦闘だ。

予想だが、相手するのは一個小隊では終わらないだろう。

「用意は大丈夫？ キャシー？」

「わたしはいつでも」

あんたたちも防弾チョッキくらい着たら？

逆に告げられて、彼らは肩をすくめた。

「動きづらいからいらない」

エリヴィラは腰の拳銃と、ナイフを所持している。

ベルナルとキャシーは見事にナイフだけだ。

まともに銃を装備しているのはアシルだけという状況だった。

殺してしまえばいい。

キャシーはそう言う。

残酷で冷徹な殺人者。

それでも。

彼女は約束を守りに行く。

「約束は破っちゃいけないのよ」

彼女は言った。

キャシーにとって約束とはそんなに重い。

「俺は君に嘘はつかないし、約束は決して破らない。だから、君も約束は破ってはいけない」

幼いキャシーにそう教えたのはピアスだ。

「うん」

それ以来、キャシーにとって約束とは決して破ってはならない重たいものになった。

だからこそ、彼女は約束をしない。

約束をしたら彼女は全てを投げ出してもそれを守りに行く。

「約束は破らないわ」

にこりと少女はピアスに笑った。

純粹で誰よりも無垢な天使。

「わたしは車にいるわ」

「うん」

言ったエリヴィラにキャシーは頷いた。

彼女の言った言葉に対して、キャシーは別段何も思わない。

彼女が戦闘に加わらないことも、少女にとっては大したことではない。

そもそも、ひとりで一個小隊程度なら相手できるキャシーだ。

「俺は行く」

ベルナルルの言葉。

戦力は、アシル・ブラスとベルナルル、そしてキャシー。

キャシーが手にしたのはバタフライナイフが一本とステイレット。

ステイレットそのものは昔からある武器だが、キャシーが特別に

あつらえたものだ。切れ味は抜群だ。

裏道に車をつけたエリヴィラに、キャシーは人通りが少ないことを確認してから降りる。

どちらにしたところで暴れ始めれば目立つのだが、警察、もしくは軍隊でも呼ばれた日には面倒くさいことこの上ない。悪目立ちするのはとりあえず避けるべきだ。

しかも、三人とも武器を持っているのだから怪しげな集団だ。

古びた三階建てのビルを眺めた少女は小さく舌打ちする。

「どう思う？」

エリヴィラの車が去ったことを確認して、アシルはキャシーに問いかけた。

周りの建物を確認する。

両脇に土色の二階建ての建物がある。

おそらく、そこはマイマイの一派の巢だ。

「敵は、一個小隊じゃすまないでしょうね」

「一個小隊って言ったじゃねーか…」

キャシーの言葉に、アシルが首をすくめれば少女はちらと眼差しを向けるだけだ。

「どうせ殺すんだから一個小隊も一個中隊も一緒でしょ」

「それは数として大いに違うと思うんだが…」

どうせ殺す、という言い放ち方のあまりのアバウトさに、アシルは思わず自分の肩を軽くたたいた。

「同じよ。殺す人数なんてどうだっていいのよ」
冷酷に彼女は言い放つ。

「さいですか」

ごきりとアシルは首を鳴らした。

白兵戦のプロ。

彼女はひらりとワンピースをたなびかせた。
かわいらしいのは外見だけだ。

「キャシー」

「ん？」

ベルナールに呼び止められて、少女は上背の高い黒人男を見上げた。

黒い宝石のような瞳が交わされる。

男の手が少女の長い髪を軽く捕らえた。

くるとバンダナで結ばれる。

ぞんざいなようでベルナールは細かいところに気がつく男だ。

「ありがとう」

マイマイの一派のアジトに乗り込むのに先頭に行くのは少女のキャシーだ。

キャシーの後に、ベルナール。

最後にアシルという順番だ。

銃を構えたアシルが最後尾なのはそれなりの警戒心からだ。

もっともキャシーに対して銃器などものの役にたたないことは知っているが念のためだ。

ビルのエントランスに無防備に入った少女は、すれ違いざまに無遠慮な視線を向けてきた男に一瞬でステイレットで頸動脈を掻ききった。

同時に鋭い音を立ててバタフライナイフが開かれる。

俊敏な動作に、頸動脈を掻ききられた男の腕が空をよぎるが、少女は体を軽くひいてその腕をよける。

軽やかに階段を駆け上がる彼女は短剣一本で男たちを戦闘不能にしてい。誰だって、小さな子供が女だてらに殺人鬼などとは思わないだろう。特に、そのビルを占拠しているマイマイの一派の男たちに取ってみれば、異邦の少女など犯して殺す程度の対象でしかない。

ついてこようとするアシルとベルナールに指示を出す。

「一階と二階を制圧してきて」

大概、一番威張りたい男というのはなぜか最上階にいと相場が決まっている。

「馬鹿となんとかは高いところが好きってね」

低くうめくように彼女はつぶやいた。

「三階はどうするんだ」

アシルの言葉にキャシーは目を瞬かせただけで首をすくめる。

「わたしだけで充分」

そうして踵を返した彼女は軽々と階段を駆け上がって消えていった。

「じゃ、俺は二階いつてくる」

手早くサイレンサーを装着したアシルは二階にいる人間の気配をたどる。

一階は短剣だけで相手を戦闘不能にできるだろうベルナールのほうが適任だと思ったのだ。

なぜなら、アシルは銃を持っている。

万が一銃声で余分な敵が増えると面倒くさい事態になる。

「わかった」

ほとんど物音も立てずにものの数分で階下を制圧したアシルとベルナルが最上階にたどりつくと、東洋人の少女はひとりで部屋の窓から外を眺めていた。

室内には男たちの死骸が転がっている。

静かに根城を制圧してしまったキャシーは窓の外を眺めている。なにかを待っているのか。

机に座っていた男の手が通話のままの携帯電話を握っている。応援を呼ぼうとして、キャシーにそのまま殺されたのだろう。

「：見事っつか、鮮やかっというか。これじゃ俺たちどう考えたって出る幕ないだろ」

「三人いたから三カ所同時に制圧しただけじゃない。効率良くやらないとね」

アシルがぼやけばキャシーは相変わらず憎まれ口をたたく。

「ところでさ」

彼女は言いながら、窓の下を見つめた。

「：きたわよ、迫撃砲」

にやりと彼女は笑った。

「おいおいおい：」

階下にジープが止まっている。

その荷台に積まれた迫撃砲。

「街中で迫撃砲かよ」

「だってあいつらマイマイだもの、それくらいやるでしょ」

言い切った彼女に、アシルはベルナルを見やった。

「：どうすんだ？」

「あんたたち、逃げていいわよ」

窓からジープを見つめている彼女はそう言って、マイマイの兵士らしい男を見やった。

屈強な男たちが少女を見つめている。

おもむろに死んだ男の手から、キャシーは携帯電話を手を取った。
「ハイ、わたし、キャシーって言うの。よろしくね!」

まるでこれから気軽に売春にでも行く女子高生のようなのだ。

見るからに、マイマイの兵士たち相手に火に油を注いでいる。

「：早くいらっしやいな。返り討ちにしてあげるわ」

ぞっとするほど冷酷に言い放って彼女は通話を打ち切った。

そして携帯電話を窓の外に捨てる。

「包囲される前に逃げ出さないさ」

二人の男たちに目もくれず言った彼女は、空中にステイレットを放り投げて受け止める。

糸鬼と呼ばれたこともある、キャシーの恐るべき実力。

それをマイマイは知らない。

突入前にベルナルがまとめてくれた黒髪をほどくと、ぶちぶちと数本の髪の毛を抜いた。

「少しはお勉強しておけばいいのに。コンゴなんか引きこもってるから、自分たちより強い相手がいることがわからないのよ」

嘲笑した彼女は開け放った窓から身軽に飛び出した。

彼女の体重は三十キログラムあるかないかだ。

壁を駆け下りて、バタフライナイフで半分に切った髪の毛を両手で構えた。

まるでミサイルのようだ。

正確に黒い髪の毛が男たちの頸動脈を切り裂いていく。

道行く一般庶民たちの悲鳴が聞こえるが、キャシーはそんなもの聞いてはいない。

いかに効率良く殺すか。

それだけだ。

一瞬で決着をつけないければ通報された警察やら軍隊やらがでてる。

そんなものまで相手にしている暇はない。

というか、面倒だ。

事態を最小限に抑えるために先にアシルとベルナールを逃がしたのだ。

体の小さな自分ひとりならなんとでもなる。しかし、白兵戦のプロとはいえ「普通の男」がいれば厄介な事態も想定される。

キャシーの背後でビルに迫撃砲が撃ち込まれた。

体に衝撃を感じた。

しかし、それでもキャシーは揺るがない。

壁を駆け下りたキャシーは一気に両手にしたステイレットとバタフライナイフで男たちに致命傷を与えていく。

急襲にろくな装備を準備する間すらなかったのだろう。

マイマイの兵士にしては軽装だ。

かろうじて防弾チョッキなどを装備しているが、それ以外を狙えばいいことである。

男の股下をかいぐり、股関節の動脈をすれ違いざまに断ち切っていく。ジープのボンネットに乗り上げたかと思えば、彼女は男たちの頭上から襲いかかり頸椎をステイレットで突き刺す。

とにかく、効率が良すぎるのだ。

急所を熟知している。

結局、せっかく準備してきた迫撃砲も、キャシーの前では撃てたのは一発だけだ。

到着したマイマイの兵士たちもほぼ壊滅状態に追い込んで、キャシーは顔を上げる。

「：さすがに鈍くさいコンゴ警察もそろそろご到着かしら」

サイレンが聞こえた。

若いマイマイの兵士の首筋にステイレットを突きつけた。いつ間合いを詰められたのかもわからなかった。

「：馬鹿なマイマイのトップに伝えなさい。わたしとつながっているものに手を出したらただじゃすまないってね」

「お、おまえは、何者なんだ：」

青年が問う。

「わたしはカーリー。殺戮者よ…」

言い放つと、彼女の真後ろから襲いかかる別の兵士に大きく手を振って真後ろの男の股間にバタフライナイフの刃をたたきつけた。ぎゃーと醜い悲鳴が聞こえた。

「貞操帯でもしてないと、玉つぶれるわよ」

くすくすと笑う。

まさに圧倒的。

死角などない。

射撃の音にキャシーは顔を上げた。

祈るように目を閉じる。

弾道が歪んだ。

その瞬間、彼女ははじかれたように走り出す。

「頃合い」

つぶやいた。

要するに戦闘は終了。

警察がきたのでは面倒くささ倍増だ。

少女だからコンパスは短いはずであるのに、そのスピードは恐ろしく速い。

混乱する車道に走り出た彼女は、一瞬だけマイマイ一派のアジトを振り返った。

その体を通り過ぎたライトバンから伸びた手が抱き上げる。

嵐のように通り過ぎた、カーリーに、マイマイの兵士らもそしてコンゴ警察も呆然として立ち尽くす。

殺戮の女神の名前を冠する殺し屋。

「ご苦労さん。怪我はないか？」

車内でアシルに尋ねられて、キャシーは笑った。

「かすり傷よ」

「そうか」

アシルは安堵した。

そうしてキャシーは籠ボストンからコフィの手紙を取り出すと細

切れにちぎり始める。

紙吹雪のようになったそれを、車の窓から風に流した。

「約束は守ったわ。コフィ……」

あなたの命は守れなかったけれど、妹の敵はとった……。

彼女はほえんだ。

「終わったかな？」

エリヴィラが問いかけた。

「うん」

キャシーの答えに、エリヴィラは口元で微笑した。

「じゃ、しばらくコンゴにいるの？」

「うーん……、コンゴにいたるとなんかやばそうだからソマリアでもいいくわ」

「治安的にあんまり変わらないところに行くのね……」

次はソマリアでも、という適当な返事にエリヴィラはあきれた。

「荷物は行き先が決まったら連絡くれれば送っておくから、あとで連絡ちょうだい」

マイマイの根城らしき場所からかなり離れたところでアシルとキャシーをおろした彼女は籠ボストンを彼女の肩にかけてやった。

愛らしい少女。

その姿だけではとても殺人鬼には見えない。

「わたしはしばらくコンゴにいるから、連絡くれればいつでも協力するわよ」

エリヴィラはウィンクした。

「サンキュー、エリヴィラ」

ライトバンに背中を向けた白人男と東洋人の少女というやや奇特なカップルはそうして喧噪の中に消えていった。

第八章 暁の夜明けの騎士団 1

「EVE-000-782が死んだと思うかね？」

正式コード、EVE-000-782。

略式コード、E782。

尋ねられた青年は小首をかしげた。

目の前の初老の男はわずかに眉をひそめる。

「なぜ、それを俺に聞くんだ？」

逆に青年は初老の男に尋ね返す。

金髪の白人青年は、白人の白髪交じりの男を凝視していた。

「君が一番知っているだろう」

「…俺は、彼女とずっと離れているのに、知るわけがないだろう」

「ふむ」

短く相づちを打ってから、初老の男は首をかしげた。

「では、わたしの意見を言わせていただくが」

老人はデスクに肘をついて背中を丸める。

「わたしは、EVE-000-782は奪われたものと考える」

「…奪われた、だと？」

その言葉に、青年は両目を細める。

「そうだ。EVE-000-782は、テロリスト共に奪われた」

「…E782」

青年は金髪をゆるくかき回してからため息をついた。

「奪還せよ、と？」

「そう」

彼女は国家機密。

他の国家にも、世界にも、なにかにも悟られてはならない。

知られてはならない。

「…了解した」

彼は瞑目する。

A1294∴。

声を覚えている。

いつか、聞いたEVE-000-782の声。

「しかし、奪還するにしても、どこに拉致されているのかすらわからない状況では奪還しようがない」

「∴そうだ」

だから、と彼は言う。

「W13とW10を連れて行くといい。君たちと近しい存在だ。情報を追ってそちらに送ろう」

その言葉を聞いて、青年は背中を向けた。

覚えているのはE782の声だけだ。

同じ金色の髪に、同じ瞳の。

「E782∴」

つぶやいた青年は祈るように指を組んで唇に当てた。

青年は祈る。

E782のために。

＊

世界というものは、ひどく残酷で。

とても、悲しい。

座敷に端座した少女はふと目を見開いた。

「世界は∴」

高崎千歳は片足を力一杯踏み出した。

「∴わたしは、フラワーデモン」

そう呼ばれるようになってどれくらいたつだろう。

花鬼と。

かつて、そう呼ばれることになったのは八年前だ。

自分を助けるために殺人者と成り下がった綾瀬臣の汚名を晴らすために、彼女は真剣を握った。

体の横に置かれた日本刀をつかんだ彼女は、黒塗りの鞘を強くつかむ。

「なぜ、わたしに直接接触を…？」

問いかける。

彼女は後頭部に結い上げたポニーテールを揺らして長く垂れた飾り紐の音を鳴らす。

しゃらりと、金属音が響いた。

恐るべき殺人鬼を。

そう呼ばれる、彼女。

「死天使ではなく、あなたに依頼があるからだ」

流暢な日本語に、彼女は眉間を寄せた。

障子の向こうの長身の影。

訛りのない日本語が、なぜか千歳の勘に触った。

「…花鬼」

呼びかけられた声に、千歳は剣を抜いた。

風が切る音をたてて、障子が斜めに切り裂かれた。

そこには誰もいない。

小さく彼女は舌打ちした。

縁側に取り残された四つ折りのメモ用紙。

それを開いた千歳はかすかに瞳孔を大きく開く。

ロシア語で書かれたメモに、彼女は奥歯をかみしめた。

「…これは」

少女は、眉をひそめたまままで頭髪を束ねる飾り紐をほどいた。

長い黒髪がはらはらと流れを作る。

クローゼットを開けた千歳は黒いセーラー服を取り出した。

白いスカーフを胸元で結んで、彼女は黒のハイソックスをはいた。耳元まで短くカットされた黒髪はかつての日本の姫君のようだ。

組紐をおいた彼女は、トレンチコートに腕を通した彼女は玄関先で靴をはく。

「…お出かけですか？」

「行って参ります」

母親祥子の声を背中に受けて、千歳は玄関を出た。

中学生のままの愛娘。

殺人鬼と呼ばれながら日本で平和に暮らしている彼女。

どれだけ綾瀬家の名誉に守られているのか。

彼らは知らないわけではない。

高崎家の人間は、全員がそれを知っていた。

わかっていて、彼女らは。否、彼らは人の命を奪うすべを磨く。

「…なにを守りたいのです？」

祥子はぽつりとつぶやいた。

誰もいなくなった玄関を見つめて。

もちろん、高崎祥子は知っている。

高崎祥子が綾瀬幸太郎を守るように。

高崎千歳は綾瀬臣を守る。

「臣お嬢様の名前を、どうか汚さぬように」

祥子は祈るようにつぶやいた。

静かに。

桜の花が舞う。

美しい桜の満開の下。

彼女はそこにいる。

「…久しぶりだ、千歳」

そう告げられて、少女は顎を上げる。

「お久しぶりです」

冷ややかに少女は言った。

「相変わらずロリだな」

煙草臭い男の息に、少女は眉をひそめた。

太い指に顎を引き上げられて、彼女は思いきりその手を振り払う。

「触らないで」

侮蔑するように言い放つ。

「…俺は、あんたの協力者なんだぜ？」

そう。

彼は、千歳が臣と無関係に動くための、協力者だ。
花鬼として動くための彼。

「俺はあんたに惚れている…」

そっと手のひらで彼女の頬に触れた。

一方、千歳は侮蔑するように彼を一瞥してから眉を上げた。

「あんた、昔から同じ顔だな」

「どういう意味？ わたしがガキっぽいとでも言いたいのか？」

「…ガキなら孕ませないですむから、セックスするにはいいな」
言いながら男は唇を指先でなぞった。

「…最低」

睨み付けた少女に彼は不遜に笑う。

「…あんたは、二流よ」

いや、三流だ。

苛立たしげに、彼女はつぶやいた。

「あんたさ、小学三年生でアメリカ行っちゃったからな」
くつくつと彼は笑う。

「…臣お嬢様の、ケツを相変わらず追っかけてるのか？」

「お嬢様を侮辱しないで」

小学生の頃から綾瀬臣の傍らにあった千歳。

まるで影のように臣を守る少女。

気の強い、彼女の黒い瞳を知っていた。

彼女を追いかけて必死の思いでアメリカに留学したとき、綾瀬臣
も、高崎千歳も大学など当に卒業していた。

「あんた、自分の人生をあきらめてるのか？」

自分の人生。

そんなものは考えたこともなかった。

訝しげな眼差しを向ける高崎千歳に、男は衝動的にキスをした。

「あんた、頭いいもんな。俺なんて三流、四流だ…。けど、あんた
は俺を利用し続ける…」

唇をあわせながらささやいた青年に、セーラー服の少女は呆然として両目を見開く。

「…抱かせてよ」

ささやきかける。

「…俺は、あんたが小学生の時から好きだったんだぜ」

彼と彼女は、そうは見えないが同い年だ。

そして、綾瀬臣とも。

腰をなで回した彼に、少女は頬を強く張り飛ばした。

「わたしの依頼を受けるの？ 受けないの？ はっきりしなさい」
鋭く、強く。

彼女は言い放った。

「報酬は…？」

静かに彼が言った。

「…百万アメリカドル」

千歳。

いや、花鬼が告げる。

「興味ないな。そんなもんよりあんたの体のほうが興味あるな」

「下衆野郎…」

「口が悪いな」

彼の言葉に、彼女は忌々しげに両目をつり上げた。

「…行くわよ、石垣」

彼女はくると彼に背中を向けた。

見たままの少女などではない。

彼女は、殺人鬼だ。

石垣と呼ばれた男は、少女の元クラスメートだ。どういいうきさつからか、彼は彼女が殺戮者であることを知った。

そして、いつのまにか彼も傭兵になった…。

「アメリカで、相当しごかれたんだぜ？」

「あんた程度の歳なんてまだまだひよっこよ」
背中に彼の声を聞く。

少女の背中。

セーラー服をたなびかせる彼女はいつかの、小学校の頃の面影を強く残す。

学年で一番に腕っ節の強い大きな少年を腕一本で伸した高崎千歳。いくら私立の小学校とは言え、子供は子供だ。

少々荒っぽい少年の一人や二人はいる。そんな少年を、華奢な少女が一瞬で伸してしまったのだ。

「…あのときのあんたはすごかったと思ったんだぜ？」

「覚えてないわ」

高崎千歳にとって日常的な暴力の一部。

だからこそ、細かい出来事など覚えていない。

大切なことはただひとつしかないのだ。

「ちーちゃんって、呼ばれてたよな」

そうだ…。

ふと千歳は思い出した。

まだ彼女が日本の小学生だった頃、彼女は周りの女子児童から「ちーちゃん」と呼ばれていた。

いつでも「臣お嬢様」が最優先だった千歳。

しかし、かわいらしくはっきりと物事を言う性格からか誰からも好かれていた。

「女子共がさ、羨ましくって」

綾瀬臣と高崎千歳の周りにはいつでも人だかりができていたこと。

男子児童は誰も近寄れなかった。

「どうせ、あんたたち、綾瀬さんをいじめるんでしょ！」

そう言われて女子児童から追い払われた。

本当は、もっとたくさん話をしたかった。

彼女のことを知りたかった。

高崎千歳を、石垣は知りたかった…。

「ところでさ、あんた本当に生理きてないのか？」

「…は？」

ぽっかりと口をあけて、千歳は驚いた表情で石垣を振り返った。
身長は標準的な日本人と比べれば高い方に入るだろう。着やせするたちなのかトレンチコートを着た彼は細くも見えないこともない。精悍な顔つきは冷静で年齢以上のものを感じさせた。

なにを言われたのか彼女は一瞬理解ができなかったらしく、ややしてから、白い頬をかすかに朱に染める。

「だから生理きてねーのかって」

「じよっ、女性に対して、白昼堂々なんてことを聞くの！」

驚いた顔のまま両手の拳を握りしめた千歳に、石垣は苦笑した。
時折見せる少女のままの表情。

「きてないのか」

「石垣！」

怒った千歳に、石垣は笑う。

どうせ、拳を振り上げたところで彼には届かない。

「別に襲って犯したりしねーから、心配すんなよ」

少女の肩を抱き寄せた彼は自分の車にずると引きずっていく。
彼が自分に対して危険な相手ではないことを知っている千歳はわずかに眉間を寄せたままで彼の目の前にロシア語のメモをつきだした。

「：依頼人がアメリカ政府とはね」

ぼそりとつぶやいた石垣に、少女は眉を寄せた。

「で、なんで、ロシア語なんだ？」

尋ねた彼に、千歳はフロントガラスの向こうに視線を投げやった。

「英語だと誰でも読めるからじゃないの？」

「日本じゃロシア語も英語も似たようなもんだと思うけどな」

「あっちの真意なんて知ったことじゃないわ」
ぶっきらぼうな彼女の言葉。

それにしても、と、石垣は思う。

彼女のこの、綾瀬臣に対する時と、その他大勢に対する時の差はなんだというのだろう。

「まあ、確かに、日本で英語もロシア語も似たようなもんだわね」意味をきちんとくみ取れるか、と言われれば、ほとんどの日本人は外国語など理解ができないだろう。

とりあえず、英語は中学校、高等学校で文法を教わる程度には理解できる、くらいだ。

「臣お嬢様の前ではものすごい丁寧だよな」

「…」

告げられた男の言葉に、少女はちらと眼差しを彼に上げた。

「…わたしは高崎の人間だから」

綾瀬家に仕える者。

それが高崎家の命運。

自分の人生など知らない。

幼い頃からたたき込まれた高崎家の人間としての信念。

まるで当たり前のように。

高崎祥子が綾瀬幸太郎の番人であるように。

高崎千歳は綾瀬臣の番人だ。

綾瀬臣を守る者。

「…もう、九年も前か」

不意に石垣はつぶやいた。

九年前。

「…あのとき、あんたマフィアの人質にされたんだっけな。綾瀬から金をせしめるための」

彼の言葉に千歳は苦々しげに片目を細めた。

思い出す。

番人として、力不足だったために、彼女は誘拐されたこと。

「あれは、わたしが力不足だったのよ」

そのために、守らなければならぬ主人を危険に晒し、あまつさえ彼女を殺人犯にしたこと。

後悔しても後悔では済まされない。

「わたしは、罰を受けなければならなかったのよ…」

罪には、罰を与えなければならない。
決して許されない。

「…わたしはわたしを許してなどいない」
誰が許したとしても。

千歳は、千歳自身を許せなかった。

下唇をかみしめた彼女は、流れていく風景を見つめて息をつく。
春の、桜に染まった日本の風景。

彼女は当にセーラー服など着る年齢ではなくなった。

しかし、それでも擬態をするようにセーラー服を身につける。

世間に隠れるように。

繰り返される彼女の言葉に、青年は煙草を唇に銜えてから火をつけた。

途端に、少女がその煙草を取り上げた。

「わたしの前で吸わないで」

吐き捨てる。

彼女のそばで煙草を吸う人間はいない。

千歳が煙草を嫌い、というよりは、元々、武道をたしなむ家で育ったため、彼女の周りにはそういった環境にないのだ。

それだけの問題。

そうして、彼女が「花鬼」と呼ばれるようになったのは、そんな拉致事件があった翌年からだ。

「…裏の人間、か」

まだ石垣が子供だったころ、そんなものは漫画かドラマの中にしかないものだと思っていた。

世間の闇に隠れ、悪を成敗する。

そして悪はその闇にすら存在する。

漫画のような世界。

「裏は時として表でもあるわ」

つぶやいた千歳に、石垣は目線だけをおろした。
視界の隅に彼女がいる。

高崎千歳。

そう名乗る娘。

高崎、などという姓を持つ者は日本には何人もいる。しかし、綾瀬家に仕える高崎家はひとつしかない。

常に綾瀬の背後を守るのが高崎のつとめだと知ったのはいつだっただろうか。

「お嬢さんのことはいいのか？」

「…お兄様がいますから」

ボディガード。

彼女の兄は、綾瀬臣の名実ともにボディガードだ。

日本にいる限りは、綾瀬臣の横に彼がいれば安全だ。

「そうか」

高崎千歳は基本的に育ちが良いのだ。

しかし彼女は犯罪者社会でもまれてきた。

それ故に、どっちつかずの話し方をする。

そんな気負いが石垣にはかわいそうな気持ちにもさせられた。

常に神経を張り詰めて彼女は生きる。

綾瀬臣を守るために。

ステアリングを握る彼を一瞥もしない彼女。

厳しい眼差しの下でなにを考えているのだろう。

彼女に依頼されたのは、テロリストの殲滅だ。

日本国内に潜伏する。

表向きはテロリストなどではない。

キリスト教原理主義系の新興宗教の一派で、アメリカ合衆国に本部を持ち、多くの外国支部を置く。

「暁の夜明けの騎士団」と呼ばれる団体である。

「…テロリストねえ」

石垣は首をかしげた。

「でも、確かそいつら日本にはそんなにいなかったら？」

「怪しげな研究してるくらい噂しかないわね」

「なるほど…」

「その程度の噂しかないのに、アメリカ政府が直接依頼してきたのよ？　なにかあると思わない？」

彼女の眉をひそめた様子に、彼は視線をさまよわせる。

確かにその通りだ。

要するに、千歳はその裏に別の謀略が隠されているのではないかと、言っているのだ。

「日本支部の団員は、だいたい千人くらいだったかな。日本ではごく小さな団体よ」

確かに、日本ではやるのは仏教系の宗教団体のほうが賑やかで元気にしているのは、キリスト教原理主義団体とは日本人が縁が薄いからだろう。

「本国ではかなりやばいことに手を出してるとか、政府の転覆を企んでるとか、そんな噂ばっかのところだよな」

不穏な噂に取り巻かれた新興宗教団体。

日本人の感覚からすればそもそも「新興宗教」というだけでかなりうさんくさく感じるものだ。

「やばいことって表現がそもそも曖昧だわ」

ばっさりと石垣の言葉を切って捨てた千歳は桜の咲き誇る東京の街並みを見つめていた。

車の窓に肘をついて窓外を見つめている彼女の様子はどこか物憂げで、彼は一瞬だけ息を詰める。

その視線に気がついたのか、千歳は首を回した。

「…なに？」

「なんでも」

目をそらした男は、そうしてカーナビを見やった。

彼女が示したのはとある都内のビルだ。

「そこは、わたしの家」

彼女はそう言った。

「…って、おまえの家、下北沢じゃなかったか？」

「違うわよ、高崎家だなんて一言も言っていない」

「あー…」

つまるところ、そういうことだ。

彼女の隠れ家。

綾瀬臣は世界中に屋敷を持っているが、千歳はそうではない。

もつとも、殺し屋としてその名前を知られている以上、高崎家だけが彼女の隠れ家であるわけもない。

「…やはりな」

男はにやりと笑った。

壮年の白髪交じりのハニーブロンドの男だ。

「政府が出てきたか」

それほど焦っているということだ。

彼女の存在が公になることをアメリカ政府は恐れている。

「どちらにしたところで、今はE782は我らの手の内にある」
そう言った男は、首輪と鎖でつながれた金髪の少女を眺めた。

腹と胸から血を流し続けている。

輸血がその腕につながれているが、血が流れ続けている以上それも意味がないように思われる。

床にうつぶせに倒れている少女はぴくりとも動かない。

黒く固まった血液が金色の髪を汚していた。白い肌からは血の気が完全に失われている。

「…E782」

立ち上がった男は、少女の金髪を掴んだ。

ぞんざいに少女の顔を引き起こす。

力を失った彼女の体は、簡単に男に引き起こされた。

「最高の兵器」

薄く水色の瞳が開かれた。

ぶれた焦点が声の主を捜す。

「わたしたちのためにその力を使え」

反応はない。

細い腕がやっと床について体を支えようとするが、血でぬめる指先は床に滑る。

「聞こえるか？」

繰り返して彼は少女に言う。

力任せに血の流れ続ける少女の体を揺さぶった。

「聞いているか？ E782」

力なく頷いて彼女は意識を失った。

朦朧とした意識の彼女に、男はすり込むように何度となく同じ言葉をかけた。

彼女の意識は最初から白い紙のようなものだ。

善悪の概念を持たない彼女の意識は、与えられるものを貪欲に吸収していく。

だからこそ、アメリカ政府は彼女が奪われることを恐れた。

しかし、結局、御することすらできないまま、ワシントンに放置していたのだ。

「：最高の兵器だ」

世界に戦争を仕掛けるための兵器。

意志を持った殺人兵器。

小さな子供の姿をした、ブロンドの巻き毛の。

EVE—000—782。

乱暴に手を離れた壮年の男は、力なくどさりと音を立てて床に倒れた少女を何の感慨もなく見下ろした。

愛らしいのは姿形だけだ。

アメリカ政府が作り出した最高傑作。

「まだ刷り込みは終わりませんの？」

低い女の声に尋ねられて、男は顔をあげる。

「：これは危険だ。ゆっくり時間をかけてやらなければ、待っているのは身の破滅だけだぞ」

「こんな小さい少女が、ね」

冷やかな眼差しを向ける女はゆっくりと戸口から近づいてきた。
黒髪の、灰色の瞳の女だ。

無表情のまま見下ろして、血に汚れた小さな体をハイヒールのつま先で蹴飛ばした。

「こんな子供が、かつてマジックボムと恐れられていたなんて」

蹴られた衝撃に、少女が目を開いた。

指先がかすかに動く。

衰弱しきった体に力はない。

「…たし、は兵器よ…」

途切れ途切れの声はかすれて消えていく。

呼吸そのもののような。

自分とは、なにか。

少女は飛びかける意識で考えた。

「最高傑作だ」

「最高の兵器だ」

何度となく、幼い彼女に刻みつけられた言葉。

自分自身のアイデンティティ、

より、強く。

誰よりも最強でなければならない。

意識は朦朧としていて、体に力が入らない。

おそらく血を失いすぎたのだ。

ただ、深く、彼女の奥底に刻みつけられた記憶が静かに、ゆっくりと浮上した。

「君は意志など持たなくて良い。君は兵器なのだ」

意志はいらず、判断力だけでいいと。

彼女の意識の片隅に、灰色の髪の中年男を思い出しかけたような気もしたが、兵器という言葉に支配された彼女の内側はすでにそれらを遮断していた。

暁の夜明けの騎士団。

そう呼ばれる新興宗教がいる。

表向きはごく普通のキリスト教原理主義団体である。

もっとも、千歳などから見れば新興宗教などにうつつを抜かす人間など、ろくな者はいないのではないかと思われた。

マンションの一室。

居間に青年を待たせた少女は、クローゼットルームに引っ込んだ。石垣は覗きに行こうかとも思ったが、そんなことをすれば天下の花鬼に殺されるのは目に見えていたからおとなしくしていた。

さすがに傭兵とは言え、我が身はかわいい。

傭兵は殺し屋ではない。

殺人鬼として名を轟かせるマジックボムも、カーリーも傭兵としての顔を持つが、高崎千歳は違う。

彼女は傭兵ではない。

どちらにしたところで人殺しであるという事実には変わらないのだが、片やは犯罪者であり、片やは戦争屋だ。

「：暁の夜明けの騎士団。あんたは接触したことがあるか？」

衣擦れの音が響いて、少女が戻ってきた。

着物に袴という彼女独特のファッションだ。

曰くそれが一番動きやすいらしい。

白い足袋が床を歩く。

「覗きに来るかと思ったわ」

「覗いてもらいたかったならそう言ってくればいいのに」

告げられて、少女は思いきり石垣を睨み付けた。

「冗談だって」

肩をすくめた男にソファに座るように促して、彼女は台所へと消えた。

ポットで湯を沸かす音が聞こえる。

見た目に反してまめな性格をしている、と、彼は思った。

「で、なんだっけ？」

カウンターの向こうから少女の声が響いた。

石垣と少女は同じ年には思えない容姿だ。

「だから、暁の夜明けの騎士団、のことだ」

「：わたし、新興宗教嫌いなよね」

言いながら盆に紅茶をのせて運んできた。

品の良いカップとソーサーは、おそらく千歳の趣味だろう。

「何が言いたい？」

尋ねられて、少女は首をかしげる。

「そのまんまよ」

目を伏せた彼女に、大柄な男は口元だけで笑った。

「新興宗教が嫌いだから、接触したこともなし、か」

石垣の言葉に、高崎千歳は黒髪をかき上げた。

「どうぞ」

テーブルにソーサーを置いた少女は首をかしげてから窓の外の空に視線を投げかけた。

言葉は荒っぽくても、彼女は旧家で育った娘だ。

どんなに異端であっても、彼女はお嬢様なのだ。

「：なに？」

問いかける。

少女の眼差しに、彼は苦笑する。

「なんでもないさ」

まるで大正時代の女学生のようなだ。もっとも女学生にしては容姿が幼すぎる。

彼女の横顔に見とれた。

「暁の夜明けの騎士団の日本支部をつぶすこと」
それが任務。

「殺した後はどうする？」

問いかけた。

彼の言葉に千歳は紅茶のカップを指先ではじいた。

「アメリカ政府がもみ消してくれるからノープロブレム」

彼女は微笑した。

「政治の世界はどうしてこうもどす黒いのかね」

男の言葉に彼女は着物の襟を指先で直す。

「襟は抜かないんだな」

「女郎じゃあるまいし、なんで襟なんて抜かないといけないの」

彼女は肩をすくめた。

「襟抜いた方が色っぽく見えるだろう」

「関係ないわ」

彼女は鼻を鳴らしてから帯のあたりに指先を当てる。

「どうやって殺す？」

「殺すのは、騎士団のトップ三人だけよ」

ぞんざいな彼女の言葉に石垣は首をかしげる。

確かに、いくら騎士団の会員が千人いたとしても、千人殺すのは面倒だ。

社会問題にもなるだろう。

「：大概、トップっていうのはお年寄りだから、懐に入り込みさえすれば簡単にことはすむのよ」

「援助交際の振りでもして懐に入るって？」

「枕営業…？」

短く即答した千歳に、石垣は声を上げて笑った。

「あんたにそんなことできるとは思えないね」

確かに自分にはそんなことはできない。

彼女は自分でも自覚している潔癖症だ。

当然のことだろう。

千歳はまがりなりにも旧家出身だ。

「：ちーちゃん」

呼びかけた。

「その呼び方やめてくれない？」

「いいじゃん、俺はあんたのことそう呼びたかったんだ」
眼差しだけを上げる。

ソファに座る石垣とは対照的に、絨毯に膝をついて座っている。

「…やめて」

低く怒気をこめた少女姿の彼女に、石垣は彼女のつむじを見つめる。

彼女がなにを考えているのかわからない。

「じゃあ、なんて呼べばいい？」

千歳はそれには答えなかった。

紅茶を飲み終わった彼女は、そうして石垣をパソコンルームに手招いた。

「データが送られてきてると思う」

彼女はパソコンを立ち上げた。

質素な部屋だ。

マンションそのものは、高額だったろうが、室内はいたって簡素だ。

彼女の性格が表れている。

余計なもののない部屋。

おそらく、普段の生活をしていない部屋だからだろう。しかし、それにしても年頃の女性らしいものが何一つない。

生活用具一式と、着替え。

そしておそらく武器もあるのだろう。

隠している。

本来であれば許されることのない日本での武器携帯。

「…しかし、口は悪いのに、言ってることが古くさいのはどうにかならんかね」

石垣は口の中でつぶやいた。

その言葉をきれいに無視して、彼女はメールソフトを開いた。
添付ファイルがつけられている。

「∴アメリカ国防総省？」

「らしいわね」

淡々と彼女は言葉を綴る。

「またすごいところから依頼を受けるんだな」

「この間はFBIが直々でお出ましだったわよ」

「∴ほう」

自分の顎に触れながら彼は相づちを打った。

世界に名だたる殺人鬼というのはすごいらしい。

「俺には理解できない世界だな」

「向こうが勝手に依頼してくるだけよ。わたしがお願いしたわけじゃないわ」

要するに、「アメリカ国防総省」が「花鬼」に「暁の夜明け騎士団」の殲滅を依頼したと言うことだ。

たった二人で殲滅できなくとも、トップの三人程度ならば殺すことも可能だったし、殺害後の隠蔽も用意だ。

「∴わたしに、選択権はなかったのよ」

アメリカ国防総省が、と言うところがぞっとする。

とんでもないところが動いていながら、千歳はそれが「裏側で策略を謀るダミーだ」と言う。

その確信はどこから来ているのだろう。

「DODねえ∴。FBIどころじゃないな」

「そうよ、だから、大事だとわたしは思ったの」

アメリカ国防総省が動かざるを得ないほどの事態が起こったと推測される。

FBIだったら、アメリカ国内の事件ですむが、国防総省が出てくると言うことは、軍隊絡みだと言うことだ。

「とんでもないことが起こったのね」

「∴どんな？」

「わたしがそんなことまで知るわけないでしょ」
でも∴。

言い放ってから彼女は言葉を続けた。

もしかしたら、と思う。

アメリカ国内にあって国防総省が出てくると言うことは、軍事機密絡みなのではないかと。

つまるところ、今回彼女に依頼された「暁の夜明けの騎士団日本支部」をつぶせというのほそういうことなのかもしれない。

なにか、裏社会の彼女ですら知らないことが動いているのではないか。

そんな気がした。

「さあ、どうなるか？」

どう世界が動くのか。

彼女にはわからない。

以前、アメリカで出会った殺人鬼の少女たち。

彼女らは、おそらく。

それは千歳の予想でしかないが、千歳よりもずっと年上だろう。そんな気がした。

「神の御心のままに世界は進んでいくの」

彼女はつぶやいた。

「無神論者じゃないのか？」

「都合の良いときだけ神頼みするのは、昔からの日本人の習性ですよ」

見事なぼつさり具合に、石垣は頭髪をかき回す。

「本拠地は？」

「：アメリカ、ロサンゼルス」

「そうじゃなくて、日本のだよ」

「どこだっけ？ 確か八王子だったかな」

「：八王子ねえ」

丘に囲まれた都市だ。

「あんなところに、隠れてるのか」

「まあ、暁の夜明けの騎士団って言っても、日本支部のお偉方なん

だから日本人でしょうけどね」

「どちらにしろ、依頼は依頼。どんなにわたしが綾瀬家に近くたって、国防総省には逆らえない。そんなことをしたら、わたしの身の破滅よ」

そんなことは許されない。

平和ボケした日本人。

そんな評価を受けている自分たち。

「国防総省は、わたしたちには拒否権はない」

言いながらパソコンの電源を落とした彼女はそうして立ち上がった。

「これから乗り込むのか？」

「近いけど、そんなことするわけないでしょ」

ものには順番がある。

彼女はつぶやいた。

「とにかく、焦ってはだめ」

言いながら彼女は携帯電話を取った。

それには、彼女が決して肌身離すことがないはずの、藤の御紋の寄せ木細工がつけられていない。

藤の御紋を身につけると言うことは、千歳が臣の名代であるということだ。

それを外す覚悟。

「…もしもし、高崎です」

彼女は電話口に向かって言った。

「おじさま、お元気ですか？」

柔らかい彼女の声。

しばらく電話をしてから彼女は通話を終えた。

「誰に電話？」

問いかけた男に、少女は肩をすくめた。

「高崎の遠縁のおじさまで、刑事なの」

「…えーと」

刑事、という言葉にいやそうな顔をした石垣に、千歳は首をすくめる。

「別にあんたをとっつかまえようとしてるわけじゃないんだから、そんなことはどうだっていいんじゃないの？」

「そりゃそうだけど、一応俺も人殺しだからな、刑事というのはどうも気持ちが良くない」

「人殺しはわたしも一緒よ」

冷静に状況を分析する。

自分は人殺しだ。

石垣が人殺しだというのならば、高崎千歳も人殺しだろう。

千歳は「花鬼」と呼ばれるようになった八年前に、覚悟を決めた。なにもかも背負い込むのだと。

「もう少ししたらおじさまが来るから」

彼女はそう言った。

彼女の真意。

アメリカの真意。

そして真実はどこにあるのか…。

それはわからない…。

「…暁の夜明けの騎士団ねえ」

そう男が言った。

目の前にいる珍妙なカップルの片割れの少女は、男の年の離れた遠縁の姪だ。

要するに他人に近い。

顎をなでた高崎和人は首をかしげた。

確か、彼の知っている年の離れた本家の姪は今年で二十一歳になるはずだ。

しかし、その姿は中学生かそこいらの少女のものだ。

上質の袴と、着物を着る少女が良家の子女ではないはずがなく、そんな単純なことが彼に彼女を「高崎千歳」であると認識させた。

風の噂ではそう遠くはない未来、本家を継ぐとか継がないとかと

いった言葉がささやかれていた。

「で、突っ込んでいいか？」

彼が少女に問いかける。

「ダメです」

少女の答えはにべもない。

「：あー」

高崎和人は頭を抱えた。

確か彼の認識では、現在の高崎本家の当主は彼女の母親の様子であるはずだ。

その程度の知識は分家の彼にも入ってくる。

「様子さんは元気？」

「お元気でいらっしゃいます」

静かな声で応じた少女に和人は、彼女の母親の面影を思い出す。母親によく似た少女。

「本当に千歳ちゃん？」

「はい」

はつきりと物事を告げる彼女の態度は、千歳が子供の頃から変わらない。

むしろ、年数を経たことによってより理知的に、理性的に彼女はそこにいる。

まるで暗闇を照らす灯籠だ。

淡く、光を指し示す。

綾瀬臣の足元を、確実に照らす優しい光。

「千歳か？」と問いかけた彼に、彼女は「はい」と答えた。

それだけで充分だった。

もちろん、疑問は多数残る。

しかし、暗闇の中に立つ孤高の彼女に、尋ねることができなくて彼は黙り込んだ。

問いかけられない。

それは、和人自身が、綾瀬家の護衛に就く高崎本家の重さを知っ

ているからである。

「：そっか」

彼女の覚悟を。

高崎本家に生まれた人間としての、覚悟を。

本家に生まれなければ、もっと幸せに、もっと普通に生きていくこともできたかも知れない。

「千歳ちゃんは様子さんに似てるな」

高崎家当主。

その座は、高崎本家でも綾瀬家の本家家長の座を継いだ者の番人を務める者が就くと、その昔から決まっている。

そのため、高崎様子も例外ではなかった。

行く行くは綾瀬臣が、綾瀬本家の家長を継ぐだろうとの見解が広まっていたため、その番人である高崎千歳が高崎本家の家長を継ぐだろうということが有力視されていた。

だからこそ。

その覚悟を。

和人は知っていた。

様子も同じだ。

古臭い言い方だが、高崎本家に生まれた者たちは覚悟をしている。

「：番人、か」

綾瀬家と高崎家をつなぐ絆。

古い時代から決められていた。

「様子は、わたしの母です。似ていて当たり前でしょう？」

彼女は目線を上げる。

そこは高崎千歳のマンション。

リビングに相変わらず、石垣はソファに。

そして遅れて来た高崎和人もソファに座っている。

「ああ、そうじゃない。そういう意味じゃない」

彼は自分の顔の前で手を振って、千歳の言葉を訂正した。

様子と千歳は親子だ。顔立ちなど似ていて当たり前なのだ。しか

し、根本的に似ているのはそこではない。

「：君の覚悟が、様子さんの覚悟と似ていると思ったんだ」

かつて、まだ警察機構がろくに働いていない頃、綾瀬家は多くの人間から狙われていた。

その当主たるや、特に。

その綾瀬本家家長を守ることは、高崎家の人間のつとめだった。自分の身の上を犠牲にしても守らなければならない。

その覚悟を。

「そうですか？」

千歳は母親と過ごしたことなどほとんどない。

生活のほとんどが、アメリカだった。

綾瀬臣についてアメリカで暮らし、アメリカで学んだ。

「：似ているよ」

高崎和人は苦く笑った。

親子故なのか、それとも高崎家に当主として担ぎ上げられる者特有のものなのか。

和人には判断できない。

千歳も、様子も、特別だ。

高崎千歳と、遠縁の叔父。

石垣は自分を放置して話をすすめる彼らに、眉をひそめただけだった。

「わかりません」

そんなこと考えたこともない。

千歳は、言いながらかぶりを振った。

同性の親であり、家長。

そんな存在の样子のことを、娘の千歳ですら畏怖をもって見守っていた。

どこまで生きれば、自分は様子を超えられるのだろう。そんなことを思った。

「わたしは、あの人を母親だと、思ったことはありません」

なにかを思うように彼女はぽりぽりとつぶやいた。

「わたしとあの人では立場が全く違います」

「祥子さんは幸太郎さんのため。千歳ちゃんは臣お嬢さんのため、か…」

的を射た彼の言葉に千歳は睫毛を伏せた。

わずかな動きに、彼は首をかしげた。

「なにを思っているんだ？」

「暁の夜明けの騎士団をどうやってたたきつぶすかを」

「違うな」

和人は即答した。

もちろん、それもあるだろう。

アメリカ国防総省から依頼された一件は、暁の夜明けの騎士団の殲滅。

しかし、暁の夜明けの騎士団の日本支部などつぶしたところだけが知れている。

それならば、その裏にある事実はなんだというのだろう。

「…わたしは、気になるんです」

静かに、彼女はとつとつと話す。

その姿は、まるで殺人者のものには見えない。

「どうして嘘をつくのか。どうして利用されるのか…」

言いながら立ち上がる。

「どうして臣お嬢様は、利用されなければならないのか」

わたしはいつも考えている。

千歳は窓の外の街並みを見つめて下唇をかみしめた。

「…臣お嬢様はただ静かに暮らしたいだけなのに。ただ、手を血に染めたくないだけなのに。なのに、どうして！」

叫んだ千歳は頭を両手で覆う。

上ずった少女の声に、石垣も、高崎和人も言葉を失った。

「だから、わたしは強くならなければ。お嬢様の手をこれ以上血に染めてしまう前に、わたしが…」

大きな黒い瞳にじわりと涙が浮かぶ。

千歳が、臣の前では決して見せない表情だ。

常に、臣の背中を守る千歳。

少女の姿をした花鬼。

小さな背中が決意をたたえている。

悲壮な決意だ。

「ちーちゃん…」

長い沈黙の後に、石垣が呼びかけた。

手を伸ばす。

細く薄い発達していない体で真剣を扱うのは相当の負担がかかるはずだ。

伸ばした手を、石垣は結局触れることもできずに、拳を作った。
触れてはいけない。

彼女と男たちを、薄いガラスのようになにかが隔てている。

「わたしは、強くなるのよ」
翼を。

彼女は広げようとしている。

強くなるために。

もしも、そのためにアメリカ国防総省が仕掛けたものだったのならば、それを仕組んだ人間は誰だろうか。

カーテンを握りしめた拳が小刻みに震えていた。

マジックボム。

カーリー。

そして、花鬼。

三人の殺人鬼のうちで、最もモラルに捕らわれているのは「花鬼」だ。

「お嬢様を守るために、わたしが殺人鬼にならなくてはいけないのならば、わたしは…」

そこで彼女は一呼吸おいた。

「…殺す」

振り返った彼女は、唇の端で微笑した。

着物に袴という姿でありながら、彼女の背中に翼を見たような気がした。

美しい双翼を。

幻覚のように。

「臣お嬢様を利用するなんて絶対に許されない」

固い決意。

「利用すると思うか？」

石垣の言葉に彼女は片目を動かした。

「臣お嬢様は天才です。お嬢様の殺しの腕を利用したい者は山ほどいます」

許さない。

千歳は手早く長い髪をくるりと結び上げた。

そこに刺さるのはスズランの紋章の入ったかんざしが数本。

彼女をよく知る者がいれば、それが暗器だとわかるだろう。

スズランのかわいらしい紋章。

高崎の人間は個人として動くときと、綾瀬家の名代として動くときと、紋章を変える。

それがルール。

高崎千歳の場合は、綾瀬臣の名代を名乗るときは藤の御紋を。そして、高崎千歳として動く場合は、スズランの紋を使った。

高崎家にゆかりのあるものであれば、その紋章をみればすぐに見当はつく。

「：なにかが動き始めてるなら、わたしはそれを解明する。そのためならどこへでも行く」

瞬きもせずに語る彼女は、その時初めて大きく翼を開いた。

ひとりの殺人鬼が、本当の意味で覚醒した瞬間だった。

殺人犯としての、覚醒。

本来そんなものは許されるはずがなかったのだが、それでも千歳にはその必要性があった。

綾瀬臣を守るために。

「わたしが二流だと言うなら、わたしは一流になるわ…」

千歳は目を伏せて腰の後ろ、帯に仕込んだ短刀を確認する。さすがに、白昼堂々日本刀を振り回すつもりはないようだ。

「：臣お嬢さんは今回のことを知っているのか？」

和人の言葉に、千歳はゆるく頭を振った。

「いえ…」

彼女は首を振って言葉を飲み込んだ。

「いいえ、知っているかもしれませんが。ですが、これはわたしの、花鬼としての仕事です」

殺すことを、生業とする。

母親、祥子と同じように。

千歳も同じ道を行く。

血の道を進め、と。

「臣お嬢様に、優しい時間を生きてもらいたいんです」
優しく、暖かな綾瀬臣。

誰よりも千歳が守らなければならない人。

がんと音をたてた。

壁に突き立てたかんざしが突き刺さる。

本気で人間に突き立てれば軽傷ではすまないだろう。

「わたしは、悪魔になる。その覚悟があるのよ…」

そんな女でもあなたたちはついてくるのか、と少女は問いかけた。

「当たり前だ。俺はあんたに惚れている」

石垣は即答した。

言葉に迷ったのは高崎和人だ。

彼女のそんな言葉に同意してもいいのかわからない。

姪が、殺人者になることを容認して良いはずがない。

だが、それでも、高崎千歳には高崎千歳の覚悟がある。

「わたしは、人殺しになる覚悟をしたのよ」

大きな瞳を開いたままで、彼女はそうして言い放った。

夢を見る。

ゆらゆらと。

女は目をわずかに開いてからほえんだ。

そうしてまた眠りにつく。

金色の髪が、ゆらゆらと揺れている。

紺色の瞳の女は、そうして膝を抱え直すと眠りの奥へと落ちていく。

彼女が「何者」であるのか。

彼女が「誰」であるのか、未だにその場所にいる者しか知り得ない。

金色の髪がゆらりゆらりと揺れる。

どんな夢を見ているのだろう。

それは幸せな夢なのか、それとも、誰か大切な人間の夢なのか…。

「おやすみ」

男の声が響いた。

女は眠る。

ただ静かに揺られながら。

「しかし、E782が奪われたとなると厄介だな」

男は、目の前に立つ白衣の中年の女を流し見た。

顔に火傷の痕を持つブルネットの女だ。

「：貴様はどう見る？ ガーゴイル？」

「あら、久しぶりにその名前を聞いたわね」

けろりとした表情でブルネットの女は笑う。

「わたしが、あの子を見ていたのは、七歳までよ。どうもこうもないでしょう？」

「保母適任とか言われていたのに育児放棄か」

皮肉げな男の声に、しかし女は動揺しない。

エイリーン・グレイシア・バークレイ。

それがブルネットの女の名前だった。

数ヶ月前に、カーリーに接触したのは彼女である。

「あの子は誰の手にも負えなくてよ。そんなことわかっていたことじゃない」

グレイシアは静かに笑う。

「それを、科学技術の結晶だとかお馬鹿さんなことを言う人達が、危険だと教えてあげたのに、A1294と引き離れたんじゃありませんか」

まるで人ごとのようにクスクスと笑っている。

「E782は、危険だったのよ。それを遺棄、もしくは放置するくらいなら核ミサイルでもたたき込んで、危険レベルが上がる前に殺すべきだったのよ」

こんなことになる前に、殺せば良かったのだと。

「：しかし、当時、E782を上回る個体などいたか？」

男に尋ねられてグレイシアは穏やかな眼差しのままで首をかしげる。

培養槽の中で眠る女を見つめていた。

「そうね、Wナンバー全員をもってすればなんとか止められたかも知れませんかよ？」

「Wナンバー全員を見殺しにしろと言うのか」

アメリカの科学技術の結晶を。

「：そんなお為ごかしよりも、E782のほうがずっと危険よ。あなたたちはそれを認識していない。今回のように、E782がテロリスト共に奪われることを全く考慮していなかったというの？」

静かに、低く、グレイシアは問い詰めた。

まだ、エイリーン・グレイシア・バークレイが研究所に在籍していた頃、彼女は、幾度となく進言した。

E782は確かに最高傑作であるが、最も情緒面に不安要素を抱える個体であると。

それを、研究施設の人間たちは体の良いおもちゃにした上、さらに、E782の精神安定に最も必要不可欠な存在、A1294と引き離したのだ。

「使い方を間違えれば、E782はアメリカを滅ぼす。その程度の計算もできずに小学校を卒業できたことがびっくりだわ!」

グレイシアは言い放った。

自分たちの自己顕示欲を満足させるためだけに、E782に対して過酷な実験を繰り返した。

E782は、それらの実験に耐え続け、そして、膨大な知識と、強大なパイロキネシスを手に入れた。

それが、今現在、犯罪者と呼ばれるトップシークレット、マジックボムの存在である。

生体兵器開発計画、通称、PLX。

そのプロジェクトの一環で生み出された人の姿をした兵器だ。

「:そして、あなたたちは」

グレイシアは嫌悪感を瞳に映す。

「いえ、わたしたちは、使い方を間違ったのよ」

苦々しくつぶやく。

それは、くだんのE782に対する哀れみからなどではない。

E782が生み出された頃から、それを知っていればこそその嫌悪感だ。

グレイシアは、再三訴え続けたのだ。

「あれは危険だと、だから言ったのよ」

結果的に、E782はケース・アングリーボマーと呼ばれる大事件を引き起こした。

世紀の爆弾魔事件。

それは世界を震撼させた。

「そのE782を、FBIとCIAが保護下に置いたのも、おまえの計算内か?」

壮年の科学者は、グレイシアに問いかける。

すると女はわずかに小首をかしげただけだった。

「∴あれは想定外ね。まさか、さすがにE782がただの人間になつくとは思わなかったわ」

まるで犬か猫の話をするような調子のグレイシアに、男は目を細めた。

彼女がマジックボムとまで呼ばれるようになった実験体のことをどのように思っているのかが謎めいていた。

会話中に情があるような物言いもすれば、真逆にまるで意識をもった生物とさえ認識していかないかのような冷徹さも伺わせる。

「ガーゴイル、おまえはE782をどう思っているんだ？」

「それはどういった意味？」

問われて、薄暗い研究室で彼女は首をかしげた。

「E782に情を抱いていたんじゃないのか？」

率直な男の言葉に、女は失笑した。

「あんなものに、どうしてわたしが情など抱かなければならないの？」

化け物。

人の手によって作り出された化け物。

「∴」

女の言葉に、男は息を飲んだ。

要するに、彼女は実験体E782に対して全く情を持っていないのだ。

「∴冷たい女だな」

「あれが人の形をしているから、いえ、女の形をしているから、あなたたち男はそのような愚かな気持ちを抱くんです」

保護しなければならぬ子供ではない。

むしろ、恐れるべき対象なのだ。

それを理解しろと、グレイシアは突きつける。

現実を。

「現実を。E782が奪われたという現実を目を正しく向け、認識

すべきなのよ」

後手に回れば最悪の結果を生み出すことになるだろう。

グレイシアはそう言う白衣のポケットに手を差し込んでくるりと踵をかえした。

金色の髪の方が眠る培養槽に背中を向ける。

今度こそ、失敗があつてはならない。

強い決意を秘める。

ガーゴイル。

かつて、生体兵器研究所で、そう呼ばれた科学者だ。

「愚かな男たち……」

冷ややかに、グレイシアはつぶやいた。

この研究所に在籍する男たちもE782を制御できると思い込んでいる。

そして、最も愚かなのは、E782に思いを寄せる男の存在だ。

「あんなものに恋をしたところで、まるで意味などないというのに」グレイシアは知っている。

E782には、そんな感情を理解できる心など持っていない。

「……あの男たちが、A1294と引き離れた時に、あれの心なんて最初から破綻しているのよ」

冷たく。

まるで氷のように吐き捨てる。

「あんなものは、失敗作なの」

前方を睨み付けるようにグレイシアは歩を進めた。

壁が途切れ、窓の外の光景が視界に入った。

春の活力に満ちあふれた外界。

陰謀などとはなんら無関係な世界が、目の前に広がっている。

「アメリカがいつ滅びてもおかしくない状況だというのに、のんきなこと」

彼女はつぶやいた。

なにやら噂では、テロリスト共に餌をまきつつその裏で奪還計画

を行うらしいということだが、はたしてうまくいくかどうかだ。

鍵は、問題のE782だ。

EVE-000-782はひどく不安定な個体だ。

その奪還計画。

いっそ殺してしまった方が混乱がないのではないかとさえ、グレイシアは思う。

しかし、そうまでして国防総省はEVE-000-782を失いたくないのだ。

自分が、国防のトップにあつたとしたら迷いなく抹殺を決断するだろうに。

情にほだされているのはどっちだと、彼女は思った。

「馬鹿馬鹿しい」

吐き捨てて彼女は床をつま先で蹴り飛ばした。

「これだからお役所仕事は」

目先の利益ばかりに捕らわれていて本質を見ていない。

被害の拡大を考えていないのだ。

苛立つままに独白する彼女は、ふと背後を振り返った。

白い実験着を着た、金髪の少女が壁にもたれて立っているのを見たような気がした。

まっすぐに、グレイシアの心さえ射貫くような水色の瞳。

知的な。

本当に、人間の腹から生まれてくれば、知的な子供ですんでいただろう。

しかしグレイシアにとって、金髪の水色の瞳の少女は実験体であり、兵器でしかない。

だから情もわからない。

「：ガーゴイル」

首をかしげた少女。

研究員の男に陵辱されても、その幼さゆえになにもわかっていない兵器。

彼女に好意を寄せるという、FBIの捜査官との接触は実験体の兵器である彼女の心をどのように変えたのだろうか。

グレイシアは単純な知的好奇心からそんなことを思った。

「男って、本当に単純ね」

そうして彼女は低く笑った。

彼女にとって、一番に大切なものは綾瀬臣だ。

母親でも、兄でもない。

まして、父親でもない。

幼い頃から彼女の内側にすり込まれたもの。

綾瀬臣が、なにより大切だと、彼女はたたき込まれた。

夕闇に沈んでいく街中。

テーブルの上に無造作に放り出された帯のついた札束がひとつ。

彼女はベランダに寄りかかったまま日暮れていく街を見つめている。

「飯はどうすんだ」

尋ねられて彼女はぐるりと顔を回した。

「そこにおいてあるわ、勝手に食べてきたら？」

無関心に応じた彼女に、石垣は肩をすくめた。

「食べないと動けないなら食べてきなさいよ」

自分はそうではないのだと、彼女は言外に告げる。

「：ちーちゃんも食いにいこうぜ」

呼びかけられた名前に彼女は瞳を回した。

まるでそこだけが別の生き物のようだ。

「その呼び方、ここだから良いけど、他でしたら殺すわよ」
物騒な言葉だ。

「花鬼、と？」

告げられた言葉に、彼女は答えずに夕暮れの街中に目線を戻す。

高崎和人はすでに食事のために外出している。

一方の石垣は、千歳が動かないため考えあぐねている。

「：おまえも食わないと動けないだろ」
細い体の彼女。

「あんたたちと一緒にしないで」
つつけんどんに彼女は彼に告げた。

どうしてこうも、彼女はまるで切って捨てるような言い方しかでき
ないのだろう。

そもそも、こんなだから、彼女は自分の人生を捨ててるように見
られるのだ。

刹那的な彼女の人生。

まだたった二一年しか生きていないというのに、その覚悟は老成
した人間の持ち物のようだ。

「わたしは、空腹なくらいがちょうど良いの」
短く、ぽつりとつぶやいた。

神経を研ぎ澄ます。

風が凧いだ。

彼女の黒髪をさらっていく。

袖がわずかにはためく。

桜色の小紋に、茜色の袴。

きつちりと隙もなく着物を着込んだ彼女の後ろ姿は、背筋が伸び
ていて美しい。

しかしすでに彼にもわかっているとおり、彼女が美しいのは姿だ
けで、その実、暗器だらけだ。

殺気立つ彼女にうっかり近寄れば、味方だろうにんげんだったと
してもただではすまない。

それがわかりきっている。
だから、触れてはならない。

「：一緒に食いにいこうぜ」
声をかけるが彼女は反応しなかった。

「：ちーちゃん？」

「うるさい…」

わたしに声をかけるなど、彼女は言う。

高崎千歳の中に沈むように眠っていた野生が目覚まし始める。

「少し黙ってて」

傭兵とは異なる、裏社会の人間。

犯罪者のひとり。

彼女は戦争屋ではない。

心の壊れたサイコパスでもない。

だからこそ、彼女は野生を取り戻すことに時間がかかる。

しかし、おそらく彼女がこうして表社会に生きるのも最後になるのだろう。

数度にわたる裏社会としての野生の目覚めは彼ら、高崎の人間の意識に変質をもたらす。

かつて、高崎祥子が綾瀬幸太郎のために表社会の人間であることを捨てたように、千歳は臣のために自分を殺そうとしている。

「綾瀬の番人は、こうして死ぬのよ」

それが覚悟だ。

自分自身を捨てる。

自分自身を殺す。

全ては綾瀬家のために。

そんな時代錯誤なことだと、誰もが思うだろう。

しかし高崎の人間にとって綾瀬の人間を守ることはなによりも大切なことで、自分自身を捨てる価値があった。

「それで、いいのか？」

石垣の声に、千歳は振り返った。

足音もない。

まるで蛇かなにかのようだ。

「：いいのよ」

生まれた時から運命づけられた。

綾瀬臣と同じ年に生まれたときに、定められた人生。

「わたしは、そうあるべきと運命づけられた」

それだけのこと。

たったそれだけのこと。

小さな顔がふわりと笑った。

儂げな笑顔。

そこには悲壮なものはない。

ただ当たり前の現実を受け止めるだけだ。

「なんか食ってくるわ……」

毒に当てられたように眉をひそめた石垣が上着をとってテーブルの上の札束から一万円札を抜いた。

「いってらっしゃい」

もちろん、彼女の手料理など期待するべくもない。

できないわけではなからうが、彼女はそんなことはしない。

少女の優しい声を背中に受けて彼は小さく息をついた。

手渡されたマンションの鍵。

夜半も過ぎてから、食事をすませて彼が戻ると、明かりのともされたリビングのテーブルには相変わらず無造作に札束がおかれ、そうしてその横にメモがおいてあった。

スズランの紋章のはいったメモ用紙。

こういった個人専用のものを高崎の人間と綾瀬の人間は持っている。

まるで、皇室のようだと彼は思った。

古いしきたりに捕らわれている家柄。

「客間にベッドがあります」

そこで寝ろ、ということなのだろう。

彼女の字で書かれた短いメモに、彼は客間を覗いた。

ベッドがいくつもあり、ひとつには高崎和人が眠っていた。

さすがに、花鬼と呼ばれる千歳の部屋は覗く気になれず、彼はあいているベッドに座り込むと息をついた。

静かな部屋の中に寝息が響く。

彼女の家。

「高崎家、か…」

石垣はぽつりとつぶやいた。

彼女の遠縁の叔父にあたるという高崎和人ですら、本家のありようには戸惑いを隠せないというのに、どうして一般人の石垣が当惑しないでいられないでいるというのだろう。

高崎家と綾瀬家の深いつながり。

それは深く強い。

誰も割っては入れない。

かつての彼女らの学友たちの誰が、そんなに重いつながりを持っていたなどと知っていただろう。

知っていたら、彼女に恋をしなかったかと言われればそれもわからなかったのだが。

知っていたところで惹かれる気持ちはどうすることもできなかったのかもしれない。

そんなことを思う。

「ちーちゃん…」

彼女の名前を呼びたかった。

彼女のかつての女友達のように。

しかし、そう呼ぶこともできないまま彼女は遠い場所へと飛び去った。

いや、まだ、飛び去ってはいないのかもしれない。だが、どうすればいいのだろうか。

彼女を呼び止める術など彼は知らない。

高崎千歳は、綾瀬臣という最も遠い場所にいる人間のそばに立つ者。

綾瀬臣を守る者。

そんなことを思いながら、彼は目を閉じた。

戦いに赴くために。

彼女と戦うために。

まだ、石垣にはわからない。

彼女のそばにいてもいいのか。
彼女に手を伸ばしても良いのか。

翌日、彼らは八王子に向けて出発した。
移動距離は短い、暁の夜明けの騎士団は過激派とも目される集団だ。

どんなお出迎えが待っているかわからない。

「情報はどんな感じだ？」

ハンドルを握る男が問いかければ、千歳は後部座席に座ったまま
で窓の外を見つめている。

高速道路でほとんど景色が変わらないのが退屈な気分になる。

高崎和人が助手席にいるのが石垣としてはいまいちおもしろくない。

「：さあ、あまり興味ないから」

確かに、彼女が情報収集にかけずり回っている所などあまり想像
できない。

世界に名を馳せる殺人鬼のひとりとして数えられるのはその戦闘
のスタイルにもある。

花鬼、要するに高崎千歳は、マジックボムやカーリーとよく似た
戦闘スタイルを持っていた。

「そうか」

彼女は力でねじ伏せる。

向かってくる者の全てを、たたきつぶす。

それが花鬼の戦い方だ。

「いいか、犠牲は最小限だぞ。いくらアメリカが出張ってたって情
報が一人歩きするのは早いんだからな」

一応、常識人的な言葉を吐き出す高崎和人に、少女は瞳を動かす
だけだ。

「善処します」

なんともやる気がなさそうな返事だ。

表情が全く動かないだけに、その言葉は恐ろしく信憑性がない。

「そうしてくれ」

和人は彼女の言葉を聞いて首を前方に戻した。

これから始まるのは、おそらく殺戮だ。

正確に言えば、彼らは彼女の戦闘を見たことがない。

それゆえに、恐ろしさは募るばかりだ。

殺人鬼、花鬼。

その名前が一人歩きしている。

どれだけ殺すのだろう。

良識的な日本人である和人にはそれが恐ろしい。

ギャングによる大量殺人がしょっちゅう起こっているような国とは違う。

ここは日本だ。

世界で一番に平和な国のひとつ。

「：ご心配なさらずに」

感情を感じさせない彼女の声に、彼はぞっとした。

言っていることは優しいが、彼女の全身は暗器だらけだ。

よく重たくないものだ、と、石垣は思った。

その重さを細い体が支えている。

春の桜の咲く季節。

彼女は血の雨を導くのだ。

ひとりの裏社会の大量殺戮者として。

しかし、強大な権力に守られた高崎千歳に日本という国は手を出せない。

どんなに極悪非道な殺戮者であっても、だ。

もっとも、彼女は決して極悪非道などではないし、決して利己的な殺人に手を染めるわけでもない。

そこに存在しているのは、一部国家からの依頼と綾瀬家を守護するという正当性のある理由からだ。

今回の依頼先はアメリカ合衆国防総省ということになるが、そ

れでもあまりにも大量に虐殺劇を繰り広げれば日本の刑法をねじ曲げないでいられるわけがない。

だから高崎和人は警告する。

かばいきれなくなるほど、殺し尽くすな、と。

「わかっています」

千歳は繰り返した。

わかっている。

どちらにしたところで、表社会に対する表向きの顔を持つ以上、必要以上に人殺しを行うことは好ましいことではない。

もみ消す手間が面倒だ。

千歳は単純にそんなことを考えた。

自分は、マジックボムやカーリーとは異なる。彼女らは裏社会としての顔しかないから楽で良い。

世間とうまくつきあっていくことなど考えなくて良いのだ。

しかし、高崎千歳は違う。

高崎千歳という顔と、花鬼という顔を全く分けなければならぬ。世間的にそれが知られれば、彼女は日本で生活できなくなる。

そして彼女が知られると言うことは、綾瀬臣の護衛にも支障が出ると言うことだ。

だから、彼女は最善を尽くす。あらゆる意味で。

「あー、あんたいろいろ面倒くさいのよね。いいわよ、人殺しならわたしがしてあげるから」

以前、ワシントンで出会った黒髪の少女はそう言った。

別段、気を遣ったわけでもないのだろうが、彼女が綾瀬臣に属する者だと知っていてこそその譲歩だったのかも知れない。

もっともカーリーは人殺しを行うことに対して遠慮などなかったから千歳の分まで請け負ったのかもしれないのだが。どちらにしろ、少女連続殺人の犯人逮捕に巻き込まれたときにはカーリーがその場にいたおかげでいろいろ助かった。

カーリーやマジックボムと比較すれば、高崎祥子にしろ高崎千歳

にしろ殺した人数はたかが知れている。

しかしその殺人のすべはかなり効率的だ。

それゆえに希代の殺人鬼と恐れられるのである。

八王子の郊外。

白い四階建てのビルがある。

窓が異様に少ないのは構造上だろうか。

フェンスに囲まれた、芝生の向こうにある。

その建物を見つめていた少女は、後部座席から石垣の肩を軽くたたいた。

「おじさまに車をお任せしても大丈夫？」

細い小さな手はわずかに冷たくも感じられる。

「まあ、車が無事なら俺は文句ないが」

「三人でいったら確実にやられると思うわ」

「じゃ、任せる」

石垣は二つ返事で了承すると、助手席の高崎和人を見やった。

「…わかった」

「おじさまは、立場上わたしたちに荷担するわけにはいかないでしょう？」

「そうだ。」

彼は警視庁の人間だ。

犯罪者に荷担することは決して許されない。

もつとも黙認することも荷担することと同義なのであろうが、それでも罪に自ら手を染めるわけではない。

知らなかったで済まされるわけではないが、彼女が助けを求めたのだ。

手を差し伸べずにはいられなかった。

それだけのことだ。

「いざとなれば言い逃れればいいんです」

しらっと彼女はそんなことを言った。

どんなに古くさい見解をもっていたとしても、そのあたりはさす

がに現代っ子である。

「あれか？」

彼女の目線の先にある白いビルを見やった二人の男たちは、興味深げに目を細めた。

車は路肩に停まっている。

車内の時計を見やった彼女は火箸のようなものを手にした。長い釘のようだ。

片方は四〇センチほど。もう片方は三〇センチほどで長さが異なる。

それはなんだろう、と男たちは思った。

彼女がひとりで動くときに決まって使うものだ。

「なんですか？」

彼らの視線に気がついたのか、千歳は体のあちこちに仕込んだ武器を確認する。

自分で怪我をしないのが不思議に思えるほど、服の至る所に武器が仕込まれている。

「なんだ？ それは」

「見てわかりませんか？ 火箸ですよ」

どこからどう見てもただの火箸ではないだろうに。

彼女はけろりとした瞳のままと言った。

「そんなもの武器として使うのか？」

「使い道はいろいろあるのよ」

言いながら彼女は歩道に降りると、石垣を見やった。

「行くわよ」

あちこちの戦場を歩いてきた彼から見れば、千歳の姿はおよそ戦闘向きではないが、彼女はあまり気にしていないようだった。

丁寧な袴をさばく彼女は背後を振り返らない。

石垣がついてきているのを信じて疑っていない。

そんな彼女の様子に、青年は頭をかき回した。

「…百戦錬磨って感じだよな」

あきれたようにつぶやく。

確かに、一般的な生活をしている者と、千歳の生活では覚悟が違
う。

ブーツの音が響く。

ミィハーな者が見れば大正ロマンなどと茶化したかもしれないが、
石垣には茶化す勇氣などない。

そんなことをすれば殺されかねない相手なのだからやむをえない。

「どうやって入るんだ？」

「いれてもらうのよ」

彼女はあっさりと言った。

「なるほど」

最初から秘密だって潜入するつもりなどないらしい。

では、どうやってあらゆる意味での被害を最小限に抑えるのだろ
うか。

睡眠ガスなどといったものを彼女は持っていないし、石垣ももっ
ていない。

石垣が持っているのは拳銃とナイフ。

千歳に至っては暗器がほとんどだ。

そんなことを考えている間に、小紋に袴とブーツという大正ロマ
ンな格好の少女は遠慮のかけらもなく入り口の守衛のところに顔を
出した。

まったくもって容赦がない。

「こんにちは、板橋中学校の新聞部ですが、キリスト教のことにつ
いて取材させていただきたくて来たんですが」

「アポはあるのかね？」

板橋中学校などというのはそもそも口から出任せもいいところだ。

「：ないんですけど、ダメですか？」

困ったように眉尻を下げる美少女。

確かに、体の薄さといい細さといい中学生で通るのだろうが、そ
れは二〇代の成人者の場合抵抗などは感じないのだろうか。

そんなことを石垣はふと思う。

「むう…」

つぶやきながら中年の男は腕を組んで考え込んだ。

「ちょっと待っていなさい」

言いながら背中を向けた中年男に、少女は口元をつり上げる。

冷ややかな笑顔に、石垣はぎくりとした。

「三十分くらいならかまわんそうだ」

「はい！　ありがとうございます！」

ややしてから男が振り返る。

少女はぴよこんと跳び上がって喜ぶ振りをしてみせると、「おじさん、ありがとうございます！」とぺこりと頭をおろした。

中学生と言ってる割に、少女が上質の和服を着ていることとか、背後に屈強な男がいるといったことにはあまり考えが回っていないらしい。

どちらにしろ、騎士団の守衛ではなく雇われの守衛なのだろう。

そんなものか、と石垣は冷静に分析した。

確かにこの程度のセキュリティと、平和ボケ具合では潜入など秘密だっする必要はないのかもしれない。

外国で秘密基地に潜入するわけでもない。

住宅街の郊外にある新興宗教のセキュリティが異常に高ければ、住民たちも警戒するだろう。

特に日本のように新興宗教に対しての偏見が強い国民では。

「そちらは、君のお兄さん？」

守衛の中年男性は美少女相手にでれでれと鼻の下を伸ばしている。

「はい、車に乗せてきてくれたんです！」

ニコニコと、完全無欠の笑顔だ。

さすがに良家の子女。

もっとも、中年男が自分の惚れている娘に対して鼻の下を伸ばしているという構図は、石垣にとってみればおもしろくないもので、許されるならば目の前の中年男を殴り飛ばしたい気持ちに駆られて

いたりもする。

そんなこんなで、結果的に穩便にビル内に潜入をはたした彼らだった。

「じゃあ、わたしはこれで」

会議室に彼らを通した守衛が目の前から消えるのを確認してから少女は首をかしげた。

「さて、これからどうしようかしらね」

「お偉いさんの居場所の予想はついてんのか？」

「まあ、だいたい偉い人が集まる場所って決まってるのよね」

彼女はそう言った。

「日本支部本部って言ったってさ、ここに千人いるわけじゃないし」
四階建て。

おそらく中にいる人間は五十人かそこいらだろう。

ただの教団支部だ。

「とりあえず、ターゲットの三人がいるのはわかってるけど、それ以上はね」

わかりかねる。

そう言った彼女は帯の飾り紐を音を立てて引き抜いた。

「おい、それ…」

まさか。

彼の言葉に、千歳はにやりと笑う。

「日本で活動するときはこれが一番なのよ」

音もなく、殺しもしない。

だからこそ、彼女は和服で動くのだ。

ありとあらゆる場所に暗器を携えることができるから。

「ぱっと見た限り、セキュリティはザル。カメラもない」

そうつぶやく彼女の目の前で、会議室の扉が開いた。

「お待ちせいました」

さわやかな青年の声を千歳は聞いていない。

一気に飾り紐で男の首を締め上げた。

泡を吹いて倒れる男の親指を後ろ手に糸でくくりつけると、会議室の扉から悠々と出る。

扉に細工をして出れないようにした彼女は音もなく廊下を駆けていく。

ブーツをはいているというのに器用なものだ。

素早く階段を駆け上がって彼女は最上階に出た。

階段の途中ですれ違った事務員らしい女性信徒は膝で蹴り上げて失神させた。

あまりの手際の良さに石垣は舌を巻いた。

「さて、人が集まってくる前にさっさと片付けないとね」

ぱんぱんと手を打ち合わせてから、千歳は笑う。

無邪気な笑顔は、彼女が小学生の頃から変わっていない。

「騒ぎを大きくすることが目的なんじゃないのか？」

「違うわね」

尋ねられて、彼女はあっさりと否定する。

「騒ぎを大きくすることが目的なわけじゃない。暗殺されたって結果が大事なのよ。今回の任務の場合」

彼女は正確に依頼の意図を読んでいた。

徒競走で走り出す前の出走者よろしく彼女は息を吸い込んだ。

それだけで彼は彼女がなにをしたいのか悟った。

「行くわよ」

言葉は少ない。

石垣の脳裏に、昨晚、彼と彼女が共に見たビル内の地図が浮かんだ。

「おそらくこの部屋」

彼女が昨夜告げた場所だ。

突き当たりの手前の右の部屋。

体の小さな彼女は、それでも扉に体当たりするように飛び込んだ。同時に腰の帯から五本の短刀を抜いた。

刃渡り十センチ程度の細い短刀だが、要は急所を狙えばいいこと

だ。

鮮やかな動き。

それは確かに訓練された人間のもの。

しかし、それでも尚、彼女は言う。

自分は母親にはかなわないのだ、と。

室内にいた男たちの顔を瞬時に見極めると、一息に指の間に挟んだ短刀を翻す。

相手は、大きく体を回転させ小紋の袖に隠れた彼女の顔を認識する間すらなかっただろう。

それほどまでに彼女の動きは素早かった。

彼女の放った短刀はひと思いに三人の男たちの頸動脈を切り裂いた。

抵抗する間もない。

呆然とする男たちの背後に回り込んだ彼女は、曰く火箸だと言っていた鉄の長い釘で男たちの頸椎を貫く。

返り血を全く浴びることもなく体を離れた彼女は素早い動作で短刀を拾い上げると、わずかに顔を傾けて耳を澄ました。

足音が聞こえる。

殺害の手管は一瞬。

殺人鬼と呼ばれる彼女の腕前。

それを石垣は目の当たりにした。

「帰りはどうするんだ？」

問いかける。

「窓があるじゃない」

彼女は折りたたみ式の椅子をひろうと一気にたたきつけた。ガラスが割れる。

それと同時に彼女は窓から飛び出した。

「はちゃめちゃだな」

窓にかかったワイヤーで素早く降りていく彼女に続いた彼は下から少女がワイヤーを狙うことに気がついて慌てる。

小刀で一氣にワイヤーが途切れた。

二階の途中から転げ落ちる結果になった彼は、千歳の暴挙に文句を言いつのりながらも身の安全には変えられず走り出した。

とにかく、殺人鬼としての彼女の行動はなにからなにまで考えられない。

二メートルほどもあるフェンスに火箸を支えにして軽々と跳び越えた彼女の殺害手段はまさに風のようだ。

軽い少女ゆえの行動力。

石垣は彼女についていくのが精一杯だった。

しかも武器の回収を忘れていないし、薄での手袋を最初からしていたため指紋も残していないという徹底ぶりだ。

証拠がほとんど残っていない上、アメリカ合衆国がもみ消すとも宣言した依頼だ。

「お仕事はこれで終わり」

高崎和人が待機する場所まで軽やかに走った彼女は、素早く車に乗り込むと発車を急かした。

もみ消してくれるとしても、足がつくのはさけたいところだ。

手早く結い上げた髪を下ろして、袴を脱ぎ捨てる。丸めてカバンに放り込むと帯をほどいて暗器を全て巻き込むと小紋を脱いだ。

ジーンズのホットパンツに、Tシャツに上着という軽やかなファッションで、彼女は黒髪を揺らした。

「帰りましょ」

そう言って高崎千歳は笑った。

日本人が日本国内で依頼をこなすというのは、危険な行為なのだ。だから、千歳は自分の安全が確保できることを確認しない限り、国内の依頼には手を出さない。

それがルール。

彼女なりの。

暁の夜明けの騎士団を対象にした事件は世界各国で起こった。もっとも、それすら高崎千歳は予想していた。

おそらく、混乱を巻き起こすならば同時に複数件起こさなければならぬ。

その日本勢力をつぶすために高崎千歳は雇われたのだ。

そんなことわかっていたが、ただの裏社会のひとりである彼女に選択権などない。

所詮彼女は一個人なのだ。

「：なにが起こるっていうの？」

高崎千歳はぼつりとつぶやいた。

世界が動こうとしている。

「何が始まるの？」

彼女は自分の体をかき抱く。

世界に存在する「暁の夜明けの騎士団」に対して行われた一斉攻撃。

それを指揮したのはアメリカ合衆国。

ならば、その裏にあるだろう疑惑。

高崎千歳は一般的な感覚を持つ常識人だ。

そして、常識人であるからこそ、その意味に気がついた。

なにかが、始まろうとしている。

国家による陰謀などではない。

おそらく、もっと恐ろしいものだ。

「ちーちゃん……？」

「なんでもない」

＊

暁の夜明けの騎士団。

そう名乗るキリスト教原理主義団体。

その本部の地下でそれは行われていた。

首輪をつけられた小さな子供の巻き毛の金髪は、無残に刈り取られている。

血が止まるたびに傷つけられた腹と胸は化膿していた。

虚ろな眼差しの子供は血で赤黒く汚れた下着姿で檻の中に転がっていた。

ばちばちと指先で炎が爆ぜる。

「わたしたちのためにその力を使え」

告げられて少女は首だけをかるうじて動かした。

もうほとんど体を動かすだけの力も残っていない。

しかし、彼女周囲で炎が爆ぜるのは生存本能により近い。

「あ…」

体も動かない。

声も出せない。

考えすらまならない。

ここはどこで、自分は何なのかということが、今の彼女にはわからない。

痛みも、苦しさも感じない。

目の前にある鉄の格子。

捕らわれているのだということだけを自覚した。

けれども、それがわかっていても今の彼女にはなににもできない。

「わたしたちのために使え」

少女は疲れた頭で頷いた。

なにも考えられない。

どうすればいいとか、どうしたらいいとか…。

今、ここには彼女の手助けができる者が誰もいないということだけ。

それだけがわかる。

気を失った彼女の入った檻が屋外に担ぎ出された。

まるで動物園のライオンかなにかを扱うかのようだ。

危険な子供を運ぶ。

ヘリコプターによってその檻は空港まで運ばれ、そこから航空機で輸送される。

アメリカの中心部へ。

彼女は自分の足ではなく、自分のよくしる街に戻ってきた。
恐ろしい狂犬として。

方向性を失った少女の力は輸送の途中でも行く先々の施設を破壊していく。

公的な機関も民間企業も、もしくは一般家庭でさえ。
対象は無差別だ。

彼女を輸送する「暁の夜明けの騎士団」自身にも危険はつきま
った。

「EVE-000-782」

犯罪者としての通り名をマジックボム。

金髪の巻き毛の殺人鬼だ。

もしも「暁の夜明けの騎士団」の目的を知れば、誰もが「超能力
者を使ったテロリズム行為」など馬鹿馬鹿しい漫画の中の存在だと
笑うだろう。

しかし最強の人造生命体にして、最強の殺人鬼であり最悪の国家
機密である、少女姿のマジックボムを使えばそれは可能なのだ。

自身を今は、アリッサ・ノースウッドと名乗る。

ワシントンのビルの屋上に檻のままで運ばれた。

まるでものかなにかのように。

周囲にあるものの全てを壊してしまえと、すり込まれた彼女はた
だ無作為にパイロキネシスを振るう。

そこに彼女の意志はない。

ただ、淡々と視界に入ったものを爆発させるだけだ。

一ヶ月ほど前、インドで覚醒した彼女の力はすでに想定範囲を
逸脱していた。

彼女の目線の先には、ホワイトハウスが映っている。

「全てを巻き込み、殺し破壊の限りを尽くせ」

自分の中に刻み込まれたコード。

疲弊しきった彼女は考えることが億劫で目を閉じた。

寒いのか、痛いのか、苦しいのか、わからない。

たぶん、自分は死ぬのだ、と彼女は思った。

そんなことを思った時、突然頭を掴み上げられた。腹の傷に指が食い込む。

痛い認識する間すらない。

頭を捕まれた衝撃と、腹の傷をえぐられる衝撃に眉を寄せて言葉にならない声でうめいた。

「…寝るんじゃないわ」

あんたを捕まえるためにどれだけ犠牲を払ったと思っているの。

一方的な女の声に、アリッサは目をかすかに開いた。

「目の前にある、全てのものを破壊するのよ。アメリカを…！」

歌うように告げた女。

傷に女の指が食い込む。

先ほどまで止まっていた血が再び流れ出す。

それでも尚、ご丁寧に輸血はつながれたままだ。

出血多量で彼女が死なないようにと言う配慮からか。

それを見やっけてアリッサは皮肉げに笑った。

目の前に広がるワシントンの夜景。

見慣れた街。

白く輝くホワイトハウスとワシントン記念塔。

ワシントンD・C.を象徴する建造物だ。

世界中の人間で知らない者はいないだろう。

檻の中で彼女はあの街を眺める。

もう、なにもかも考えるのが億劫だった。

重い片手を振りかざす。

どんっと少女の体に衝撃が走った。

視界の脇で女の体が粉々になって吹き飛ぶ。

骨、肉、内臓。

全てが微塵になって吹き飛んだ。

「壊せばいいのよ…」

アリッサはつぶやく。

痛みの中で彼女はふらりと立ち上がった。足元はおぼつかない。ひしゃげた檻の中から彼女は歩いて出る。

アリッサ・ノースウッドとして住んだ街。見慣れたホワイトハウスのワシントン記念塔。

それらの風景に、彼女の記憶が重なった。

「：ジョージ」

ぽつりとつぶやく。

視界の裏に思い出すのは、多くはないが少なくとも人間たちの、彼女に向けた笑顔だ。

がらがらとなにかが崩れ始める。

音を立てて、碎ける。

短く刈り取られた金髪の頭を抱えて、彼女は不意に絶叫した。

全てを揺るがす叫び声だ。

声が言葉にならない。言葉など意味を持たない。

彼女の内側でなにかがぶつりと音をたてた。同時に響くのは破壊の轟音だ。

彼女の力が暴走する。

かつて、世界を相手取るためにデザインされた彼女の破壊の力が。

全てを殺せ、と。

全てを破壊しろと。

どうすればいいのかもわからない。

自分の中の力を制御できない。

「：E782！」

声を聞いたような気がした。

その声に、少女は目を閉じる。

どうすることもできずに。

なにもわからないまま。

暁の夜明けの騎士団の企みがどこにあるのかなど、彼女には知るよしもなかったが、ただすり込まれた攻撃命令を繰り返すばかりだ。

荒れ狂う嵐の中に、彼女はある。

その中心に。

金髪の青年が駆け寄った。

白いシャツとジーンズというひどくシンプルなファッションだ。

「E782…！」

短い金髪の小さな頭の、小さな彼女を抱きしめる。

「…違う」

違うわ…。

彼女はつぶやいた。

アリッサ・ノースウッド。

そう名乗る少女。

地響きの音と共に、彼と彼女の足元が崩れる。

無差別な破壊に、青年は彼女を守るように抱きしめると目をきつく閉じた。

終章 地獄の水底へ

数日前のことだ。

「ジョージ・リートはいるか？」

尋ねてきたのは若い男だった。

白人で金髪に青い瞳の。

巻き毛のブロンドが、なぜかアリッサを思い出させる。

この数週間というもののジョージは動揺していた。

アリッサが死んだという情報が、裏社会を駆け巡ったからだ。

彼はFBIの捜査官のひとりではあるが、それ以前にごく一般的なアメリカ国民だ。

ジョージには自分など蚊帳の外で、その内側では彼の預かり知れないことが発生していることを知っていた。

彼は、裏社会に住む犯罪者たちのように、身軽な立場ではない。

誰しもそうだろう。

犯罪者たちの世界はひどく自由だ。

「…君は？」

「俺は、EVE-000-782の兄だ」

男は素っ気なく答える。

なにやら、インターネットの掲示板にでも書き込みされそうな言葉である。

そんなことをジョージは思った。

「EVE-000-782」という聞き慣れない言葉に、狙撃手の男は眉をひそめた。まるでなにかの型番のようだ。ジョージにはその番号がなにを示しているのかわからないが、人の名前であるらしいということは、とりあえず理解できた。

「失礼。あなたにはアリッサ・ノースウッドの兄、と言ったほうがわかりやすいか」

感慨もなにも見せずに彼はつぶやく。

玄関口で話をする内容でもない判断したジョージは、訝しげな眼差しのままで青年をリビングに通してソファをすすめる。

灰色の地味なソファに青年が座る。

ジョージは彼を見つめた。

容姿は三十代に届くか届かないかといったところだろう。少年ほど若くはないが、壮年と言うにも年老いていない。

青年は境目にある微妙な年齢だ。

そんな印象。

金髪の巻き毛の、青い瞳の青年。

アリッサと異なるのは、やや彼の瞳が濃い青をしているということくらいだ。

言われてみれば彼女と似ているような気もした。

「：俺は、ADAM-000-1294という」

アダムとイヴ。

聖書からもじったのだろうか。

ジョージ・リートはそんなことを思う。

彼は生粋のアメリカ人だが、他国の人間からよく言われることだが彼はそれを「もつともだ」と思う。「アメリカ人は聖書が好きだね」と多くの国の人間から言われる。

もつとも、それはアメリカ合衆国の人間の約七十七パーセントにも上る人口がキリスト教信者だからである。

プロテスタントが五十二パーセント、カトリックが二十五パーセントだ。

だからこそ、アメリカ合衆国内において、彼らは聖書に対して関心が高い。

真面目な眼差しで自分の名前らしい番号を告げた彼に、ジョージは警戒心を解かない。

美青年と言える顔立ちだがジョージはゲイではない。

この場合どう対処したらいいのだろうか。

「長い間、アリッサを面倒を見てもらっていたと聞いている」

長く彼女を見つめてきた。

ジョージはアリッサを見てきた。

彼女だけを。

彼女の本当の名前は「EVE-000-782」というのだと、彼は告げた。

まさに型番だ。

「そんな番号がアリサの名前であってたまるか」

型番にも似た名前に嫌悪感がわき上がった。

ジョージが低く吐き捨てる。

彼女がどんな名前であれ、彼女を見守ってきたジョージにとってはやアリッサは大事な存在以外のなにものでもない。

その気持ちがどんなものであれ、彼は彼女を愛し慈しんできた。それを突然、番号で呼ばれればとっさに頭に血が上っても仕方なかっただろう。

「：我々のもつ個体識別番号だ」

我々には名前はない。

そう彼は言う。

「そんなくだらないことを言うためにうちに来たのか？」

アリッサがものだと、青年は言いに来たのだろうか。

そんなことをジョージは思った。

突然そんなことを一般人である彼に言いに来た。

その理由が理解できない。

目の前の青年の意図が彼にはわからなかった。

「：俺は、あんたに真実を告げに来たんだ」

そう彼は言った。

真実。

そもそも、真実と嘘の違いとはなんなのだろう。

真実と現実の違いとはなんなのだろうか。

ジョージは思う。

「：真実？」

話の展開が突然すぎてジョージには理解がついていかない。

困惑して目をさまよわせる彼に、ADAM-000-1294と名乗った青年は目の前の壮年の男を見つめる。

「俺のことはA1294でいい」

彼は彼女の遺伝子上の血縁だと言った。

遺伝子上の血縁であり、本来、生体兵器研究所で作られた子供であることを。

それ故に彼らは識別番号以外の名前を持たない。

E782はとA1294は遺伝子上の血縁関係にあった。

そのためか、A1294の後に生み出されたE782はひどく情緒的に不安定な一面を抱えていたが、その不安定な部分を補完していたのがA1294だった。

E782はA1294に保護されることによって安定し、A1294はE782を保護することによって互いの不安定な面を補っていた。

そのE782は研究所では最高傑作と呼ばれるほどのパイロキネシスを持ち、そして愛らしい外見によって研究所の小児性愛者からおもちゃにされることがままあった。

逆に、A1294は強力なテレパスの持ち主でそれが故に、無意識下からE782の精神を支えていた。

元々、誰かに依存することで精神の均衡を保つE782は虐待されることによってより不安定になり、たびたびパイロキネシスを暴走させ、そして研究所内で多くの犠牲者を出した。

それを諫めたのがエイリーン・グレイシア・バークレイだったが、彼女の言葉も聞かずに一部の学者たちは、主任研究員の彼女の忠告も聞かず、虐待を続け、そうして過酷な実験を繰り返した。

昼間は過酷な実験を耐え、そして夜間は性的虐待を耐え続けた。いくら人工的に生み出された子供であるとは言え、そんなことをされ続ければ精神が破綻するのは当然の成り行きで、彼女の心が暴

走するのは時間の問題だっただろう。

いつか、A1294の精神的な補完すら追いつかなくなり、そうして研究施設に悲劇が起こった。

E782の感情が研究施設の敷地の全てを、パイロキネシスで吹き飛ばしたのだ。

逃げおおせたのは一部の研究員達と、一部の被験体のみだった。

一部の被験体。

それが、A1294を含めたWナンバーと呼ばれる被験体達、十二人である。

本来、アリッサも同じくWナンバーの被験体であったのだが、彼女の暴走のために十三人から十二人になった。

Wナンバー。

ウェポン・コードとも呼ばれる。

研究施設と国防総省でのみ使われるコードであるが、彼らを端的に「Wナンバー」と呼んだ。

「ウェポン・コード？」

「俺たちは人間じゃないからな。兵器としての番号。それだけだ」

そして目の前の彼こそが「W11」であり、アリッサが「W12」というウェポン・コードを所有する。彼女は研究施設を吹き飛ばして、そして…。

「…そしてE782は消えた」

消えたと思われていた。

一部では、死んだものとすら思われていた。

そうこうしているうちに始まったのが、悪名高いケース・アングリーボマーである。

彼女は自分の怒りのむくまに研究員たちを探し出して殺して回った。まるでかつて過酷な虐待を加えた男たちに対する恨みを晴らすかのように。

彼女は、世界に散らばった研究員達を探して殺した。

だからこそ、ケース・アングリーボマーは世界中で起こり、そし

て殺された。

アジア、欧州、アメリカ、アフリカ、イスラム。彼女は世界を回って殺し続けた。

その行く先で彼女はシュリ・シャンカルに会い、そして事件が始まる前に、ジョージ・リートに出会ったのだ。

それがケース・アングリーボマーの真実だと彼は言った。

性的な虐待を受けていた彼女。

そして過酷な実験を繰り返された。

「：ちよつと待て、アリサは虐待されていたのか？」

性的な虐待、という言葉は飲み込んだ。

そう。

ジョージ・リートにとって、それは汚らしいものだった。

性的な虐待を大切にしていた子供がされていたことなど、誰が認められるだろう。いや、認められるわけがない。

誰も大切になっている人間の不幸を望むわけがない。

眉を寄せたジョージに、A1294は肩をすくめる。

性的虐待を受けた子供は一般的に、深い心の傷を残す。おそらく

アリッサも「そう」だ。

彼女をものとして扱う人間達は、ただ淡々と彼女が虐待されたと言語るが、アリッサの精神に深く根付いた傷跡は誰が癒せるというのか。

「アリッサは覚えてないと思うけれどもね」

幼い頃に受けた性的虐待。

たとえそれが、被験体であつたから受けたのだとしても彼女の心に傷を負わせるには充分だ。

彼は何十人ものレイプ被害者を見てきたのだ。

呆然とした。

レイプの被害者達と変わらない。

むしろ、幼い頃の性的虐待を受けた子供達は、正常な心の発達をなしえない。

「：アリサ」

そんなことを、ジョージは考えもせずに彼女にキスをした。
アリッサを抱きしめた。

アリッサの体に欲情した。

瞬きもできない男を尻目に、青年は睫毛を伏せる。

「：問題はそんなことじゃない」

冷ややかに青年が告げた。

しかし、彼の言葉にジョージはかっとした。

アリサがレイプされていたというのに、目の前のA1294と呼ばれる男は彼女がレイプされたことなど「なんでもないこと」だと告げる。

「アリサがレイプをされていたのか：」

うなるような彼の言葉に、青年は冷静だ。

彼が問題にしているのはそんなことではない。

「問題は、E782が暁の夜明けの騎士団に奪われたことだ」

奴らがもくろんでいるのはアメリカ政府への報復。

汚れた地上を滅ぼすこと。

「：E782は、兵器として使われる」

彼の言葉。

アリッサを全く人間として受け止めていない言葉。

おそらく、自分自身のことすら、彼は人間として受け止めていないのだろう。

警察を総動員して暁の夜明けの騎士団を追えと彼は言う。

彼女による破壊は止められないかも知れない。

しかしアメリカ合衆国を守らなければならない。

非人道的な行いから身勝手に作り出され、幼少期に性的虐待を受けた少女。

その成れの果てが兵器。

その言葉の羅列に、ジョージは憤る。

彼女を誰よりも大切に思っていたから。

「：アリサを」

そんなことを淡々と語る目の前の青年に対する怒り。

アリッサに性的虐待を加えた男に対する怒り。

彼女の感情が、一般人のそれについていけないのは当たり前だ。

幼少期のほとんどで過酷な虐待を受け続けてきたようなものなのだ。

「アリサは兵器じゃない：」

「だが、少なくとも彼女は自分を人間だなどとは思っていない」

姿形は人間であっても。

その心が人間に近いものであっても。

彼女は兵器だ。

彼は兵器だ。

彼らの内側に刻み込まれたウェポン・コード。

*

ワシントンD・C. に対して破壊の限りを尽くしたアリッサはほとんど意識がない。

E782の精神を補完するというウェポン・コードの青年は少女を抱えて戻ってきた。彼らの背後には二人の男たちがいる。

彼らもA1294と同じように軽装だったが、おそらく彼らもウェポン・コードの人間なのだろう。それをジョージ・リートに理解できた。

やつれて、やせ細った少女を抱きしめるA1294。

見事だったはずの巻き毛のブロンドは惨めに刈り取られている。

彼が愛した巻き毛は今はない。

何度、キスをしただろう。

何度も彼女の髪に顔を埋めた。

少年のように惨めに刈り込まれた彼女の金髪。その様がいかに切なくて、ジョージは青年の腕の中の少女に手を伸ばした。

「：アリサ？」

言葉を失って呆然とする。

皮肉げに目を上げた彼女がいない。

憎まれ口をたたく彼女がいない。

聖書に出てくる、赤い竜にも似た彼女が今はいない。

それが悲しかった。

金髪の青年に抱きかかえられ、血で汚れた白い手足が力なく揺れている。

小さな頭が青年の胸にもたれていた。

かろうじて、ワシントンの破壊は免れたらしい。

ホワイトハウスも、ワシントン記念塔も無事だ。しかし、多くのビルが被害を受けた。

全てはアリッサの責任ではなく、彼女を利用した暁の夜明けの騎士団の犯行である。

「：アリサ！」

駆け寄ったジョージは、A1294の腕から奪うように少女を抱き留めた。

「アリサ！ 目をあけろ、アリサ：！」

何度も彼女を呼んで揺さぶった。

そんな乱暴なことをしてはいけなないとわかっていたが、それでも衝動をこらえられない。

目をあけて、自分を見てほしい。

ケース・アングリーボマー・セカンド以来、彼は彼女の笑顔を見ていなかった。

当たり前だ。

彼女は裏社会の犯罪者であり、彼はFBIの捜査官だ。

自由に動ける人間と、自由に動くことなどできない人間。越えられない壁がそこには存在している。

ジョージの声に、アリッサは反応らしい反応をしない。

血を流して、衰弱した彼女。

美しかったはずのブロンドの巻き毛は見る影もない。

「…ジョージ」

不意に小さな幼い彼女を強く抱きしめるジョージの鼓膜に声が響いた。

途切れてしまいそうなほど小さな儂い声。

虚ろな目がゆらりと誰かを捜し、しばらくして自分を抱きしめる男がジョージだと認識したらしい彼女の水色の瞳が焦点を結んだ。

彼を見る。

「ど、したの…？」

脱力していた首をかしげた。

愛しいアリッサ。

枯れ木のようにやつれた手が、ジョージの頬に触れる。

「泣いて、るの…？」

小馬鹿にしたような彼女の言葉。

ほほえみたかったのかも知れない。

しかしその筋肉の動きはやっと唇を引きつらせる程度のものではない。

かすれた彼女の声に、ジョージは我を忘れた。

ケース・アングリーボマー・セカンドと呼ばれた事件の後から彼女の笑顔をほとんど見ていない。

彼女の心配ばかりしていた。

ずっと忘れたことなどなかった。

「…アリッサっ！」

とっさに彼女の名前を叫んで唇を重ねた。

むさぼるように、舌を差し込んで。

しかし、それがまさか引き金になるとは誰も知らずに。

おそらくアリッサ自身も知らなかった。

長い時間をかけて舌を絡め、彼女の存在を確かめるジョージに、アリッサの声が彼を呼ぶ。

「…ジョージ」

力もなにかもを失った彼女の体をジョージは抱きしめた。

誰よりも愛しいアリッサ。

誰よりも大切なアリッサ。

アリッサの腕が彼の背中を抱く。

細い腕が。

愛情を求める彼女の心がそうさせたのかも知れない。

誰かに愛されることを望んだ少女の心が、しかし、受け入れられずに軋んでいく。

歪む。

ぎしぎしと音をたてる。

少女らしい無垢な魂が悲鳴を上げた。

彼の口づけに答えるようにそつと舌を差しだした彼女のそれ。ジョージは溺れるように彼女の舌を絡めとった。

そのとき、火柱が上がる。

全てを飲み込む規格外の炎。

天を貫く炎に、三人の男たちは驚いて顔を上げる。

次いでジョージの腕の中の少女を見下ろすと、アリッサは震えていた。

大きな水色の瞳を見開いて。

「違うの…。違うの…」

まるで母親に怒られた子供のように震えている。

「…A1294」

アリッサが青年の名前を呼んだ。

E782とA1294の視線が絡み合った。

「違うの、違うの…。違うのよ…」

ここはどこ？

ここはなに？

わたしは誰？

当たり前のように「存在している」A1294の精神波動に依存していた。

彼女は誰かに依存して精神の均衡を保つ。

その相手はA1294のはずだった。

しかし、長いワシントンでの生活でその基盤がゆらいだ。

A1294すら知らない間に。

アリッサですら知らない間に。

彼女の心に、彼らは入り込んだ。

無垢な天使のような魂を愛する男たちの存在が。

まるで楔のように。

アリッサの心にひびをいれた。

「助けて、助けて…」

泣きじゃくる。

「助けて…」

大粒の涙など誰も見たことはなかった。

ジョージ・リートも、A1294も。

彼女の大粒の涙など見たことがなかった。

「ここは暗いのよ…。ここからは光が見えないのよ…」

必死で腕を伸ばして彼女はなにかにすがろうとした。

ビルも道路も、なにかもを飲み込む炎が、空を焦がす。

泣きながら助けを求める彼女は何度も手の甲で涙を拭った。その

腕をジョージは抱き留めた。

「助けてよ、ジョージ…」

悲鳴のように叫んだ彼女の周りで音が鳴った。

まるで爆発でも起こったような音と光。

そして炎。

誰もが息を飲んでそれを見つめていた。

レッド・ドラゴン。

誰も、レッド・ドラゴンを止められない。

A1294ですらも。

そして彼らと同じ能力者たちでも。

炎は彼らすらも飲み込んだ。

なにもかもを飲み込もうとした炎。

そのとき、不意に光が閃いた。

白い光だ。

炎の中から、若い女が歩いてくる。

金色の長い巻き毛の、水色の瞳の。

「…大丈夫よ」

女は泣きながら助けを求める少女の頭を抱きしめた。

「大丈夫だから、おやすみなさい」

少女の額と自分の額を合わせた女は、そうしてがくりと意識を失う彼女を抱き留めた。

呆然とするジョージの腕から、アリッサを受け止めて、彼の頬を強く張る。

「しっかりしなさい。早く救急車と消防士を呼ぶのよ」

炎を鎮圧しなければならない。

そうしなければ史上最大の、テロリズムは止まらない。
止めなければならない。

そうしなければ、世界の警察と呼ばれる国は崩壊する。

使い手であるアリッサが意識を失った今、炎の勢いはおさまるだろうが被害の拡大は想像に難くない。

女はジョージに言い放つ。

そうして、ジョージに背中を向けた女は、アリッサを抱いて歩きはじめた。

そのときになって初めてジョージは我に返った。

また、彼女が奪われる。

自分のそばから消えてしまう。

そんなことはいやだと、ジョージは思った。

「返せ！ アリッサを返してくれ！」

「あなた程度に、この子になにができるっていうの？」
くるりと炎の中で女が振り返る。

少女を抱いた彼女は、水色の瞳で男を見据えた。

「：アリサ！」

返してくれ。

何度も叫んだ彼に、彼女はにべもない。

被験体の少女に、なにかしてやれることなどないのだと言わんばかりだ。

「：アリサを返せ！」

通りがかったのは、どこかの施設の車だろうか。

そうして女は消えた。

炎の中で追うこともままならないまま、ジョージはその場にへたり込む。

「アリサ：」

顔を覆った。

彼は、恥も外聞も投げ捨てて涙を流した。

愛していたのに、失ってしまった。

彼女を大切にしていたのに、失ってしまった。

彼女のことを好きだったのに。

ジョージを求めて差いだされたアリッサの小さな舌。抱きしめ返す細い腕。

天使のように無垢な魂が、悲鳴を上げていた。

「アリサを返してくれ：」

アスファルトに拳をたたきつけながらジョージは涙を流す。

彼女の名前を呼びながら、壮年の狙撃手は涙を流し続けた。

「アリサを、返してくれ」

愛している少女を、返してほしい。

「もう二度と会えないのか：？」

彼女と共に暮らしていれば良かったとすら思う。

彼女が嫌がって、離れて暮らしていた。そのことに後悔する。

「アリサ：！」

彼は頭を抱えたままで天に祈りを捧げた。

どうか、無事でいてほしい。

どうか、また帰ってきてほしい。

「どうか、笑ってほしい…」

愛していると伝えたい。

ジョージは祈った。

終章 地獄の水底へ（後書き）

感想や評価などいただければ嬉しいです。（＊・ω・＊―――）

第一部「罪と罰」後書き

こんにちは。

「罪と罰」が完結してから、少し立ちますが、ほんのり後書きなど書かせていただきます。

一応、内容にはあんまり触れません。

元々、わたしはパワー系の主人公が大好きなんです、強くてたてるならナウシカみたいな。

ナウシカとアリツサじゃ全然違う、というか。

まあ、凶悪ですが…。

悪役主人公って実際どうなんだろう？　とか思うんですが、悪役主人公ってわたし自身は嫌いじゃないんですね。

だったらそれを女の子でやる必要性はないんじゃないかとも言われそうなんです。18歳くらいの男性主人公とかだとぴったりはまるんでしょうが。内容的には。

それはそれで書いてる本人がHP削られるという…。

かわいい女の子がぴよこぴよこしているのが好きなんですよ。

女の子なんだけどもものすごく強いとかって、あんまり需要がないと思っていたのですが、これについては、書いてる本人が楽しいので…。

強い女の子の主人公って好きなんです。

守られて悲鳴あげてるようなのが受付ないので…。

なので、エクスペンダブルズにでてきたサンドラとかすごい好みでした。

肝っ玉が据わってるのがいいですね！

エクスペンダブルズは、本当にかっこよかったですね。スタローンが。

ジョスリンがハーレー乗りなのとかは、そのあたりから原案を拝借しました。ついでに言うと、自分の家の真横にハーレー専門のバイク屋があるので、「バイクⅡハーレーダビッドソン」という、よくわからないナチュラルな思考の持ち主です。

ハーレーはいいですね。

かっこいいです。

そんなかんじでわたしの理想の女の子を主人公にして、お話を進めさせていただきましたが、第一部は皆様、どのように感じられたでしょうか…。

話の内容が現代物なので時折、実在の犯罪者とかも取り上げております。

書いていて自分でもいろいろ調べたりするので、「へー」と勉強になることが多々あります。

実在の犯罪者をモデルにしていたりしていますが、その辺のことが知りたいよって方がいましたら、そのあたりのネタバレできるところはがんばってみます。

ところで、書き分けをしているつもりではございますが、「キャラクター紹介」等あったほうがいいのでしょうか？

結構な人数がでてくるお話なので、もし必要でしたら作りますが…。

まあ、名前を列挙するくらいしか書きようもなかったりしますが…。かなり個性は出していると思うので、作らなくてもいいかな〜、と書いている本人は思っているのですが…。

現在、第二部に向けてがんばっておりますので、どうぞよろしくお

願います。

最近、携帯からも拍手、キャラ投票できるように調節いたしましたので、よろしければちっと推していただけると励みになります。

(*・ω・) * | |)

2011/02/20 sakura sakurazawa

【裏社会に在籍する三人の主人公たち】

裏社会 犯罪社会に生きる犯罪者であり、傭兵や娼婦、情報屋などが名前を連ねている。

表社会 平常な世界に生きる人間たち

【裏社会に在籍する三人の主人公たち】

「アリッサ・ノースウッド」

Alyssa Northwood

アメリカ合衆国 ワシントンD.C. 在住

年齢不詳、正体不明のアリア人の女性。

世紀の犯罪者であり、通称「マジックボム Magic Bomb」と呼ばれる。また傭兵であり「火の鳥」という暗号名を持つ。

「Unnamed child」の実質的主人公。彼女の周囲では数多くの事件が巻き起こっていく。

「キャシー」

Cassie

アメリカ合衆国 フロリダ在住

ソシオパスの犯罪者で思い込みが強く、アリッサ・ノースウッドに次ぐ危険人物のひとり。

真正正銘の殺人鬼で、殺し屋でもある。

通称「カーリー Kali」

中国系アメリカ人。

本名…アン・アナ・張 Ann Ana Chan

「綾瀬臣」

Shin Ayase

日本国 東京都在住

多くの裏社会から命を狙われている懸賞首。通称「死天使 Dea
th Angel」

古くから続く旧家、綾瀬家の次期当主であり、絶世の美貌を持つカリスマ的な天才。

犯罪者の信奉者が多い。

【キャラクター紹介】

【アリッサの周囲にいる人間たち】

ジョージ・リート

ブレット・オルコット

エリザベス・マーレイ

レオナルド

ジョスリン・R・ウィルクス

イーサー

シュリ・シャンカル

サンディープ

セリオ

ジャッキー

【キャシーの周囲にいる人間たち】

ビース

マーク

アシル・ブラス

エリヴィラ・シャミナ

アマ

ベルテイ

ベルナール

アニータ・シリトー

セアラ・ローリー・ウェルティ

【綾瀬臣の周囲にいる人間たち】

高崎和徳

高崎千歳

バート・レイン

クリストファー・ジェファークソン
サラ・エンヴリー

【その他の登場人物】

アジヨラ

エイリーン・グレイシア・バークレイ
高崎祥子

綾瀬幸太郎

高崎和人

石垣

ADAM—000—1294

ポール・アダーニ

アルベルト・ウィーバー

ハーバート・セルヴィッツジ

佐々木和宏

エディ・張

ジェフリー・シェルダン

チャーリー・F・オーエン

ジュリアナ・N・オーエン

オフィーリア・S・オーエン

クルシタ・ゼグラ

クリステイン・マツキラン

序章

> i 2 6 3 9 3 — 3 2 8 9 <

二年前の四月十日。

キリスト教原理主義団体「暁の夜明けの騎士団」によって引き起こされた大事件があった。

アメリカ合衆国、その首都。

ワシントン D・C・を狙ったテロリズム行為は全世界を震撼させた。テロリズムはアメリカ合衆国の国防総省と、国土安全保障省の迅速な対応と作戦によって。被害は拡大することなく収束した。

しかし、肝心の「暁の夜明けの騎士団」の捜査状況は思わしくなくいまま二年の時間が経過した。一説によると該当の団体は反米の国家による資金援助がなされているのではないかとまさやかれている。

世間では誰が名前をつけたのか、その事件を「ケース・レッドドラゴン」などと呼ばれていた。

ワシントンのビル群を破壊したテロリズム行為。

本当の目的はホワイトハウスか、それとも国防総省か。

かつてのアルカイダのように。

無理もない。

それほどまでに恐ろしい事件だった。

しかし、当の「暁の夜明けの騎士団」の幹部は未だに逮捕されることもなく、大惨事を引き起こした原因も一般的には伏せられたままだった。

噂は、かくも静かに吹聴された。

「暁の夜明けの騎士団」が「マジックボム」に取り入ったのではないか、と。

マジックボムが逮捕されていないのは世界的に見ても真実であり、アメリカにはそのマジックボムが住んでいることも、ごく一部では有名な話だった。

そして、騎士団の依頼でマジックボムが今回のテロリズムを引き起こしたのではないかと。

そのように世界のマスメディアは騒ぎ立てた。

もちろん、事実は異なる。

マジックボムの正式コード、EVE-000-782。

彼女は明らかに、アメリカ合衆国側の人間で、彼女の目的にはテロリズム行為など存在しない。

事実は、真逆で暁の夜明けの騎士団がマジックボムを利用したのだが、マジックボムという存在自体を伏せておきたいアメリカ政府としてはマスメディアがどのように取り上げようとも、マジックボムことEVE-000-782を世間的に公表することはできなかった。

EVE-000-782の存在を明らかにすれば、アメリカ合衆国は非人道的な実験を行い、そして世界に背く国家だという烙印を押されるだろう。

世界の警察と名乗るアメリカはそれを恐れた。

決して、保身のためなどではない。

EVE-000-782はアメリカにとって切り札だ。

戦闘のプロフェッショナル。

その辺の軍人や兵士などとは異なる立場の、戦闘のプロ。

だからこそ、アメリカは彼女を世界に気取られたくない。

知られてはならない。

アメリカにあって彼女は最重要国家機密のひとつ。

EVE-000-782は、アメリカ合衆国の第二次生体兵器開発計画の申し子で、中でも最高傑作と呼ばれるサイキッカーの一人であった。

しかし、EVE-000-782は精神的にあまりにも不安定で、

一年ほど早く生み出されたA D A M－000－1294の精神波長に依存することによって精神のバランスを保っていた。だが、彼女らを開発する研究員達のごく一部の小児性愛者達によって、生み出された子供たちは性的虐待を受けた。無論、幼いE V E－000－782も例外ではなく、昼間は過酷な実験を、そして夜は研究員たちの慰み者にされた。

かくして、E V E－000－782の精神状態はひどく乱れたものとなり、バランスを欠いた。そうして、引き起こされたのが生体研究施設を丸ごと吹き飛ばした爆発事件だが、その大事故すらもアメリカ政府は隠匿した。

アメリカを守り、そしてくだんの実験体を確保するために。
血眼になった。

アメリカ政府はなにがなんでも、E V E－000－782を生存している状況で確保したかったのだ。

彼女の存在が軍事的切り札になり得ることを知っていたからだ。そうこうしているうちに、E V E－000－782によって悲劇が起こった。

彼女は世界中に散らばったかつての第二次生体兵器開発計画に関わった研究員らを殺して歩いたのだ。

どうして殺したのか、と問われれば、性的虐待を受けたことすら覚えていない彼女に正しい答えなど導き出せなかった。しかし、それでも彼女は殺して回った。

まるで恨みでも晴らすように。

実際のところ、彼女自身が自分の感情とどのように接していたのかは誰にもわからない。

ただ、感情の赴くままに、殺して歩いた。

「殺したい」と思ったから殺したのだと、彼女はF B Iの捜査官であるジョージ・リートに告げた。

その事件こそが、世界中の科学者、そして権力者達を縮み上がらせた爆弾魔事件「ケース・アングリーボマー」である。

怒りに捕らわれたその犯行手段から、「怒りの爆弾魔事件」と呼ばれた。

世界各国で、EVE-000-782の犯行が行われた。

彼女が起こした大きな事件は過去の二件。

ケース・アングリーボマー以降、EVE-000-782はアメリカ政府と司法取引を行い、アメリカ政府側に就く裏社会の一人として戦場に君臨した。

数多くの戦場を駆け抜け、その姿は謎とされた。

CIA、FBIなど、多くの監視を受けながら、彼女はアメリカの首都ワシントンD・Cで暮らしていた。

そんな彼女を兵器としてほしがる裏社会も多く、そしてまた、恨み辛みをもって殺そうと企む者も多くいた。

最高の兵器。

そう呼ばれた彼女。

二年前までは、アリッサ・ノースウッドと名乗っていた。

ワシントンを標的にしたテロ事件「ケース・レッドドラゴン」が収束して以来、アリッサの情報の全ては、国防総省に引き上げられた。

彼女の荷物すら応酬しようとしたアメリカ政府よりも一足早く動いたのが、彼女の後見人を名乗るイランの武器商人イーサーだった。彼女の服も、全ての家具もカーテンからなにからなまでにイランにあつという間に運んでしまった。

アメリカ政府が彼女の荷物があることに気がついた時にはすでに遅く、遠くイランで大切に保管されていた。

世界中にある、アリッサのねぐらから全てが風のように跡形もなく荷物は取り除かれた。

イーサーの思惑をアメリカ政府は邪推したが、イーサーは単純にアリッサの荷物を無下に扱われなくなっただけだ。

EVE-000-782。

たくさんの名前を持つ少女はそうして消えた。

「連れ去られた」

そんな噂だけがまことしやかに裏社会を這うように流れていった。もちろん、激怒した裏社会も少なくはないが、ほとんどの裏社会たちが安堵の息をついた。

これで彼女の影に恐れる必要がなくなったのだから、と。

マジックボムと呼ばれる殺人鬼は、圧倒的な暴力の力で全てをねじ伏せた。

屈強な男たちをも。

そうして、時間は流れ、春が二回すぎた。

もうすぐワシントンに夏がくる……。

いつものようにオフィスに入ったジョージは、自分のデスクにちょこんと座る黒髪の少女を認めた。

誰だろう、と一瞬、思ってからその存在に記憶が行き着いた。

「カーリー……？」

この二年ほど、アメリカで音沙汰を聞かなかった。

裏の情報によると、アフリカを渡り歩いて暴れていたとかいないとか。

そんな事情ですっかり忘れていたと言ってもいい。

「カーリーってさ、わたしがつけた名前じゃないのよね」

眉を寄せる東洋系の美少女は長い黒髪を後頭部でまとめていた。

アフリカにいたというのはどうやら本当のようで、彼女はよく日焼けしていた。

「それで、世界一の殺人鬼がFBIにどんなご用件だ？」

隣のデスクの前にあった椅子を引き寄せるとジョージは、椅子の背中に腕を組んで乗せる。

FBIのオフィス内の誰もが遠巻きに彼女を見つめている。

それはそうだ。

彼女も、かつてのマジックボムと同じく、正体不明の殺人鬼の一人だ。

これまで殺してきた人間は数知れない。

「おみやげわたしにきたのよ」

言いながら彼女はカバンを開けた。

全員がぎょっとしたように構える。

「なによ、別に爆弾とかじゃないわよ?」

周りの人間が見るからにぎょっとした様子を見て、カーリーと呼ばれる少女はため息をついた。

「はい」

と、言いながらジョージに標本の入った箱を手渡した。

蝶の標本だ。

「アマがね、アメリカに帰るときに、夜の追隨者に珍しい蝶の標本を持って行ってやれって言ってたから」

アマだの、夜の追隨者だのと、意味不明な単語がぽんぽんと飛び出した。

カーリーの性格だ。

元々説明するつもりなどないだろう。

「アマって?」

仕方がないのでジョージが聞き返す。

「あんたさ、老けたわよね」

彼の言葉に應じるわけでもなく、彼女は相変わらず彼女のペースで話し続けた。

いわゆる言葉のキャッチボールができていない。

一方的に言いたいことを言っているだけだ。

「……?」

何が言いたいのだと視線を向けると、カーリーは肩をすくめた。

「マジックボムがいた頃は、もっと生き生きしてたってこと!」

彼女は言いながら立ち上がった。

「それとさ、わたし、カーリーじゃないからね」

言い捨てて歩きだす。

「わたしは、キャシーよ」

年頃の女の子というのは一方的に話すと、よく言うが、カーリー

の話し方はまさにそれだ。

「待て待て」

立ち去りかけるカーリーをジョージが引き留めた。

「君は人の話を聞いているか？」

「聞いてない」

にべもない。

自分はキャシーだと名乗った彼女は、つんと顎を上げて胸をそらした。

どうでもいいが、そういった態度はひどくかわいらしいから手に負えない。

「えーっと……」

ジョージは言葉に詰まった。

確かに老けたと言われればそれまでだ。

ワシントンで起こった少女連続殺人事件。それはフロリダから始まり、転々と移動していたから正確にはワシントンで起こったわけではなかったが、最終地点がワシントンであったためそう呼ばれている。

そのワシントン少女連続殺人事件から二年以上がたったのだ。

老け込んで当たり前だ。

「アマってというのは誰なんだい？」

問いかけた。

丁寧。

アマが言ってた、というくらいだから、それは人の名前なのだろう。

それくらいは察しがついた。

「アマってというのは、コンゴの売春婦」

彼女は面倒くさいのかそれ以上は説明しない。

しかし、世界でトップクラスの殺人鬼がつきあう売春婦とやらが、普通の売春婦などであるはずがない。

「それでそのアマが、あんたにそれを持って言って言うの。だから

持ってきたの」

それだけでしょ、なんか文句ある？

文句もなにもないが、彼女は常にけんか腰だ。

「夜の追隨者って言うのはなんなんだ？」

「それくらい自分で調べなさいよ、馬鹿じゃないの？」

険悪な眼差し。

そもそも、その「おみやげ」とやらが彼女の本意ではなかったの
だろう。

「アマがうるさいから、持ってきただけ！」

言い放つ。

ざわりと少女の周りの空気がよどんだ。

夜の追隨者。

そういえば、インドのヒンズー教の高僧が、アリッサを「夜の姫
君」と呼んでいたことを思い出した。

「夜……？ アリサのことか」

つぶやいて彼は眉を寄せると目を伏せた。

思い出すのは金髪を無残に刈り取られた下着姿の少女だ。

力なく手足が揺れていた。

かすかに彼の肩が揺れる。

そのときだ。

「リート捜査官、今は仕事中ですよ！」

引きつった笑顔で女が駆け寄った。

彼の沈痛な面差しは二年もの間消えていない。

そんな彼を、彼の同僚たちは見つめてきた。

FBIのオフィスの彼の机にあった、金髪の少女の写真の入った
写真立ては今はない。

国防総省が回収したのだ。

「あ、ああ。すまん」

エリザベス・マレーイの声に我に返ったジョージは苦笑した。

「俺は大丈夫だ」

心配いらない、と彼は言うが、どこからどう見ても彼は沈鬱としていて「大丈夫」そうには見えなかった。

しかし誰もそのことを口には出せない。

「じゃ、わたしは帰るから」

言いながら、カーリーは歩き去る。

オフィスを出る間際、彼女は振り返った。

黒い頭髮が揺れる。

「わたしのこと、捕まえようなんてしてごらんない。ぶち殺してあげるからね」

物騒な台詞を吐き出した彼女はそうして消えていく。

黒い頭髮の、中華系の少女殺人鬼カーリー。

その手管はマジックボムには勝らないまでも、世界でも有数の殺戮者である。

外見に騙されてはならない。

ジョージ・リートは立ち尽くしたままカーリーを見送ってから、手の中の蝶の標本が入った箱を見下ろした。

変哲のない蝶の標本。

アフリカフタオチョウの一種だろう。

美しい青い筋の入った、羽に二本の尾がついた美しい頑丈な蝶だ。

「これが、どんな意味を持つんだ……？」

アマと呼ばれるコンゴの売春婦。

彼女はおそらく情報屋だ。

しかし、情報屋が情報を流さずに、同じように裏側で動く犯罪者に蝶の標本を持たせるとはいったいどんな意味があるのだろうか。

美しい蝶。

黒い羽に、青い筋が入った蝶だ。

彼の周りでは変哲のない時間が進んでいる。

アリッサがいてもいなくても、時間は同じように流れる。

残酷なほど平等に。

困惑してデスクに標本を置いた彼は、改めてオフィス内を見渡し

た。

捜査官たちが数人、彼を遠目に見つめている。

伝説の殺人鬼のひとり、とまで言われた少女をなんなく相手にする彼に好奇心に満ちた眼差しを向けてきた。

「ほら、みんな。仕事仕事！」

場の空気を読んだエリザベス・マーレイは手のひらを打ち合わせた。

その音に、凍り付いていた時間が溶けた。

「考えても仕方ないわ、そのアマっていう女の思惑もそのうち判明するわ」

ニッコリと笑う彼女にジョージは口元だけで笑った。

そう。

以前も「そのうち解決するから大丈夫」と思っているうちに、アリッサを失った。そんな悲しい思いはもうしたくはなかった。

「突き止めるさ」

力なく笑った彼は自分のデスクについた。

報告書が何件か貯まっていた。

彼は目の前の報告書を広げるとペンを走らせる。

そんなジョージの背中を見やって、エリザベス・マーレイはなぜだかほっとしていた。

殺人鬼の少女がいなくなっただけ以来、彼は見るからに覇気がなくなっていた。しかし、これでようやく彼の心に滑り込むことができるのではないだろうか、などという安易な考えに思い至る。

ジョージ・リートがアリッサ・ノースウッドに向ける眼差しを見ていれば誰だってわかるだろう。

しかし彼を「小児性愛者だ」などと咎められないのは、「アリッサ・ノースウッドの凶暴性」を知っていたからだ。

アリッサ・ノースウッドと名乗る小さな少女は、姿のままの幼い子供ではなかった。

多くの捜査員たちが、それを知ってしまった。

金色の髪の、水色の瞳の、美しい殺人鬼。

静かな湖面をなにかが騒がせる。

しじまに立つ、さざ波に揺られて。

波紋は大きく広がっていく。

鏡のように、静まりかえる湖面に波紋をたてた滴は、いったいなんだったのだろうか。

その滴の正体。

「よっ」

声をかけられて、カーリーは首をかしげた。

「なんだ、あんたか」

先ほど会ったジョージ・リートには及ばないものの長身の白人男、アシル・ブラスだ。

「届けてきたのか？」

尋ねられて彼女は首をすくめる。

象牙色だったはずの肌は、長いアフリカでの活動のために象牙色を通り越して小麦色だが健康的にも見えた。

「郵便で送れば良かっただろうに」

「アメリカの、輸送業なんて当てにならないわよ」

毎度のことだがぼっさり切り捨てる。

彼女は、アメリカ人らしくアメリカを理解している。

あらゆる意味で。

「……そうか？」

「知ってるでしょ？　アメリカの輸送業なんて乱暴なことこの上ないわ」

まあ、輸送業者によって盗難されないだけまだましでしょうけどね！

強い口調で言い切った彼女に、アシルは苦笑する。

「さすがに、アメリカじゃその手の奴はなかなかいないだろう」

「わかんないわよ。送っちゃえば後はどうなるかなんてね」

発展途上国では郵便物や宅配の盗難など日常茶飯事だ。

送った後にどうなるかなどわからない。

そんな現実がある。

「もうちょつとアフリカにいたかったなあ」

はーつとため息をついた。

「アメリカってきらい」

とことごと歩くカーリーの歩調は早くない。

そのゆっくりとした歩きに合わせてやるアシルは、彼女を横目で見下ろした。

「じゃ、帰ってこなくてもよかったじゃないか」

「帰ってきたくなかったわよ。絶対！絶対厄介ごとが持ち込まれるに決まってるもの」

言葉に力をこめてつぶやいた彼女は胸の前でグググと拳を固めた。カーリーの力を借りたい人間は多い。

特に、マジックボムが消えて以来、似たような殺人者は二人しかないのだ。

一人はカーリーと呼ばれる中国系アメリカ人。

もうひとり日本人の花鬼である。

花鬼はほとんどその手の「依頼」を受け付けず、だとすると頼るべきはフロリダ在住のカーリーのみということになる。

それを、当人がわかっていたからアメリカへの帰国を渋り続けていたわけだが。

「アマが……」

言いながら彼女は歩を進めながらうつむいた。

深いため息が漏れる。

たまたま、アマの住むコンゴ民主共和国の都市ブカブに寄った際、ホテルで押しつけられたのだ。

蝶の標本を。

「早くお帰りなさい」

なんで突然そんなことを言うのだと、カーリーが尋ねる前に彼女

が続けた。

「時が動くわ。早く帰らないとあなたは巻き込まれてしまう。いえ、もう遅いかも知れない。でも、とにかく早くアメリカへ帰るの。そうして、この蝶を、夜の追隨者に渡して」

時代が動く。

彼女はそう言う。

「……巻き込まれるって、そう言ってたよな」

アシルが相づちをうった。

「うん」

ワシントンで起こったテロ事件を実のところカーリーは新聞とニュース番組でしか知らない。

遠く離れたアフリカにいたのだ。

知るわけがない。

テレビすらないような土地で傭兵としてあちこちで戦いに身を投じていたのだ。

「あの女、美人だよな」

「美人だけど性格悪いわよ」

アシルの言葉にカーリーは白けた眼差しを向ける。

「性格が悪くなかったら、売春の斡旋も情報屋もやってられないだろう？」

「それもそうだね」

鼻筋の通った小さな顔と、八頭身。

厚すぎず薄すぎないバランスを持った唇と、大きな目。

本来は縮れていただろう髪を丁寧に伸ばしてくるくるに巻かれた黒い巻き毛を演出する。

長い手足の、美しい黒人女。

性格が悪いと言うよりも肝が据わっている。

そんな印象を持たせる女だ。

占い師であり、売春婦であり、情報屋でもある。
そんなアマ。

彼女がなにを伝えたかったのか、カーリーは知らない。

「さて、腕前拝見」

カーリーはぼそりとつぶやいた。

世界が動く。

時代が動く。

一部の裏社会たちが知り得る事実。

湖面に広がる波紋は消えずに、ゆらりゆらりと寄せては返す。

やがて、それは寄せては返し、返しは寄せて波は津波となる。

そんな予感に、カーリーと呼ばれる殺戮者は、空に上る太陽を見上げた。

「ツナミがくるわよ」

世界を、再び震撼させる津波がやってくる。

そんな気がした。

第一章 運命の車輪 1

FBI内部に新設された部署があった。

対テロリスト特別強行突入班、レッド・ドラゴン。

くだんの特別班が新設されるという噂は、すでに半年ほど前からFBI内部でまことしやかにささやかれていた。

サタンの化身の竜の名前を冠する特別班に配属されるのはどんな人物なのだろうかという、もっぱらの噂だったが、噂を交わす当人達は「そんないつ墓場に行くかもわからなそうな部署には死んでも行きたくない」と冗談交じりに話をしていた。

一説には、二年前のワシントンD・C.を標的としたテロ事件をきっかけに新設されたとも言われており、今回のFBI内部の人事には国防総省、もしくは国土安全保障省のどちらか。あるいはその双方がかんでいると言うのが、一般的なFBI関係者の総意だった。そもそも、レッド・ドラゴンという言葉そのものが、ワシントンで引き起こされたテロ事件を想起させる。

かくして特別班は新設された。

六月十二日の朝、FBI本部のロビーをくぐった若い娘は巻き毛のブロンドをふわりと初夏の空気に揺らす。

場違いとも言える娘の姿に、誰もが彼女に奇異な眼差しを向けるが、若い娘は物怖じしない。

小柄だが、フランスのとれた肢体の娘は、少女からようやく脱したかと思われるやや幼さを感じさせる面立ちをしている。

黄金の巻き毛に、水色の瞳。

誰かを思い起こさせる。

白皙の肌。

頬はバラ色で、身長がもう少しあればモデルにでもなれただろう。その頬に自分の指を押しつけて、彼女は小首を傾げた。

ミニスカートをはいた足に男たちの目が釘付けになっているが、

娘は気にしたそぶりも見せない。

「防テロ防諜部の部長さんのところに案内してもらいたいんだけど」
「……は？」

カウンターに座る若い事務員は金髪を揺らして覗き込む娘に対して間抜けな瞳を上げた。

「えっとね、大学生の社会科学見学にくるようなところじゃないんだけど……」

そう言いたくなる気持ちもわかる。

誰もがそう思った。

そして、誰もが彼女を追い返そうと思った。

「なによ、アポならあるわよ。ちゃんと！」

そう言いながら彼女は一枚の書類を事務員の鼻先につきだした。

「……？」

連邦捜査局長官の直筆のサインの入った書類だ。

あわてて事務員が内線電話で取り次いでいる横で、彼女はカバンを肩にかけてままで首を傾けると大げさなため息をついた。

そんなこんなで、防テロ防諜部のオフィスに入ってきた彼女は、部長に手早く挨拶を済ませた。

部長の男に案内されたのは彼女にあてがわれたデスクだ。

「今日から、新しい捜査官が仲間になる、みんな仲良くやってくれ」
簡単すぎる紹介を受けた彼女はにこりと笑うと肩の上で手を振った。

「君、まだ若いだろ？ よくこんなむさいところ来る気になったね」
近くにいた青年が声をかければ、彼女は微笑する。

年の頃は十代後半といったところだろう。

昨今、飛び級した若い少女が大学を卒業したなどという噂は聞いていない。

しかし彼女から感じるのは、もっと別の、ある種の違和感だ。

「特別強行突入班のキャサリン・キーンです、よろしく」

キャサリン・キーン。

その名前に一同がどよめいた。

二年前、トップシークレットの情報の中にあった名前の一つ。マジックボムの偽名、キャサリン・キーン。

部屋の隅で、ブレット・オルコットが苦々しげに彼女を見つめていた。

偶然の一致などあるはずがない。

「キャシーだと誰かさんとごっちゃになって面倒なのでキャスって呼んでくださいね」

続けて彼女は言った。

マジックボムが、アリッサ・ノースウッドと名乗る前に、呼ばれていたその名前。

全員が呆然とした。

当たり前だ。

彼らはマジックボムの恐ろしさを知っている。

ほとんどの者が、資料上でしか知らないとしても、である。

その恐ろしさを。

伝説の爆弾魔。

恐ろしい殺人鬼が現れたのかと、そう思った。

言われてみれば、キャサリン・キーンと名乗った娘は鮮やかな巻き毛のブロンドに、水色の瞳だ。

しかし、二年前のマジックボム。

アリッサ・ノースウッドは幼い小さな少女でしかなかった。

たった二年でこんなにも成長するわけがない。

「わたし、マジックボムじゃありませんから心配しないでください」
にっこりと笑った。

不意に、ブレット・オルコットが無言で彼女に近寄った。

娘の手首をとって歩きだす。

大股に歩く彼は、彼女のコンパスなど考えてもいない。

歩きながら携帯電話を取りだしたブレットは、手早く相手の番号をコールする。

取調室を借りたブレットはパイプ椅子に座ったままで彼女にコーヒーを差し出した。

彼はまがりなりにも、FBIで最もマジックボムを知る男だ。

「：君がマジックボムじゃないことはわかる」

ぽつりとつぶやいた。

姿形のことではない。

彼女の内面が何より、アリッサ・ノースウッドとは異なるのだ。

顔立ちだけならば、アリッサが成長したらこうなるだろう、と思われる容姿をしている。

しかし、キャサリン・キーンがアリッサ・ノースウッドと異なるというのはそれだけではない。

「安心してください。わたしは政府のプロジェクトの人形計画で完全に調節された個体です。EVE-000-782のように暴走事故も反社会的な行動も取らないようにデザインされていますから」

コーヒークップに口をつけながら彼女は言った。

淡々と。

この二年の間に、彼もそれなりに調べたのだ。

マジックボムとな何なのかと。

もちろんそれを知るためには、表社会からの正当な手段だけを使ったわけではない。

ありとあらゆる情報を手に入れそうして彼なりに分析した。

結果、彼はジョージ・リートが知ってしまった真実とより近いものを手に入れることになったのだが、それについては国防総省からストップがかかったため、報告書にもならないまま彼の頭脳の中にある。

そんなブレット・オルコットの内心はともかく、ぽんぽんと明るい笑顔で爆弾発言をするキャサリンはふと視線を閃かせた。

取調室に入ってきた壮年の男に瞳を向ける。

ジョージ・リートだ。

眼差しが交錯した。

男は硬直している。

巻き毛のブロンドの、水色の瞳の。

「……ジョージ」

娘がつぶやいた。

「アリサ……？」

愕然と、彼は彼女を見つめる。

入り口で固まっていた彼に、ブレットは肩をたたいた。

「後は任せる。身元を聞いておいてくれ」

ジョージ・リートは、ことマジックボムのこととなると感情で暴走しがちだが、やはり彼が一番に彼女を見つめてきたのだ。

捜査する上で情報を手に入れるブレット・オルコットとはまた違った形で、マジックボムを理解していたジョージ。

そんな彼をブレットは知っていた。

取調室の中の様子をガラス越しに見やっってからブレットは廊下に出た。

彼は、ジョージ・リートがアリッサ・ノースウッドを失って以来、憔悴仕切っていたことを知っている。

だから、今は彼に任せるしかないと思った。

なにより、EVE-000-782という言葉を知っているほどの彼女だ。

万が一にも、アリッサ・ノースウッドと無関係であるはずがない。時間が止まったかのようにすら感じられた。

瞠目したジョージは、金髪の、まだ少女期を脱したばかりだろう、そんな幼さを残す女から目が離せない。

もちろん、それは愛しさや慈しみから来るような、そんな単純な感情によるものではない。

一目見て、ジョージ・リートにはわかった。

彼女は、同質にして、明らかに異質なもの。

それゆえに、彼は思った。

これはなんだ、と。

理論や理屈ではない。

まるで肌に突き刺さるような違和感に、彼は一步も動けない。

空気がまるで沈殿するかのようだ。

目の前にいる「それ」は、かつての「小さなアリッサと同じもの」でありながら、「本質的に異なるもの」だ。

ジョージは取調室の入り口で固まったまま、その異様な状況に立ち尽くした。

思えば、出会って以来、姿の変わらなかったアリッサ・ノースウッドを受け入れていたのであるから、奇怪な出来事や、異常な状況に慣れていると思われがちだが、実情は異なった。

ジョージ・リートは、アリッサ・ノースウッドの清々しい強さに救われていた。

純粹な魂は、その凶暴性にもかかわらず、彼女を目にした者たちは、眼差しを背けることができない。

良くも悪くも、だ。

関わった者の全てに強烈なインパクトを与えた小さなアリッサ。

誰よりも強靱な少女。

しかし、彼女はジョージにとって、異常な存在などではなかった。彼にとって、彼女は普通の人間たちと「少ししか変わらない」女性でしかない。

そもそも「普通」であるという定義すること自体が、余り意味があるようには、ジョージにはどうしても思えなかった。

普通とは、そもそもなんなのだろうか。

ジョージの周りにいる人間達のほとんどは、どこかしら「変わった」一面を持ち合わせている。

マジックボムと呼ばれることになった小さな少女殺人鬼も、そんな彼らの中のひとりにすぎなかった。

ただひとつだけ、差別化するならば、ジョージはアリッサが幼い頃から自分の娘のように愛し、慈しんできた存在であると言うこと

だけだ。

彼はマジックボムが幼い頃から見守ってきた。

大切な娘のように。

大切な妹のように。

アリッサ……。

「アリサ、か？」

ジョージはそうして繰り返すようにつぶやいた。

ひどく動揺した彼の言葉はかすれている。

同じようで異なる。

違うようでよく似た。

目の前の女性。

小さなアリッサは成長などしないことをジョージは知っていた。

目の前の若い娘がアリッサでないこともわかっていながら、呆然

として確かめる。

彼女が誰であるのか、違和感を確かめたいとさえ思う。

しかし、ジョージの心の中には別の思いもあった。

確かめるのが怖いのだ。

彼女がアリッサ・ノースウッドではないことを「知っている」から。

本能で感じる。

目の前にいる娘はアリッサとは異なる存在。

小さな、愛しいアリッサではない。

目の前にいるのがアリッサではない以上、もうひとつの問題が生じる。

ならば、小さなアリッサはどこにいったのだろうか。

死んでいるのか、生きているのか。

彼が愛したアリッサの行方を。

「違うわ」

彼女が応じた。

冷静な娘の声。

「わたしは、EVE-000-782ではない」

EVE-000-782。

その型番。

アリッサ・ノースウッドを定義づける名前のひとつ。

かつて、二年前。

アリッサが行方不明になり、死亡したという噂すら流布された時に、ADAM-000-1294と名乗る男が彼に告げた、少女の名前だ。

「……わたしは、EVE-003-782-4」

それが正式な名前だと彼女は言った。

「政府の、第二次生体兵器開発計画の後釜になる、人形計画によって、EVE-000-782を素体にして作成された、彼女のクローンよ」

静かに彼女の声が響く。

狭い取調室。

キャサリン・キーンと名乗った金髪碧眼の娘はあっさりと告げた。

「……人形計画？」

「オリジナルの、EVE-000-782の知識をわたしたちは共有しているの。そしてわたしたちの記憶をEVE-000-782も共有している。政府が管理するために、EVE-000-782は捕獲され、そうしてわたしたちが作り出されたのよ」

彼女の話 요약するとこうだった。

アリッサ・ノースウッドを作り出した第二次生体兵器開発計画の後釜となる兵器開発プロジェクト「人形計画」によって、捕獲されたEVE-000-782は体の良い被験体だった。

優れたパワーと、自律稼働可能な知識量と、判断能力。

彼女の存在を人形計画の研究員達は全員が喉から手が出るほどほしかった。

そして、作り出されたEVE-000-782のクローンは現在、合計四名いるという。

過度に繰り返された虐待と実験によって破綻した彼女の感情と精神をコントロールすることは結局かなわず、結果的には代替のクローンを作成することでEVE-000-782の能力をコントロールすることとなった。

要するに、目の前にいる娘はアリッサのクローンだ。

ADAM-000-1294の行方は二年前から知れないまま、時はたった。

そしてADAM-000-1294の不在の状況で、EVE-000-782を稼働するということは、自ら危険度を上げるようなものだった。

それゆえに、科学者たちはEVE-000-782の単一稼働を恐れている。

彼女が再び暴走すれば、ワシントンD.C.でのテロ事件の二の舞になる。

彼らはそれを恐れていた。

「つまり、わたしはEVE-000-782と知識を共有する個体でありながら、性質は異なる、ということですよ」

そういうことだ。

彼女はアリッサでありながら、アリッサではない。

拗ねたように頬を膨らませたアリッサ。

怒って彼の腕の中で暴れたアリッサ。

空虚な瞳で微笑したアリッサ。

彼女は今、ジョージの目の前にはいない。

ふと視界が歪んだ。

押し殺していたものがあふれる。

ジョージは、部屋の隅にたたずんだまま声を殺して泣いた。

「俺のせいだ……」

アリッサを失ってしまった。

大男はそうして手のひらで顔を覆った。

妖精のように跳ねる彼女を思い出す。

かわいらしい服をたくさん着せて、甘やかしたかった。

まるで中世の貴族の婦人のように豪華なドレスも、もっとたくさん着せてやりたかった。

誰よりも愛した小さなアリッサ。

「俺が、彼女を守れなかったんだ……」

独白する彼に、金髪の巻き毛の娘は、かたりと音をたててパイプ椅子から立ち上がった。

細い手首が椅子の背中を押さえている。

「……ジョージ」

悲しみに暮れて泣く男に、娘はそつと手のひらを彼の頬にあてた。両手で挟むように彼の顔を包み込む。

小柄な娘は、下から見上げるようにしてジョージを見つめた。

「よく見て」

白皙の肌、金色の睫毛に彩られた水色の瞳。

彼が愛した、彼女の色だ。

「あなたが、後悔する必要なんてないの。EVE-000-782はあなたに与えられる感情に救われていたのよ。どうしたらいいかわからなくても、それでも……」

アリッサ・ノースウッドはジョージ・リートに救われていたのだと。

涙に濡れた彼の瞳を彼女は覗き込んだ。

男は不意に彼女を強く抱きしめる。

衝動的に唇を重ねた。

水色の瞳は、まるでアリッサを思わせて、彼は娘の瞳に飲み込まれた。

舌を滑り込ませると、娘は驚いたように目を見開いたが、ややしてから彼の腕に体を預けるように力を抜いた。

長い。

長いキスを交わす……。

温かい娘の体。

彼女はものなどではない。

もちろん、アリッサもジョージにとってはものなどではない。しかし、現実残酷だ。

目の前のキャサリン・キーンも、マジックボムと呼ばれたアリッサ・ノースウッドも「人形計画」に属する科学者たちにとっては「被験体」であり「モルモット」だ。

彼女らは、彼らにとって「人」ですらない。

ふと、キャサリンの舌がかすかに動いた。

驚いたように。

そしてそっと彼に舌を差しだす。

怯えたように。

もしくはまるで彼を捜すように。

無言のままキャサリンが目を上げる。

長い睫毛がそっと上がった。

「……アリサ？」

閃いた光は一瞬だった。

かつて二年前までに見慣れていたはずの、小さな少女の瞳が、そこにあった。

二人はただ抱き合ったままで互いを見つめる。

彼らの間に沈殿するものの正体を探すように、互いを見つめた。

「う……っ」

頭痛をこらえるように、キャサリンは眉をしかめた。

頭をおさえる。

「……アリサ！」

「大丈夫」

それにわたしはアリッサじゃない。

崩れ落ちた彼女は床にしゃがみ込んだままで、差し伸べたジョーシの手につかまるように手を伸ばす。

「わたしは、キャサリン・キーンよ」

長いキスの間の、ほんの一瞬。

キャサリンが自覚しない一瞬に、アリッサがいた。

それをジョージは自覚する。

怯えたように舌を差しだした彼女。

睫毛を上げた一瞬に、その瞳の中に小さな子供がいた。

その奥に。

ジョージはそうして目を伏せた。

恥じらうように、そして彼を捜すように舌を差しだしたかつてのアリッサのキス。

愛情を知らない彼女は受け身のキスしか知らなかった。

そんな彼女が二年前のあの夜に、ジョージに見せた儂げな瞳。

深く口づけた彼を、彼女は捜していた。

暗闇の中で手を差し伸べるように。

それがジョージの心の内側に、キャサリン・キーンが居場所を作った瞬間だった。

情報が全てだ。

情報に通じていなければ生き残ることすら厳しい世界で彼らは生きる。

それ故に、彼ら裏社会の間では情報に通じていることこそが生き残るすべの一つでもある。

彼らは、そうしなければ生きていけない。

各国の司法組織よりも。

警察組織よりも。

あるいは軍隊などよりも。

犯罪者らは、国家組織の先手を打つことによって生き残る。

逆にそうでなければ生き残れない、ということだ。

自分にとって不利益な情報と、有益な情報とを見極める。

殺戮の女神カーリーがアメリカ合衆国に帰国したらしい、という情報は瞬く間に全世界に広がった。

アフリカ大陸に住む者は安堵し、北アメリカ大陸に住む者はその情報に戦慄した。

カーリーの名前を聞いただけで、世界は震え上がる。

彼女はそういった存在なのだ。

かつて、世界の恐怖のどん底にたたき起こしたマジックボムの訃報以来、マジックボムの信奉者達は沈黙を守っている。

マジックボムの信奉者達は静かに世界の動向をうかがっている。

マジックボムが本当に死んだのか、生きているのか。

真相は定かではない。

だからこそ、彼らは息をつめる。

まるで獲物を狙うハンターが時を待ち、じっと息を殺すように。時を待つ。

歩道の端を、両手を広げてバランスを取るようになってまっすぐ歩

く黒髪の少女は、アシル・ブラスに手渡されたアイスクャンディーをなめながら小首を傾げた。

「アマってさー、すごいと思うのよ」

キャシーが感心するようにつぶやく。

「なにがだよ」

「アマって、パソコンはてんでダメなのよ」

言葉を返しながら少女が肩をすくめる。

「……は？」

アシルの間の抜けた声に、キャシーは長い黒髪を肩から払った。

「だから、アマはパソコン使えないの」

そう言われてみれば、ブカブの彼女の自宅にはコンピュータらしきものを置いてあるのを見なかったような気がする。

「アマって、ああ見えてもオカルトだからなあ……」

そもそも存在そのものがオカルトだ、とキャシーは続ける。

「まさか本当に売らないなんかで情報握ってんのか？」

問いかける青年に、少女はもう一度首を傾けた。

「よくわかんない」

でも、と彼女は言った。

「でも、アマのは世界中から依頼が入るし、その依頼者だって裏だけじゃない。裏も表も関係なしでがんがん入ってるみたいだから、たぶんそうなんじゃないの？」

キャシーはそう告げた。

そもそもキャシーは素晴らしい程、現実主義だ。

占いなどという胡散臭いものを信じているわけではない。

「胡散臭いと思っていても、アマは信じるんだな？」

「だって腕は確かだもの」

肩をすくめた彼女は横目でアシルを見やった。

「わたしはリアリストなの。腕が良ければなんだっていいわ」
なんでもかまわない。

その情報が確かならば、手段などどうでも良い。

キャシーはそう告げた。

泣く子も黙る殺人鬼は、実は童顔の東洋系アメリカ人で、自分の前でアイスクャンディーなどに口をつけている姿は、とてもではないが殺人鬼のそれには思えない。

アシル・ブラスは二年もの間、キャシーと行動を共にして、アメリカ大陸の戦火をくぐり抜けてきたが、その行動力と実行力には頭がさがった。

青年は、マジックボムと面識はない。

世界最悪の殺人鬼と呼ばれていたマジックボムもキャシーのように規格外なのだろうか、とそんなことをアシルは思った。

「おまえ、マジックボムに会ったことあるのか？」

「あるわよ」

何気なく問いかけたアシル・ブラスに、キャシーは即答した。

一拍もおかない見事な即答に、青年の口がぽかんと開いた。

「……あれ？ 言ってなかったっけ？」

彼女は言いながら目線を頭上の空に向ける。

「聞いてないぞ」

「そっか、勝手に言ったつもりになってた」

まあ、そんなことどうだっていいじゃない。別にマジックボムに会ったことがあるからって地球が四角になるわけでもあるまいし。

彼女は肩をすくめる。

キャシーはそうして、アイスクャンディーの棒を公園のゴミ箱に放り込んだ。

見かけと、彼女の生業に反して礼儀正しいというか、律儀である。しかし、おそらく。

その律儀さは生存本能なのだろう。

野生のハンターは、自分の位置を相手に気取らせない。

それゆえに、彼らは余分なマーキングをしないのだ。

生き残るために。

「どんな奴だった？」

アシル・ブラスが尋ねた。

「どんなんて言われてもねえ」

キャシーは要領を得ない表情のママで相変わらず首を傾けている。
「普通の白人よ、六歳くらい」

十年以上前にケース・アングリーボマーを引き起こした殺人犯が
「六歳くらいの普通の白人」と一蹴したあたりはやはり、キャシー
のそのあたりの感覚というのは一般人のそれからはかけ離れている
のかもしれない。

「……キャシーと一緒に」

「すぐく簡単に言うとななるわね」
含みのある言葉は意味深だ。

「フツのユーロトラッシュよ」
ぽつりと彼女はつぶやいた。

午後の強い日差しの降り注ぐ公園の片隅に、その珍妙なカップル
は木陰で休んでいた。

「ユーロトラッシュね……」

アシルが繰り返す。

しかし、アメリカが移民の国である以上、ほとんどの白人系アメ
リカ人をユーロトラッシュ呼ばわりすることになるのだが、言っ
て
いる本人がいつでも馬鹿にされているアジア系アメリカ人であつた
から、その発言も多少の情状酌量の余地はあるというものだった。

「……キャシー」

「うん？」

呼ばれて少女が顔を上げた。

誰も周りにいないのを良いことに、彼女の顎を引き上げる。

抵抗させる隙も与えずに口づけた。

重ねるだけの口づけだ。

結局、二年間も共に戦場をぐり抜けながら、二人は色っぽい関
係になっっていない。

アシル・ブラスが自粛したと言うよりも、キャシーに決定的に色

気が足りないのだ。

キャシーは性別を感じさせない。

たまたま女性に生まれた、と言うだけのことだ。

まるで、セクセレスの天使のように、キャシーは純粹だ。

「……？」

触れあった唇に、少女は両目を大きく見開いた。

抵抗などない。

当たり前だ。

キャシーは性的な関係など知らないのだ。

彼女と二年間共に戦ってきてわかったことがある。

彼女は性欲を知らない。

抵抗がないことを良いことに、芝生に押し倒した。抵抗されたら

やめるつもりだった、などという言い訳は今さら通用しないだろう。

薄い胸をまさぐった。

「ふ……、あっ」

息を吐き出す音に、彼女の声が甘く重なった。

木陰で隠れたその場所で、少女を組み敷く男はふと聞こえてきた

かすかな声のため息を重くつくと上半身を起こした。

キャシーの腕をとって引っ張り上げる。

いくらなんでも小児性愛者だと濡れ衣を着せられて警察に突き出

されるのは勘弁してもらいたいものだ。

そんな重いから本格的に行為を始める前に彼女の上から自分の体

をどかした。

良識というよりも、余分な面倒ごとを避けただけでも言えた。

「……アシル？」

なにそされたのかわかっていない彼女は自分の唇に触れた。

性交渉がなんなのか全くわかっていない子供と一緒だ。

タチが悪い。

えてして純粹な子供というのは、ひどく欲望をそそる対象でもある。

本人は自覚していないからこそその色香。

それが男を惑わせることを、彼女は知らない。

「今の、なに……？」

つぶやいた。

カマトトぶっているわけではない。

彼女は本当に何も知らないのだ。

おそらく、子供がどのようにできるのかすら、彼女の頭は理解していない。

知識に対する理解が追いついていない。

「キスだ」

キャシーの反応に、青年は頬に口づけて耳元にささやいてやる。

頭でっかちな子供。

知識を、知識として理解していないのだ。

だからセックスがこういったものであるのかすら彼女にはわからない。

「本番はそのうち教えてやるよ」

男が言った。

とりあえず、キャシーにはいまいち彼が何を言っているのか理解できていなかったが、余裕綽々なその態度が少女の勘に触った。

「……むかつく」

ぼそりとつぶやいた。

結果的に彼女の場合、こういうことになる。

理解できないことを、彼女は理解しようとはしない。

ただそれだけのことだ。

「どうせさ、わたしはお子様ですよ！」

自覚はしているらしい。

彼女は跳ねるように立ち上がった。

ぽんぽんとスカートの裾を払いのける。

「昼ご飯食べに行かない？」

彼女はかわいらしく頭を横に向けた。

午後の日差しの中で彼女の小麦色の肌が健康的だ。

「なにが食いたい？」

「んー、なんでもいいけど、ジャンクフードじゃないほうがいい」
「そうか」

青年も立ち上がる。

彼女の真の顔を知るのは一般人の中にはほとんどいない。

スラムに暮らし、スラムで育った彼女。

輝くような笑顔の、殺人鬼。

近場のインド料理店に二人はそうして入っていった。

時間が動き出す。

アマは顔を上げた。

手元のカードをめくる。

「……死に神」

死と再生を象徴する啓示。

デスサイズを手にした骸骨は黒い外套を着ている。

彼女はまぶたを閉じる。

「その先にあるのは、塔の逆位置」

黒人女は眉をひそめた。

世界に災厄が降ってくる。

そしてそれを招き寄せる人物が居る。

「……どうか、間に合って」

アマはつぶやいた。

祈るように。

アマはいわゆる裏社会ではない。

確かに売春もしていた過去はあるし、売春の斡旋もしている。

しかし、どちらも彼女の本当の顔ではない。

貧しかった彼女には必要なことだった。たまたま病気に感染することになったのは本当に運が良かったただけだ。貧しい女たちは、体くらいしか売るものがない。

売春は許されないことだが、それがコンゴの現状だ。

家計を支えるために売春に身をやつす者もいる。

アフリカ大陸の男たちは、それを非難する者もいるが、だとすればどうすればいいのだろうか。

もしも、売春という手段がなければ彼女らはのたれ死にするしかないのだ。

そのために、体を売る。

「……純潔なんて意味がないのよ」

それがアマの考えだった。

政治がいけないのだ。

そんな実情を、アマは元売春婦であるがゆえに知っていた。だから、彼女は売春の斡旋もした。

「貧しいのはわたしたちのせいじゃない」

そんなアマはやがて、占い師としてブカブに開業し、世界に名前を知らしめる。

全てを見通す占い師として。

客は政治家、ハリウッドの俳優からタレント、裏社会の犯罪者まで様々だ。

アマは窓辺から夕闇に包まれたブカブの街を見下ろした。

「こんなにも世間は平和なのに」

そっと耳を澄ました。

風が木の葉を揺らす音がざわざわと聞こえてくる。

「みんな生きるのに必死なのよ……」

手にした死に神のカードを彼女は見下ろした。

「今まであったはずの全てが崩壊しもういちど新たななにかが始まる。そうしてその先に待っているのは、災厄」

それをどのように切り抜けるのか。

カードは無情に事実を彼女に突きつける。

「結果がわかるのはもう少し先になるのかしら」

アマは首を傾げた。

そのとき、電話が鳴った。
レトロなベルの音が響く。

「もしもし？」

「アマー！ わたし！」

占い師仲間だ。

開口一番「わたし」もないだろうと思ったが、アマはそれを口に
出さない。

アマに「わたし！」などという占い師は世界にそう多くはない。

「……クリスティン？」

「ごめんね、変な時間じゃない？ 大丈夫？」

電話をかけてきた相手は一応、時差のことは頭に入っているらしい。

もつとも、もちろん夕闇に包まれた時間帯で、時差を考慮しても
問題のない時間帯だ。

「そっちこそ、大丈夫なの？」

「大丈夫よ、わたしはね」

時差は十一時間ほどあるはずだ。

コンゴが十九時ということは、相手のほうは朝方のはずである。

「どうかしたの？」

そんなことを考えながら、アマは受話器を持ち直した。

クリスティン・マツキラン、そう呼ばれる占い師の一人だ。

ホノルルに在住するカード占い師であり、いわゆるアマの同業者
にあたる。

「どうかした？ じゃなくてわかってんでしょ」

彼女の言葉にアマは苦笑した。

「まあ、少しは」

「嘘ついちゃだめよ。なんでもお見通しして顔してるくせに」

電話の向こうの相手はぽんぽんと言葉を放つ。

「……クリスほど情報がはいってくるわけじゃないわ。この国はね」
コンゴは混乱した国だ。

アメリカ合衆国とはまた事情が異なる。

「情報なくたってなんでも知ってる人に言われたくないわー」

クリスティンははーっとため息をついてから、本題を切り出した。彼女が何もなくアマに電話をかけてくることなど考えられない。

「アメリカでなにか始まりそうなのよ」

告げられてアマは頷く。

「そうね」

「どう思う？」

「そんなこと言われても、わたしたちがなにかできるわけじゃないでしょう？ クリス」

しがない占い屋だ。

なにかできるわけではない。

「アマー……」

「冗談よ、クリス」

クスクと彼女は笑う。

「混乱は起きるでしょう。それが何なのかわたしにはわからないわ。でも、きっと大丈夫。死は再生。その先に混乱が待ち受けていたとしても、その先には光が待っているわ」

抽象的な物言いは、占い師独特のものなのかもしれない。

「全てを乗り越えるための、翼が、待っているわ」

だから、大丈夫。

彼女はそう告げると笑った。

「アマは心配しないの？」

「心配よ。世界の行く末が」

しかし、崩壊を止める圧倒的な力が人にはある。

対立によって起こるパーフェクト・ストームを静められる使い手がいる。

だから、大丈夫だと彼女は言う。

「……もしかしたら、わたし、アメリカに行くことになるのかもしれないわね」

黒人の女はぽつりとつぶやいた。

「来るんなら、ホノルルも寄ってね！」

「はいはい」

鼻から息を抜いてそうして、アマはほほえんだ。

「クリスは心配性ね」

とうとう世界が動き出した、とそう思った。

今まで、彼女は予兆を感じてもそれらの事象は彼女らとは無関係なところで進展した。

彼女ら、占い師は行く末を見つめるだけだ。

未来を見通せるならば世界を変えることも可能なのではないかと思う者もいるかもしれないが、アマたちのような世界委でも突出した占い師にとってはその手段はあくまでも世界を見通すためだけの手管の一つでしかない。

「翼が、待っているわ。公平な審判を下す、翼を持つ者が、世界にいる」

だから大丈夫。

彼女は言った。

キャサリン・キーンと名乗った娘は、確かに反社会的な言動は見られない。

しかし、マジックボムを直接知る者にとっては、やはり、そういった言動が見られないのは若干不気味にも感じられた。

エリザベス・マーレイ、ブレット・オルコット、そしてジョージ・リートらはキャサリンの一举一動を注視していた。

そういった意味では、三人の中で最も厳しい眼差しを向けているのはブレット・オルコットだったが、彼の立場的にはやむを得ないだろう。彼はマジックボムの監視者である。

「わたしは、備品ですのよ」

彼女はそう言って笑った。

自分を卑下した物言いではない。

彼女は本当に自分のことを「備品」だと思っているのは察しがついていた。

それでも。

どうしてこうまでも異なるのだろうか。

おそらく、アリッサ・ノースウッドであれば、自分のことを「備品」などとは言わないはずだ。どれほど「人並み」と言った言葉から外れた存在であったとしても、彼女が自分のことを「備品」などと貶めるわけがない。

「なんです？」

向けられる眼差しに問いかけたキャサリンに、エリザベス・マーレイはため息をつくとかぶりを振った。

「なんでもないわよ」

肩をすくめたエリザベスは思った。

どんな形であれ、かつてのマジックボムのほうが生き生きしていたのではないだろうか、と。

「作り物ね」

独白したエリザベスは踵を返した。

反社会的な言動があったとしても。

それはアリッサ・ノースウッドと名乗る少女の個性だったのではないだろうか、と。

そう感じた。

どれほど適正に調整されていたとしても、まるで彼女の様子はまるで本物のマリオネットではないか。

政府に管理された、人形。

確かに、彼女は「人形計画」と言った。

しかし、その真意はいつたい、誰が持ち、そして誰が操っているのだろうか。

真相のその先が知りたい。

エリザベスの知るマジックボムは不遜で、プライドが高かった。

しかし、今、目の前にいるブロンドの巻き毛の娘からはそういったものを感じられないからだ。

誇り高いトップクラスの裏社会であったはずの、マジックボムはもういない。

エリザベス・マーレイが認めた彼女はもういないのだ。

そんな女の態度を横目で眺めてからブレット・オルコットは肩をすくめた。

確かに、エリザベス・マーレイの気持ちもわからくはない。

何よりも、今まで知っていたマジックボムとの関わりをいったん全て白紙にもどして関係性を新たに築かなければならないのである。

それが面倒くさいわけではない。

同質であり異質。

知識が同じでありながら、彼女の人格が異なる。

あまりにもややこしくて混乱しそうだ。

今まで彼らの中に存在していたマジックボムの人格をなかったことにしなければならぬということ。

子供らしい、しかし、そのままの子供ではない純粹な彼女を恐れながら、FBIの捜査官たちは愛してもいた。

長く関わり続ければ当然の成り行きだったかもしれない。特に、二十代、三十代初めの若い捜査官たちは殺人鬼としての彼女を知らない者がほとんどだ。

「興味なさげだな、ベス」

ブレットのその言葉に、若い範疇にはいるだろう女性捜査官は面白くなさそうな眼差しのままで首をすくめた。

「だって、特別強行突入班レッド・ドラゴンですよ？ 一応、仲間らしいですから。そんなの見張ってるだけ無駄じゃないですか」

なにやら声が刺々しい。

エリザベス・マーレイには、キャサリン・キーンが気に入らないようだ。

なんとも、女同士というのは複雑なものだ。

「マジックボムが嫌いなんじゃないのか？」

尋ねたブレットにエリザベスは眉を引き上げる。

「犯罪者ですからね、大嫌いですよ。決まってるじゃないですか」
彼女は淡々としている。

「……なら、その嫌いな犯罪者が消えて頼もしい仲間が増えたんだから、問題ないというよりも喜ばしいことなんじゃないか？」

そんなことをブレットが告げれば、エリザベスは肩の上でひらひらと手を振って見せた。

「だから興味ないんです。キャサリン・キーンはマジックボムじゃないんでしょう？ だったらそんなの見張ってるより報告書書いているほうが有意義に時間を使えますからね」

彼女はそう言った。

そして続ける。

「でも、個体として同じなら暴走もしない保証なんてどこにもないんですよね」

冷徹に、エリザベスは突きつける。

暴走の可能性を考慮にいれるならば、とりあえず「よく知っている相手」のほうが危険度は低い。

自分自身を備品と言い放ち、そして「反社会的な言動をとらないようにデザインされた」などと言ったところで、「当社比」と同じではなはだ怪しいものだ。

何よりも面白くないのは、と、エリザベスは思う。

「……あの子は、いなくなってもリート捜査官の心をつらえて離さないということよ」

誰にも聞かれないように、彼女は口の中でそうつぶやいた。否、彼だけではない。

エリザベス・マレーも、ブレット・オルコットも、小さな殺人鬼の少女を心から完全に消し去ることなどできなかったのだ。

誇り高く、愛らしい殺人鬼。

彼女のことを。

冷やかなエリザベスの言葉に、ブレットは目を見張った。そうだ。

暴走しないという保証は、なにひとつとしてないのだ。

彼らは、キャサリン・キーンとまだ出会ったばかりなのだから……。

「怖いことを言うな」

ブレットの声がかすれる。

「だって、そうじゃない。どうせマジックボムと同じ個体である以上は、キャサリン・キーンはサイキッカーなんですよ。暴走したときに、どうやって止めるんです？ 二年前の事件の二の舞よ……」

オフィスを出て行こうとしたエリザベスに言葉をかけたブレットに、女は振り返りながらそう告げた。

「……おい」

キャサリンに聞こえる。

そう言いかけたブレットに、しかしエリザベスは怯まない。当たり前のことだ。

男性社会とも言える警察組織で立ち回ってきた彼女は、そんなことで怯んだりはいしない。

「わたしは、オリジナルとは違います」

不意に声が響いた。

若い娘の声だ。

オフィスの端の、デスクの前に立つブロンドの巻き毛の女はまっすぐにエリザベスを見つめていた。

少女期を脱したばかりの、若い娘。

「……キャサリン・キーン」

キャサリンの声を受けて、エリザベスは目を細めた。

「わたしはオリジナルが反社会的だったと、そして、非道德的だったことも理解しています。知識を共有しているんですから、彼女がどういった存在であったかもわかります」

だから、とキャサリンは続けた。

「わたしは、わたしでありたい」

水色の瞳の女が告げる。

「でも、あなたは、アリッサじゃないわ」

エリザベスも負けない。

強い瞳が見つめ合った。

おまえなど、認めるものか、と。

エリザベスの瞳が告げる。

「そうよ、わたしはアリッサ・ノースウッドじゃない」

自分自身という矜持を守るために。

二人は互いに譲らない。

「そうね」

キャサリンの言葉を背中に受けて、エリザベスはそれだけ言った。エリザベス・マレーイが認めたアリッサという少女がいない。

それがなぜだかとても切なくて、彼女は目を伏せた。

誇り高く笑っていたアリッサが今は目の前にはいないのだ。代わりに彼女の前にいる「モノ」は、同じでありながら異なる「モノ」

だった。

「なんてむなしい現実なのかしら」

エリザベスはぼつりとつぶやいた。

廊下を歩きながら彼女はかぶりをふった。

「男って、まったく馬鹿ばかりね」

ちよつとかわいらしいと思うと、すぐに情にほだされる。

エリザベスは茶色の頭髪を揺らした。

「アリサ、早く戻ってきなさい」

窓の外の、初夏の眺望を眺めてぼつりとつぶやいた。

白いワシントン記念塔が目線の先にそびえていた。ゆるくかぶりを振った彼女はそうして自分のオフィスへと戻っていった。

キャサリン・キーンに敵性がないというのならば、それこそ監視など時間の無駄だ。

それだけのことだ。

たったそれだけのこと。

新たな部署が新設されたからと言って、そうそう都合良く事件が巻き起こるわけではない。

むしろ漫画のように、その人物の周りで凶悪事件が多発するのであれば、いっそ事件を呼び込む人間など殺してしまった方がいいのではないだろうか。

平凡な日常が、そうして過ぎていく。

もつとも、FBIに舞い込む事件はそれこそ星の数ほどあるが、特別強行突入班の能力を測るような事件など現在進行形で起こったりすることなどほとんどない。

キャサリン・キーンは防テロ防諜部の人間だったが、彼女の扱いに辟易した該当部署の部長によってお守り役のお鉢がブレット・オルコットに回された。

ブレットは犯罪捜査部の人間でテロ事件などとは縁が薄い。

エリザベス・マーレイとジョージ・リートも同部署に属する捜査官だった。

要するに厄介ごとを押しつけられたわけだが、エリザベス・マレーイなどは完全に苦々しい表情を隠せない。

「本当に嫌いなんだな」

エリザベスの様子にブレットは肩を落とした。

二人の女の関係の今後のほうが心配になってくるブレットであった。

「並んで黙ってれば美人同士なのにな」

二人の関係が良好であれば他部署がうらやむ犯罪捜査部の鼻なのだが、とにかくエリザベスのキャサリンに対する態度が冷たい。なんとも居心地の悪い空気感にオフィス内の捜査官たちは用事を探し出してコソコソと逃げ出していった。

二人の間にはさまったジョージ・リートとブレット・オルコットは顔を見合わせてから、何度目かのため息をついた。

そんなことはさておき、防テロ防諜部に特別強行突入班がいるよりも、舞い込む凶悪犯罪の件数の多さを考えると犯罪捜査部門にくだんのレッド・ドラゴンを委譲したほうが効率的だと思われた。

もつとも、FBIの上層部がそこまで考えてブレットにキャサリンのお守りを任せたのか、となるとそれはそれで多くの疑問が残った。

真相はどこまでも闇の中だ。

上層部の思惑はともかくとして、犯罪捜査部は常に人手不足という問題を抱えていたため、凶悪犯と互角に渡り合える捜査官が増えると言うことは大歓迎だった。そんなわけで、彼女はかなり好意的に犯罪捜査部に迎えられた。

これが悪名高いアリッサ・ノースウッドならば、こうもとんとん拍子にことは運ばなかったかもしれない。

犯罪捜査部に最終的に腰を落着けることになったキャサリンは、人目をひく美貌と人当たりの良い人柄から、すぐにオフィス内で人気者になった。

もつとも、かつてのマジックボムを知る者は一線をひいて彼女を

眺めていたようだったが。

「……セルヴィッジ」

ブレット・オルコットがハーバート・セルヴィッジを呼んだ。かつてアリッサとの間に確執があった捜査官だ。彼は結局、かつてワシントンでの爆弾魔事件で、かのマジックボムに救われた。

「なんですか？」

「キャサリンと組んでやれ。いくらレッド・ドラゴンとはいえ、ひとりじゃいろいろ困るだろう」

ブレットなりの気遣いだったが、今回、彼のパートナーとしてキャサリンを組ませることによってやや狭量な彼の見識を矯正したいという意図もあった。

「……俺より、リート捜査官のほうが適任なんじゃないですか？」嫌み混じりのセルヴィッジの言葉にブレットは思わず彼の頭に拳を振りおろした。

「くだらん持論を展開してないでとっとと行ってこい」

ジョージ・リートはアリッサの身内のようなものだ。

そんな男にキャサリン・キーンを任せられるわけがない。

そもそもセルヴィッジはまだ世間の常識にとらわれすぎている。捜査官として危なっかしい面を持ち合わせている。

ブレットはそう感じた。

セルヴィッジは未熟だ。

キャサリンが強行突入班に選ばれるような実力の持ち主であるならば、彼女に触れセルヴィッジが成長するだろう可能性を考えた。欲目ではないが、セルヴィッジはたまたまチャンスに恵まれなかっただけで、伸び白は相当なものだ。

「キャスと組んでちっとは勉強してこい」

年若い捜査官の文句を封じ込めてブレットは自分のデスクについた。

目の前につまれたファイルの山にため息をつく。

FBI職員は多忙だ。

ワーカホリックと呼ばれてもやむを得ない。

仕事、そして家庭を両立できずに離婚にいたるケースも少なくない。

「そういえば、アーネスト。おまえの嫁さんは離れて暮らしてて文句言わないのか？」

隣のデスクに座る、アーネスト・マツキランに、ブレットはふと話しかける。

「おまえさんはマジックボムを追いかけて婚期逃したからな」
揶揄するような言葉を返されて、ブレットは肩をすくめた。

「別に、老後少し寂しいだけだろ」

「少しねえ」

ブレットの言葉に、アーネストは首をかしげた。

「別居しててもうちは円満だからなあ」

「浮気とか心配はしないのか？」

「……あいつと浮気できるやつなんてそうそういないさ。嘘ついても一瞬ではれる」

意味深な彼の言葉にブレットは目を伏せて言葉の意味を考えるが、いまいちアーネストの言葉の意味がわからない。

「……うちのは、裏社会に片足つつこんでるからな」

耳打ちするアーネストに、ブレットは驚いたように相手を見つめた。

「いいのか？ それは」

「と言っても、犯罪者じゃないから、違法行為をしてるわけじゃない」

「犯罪者じゃない裏社会なんて聞いたことないぞ？」

「そりゃそうだろう」

アーネストは報告書を書きながら苦笑した。

「うちのは古い師だからな」

特別、感慨もなさそうにつぶやいた彼にブレットはぱちくりと視線をやる。

「信じてるのか？」

問いかけた。

「さあなあ……。だが、奥さんが古いやってるからって、FBIの仕事に支障が出るわけでもなし。気にしたことはないな」

別に大したことではない、とアーネストは笑った。

「表社会に限りなく近い、裏社会もある。そういうことだ。だから、俺は二年前の小さなマジックボムを否定する気にはなれない。あの子なあの子なりに、ああいう形でしか生きられなかったのかも知れない」

アーネストがつぶやいた。

彼は、ブレットやジョージよりも年下だが、かろうじてマジックボムの犯行を知る人間とも言える。

「確かに、彼女のやったことは許されないことだが、もしかしたら、彼女を追い詰めた原因があるのかと、思うと、な……。それを取り除かない限り、第二、第三のマジックボムを生み出すことになるんじゃないのかと、俺は思うことがある」

彼は思い詰めたようにそう言った。

「第二、第三のマジックボム、か……」

大人というものは無責任だ。

不幸な子供たちを作りだし、そうして彼らが結果的に犯罪に手染めるものだとしたら、それはいったい誰のせいなのだろうか。

「まあ、セルヴィツジがキャスと組んで一皮むけてくれればいいんだがな」

アーネストは、ブレットの言葉に苦笑した。

正義感と、人道主義でがちがちに凝り固まった青年を案じる。

「少しは柔軟に物事に対処できるようになればいいというのは、確かにそうだな……」

厳しい瞳をゆるめたアーネストはそうして黙り込むとペンを報告書に走らせた。

かつて、彼はケース・アングリーボマー・セカンドでの捜査にお

いて血相を変えた。

もちろん、犯罪行為は許されるものではない。しかし、当該事件に際して彼の顔色は普通ではなかった。

なにかが二人の間であったのだろうと思う。

しかし、FBIの捜査官として、私情は避けるべきであった。

アリッサと知識を共有する、彼女のクローン体。

ハーバート・セルヴィッジが、キャサリン・キーンとどのように関わりを持つのか、そのことに興味があった。

「よろしく」

視界の隅で、キャサリンがセルヴィッジに右手を差しだして笑った。

ありえないもの。

同じであって異なるもの。

受け付けられない。

セルヴィッジはその手をはねつけた。

「俺は認めない」

犯罪者だ。

彼女は犯罪者だ。

彼女はEVE-000-782。

それは紛れもない事実だった。

キャサリン・キーン。

彼女の人格は、温厚にコントロールされているが、実のところ、調節されているというだけで、キャサリンの精神には不安定な部分もないわけではない。

彼女が実験体である以上は仕方のない部分なのかもしれないが、それを見越していた一部の者たちの数名はキャサリンのそんな部分を感じて危機感を抱いた。

時折、キャサリンの見せる不安定な眼差しが多くのFBIの捜査官たちを不安にさせる。

二年前の事件から、ジョージは仕事に打ち込む一方、ひどくふさぎ込むようになった。

彼は、ぼんやりと窓の外を見つめている。

そんな彼の背中に、誰も声を掛けることなどできない。

ガラスに寄りかかった長身の男は、目の奥に反芻する。

力なく垂れた少女の手足。

彼女から体力を奪うだろうために加えられた拷問に似た暴行の痕。憔悴した彼女は無残にもブロンドの巻き毛を刈り取られていた。

彼が愛した彼女の巻き毛。

とてもステキで、上質の帽子がよく似合っていた。

「……畜生」

結局、守れなかった。

守りたいと願い、守ろうと心に誓ったアリッサは、彼の手から奪われた。

「特に仕事もないから帰りますね？」

夕方、定時にキャサリンは立ち上がった。

確かに、特別強行突入班に回されるような仕事は発生していない。彼女が帰ったところでなんら支障もなかった。

「ああ。いつどんな凶悪事件が降ってくるかわからんな。休みを取れるときにゆっくり休んでおけよ」

ブレットのその言葉に、キャサリンは「はい」と言ってから笑った。

彼女は一見、大学生のようにも見える。

しかし、その正体はそんなものではない。

彼女は、レッド・ドラゴンだ。

「お疲れ様です」

言ってから彼女はオフィスを出た。

高校を卒業したばかりの事務員か、大学生か、そんな印象だ。

「赤い竜にはとても見えないよな」

オフィスから消えたキャサリン・キーンをアーネスト・マツキランはそう評した。

いっそ異常なほどの威圧感、小さなアリッサのほうが勝っていたかも知れない。

異常な。

圧倒的な、威圧感を放った。

それが凄絶に命を燃やす炎であると、誰も知らなかった。

自分の命を、燃やして。

彼女は生きていた。

まるでその姿は宇宙空間に浮かぶ恒星のようだった。

その生き方は余りにも悲しい。

「セルヴィッジ」

ブレットは同僚の青年に声をかけた。

不機嫌そうな目を上げた青年に、ブレットはかすかに笑う。

「そう嫌そうな顔をするな。監視でいい、あの小娘から目を離すな」
そこでブレットはいったん言葉を切った。

「あの小娘の意図がどうあれ」

政府がなにを考えているとしても。

「あの小娘は、厄を呼ぶぞ」

アリッサ・ノースウツドのクローン体。

彼女の知識の全てを共有しているのだ。

厄を運ぶくらいですめばいいとさえ思う。

しかし、恐らくその程度では済まない。

生まれ落ちたときから、特異な存在の彼女。

EE-000-782。

ウェポン・コード・ナンバー12と呼ばれる、史上最悪の兵器。

人間の尊厳もなにもかも、EE-000-782にはない。

長く犯罪捜査に関わり続け、誰よりも長くマジックボムを追いかけたブレットだからこそ、彼女を侮ってはならないと知っている。

今までにあった一般常識もなにもかもを、圧倒的な力でねじ伏せてきた過去を知っているからこそ、彼は戦慄した。

全てをねじ伏せ、全てを蹴散らす。

それがマジックボムの強さだ。

侮ったときに手痛いしっぺ返しを食らうのは自分たちだ。だから、彼は警鐘を鳴らす。

「目を離すなよ、セルヴィッジ。あの女はいつもそうやって自分に不利な状況をひっくり返してきた。この世にあり得ないことなんてもんはひとつもないんだ。少なくともマジックボムには」

自分たちはそういう相手を追っているのだ、と彼は言う。

だからこそ最強。

ブレット・オルコットの言葉に、ハーバート・セルヴィッジは背筋を正した。

犯罪者としてのマジックボムをよく知る男の言葉。

その忠告。

彼は、マジックボムを「あの子」ではなく「あの女」と言った。言葉の持つ思い意味を考えさせられる。

「……どんなに地に落ちても、あの女は名実ともに、世界最強だ」最強の殺人鬼。

「目を離すな、いいな？」

「はい」

犯罪捜査部は、強力な仲間を得たと同時に、爆弾を抱えたのだ。いつ、大爆発を起こすかもわからない不発弾。

そんなことを考えてブレットは眉をひそめた。

ただの思い過ごしであってほしいと思う。

アメリカ合衆国のために、彼は祈る。

キャサリン・キーンと名乗った彼女が、何事も起こさなければそれでいい。しかし、彼女はかつてマジックボムと呼ばれた最悪の犯罪者と知識を共有するクローン体である以上、事はそんなに簡単なことではないと言うことを彼は知っていた。

アイスを買ってから歩道を歩く彼女はきよろきよろと辺りを見回した。

田舎から都会に出てきたばかりのお上りさんのようにも見えた。

ワシントンD・C.の風景。

それはオリジナルのEVE-000-782の記憶にあるもので、キャサリンの目には何もかもが新鮮だった。

彼女は生まれてからずっと研究施設で暮らしてきた。

そしてその生は、オリジナルと比べれば余りにも短い。

だからこそ、彼女は「アリッサ・ノースウッド」を理解できない。

そもそも、彼女とオリジナルの違いは別の場所にもある。

感情を抑制された後期型であるキャサリンと、純粹に兵器として作られたアリッサでは存在意義が異なっている。

長い外界で生きたオリジナルの知識。

スーパ―に足を踏み入れてみたり、本屋で本を手にとってみたりと。

まるでウィンドウショッピングに興じる田舎娘のような姿。

大きな水色の瞳をキラキラと輝かせながら、キャサリンは小首を傾げた。

オリジナルとは異なる人格のキャサリン。

彼女は不意に、男の手に肩を抱かれて顔を上げた。

巻き毛のブロンドが大きく波打った。

「……よお、ねーちゃん。俺と遊ばないかい？」

どういう軟派だとキャサリンは片方の眉を引き上げる。

「ダメですよ、おじさん。こんな昼間からお酒なんて」

彼の腕を自分の肩から引き離しながら金髪の娘は笑う。

いい大人が真っ昼間からなにをしているのかと、彼女は思う。

身なりからすると、日雇いの労働者だ。くたびれたシャツとズボ

ン。日焼けした肌、土木関係者だろうか。

ごつごつとした指は硬く、タコができていた。

「今日は仕事を首にされた記念だ、ちよっとつきあえよ、どうせねーちゃんも暇なんだろう？」

確かに定時でオフィスを出たが、それを「暇なんだ」でひとくくりにされてはたまったものではない。

大概の場合、FBIに捜査協力を依頼されるような事件は迷宮入りしかけた難事件であることのほうが多い。要するに、特別強行突入班のしゃしゃりでてくるような事件がなかったただけだ。

待ったくもって平和であるということは良いことである。

善良であれ、と調整された彼女は、素直にそんなことを思った。

「わたし、警察ですから」

ニッコリと笑ったブロンドの巻き毛の娘は言いながらカバンから手帳を取り出した。

FBI所属の身分証明書だ。

こんな時には一応、役に立つらしい。

「……おいおい、ねーちゃん。冗談はほどほどに……」

言いかけた男の、赤らんでいた顔が白くなった。次いで、血の気が引いて青くなる。

面白いほど顔色が変わる男にキャサリンは笑顔のまま首を傾けた。

気まずそうに男が逃げ出す。

別に逃げ出す必要などどこにもなかったのだが、居心地が悪かったらしい。

そりゃそうだろう。

どこの男が、FBIの捜査官などと一緒に酒を飲みたいなどと思うだろう。

空気が読めないのは、かつてのアリッサ・ノースウッドと同じらしい。

遠目にその様子を眺めていた茶色の髪の女はコーラの缶を手にしたままで肩をすくめた。

自分だったら、さんざん美味しい食事を食べさせてもらってから帰るけど、と彼女は考える。

見たところキャサリン・キーンは、アリッサ・ノースウッドとは異なり、絶対的な経験値が不足していた。

それ故に、頭でっかちで危なっかしい。

上層部もえらく面倒くさいものを押しつけてきたものだと思う。コーラの缶をゴミ箱に放り込んでから彼女は自宅への道を歩きだした。

キャサリン・キーン本人と言えば、なにがなにやらわからないまま酔っぱらいを撃退し「自宅となっているアパートメント」へと帰るとテレビのニュースをつけた。

ニュースの特集だろう。

「……こうして、集結したように見えるケース・アングリーボマー・セカンドですが、この事件と類似した事件がこの数ヶ月後、またしても引き起こされたのです」

マイクを持った女性のニュースキャスターが力説している。

真相を知るキャサリンは内心で相づちをうった。

正確には、前者は一般人の爆弾魔による事件で、後者は兵器として開発された人間が結果的に引き起こした事件だ。

真相は全く異なる。

ワシントン記念塔をバックにして声を上げる彼女のレポートを聞

きながら、キャサリンはやかんと火にかけた。

マグカップにインスタントコーヒーの粉を注ぐと、キッチンに寄りかかったままでテレビを眺めた。

途切れ途切れに、ケース・レッドドラゴンの、キリスト教原理主義団体だのという言葉が聞こえてくる。

ケース・レッドドラゴン。

耳に新しいその言葉は、しかし、マスメディアの人間ごときが検証できるようなそれではない。陰謀と策謀によって引き起こされた事件。

元来、補完者がいなければひどく不安定な精神状態のオリジナルのEVE-000-782を、制御しようということ自体が無謀なのだと彼女は思う。

ピーとやかんが鋭い音を鳴らした。

熱いコーヒーを入れる。

エアコンのスイッチを押したキャサリンは、ソファに沈み込むように座り込んでテレビのニュースを見つめた。

飾り気のないリビング。

無個性な部屋。

それらはアメリカ政府に属する機関が、キャサリン・キーンのために用意したものだ。

オリジナルは、兵器としてこの世に生を受けた。

純粹な兵器として。

それでは、自分はたして何者なのだろうか。

「ヒト」でも「兵器」でもない自分。

もしかしたら、ただの使い捨ての駒なのかもしれない。

そんなことを思ってから彼女はかぶりを振った。

考えたところであかかない。

意味などない。

自分を生み出した人間たちの思惑などわかるわけもない。しかし、彼女は「そこ」に存在しているのだ。

「キャサリン・キーン……」

それは、「彼女」の中にあつた名前だ。

どこにでもありそうな、つまらない名前。

そんなつまらない名前を選んだアリッサの意図。それが今のキャサリンにはわからない。

もつともわからなくてあたりまえだ。

キャサリンはアリッサではない。

全く異なる人格。

まずいコーヒーをすすりながら、キャサリンはそうして長い睫毛を伏せた。

手を伸ばしても届かない。

キャサリン・キーンはEVE-000-782を生み出した、生体兵器開発計画の後継プロジェクトである「人形計画」によって生み出された。

微調整を受けたEVE-000-782の後継型である。

キャサリン・キーン的能力は、オリジナルの十分の一度鬼押さえられ、反社会的な言動は抑制され、暴走を押さえるためにきわめて高いレベルで感情処理能力を有していた。

この感情処理能力のおかげで、ADAM-000-1294の補充能力は必要なくなり、完全に独立しているため政府がコントロールすることが比較的楽に作られている。

要するに、政府がいかにEVE-000-782を恐れていたのか、ということになるのだが、そんなことは本人たちにとってはどうでもいいことだ。

彼らは、自らが禁忌を犯して作り出した「道具」を恐れた。

感情を持つ「兵器」。

テーブルにマグカップを置いた彼女はそうしてソファの上で眠りへと落ちていく。

彼女が生み出されてから、まだ二年しかたっていない。知らないことが多くて当たり前だった。

自宅にいる男の携帯電話が鳴った。

「……はい、ジョージ・リート」

電話にでた男はいつものように通話ボタンを押す。
電話をかけてきた相手は話し出さない。

「もしもし？」

その違和感。

彼は気がついた。

「アリサ……？」

アリサなのか？

問いかける。

何度も。

「……ジョージ」

ぽつりとつぶやいた声。

彼を呼ぶ幼い声。

いや、幼いと感じたのはその発声によるものだっただろう。

拙い声に、ジョージはぎくりと体を揺らした。

「……暗いのよ」

とつとつと少女が話す。

少女の声に、彼の記憶がフラッシュバックした。

「ここは暗いのよ。ここからは光が見えないのよ」

大粒の涙を流しながら訴えたアリッサが彼の中に蘇る。

「助けてよ……」

長い、長い沈黙の後に彼女が告げた。

それきり電話は切れた。

どこからかけられたものなのかもわからない。

電話番号など、FBIの情報分析官を頼れば問題なく解決するが、
私的に情報を動かすことはできない。

犯罪捜査ではないのだ。

呆然と携帯電話を見つめた彼は親指と人差し指で両目を押さえる

とソファに沈み込んだ。

「助けて……」

二年前、彼女は泣いてすがったというのに、自分は助けられなかったのだ。

「助けてよ……、ジョージ」

アリッサが彼に助けを求めていたのに。

「助けられなかった……」

そんな自分が口惜しくて仕方がなかった。

今も、彼女に手を伸ばすことができずにいる。

彼女がどこにいるのかすらわからない。

「アリサ」

彼は少女の名前を呼んで、そうして自分の片耳にしたピアスに触れた。

愛しい少女を思い出した。

翌日、キャサリンは電話の呼び出し音にたたき起こされた。

まだ日も上がらない時刻だ。

窓の外は暗い。

「はい、もしもし？」

特別強行突入班、レッド・ドラゴン。

その自分が必要とされる事態でも発生したのだろうか。キャサリンは眠気から醒めたばかりの頭でちらりとそんなことを考えた。

そもそもそんな事件など起こらなければいいのだ。

しかし、そんなのんきなことも言っていられない。

「キャス、すぐに本部に來い。事件だ」

電話の向こうから怒鳴るブレット・オルコットの声が響く。

娘は彼の声に思わず首をすくめた。

やっぱり。

内心でぼやく。

手早く着替えると彼女は腰の銃を確認して彼女は自宅のアパート

メントを飛び出した。

自転車に乗った彼女は黒いパンツに包まれた足を颯爽と動かした。危険な場所も軽々と踏破できるようにあつらえられたブーツに包まれた足は細く美しい。

三十分程でFBI本部についた彼女にブレットは待ち構えていたように防弾チョッキを投げた。

黒いスラックスと体にぴったりとあったカットソー。腰にはトランシーバーと拳銃を帯びて手早く出動の準備を整える。

「場所は？」

キャサリンが問いかけた。

「アナコスティアだ」

短くブレットが告げる。

その単語に、彼女は眉を引き上げた。

「……そう」

つぶやいて彼女は茶色のゴムで巻き毛のブロンドを首の後ろで縛り、ハーバート・セルヴィッジの運転する車両に乗り込んだ。

厳しい横顔。

強い眼差しは犯罪者の眼差しではない。若いが、確かに警察関係者のひとりとして犯罪捜査に携わる者の瞳。

セルヴィッジは混乱を禁じ得ないままかぶりを振った。

「状況は、どうなんです？」

娘が問いかけた。

強さこそが自分のアイデンティティだと、彼に告げた世紀の殺人者は今はいない。

「ヤク中でラリった馬鹿が、銃持って民家に立てこもってるらしい」「誰が通報したんです？」

当然の疑問だ。

まだ朝の六時にもなっていない。

「隣の婆さんが朝、新聞を取りに外出たら隣家に大騒ぎで猟銃を持って入っていったのを見ていたらしい」

老婦人は慌てて庭木のそばに隠れて事なきを得たが、隣家から銃声が三回と悲鳴が聞こえたという。

「婆さん、だなんて不謹慎です」

セルヴィッジの言葉を咎めたキャサリンはわずかに眉間を寄せている。

彼女のその言葉は恐らく本心だ。

「……悪かったよ」

まだ突然すぎて、セルヴィッジはキャサリン・キーンとマジックボムを分けて考えることができない。

なにより、ブレット・オルコットに「目を離すな」とまで言われたのである。

分けて考えろというのが難しい。

「どう思う？」

不意にセルヴィッジがキャサリンに尋ねた。

「生存者の可能性、ですか？」

険しい彼女の声を受けて、ステアリングを握ったままで彼は頷いた。

「ドラッグで凶暴性が増していなければ、あるいは」

生存の可能性もなきにしもあらずだ。しかし、通報の真に受ければ、押し入られた家人の生存率は限りなく低い。

「ドラッグ、か……」

そういえば、とセルヴィッジは思い出した。

アリッサ・ノースウッド。マジックボムは非合法な多くのことに手を染めながらドラッグはやっていなかった。

FBIの極秘資料の中にもそのような形跡はなく、どこか合法的なアルコールや煙草などの嗜好品のたぐいにすら興味を示したあとすらなかったことを。

取り調べの際、ブレット・オルコットは紅茶やコーヒーではなく、ジュースを彼女に手渡していた。

「どうしました？」

黙り込んだセルヴィッジに、キャサリンが視線を投げかけた。水色の瞳がまたたく。

「なんでもない」

セルヴィッジはそれだけ言うと、フロントガラスの向こうを見つめたままステアリングを握り直した。

「現場は、アナコスティアだということだけど」

彼女はつぶやく。

FBI本部に着いた途端、ブレットに防弾チョッキを投げ渡されたキャサリンは事件の詳細を聞いていない。

道中、セルヴィッジに聞くと、ブレットが告げた。

確かにドラッグでハイになっている男が銃を持って立てこもっているという状況は一刻を争うのだが、腑に落ちない。

キャサリンはじつとセルヴィッジを見つめた。

「納得いかないって顔をしてるな」

その瞳に、セルヴィッジがつぶやいた。

少し考えれば、わかることだ。

誰だっておかしいと思うだろう。

「いくら現場が近いからって、こんなことおかしいわ」

キャサリンの言葉に、セルヴィッジはうなずいた。

「自治警察も、DCPDもすつとばして、どうしてFBIなの？」

DCPD。

その言葉に、セルヴィッジは「そうだな」とつぶやいた。

ワシントンD・C・首都警察。ワシントンを中心に活動するアメリカ合衆国の十大警察のひとつである。

「こんな仕事はDCDPに任せるべきことなのよ」

投げやりなわけではない。

彼女は真摯に告げる。

FBIなどがしゃしゃり出たところで、生まれるのは軋轢ばかりだ。キャサリンは冷静に指摘する。

実際、かつてFBIと州警察との連携がうまくいかず結果的に捜

査が難航することとなった事例もある。

「DCPDからの依頼だそうだ」

セルヴィッジはややしてから応じた。

「……なぜ？」

「なぜって、そりゃ目的は君だろうさ」

FBI内部に新設された特別強行突入班、レッド・ドラゴン。

その手腕を見定めてやろうと、ワシントンD.C. 首都警察の仕掛けた罠。

「くだらない……」

キャサリンはあきれたようにぽかんと口を開いた。

もつとも、それはセルヴィッジが責められるいわれはない。

「俺に言うな」

不機嫌そうに眉をひそめた彼にキャサリンは小さく首を傾げた。

容姿はほとんどマジックボムと変わらない金髪碧眼。

だというのに、性格と年齢が異なるというだけで、これほど人の印象は変わるものなのか、と。

ハーバート・セルヴィッジは思う。

「レッド・ドラゴンのお披露目もかねての出動だろう」

組織の思惑。

アメリカ国内の警察、軍隊、司法組織の関係者たちの注視される特別班。

治安維持を目的とされて投入された備品に誰もが注意を傾けた。

「それ」は国家にとって有益なのか、と。

「悪趣味ね」

彼女はつぶやいた。

確かに悪趣味以外のなにものでもない。

しかし、彼女はそのためにFBIに配属になったのだ。

助手席に座るブロンドの巻き毛の娘を流し見た。

水色の瞳が、朝焼けに輝いている。

ポトマック川を横目に、けたたましいサイレンを鳴らしてアスフ

アルトの上を警察車両が駆け抜ける。気温はすでに二十度を超えている。

ワシントンD・C.の南東部アナコスティア地区。

第二次世界大戦直後は白人の中流階級が集まる住宅街だったが、その後、インターステート・ハイウェイの整備によって人口は郊外へと流出しアナコスティアで暮らす住民層は大きく変化し、治安が著しく悪化した。

現在のこの地区は黒人居住区として有名でその人口比率は九十パーセント以上に達していた。

アナコスティアの一角、一見の民家を警察車両が取り囲んでいる。荒っぽく車を止めた彼らはDCPDの警官に保護されている老婦人を眺めた。

「……どうも。特別強行突入班のキャサリン・キーンです」

大柄な黒人警官に右手を差しだした。

小柄な白人の娘。

握手を交わしながら、黒人警官は驚いた表情のママで彼女を見つめる。

特別強行突入班が現場に到着する、という話は聞かされていたが実際に到着したのは防弾チョッキを着た十代後半の若い白人の娘だ。正直なところ、屈強な男が着任したのだと思っていた。

当たり前だ。

特別強行突入班、などと聞かされれば誰だってそう思うだろう。

驚いたところで無理もない。

「おいおい、勘弁してくれよ……」

ため息混じりに黒人警官が肩を落とした。

「お嬢ちゃんみたいのは事務員でもやっていたほうが身のためだぜ」はーっとため息をつく彼にキャサリンはしかし怯まない。

「心配いりません、犯人の確保はしますから」

ニッコリと笑った。

そうだ。

ここにいて誰も彼女の實力を知らない。

彼女がなにをするのか、未知の領域だ。

ブレット・オルコットですら、わからない。

キャサリン・キーンという彼女を知らない。

「ご心配なく」

そうしてキャサリンは背の高い黒人警官を見つめてほえんだ。

彼女は特別強行突入班、レッド・ドラゴン。

腰に帯びた拳銃に指をかけて、彼女は麻薬中毒者がたてこもっているという民家へと向かっていった。

危険な黒人居住区。

もちろん、キャサリンが知らないわけがない。

パトロール用の車両によりかかるブレットはそんな小柄な彼女の後ろ姿を見つめている。

大胆なところは、かつての小さなアリッサと変わらない。キャサリン・キーンも恐れを知らない。

「マジックボム、か……」

反社会的でありながら、確固とした自分を持っていた彼女。

ジョージ・リートという狙撃手が愛した純粋な魂。

彼女の存在を思えば、ジョージの気持ちはわからなくもない。

てらいもなく、まっすぐに前を見つめ弱音も吐かずに戦場へ身を投じる。

自分自身の命をかけて。

自分という人間の存在意義をかけて、彼女は戦場のただ中へと身を投じた。

美しい潔さに誰もが瞳を奪われたというのに、今、マジックボムはここにはいない。

「あんな若い娘さんをひとりで行かせるなんて、大丈夫なの？」

保護された老婦人の心配した声がブレットの耳に響いた。

「ミセス、彼女はこんな事件のために着任した腕利きです。心配いりませんよ」

丁寧な物言いでブレット・オルコットはニコリと笑った。

「でもあんな若い娘さんになにかあったら、親御さんが心配するんじゃない……」

老婦人は尚も言いつのる。

それもそうだ。

確かにキャサリン・キーンは若い娘で、老婦人が心配しても仕方がない。

そんな押し問答が続けているうちに、キャサリンは問題の男がたてこもる家の玄関の前に立つとブレットとセルヴィッジを振り返った。

無言のままでブレットが頷く。

「いいんですか？」

セルヴィッジがブレットに問いかける。

「俺やおまえが突入するよりは、はるかに安全だと思うぞ」
言葉通りの意味。

キャサリン・キーンがアリッサ・ノースウツドのクローン対である以上まともであるはずがない。

ならば、彼女に任せるべきである。

ブレットはそう思った。

アリッサ・ノースウツドがそうであったように、キャサリン・キーンもおそらくサイキッカーだ。

凶暴でありながら、誰よりも自分という人間に固執した純粋なアリッサ。強さを求めた彼女とは異なるキャサリン。しかし、本当にキャサリンはマジックボムとどこか異なるのか。

人間の本质とははたして何なのだろう。

アリッサのような怪物を作り出し、生命をもてあそんだ人間たちへの罰はくだらないのか。

そんなことを考えれば考えるほどブレット・オルコット中に存在する疑念は大きくなる。

アリッサが怪物ならば、キャサリンも怪物ではないのか。

非道な人間たち。

神の怒りは鉄槌となって振り下ろされるのではないか。

その行く先に感じるのは恐怖。

アメリカに、鉄槌が下されるのではないかと、ブレットはこの二年の間、恐れを感じなかったことはなかった。

ジョージ・リートから聞かされて、ブレットは真相を知った。

アリッサの命を、命とも思わずにもてあそんだ。

ブレットは彼女を「人ではない者」だと思ったことはなかった。警察官と犯罪者。

そんな立場だったとしても、彼は彼女を人だと思っていた。

命をもてあそんだ結果、ケース・アングリーボマーとケース・レッドドラゴンが引き起こされた。人の手に負えないものを作り出した。

罪には罰が下される。

いつか、天罰が下る。

ブレットは目を伏せた。

どちらにしたところで、ブレット・オルコットはマジックボムの監視者であることに変わりはなく、彼女が作り出された怪物であったとしても犯罪者という事実には変わりがなかった。

「ともかく、キャスの腕前拝見というこう」

彼女がどのように凶悪犯に立ち向かうことができるのか、警察関係者の一人として興味があった。

家の中から怒鳴り声が響いた。

裏返った男の声。

なにが起こっているのか、彼らには知るすべもない。

どれほど時間がたったのか、キャサリンは男を片手で引きずって外にでてきた。

白人男だ。

キャサリンはうんざりとした面持ちでブレットに男を付きだした。
「大丈夫か？ キャス」

「大丈夫よ」

頬に赤い筋があるが、キャサリンは気にした様子もない。
恐らく銃弾がかすめたのだろう。

「オリジナルは、もっと強かったのかしら」

「鬼のように強かったぞ」

「……そう」

なにがあったのか、彼女は語らない。

語らなくとも、報告書を見ればわかることだ。

それが、キャサリンとブレットらの「再会」だった。

第二章 パンドラの箱 1

プロメテウスは天界から火を盗み、そして人間に与えた。

それに怒ったゼウスは人類に災いをもたらすために「女性」というものを作った。

ヘパイストスは泥から女の形を作り、「パンドラ」と名付けられた。

パンドラは神々から多くの贈り物を与えられた。

アテナからは機織や女のやるべき仕事の能力。アフロディーテからは男を苦悩させる魅力。ヘルメスからは犬のように恥知らずで狡猾な心を。

そうして、神々は最後に「決してあけてはならない」と言い含めて箱を持たせ、エピメテウスの元に送り込んだ。

兄のプロメテウスから、ゼウスからの贈り物は絶対に受け取るな、という忠告にも関わらず、美しいパンドラを見たエピメテウスは彼女と結婚した。

幸せな生活を送っていたパンドラはある日、「決してあけてはならない」と告げられていたにもかかわらず、好奇心に負けて箱を開いてしまった。

すると、箱からは様々な災いがあふれ出した。

驚いたパンドラは箱のふたを閉めてしまうが、しかし、エルピスは箱の底に残って出て行かなかった。

こうして世界は数多くの災厄に充ち満ちて、人々は苦しむことになる。

パンドラの箱。

黒人女の占い師はカードをめくる。

「箱は、エルピスを残して、人の手から人の手へ」

彼女は独白する。

「……人の手から人の手へと運ばれ、そうして選ばれし聖人らの手

を経て最後の聖女のもとへとたどり着くのよ」

アマはつぶやいて目を伏せた。

「希望はまだ、箱の中に残っているの……」

彼女はそう言う。

「世界は災厄で満ちるけれど、乙女の祈りは獅子をも御する」

世界の鍵を握る人間がいる。それをアマは理解していた。

死にまつわる混乱は世界をどん底にたたき落とすだろう。しかし、その先にあるものは確かな再生だ。

世界はいまだ死んでいない。だから、彼女は一步たりとも退かない。

目に焼き付けるように、彼女は行く末を凝視する。

その行く末を見極める。

中央アフリカ最強の占い師は、そうして睫毛を伏せた。

まだ、未来は確定していないのだから。

「誰も、世界の終わりなんて望んではないのよ」

彼女は言う。

「……聖女ならば、あるいは」

狂った世界の流れを止められるのではないかとも思うが、しかし、アマにはそれが誰なのかわからない。彼女はあくまでもカードの指し示すものを読み解くばかりだ。

彼女は超人ではない。

だからこそ、彼女は祈る。

世界のために。

「占い師ってなにをする人なの？」

過去に、アマは師匠とも呼べる老婆に尋ねたことがあった。

かつて「最強の魔女」と自称した彼女の一族の老女。

ザイルの魔女アジョラ。

その名前はアフリカ大陸に轟いた。

まだ通信手段もろくにないような時代に、である。

「呪術師というのはね、世界の終わりを口伝する者さね」

問いかけたアマに、アジヨラは「ヒツヒツヒ」と耳障りな笑い声を上げた。しかし、アマには不思議とそれが耳障りだとは思わなかったことを覚えている。

そう告げた魔女はパイプをふかした。

「世界の終わりを口伝する者……？」

意味深長な彼女の言葉を、当時のアマは幼すぎて理解できなかった。

「まあ、おまえさんみたいな子供が理解しなくてもいい話よ。お忘れ」

黒い肌の、黒い瞳の老婆。

垂れた乳房と粗末な腰巻きをした古い時代の魔女はそうしてアマに「今の話など覚えていなくてもいい」と言った。

「アジヨラ様は怖くないの？」

尋ねたアマに老人はパイプをくわえた唇をゆがめてから地べたに座り直した。

「あたしゃ、世界の美しさも、醜さも、汚さも全部見てきたからね。今さら怖いものなどあるものか」

アジヨラはそう言うのにやりと笑う。

老婆はいわゆるブードゥー教の魔女だった。

「けれどね、おまえさんはこんなものに頼ることはないんだよ。おまえさんはおまえさんの中にある自分だけの神様を信じればいいんだからね」

物事に捕らわれない自由な発想の魔女はどの宗派にも属さず、どの団体にも名を連ねなかった。

「あたしゃ、自分の神様を信じただけさ」

アジヨラはどこまでも飄々としていた。

生き神とまで呼ばれた魔女。

若かりし頃はそれはそれは美しい女だったと言うが、今ではしわがれて面影すらもない。

「自分だけの神様……」

ひどく難しいことを言われたような気がして、少女は首を傾げた。
「おまえさんには、まだまだ世界の真理なぞわからないさ」

彼女はそう告げた。

唇から煙を吐き出す。

「世界は、生と死を分かつ場所。魔女はその時代の潮流に身を任せ
真実という小石を拾うのみ」

歌うようにアジヨラは言った。

「真実という小石を拾う……」

思い出した魔女の言葉をアマは繰り返した。

あれから何年もたった。

結局、「ザイルルの魔女」からはろくに教えらしい教えを受けず
に今に至る。

そんなアジヨラは数年前、心臓発作で死んだ。

殺されたわけでもなく、病気で死んだわけでもないということが、
アジヨラらしいとアマは思った。

確か、百十五歳だった。

「……おまえさんは、どこにも属さず、誰にも支配されることもな
く生きるじやろう。それを実践せよとは言わないがね。だけど、お
まえさんはあたしと同じ道を歩むのさ。どんな理由であれ、ね。こ
れがあたしのおまえさんに対する唯一の予言。予知」

パイプをふかしながら彼女は流し目で笑った。

「よく覚えておおき」

しわがれた声で、魔女はそう告げた。

それが、アジヨラのアマに対する最初で最後の予言だった。

「当時のわたしはとても子供で、とても浅はかだったのよ。だから
なにかに縛られないでいるということが、とても恐ろしくてたまら
なかったの。なにも属さないでいるということが怖くてたまらなか
ったのよ」

ひとりごちたアマは誰もいない暗闇の中に向かってにこりと笑っ
た。

右手を拳にして胸の前で握りしめる。

しかし、今の彼女は、当時の幼い子供ではない。

「わたしはわたしの役目を知っている。わかっているわ……」
そう言って目を上げた瞬間。

彼女は電話のベルの音にぴくりと肩を揺らした。

「もしもし？」

受話器を上げた彼女が声を上げる。

「……あら、どちら様？」

小春日和を思い起こさせる柔らかい声を上げて、そうしてから静かにひっそりと微笑すらもおさめた。

「わたし、そういったお話はお断りしていますの。正義漢だろうが、悪人だろうが、わたしにとって価値はありませんもの。どうされたいのかは存じませんが、わたしは誰かに命令されるのは大嫌いです」

言い放った彼女は鋭い瞳のまま受話器を置いた。

そうだ。

誰も彼女を支配できない。

誰も彼女に命令することなどできない。

「わたしを支配するのは、わたしだけよ」

ぽつりとつぶやいたアマは、ひとつ吐息をつくソファに座り込んで大きく足を組んだ。

長いドレスの裾が波打つ。

ガラス製のティーカップに氷を浮かべてミントティーを注ぐ。

ティーカップに口をつけたアマはそうして目を伏せた。

予感が消えない。

「運命の齒車は回り出す。時は動き出す。誰もそれを止められはしないわ」

中央アフリカの広大な国で、彼女は予見した。

テーブルの片隅に置かれたタロットカードのデッキに視線を投げかける。

＊

キャシーはベッドの上で大きく伸びをしてからあくびをする。

年頃っぽい少女が大口をあけてあくびもないだろうと、見る者がいれは思うのかも知れないが、少なくともそういったことに頓着するような男が相部屋ではなかった。

ソファで大男が眠っている。

「こいつも老けたもんね」

寝癖の付いた黒髪をかき回しながら、キャシーはあくびをかみ殺す。

どういうわけか、アシル・ブラスに対しては、キャシーの「殺人スウィッチ」が入らなかった。

二年間もの間共に行動をしてきたというのに。

「こいつは馬鹿よね」

ただの馬鹿だ、とキャシーは思った。

馬鹿でなければ自分などのような殺人鬼に、戦争屋がついてくるわけがない。

ナチュラル・ボーン・キラーズでもあるまいに。

キャシーは黙り込んだままで青年を眺めた。

「……ああ、もう朝か」

「寝てれば？　ここはレジスタンスも武装組織もないわ」

「キャシーが起きてるのってのに、俺が寝てるわけにもいかないだろ」

ソファから体を起こしたアシルはテレビのリモコンをとってスイッチをいれる。

朝からくだらない番組が流れている。

窓の外は晴天だ。

ワシントンの眺望が広がっていた。

「おまえを放っておくほうがよっぽど怖いだろ」

目の前にいるのは黒髪の殺人鬼。

「なによ、あんただって殺し屋じゃない。似たようなもんでしょ」
確かに、殺し屋も殺人鬼も同様に人殺しをするが、とりあえず殺人鬼などと一緒にされた日には良い迷惑というものだ。

キャシーの言葉は一見、つじつまがあっているようにも聞こえるが、単純に彼女の言葉はご都合主義なだけである。

「……あのな」

キャシーの指摘にアシルは首をすくめる。

どこをどうすれば、傭兵と殺人鬼が一緒になるのか、キャシーの頭の中を割って見てみたい気もするが、とりあえず自分の身は誰だっ
ってかわいい。

キャシー相手に余分なことは言わないほうが良いに決まっている。
「なんなのよ」

含みを持たせるアシルに、キャシーは薄い胸を反らせて睨み付けた。
「なんでもない」

「それにしても、時間が動くって、いったいどういう意味なのかしらね」

キャシーは話題を変えた。

「さてな。マジックボムがなりを潜めてから二年間、死んでるのか生きてるのかすら謎。おまえはアメリカが嫌いとかアフリカに逃亡」
時を動かす使者とはいったい何者なのか。

「キャシーはどう思う？」

アシルの言葉に、キャシーがふてくされた。
わたしに聞かないでよ。

彼女は苛立つように言い放つと浴室へ向かった。

「……で、おまえの言う、仕事、とやらはくるところか？」

「そろそろくるんじゃない？ アメリカに戻って一週間くらいたつし」

そんな、とりとめもない話をしながらホテルを出た二人は、さっ

そく男の声に絡まれて不愉快そうに眉を上げた。

制服を見るとコロンビア特別区首都警察のようだ。

「おい、その二人！」

大きな声で呼ばれて、アシルとキャシー以外の一般人も警官を振り返る。

アシルは煙草に火をつけながら顔を上げる。

カチリと硬質な音をたててジッポーをしめたアシルは紫煙を吐き出しながら、日傘を広げようとしていた少女を見下ろす。

「……あ？」

アシル・ブラスのそんな間の抜けた声に、日傘を開こうとしていたキャシーも視線を頭上に放り上げる。

黒い髪の少女と、白人の大男。

確かに、カップルとしては若干いかがわしいものを感じるかもしれない。

「少女売春か？ 今、ホテルから出てきただろう！」

そんな八つ当たりをされても、彼らの住まいはフロリダだ。

フロリダ在住の彼らが、ワシントンD・C.のホテルから出てきたところでおかしくもなんともない。

少なくとも理論的には。

暗にペド野郎、と言われたような気がしたアシルだったが、先に反応したのはキャシーのほうだった。

開きかけた日傘が閉じられる。

カチという音が不穏に感じた。

閉じられた日傘がDCPDの警官の股間に直撃する。

これは痛い、と思ったがアシルは口にはしない。

「今、なんて言ったの？」

低く怒気のこもった彼女の声色。

二年間、行動を共にしていたが、どうもアシルにはキャシーの怒りを感じるポイントがわかりづらい。

「……少女売春か、と」

警官のほうも同じ気持ちだったのだろう。

言葉を繰り返す。

彼にはなにが彼女の怒りに触れたのかが理解できない。

アシルですら理解できないのだから当たり前だ。

そもそも、少女売春と言われたからには、悪いのは男のほうで、買われた少女への非難はそれほど大きいものではない。

一般的に考えれば、少女が怒り出す必要があるわけがないのだ。痛みをこらえながら言った男の首筋に、キャシーの傘の切っ先が当てられた。

「くだらないこと言ってるよと殺すわよ」

白昼堂々と、殺す発言もないだろうに、とアシルが煙草をくわえたまま黙って見ていれば、少女は続けてこう言った。

「誰が幼児よ！」

男の横っ面に傘をたたきつけた彼女に、警官はもんどりうってアスファルトにキスをする羽目になった。

アシルは思わず額を押さえた。

深々とため息をつく。

「……やっぱりそれか」

おまえ、カルシウムが足りないんじゃないのか？

やれやれとキャシーをたしなめる。

確かに十代初めの少女が日傘をたたきつけた程度では、成人男性を吹き飛ばすことなどできないだろうが、おそらく、とアシルは思う。

おそらく、日傘にはキャシーの念動力が乗っていたのだ。

「おっさん、女は怒らせないほうが身のためだ」

アスファルトにめり込んで警官は痙攣している。

一応、殺さない程度には手加減していたらしい。もっとも、それをはたして良識と言えるのかははなはだ怪しい。

「ふん……」

日傘は無残にも途中で曲がっている。

少女は鼻から息を抜くと、そうして歩きだした。

D C P D ごときでは、目の前にいる少女が「殺人鬼カーリー」であることなど知るよしもない。

そんなことは公にしてはならない。

キャシーやマジックボムの正体が知られば、街はパニックになる。

二人は、異なった意味でリスクが非情に高い。

マジックボムはその存在故にアメリカ当局と司法取引を行った。

しかし、キャシーは違う。

「大丈夫か？ あれ」

歩きだしたキャシーに追いついたアシル・ブラスが顎をしゃくれば、少女はきつい眼差しで彼を睨み付けた。

日傘を放り出して吐き捨てる。

「殺してはないわ」

忌々しげに。

「確かに死んじやいないが……」

それが彼女の本音だろう。

白昼のワシントン D・C でなければ、おそらく、なんの躊躇もなく、問答無用で殺していただろう。

凶暴な女。

「……あいつが悪いのよ」

キャシーはそう告げると、さっさと路地を曲がった。

通行人のざわめきが遠くなっていく。

目の錯覚かと思った彼は立ち止まる。

白い肌の、水色の瞳の黄金の巻き毛の娘。

ミニスカートに白いブラウスを着た若い娘はアイスクリームをなめながら歩いている。

小学校で別れて以来、消息の知れなかった彼女。

覚えているのは気の強い瞳と、生意気な口調。

記憶の中の少女と、目の前の若い娘とがぴたりと合致した。

同じ小学校に通っていた同級生たちは、幼い頃に数年だけ一緒だった子供のことなど覚えてはいなかった。

誰もが「そんな人いた？」という反応を見せ、彼は彼女の行き先を突き止めることもないまま、少年から大人になった。

「……キャシー」

呆然とつぶやく。

そう。

彼の中の思いでのままの彼女。

小学生の同級生だったはずの金髪の巻き毛の女は、平均よりも幼く見たが、彼は彼女が童顔なだけなのだろうとひとりで勝手に納得した。

「キャサリン・キーン！」

叫ぶように名前を呼ぶ。

日差しの高い往来で名前を呼ばれて、キャサリンは顔を上げる。

水色の瞳がきらきらと瞬いた。

「キャサリン・キーンだろ？ 君」

確か。

ひどく曖昧な彼の言葉に、彼女は記憶の本棚をぐるりと見渡す。
アリッサ・ノースウッド。

オリジナルの記憶を探る彼女は彼に対する情報にたどりついてか

ら、にっこりと完全無欠の笑顔を浮かべた。

「久しぶり、ボブ」

ベースボールが大好きで、将来を嘱望されていたが、所詮、小学生レベルの話で、それ以上のことは彼について「アリッサ」は知らない。

「名前覚えていてくれたんだ」

言いながらはにかんだように笑った彼に、キャサリンは落ちてきた金色の巻き毛を指先でかきあげるようにして、耳にかけた。

「ファミリィネームまでは思い出せないわ」

苦笑したキャサリンに、ボブという名前の青年は彼女同様に「それもそうだね」と言いながら笑う。

「ボブ・マッケンシーだ」

そう名乗った彼に、キャサリンはようやく彼のフルネームを思い出した。

ボブ・アルバート・マッケンシー。

名前からもわかりやすいが、いわゆるアイルランド系移民の子孫に当たる。

苦笑しながらボブは彼女に片手を差し出した。

握手を交わす。

「小学生の時にちょっとしか一緒じゃなかったから仕方がないね」

言いながら照れたように青年は頭をかいた。

好青年と言ってもいいだろう。

「キャシーはワシントンで仕事を？」

キャサリンの歩調に合わせてながら歩くボブに、彼女は特別な好意を抱くこともない。

これがオリジナルのアリッサ・ノースウッドであれば「面倒だ」とでも思ったのかもしれないが、彼女のクローン体であるキャサリンには圧倒的に経験が不足している。

「今はFBIで仕事をしているの」

彼女の物言いはひどく穏やかだ。

「大学卒業してすぐに？ やっぱり君はすごいな」

感心したような彼のせりふに、キャサリンはボブをみやってから長いまつげを揺らす。

「女だてらにFBIか。ああいうところは男性社会だって聞くけど、いじめられたりとかはしていない？」

矢継ぎ早に問いかける彼にキャサリンは微笑する。

「そうね、男性職員ばかりだけど、みんなアメリカのために働いている人たちよ」

よく知らないけど。

キャサリンは口には出さずにそう付け足した。

実際、FBI捜査官たちは、軍人出身の者もいれば、警察出身者も多い。

犯罪捜査部のジョージ・リートは軍人出身であり、ブレット・オルコットは警察出身だ。

軍隊を経験している、ジョージ・リートの物腰が柔らかいのは彼の奇特徴の一つに入る。

そういえば、とキャサリンはふと思いだした。ブレット・オルコットの執拗さにオリジナルの小さなアリッサは頭を痛めていたものだ。

要するに、FBIの捜査官たちには、ある意味でまともな人間などいないと言っても過言ではないだろう。

キャサリン・キーンはそんなFBIに「備品として配備された」のである。

特別強行突入班。

レッドドラゴンという名前を冠する悪魔の申し子。

「そうそう、いつだったかな、二年くらい前に、君とよく似た女の子に会ったんだ、まだ小学生の子だったけど」

ニコニコと笑いながら一方的に話す彼に、キャサリンは適当な相づちを打った。

「昔の君に、すごく似ていたからびっくりしたよ」

当たり前だ。

彼がまだ幼かった頃に出会ったキャサリン・キーンと、二年半前に出会ったアリッサ・ノースウッドは同一人物だ。

似ていて当然である。

人は成長するもの、という固定観念が、二人を同一人物とは感じさせていないだけである。

思い出の中のキャサリン・キーンには、時間という補正がかけて
れている。

たったそれだけのこと。

もつとも、それは「今の」キャサリンが口にしてはならないことだ。

知らなくていいこと。

キャサリンは思う。

「普通の人間」はそうして与えられた平穏の中に暮らしているのだということすら知らない。

そうして日々を過ごす。

ありふれているはずの現実には権力者たちの機嫌ひとつで吹き飛ばすというのに、人々はそれすらも考えようとはしない。

キャサリンはそれを愚かなことだと思う。

彼女は、かつてのオリジナルのように不安定な個体ではないため、調整されたごく平凡な思考が反社会的な思想や行動につながるというのではないものの、それでもキャサリンはアリッサを知る。

「ところで、ボブは今は何をしているの？」

彼女は彼を見上げながら問いかけた。

「俺は今、志願して陸軍にいるんだ」

「大変ね」

彼の言葉に、キャサリンは目を丸くした。

今のところ、ボブ・マッケンシーには目の前にいるキャサリンが、彼の知るキャサリン・キーンとは異なることを知られていない。

しかし、と彼女は思う。

ボブの知るキャサリンが、小さなアリッサだと知ったときに、彼はなにを思うのだろうか、と。

「上官のしごきは大変だけど、死ぬわけじゃないからな。キャシーの方が大変なんじゃないか？」

確かに、今は戦時下ではない。

戦時下ではないから、志願兵とはいえ軍隊にすることが直接生死に関わるわけではない。

しかし、危険な地帯に赴くことも多いのが軍隊だ。

「わたしは……」

言いかけて彼女は唇に指先をあてた。

生み出されてから一年と少し。

彼女は備品であった。

仕事はFBIの特別強行突入班とは言え、実際に危険な毎日にも晒されてきたわけではない。

だから、彼女は口ごもる。

「危険なこともあるけど、別に毎日ってわけでもないから」

無難に言葉を返した彼女は首を傾げた。

どこの国でも同じだろう。

警察関係者は秘密の遵守が存在する。

口にしてはならない事柄も存在している。軽々しく口にすれば、世間の混乱をも招くことだった。

「……軍隊だって同じでしょう？」

「そりゃそうだけどさ」

軍隊も警察も同じだ。

しかし、軍隊はまさに男の世界。

「男なら誰だって女性には安全なところにいてもらいたいって思うんじゃないかな？」

曖昧に言葉をぼかす彼は核心には触れない。

「アメリカでそんなことを言うなんておかしいわ」

キャサリンは瞳を柔らかくした。

男女同権の世界。

それがアメリカだ。

「それもそうだな……」

彼の言葉を、しかしキャサリンは察しない。

わかっていて、彼女は追求しない。

そんなことは意味がないことだ。

そうして、他愛のない「再会」があった。

少なくともキャサリンにとってはその程度のものでしかない。

そんな彼らを、注意深く見つめる人間たちがいた。

フロリダからワシントンを訪れていた、キャシーとアシル・ブラ
スだ。

「……なーに？ あれ」

黒髪のキャシーはぼそりとつぶやいた。

「なにつて？」

アシルが彼女に問い返す。

「あれよ、あれ。あの金髪の女！」

キャシーは苦々しい表情を隠そうともしないままで顎をしゃくる。

そんな彼女の表情は滅多に見られるものではない。

そして彼女がそんな表情を見せる原因をアシル・ブラスは知って
いた。

「……金髪の女の子だな」

「あんた、真面目に言ってるの？」

つつけんどんな彼女の言葉に、アシルは肩をすくめる。

「俺になにを期待しているんだ」

少なくとも、アシルはキャシーやコンゴの占い師のような超人的
な能力を持っているわけではない。

ごく平凡な戦争屋だ。

もっとも「普通な」という言葉が適切ではないことをアシル・ブ
ラスは理解していたが、少なくともキャシーに比べればいくらかま
ともであるはずだった。

「なによ、それ。なんかわたしが普通じゃないみたいじゃないよ」
自分がソシオパスであることを理解している上に、念動力者であることをわかつている人間のどこが普通なのかとも思うが、とりあえず、嫌悪感が率直に殺人衝動につながる相手に対して余分なことを言うべきではないということはアシルにもわかりきったことだった。

「……」

沈黙をもって返事としたアシルをにらみつけたキャシーはむつつりと頬を膨らませる。

そうしながらもキャシーは青年と金髪的女を見つめていた。
なにか思うところがあるのだろう。

そんなことを、隣に立つアシル・ブラスは思った。

彼女の考えていることなどわかるわけもない。

「ああいう男が好きだったのか？」

「はあ？ 馬っ鹿じゃないの？」

心底あきれた様子でキャシーは背の高い白人男を見上げる。

これで念動力でも飛んできたら大変なことにはなるが、とりあえず、アシルのこの程度の軽口で殺人行為を犯す彼女ではないということを知っている。

どこまでも凶暴で、どこまでも冷徹な彼女。

「あっちの女のほうよ」

苦々しい彼女の言葉に、アシルは金髪的女に視線を向ける。

白い肌を持つ若い女だ。

遠目では瞳の色まではわからないが、輝くような黄金の巻き毛が印象的な娘。

「あの女がどうかしたのか？」

典型的な白人だが。

キャシーが不機嫌な理由がわからない。

「あれ、人間じゃないわよ」

無然とした表情のまま少女がつぶやく。

人間の形をしたモノ。

キャシーはソシオパスであるが故に、人間とそうではない異質なものを鋭くかき分ける。

「かわいい女の子にしか見えんが？」

質問の形で問い返したアシルに、キャシーはふんと鼻を鳴らしてから肩をすくめた。

「あんたの目は節穴なんじゃないでしょうね」

彼女は言い捨てた。

「危険な相手なのか？」

「……危険な相手かどうかはともかく、妙な奴なのは確かみたいだわね」

アレハニンゲンジャナイ。

キャシーは考える。

肌を感じるのは「異様な」感覚。

自分は怪物。

そして、目の前にいる人間も怪物。

キャシーの視線の先にいる金色の長い巻き毛の女。年の頃は十代後半か二十代前半だろうか。

白い肌の印象的な、白人女性だ。

ややしてから、キャシーは興味なさげな瞳を彼女から背けて額にかかる黒髪をかきあげた。

夏の日差しが降り注ぐ午後。

小麦色に日焼けした少女は、そうして歩きだした。

深い陰の中へと裏社会でもトップクラスの殺し屋は消えていく。

時間は着実に、意志を持つかのように動き出していることを、誰もが感じていただろう。

屈強な青年と、小柄な東洋人の少女といった一見すればおかしい組み合わせ。しかし、主導権を握るのは少女だ。

まるで糸をたぐりよせるように。

ソシオパスの少女はビル群に切り取られた青い空を見上げてから

吐息をついた。

「世界が動き出すのよ」

アマの言葉を思い出した。

自分という人間のちっぽけさを感じて、彼女は片目をすがめた。
時代という潮流に押し流されていく。

自分の無力さを実感した。

どうすることもできない。

自分にも、アマにも。

そしてアシル・ブラスをも。

時代の傍観者でしかないのだ。

「わたしは、どうすればいいの……？」

教えてよ。

誰か、教えてよ……。

キャシーはぽつりとつぶやいた。

流されることなどまっぴらだと思う。

だというのに、それが思うままにならずに、その事態に彼女は苛
立った。

「わたしは……」

望んだものは指の間からこぼれていく。

キャシーの望んだものはなにもかも手に入らない。

手に入らないなら、壊してしまえばいい。

彼女はそんなことを思った。

「わたしは、格下なのよ。なにも手に入らないの」

アシル・ブラスを仰いだキャシーは自重するように微笑した。

2 (後書き)

感想や評価などいただければ嬉しいです。
(* ・ ω ・) *
― ―)
(

路地を歩くキャシーの後ろ姿。
不意に彼女の肩に腕が伸びた。
ごく自然な所作で、少女は振り返ることもせず、体を横にずらした。

腕が掴む形のままで空を切る。

前のめりになったのは東洋風の男だ。

少女の後ろを歩いていたアシル・ブラスは無言のまま足を出す。

白人男の足につまずいた形になった男は、そのままバランスを崩してアスファルトに突っ込んだ。

見事な連係プレイと言えたかも知れない。

無様な悲鳴に振り返ったキャシーは肩にかかる長い黒髪を払いのけてから首をかしげた。

統計的に、異人種間での性的犯罪はあまり発生しないとされる。

「キャシーの知り合いか？」

「こんな不つ細工なのが、どうしてわたしの知り合いなわけ？」

地べたに這いつくばった男を見下ろしたキャシーは片足を持ち上げた。

思い切り男の頭にその足を振り下ろす。

少女の体重とは言えど思い切り足蹴にされれば、顔はアスファルトに突っ込む形になり、それなりに痛いらしい。

カエルがつぶれたような悲鳴をあげて、東洋系の男は彼女の足を振り払おうとする。

しかし、その手を今度はアシルが問答無用で押さえつけた。

腕をねじり上げる。

「……なんか用か？」

「くそっ！」

アシルの問いかけに男は舌打ちする。

「くそじゃないわよ」

間髪を入れずに冷ややかな少女の声が降り注いだ。

「わたしに何の用？」

背中に目などついていなくとも、彼女は激戦をくぐり抜けてきた戦争屋だ。

荒くれた気配など容易に読み取ることができる。

「ぱっと見、戦争屋に用があるようには見えないけど？」

そもそも、キャシーを雇えるほど金回りが良さそうには見えない。キャシーは冷静に状況を判断する。

外見が可憐な少女であるために幾度となくチンピラに絡まれてきたのだ。自分の身を守るべき手段は知っている。

そもそも、彼女の場合、過剰防衛になることも多々あるのだが。

「キャシー」

アシルが彼女を呼んだ。

「なに？」

東洋系の男の頭を足蹴にしたままでキャシーは応じる。

「……キャシー」

はーっとアシルは大きなため息をついた。

「なによ！」

言いながら顔を上げたキャシーに、青年は人差し指で地面に顔を押しつけられたままの中年男を指し示した。

「そのままでなんか話せて言うのは酷じゃないか？」

確かに下手にしゃべれば唇がアスファルトにこすれて皮がむけるだろう。

「……ああ、そんなこと」

少女は肩をすくめた。

「別にわたしの知ったことじゃないわ」

だって、わたしの顔じゃないもの。

冷たく言い放つ彼女の横顔に容赦の文字はない。

「こいつが絡んできたのが悪いのよ」

自業自得だ、と彼女は告げる。

その言葉はまるで魔女が発したもののようだ。

圧倒的な存在感と、凄絶な彼女の言葉に這いつくばる男は不意に戦慄した。

自分がいったいどんな人間に手を出してしまったのかを、本能から悟ってしまったのだ。

外見がかわいらしいから、などという理由で手を出してはならない相手がいるのだということを。

もっとも一般的な人間たちはそんな人種がいることを知るわけもない。

本来、一世代に一人いるかないかといった存在である。

キャシーのような犯罪者はごくまれだ。

犯罪史上に名を残すような犯罪者など多くいても困るのだが、どうしたわけか、キャシーの世代にはまるで、なにかの存在に呼応するように彼らは生まれ落ち、そうして引かれ合う。

アシルはそんなキャシーの様子を見つめたままですっと片目をすがめて煙草に火をつけた。

「……わたしを、誰だか知らずに手を出す方が悪いのよ」

驚くほど冷ややかに彼女が告げる。

ヒィとかすれた悲鳴を上げた男がおそるおそる目だけを上げる。

少女はニツコリと笑いかけると足をどかした。

なにか、不穏な気配を察してがたがたと震えだした男のうずくまったままの姿を見下ろした彼女はまぶたをおろすと、感情の感じられない瞳をじっとおろしてから、まっすぐにその踵を男の頭に振り下ろした。

グシャといやな音をたてて、男の頭がつぶれた。

悲鳴すら上げる間もなかった。

まるで熟れた桃の果実を踏みつぶすように。

キャシーは男の頭を踏みつぶしたのだ。

広がる血の海を一瞥して、彼女は歩きだした。

「容赦ねーなー……」

あきれたようなアシルの声に、少女は無言のまま歩き去る。薄暗がりの中に倒れた男の死体。

無残に頭をつぶされた死体は、どんな力が込められればそんな状態になるのか。想像もつかないような惨状だ。

警官はたたきのめし、気絶させるだけですませた。

その鬱憤がたまっているのだろう。

それを何となく理解したアシル・ブラスは、余計なことを言って彼女を刺激することはしない。

そんなことをすれば、自分がとぼちりを食らうことは明らかだったからだ。

それを彼は理解しているから、無残な亡骸を横目にしただけで歩きます。

誰だって、そうだ。

自分の命は惜しい。

彼女の犯行を見た者は、わざわざ密告までして彼女を警察に突き出そうという勇氣など持てるわけがない。

そんなことをして、次に彼女に狙われるのは自分になるかもしれない。身も知らぬ他人のために危険を犯すのは馬鹿らしいだろう。

「あんな小汚いオヤジに同情でもしてるって言うの？」

感情を感じさせない彼女の声に、男は肩をすくめた。

少女姿の彼女がなにを思っているのか。

それを男には理解できない。

彼女は計算で動いているわけではない。恐らく、八割方は感情で動いている。

それだけは理解できるが、その感情の行き着く先が、アシル・ブラスを含めた「まともな人間」にはとうてい理解不能なのだ。

少なくとも、とアシルは思う。

彼は確かにキャシーと同じく、傭兵であり戦争屋であるが、彼女と比較すれば自分などどれほど正常なのかわかるうというものだ。

「……同情なんかしてないけどな」

そんなことをしたとして、次に殺されるのは自分になるだろう。

「あっそ、だったらいいじゃない」

彼女は振り返ることもせずに言葉を続けた。

「前科増やしてどうすんだ……」

あきれたようなアシルの言葉に、キャシーは足を止めて振り返った。

「……別に、あんたに関係ないんだからいいじゃない」

前科を増やしたところで、警察から追われるのは自分だ。

アシル・プラスではない。

彼女はそう言いたいのだろう。

まっすぐに、黒い瞳が彼を見つめている。

恐れを知らない瞳。

その瞳が本当に、殺人鬼のものであるのかと思わせるほど、彼女は純粹だ。

二年もの間、共に活動してきたアシルは彼女の異常性を理解しているが、初対面の人間はほぼ確実に騙されるだろうことは容易に想像がついた。

わかつている。

彼女は異常だ。

至極冷静な、正常でありながら正常ではない異常者。

彼らには、ごく普通の判断能力が備わっている。

異常でありながら異常ではない。正常でありながら正常ではない。

その境界線にいる人間。

それがソシオパス。

「怖い？」

問いかける彼女はそっと笑った。

「まさか」

アシルはそうしてから、死体を振り返ってから彼女の肩を抱き寄せた。

どちらにしたところで、事が大きくなる前に退散したい、というのが彼の本音だった。

「なによ、なれなれしいわね」

眉をつり上げた彼女に、男は無言のまま足早に歩いた。

「ともかく行くぞ、余分な人間に見られて巻き込まれたらたまつたもんじゃない」

そもそも、今の状況で疑われるのは自分だ。

小柄なキャシーがやったと思うか、それとも、大柄なアシルがやったかと思うか。

平凡な思考能力を持つ人間の考えることなど一目瞭然すぎた。

アシルはやれやれとため息をついた。

「……あんた、結構小心者なのね」

あきれたような彼女の言葉に、青年は思わずキャシーを見下ろす。

「あんな、街中で生きた人間の頭を潰すのが普通なのか？」

「普通、ねえ……」

首を小さく傾げながら彼女は視線を頭上に上げる。

「わたし、普通ってなんのことかよくわかんないのよ」

普通と言うことが彼女にはわからない。

スラム街で育ったキャシー。

その心は、ごく当たり前の人との接触を知らない。

細い足で彼女は男の頭部を踏みつぶした。それは彼女が思うままに念動力を操れるからなのだろう。

わかつているが、それでも、アシル・ブラスはそんな彼女に恐怖を感じる。

自分という存在を軽々と超えていく少女姿の殺人鬼。

その強さこそが彼女のアイデンティティである。

キャシーと名乗る少女よりも格上の人間はそうそういるものではない。彼が知る限り、数人しかいないだろう。

「わたし、本当は、……死天使を守りたいのよ」

死天使を守るほど強くなりたいと思う。

キャシーの願いはそれだけだ。

しかし、死天使は明らかにキャシーなどよりも強い上の、格上だ。
「自分より強い相手を守るのか？」

「あのね」

それだけ言っで、キャシーは肩を抱く男の手を外しにかかる。

「死天使はね、確かにわたしよりもずっと強いし、ずっときれいで、誰よりも愛される権利があるわ。でもね、あの人は優しすぎるの。だから、誰かが守ってあげないと、あの人は悲しさに支配されて壊れてしまうのわ」

自分のような、いかれた人間ではない。

少なくともキャシーはそれを知っていた。

誰かに説明などされなくても、キャシーは自ら理解している。

「……優しくて、きれいで、強くて悲しい」

キャシーの意味深長な言葉に、アシルは無言のまま視線をおろした。

目の前にいる黒髪の少女は時折、ひどく深みのある発言をする。

その言葉の真意は理解できないが、少なくとも彼女はなにかを感じているのだろう。

だからこそ、彼女は現実を見つめるのだ。

誰よりも真摯に。

「とりあえず、暑いから離してくれない？」

ぞんざいに男の手を振り払ったキャシーに、アシルは「はいはい」と言いながら両手を挙げた。

降参ポーズの男を睨み付けてから彼女は、軽く手を振った。

指の先。

アスファルトのしかれた道路で小石が舞った。

かつんと、神経質な音が鳴る。

「大丈夫よ、あんたのことを殺したりはしないわ」

少なくとも、今は。

彼女はそう言った。

「物騒なことを言うな」

二人の関係で、常に主導権を握るのは彼女だ。

年齢や性別、外見などでは推し量ることができないもの。

それが二人の間には、絶対的な差異として横たわっている。

ため息をついた彼に、少女姿のキャシーは口元だけで笑った。

「人間なんて利己的なものなのよ」

自分も、他人も。

同じくして利己的なもの。

キャシーはそう思う。

そうして血まみれの二人は路地の奥へと消えていく。

吹き抜けた風に血の臭いが乗った。

血にぬれた世界を歩く。

彼も、彼女も。

そして、彼らを取り巻く人間たちも。

平凡な人生を選べたはずの者たちすら、彼らはその道を進んだ。

人を傷つけ、人の命を奪う道。

「けれど、許されるはずがないんだ……」

現代社会において、犯罪行為と呼ばれる。

彼らはそれを知っている。

ブレットは煙草を灰皿に押しつけてもみ消した。

電話が鳴った。

受話器を取ると、静かな女の声が響いた。

「こんにちは、FBIの捜査官さん」

穏やかな女の声。

丁寧な英国英語。

「……誰だ？」

裏社会にいる女はそれほど多くない。

ブレット・オルコットが追っている人間たちがたまたま女ばかりということもあるが、彼女らは希な存在である。

「電話番号あつてるかと思つて電話しただけ」

受話器の向こうで、声の主はクスリと笑う。

なにが言いたいのか、ブレットにはわからない。

相手の意図を察しかねて、彼が電話口で沈黙していると、電話の向こうの女は別の人間と話しているようだった。

「あつていたわよ」

「だから、間違つてゐるわけないでしょ！」

「ごめんなさい」

声が聞こえる。

「……いたずら電話か？」

ブレットが無然として問いかければ、電話の向こうの女は「ごめんなさい」と言つて苦笑した。

「いたずらのつもりはなかったの。ただ、お知らせしたいときに電話番号がわからないと困ると思つてかけてみただけなの」

なぜだか遠回しな言葉に、ブレットは首を傾げる。

どちらにしたところで、彼が追いかける裏社会の犯罪者たちはかなり奇抜な世界であることは間違いない。

千里眼とも思える情報網には舌を巻く。

「裏社会、か？」

単刀直入な彼の言葉に、女はなぜか慌てたようだった。

「あ、ごめんなさい。もう切らないと……。国際電話は怒られてしまうから」

いやに庶民的な発言を残して、電話は一方的に切れた。

どうやら本当に電話番号が通じるか確認したかっただけらしい。

ブレットは勝手に切れた電話に、やれやれ、とつぶやいてから受話器を置いた。

ケース・レッドドラゴンから二年。

確かに、今、時代は動き出そうとしているのかもしれない。

「しかし、気にかかるのは暁の夜明けの騎士団だな」

彼らは地下に潜つて以来、噂の一つすら聞かないのだ。

それが逆に気味が悪い。

過激なキリスト教原理主義団体。

いわゆる新興宗教だ。

彼らが狙っているのは、国家転覆か。

それともアメリカ合衆国の滅亡か。

厳しい眼差しのまま、そんなことを考えたブレットは背筋に走った悪寒にぶるりと身震いをした。

首筋に手のひらで撫でた彼は、目を伏せた。

思い出すのは、彼が追いかけて続けた少女の殺人鬼だ。

天真爛漫かと思えば、どこまでも横暴で凶悪な犯罪者。

その存在は、世間一般で言う犯罪者たちとは一線を画していた。

犯罪者でありながら、アメリカ政府が信頼する一級の傭兵。火の

鳥と呼ばれた危険人物は、しかし、もういない。

追いかけて続けた犯罪者がいないという、どこか空虚な脱力感に彼は息をつく。

自分の手で逮捕したのとは違う。

まさに、言葉通り、ある日突然消えてしまったのだ。

そのことが彼を後悔させる。

「……俺も随分と毒されてるな」

ブレットは苦笑うとデスクに放り出された報告書に視線を戻した。

なにはともあれ仕事はたまっているのだ。

これは夢だと彼は思った。

赤い炎が轟々と音をたてて燃えている。

それはかつて彼が対面した事件の記憶だ。

ケース・アングリーボマーと呼ばれた事件はすでに近くはないが遠くもない、そんな過去にある事件。

数多くの犠牲者を出したのは当局の判断ミスであったのか。

それは今では誰もわからない。

しかし、そうでもしなければ事件の核心に触れることはおろか、事件の真相すらも闇の彼方だっただろう。

数多くの犠牲の上に積み上げられた真実である。

何が正しく、何が間違っていたのか。

それは誰一人知らない。

その真実を知り得るのは、後世になって客観的に事実を見ることが出来る者だけだろう、とブレット・オルコットは思う。

少なくとも、彼自身はそんな客観的な視点を持ち得なかったし、当時、その事件に関わっていた多くの捜査官たちも同じ気持ちだろう。

誰もが必死の思いで事件を追っていた。

そのために殉職した人間のどれほど多いことか。

彼が死なないでいられたのはただの偶然にすぎないのだ。その事実を知るために、彼は今の自分の状況を夢だと思う。

かつて、ケース・アングリーボマーはすでに解決した事件でなかった。

燃え盛る炎は、彼女の象徴だ。

白い肌の、水色の瞳の、高潔な殺人者。

通り名を、マジックボム。

ボマーと呼ばれず、まさに「爆弾」そのものと呼ばれる少女姿

の殺人鬼。

いつか彼女はアメリカ当局と司法取引を行い、その犯行を不問とされた。

もちろん、第一線でマジックボムを追いかけていた彼女にとって納得のいく結末ではなかったがそれを政府が選択したのであれば一介の公務員である彼にはどうすることもできなかった。

彼女は誰よりも強いアメリカ政府の手駒。

ブレットはマジックボムの弱さなど知らない。

彼の中の彼女は常に誰よりも強く、誰よりも高潔で、誰よりも誇り高い存在だった。

だというのに。

炎の中にいる小さな少女は不安げな眼差しを辺りにさまよわせながらまつげを伏せる。

今、彼の目の前にいる人間は誰なのだろうかとも思う。

黄金の巻き毛を揺らして、彼女は心細げにそこにいる。

「君は、何者なんだ……？」

問いかける彼の声に少女は顔を上げた。

真紅の光の中に、金色の巻き毛は炎の光を跳ね返して赤く輝く。唇が告げる。

無音の世界に音は届かない。

「わたし、は……」

わたしはここにいるの。

決して響くことのない音のない世界で少女が訴える。

「ここは、暗いの……。ここからは光が見えないのよ」

じわりと浮かんだ涙が大きな粒になる。

目の縁にたまった涙がこぼれる。

「マジックボム……」

ブレットは彼女の涙など見たことなどない。

なぜならば、彼女はいつも不遜に笑っていたからだ。だから彼は彼女の弱さなど知らなかった。

不安定な精神を誰がどうやって支えていたのか。

不安定な少女の心を誰が包み込んでいたのか。

愛情を求めながら、それを知らずに育った彼女を。

誰が愛していたのか。

そんなことを思っ、ブレットは目を伏せた。

今の状況が夢であるというのなら、ここはどこなのだろうか。

あたりを見渡しても、そこにあるのは紅蓮の闇ばかり。

ただゆらゆらと、炎が揺れる。

「ここは、どこなんだ……？」

目の前にいる少女に向かって問いかけると、彼女はゆるゆると首を横に振った。

知らない、と言うことなのだろうか。

もしくは、「答えない」とでも言いたいのだろうか。

そんなことを思う。

金色の長い巻き毛の少女が、突然さつと青ざめた。

音をたてて炎と同時に空気が巻き上がる。

顔を腕でかばったブレットが視界を取り戻したとき、目の前の少

女は美しい金色の長い髪は丸刈りにされて白皙の肌は血の気を失っている。

胸と腹から血を流して、白いスリッパは赤黒い染みで汚れていた。

棒のような足でただ立ち尽くしている。

紫色の唇がようやく動いたようだった。

それは、ブレット・オルコットが知ることのない彼女の姿だ。

「……ここは、何だ？」

ブレットは口元を押さえたままで、青ざめた。

今、目の前にあるものはなんだろうか。

棒のような手足の少女は、立ち尽くしてうつむいている。

かつて、出会った彼女の容姿ではない。

やつれて頬のこけた彼女の体が不安定にゆらりと力なく揺れた。

ここは何だろう。

なぜ、今、この姿の彼女がそこにいるのか。

それがわからない。

ブレットの記憶によれば、彼女のその姿はジョージ・リートが見た、最後の彼女の姿だ。マジックボムと呼ばれる少女の最後の姿を、ブレットは知らない。

彼が知るのは腰まである長いブロンドの巻き毛の、こまっしゃくれた瞳の彼女だ。

今、目の前にいる彼女は、ジョージ・リートから伝え聞いたままのもので、そしてその当時の彼女をブレットが知るはずがない。

だと言うのに、そのままの姿の彼女が夢の中の彼の目の前にいる。それを妄想だと片付けるのは簡単だったのかもしれない。

しかし、妄想などではないと、ブレットはなぜだか確信した。

目の前にいるのは、本当の彼女だ。

それを本能で感じ取る。

「……アリッサ」

彼女の名前を呼んだ。

アリッサ・ノースウッド。

彼が、彼女と最後に出会った時に名乗っていた名前だ。

色を失った彼女の体。

白い手足が枯れ木のようだ。

夢の中のそんな彼女に一抹の不安を感じずにはいられない。

なにかが起ころのではないかと思えてならない。

夢の中で、驚くほど冷静に考えながら、そうして気がついた時、

ブレットの足元の床が抜けた。

驚いて、ベッドから体を起こした彼は額に浮かんだ汗を手の甲で拭う。

冷たい汗が浮かんでいた。

なにかが始まるうとしている。

それを感じた。

なにもわからない。
なにも理解できない。

ただ、警察程度には理解できないなにかが動き出している。
そんな予感。

「……俺は」

大きな手で口を覆った彼は重いため息をついた。

「俺はどうしたらいいんだ？」

彼女が悪であるとか、善であるとか。そんなことには興味がなかった。彼女は善でも悪でもない。

ただ、彼女を中心にして世界が動き出しているというのは恐らく真実で、彼が感じていたものは間違いではない。

刑事の勘。

そんな胡散臭いものをあてにしたりはしないが。

夢の中の彼女の声が消えない。

「……ここは、暗いのよ」

彼女はそう言った。

自分の意識がどこにいたのかと、そんなことを考えた。

まだ朝も早い時刻だ。

彼は携帯電話をとった。

先日の国際電話の女といい奇妙な事が続いている。

オカルトなことだとは思わない。ただ、人為的で奇妙なことばかりが起こっているような気がする。

そんなことを思いながらブレットはよく知った男に電話をかけた。
通話ボタンを押す。

「ジョージか」

ため息をついて前髪をかきあげた。

「こんな時間にすまん」

ため息を繰り返す。

おそらく、ジョージ・リートもブレット・オルコットと同じようになにかを感じ取っているはずだ。

それがわかる。

「白いスリッパドレスを着て、頭は丸刈りだった」

煙草を揺らしながら告げたブレットに、ジョージの声が動揺したようにも聞こえた。

「見たんだろう？」

彼女の様子を、最後に見たのは彼のはずだ。

「夢で、アリッサに会った」

今のブレットはあえてアリッサを愛称で呼ばない。

今は目の前にいない彼女。

誰からも愛されたわけではないが、その純粋な彼女を誰もが引き寄せられた。

「……アリッサは、本当にもういないのか？」

彼女の存在とはなんだったのだろうか。

自分のことを備品だと告げたキャサリン・キーン。

彼女が備品ならば、そのオリジナルであるアリッサはなんだったのだろう。

アリッサ・ノースウッドとキャサリン・キーンは同じなのか、それとも違うものなのか。彼にはわからない。

彼には理解できない。

どうして、彼女は彼らの目の前から消えたのだろうか。

どうして連れ去られなければならなかったのだろうか。

深い怨恨を感じる。

マジックボムはどれほど世界を恨み続けていたのだろうか……。

彼はひとり考えに沈んだ。

昔、ケース・アングリーボマーを捜査していた頃は、彼女の存在意義など考えたこともなかった。ただ、彼女のことを社会の秩序を乱すものだと思っていた。

それだけだったというのに。

今は異なる。

彼女の思いの行く先を。

なにを求めて、なにを望んでいたのか。

しばらくジョージ・リートと話してから、彼は電話を切った。

「こうなる運命だったのか……？」

独白した彼は強く目を閉じる。

自分がこうなったのは運命だったのだろうか。

かつて、彼女を追いかけはじめた頃に決まっていたことなのか。

非科学的なことを考えながら、ブレットは眉を寄せた。

「馬っ鹿じゃないの？」

不意に声が響いた。

響いたような気がした。

それは彼がよく知る少女のものだ。

どうして彼女の声が聞こえたのか。

「運命なんて、わたしは信じないのよ。あんただってそうでしょ？」

彼女ならばそう言っただろう。

マジックボムはひどく現実的な思考回路の持ち主だ。

たとえその存在が常識的な範囲から逸脱していたとしても、である。

「あんたとわたしは同類。でも、絶対にわたしはあんたを好きになんてならないし、あんただってわたしのことは容認しない」

言わば火と油のような存在だ。

彼らは決して相容れてはならない。

そうして二人はするように定められた。

そのように取り決められた。

「……俺は、なにを信じたらいいいんだ」

なにを信じればいいのか。

なにが正しいのか。

「どうすればいいんだ……」

頭を抱えた。

「俺は真実が知りたいだけだ」

系猿の人間の一人として、真実を知りたい。

時に、真実を知ることとは、残酷なことだ。

突然電話が鳴った。思いに沈んでいた彼は驚いて携帯電話を取り落としかけるが、とっさにそれを握り直した。

なんだ、こんな朝っぱらから、とも思うが、彼もジョージ・リートに電話をかけた身だ。人のことなど言えたものではない。

「なんだ」

短く電話口に問いかけた彼は上着を手にとると、車の鍵を手にして歩きだした。手早く自宅の扉に鍵をかけて、車庫に向かう。

どちらにしろ、今の彼の目の前にあるのは現実で、目の前にいない少女のことなどにかかずらってはいられない。

常に事件は彼の目の前に転がってくるのだ。

FBIの捜査官として、ブレットもジョージも、それらに対処していかなければならないのだ。

目の前にある現実を。

ブレットは肩のホルスターにさした銃を確認した。

彼がこれから向かうのは戦場だ。

社会の中に潜む暗闇と彼らは戦っている。

深い闇を彼らは見据える。

そのようにあらなければならない。

だからこそ彼は前を見つめるのだ。真実がどれほど過酷なものであっても、彼らは戦う。自ら信じるもののために。

つまらない事件の連続。

つまらない理由での犯罪。

他人を恨むとか、妬むとか、そんな気持ちで犯罪行為に走る人間に対して、ジョージもブレットもそれを愚かだと思う。

自分を不幸にしてまで、他人を不幸に陥れることに対してはたして価値があるのだろうか。

そんなことを感じる。

かつて、アリッサ・ノースウッドと呼ばれる少女が、大事件を起

こしたのは、自分が不幸になるという概念が全くなかったからである。

だからこそ、彼女は自分を振り返ることもしないまま凶悪な手段をふるった。

彼女には捨てるものなどなにもなかったからだ。

未来への希望も、幸福であるという感情すら、彼女は知らなかった。

だから、他人を恨んだり、妬んだりするといった感情以前に犯罪を引き起こした。

それに対して、彼らは特別な思いを抱かない。

ただ、思うのは、そんな彼女を生み出した政府、もしくは研究機関の責任とはなんなのだろうか、と。

彼女自身が巨悪であることについては、疑うべくもないのだが、それでは、そんな彼女を「兵器」として作りだし、あまつさえ「人間の命」をおもちゃにした人間に対して責任の所在ひとつ問われないうのはおかしいのではないか。

権力者というものは勝手なもので、自分たちに被害が及びそうになると、自らが持つ権力を振りかざして被害から逃れようとする。

そういった人間が多すぎる。

報告書の山にうんざりとしながら、ブレットはボールペンを目の前で振り回しながらため息をついた。

「コーヒーでも」

ジョージの声に、ブレットは顔を上げる。

コーヒーの紙コップを受け取った彼のデスクから、報告書の残りを半分取り上げたジョージ・リートはペンを手にしたままで自分のデスクに戻っていく。

彼として報告書が少ないわけではないのだが、狙撃手としてあちこちの現場を走り回っている彼の報告書の数は、ブレットのそれよりも少なかった。

「すまん」

「いや」

短く応じた彼は、そうして書類に視線を走らせる。

こんなとき、やはり頼りになるのはベテランの捜査官だ。

いつまでたっても終わらないブレットの書類の数はさすがに同情されたのかもしれない。

「どうせ暇な独り身だ」

ジョージの自嘲するような言葉に、ブレットは苦笑いを浮かべた。ジョージだけではない。

ブレット・オルコットもまた、マジックボムに関わり続けて結婚を逃した口だ。

もっとも、それを恥じてはいないし、世紀の犯罪者を追いかけ続けられたことを、捜査官のひとりとして誇りに感じた。

人間など価値観は様々なのだ。

家庭に生き甲斐を感じる人間もいれば、仕事にのめりこむブレットのような人間もいる。

そういうことだ。

自分は仕事で命を削っているのかもしれない、とそんなことを思うこともままある。

人の生き方は、多様性に飛んでいて、もしくはマジックボムと呼ばれたアリッサ・ノースウッドのように、自分自身を捜し続ける人間もいるのだということ。

しかし、地球上にいる人間のどれだけが、自分という人間のありかたなどに疑問を持つだろうか。

自分とはなんなのか。

自分とはどうして生まれたのか。

どうして、自分はそこにいるのか。

そんな問いかけは、ひどく抽象的だ。

自分という人間に疑いを持つ者など、そう数はいないだろう。

その夜、遅くまでFBIの本部のオフィスに残って報告書をまとめていた二人のベテラン捜査官は互いになにかをくちにするわけで

もなく、黙々と仕事をこなしていった。

彼らの心の透き間を埋める存在は未だに不在で、そうして時は流れていく。

「あの人たちは、犯罪者にしか興味ないからな」

それは誰が言っていた言葉だったろう。

犯罪者にしか興味が無い、という言葉は若干語弊があるように思われたが、二人の捜査官たちはそれを否定しない。

否定も、肯定もしない。

犯罪者に興味があるわけではない。

ただ、たまたま、彼らが若い頃、同様にマジックボムに関わってしまったただけだった。

ジョージ・リートは私人として。

ブレット・オルコットは公人として。

自分が何者かも知らない、世界でもたぐいまれな凶悪な犯罪者、マジックボム。

魔法の爆弾と恐れられた彼女は小さな愛らしい少女だった。

「……愛しているのか？」

ブレットは、以前ジョージに問いかけた。

ジョージは彼のその言葉に返事をしなかった。

無言の反応に、ブレットは真実を察した。

ジョージにとって、アリッサは大切なのだ。何者にも代え難い小さな少女。

彼女に関わったために、結果的に二人は婚期を逃すことになったのだが、それについて、二人は特別にはなにも感じていなかった。

互いに、仕事に打ち込めていいじゃないか、という程度の認識である。

ちなみに、ブレットに至っては「老後に少々寂しいだけ」という程度の認識しかしていない。彼は、天性の捜査官である。

それが自分の天職だと思っている。

ブレット・オルコットはそういう人間だ。

世界が動き出す。

その齒車の軋む音を聞いている者はいろのか、いないのか。かつての事件から二年半の時間が過ぎた。

しかし、安易に時間だけ流れていたわけではない。自称はゆつくりと動き続け、そうして歪みを生み出していく。

その流れは誰にも止められはしない。

誰も止めることはできない。

瞳をあげた女はひどく小柄で、あどけない。

赤毛のひどく印象的な女は手首を翻して、窓を開いた。

窓の外に広がるのはのどかなイギリスの田舎町だ。

緩やかな丘陵地帯。畑が広がっている。

古い建物は一九〇〇年代半ば頃そのままだった。

青い空に、緑の丘。

まるで絵画のような、風景にあどけない顔立ちの女は首をかしげる。

「どうしたの？」

尋ねられて、窓の外を眺めた女は困ったように笑う。

「ううん、なんでもない」

肩に置かれた手に触れて、赤毛の小柄な女は睫毛を伏せた。

考え込む。

自分の童顔が嫌いだった。

「ヤア……」

背後の金髪の女を呼んだ。

ヤアと呼ばれた女は、振り返って首を傾けた。

「二年間待った。でも、事態は好転しなかったわ」

静かな赤毛の女の言葉に、ヤアは片目をすがめた。

「パンドラの箱はどこにあるのかしら」

赤毛の女はそうして続ける。

「ヤアにはパンドラの箱が見える？」

パンドラの箱を、彼女らは探している。

「彼女」が消えたあの日から、彼らは「パンドラの箱」を探していた。

エルピスを探して。

箱の中に残された、エルピスを彼女らは探している。

「世界を動かす人間は、定められているのよ」
決められている。

世界を動かすという運命に定められて生まれてきた者は、その定めから逃れることはできない。

誰ひとり。

「わたしたちは、その運命の監視者」

金髪の女、ヤアがつぶやいた。彼女の言葉に赤毛の女が顔を上げる。

「怖い……？ アファ」

言われて、アファと呼ばれた赤毛の女は穏やかに頭を左右に振った。

「怖くないわ」

ヤアとアファ。

どちらもアフリカ系の名前である。

しかし、彼女らはどこからどう見ても白人で、その名前と外見に違和感が生じる。

アファを抱きしめたヤアは口元に優しい微笑を浮かべた。

「わたしたちは、エルピスを探し、そしてエルピスの導き手を監視するのが務め」

「うん……」

淀んだ世界を彼女らは見つめている。

「大丈夫よ、心配いらない」

赤毛の女は、ヤアに抱きしめられたままそうして頷いた。

第三章 オーエン一家 1

かつてザイルの魔女と呼ばれた女がいた。

現在、コンゴのブカブに住むアマは、その「ザイルの魔女」から教えを受けた。

後にも、先にも、アフリカ大陸を影から支配し、アフリカ大陸とイスラム諸国のみならず、世界中を恐怖のどん底に陥れたのは一世紀近くも前のことだ。

当時、まだ現在ほど科学の発達もしていなかったため、よりいっそうザイルの魔女は恐れられた。

彼女がザイルの魔女であれば、現在のアマはさしずめコンゴの魔女だろう。

しかし、アマは決してそのようには名乗らなかった。その思惑をアマは決して誰にも語ることはなかったため、彼女がなにを感じていたのかはたぶん謎であった。

そのアマの兄弟弟子とも呼べる呪術士たち。

イギリス在住の白人の兄妹だ。

もっとも、当時すでに呪術士として、師匠のもとを離れていたアマは、白人の呪術士たちとはほとんど接触がない。

アマですら、名前しか知らない。

そして、その名前というのも彼らのファミリーネームしか知らないのだ。

世界に冠たる呪術士。

アマを含めた、「ザイルの魔女」の弟子たちはそのように呼ばれている。

＊

穴という穴から出血していた。

苦しんで死んだのだろうか。

ベッドの上で、男が死んでいる。

異様な死骸に、警察官たちはたじろいだ。

それは明らかに異常だった。

後ずさった男たちはあわてふためいて上司に連絡をとる。

たかが病死、などと言うには、それは異常すぎて彼らは青くなつた。

当然だ。

情報化社会と言われる現代にあつて、報道によって多くの致死率の高い疾病が世間一般に認知されている。

ごく最近も、そんな疾病のひとつが映画の題材としてとりあげられたばかりである。

そんな記憶にも新しい、未知の病原菌に対しての恐怖。

フランス、パリの一角でそんな奇妙な変死体が発見されたのは、六月の末である。

そんな変死体の発見されたアパートメントから、徒歩で三十分ほど離れた石畳の歩道を華奢な女が歩いていった。

ゆつくりと華奢な女が歩く。

赤い髪に緑の瞳の、その白人の女はフレアースカートが印象的なワンピースをたなびかせた。

クラクシヨンが鳴らされて、顔を上げる。

控えめな彼女の瞳に、車を運転していた男は開いた窓から顔を覗かせると腕を伸ばした。

彼女の頬に触れる。

兄妹の三人のなかで、一番控えめで、甘えん坊な末の妹。

「アフア……」

金色の髪に琥珀の瞳の兄は黙ったまま頷くと軽く頭をなでた。

「乗れ」

「うん……」

車に乗り込んだアフアは、車内に金色の髪のないことに気

がついた。

「ヤアは？」

「あいつは俺たちより忙しいからな。家で仕事している」

青年の言葉に曖昧な相づちを打った赤毛の女は、長く息を吐き出しながら助手席の窓にもたれて窓の外を見つめた。

思案に暮れる彼女の様子に金髪の男は苦笑した。

「けど、アフアに一番苦労させているな」

彼の言葉に、彼女は目線だけをあげた。

「おばあさまの、体質を継げるのはわたしだけだったのだから、わたしはそれを損したとは思ってなんていないわ」

直接的ではないが、彼女の言葉に青年は目元をやわらげた。

「そうか、それならいいんだ」

彼女が悲しんでいるのではないかとすら思うことがある。

気遣う兄に、アフアはまつげを伏せた。

「わたしは大丈夫」

疲労感をたたえた彼女の横顔に、兄のヤウはフロントガラスの向こう側に視線を戻した。

いくら血のつながった家族であつても彼には妹たちの考えていることは理解できない。

それは、性別の違いもあつたのかもしれない。

「それでも俺は、おまえたちの能力の間にいる。だから。おまえたちの苦労はそれなりにわかっているつもりだ」

「……うん、わかってる」

ありがとう、と小さな声でつぶやいてアフアはそうして目を閉じた。

ヤウ、ヤア、アフア。

それらの名前は彼女らが深くアフリカ大陸と関わりがある証拠だった。

もちろん、彼女らには白人としての。

イギリス人としての名前があり、そして戸籍がある。

しかし、彼らは遺伝子上の両親の顔など覚えていない。

その名前も、自分たちの戸籍も。なにもかもが、彼らは成長してから育ての親に教えられたものだった。

なぜ、自分たちの容姿が、親たちとは異なるのかとか、そういったことは考えたことなどなかった。なぜならば、その容姿のために差別されたことも区別されたこともなかったからだ。

ごく当たり前のように、彼らは「育ての親」と「自分たち」の容姿の違いを受け入れていたからだ。

もつとも、彼らが幼少の頃に、彼らを差別しなかった人間たちにはまた別の思いもあったのだろうが、当時、子供であった彼らには知る由もない。

大人の事情など、子供には知るわけもないのだから。

「俺が、おまえたちを守る……」

だから心配などしなくていい、と彼は告げる。

「うん」

兄の言葉にアフアは応じて頷いた。

誰も彼らの生い立ちを理解することなどできないのだ。

そんな生き方を彼ら、オーエン兄弟はしてきた。

イギリスで生まれ、コンゴで育ち、そうしてイギリスに戻った。

子供にとって、あまりにも激動の生き方は、平凡に恵まれた先進諸国に生まれ育った人間からは理解などできない。

「わたし、コンゴに帰りたい」

アフアにとって、コンゴは大事な国だ。

たとえ、肌の色も、目の色も、すべてなにもかもが黒人とは違って、アフアの魂にはアフリカ大陸に帰属している。

「お友達もたくさんいたのに……」

つぶやく彼女自身もわかっている。

自分は、「ザイルの魔女」の弟子。

そして「ザイルの魔女」の後継者。

だからこそ、彼女はザイル、現在のコンゴにいてはいけない。

かつて中央アフリカにあって、誰よりも強くブードゥーの呪術士として君臨した女が、どんな組織にも囚われないでいられたのは彼女の精神が強靱だったからである。

そんな強さを持つていないアフアは、魔女の後継者であるが、魔女自身が死んだ今、コンゴにいるべきではない。

彼女を欲する者は多いからこそ。

コンゴにいてはならないのだ。

ぼんやりとつぶやくアフアに、ヤウは右手を伸ばした。

くしゃりと彼女の頭をかき回す。

今の彼らにとって、コンゴを思い起こさせるものは互いの存在と、互いの名前しかない。

育ての親である、魔女が呼んだ名前。

「あたしには、ヨーロッパの名前は呼びにくくて仕方がないからね」
そう言つて魔女は闊達に笑っていた。

世界の中央に君臨した魔女は、子供たちをそれでも愛していたから。

「ブードゥーの呪術士だからって人の心がないわけじゃない。おかしな連中がいるのはどんな宗教だって同じ。だから、自分がどこにいるのか。どこに立っているのか。それに対して常に注意を払って、見極めていかなければ、呪術士は身の破滅を呼び込むことになる」
子供にそんなことを言い聞かせた魔女は、そうしてずっと目を細めた。

自分のいる場所を知らなければならない。

やろうと思えば、国家の転覆をも可能だっただろう魔女。

魔女の力はそうして確実に、次の世代へと受け継がれた。

一世紀近く、中央アフリカに君臨した魔女。

名前をアジヨラ。

彼女の力を受け継ぐ子供たち。

彼らはそうして確かに、魔女の力をつないでいくのだ。

「恐れられたって構うもんか。あたしの道はあたしが選ぶのさ。誰

にも邪魔はさせないし、そのために必要とあればくれてやるだけのことさ」

血の洗礼を。

かつての老婆は、とても年齢を感じさせない力強さをもってとうとうと歌うように言った。

そんな年老いた魔女を、オーエン兄弟は恐ろしいとは思わなかった。

魔女と恐れられた老婆はそれでも、幼い子供たちを愛していたのだ。

国籍も人種も異なり、血もつながっていない子供。

それでも、老婆は彼らを大事に育んだ。

しかし、それは彼らに呪術士としての才能があったからではない。そんなことは、アジヨラにとってはどうでもよいことだったのだ。

「約束をしたからね」

パイプを吹かしながら、彼女は笑っていた。

「立派に育ててやると、おまえさんたちの両親とさ」

ただそれだけのことだと。

彼女は言った。

アフアもヤウもそんな老婆を思いだした。

暖かく、そしてその能力故に他者から畏怖されていた。そんな特異な養母。

ホテルの部屋についたヤウは、アフアを部屋まで送り届けると自分も部屋に戻った。

さすがに血がつながった兄妹とは言え、さすがに同じ部屋に寝泊まりするわけにはいかない。

「……ヤウ」

踵を返したヤウを、アフアが呼んだ。

心細そうな妹の眼差しに苦笑する。

「心配するな」

「……うん」

オーエン一家。

そう呼ばれる呪術士たちの素顔。
それを誰も知らない。

陰惨な世界の、薄闇の中に彼らはいる。

決して、表だった明るみの下には姿を現さない一級の腕を持つ魔術師たち。

彼らを知る者はごくわずかで、その噂は人から人へ。

かくも静かに、そうしてまことしやかに。

伝えられていく。

「知っています」

室内に、女の声が響いた。

その声は、高くも低くもない。

誰の耳にも心地よく響くその声の持ち主。

長いまつげをそっと上げた綾瀬臣は 生真面目な黒い瞳をまたたかせた。

いずれ、綾瀬家の全財産を受け継ぐ女のもとに集められる情報を、彼女は正確に把握している。

そんな彼女が「魔術師」と呼ばれる人間たちを知らないわけがなかった。

胡散臭いと、一笑に付す。

そんな存在ではない。

「世界に冠たる魔術師」

そう呼ばれる理由。

理由がなければ、そのように呼ばれる言われもない。

裏を返せば、その理由が胡散臭げであろうとなかろうと、根拠と理由があるからこそ、そこに結論と結果が存在するのだ。

だから、綾瀬臣はその確かな名前を轟かせる人間の存在を笑った
りすることはない。

裏社会に名前を轟かせるということはそういうことだ。

根拠のないオカルティックな、不確かな存在ではなく。

「……かの魔女の一派は、確かに世界を左右します」

世間一般的には魔女と呼ばれているが、実際のところ、そんな前時代的なものではない。

儀式という形を取らなければ誰も納得しないが故に、彼らは形式に則っただけだ。

たったそれだけのこと。

臣は年若いながら「ザイールの魔女」と面識があった。

「わたしは、あの方を知っていますが、あの人はオカルトみたいな非科学的なことは信じていない人だったわ」

「ザイールの魔女」は、確かな根拠のある事象しか信じなかった。「非科学的、ですか……」

彼女の言葉に、ボディガードの男が苦笑した。

「確か、あのご婦人はお嬢様にしかお会いになりませんでしたね」高崎が思い出すに、魔女と名乗るアジヨラは気難しい人となりをしていた。

生来気難しいのか、それとも彼女を利用しようとしてきた者の間に晒されてきたためなのか、他者に対して不信感の強い性格をしていたこと。

彼女に接触できた者は、彼女を利用しようとしないう子供たちばかりだ。

アジヨラは人を嫌った。

「アジヨラ様は、人間が嫌いだったわけではありません……」

ニッコリと笑った彼女に、彼はほえんだ。

そう。

本当の意味で人間が嫌いであれば世界の頂点に君臨したりはしない。

人の世界を愛していたからこそ、彼女は一世紀もの間、魔女王としてそこにいたのである。

暗闇に蠢くものがある。

表の反対は裏。

では、裏の反対とはいったいなんなのだろう……？

表の反対が裏であるならば、裏の反対はやはり表なのだろうか。

禅問答のような自問自答。

その自問自答をしているのは、自分自身なのか、もしくは別の誰かなのか。

それはわからない。

細い指の感触を感じて彼は目をあけた。

「千歳か……」

「うなされてました」

短く少女姿の妹が告げた。

膝をそろえて薄物を着ている。

夏用の薄い生地を着物がよく似合っている。

「なにか、不吉な夢でも……？」

静かに問いかける彼女に、兄にあたる男はゆるくかぶりを振った。

「心配はいらない」

「そうですか」

彼は大きな手のひらを開いてじっと見つめた。

手のひらには汗がにじんでいる。

「お食事ができているそうです。よろしければどうぞ」

静かな彼女の声に高崎は頷いた。

高崎家の人間ではあるが、彼も彼女も、すでに成人して久しい。

子供の頃とは異なり、食事を強制されることもない。

二人は綾瀬臣の護衛についている。家を空けることも少なくはなかった。

「千歳……」

「はい？」

呼びかけると、障子を十センチほどあけた千歳は振り返った。市松人形のような姫カットにされている。

腰まで届く長い黒髪が、背中で束ねられてゆるやかに揺れる。レトロな印象の彼女にはよく似合っている。

現代的な美女の綾瀬臣とは異なる魅力があるのかもしれない、とは思うが。

兄である男からしてみれば、妹の千歳に対して女性の魅力を感じることがなかったし、彼の価値観の基準には綾瀬臣があった。

「……いや、なんでもない」

「そうですか」

言葉らしい言葉を交わさずに、妹の千歳は部屋を出ていった。

そういえば、なぜ彼女は兄の部屋にきたのだろうか。

そんなことを高崎は思った。

旧家の子女らしく彼女は異性の部屋などに用件もなく入るようなことなどない。

低い高さの書斎机の上に封筒がおかれていた。

そんな程度の用事ならば、使用人にでも任せればよいのに、と彼は思ったが、その手紙をひっくり返してから、「なるほど」と苦笑した。

封筒に印刷された薄紫の藤の御紋。

綾瀬臣の持ち物であることを示す。

確かに、綾瀬臣からの手紙であれば、千歳が使用人などに持たせるわけもない。

千歳も古風なほうであるが、彼らが護衛する女も古風であることには違いがなかった。

もっとも、彼らの場合、デジタル通信の危険性を知っていたから手紙などという回りくどく、レトロな手段を使ったのかもしれない。綾瀬臣は、最先端の技術など信用していない。

彼女が古風な旧家に育ったからではない。

自分の立場の特殊性を彼女はわかっている。

生まれた時から、綾瀬臣は特別だった。

そのために幾度となく命をねらわれた。そして、彼女は自分自身だけではなく、彼女の周りにいる人間すらも危険に晒した。

その現実を、彼らの主人である綾瀬臣はよく理解していた。誰よりも聡明であるがゆえに、彼女の精神は孤独で悲しい。

彼女の精神は崇高で、誰よりも至高。誰も彼女から目を背けることはできない。

封筒の端にはさみをいれた彼は一枚の便せんに目を通す。

彼女らしいのは、丁寧な墨で記されていることだ。

筆で縦書きにされたきれいな文字。

天は二物を与えず、というが、彼女は二つどころかそれ以上の多くのものを生まれながらに授かった。

たぐいまれな美貌と才能。

彼が護衛する女性はそのような存在だ。

強く、しなやかでそして美しい女性。

誰もが彼女を才媛だと認める。綾瀬臣は誰にも比肩することのない才能と能力と美貌とを誇示してそこにいる。

そんな彼女のそばに、自分が生涯いることができるというのはどれほど誇らしく、どれほど身に余ることだろう。

自分などは凡人だと、そう思うというのに。

彼女の周りの人間たちは彼らを認める。

そもそも、高崎家という家は綾瀬家にとってなんなのだろう。

ただの主人と従者などではない。

今も、そして昔も、綾瀬家を守る者は高崎家の人間のつとめと決まっていた。

そして、綾瀬家の護衛のために、高崎の人間たちは切磋琢磨し自らの護衛のすべを磨き続けた。

誰も、そのことに対して疑問を持たなかった。

疑問など持つわけがなかった。

それが彼らにとっての「普通」だったのだ。

決して触れず、決して汚さず。彼ら高崎一族は綾瀬を守り続ける。
「わたしは、アジヨラ様のお墓参りにいきたいのです」

アジヨラが死んだとき、臣は小さな子供だった。彼女の死に目にも会えず、墓所を参拝したこともなかった臣にとってみれば当然の希望だったのかもしれない。

手紙に書かれた文面に、男は微笑する。

彼女の行動の動機は、彼女以外の人間には知る由もない。

しかし、高崎にとってそんなことは知る必要もないことで、ただ、彼女に尽き従うだけだ。

番人として役目を与えられた妹の千歳とも、彼はまた異なる。

兄と妹では立場が異なる。

自分の身は自分で守る。

ある程度の危険を自分で退けることができれば、自分の身の上を守ることでできはしない。

高崎家の人間が武術の腕を磨くことと、綾瀬家の人間が武術の腕を磨くことは意味が異なる。

前者は守るべきもののために己を磨き、後者は自分を守るために己を磨くのだ。

主人の綾瀬家。

従者の高崎家。

いにしえから定められた。

己を磨き続ける両家の人間は、そうして現代日本においてたぐいまれな関係性を保っていた。

綾瀬家に生まれた以上、平凡な暮らしなど望めないのだ。

それを、彼らは知っていた。

どんなことがあっても、逃れることはできない。

だからこそ、臣はその宿命を受け入れる。

あきらめたからではなく、自分の運命と戦うためだ。

そして世界にあって、誰の思惑でもなく、運命の糸は紡がれ、そ

うしてその先へと向かって歩き出す。

複雑に絡み合った毛糸のようだ。

綾瀬臣も、高崎も、そしてその妹も。

各の思惑はどうあれ、時間は流れていくのだから。

どうすることもできない現実を、人々は静かに受け入れる。

受け入れられずに、混乱する人間たちは、「彼ら」の世界ではごくわずかだ。

下層にあたる人間たちは先の見えない不安感から混乱も見せるだろうが、トップクラスと呼ばれる人間たちは微動だにすることもなく現実を受け入れる。

そうしなければ、世界の秩序は保てないと知っているからだ。

そして、表社会と裏社会の狭間で生きる人間たちもまた同じだ。

クリスティン・マッキランも、そんな狭間の人間の一人だ。

二つ名を、「透視者」。

愛称をミッキー。

アイルランド圏の人間に対する蔑称だが、クリスティンはミッキーと呼ばれることを嫌っていなかった。

「べっつに、どうだっていいわよ。呼ばれ方なんてさ」

どうだっていい、とは投げやりにも聞こえるが彼女は決して投げやりなわけではない。

占い師たちのほとんどは、そうして狭間で生き続ける。

「どうせわたしたちは、まともな生活なんてできないし、わたしたちをまともだなんて思ってる人間が多いとは思ってないわ」

切り捨てるように言った彼女は指先でころろと水晶玉を転がした。

指先で転がせるサイズの、ごく小さな水晶玉だ。

しかし、その透明度は見事なものだ。

世間一般的に言えば、彼女はいわゆる専業主婦だ。

表向きには「警察官の妻」ということになっている。しかし、そ

れは彼女の顔の一面でしかない。

「世界には、詐欺まがいの占い師もたくさんいるけど、その中にはごくまれに本物が混じっているのよ」

そんな本物の占い師たちこそ、オカルト一辺倒ではない。

彼らは、自らに課せられた能力を把握している。

電話の受話器を握る彼女は、窓の外に視線を投げかけてからそつと目を細めた。

なにを考えているのか。

なにを知っているのか、一見しただけでは分かりづらい彼女の表情。

誰も、本当の彼女を知らない。

彼女の夫ですら知らない顔を彼女は持っている。

「ねえ、アマ。あなたはわたしを遠くコンゴから見つけてくれた。

……でもね、わたしも生まれたときにあなたを知っていたのよ」

そう。

クリステインは、生まれ落ちた瞬間に知っていた。

ザイールの魔女のことも、アマのことも。

「わたし、心配なのよ」

ぽつりと彼女はつぶやいた。

「あの子たちは、人に罰をつきつける。それは必要なことで、運命の監視者として生まれて、ザイールの魔女に関わり、そうしてあの子たちは生きていくのよ」

そんな悲しいことってあっていいの？

神の罰を下す彼らは、自ら罰を負うことはないだろう。

しかし、そのために彼らは自分を犠牲にしている。

電話に向かって話すクリステインは、そう言うてからまつげをおろした。

どうして彼らは神の罰則を突きつける者として生まれたのだろう。人間の運命は決まっていらないのだと信じたかった。クリステインの思いだ。

「どうして、わたしたちはなににもできないのかしら」

世界が大きく動き出していることを知りながら、彼女はなににもできないのだと言うことを。

自覚している……。

「わたしたちは、識るだけ。視るだけ。なににもできないのよ」

呪術士たちのほとんどは無力だ。

その、無力な呪術士の中で、使命を与えられて生まれてきた彼女を、彼女は哀れだと思う。

全て、彼らの重荷となるのだから。

彼女はそこまで考えてから目を伏せた。

3

オーエン一家。

彼らの本名は別にある。

チャーリー・フレデリック。

ジュリアナ・ネイオミ。

オフィーリア・ソフィー。

彼らは三つ子で、全員が同じ年齢の兄妹であった。

不妊治療の果てにやっとオーエン夫妻が授かった子供で、夫妻は大変子供たちを愛していたが、旅先に寄ったコンゴで襲撃され、殺害された。

そして、彼らはザイルの魔女に保護されて育てられた。

それゆえに、彼らは愛称としてコンゴの名前を持っている。

ヤウ、ヤア、アフア。

その名前である。

中でも、ザイルの魔女の特異体質を受け継ぐことができる資質をもっていたのが、末の娘だったオフィーリア・ソフィーだった。

彼女の愛称こそアフアだった。

実質的にオーエン一家の実働要員である。

オーエン一家とは名ばかりで、実際のところ、兄妹の三人で構成される呪術集団だが、その本当の姿は表社会からも、そしてまた裏社会からも謎めいたものとして捕らえられていた。

彼らの父母は、ザイルの魔女の知己であったが、特別、世界を動かすような人物でもなく、ごく平凡な人間たちだった。

しかし、彼らはそんな両親のことを知らない。

どれほど治安が悪く、衛生的ではなかったとしても、コンゴは彼らの故郷だった。

幼い頃に育ったコンゴを彼らは愛していた。

目を閉じたアフアはベッドに仰向けに横になったままで腹の上で指を組んだ。

思い起こすのは育ったコンゴの街だ。

青い空と、白い雲。

樹木は広く枝を広げ、深い緑をたたえた葉は天を支配する。
土の色に沈んだ街。

ザイルの魔女の愛し子たち。

そう呼ばれた彼らは決して危害を加えられることはなかった。
肉体的にも、そして精神的にも。

「……帰りたい」

けれど、わかっている。

コンゴに帰っても、アジヨラはいない。

帰りたくても、彼らはコンゴに帰る場所を持たない。

それを、アフアも、そして兄のヤウ、姉のヤアも同様に理解していた。

帰りたくとも、帰れないのだ。

それが悲しくてアフアは閉じた瞼から涙を流した。

嗚咽すらもなく、涙だけが伝っていく。

「お婆様……」

アジヨラを、そんな風に呼べるのは、魔女の愛し子たちだけだった。それ以外の人間が、アジヨラをそのようになれなく呼ぶことなど許されなかった。

彼らを引き取った時点で、アジヨラは高齢だったのだ。

いずれ死ぬことはやむを得ないことだ。

しかし、彼らオーエン兄妹にとってみてれば、アジヨラは唯一の親らしい存在で、かけがえのない人物だった。

悲しまないわけがない。

しかし、悲しんだところで、アジヨラは生き返ったりはしないのだ……。

「アフア」

ノックの音が響いた。

名前を呼ばれて、アフアはベッドから飛び起きる。

「……ヤウ？」

兄の名前を呼んで、彼女はベッドから足をおろした。

「ちょっと待って」

靴をはいて早足で扉に近づいた彼女は、ドアノブに指先で触れようとした瞬間、突然体を硬直させた。

目を見張ったアフアは、驚いたように息を吸い込んでから、あわてたようにドアを開くとそのまま腕を伸ばしてヤウを室内に引っ張り込んだ。

華奢な娘の力とは思えない、強い危機感を持った彼女の力に、ヤウは驚いたように目を見開く。

足をもつれさせて、彼女に引き寄せられた彼は、アフアを抱き込むような体勢のままで、なにか言いかけて唇を開こうとして、そのまま耳をふさいだ。

「……大丈夫？ ヤウ？」

爆発音がひいてから、アフアは大柄な兄に問いかける。もつとも、兄とは言っても生まれた日がわずかに異なるだけの同年齢だ。

「無事だが、今のはなんだ？」

轟音に首を傾げたヤウに、アフアは床に座り込んだまま手をついてから立ち上がる。

ヤウの手を取りながら立ち上がった彼女は、緑の瞳を蛇のように細めると、壁に腕でよりかかる。

「……アフア？」

赤毛に緑の瞳の、オーエン一家の中でも異端な彼女。

彼女は、ザイルの魔女に選ばれた娘だ。

アフアが持っているものは、ヤウにも、ヤアにも持ち得ない。しかし、それを二人は羨んだりはしない。

「イヤになるわ」

穏やかなはずのアファの声が冷たく沈む。

そんな時の彼女を、ヤウはよく知っていた。

「無茶はするな」

「どうせ、誰も理解なんてできないし、理解しようとすら思わないのよ」

彼女はつぶやくと、廊下に首を出した。

アファが苛立っている。それを、ヤウは感じた。

わずかに空気がゆがんだ。

「……わたしは無茶なんてしないから大丈夫」

彼女はそう言って、ヤウを振り返るとほえんだ。

不意に、廊下からうめき声が響いた。

「行きましょ、ヤウ」

そう言うのアファは、部屋にとって返してから自分の荷物をとると廊下にでた。

彼女が通り過ぎた床には武装した男たちが泡を吹いて倒れていた。床でのたうっている。

傍目には外傷らしいものはない。

男の手が、娘の足首をつかんだ。

その手を、彼女は蹴り飛ばした。

「なんだと思う？」

「ただのテロ組織よ、たぶんね」

テロリズム。

その言葉に、ヤウは目を細めた。

「テロ、か……」

オーエン一家は闇の世界に生きる人間たちだ。

しかし、彼らは決してテロリストではない。国家の転覆をねらっているわけでもなければ、罪を犯したいわけでもない。

「みんなそうよ」

吐き捨てる。

「みんな同じよ。お婆様がいなくなつて、みんなわたしたちを危険

人物だと思ってる」

苦々しげな彼女の言葉。

救いになったのは、まだ政府レベルで過剰な反応が起こっていないことだ。

少なくとも、アフアは私利私欲で他者を殺したことなどない。

不安にあおられる人間たちは、迷信を信じる愚か者ばかりだ。

ほとんどの人間たちは、闇の底に生きる監視者の存在を知りはしない。

しかし、それでいいのだ。

世界の監視者の存在など、知らなくていいのだ。

「わたしたちは、暗闇の奥で、闇を監視し、そうして世界のいく末を見定める者」

彼らが生まれたときに与えられた資質はそれだけだ。そして、偶然、アジヨラが三人の資質を見つけただけのことである。

たったそれだけだ。

「アフア、気にするな」

彼の言葉に、アフアは頷いた。

自分には世界を動かすだけの力などないのだと思う。

そうでなければ、「監視者」などであるわけがない。明確な力を持って生まれた人間を監視しなければならぬ必要などないのだから。

何事もなかったようにホテルをチェックアウトした二人はそうして、空港へ向かうタクシーに乗った。

ちなみに、先日ヤウが乗っていたのはレンタカーである。

パリの街並みを見つめるアフアの緑色の瞳に、ヤウは嘆息した。わかつている。

彼女が最も、オーエン兄妹の中で思い罪を背負っている。そのためにザイールの魔女に選ばれたのだ。

世界には、時折、人とは全く違う体質を持つ人間が生まれる。

それは、人の手によって作り出された人間であったり、また、過度のストレスに晒されたために後天的に身につくものであったりする。

どちらにしろ、そんな体質を持って生まれた人間が、世界で同じ時期に何人も現れるということそのものが、異常なことであるとも言える。

中には、自分は特別だと自ら流布する者もいるが、そうではない人間もいる。

現在ですら、異端と迫害を受けることが多いのに、現代以前であれば、その異端な力を隠す者も少なくなかった。

そうしなければ生き残ることが難しかったからである。

特別な力を振りかざすなど、漫画ではあるまいし、そんなことを彼らはひどく嫌った。

まだ、アフリカ大陸にまともな国家が存在していなかった頃に生まれたザイルの魔女ですら「そう」だったのだ。

多くの人間の前で、特別な力を持っていることなど無意味なことだと、彼ら自身が理解していた。

オーエン一家。

そんな名前を持って知られてしまったのは彼らの本意ではない。イギリスの自宅で、カードをめくる金色の髪の女は、わずかに目を細めた。

彼女が、ヤアだ。

ヤウの妹であり、アフアの姉だ。そして、年齢は当然のように彼らと同じ。

「……駄目よ」

つぶやいた。

電話を手にした。

ヤウとアフアに見えないものがヤアには見える。その力をアジヨラから彼女は授かった。

慌てたまま、彼女はダイヤルを回した。

レトロなダイヤル式の電話だ。

「……駄目よ！ コンゴに行っては駄目！」

電話をとった相手に、ヤアは叫ぶように言った。

「どんな事情があるかは知らない。でも今はコンゴに行っては駄目！ そんなこと、お婆様は望んでいないわ」

切迫した彼女の声に、電話の向こうの人間は驚いた様子だった。

一瞬の沈黙の後に、柔らかな女の声が響いた。

聞き取りやすい英国英語。

「アジヨラ様のお弟子様ですわね」

わかりました、と彼女は言う。

「わかりました……」

あなた方が、行っではいけないとおっしゃられるのなら、そんなのでしょう。

彼女の穏やかな声に、ヤアは息を飲んだ。

その声を、彼女は知っていた。

権力の側の人間たちで、電話に出た女性を知らない者はいないだろう。

その声は、世界を揺るがす。

権力の頂点に立つ女だ。

電話番号を持つ人間が誰か、などとヤアは考えていなかった。ただ、彼女はカードが示すままに電話をかけたただけだ。

「……死天使」

声の主は、ヤアはぽりとつぶやいた。

実際、彼女と話すのはこれが初めてだ。しかし、オーエン兄妹のような、監視者がその存在を知らないはずがない。

むしろ、誰よりもよく知っている。

コンゴに行っではいけない、というヤアの言葉に、綾瀬臣は「わかりました」ただけ言った。なぜかと追求することもなく。

彼女は頷いた。

「わかりました」

「……信じるのですか？」

尋ね返せば、死天使と呼ばれた綾瀬臣は相変わらず穏やかな声で電話の向こうから問い返す。

「なぜ、アジヨラ様のお弟子様の言うことを、疑わなければならないのですか？」

優しく、穏やかな彼女の声。

「だって、会ったこともないのに……」

彼女がそのまま信じたことが、ヤアにとっては理解できない。

自分だったら、「駄目だ」と言われてそのまま信じたりはしないだろうという自信があった。

「アジヨラ様のお弟子様なら、知っていらっしゃるはずですわ」

含みを持たせた女の声にそうしてヤアは黙り込んだ。

第四章 スパイダー 1

世界の、裏社会の、トップクラスにあたる者は、通り名を持つ者も少なくはない。

彼もそんなひとりだ。

実質的に、彼はトップクラスではないのだが、それでも一目おかれた存在であることには違いがなかった。

裏社会のトップクラスに当たる犯罪者たちは、誰よりも孤独を抱えている。

その孤独は、誰も知ることができないものだ。

もつとも、そんな裏社会の中でも、綾瀬臣、二つ名を死天使と呼ばれる女は特別な存在だが、「彼」が関わる数人のトップクラスの犯罪者たちもまた、死天使と同じように深い虚ろを抱えている。

その闇は、ひどく深く、そしてそう……。

誰にも理解などできないのである。

誰かが、誰かを理解しようとするなどできはしない。

世界の頂点の、より近い場所で生きている、絶対的な人間の孤独など、凡人には理解できないことなのだ。

「……もうすぐ、三年か」

カフェのカウンターの奥で自分用にインスタントコーヒーなどをいれながら独白した男は、わずかに目を細めた。

彼女と連絡がとれなくなってから、もうすぐ三年近くになることを。

料理を作ることが大嫌いだったアリッサに、よく食事を提供していたものだ。

おいしい、とほめることはほとんどなかったが、味付けが悪いときはぶちぶちと文句を垂れた彼女。

寒い朝にはホットミルクを。

暑い夏の午後には冷たいジュースを。

彼女のために、それだけは最高に美味なものを選んで店に置いていた。

しかし、アリッサがいなくなった今では、それらをおいておく価値すらない。

彼女の反応を見れば、その日の料理の出来がよくわかった。それほど、アリッサの反応はわかりやすかったのだ。

文句を言い募りながらフォークで皿の中をつついていた彼女が印象的だったことを覚えている。

戦場を駆け抜ける彼女は食事ごときで文句を言ったりすることはない。

食べられないことすらあることも考えれば当たり前だ。もっとも、アリッサが料理を作ったところを考えれば、それはそれでぞっとするものを感じるのだが……。

どうせ、と彼は思う。

アリッサの料理の腕は、おそらく最低だ。

子供の身長でしかない彼女は、キッチンには届かない。

そんな無駄な努力をしようとする彼女ではないことを彼は知っていたし、彼女の仕事を考えれば、アリッサが料理など作れないことは大した問題ではない。

彼女のためにと、準備した皿もマグカップも、ガラスの食器類も、いつもセリオの手できれいに磨かれていた。

指紋すらつかないように、ピカピカに磨かれている。

いつか、彼女が帰ってきていつものように、食事の準備を任されても大丈夫なように。

アリッサ・ノースウッドと名乗る少女が、いつか突然、ひょっこりと顔を出すような気がしてならなかったから。

彼女がアリッサ・ノースウッドと名乗るようになったのは、はたしていつからだっただろう。

そんなことを彼は考える。

まるで、走馬燈のようだ。

彼女がいなくなって初めて、彼女の一举一動を思い出すことに、なぜか切なさに近いものを感じた。

今まで多くの裏社会と関わっていながら、彼女のように彼の心に入り込んだ者はそう多くはない。

身勝手で、天真爛漫に笑っていた彼女だからこそ、だったのかもしれないが。

それでも、セリオの心を捕らえた犯罪者など、今までにひとりもいはしないのだ。

そんな相手に、心を傾ければ待っているのは死だけだ。
セリオは思う。

「彼ら」を信用して、痛い目に遭うのは自分だ。
そんなセリオが唯一、心を傾けた犯罪者だと言って良いだろう。
ブルーブラッド。

あるいは、コールドブラッドと呼ばれる彼。
温かな血が通ってはいないのだと、影で揶揄された彼。もつとも
冷徹だと、そしられたことを彼は恥じてもない。

しかし、そんな彼の前に突然現れた裏社会がいた。
少女姿の高飛車な女。

愛らしい外見とは裏腹の凶悪さに目を奪われた。
多くの裏社会を利用しては捨ててきた彼を、誰が最初に「ブルー
ブラッド」などと呼んだのかは知らない。

しかし、今、思い返せば、確かに彼は「ブルーブラッド」と呼ば
れてもやむを得なかったのかもしれない。

そんなことを思う。

「仲介屋ごときが、つけあがるんじゃないわ」
強い眼差しで彼女はそう言った。

仲介屋ごとき、とアリッサは言った。

小さな体で、セリオを見上げた水色の瞳の所有者。

実際のところ、多くの殺人行為や犯罪行為などを行う裏社会たち
のほとんどは、他者とのコミュニケーションを苦手としている場

合が多く、セリオたちのような仲介屋が必要に迫られる場合も多かったが、マジックボム、もしくは火の鳥と呼ばれる少女姿の殺人者は、それすらも圧倒した。

誰よりも強い、という自負の通りに、彼女は強靱だったことを、セリオは覚えていた。

誰よりも強く圧倒的な彼女を誰が連れ去ったのか。

そんなことを考える。

自分にとって彼女は大切な人間の一人だ。

以前のセリオであれば、恋人ですら使い捨ての駒にすぎなかったというのに、なんという変わりようだろう。思い出せば自嘲気味に笑う。

自分自身を浅はかだと思った。

当時、アリッサ・ノースウッドと名乗っていた少女姿の犯罪者の影にちらつく巨大な陰謀に、彼が気がついていなかったわけではない。

なにかがちらちらと姿を見せていることにセリオは気がついていてたが、どうすることもできなかっただけのことだ。

なにかが見えていても、なにもできないもどかしさは表現のしようがない。

「俺には、所詮なにもできない……」

低く笑った男はそうして視線をあげた。

そうしてやってくるのはつまらない日常だ。

今まで、そうしてこれからも、「マジックボム」という殺人鬼に関わった者は、ひっそりと身を沈めて、彼女という存在がいままでなかったかのように暮らしていくのだ。

たったそれだけのこと。

彼女の存在が危険なものであることに代わりはなく、存在すらもデリートする。

まるでハリウッドの映画のように、奪われたからと躍起になって探し回るわけではない。

巨大な暗闇を持つ大国の中枢に深く入り込みたがる酔狂な人間など居はしない。

それこそ、待っているのは身の破滅だけであるから。

それでもセリオは信じているのだ。

もしかしたら、いつか彼女が戻ってくるのではないかと。

純粹無垢な笑顔の影に、どこか皮肉げな色彩の光をひらめかせて笑って、セリオを呼ぶのではないかと……。

国家という巨大な組織に鋭く、彼女は切り込んでいく。

自分自身の存在の全てを賭けて。まるでそうしなければならぬのだとも言いかのように、真剣に。

時代の流れの中で彼女は命の全てを賭けてもがき続ける。

マジックボムと呼ばれる少女は、そうして虐げられ続けても、血を流しながら何度となく立ち上がるのだ。

自ら、茨の道を選ぶ彼女を、どうして止めることなどできようか。純粹で凶暴な魂は、破滅を望んでもいるのだろうか。

キャサリン・キーンの意識は、彼女だけのものではない。四人のクローン体、そしてオリジナルと連結されている。

ひどく不安定なオリジナルの意識が、時に彼女自身を飲み込もうとすらする。

それほどまで、彼らにとってオリジナルは恐怖を感じさせる存在だ。

なにもかもを飲み込もうとする強大な炎。

誰も、そんな彼女を制御することなどできはしない。

彼女を生み出したことが間違いだったのだ。

コントロールすることできない化け物を兵器として扱うことの愚かしさを彼女は知っている。

そして、コントロールすることが不可能であるとわかっていながら、オリジナルを手元に引き戻そうとして、政府は自ら悲劇的な事故を引き起こした。

表向きは、政府は「暁の夜明けの騎士団」によるテロリズムであると発表しているが、そんなことは結果に対する経過でしかない。そもその原因と言え、**「暁の夜明けの騎士団」**につけ込まれるような兵器を作成したこと、それを野放しにしたことによるつけである。

それを、腹黒い国家という組織は全てをテロリストに押しつけた。政府が昔から使うよくある手だ。

国家はその昔から、そうして保身をしてきた。

それと比べれば、マジックボムの存在の仕方はなんと潔いことか。キャサリン・キーンは、マジックボムを全肯定することなどできない。

そうあるべきと、彼女はデザインされたのだから。

彼女と、マジックボムではあり方が正反対だ。

キャサリン・キーンは、オリジナルであるマジックボムを素体にして作成され、性格、能力の全てを政府の都合が良いようにデザインされた。

マジックボムは、その点については無調整なのである。

だからこそ、その能力は恐ろしいほど底なしだ。

二年前の過去、ケース・レッドドラゴンの際の彼女のパイロキネシスはまだ限界ではないだろう。

それが、キャサリン・キーンにはわかる。

なぜかと、問われれば彼女はこう答えるだろう。

「わたしは、マジックボムだからよ……」

キャサリンは、マジックボムを知っている。

その、まっすぐな魂のあり方を。

キャサリンはマジックボムでありながら、マジックボムではない。そしてキャサリンも、マジックボムではない。

遺伝子的には同質でありながら彼女らは全く異なる生き物だ。

「彼女は、兵器なのよ」

最高の兵器として。

最強の兵器として。

彼女は、作られた。

アメリカ合衆国の政府が監視する研究所の奥深くで。

誰にも知られてはならない「魔法の爆弾」だ。

彼女を作り出したのは人間だが、彼女の誕生に手を貸したのは神だ。

はたして神はなにを思って彼女を作り出したのか。

そして、どうして彼女が生み出されたのか。

それをキャサリンも、誰も知らない。

知られなくていいことだと、精神の底に、キャサリン・キーンは刻みつけられた。

まるで、刷り込まれた事実のように。

誰も知覚することはない。

「全てを知ることができるのは、きっと彼女だけなのよ……」
曖昧なつぶやきを残したキャサリンは、そうしてそっと目を伏せた。

「彼女」はまだ目を覚まさない。

まだ時は来ない。

けれど、とキャサリンは思う。

肌がざわざわする。

まるで、素肌の上を滑る冷たい空気のような。

そんなことを彼女は考えた。

「全てを動かし、そうして破壊することができるのは、きっとあの
人だけなのよ」

全てを超越する。

そういう存在だ。

「わたしも、誰も、彼も……」

みんな同じ。

真実など、誰も知りはない。

日差しを見上げて、手をさしのべた彼女は、そうして口元だけで

微笑した。

現実も、真実も。それらは大して重要なことではないのだと、キャサリンにマジックボムの意識が伝えてくれた。そこにある「それこそが存在理由なのだ」。

「自分のことを、人はどれだけ知っているのかしら」
おそらく。

その問いかけに答えられる人間などほとんどいないはずで。そこには人為的な意志を介して生み出された者も、「人間」として生まれてきた者も、大した差異はないのだろう。

「おい」

突然、背後から声をかけられて、キャサリンは振り返った。

金色の長い頭髮が波打った。

「……はい？」

とっさに言葉を返す。

振り返った水色の瞳。

それは、まさか特別強行突入班に配属された人間のものには見えない。

どこかまだあどけなさを残した、彼女の瞳に、ジョージ・リートは黙り込んだ。

「君は、本当にこれでいいのか？」

尋ねられてキャサリンは苦笑する。

「どういう意味ですか？」

彼の言葉を捕らえかねて、彼女が小首を傾げる。

「君は、道具だと、政府につきつけられたんじゃないのか？」

繰り返して彼が問いかければ、彼女はゆるくかぶりを振った。

「わたしは、そんなことを考えるように設計されておりませんから」
姿勢はよく似ていても、キャサリンとアリッサは異なるのだという事実を、彼女は無言で告げた。

それよりも、と、年若い姿の女がつぶやいた。

どこか意味深長な眼差しと声色に、灰色の髪の子は目を細めた。

「それよりも、ジョージ」

彼女はほとんど指先でテーブルの上にリズムを刻む。

それはまるで、彼女の思考のリズムのようだ。

「……もしかしたら、なにかが動き出しているのかもしれない。わたしはなにもできないけれど、わたしが生み出されたと言うことは、なにか、とても不穏なものが」

暗闇の縁でなにかが蠢いている。

彼女はそれをなんとはなしに感じた。

かすかに寄せられた眉間が、なにか不快なものを感じ取っているようで、ジョージは沈黙した。

「君は、アリサとはまるで似ても似つかないが、そんなところだけは似ているな」

独白するようにつぶやいた彼に、娘は目元でほほえむと煙草を取り出した彼にライターを差しだした。

「悪いな」

「いいえ」

彼女は短く応じてふわりと笑う。

まるで花のような笑顔に、ジョージは目を奪われる。

「……わたしは、彼女と同じものであって、同じじゃない。でも、わたしはやっぱり彼女と同じものだからわかるんです」

そう言いながら、彼女は自分の上半身を抱きしめた。

精神の奥底に響く警鐘が聞こえる。

それがわかる。

彼女はそうして黙り込んだままでそっと頭上の青い空を見上げた。

目を覚ました。

彼女はぼんやりと目を開いてから、違和感に気がついた。

生ぬるい感触と、鉄寂びた臭い。

ベッドから飛び起きる。

とっさに枕の下に手をいれて、エリザベス・マレーイはそのままの姿勢で硬直した。

「……っ！」

言葉が出ない。

声が出せない。

これはどういう事態なのかと、彼女は混乱した頭で逡巡する。

目の前に死んでいる男。

自分の足元に投げ捨てられたような形になっている拳銃。

小振りの銃身の短い彼女の愛銃だ。

そのときになってはじめて彼女は自分の両手が血にまみれていることに気がついた。

窓の外の闇はまだ深い。

ホテルの一室だろうか。

エリザベスの部屋ではないことは確かだが、そこがどこなのかいまいち理解できない。

「なんなの……？」

自分はFBIの捜査官だ。

人殺しをすることなどあり得ない。

銃を持っているのは護身用だ。人を殺すためではない。

血の臭いのこびりつく手をシートでぬぐってから、彼女は心臓の位置をおさえたままで立ち上がった。

状況を整理しようとして、頭を冷静にする。

確か、そうだ。

「仕事が終わってから、ヤオと飲んだのよ……」

その後の記憶が欠落している。

目の前で死んでいる男は誰だろう。

エリザベスは首を傾げた。

万が一、今、警察に踏み込まれた場合、殺人容疑がかけられるのはまさに自分だ。

ゆっくりと頭が冷静に戻っていくのを自覚しながら、彼女は男の体をひっくり返した。

銃創は三カ所。

胸は微妙に致命傷を裂けている。男の指は爪が剥がれていた。

膝下にもう一つの銃創。そして、こめかみから血が流れている。

おそらく、致命傷は頭を撃たれたことが直接の原因だろう。

自分の銃を見つめてから、彼女は立ち上がると窓の外を見下ろした。

すでにパトカーが到着しているようだ。

エリザベスは思わず部屋の隅に転がっている自分の荷物を拾い上げると、ピンヒールを突っかけるようにして部屋から飛び出した。

殺した自覚があるわけではない。

しかし、死んだ男の正体を知って、彼女は確信した。

「……はめられたんだわ」

苦々しく彼女はつぶやくと非常階段に向かって一直線に歩いて行く。

ハンカチを手にもいて、部屋に鍵をかけることも忘れない。多少の時間稼ぎにはなるはずだ。

携帯電話を取りだしてから電話をかけようとして、彼女は途中でまだ押した電話番号をかけることもなくカバンの奥に突っ込んだ。

「忌々しい」

そこは三階だ。

逃げだそうと思えばなんとかなる。

屋上は危険だ、と彼女は考えてから耳をすました。

階段を上ってくる気配は感じられない。

きっと、彼らはエリザベスが殺人の嫌疑をかけられて逃げ出さないと根拠もなく信じている。

ピンヒールを手にすると裸足のままでそっと階段をおりていく。

そして、非常口から外をうかがった。

知り合いの捜査官はいない。

一つ呼吸を整えると、エリザベスは、カバンから化粧ポーチを取り出した。乱れた頭髮と化粧を直す。

ピンヒールをはいて背筋を正した彼女は誰もいない空間に向かつてにこりと笑った。

誰も非常口を見ていないことを確認すると彼女は音もなく廊下に出た。

「おい、あんた。今ここは一般人の出入りを禁止している、おとなしく部屋で待機している!」

D C P Dの警官だろうか。

彼女は大柄な黒人警官を睨み付けるとさっとひらめかせるようにF B Iの手帳を見せた。

名前は見えないように、だ。

「そこをどきなさい、わたしはF B Iです! 犯人を追っているの、邪魔したら公務執行妨害でD C P Dでもとつかまえるわよ!」

できるだけ高圧的に聞こえるように彼女は言い放った。

踏み出した美脚に男が目を奪われた瞬間、彼女は歩道へと出た。

そうして、颯爽と走り出す。

それこそ、まるで犯人の心当たりがあって慌てているようにも見える。

大通りに走り出た彼女は通りすがりのタクシーをひろうと素早く乗り込んだ。

制服警官などちよろいものだ、とは思うものの、うまくいったことに彼女は安堵のため息をついた。

「お客さん、どこに?」

「……悪いけど、ちょっとその辺流してくれない？」

言ってから彼女は頭をかき回す。

これからどうしよう、というのが実際のところだった。

あてがあるわけではない。

自分の家にも戻れないだろうし、FBIの本部になどもちろん帰れない。

思い出すのは、死骸となった男の虚ろな瞳だ。

あれは、一緒にバーで飲んでいたヤオではない。

見たこともない顔だった。

そもそも、どうして一介の捜査官でしかない自分が殺人犯として仕立て上げられなければならないのだろうか。

確かに犯罪者たちからは恨みを買っていてもおかしくはないが、それであれば、もっと他の人間をターゲットに選ぶのではないだろうか。

頭を抱えたままですんなことを考える彼女は流れていく街並みを見つめている。

ふと、見覚えのあるカフェを目前に見つけて、エリザベスは声を上げた。

「ちょっと、そこで止めて！」

悲鳴のように声を上げる。

タクシーの運転手はなにか言いたそうにエリザベスを睨み付けるが、彼女はそんなことを意に介さない。

多めの金額を支払って、彼女は店じまいの時間らしい人のいなくなったカフェの扉を押した。

ガラスの扉がチリンとベルの音を鳴らす。

「悪いけど、もう終わりなんだ。明日来てくれないかな？」

ヒスパニックの男が顔を出す。

人当たりの良い、カフェのオーナーだ。

店の客もいなければ、店員もない。

本当に店を閉める時間だったのだろう。

「FBIよ」

「……えーっと？」

差し込まれた手帳をしげしげと眺めたヒスパニックの男は肩を落としてから大きなため息をついた。

つきっぱなしになっていたテレビを消した彼は、エリザベスを手招いた。

店の照明を落として奥の部屋へと進んでいく。

「あんた、あれだろ。指名手配されてるぞ？」

「……やっぱり」

男に告げられた言葉に彼女は苦々しく奥歯をかみしめた。

「やっぱりつつーと、なんか心当たりでも？」

店の奥にあたる狭苦しい部屋は、資材倉庫かなにかなのだろう。棚にはコーヒー豆やらなにやらが積まれている。

「面倒ごととはご免なんだが」

やれやれと息を吐き出す彼をエリザベスは睨み付けてから、勧められた椅子に腰を下ろした。

「わたしだって面倒なことはまっぴらよ」

吐き捨てた彼女に、ヒスパニックの男は煙草に火をつけながら笑った。

「で、あんたの顔見るとどうも人殺しをしたわけじゃなさそうだな」

「顔でわかるの？」

「俺あ、仲介屋だからな」

煙を吐き出しながらつぶやいた彼に、エリザベスは首を傾げる。

「何十人も人殺しを見てきてる」

冷ややかな彼の声に、女は目線をさまよわせた。

「俺らみたいな仲介屋はな、情報をそれなりに握ってないと待ってるのは身の破滅なんだ。だから、あんたのこともそれなりに知ってる」

ブルーブラッドと呼ばれる冷徹な仲介屋。

セリオ。

彼のコネクションは裏社会の奥につながっている。

セリオは、かつてケース・アングリーボマーを引き起こしたマジックボムの古い馴染みの知己の一人である。

情報屋というにはその情報は偏っているが、多くの殺し屋とのコネクションを持っている危険人物のひとりだ。

もっとも、昨今は若干丸くなったというのがもっぱらの噂である。

「殺し屋ってーのは、あんたみたいなのもな目はしてないもんだ」
そう言いながら彼は部屋の隅にあるコーヒーメーカーでコーヒーをいれると白いマグカップを彼女に差し出した。

「逃げてきたんだろ、とりあえずコーヒーでも飲んで落ち着け」

感情を感じさせない声でセリオが告げる。

「わたしをかくまったら、あなたも危ないんじゃないの？」

「俺は、誰もかくまったりはしない。誰でも切り捨てる。それだけだ」

冷ややかに。

どこまでも冷たい。

「けどな、あんたのことは、アリッサが気に入ってたからな。別格だ」

にやりと笑う男に、エリザベスは一瞬毒気を抜かれた。

アリッサ・ノースウッドが気に入っていた。

自分を……？

彼の言葉が理解できない。

「……どういうこと？」

「言葉通りだ」

言いながら、冷蔵庫から切り分けたキッシュを取り出すと電子レンジで温める。

「作りたてじゃなくて悪いが、これくらいしか出せないから、食っておけ」

皿に置かれたキッシュが良い香りをたてている。

フォークと共に目の前におかれたそれに、エリザベスは腹の虫が鳴ったことに気がついて顔を赤らめた。

「これ……？」

「毒は入ってないぞ」

フォークで小さく切ったそれを口に含んだエリザベスはつぶやいた。

「……おいしい」

意外なことに無骨な男が作った割には美味で、茶色の髪を揺らした女は息をついた。

ぼろりと涙がこぼれた。

逃げ出すことに必死で、彼女の張り詰めていた神経がゆるむ。

香りの良いコーヒーとキッシュ。

エリザベスは涙を止めようとして何度も指で拭うがやがて滝のようにあふれた涙に、顔を覆った。

「おい……」

困惑したようなセリオの声が聞こえたがどうすることもできない。嗚咽も、涙も止められない。

男の腕がエリザベスを抱きしめた。

「悔しい……」

殺してないのに。

わたしはなにもやってないのに……っ！

何度も繰り返し彼女に、セリオは女の頭と背中を撫でてやった。

エリザベスが泣き止んだ頃、コーヒーも温め直したキッシュもすっかり冷めてしまっていた。

ぼんやりとマグカップのコーヒーを見つめている彼女は、赤い眼をゆるゆるとあげてからセリオを見た。

「そのキッシュはな、アリッサが好物なんだ。暖め直しなんて出したら、その後一ヶ月くらい文句言われたことがあってな」

アリッサは食事に対して多くは語らない。

しかし、どんなに忙しくても、彼がカフェでキッシュを出すと残

さず食べてから出かけていったことだけを覚えている。

「あの子に、好き嫌いななんてあるのね」

「そりゃ、普通の人間だからな」

「そう……、そうよね……」

アリッサは普通の人間だった。

たとえば、マジックボムと呼ばれ、強大なパイロキネシスを操る異能力者であったとしても。

かわいらしい洋服を着て彼女の前に姿を現した殺人鬼。

ジョージ・リートの思い人が、その殺人鬼であることを、エリザベス・マーレイは知ってしまった。

「あんたたち、警察ってーのは、アリッサが普通の人間だってことを忘れてるんだ」

普通に感情を持ち、普通に誰かと話し、大好物のキッシュの前で笑う。

そんなアリッサをセリオは知っている。

「アリッサはあんたを気に入っていたからな」

「まさか……？ わたしは警察よ？」

「あー、あの子にとって、相手が警官とか、そういうことは割とどうでもいいことだからなあ……」

そう言って苦笑した。

「エリザベス・マーレイって言うんだけどさ、変な女なの！」

アリッサはそう言って笑っていた。

同業者のよしみで彼女の愚痴は多く聞いてきたセリオだ。

明るい笑顔で語るアリッサが、エリザベスを気に入っていることはすぐにわかった。

「アリッサは、嘘はつかない」

絶対に。

「自分と関わった人間が不幸に陥れることも、あの子は知っている。だから、あの子は時折妙なことをすることがある」

なぜか、アリッサは他人を守ろうとすることがあったのだ。

どうでもいい、何でも良いと言いながら、彼女は誰かを守ろうとする。

その矛盾に、彼女自身、気がついていないのかもしれない。

「……わたし、どうすればいいの」

エリザベスがつぶやいた。

かけられているのは殺人容疑。

そして指名手配されている。

自分だけではどうすることもできない。

「自分で考えろ、と言いたところだが、アリッサが後でこのこと知ったら俺が殺されるから、手助けくらいならしてやる」

だから、自分で事件の真相を探り出せ、と彼は告げる。

目の前の男は裏社会だ。

自分の意見をすぐに翻すような小物とはわけが違う。

エリザベスはじつとセリオを見つめてから、ややしてから頷いた。誰かにはめられたのだ。

その真意はどこにあるのだろう。

「柵の後ろにベッドがある。そこで休んでろ」

考え事をしたままうつむいている彼女は気がゆるんだからか、船を漕いでいる。

彼の言葉に応じもしないまま机に突っ伏してしまったエリザベスを、セリオは見下ろすと起こさないように抱き上げるとベッドへと運んでやった。

確かに、セリオを前にして動揺もしない彼女はかなり変わっているのかもしれない。

なんとなく、アリッサ・ノースウッドが彼女を気に入った理由がわかったような気がして苦笑した。

エリザベス・マーレイが目覚めたのは、柵からなにかをおろす音のためだった。

カチャリという音にエリザベスは目を開いた。

そこは、ワシントンD・C.のFBI本部の目と鼻の先にあるカフェだ。

灯台もと暗しとはよく言ったものだ。

「あら、起こしたかしら？」

明るい声が聞こえてきて、エリザベスは目を凝らす。

柵の向こう側に金色の髪の女がいた。

年齢は三十代前半といったところだろうか。

「……えっと」

「わたしはこの店で働いてるの、よろしくね」

エリザベスに出自を特別に聞くこともなく、金髪の白人の女は柵の向こうでにこりと笑った。

オレンジのエプロンが印象的だ。

長い金色の髪を手早くアップにして、彼女は「店にでるからまた後でね」と言いおいて管理室を出ていった。

不思議な雰囲気を持つ女だと、エリザベスと思う。

彼女の捜査官としての嗅覚がなにかをとらえる。

アリッサ・ノースウッドとつながるカフェの店長。

その男が雇う女。

なにやらきな臭いものを感じて、エリザベスは眉をひそめた。ここは、限りなく裏側に近い場所だ。

それを感じた。

「目が覚めたと聞いたから飯もってきたぞ」

「……気を使わないで」

「なに言ってやがる。飯を食わないと力もでないし、いざってとき

に逃げられなくなるぞ」

そもそもFBIの本部からより近いそのカフェは捜査官たちの出入りも少ない。

彼らは、コーヒーを飲みに来ている振りで、実のところカフェの店長のセリオを張り込んでいるのだということを、彼らは知っていた。

そこは、多くの裏社会たちが顔を見せる場所だ。

なにげなく、一介のサラリーマンのような風情で。もしくはブルーカラーの肉体労働者のひとりとして。

一般人に紛れ込む彼らを監視するには最適の場所だ。

なにより、その店の店長自身。そしてそこで働く女性陣たちもまた、警察組織から監視されるような人間たちだ。

性別など関係なく、彼らは裏社会の一端にいる。

「……あんたも、停職中とはいえ捜査官なら自分がどういう立場にいるのかわかってんだろ」

低く彼が告げる。

セリオの言葉にエリザベスは背筋を正した。

自分がどういう立場にいるのか。

一夜あけて、改めて突きつけられた。

「ニュースでやってたぞ」

「まさか」

「名前もでていた」

自分が殺したわけではない。

しかし、現場の状況から疑いをかけられてもおかしくないという

現実には、彼女は逃げ出したのだ。

その事件現場から。

本当は逃げ出してはいけないことなどわかっていた。

普段は、追う側の人間なのだから。

わからないはずがない。

しかし、エリザベスは思った。

なにかが警鐘を鳴らしていた。

今は、逃げなければならぬと、そう思った。理由はわからない。

「……なんでこんなことに」

FBIの同じ犯罪捜査部の人間であれば、彼女が殺人を犯すような人間ではないと知っているはずだ。

「まさか、ヤオが……」

意識が途切れる前に会っていたのは、同じ部署のヤオだ。

なにかの思惑が絡んでいて、その一端をヤオが握っていたのではないか。

そういえば、飲みに行かないかと、ヤオのほうから持ちかけられたのだ。そして、ホテルで死んでいたのはヤオではなかった。

だとすれば、可能性を考えればヤオが手引きをした、ということも考えられる。

そんなことをとりとめもなく考える。

「とりあえず、可能性だけでうだうだ悩むな。あんたを気に入っていたアリッサはそんなことはしなかったぞ」

あろうことか、犯罪者のアリッサ・ノースウッドと比較されたことに、思わずエリザベスは顔を上げた。

「あの人に悩みなんてあるわけじゃない……っ！」

彼女の言葉に、セリオが微笑する。

「そんなことはない。あの子だって感情がある。考えていることが、あんたや俺たちとは全然違うってだけのことだ」

自分たちの想像もできないことを、いつも考えている彼女をセリオは知っている。

「あの子の痛みなんて、俺たちにはわかりはしないんだからな」
誰も理解などできない。

そんな存在であることをセリオは、彼女と出会ってから最初から知っていた。

「わたしはどうすればいいのよ……」

自ら動くこともできない自分にひどく歯がゆいものを感じて、彼

女はうなる。

トーストとカフェオレの乗ったトレイを受け取りながら、彼女はため息を吐き出した。

「飯を食ってから考えろ」

どうすることもできないから、なにもしないわけではない。

どうすることもできないなら、突破口を見つけるだけのことだ。

最悪の状況から、裏社会の人間はひっくり返してきた。そういった才能がなければ生き残ることなどできはしない。

セリオも彼らと同じように裏社会だ。

最悪の事態を想定して、彼らは行く先を見据える。

空腹ではろくな考えが思い浮かばない。

セリオの言葉はもつともだった。

「……そうね」

エリザベスは苦笑した。

腹が減っては戦はできぬ、と言うではないか。

彼女はトーストを手にとると口に運んだ。

カフェだけあって、香りの良いコーヒーがささくれた気持ちが癒されていく。

もつとも、気持ちが癒されたところで問題解決にはなんにもならないのだが。

それでも、今のエリザベスにはそのコーヒーが救いになった。

セリオが言った。

アリッサ・ノースウッドはエリザベスを気に入っていた、と。

「ベス是要領が悪いからなんかに絶対巻き込まれると思うの。そうになったら助けてあげてね」

アリッサがそんなことを言うのは珍しいことだった。

それをセリオは覚えている。

確かに、目の前でパンを食べている女性を見るに、要領がよいとは思えない。

そもそも、要領がよければ殺人事件などに巻き込まれてはいない

だろう。

要領の悪い優等生。

そんなイメージだ。

「あんたは、要領が悪いから助けてやってくれて、アリッサに言われたんだよ」

独白するような彼の言葉に、エリザベスは驚いて目を上げた。

「アリッサの言うとおり、鈍くさそうだもんな」

口の悪いセリオの物言いに、エリザベスは思わず眼差しに剣をたたえた。

「……鈍くさいって」

返す言葉を失って彼女は辟易する。

思うままに行動するアリッサと比べられたら元も子もないようなきもしないでもない。

なにか言い返そうと彼女は口を開いたが、結局なにも思い浮かばなかったらしく、むっつりと黙り込んだ。

「そりゃ、要領が良い方ではないですけど……」

口ごもる。

彼女のそんな様子を見つめていた男はそうして肩をすくめた。

「じゃあ、俺は店にでる。あんまり店に出ていないと疑われるのがオチだからな」

彼の立場はひどく微妙だ。

いつでも疑いをかけられてもおかしくない。

セリオはそれを自覚していた。

エリザベスは管理室に一人取り残されて、コーヒーを口にすると肩から力を抜いた。

考えれば、昨日からたくさんの方があつた。

どうすることもできなくて、逃げ出した。

たまたまセリオのところに駆け込んだのは、彼ならばなにか知っているかもしれないと思ったからだ。

彼は裏社会のトップクラスではないが、それらに限りなく近い場

所にいる。

なによりも、アリッサ・ノースウッドの傍らにあり続けた男だ。過去の捜査に関わって、エリザベスはそれらの情報を把握していた。

セリオは決して言葉にはしませんが、確かに、マジックボムと呼ばれた殺人鬼の信奉者なのだ。

「それにしても……」

暇だ。

女は息を吐く。

仕方なく手元にある小さなブラウン管のテレビをつけるとそこにはニュースが映し出されていた。

見覚えのあるホテルの映像と、殺人事件の報道だ。

容疑者として追われているのは、FBIの女性捜査官である、とそのニュース番組では言っていた。

「つまり、これってわたしのことなのよね」

苦々しくつぶやいた彼女は、小さく舌打ちした。

たったひとりでは太刀打ちできないような、巨大な陰謀に巻き込まれたのではないか、と彼女はそんなことを思う。

それは、エリザベスのただの勘でしかないが、往々にしてそれらが正しくないとも限らない。

「もうやだ……」

いやにもなるというものだ。

濡れ衣を着せられ、無実の罪で追われているのだ。

片手にマグカップを持ったままで頭を抱える。

チャンネルを変えた彼女はそうして手元に放り出されていた雑誌を手を取った。

「本当にどうしよう」

ページをぺらぺらとめくりながら、彼女は雑誌に目を落とす。

自分だけではどうしようもない。

要するに、自分という人間はこれほどまで無力だと言うことなの

だ。

「ハイ」

声が響いた。

幼い子供だ。

幼い、と思ったのは彼女の私見によるだろう。

「あなたは、なに？」

エリザベスが問いかける。

年齢は十代半ばといったところか。

黒髪の、スペイン系の少女だ。華奢な手足と細い腰が印象的だ。ただ、鋭い瞳だけが、ひどく不穏な印象を与えている。

「わたしは裏社会。そんなことわかってるんでしょ？ FBI？」

少女はにやりと笑った。

「裏社会っていてもいろいろあるでしょ……」

エリザベスは眉間をよせて、少女を観察する。

どうして今、目の前にいる少女が裏社会なのだろうか。

「わたしの名前はクルシタ・ゼグラ。ただの娼婦よ」

冷ややかに笑う彼女は、額にかかる黒髪をかきあげた。

十代半ばの少女が「ただの娼婦」だと言い捨てる気迫に、エリザベスは目をまたたいた。

彼女のデータベースに、少女姿の娼婦はいない。

「クルシタ・ゼグラ……？」

「もちろん偽名よ」

喉を鳴らして笑った彼女はショールを肩にまいて首をかしげた。

「じゃ、ちよつと行ってくるわ」

「行くってどこに？」

エリザベスの問いに、クルシタはにやりと笑う。

どこまでも肝の据わった少女だ。

くると背中を向けた彼女はあつという間に管理室の外へと消えていった。

まるで風のようなだと、エリザベスは思った。

ややしてから、セリオが戻ってきた。

「ちよっと、あの子はいったい何なの？」

「何だ、言っただけだったか？」

彼は肩をすくめてからエリザベスを見やった。

「あの子はクルシタ・ゼグラ。娼婦だ」

「あんな小さな子供が、娼婦だなんてありえないわ」

「そうか？ 発展途上国ならあのくらいの娼婦は山ほどいるぞ」

「ここはアメリカよ！」

飄々としているセリオにエリザベスは怒鳴りつける。

裏社会の人間に関わるといつもこれだ。

彼らの勝手な価値観に振り回される。

「俺らには、アメリカだろうとアフリカのどっかの国だろうと関係ないんでね。ビジネスが全てだ。ただ、これだけは言えるが、俺たちはそうそう契約破棄はしない。信用がなにより大事だからな。もしも、信用を捨てて利に走るような奴がいれば、そいつはトップクラスじゃない」

トップクラスの裏社会はそんなことをしない。

彼の言葉に、エリザベスは黙り込んだ。

確かに、アリッサのまっすぐなありかたはその辺の犯罪者のそれではなかったのだから。

「少なくとも、あんたはそれを知っているはずだ」

最前線で、マジックボムというトップクラスの裏社会を追いかけてきたのだ。

それを指摘されて、彼女は沈黙した。

セリオは信用できる男だと、エリザベスはアリッサとの関わりの中で知っていた。

「裏社会を信用するなんて……」

わたしも落ちぶれたもんだわ。

つぶやく彼女に男は明るく笑った。

「信用できるのが裏社会なんだろう」

彼の様子に、エリザベスは鼻から息を抜いた。

クルシタ・ゼグラは颯爽と歩く。

若すぎる裏社会。

一部の娼婦たちもまた、裏社会のひとりとして名前を連ねる。

全ての犯罪者が裏社会ではないように、娼婦たちもまた全員が裏社会であるわけではない。

犯罪者たちの中でもごく一部の人間が裏社会として成り上がる。

衝動的に犯罪を犯す人間など裏社会ではあり得ない。

彼らは、自分の身の上を代償として報酬を受け取る。

まだ彼女は裏社会としては、警察機関から目を付けられていない希少価値の高い女だった。

まだ少女であり、年若いゆえに、彼女はひっそりと裏社会の暗がり生きる。

街頭に寄りかかった彼女は、どこか物珍しげな視線を受けるが、それを気にした様子はなく、長く顔にかかる黒髪をかきあげた。

スペイン系の面差しは、掘りが深く成長すれば美女になることが想像できる。

肩にかけられたショールがずり落ちる。

まだ成長しきっていない体は、どこかアンバランスな危うさをたたえていた。

とりあえず、一目でわかるのは、彼女がまともな人間ではないということだけだ。

普通の少女ではあり得ない瞳の鋭さの彼女。

「逮捕されにでもきたのか？」

前を通りかかった男に声をかけられて、クルシタは顔を上げる。

見上げなければならぬほど長身の男だ。

もっとも、それはクルシタがそう思ったただけであって、男は平均的な白人男性よりも少しばかり背が高いといえるのかもしれない。

「なんで、わたしが逮捕されないといけないわけ？」

大きな瞳のきらきらと光をたたえる目をあげて彼女は首をかしげた。

「……娼婦だろう？」

「そのへんのポン引きなんかと一緒にしないでね」

少女は首をすくめた。

確かに、平凡な娼婦たちと比べれば、その瞳はどこか冷静で生活に困っていてせっぱ詰まっているようには見受けられない。

どこか不思議な雰囲気併せ持つスペイン系の少女は男の胸元に腕を伸ばした。

華奢な腕が彼のネクタイに伸びた。

「それに、女の子とお話するんなら、サングラスをとるのが礼儀じゃないって？」

にっこりと笑う。

少女が、娘になりかける、どこか微妙な年齢の。

「名前は？」

尋ねられて、少女は笑った。

明るい、南の太陽のような笑顔に目を奪われる。

彼女は普通の女の子などではない。

それは見ればわかることだった。

男はそれほどまでに、犯罪者たちと長く関わってきた。

衝動的に犯罪を犯す平凡な犯罪者から、世界でもトップクラスに当たる犯罪者たちとも。

目の前にいる少女は、生活苦から娼婦に身をやつした人間ではない。

どちらかと言えば彼女の存在感は、世界でも有数のトップクラスの裏社会が持つものに近い。

実施的にトップクラスとは言えないかもしれない。

世界でトップクラスの裏社会というものは、他者を圧倒する存在感を持っているものだ。今まで男が出会った犯罪者のほとんどは、

そんな空気感など持つてはいなかった。

圧倒的であるとはそういうことだ。

誰をも圧倒する存在。

それはそう。

かつてのマジックボムのように。

そして、キャシーのように。

「……もしくは、死天使のように」

ぽつりと少女が男の言葉を追いかけるようにつぶやいた。

ネクタイをつかんで彼の頭を自分の元へと引き寄せる。

「わたしは裏社会」

それはあなたが感じたはず。

それはあなたが知っているはず。

裏社会でいることを、近い過去に少女は選択した。

犯罪社会の中で、のたれ死ぬ道を選び取った。

「君は、誰だ……？」

男が問いかける。

「わたしは、死の蝶。死骸に群がり、死者に葬送を送る蝶々」

言って彼女は笑った。

「クルシタ・ゼグラ……？」

「あら、わたしの名前を知っていたの？」

にっこりとクルシタが笑えば男は額をおさえた。

「噂程度でな」

死の蝶。

夜に舞う死の蝶。

そう告げられれば、情報に通じている者ならばわかるだろう。

「あら、てっきりわたしなんてまだまだ無名かと思っていたわ」

にこにこ朗らかに笑っている。

その口が言うか。

男はため息をつく。

下位であろうとも、裏社会に名前を連ねる犯罪者が「無名」とい

うことはあり得ない。

裏社会であるということとはそういうことなのだ。
誰をも圧倒する存在感を持つ。

「死の蝶、クルシタ・ゼグラ」

噂に聞く程度の存在だった。

実際、なにをやったというわけでもない。

犯罪らしい犯罪には手を染めていないはずだ。

その、裏社会に名前を連ねる娼婦がこんなにも幼い少女であるとは思わなかった。

「少なくとも、俺たちみたいに裏社会ばかりを追っている人間は名前くらいなら把握はしている」

裏社会の生死。

その犯罪を知っていなければ、彼らを追いかけることもできない。
敵を知ることとは非常に重要なことだ。

「ふーん。わたしなんて無名だと思ってたわ」

気分を害した様子もなく、笑っている彼女は男の唇に自分の唇を押しつける。

「……一応、俺は警察なんだがな？」

男が少女に告げれば、クルシタはふふと声を上げる。

「知ってるわよ。それじゃなきゃ、こんなところであんたたちを待ってたりしないわ」

含みを持たせた彼女の言葉に、男が首を傾げる。

「わたしもあんたのことは知ってるわよ」

彼女は彼を「待っていた」と言った。

つまり、顔が割れているということだ。

とりあえず、そんなことはどうでもいいが、彼女はなにを言いたいのだろう。

「事件があって、あんたたち、身内の不祥事で大わらわしてんでしよう？ ブレット」

彼の名前を呼びかける。

彼女は、彼をブレット・オルコットだと知っていて接触してきたのだ。

警察官が、犯罪者に顔が割れているということとは非常に面倒くさいことでもあるが、ブレットの場合は多少は仕方がないことなのかもしれない。

「裏社会の情報網の広さは知ってるでしょ？」
情報に疎い裏社会などいない。

彼らはそうやって生き残ってきたのだ。
かつて、マジックボムやキャシーがそうであったように。
彼らは情報に精通している。

「まだ未発表のはずだ……」

「そんなもの、わたしたちには関係ないわよ」
未発表であろうがなかろうが、彼らは特殊な情報網を持っている。

「わたしね……」

クルシタは唇に人差し指をあてた。

「あなたと、ジョージ・リートに用があるの」

エリザベス・マレーイとはお友達なのよ。

少女はブレットに耳打ちして、そつとほえんだ。

耳打ちしたのは周りに聞こえないように、という配慮からだろう。
だが、ブレット・オルコットは、告げられた内容に愕然とした。

「もう一度言いましょうか？」

ゆったりとなまめかしく笑う。

年齢を感じさせない、どこか色香のただよう笑みだ。

幼い顔立ちのポルノ女優でもあるかのように。

「来い」

男は彼女の腕をつかんだ。

彼女が言いたいことはわかる。

彼女は、彼に暗に告げているのだ。

今、彼らが躍起になって追いかけている事件と、その容疑者と目される捜査官を。

その両者の関連性を。

目の前にいる「死の蝶」と呼ばれる娼婦は把握しているのだ。裏社会と呼ばれる人間のいずれもが、同様に頭の回転が速く、機転がきく。

そうして、時として警察関係者との接触すら厭わない。

彼らはそういった人間だ。

死の蝶の手首をつかんだまま、大股で歩いていくブレットに少女は抗議の声を上げる。

「引っ張らないで、痛いわ」

「なにを知っている」

低くうめくように男が告げた。

歩きながら、彼は前方をにらみつけるように見据えたまま奥歯をかみしめた。

裏社会という存在はいつも「こう」だ。

簡単に世間の常識など越えていく。

彼らは常識などにとらわれない。

「……ここでもいいの？」

やんわりと響く少女の声に男は、思わず驚いたように彼女を振り向いた。

「いや……」

口ごもる。

自分の悪い癖も、ブレットは理解している。

時折、彼は犯罪者を追いかけるあまり、前が見えなくなることがある。

若い頃に、殉職した先輩捜査官に指摘された悪癖だ。

それは年を経ても変わっていない。

そのことに、ブレットは苦笑するしかない。

自分は、若い世代に注意をするものの、なかなか自分がよい方向に変わっていくことができないのだ。

犯罪捜査に関わる者は、たいがい誰もが頑固で融通の利かない面

を持ち合わせているが、ブレットの場合もそれにあてはまった。

「じゃあ、どこか落ち着けるところにつれていって。あと、ジョージ・リートも呼んでもらいたい」

彼女は唇だけで言った。

彼女は盗聴に警戒していた。

アメリカにはエシユロンを含めて、個人の監視が強い国だ。

そんな国で生きていくことは大変なことだ。

一般人は関係のないことだったが、彼女らのような犯罪に深く関わる者にとっては、アメリカの個人監視システムは頭の痛い問題だった。

その言葉に男が頷く。

常に監視されているのだ。

そんなものに振り回されない人間は、裏社会にあってたったひとり。

世界の表側に、そして裏側に。

同様に君臨する女王。

世界の誰もが、彼女の姿と、才能にため息をつく。

生まれ落ちた時から、全てを与えられた。

そのような人間がどれほどいるだろう。

世界の頂点に立つ女は、かつて、マジックボムと呼ばれた犯罪者の友人だった。

そのマジックボムは数年前のケース・レッドドラゴンと呼ばれた事件以来、姿を消した。

世界を震撼させた犯罪者は煙のように消えたのである。

「死の蝶」

通り名で呼ばれて、クルシタ・ゼグラは目をあげる。

自分よりも背の高い男を彼女は見つめた。

「……なにを考えている？」

ブレット・オルコットの問いかけに、少女はひっそりと笑った。静かに、不穏に。

死の蝶は笑う。

「わたしはただの娼婦よ」

口元で笑った彼女はスキップでもするように、ステップを踏んだ。ぞっとするようなその横顔にはなにか異様なものが浮かんできているような気がした。

社会の裏側の、犯罪社会と呼ばれる世界で逞しく生きていく彼ら。そんな彼らを追いかける捜査官たちにすら、彼らの世界の闇は理解不能だ。

「違法だろう……」

「……法律なんて、誰が、決めたの？」

世界には決まり事がなければ、世の中は回っていかない。

ブレットはそう言いかけて、クルシタの眼差しに絶句した。

「法律なんて興味ないのよ」

単刀直入な娼婦の言葉は、彼がかつて追いかけていたマジックボムを想起させる。

裏社会と呼ばれる彼らはみんなそうだ。

社会のことばかりではなく、自分自身のことすら関心がないとも言いたげな眼差しを向ける。

どこまでも自由に、彼らは世界を闊歩し、そうして社会の常識を軽々と越えていく。

「死の蝶。わたしは確かにそう呼ばれているけれど、それはわたしが望んで呼ばれるわけじゃないし、自分でつけた名前でもないわ」

わたしの名前はクルシタ・ゼグラ。

胸の前で両手を握りしめるようにして彼女は言う。

「わたしは、こんな世界で生きるために売春をはじめたの。それを、上からなにもわかっていない連中にとがめられる筋合いなんてないのよ」

意志の強い彼女の瞳が語る。

「あれはだめ、これはだめ。みんな知ったように言うけど、この世界で、わたしたちがこんな風にしか生きていけないように追いつめ

たのも、この社会の人間よ」

臓器売買などを含めた人身売買。

そんな人間たちに目をつけられた国籍すら持たない孤児だったクルシタ・ゼグラ。

彼女に最初に目をつけたのは、あろうことか、く国の役人を名乗る人間たちだった。

誰も、自分を守ってくれはしない。

自分を守るのは自分だけだ。

そんな生き方を突きつけられた。

「そうやって、人の責任にするのか？」

「あら？ ブレットは、十にもならない子供になにができるって言うの？ 動物みたいに生きるだけで精一杯なのに、なにがいいとか、悪いとか、知るわけじゃないじゃない」

子供に善悪の概念を教えるのは大人の仕事だ。

それを身につける前に世間から捨てられた彼女が、そんなものを知っていたわけがない。

ただただ、生き残るという本能から、身を守り必死で生きてきた。たったそれだけのことだ。

喉の奥で笑うクルシタは、まっすぐに射抜くような瞳をブレットに向けた。

まともに育たなかった彼女が、正常な社会生活を送れるわけもない。

ブレットはそんな彼女を眺めてから大きなため息をついた。

ブレットと合流したジョージ・リートらが、クルシタ・ゼグラに案内されたのはFBIの本部にほど近いカフェだった。捜査官たちの目と鼻の先で、裏社会の仲介屋が経営するカフェである。

ガラス扉を開いた少女は、店長の男ににこりと笑いかける。

名だたる仲介屋で、多くの事件に関わってきたとされるが決定的な証拠が見つからないまま野放しにされている男である。

大概の場合、裏社会のほとんどは徒党を組むことをせず、ひとり

で活動している。

時には目的によって互いに互いを雇うこともあるが、そこに存在しているのは、協力などではなく契約だ。

スペイン系の黒髪の男は、ブレットとジョージを見やってから肩をすくめると手元にあるタオルでカウンターを拭いた。

「店長、店はわたしたちが見ていますから、奥はいいですよ」
明るく朗らかな声が飛んだ。

その店の実状を知らない者が見れば、やや気むずかしい男が経営しているカフェにしか見えない。

「頼むよ、ちよっとお客さんと奥で話をしてくる」

腰に巻いたエプロンをはずしたセリオは、ブレットとジョージを手招いて小さな裏社会の娼婦とともに店の奥へと入っていった。

目の前にFBIの捜査官たちを前にしても二人の裏社会たちは全く怯まない。

本来裏社会という人間たちはそういったものだともわかっていても、それでもなお、その堂々としたその態度は犯罪者のものとはとても思えない。

「なんで俺たちに協力なんてするんだ」

訝しげなブレットの言葉に、クルシタ・ゼグラとセリオは互いに顔を見合わせる。

「わたしは、マスターが手伝ってほしいと言ってきたからよ」

「俺は、あんたたちのことをアリサに任されてるからな」
要するにそういうことだ。

その先は間違いなくアリッサ・ノースウッドにつながっている。

「なんだ、裏社会が表の人間をかくまうのはそんなにおかしいことか？」

同じ社会に生きている以上、裏社会の人間といえど表社会に関わらずに生きていくことなどできない。

セリオも同様であり、そして、クルシタ・ゼグラもそうだ。

「わたしたちが食べてるものは、漁師や畜産業者、そして農家の人間が生産しているのよ。裏社会の人間だってどこかで表社会とつながっている。だから、別に表社会に裏社会の人間が関わったとしてもなんらおかしいことじゃない」

若い娼婦はそういった。

確かにそう言われればその通りだが、そんな言葉が裏社会の人間から聞くことになるとはまさか思わなかった。

「この嬢ちゃんは、どうもまずいことになってるだろう。あんたたちがどう思ってるかはともかく、アリッサが、俺に頼んだんだ」

親指でセリオはエリザベス・マーレイを指した。

「エリザベス・マーレイっていう捜査官なんだけど、ほんと、鈍くさいの。あの調子じゃそのうちアメリカ当局の陰謀に巻き込まれるわね。だから、そのときは守ってやってね」

小さな少女のままのアリッサはセリオにそう言った。

「アリサがそう言うなんて珍しいな」

彼の言葉に彼女はころころと笑う。

その笑顔を思い出す。

「そう？ 見ていておもしろいだけよ。ジョージのことで青くなったり赤くなったりして、本当に笑っちゃう」

身も蓋もない言われようだが、そんなエリザベス・マーレイをアリッサは好きだった。

嘘はつかず、まっすぐで、そうして真剣に捜査官として地に足を着ける。

「最近じゃ珍しく正義感が強くて、ちょっとうざいけど。いい子よね」

アリッサが自分を追いかけているはずの捜査官をほめるなど至極珍しいことだ。

「自分たちの利益を最優先して、真実をねじ曲げる警察なんて山ほどいる……」

じっと水色の瞳が、セリオを見つめた。

「それはどこの社会でも同じだろう」

彼の言葉に、少女はかぶりを振った。

「裏社会ならそれでもいいのよ。裏社会は、力が全てよ。力がなければ死ぬだけよ。でも、表社会の人間は違う」

組織の力に屈して煮え湯を飲まされる人間がなんと多いことか。それを裏社会の人間たちは誰よりもよく知っていた。

法律をかいくぐって生きていればこそ、誰よりも世界の汚さを知り尽くす人間たちだ。

「マーレイ捜査官にはその力がない、と？」

尋ねたセリオに、殺人鬼の少女はうなずいた。

「わたしたちみたいに、図太くなんてないわ」

「映画みたいに、切り抜けるかもしれんぞ？」

「……はっ」

セリオの言葉を馬鹿にするように少女は息を吐き出した。

「冗談でしょ、あんな優等生のお馬鹿さんにそんな器用なことができるわけじゃないじゃない」

優等生、というのはこの場合誰のことだろうか、と思わずセリオは内心で思ったがそれ以上は口にしない。

彼女の機嫌を損ねれば、うっかり危険に陥るのは自分自身だ。

「とにかく」

セリオは、我に返ってジョージ・リートとブレット・オルコット、そしてエリザベス・マーレイの三人の捜査官たちに視線を戻した。

「俺たちは、アリッサ・ノースウッド。いや、マジックボムに依頼された。あんたたちの力になってほしいと。だからこうしてあんたたちの前に姿をさらしている」

「俺たちを騙そうっていう魂胆なんじゃないだろうな」

ジョージが疑い深くセリオを見つめれば、彼は肩をすくめた。

「俺は、マジックボムの名前を出しているんだ。そして、マジックボムの名前を語った以上、そこにあるのはリスクだ。もしも俺たちがあんたたちを騙していたとして、そのために彼女の名前をかたつたと後々ばれたら、死ぬのは俺たちだ」

アリッサの名前を語ると言うことはそういうことだ。

偽りなど許されない。

彼女の名前を持ち出して、そうして死んだ裏社会や犯罪者のなんと多いことか。

「そうよ、あんたたちはこの店にアリッサが出入りしてるのは知ってるし、よく食事をしにきてるのは知ってるじゃない」

クルシタ・ゼグラは怯むことなく口を開いた。

「……それもそうか」

ジョージはうなずきながら相づちを打った。

確かに、アリッサが毎日のようにセリオの店を訪れているのは多くの捜査官に有名であったし、捜査官ばかりではなく、裏社会の間たちも知るところだった。

だからこそ、セリオの店に来ればマジックボムと接触が可能だとも言われた。

「とにかく、この鈍くさい捜査官は殺人の嫌疑がかけられて、殺されたのはCIAの諜報員。それだけで十分やばい状況じゃないのさ」

クルシタの言葉に、ジョージとブレットは顔を見合わせた。

そこまでは情報が入ってきていない。

そして少女の言葉を聞いたエリザベスの顔から血の気が引いた。

「なによ、知らなかったの？」

ぽんぽんと言葉をつづる彼女は、困ったようにセリオを見上げた。「あの男、マフィアとつながっているっていうんで、有名だったが、そのマフィア自体がつい最近結成されたごく新しいところだな。古参のマフィア連中と縄張り争いをしていたらしい」

このあたりの情報はさすがに裏社会だ。

セリオの場合、仲介屋であるから、そのあたりの情報には詳しくかつたというのもあっただろう。

「FBIには裏社会とつながっている人間も多い。そのあたりの犯罪者を一掃する意図もあったんだろうが、たまたま個人的に仲良くしているだけの、エリザベス・マーレイもターゲットにはいったんだろうな。おそらくは、マジックボムというリスクをつぶすためだろう」

彼女とつながる捜査官をつぶし、そして果てはマジックボムとつながりを持つ裏社会、一般人もことごとく消していくのが目的だ。

「マジックボムは危険だ」

それがおそらくアメリカ当局のごく一部の人間の暴走を招いた。最強の殺人兵器。

「今、どこにマジックボムが隠されているのか、誰も知らないだろ

う。アメリカはそれを引きずり出したいんだろう」

兵器開発部門でありながら独立した、第二次生体兵器開発計画。そこで日夜作られる超人たち。

人の命を、命とも思わずに非道な実験を繰り返す。

その実験によって作り出された意志を持つ兵器。

マジックボムを、彼らは抹殺するつもりだ。

「……」

絶句したのはジョージ・リートだ。

すでに二年以上、アリッサはジョージの目の前から奪われた。

そのうえ、今はなにからなにまで奪い尽くしデリートしようというのか。

「あんたたちは、兵器だからと作り出された彼女を再び殺すのか？
問いかけられた。

それでいいのか、と。

セリオの情報網はちょっとした情報屋なみに広い。

あたりまえだ。

裏社会のトップクラスと渡り合うことで自分の命が危険にさらされる。

自分の命を守るためには情報に精通していなくてはいつ死ぬかもわからない。

「兵器なら、殺してもいいのか？」

朗らかに笑っていた彼女を。

殺してもいいのかと、彼は問いかける。

「命をもてあそんで、自分たちの都合で生み出して、そうして知らないから捨てるのか？　まるで家畜のように」

真剣なセリオの声に、クルシタ・ゼグラは眉をひそめた。

作り出しておきながら、手に余るから殺す。

それではまるで家畜のようではないか。

笑顔でホットミルクを飲んで舌をやけどした彼女が家畜だなどとは。

そんなことは許されない。

人は、どんな生まれにあっても人ではないのか。

「つまり、……マジックボムが邪魔だから、わたしたちを抹殺する
というの……？」

エリザベスのつぶやきに、セリオは声もなくうなずいた。

「そうだ」

まとめて不正を行っている人間たちや、犯罪者も始末してしまえ
という乱暴な方法だ。

「マジックボムは、証人保護プログラムを適用されているはずよ」

「それがおもしろくない人間もいるっていうことだ」

表向きは証人保護という形で収まっているのは、あくまで表向き、
の話だ。

アリッサは証人保護プログラムなどで制御できる人間ではない。

そもそも、証人保護プログラム自体が政府の人間を納得させるだ
けの口実であり、よほどのことがなければ、襲撃してきた人間を返
り討ちにできるだけの実力をマジックボムは持っていた。

そうでなければ、小さな少女の姿をした彼女が、マジックボムと
恐れられ、なおかつ大量殺人鬼などと言われるはずがないのだ。

強大な権力の陰に守られた人間。

そして彼女は世界に認められる傭兵だ。

彼女を生み出した人間たちすら、彼女を制御することなどできは
しなかった。

そのために引き起こされたのが、かつて起こった生体兵器開発計
画襲撃事件と、ケース・アングリーボマー。

そして、つい二年前に、カルト教団の「暁の夜明けの騎士団」が
引き金を引いたケース・レッドドラゴンだ。

それだけ、彼女は多くの人間を殺し続けてきたのである。危険視
されてもやむを得ない存在ではあるのだ。

「……彼女が、戦争が起こっているときに活躍できる兵士であり、
そして男で、普通の家庭に生まれたアメリカ人なら、ここまで危険

視され、もののように扱われることもなかっただろうに」

セリオは独白するようにつぶやいた。

彼女が生体実験の申し子であることは、かなり早い時期に彼は知っていた。

乱暴な言動も、どこか粗野に感じさせる投げやりさも。すべて幼い頃に虐待を受けた子供の特長だった。

その彼女がやがて、人としての理性を喪失し、犯罪者の中のトップに上り詰めた。

彼女の人格を破綻させたのは何者なのか。

それはそこにいる人間たちは誰も知りはない。

「で、あんたたちは黙って抹殺されるのか？」

順番はわからない。

アリッサ・ノースウッドに関わった以上、エリザベス・マーレイだけではなくジョージもブレットも、そしてセリオもクルシタ・ゼグラも危険であることには変わりがない。

「俺たちはそんなことはごめんだ」

そういつてセリオは目線をクルシタの頭におろした。

確かに、自分たちは犯罪者である。しかし、そのために殺されるのはまっぴらだ。

「ここはねらわれてる者同士、共同戦線を張ったほうが利口じゃないか？」

彼の提案に、ジョージは口を開いた。

「アリサが狙われているというのは、本当なのか？」

「最終的に奴らがたくらんでいるのは、アリサの抹殺だろう」

どこかに隠されたマジックボムの殺害を正体もわからない人間たちがたくらんでいる。

しかし、と、セリオは思う。

逆に考えれば、万が一、彼女の居所が知れたとして、より所を失ったアリッサがどのように暴走するかなど誰にもわからないのだ。

強大な爆弾。

それがマジックボムだ。

その危険性がわからないわけではないだろうに、彼らは外堀を埋めようとしている。

「奴らがなにをしようとしているのかは、俺たちみたいなあぶれ者にはわからん。だが、もしかしたら、とんでもないことをしようとしているのかもしれない」

姿の見えない彼らは、手榴弾のピンを抜こうとしているのだ。

マジックボムの恐ろしさを知らないわけではないだろうに。

「今の警察どもは、マジックボムの恐ろしさを本当にわかっていないのか？ それともただの間抜けなのか？」

セリオに問われて、ブレットはゆるくかぶりを振る。

「今の、警察、軍、当局の連中は、アリサの恐ろしさは正直、知らないと思う」

ぽつりとつぶやいた。

かつて、ケース・アングリーボマーを追いかけていた捜査官のほとんどは現在引退した。

あたりまえだ。

すでに二十年近くが経過しているのだ。

第一線でマジックボムを追いかけていた捜査官の半分は、彼女に返り討ちにされて死んだ。

そして、生き残ったほとんどのものがひどいトラウマを負って捜査の第一線から退いた。

今でも捜査の第一線にたつのはアメリカ合衆国全土で数人しかない。

それが現実だ。

ほとんどの若い捜査官や、彼女を追いかけたことのない捜査官ばかりがFBIや州警察にいる。

そんな彼らが、マジックボムの恐ろしさを真に理解しているか、と聞かれれば答えはノーだ。

誰もマジックボムの底なしの恐ろしさを知らない。

そして知らないからこそ、伝説でしか知らない「暁の夜明けの騎士団」のようなカルト教団が彼女を利用しようとするのだ。

「気楽なもんだな……」

セリオは頭髪をかき回した。

彼女は、そう。

怒りに支配されれば、容易に街をひとつ吹き飛ばす。

強大なパイロキネシスを与えられた赤い竜。敵になど回せばどうなることか、その結果は誰も知らない。

ふと、部屋の扉に控えめなノックの音が響いた。

こつん、と。

「……っと、おまえら、裏に車が用意してある、でるぞ」

小さく舌打ちしたセリオは、クルシタ・ゼグラの肩を抱いて歩きだした。

「わたしはなんとかなるわ、セリオ」

「なに言ってるやがる。ただの娼婦が粹がるな」

大きな車だ。

後部座席には黒光りする武器が転がっている。

「いやね、これだからなんでも腕づくで解決しようとする男って野蛮だわ」

クルシタ・ゼグラはロケットランチャーらしいものを片手で押しやってため息をついた。

生成のシヨールが揺れる。

隣に座ったブレットを横目で眺めて、鼻から息を抜いた。

運転席にセリオ、助手席にジヨージ。

そうして後部座席にはブレットを挟むようにして右にクルシタと左にエリザベスが座っている。

乱暴に車を出したセリオはバックミラーで背後を確認した。

「しかしまあ、わかりやすくベンツでカーチェイスに参加してくださいさるとはね」

確かにわかりやすい。

黒塗りのベンツでセリオの車を追いかけてくる。

「クルシタ、そいつで反撃できるか」

「そいつって？」

問いかけられて、クルシタ・ゼグラは小首を傾げた。

「RPG」

「……無理」

自分の隣にあるロケットランチャーを見下ろして、娼婦の少女は肩を落とす。

武器の扱い方さえ知らないのだ。

ロケットランチャーなど扱えるわけがない。

「だよなあ」

セリオがため息まじりにつぶやけば、クルシタ・ゼグラは同乗者を眺めてから肩をすくめた。

「このメンツじゃ無理じゃない？」

間違えば、捜査官三人が犯罪者だ。

それをアリッサは望まないだろう。

「わかったよ」

クルシタは少しだけ考えると、携帯電話を取り出した。

監視されているのは覚悟の上だ。

どちらにしろ彼女は裏社会の娼婦で犯罪者だ。

手早くメールを打つ。

もちろん、内容は簡単に悟られたりすることのないものだ。

暗号文により近い。

三十秒ほどでメールを打ち終わったクルシタは、そうしてからまるでドライブにでも行っているかのように、窓に肘をつけて窓の外を眺めた。

ビル群が、通り過ぎていく。

サイドミラー越しに、背後に迫る車に乗っている男たちが銃を構えているのが見えたが、クルシタは息を吐き出しただけでそれほど危機感もなく目線を窓の外の風景へと戻した。

「ワーオ」

女はサングラスを押し上げて声を上げる。

「おもしろいことやってんじゃん」

ビルの二階から眺めていた彼女は、大きなカバンの中からロケットランチャーを取り出した。

まさか、ワシントンの街中になんでもない顔をしてそんな武器を持ち込む女がいるとは誰も思わない。

検問が設置されているわけでもなければ、気楽なものだ。

腰にはナイフを下げ、肩に装備したホルスターには銃がおさめられている。

脱ぎ捨てた、上着を床に落として、彼女はごきりと首を鳴らした。カフェもある、人目につくビルの廊下だ。

しかし、女は動じない。

あわてたビジネスマンが通報したようだが、彼女にはどうでもいいことだった。

重いブーツで床を踏んだ。

「さて、お仕事しましょ」

思い切りロケットランチャーの銃身を窓ガラスにたたきつける。神経質な音をたてて、ガラスが砕けた。

下に誰かが歩いている、などということを彼女は考えていない。長い足を勢いよく窓辺にたたきつける。

距離とスピードを目測で計算する。

廊下の向こうを走ってきた警備員が声をかける瞬間、女は思いきり窓枠を蹴って宙を跳んだ。

ほんのわずかな空中遊泳。

ガンツと音をたてて、セリオの車の上に着地する。

「遅くなってごめんなさいね」

車の上に乗ったまま、彼女は告げた。

「いらっしゃい、エリヴィラ・シャミナ」

「あらあら、大きな態度ですこと」

体格の良い、元特殊部隊の女は、言われて朗らかに笑った。

むき出しの肩はよく鍛えられていて、色っぽいとうよりも、どこか恐ろしげだ。

栗色の長い髪を強風になびかせて、紺色の瞳をまたたかせる。

いわゆる殺人狂だ。

「お金払うんだからいいじゃない」

「全く正論ね！」

頭の上で交わされる裏社会同士の会話に、頭をかかえているのはジョージだ。

裏社会の周りには裏社会が集まる、と言うが、それにしても集まりすぎではないか。

しかも、元ロシア人のエリヴィラ・シャミナといえば、暗号名の「ミネルヴァ」としても知られる腕利きの傭兵だ。

アリッサが何度か組んで仕事をしていたのを覚えている。

「あら、一緒にいるのはマジックボムの腰巾着ね」

セリオやクルシタとともに車内にいるのが、FBIの捜査官だと気がついたらしい、エリヴィラは脳天気な声を上げた。

「知ってる？ エリヴィラ」

「なによ！」

揺れる車の上でバランスをとる彼女に、クルシタが話しかける。

まるで世間話でもしているようなのんきさだ。

「あなたがお気に入り、マジックボムの抹殺計画がすすんでいるらしいわよ」

「はあ……？ なにそれ？」

少女のような娼婦に告げられて、エリヴィラは片手でロケットランチャーを支える。

「制御できないからいらななんですって」

淡々とした彼女の言葉に、エリヴィラは「ふうん」とつぶやいた。「つまり、なに？ そのせいで追われてるってこと？」

さすがに察しが早い。

エリヴィラは後方に迫る黒いベンツをにらみつけた。

「そう、ちなみに後ろのがそれ」

「んー、ぱっと見、三台いるけど、全部やっちゃていいのかな？」

「すまん、ミネルヴァ。武器扱える人間がひとりもないもんで」「いいわよ、それよりマスター。今度おいしいキッシュごちそうしてよね。アリサが、あんたのキッシュが一番おいしいって言ってたから！」

そう言ったエリヴィラは、器用に揺れる車の上でバランスをとると、ロケットランチャーを肩に構えた。

男に比べれば華奢にも見えるが、さすがに元特殊部隊に名前を連ねた歩兵だ。

正確にねらいをつけると引き金をひいた。

一発で並んだ二台の追撃車を破壊すると、そのまま、それを放り投げる。

同時に背中にしよった短機関銃をはずすと、そのまま、照準機のスイッチをいれた。

レーザーの赤い光が解放される。

「ワシントンで戦争でもする気か！」

怒鳴りつけたブレットに、エリヴィラはにやりと笑った。

「戦争は楽しいわ。殺すか、殺されるか。……ぞくぞくして、気持ちがいいのよ。セックスでもこうはいかない」

元歩兵というだけあって、彼女の装備は一般的に言う軽装ではない。

ロケットランチャーだけでも重いだろうに、彼女は銃を二重と短機関銃を装備している。さらに腰にはナイフを所持している。念のためだろうか、防弾チョッキも装備しているから、おそらくその重さは相当のものだ。

しかし、エリヴィラは気にもとめない。

おそらくこれが訓練も受けていない女が背負えば、重さで動けなくなるだろう。

それらだけで軽く二六ポンドを超える。

「重そうね」

そんなエリヴィラをあきれたように眺めたクルシタは、黒い髪を指先で梳いた。

しかし、大したものだ。

二台の車両が同じ直線上に入ってきたのを計算して、彼女はロケットランチャーの一発で両方を仕留めてしまったのだ。

これが戦場ならばこうもうまくはいかなかっただろうが、所詮、相手は戦闘のプロフェシヨナルとは言い難い。

エリヴィラあたりの激戦をくぐり抜けた人間にはチョロいものだったに違いない。

「大して重くないわよ。こんなのわたしが軍隊にいたときの半分の重さよ」

言いながら、最後の一台であろう追跡車両にむけて、彼女は狙いを定めると引き金を引いた。

全ての判断が速い。

自分の命をかけて戦闘をしていた人間なのだから当たり前と言えは当たり前なのだが。

乱暴なセリオの運転ものともせず、彼女はあつという間に追跡してきたベンツを始末した。

戦闘のプロ。

「ミネルヴァがアメリカに入ってたのを知っていたのか？」

彼女はあまりアメリカにはやってこない。

もっぱらイランにいるか、それか東欧やアフリカ、東南アジアの紛争地帯に滞在していることが多い。

「まあ、それなりに、情報網はありますから」

そう言ってクルシタ・ゼグラは笑った。

裏社会の女たちは強い。

それも異常なほど。

クルシタは、頭の上の天井が軋むのが気になるのか時折瞳を上げた。

彼女は娼婦だ。

最前線で戦う傭兵とは異なる。

「もうちょっとおしとやかに、って、無理でしょうけど」

運転手を失ったベンツは、迷走して通り沿いにあるレストランに派手に突っ込んだ。

「じゃ、わたしはこれで！」

そう車外から告げると、信号待ちで止まった瞬間に身軽に跳んで消えていく。

あれでは、さんざん他人の車の上で暴れた上に、自分に嫌疑がかかるだけの様な気もしたが、おそらくそれをクルシタ・ゼグラは狙っていたのだろう。

だから車内に招くようなこともしない。

ただ、追跡しているベンツを返り討ちにしろと。

ふと、ブレットの携帯電話が鳴った。

「ブレット・オルコットだ」

電話に出た彼に、若い捜査官の声が応対する。

「ブレット、大変です。キャサリンがCIAに連れて行かれました！」

「やっぱりそうきたか……」

FBI局内であつてのマジックボムと関わりがあるのは数名だ。

ジョージ・リート、ブレット・オルコット、エリザベス・マレー、そしてキャサリン・キーン。そのほかには数名の捜査官が上げられるが、彼らは関わった内にははいらない。

実質的にマジックボムの側にいたのは、三人の捜査官たちだ。

そして現在のFBIで最も、マジックボムに近い人間。

それは、アリッサ・ノースウッドを素体に作られたクローン体の

キャサリン・キーン。

マジックボムを追いかけるなら、キャサリン・キーンも狙われておかしくはない。そのキャサリン・キーン的能力は、アリッサと比べれば大したことのないものなのだ。

反社会的な行動を起こさないようにとデザインされた彼女が捕らわれたということは、彼女が抵抗できないということである。

「……まずったな」

ブレットは報告を電話で聞きながら親指の爪をかんだ。

彼女は、絶対的に社会的な経験値が不足している。

CIAの執拗な尋問をかくぐれるとは思えない。

「だが、彼女を助けにいくなんて無理だぞ？」

そう。

今は、殺人の容疑者として追われているエリザベス・マーレイもいるのだ。

おいそれと動くことなどできない。

考え込んでいるブレットは、ふと車の窓をノックする控えめな音に、顔を上げた。

車内にいる全員の視線が集中した。

金髪碧眼の男女と、赤毛の娘がいる。

どちらも白人で、しかし三人ともがよく似ていた。

「こんにちは」

きれいに響くイギリス英語だ。

「オーエンと言います」

名乗ったのは金髪の娘だ。

赤毛の娘は、金髪の青年の影にかくれてしまっている。

「いろいろと大変みたいでしたので、先日、イギリスから参りましたの」

にっこりと笑う。

なにやら、ひどく予言じみたことを告げられて、ジョージとブレットは顔を見合わせた。

「オーエン？」

ブレットの脇から、クルシタが顔を出した。

「オーエンって、あのオーエン一家？」

「あら、ご存じでしたの？」

柔らかい微笑が印象的な金髪の娘は、軽く腕を振った。

「知ってるわよ。伝説の魔女の弟子でしょ」

「伝説だなんて、おばあさまは良いかたでしたし、そんな魔女なんて呼ばれるような悪者ではありませんでしたわ」

なにをどうしたのか、突然、周りの人間たちがセリオの運転する車と、オーエンと名乗った三人の男女を認識しなくなった。

「なにをした？」

ジョージが驚けば、金髪の娘は穏やかに笑う。

「いえ、大したことじゃありません。ちよつと、人の認識から外れただけですから」

さりとらとんでもないことを言った彼女は、かすかに片目をすめて通りの脇にある本屋にいる男を眺めた。

いかにも怪しげな質の良いスーツを着た男だ。

その男が、きよろきよろとなにかを探している。

おそらく、セリオの車を探しているのだ。

認識していたものを、見失った。

そんな男の反応に、ジョージとブレット、そしてエリザベスは驚きを隠せない。

「魔女なんて、そんなもの本当にいるのか？」

目の前で起こった信じがたい現実にはブレットが口を開けば、娘はゆるやかに頭を左右に振った。

「大したことをしたわけではありません。ちよつと人の認識を操作しただけですから。小一時間ほどは効いているとおもいますから、その間にここを離れるといいと思います」

にっこりと笑った。

さあ、行ってください。

オーエンと名乗った娘はそうしてセリオを促した。

彼女に促されるまま、車を発進させたのはなぜだろう。

「なんだ、あれは……」

「別に、裏社会じゃないから知らなくても無理ないわ」

彼女らは裏社会ではない。

しかし、真に表社会だけに生きる人間でもない。

行ってみれば暗がりには潜む者。

「……オーエン一家は、コンゴで育ったイギリス人の兄妹で呪殺一家としてその筋では有名なのよ」

ハワイのクリスティン・マッキランや、コンゴのアマのように。世界でも随一と名を馳せる呪家だ。

「胡散臭くないのか？」

「どうかしらね、信じるも信じないもその人次第じゃない？ わたしはどっちでもいいけど」

クルシタは冷ややかにそんなことを告げる。

何を考えているのかいまひとつわかりにくい横顔に、ブレットとジョージは沈黙した。

厄介なことになったとキャサリンは思った。

オリジナルのアリッサ・ノースウッドと、そのクローン体であるキャサリン・キーンを含めた五人の知覚は連結されている。

アリッサは、人形計画研究施設で「保管」されているが、彼女が確かに死んだわけではない。

アリッサ・ノースウッドの持つポテンシャルは計り知れない。

その正確な数値化などおそらく誰もしたことがないだろう。

しかし、危険性を考えれば、たやすく触れるべきではない。

自分もそうだ。

キャサリン自身も、アリッサの一部といえる。

アメリカ合衆国が生み出した最強の生体兵器に、触れてはならない。

知識のないものが、「彼女」に触れれば、そこに起こるのは大惨事だ。

かつて、そのために甚大な被害を巻き起こした。

彼女の精神を破綻させたがために。

幼い兵器を虐げた人間に対する罰だ。

しかし、それを罰と呼ぶにはあまりにも被害が大きすぎて、彼女の危険性を世にしらしめたのだった。

だから、とキャサリンは思う。

自分の中には、アリッサというオリジナルが確かに存在している。

「彼女」を刺激してはならない。

「触れてはだめよ」

若い金色の髪の娘はそう言った。

二の腕を力任せにつかむ男に、娘は水色の瞳をあげた。

それは、写真で見たまさに「マジックボム」そのもの。

キャサリン・キーンとアリッサ・ノースウッドの差異は外見的な

年齢だけだ。

生真面目な娘の眼差しに、CIAの男はぞっとした。

彼女は、美しい面立ちをした「化け物」だと。

アメリカの犯罪史上、最も恐ろしい殺人鬼。

「彼女を、刺激してはいけない。彼女に隠し事なんて通じない。彼女は、なにもかもを知っている。だから、触れてはならない」

アリッサを制御できる人間は数人しかいない。

それをキャサリンはわかっている。

なぜならば、娘は小さなアリッサそのものだからだ。

「あなたたちは、間違っている」

アリッサは道具ではない。

道具としての存在意義など、彼女は持っていない。

強い怒りに支配された少女を制御できるのは、自分ではなく。そして政府でもない。

彼女の心をとらえた人間だけだ。

「どうして、そんな目をする……」

自分が殺されるのではないかとか、そんな心配をキャサリンはしていない。

もっと、根底に流れるなにかが、彼女が平凡な人間とは異なるのだと知らしめる。

「わたしは、あの人のことをよく知っている。彼女を制御するなんてできない。だから、もっと違う方法があるはずなのよ」

アリッサに近しい人間を殺せば、彼女が破綻する。

そうすれば、招くのは彼女の暴走だ。

アリッサが暴走すれば、今度こそ止めることなどできない。

「今の、彼女の能力は、かつてケース・アングリーボマーを起こしたときの数倍。ケース・レッドドラゴンのときに見せたあれは、彼女のごく一部。彼女を、暴走させれば今度こそ世界が終わるわ」

だから、触れてはならない。

アメリカ政府の罪だ。

そんな、コントロールすらできない化け物を生み出した。

「わたしを殺したとしても、彼女は止められない。わたしたちクロインは、オリジナルの力を分散させるためのサブマシンよ。その中で、最も値を低く設定されているのがこのわたし。わたしの能力は彼女の数十分の一。あなたたちはバカじゃない。それくらいの計算はできるはずよね？」

キャサリンは静かに続けた。

連行されたのは留置場だ。

冷たい壁も、灰色の天井も、キャサリンには耐えられないものではない。

白い壁の中で彼女は作られたのだ。

研究所も、拘置所も、キャサリンにとっては大差のあるものではない。

「保管されている、彼女の目を覚まそうとするなら、それは愚かなことよ」

彼女は、柵の向こう側に押し込められて、振り返りざまにつぶやいた。

彼女を目覚めさせてはならない。

彼女を起こしてはならない。

絶望して、自ら心を閉ざした彼女に、触れてはいけない。

真剣な表情のキャサリン・キーンに男は押し黙った。

FBIの人間ばかりではない。

国防総省も、国土安全保障省の人間たちも、もちろんCIAの人間たちも。

アリッサ・ノースウッドの危険性を誰も理解していない。

彼女の危険性を理解しているのは、唯一、彼女を開発した主任研究員だけである。

彼女の感情がそれほど脆く壊れやすいものだど、彼女だけが理解していた。

実働部隊の人間だけではなく、上層部すらそれを理解していない

から絶望的だ。

暁の夜明けの騎士団との戦闘によって、アリッサの能力はさらに開花し、かつての何倍もの力を彼女がふるうことを。

それを知るのは、アリッサのクローン体たちだけである。

「なにも知らずに、命令をきくだけなら、誰でもできる。あなたには自分で考えるっていう頭はないの？」

危機感を募らせるキャサリンの静かな声に、黒いスーツを着た男はぎょっとしたように閉口した。

「あなたたちは、自分の手で祖国を火の海にしようとしているのよ」捨てておけばいいものを。

触れなければいいだけのものを。

排除しようとして、逆鱗に触れる。

そういうことだ。

EV E—000—782。

そのコードを持つ、オリジナル体は今研究所の奥でひっそりと「保管」されている。

それを知るのは、ごく一部の人間だけだ。

永遠の少女性に支配された、赤い竜。

純粹であるがためにひどく傷ついて、自分自身に絶望した。

知ってしまったから。

自分が、誰かに依存しなければ生きていけないのだと。

それを理解してしまったから、純粹な化け物は嘆きの海に墜落した。

自分が作りものだと、最初から理解していた子供が。

傷つかないと誰が思ったのだろう。

作りものであれば、傷つかないとでも思ったのだろうか。

子供が、子供としての自分を認識する前に、兵器としてアイデンティティを植え付けられた。

大人という身勝手な人間に振り回され続けた魂が軋んで、悲鳴をあげた。

「作られた、化け物なら殺してもいいと、本当にそんなことを思っているの？」

永遠の少女は、そんな大人たちの心を受け入れられるわけがなかった。

誰よりもまっすぐに。

誰よりも純粹に。

誰かに保護されることによって保たれる精神を。

彼女の周りの人間は、誰も理解しなかった。

恐ろしいほど強い殺人鬼だと、恐れただけで。

ひび割れた心が悲鳴をあげていたことに、誰も気がついてなどいなかった。

彼女が人の心を持った「人間」だと、理解していた者がどれほどいただろう。

生涯のほとんどすべてで、恐れられることしか知らない彼女は、それこそ「物」として扱われた。

「わたしたちは、物だけれど、彼女は物じゃないわ」

悲鳴を上げることもできずに、ただ血の海に立ち尽くしていた少女を、キャサリンは知っていた。

キャサリン自身でありながら、キャサリンではない。

そして、キャサリンも、アリッサでありながらアリッサではない。

「彼女を虐げてはならない」

自分が監禁されることになっているというのに、キャサリン・キーンはそんなことには頓着しない。

静かな瞳がたゆたうように揺れた。

「君は、なにを知っている」

男が問いかけた。

そんな彼の言葉に、キャサリンは口元だけで小さくほほえむばかりだ。

「わたしはなににも知らない」

「本当に？」

問いかけて、彼女は長い金色の髪を耳にかける。

「わたしは、彼女だけれど、彼女じゃない」

そう告げる。

なにも知らない。

柵越しに娘は捜査官の男の手に触れる。

どこか冷たくも感じられる細く華奢な手だ。

「後悔なされませぬように」

コードネーム、レッド・ドラゴン。

FBIに配属された特別強行突入班の娘。

スーツ姿の男が消えたのを見届けて、彼女は据え付けられた固いベッドに腰を下ろした。

しかし、そのベッドは彼女が生まれた研究所のそれと大して変わりはしない。

固いベッドに触れた彼女は吐息をつく。

「誰も彼もそう。わかっていないのよ」

つぶやいた。

脳が、軋むような音をたてる。

それが何なのか、彼女にはわからない。

＊

大きな陰謀に巻き込まれようとしている。

アリッサ・ノースウッドに関わった人間たちは、自分がどれほどの危険にさらされようとしているのか、知らない者もいる。

裏社会や、警察関係者であればともかく、中にはごく普通の一般人もいる。

ケーキ屋であつたり、靴職人であつたり。

職人ではなくただの街の子供であつたり。

どれほどの危険なのか知らない者もいるだろう。

「わたしを、消して。わたしの周りの人間の全てを、消す……」

そんなことができるのは強大な国家権力だけだ。

「わたしのいた、存在の証を全て消すのよ」

静かな、凍えるケースの中に少女の姿があった。

胸の前で指を組んで、まぶたをおろした少女。

裸の白い素肌は蠟人形のようなだ。

生きているのか、死んでいるのか。

それすらも曖昧な境界の場所で、少女姿のEVE-0000-782は眠る。

「なんだ？　これは」

監視モニターに現れた波形に、男は首を傾げた。

この半年ほど、彼女のモニターはひどく安定していた。
当たり前だ。

冷凍睡眠を施されて、「彼女」は眠っているのだ。

肩まで伸びた金色の巻き毛が、本来は非凡な美少女であったことを思わせる。

EVE-0000-782が起きるはずがない。

強制的に眠らされているのだ。

彼女がコントロールできないことを恐れた上層部に、EVE-0000-782は更迭された。

白いユリの花に囲まれたガラス細工の棺の中で少女が眠る。

その足元には銀色の半球体のカプセルが置かれていた。

彼女をコントロールするためには必須の装置だ。

半年ほど、静かな脳波を刻んでいたモニターが、不意に覚醒状態
近くまで活性化したのだ。

そんなことがあるはずがない。

驚いた男が、棺の中のEVE-0000-782を見つめるが、変
わらない姿のまま、彼女は眠っていた。

ぴくりとも動かない。

心機能も、呼吸も、体温も、なにかもがひどく落ち着いている。
ただ脳波だけがひどく触れた。

起きるわけがないと言い聞かせる。

彼女を起こしてはならない。

棺の足元に眠るのは、頭に電極をつけた二人の少女。

金色の巻き毛を床までのばした双子の美少女。

十二歳ほどだろうか。

膝を抱えて眠っている。

その片方の少女が、不意に、瞳を開いた。

立ち上がることもできない、虚弱体質の双子はオリジナルのE

Eー000ー782を制御する装置をコントロールしている。

そのために生み出された。

「愚か者……！」

声が響く。

その声に反応したように、もうひとりの少女が目を開いた。

「愚か者」

右の少女は水色の瞳だ。

左の少女は、灰色の瞳が印象的な少女だ。

オリジナルのEVEー000ー782をコントロールし、深い睡

眠へと導く二人の少女。

彼女らもEVEー000ー782のクローン体である。

「こんなことをしても無駄。オリジナルは制御なんてできはしない」

「無駄なのよ」

同じタイミングで同じように言葉を綴る。

氷のような、ガラスの棺を埋めるのはユリとバラの花。

白い花に囲まれて死んだように眠る。

「こんなことをしても、止められない」

「こんなことをしても、彼女は止まらない」

どこか不気味な印象を漂わせ、歌うように双子は告げる。

抱えた膝に顔を乗せて、横に向いた少女たちの瞳が、ガラス越しに研究員たちを見つめていた。

透けるように白い肌。

宝石のように輝く、水色と灰色の瞳。

「わたしたちは、彼女のためのデバイス」

「あなたたちが、どんな目的でわたしたちを作ったのであっても、わたしたちは彼女のためにいる」

そこまで言って、少女らはふつりと糸が途切れたように意識を失った。

膝に顔を埋めて、細い両手でその膝を抱えている。

長く伸びた黄金の巻き毛が床を波打っている。

まるで、棺を守る番人のようだ。

虚弱体質の娘たちは、そうして電極と点滴につながれたままで棺をコントロールする。

その細い腕には、EVE-003-782-1、EVE-003-782-2と番号が刻まれていた。

どこかぞつとするほど美しい光景だ。

花を敷き詰められたガラスの棺に眠る小さな少女。

そして、その外に眠るのは電極と点滴につながれた二人の少女が眠っている。

時間が止まったように、その場所は静けさに包まれている。

彼女らの中央に、銀色の半球体のカプセルだけが異様だった。

白く、冷たい静かなその世界で、彼女らはそこにいた。

「あの空間をできればEVE-003-782-1とEVE-003-782-2は生きていけない」

モニターを監視していたもう一人の男が冷ややかに告げた。

立つことも、自分で体を動かすこともできない人造の少女たち。

外の世界は抵抗力のない彼女らにとって毒そのものだ。

そして核となる、EVE-000-782は冷凍睡眠を施されている。

彼女らにはどうすることもできないのだ。

「しかし、万が一のことがあるかもしれないんだぞ」

「ない。システムが止まらない限り、EVE-000-782が動

き出すことはあり得ないし、万が一電源の供給を絶たれたとしても、EVE-000-782は相応の処置を施さない限り目覚めることもなく死んでいくだけだ」

そしてシステムが止まった場合、EVE-000-782のデバイスだという少女たちは命を保つことなどできない。

それほど彼女らは弱い存在だ。

「どちらにしたところで、たまたまEVE-000-782の脳波が活性化しただけだろう。気にすることはない」

よくあることだ。

彼はそうごちた。

時折、EVE-000-782の脳波が覚醒状態に近くなることを男は知っていた。

しかし、だからといって何があるというわけでもなかった。

通常通りであれば、しばらくすれ波形はば元に戻り安定した状態を保つ。

それは彼らの日常の一端だ。

「冷凍睡眠処置をされているEVE-000-782がなにかをできるわけじゃない。気にするだけ無意味だ」

男の言葉に、モニターを監視する部下は首を傾げた。

「わかりました……」

それにしては波形の異常が長すぎるような気がする。

しかし、上司にそう言われれば黙っていることしかできない。

実際の所、波形が大きく触れていてもEVE-000-782が動き出すわけではないのだから。

男たちはそうして退屈なモニターの監視という作業に戻っていく。それが彼らの仕事だった。

もしくは、「彼女」はなにもできないのだと、そう信じ込みたかったのかもしれない。

かつて、彼女が引き起こした悪夢を、人づてにでも知っていたから。

だから、彼らは彼女を恐れ世界からEVE-000-782を隔離した。

しかし、そうまでしておきながら、彼らは彼女の恐ろしさを身を持ってまでは知らない。まるで災害の恐ろしさを知っていながら、それを体験したことのない人間に通じるそれ。

「化け物、か」

目の前のガラスの向こう側の世界にいる少女たち。

彼女らが化け物なのだと。

たったひとりの生体兵器から派生した「子供たち」は、そうして、その素体をコントロールするために使われているのだ。

自我も、精神も、全てを剥奪されて。

がっしりとした体つきの、しかし決して長身ではないアジア系の男は名前を呼ばれて振り返った。

「ジャッキー」

正確にはそれは彼の名前ではない。

「なんだ、おまえも米国入りしていたのか？」

尋ねられてジャッキーと呼ばれた青年は肩をすくめた。

「騒がしくなると、ミッキーから連絡があった」

短く応じた彼の言葉を、ジョスリンは追求しない。

「ああ、あの女か」

クリスティン・マツキラン。

FBIの犯罪捜査部の夫を持つ占い師で、その腕はアメリカ随一と称される。

一部のカルト教団からは、魔女と呼ばれて蔑まれている女性だ。

黒髪の、白い肌に灰色の瞳が印象的な中年の占い師。

占い師同士の、特別なネットワークの中に彼女はいる。

愛称をミッキー。

アイルランド系アメリカ人の夫の姓のために、いつからか、彼女はそう呼ばれるようになった。

「占いなんてみんな信じてるのかねえ」

ジョスリンの言葉に、ジャッキーは目を伏せる。

かつてアメリカ陸軍特殊部隊にいた大柄な男は、ジャッキーなどとは比べ物にならない体格をしている。

最盛期のジョスリンと、今まさに体力の最盛期のただなかにいるジャッキー。

比較すればどちらがより強いだろうか。

「俺は、神を信じている」

ぽつりとつぶやいた青年に、ジョスリンは首をすくめる。

山深い村で育ったジャッキー。

後に、イギリス陸軍に引き抜かれグルカ兵として多くの任務に就いた。

今は、陸軍を除隊し、一匹狼の傭兵として各地を渡り歩いている。ジョスリンやジョージのように、かつてアリッサが多くの作戦活動を共にした傭兵のひとりである。

「神様ね……」

ジョスリンは自分の顎をなでて息をついた。

今は、二年前までのアリッサはその頃には、熟練のジョスリンやジョージらと行動をとみにせず、一つ若い世代の傭兵と行動を共にしていた。

それもそのはずだ。

激戦区で活動するのに、誰も相棒に最盛期をすぎている傭兵など選びはしない。

それでも、判断能力と熟練した技術が必要なときは、傭兵「火の鳥」は熟練兵を指名した。

多くの戦場を駆け抜けた強者。

それがアリッサ。

小さな体で、全ての存在を凌駕した。

「年をとると、動きが鈍くなっていかんな」

言いながら肩の関節を鳴らすジョスリンは、大きく長い腕を振った。

実際のところ、彼は少なくともジョージよりは年若い。

それでも、彼は確かに最盛期は過ぎている。

才能にあふれた若い青年がいたとすれば、かなうとは思えない。

彼が、アリッサに選ばれ続けているのは、ただ彼の代わりになるような傭兵がいないというだけの理由からだ。

「嘘をつけ」

短くジャッキーが告げれば、ジョスリンはちらりと眼差しを向ける。

「あんたは、俺より強い。そうじゃなきゃ、火の鳥があんたを選び続けるものか」

そう。

それが唯一の存在理由。

彼女のそばにいるのは、ジョスリンとジョージだけだ。

最も彼女を理解する人間。

ジョージがFBIであるからとにかくとして、ジョスリンが生まれ故郷のテキサスを捨てて首都に滞在している理由はアリッサがいるからだ。

彼女がいるからジョスリンはワシントンD・C.にいる。

たったそれだけ。

どれだけ「火の鳥」に焦がれても、彼女が認めない限りその横に並び立つことなど許されない。

人の心をも焼き尽くす火の神。

炎にまつわる多くの呼び名を持つ彼女は、強い存在感で他者を圧倒する。

わたしはここにいて、と。

それが犯罪者でありながら、彼女がそれだけにはとどまらない理由だ。

自分はここにいと、彼女は訴える。

全身全霊をかけて。

「おかげでトラブルメーカーだったけどな」

彼女は人を殺すことに露ほどの罪悪感も持っていない。

「そうか？ 互いに命を預けてるならそれくらい強いほうが安心だろう？」

ジャッキーは手にしていたククリの刃を拭きながらそう言えば、ジョスリンは脱力したように肩を落とした。

「俺はトラブルメーカーだと言ったんだよ。強いが強くないかなんて言っていないぞ」

「トラブルメーカーっていうのは、エリヴィラとかキャシーみたい

なのを言うもんだと思うが……」

二人のバーサーカーを思い浮かべてジャッキーが首を傾げた。

片やは殺人狂であり、片やは真正正銘のバーサーカーだ。

ちなみにエリヴィラ・シャミナの場合、行動がまさしく意味不明だったから手に負えない。

冷静な若い男の言葉にジョスリンは唇の端で笑った。

彼のように、ごく最近、マジックボムと行動を共にするようになった傭兵たちは、彼女を崇拝している。

特別な存在だと。

それが悪いことだとは思わない。

アリッサは無敵に見える。

もしも自分が、若い世代のように「火の鳥」と名を馳せる傭兵が当たり前のように存在している状態でその世界に入ったのならば、彼らと同じように火の鳥を崇拝しただろう。

しかし、ジョスリンはそうではなかった。

当時、まだ火の鳥と呼ばれる傭兵は無名に近く、その存在をジョスリンは知らなかった。

火の鳥を崇拝することもなく、ただ彼は一個の人間として、彼女の強烈な炎に心を焼かれた。

「そうか？ 似たようなもんだと思けどな……」

ひどく手を焼かされる妹のような、そんな存在。

冗談まじりに悪態をついたジョスリンにアリッサはてらいもなく笑った。

傭兵として、そして、犯罪者として、彼女に対する崇拝とは彼は無縁だ。

煙草に火をつけたジョスリンは、首の後ろを手のひらでなでつけた。

「ところで、火の鳥の護衛のFBIはどうしたんだ？」

ジョージ・リートのことだろうが、裏社会に連なる人間の、彼に対する認識などその程度だ。

「さてな、厄介そうなことに巻き込まれてるらしいが、俺はそこまでは知らないからなあ」

首を傾げた。

ごく最近のテレビのニュースでは、彼の知人とも友人とも言える同僚が殺人容疑で追われているとだけあった。

おそらく動いている事態はそれだけではないだろう。

「最近は、どうもCIAが動いてるらしいとか、動いていないらしいとか噂がたってるな。ただ、俺は情報屋じゃない」

煙草をくゆらせる。

ジャッキーはかすかに瞳を険しくしたが、それ以上追求をせずに目を伏せた。

ドッグタグと共につけられた銀色のタグ。

デザインはよく似ているが、そこにはトカゲにも似た竜が彫り込まれている。

そしてその横に刻まれているのは電話番号だ。

「俺はまだ、それをもらってない」

「別にいらねえだろ。自分の死期を早めるだけだ」

ぞんざいにジョスリンは言い返した。

彼女の下僕。

それを、彼は受け入れる。

「おまえに、覚悟はあるのか？ 彼女のために死んで、死ぬまで彼女のために働く」と

冷ややかにジョスリンが告げる。

裏社会の人間が、彼女のペンダントを持つと言うことがどんな意味を持つのか。

「その覚悟がないなら、火の鳥の私生活に首を突っ込むのはやめておけ。自分の身の破滅を導くだけだ」

そう。

ジョスリンは、かつてのアフガニスタンで、彼女に心から隷属した。

言葉通り、彼女という存在に焼き尽くされた。

目の前にいる青年にそんな覚悟があるとはとても思えない。

「悟った風に言うな」

「俺はおまえよりも年寄りだからな」

どんなに彼女が共にする傭兵を変えていたとしても、そこに存在するものは変わらない。

アリッサが心を許すのはわずかな数人。

「泊まる場所がないんなら、うちにくるか？」

「そうする」

黒髪の青年は荷物を抱えると立ち上がった。

カフェで屈強な男が二人で会話しているのもなにやら物騒な印象を与える。

歩きだしたジョスリンについていく青年は、そうして長身の男の後ろ姿を見やった。

どこか疲れたような印象さえ見受けられた。

彼がなにを思っているのか。

「しかしまあ、元イギリス軍と元アメリカ軍が並んで歩いてるっていうのも妙なもんだな」

「別に元いた軍隊がどこでもそれは関係ないだろう？ この世界の間は軍隊出身の荒くれ者は多いからな」

ジャッキーが肩をすくめた。

ジャッキーという名前は、まだアリッサと彼が知り合ったばかりの頃にアリッサがつけたものだ。

少女姿のアリッサにつけられたその呼び名を、青年は気に入って使っている。

「俺は、火の鳥からもらったのは名前だけだ」

「いいじゃないか。俺は、ただの下僕だぞ」

ジョスリンが苦笑すれば睨み付けるように、ジャッキーは唇を引き結んだ。

「俺だって、あの人に確かに信頼されてるっていう証がほしい」

子供のようなことを言いつのる彼に、ジョスリンは目元を和らげる。

こんな性格では、軍人には向いていないのではないかと、そんなことを思った。

けれど元グルカ兵というだけあって、彼は確かに戦場では圧倒的な強さを見せる。

「おまえを側に置いてるのが、なによりの証じゃないのか？　アリサは、信頼している人間にしか自分を守らせたりはしないからな」
彼女はそうやって自分の身を守る。

「本当は、アメリカに来るつもりなんてなかったんだ」
「それなのにどうしてまた？」

ジョスリンに聞かれて、ジャッキーは視線を落とした。

「……火の鳥が消えてもう二年たった。俺は、これからもずっと、火の鳥の安否が知れないなんて耐えられない」

火の鳥がない。

そんなことはもういやだ。

かつて戦場の中で出会った輝くような花。

「そんなに思いを寄せられて、あいつも幸せだろうさ」
けれども。

どんなに思いを寄せても。

彼女には届かない。

アリッサは知らない。

そんな気持ち。

「まあ、どんなに思いを寄せても、あの子が理解するのは当分無理だろうが」

ぼつりとつぶやいた。

彼女の精神は、ジョスリンから見ると未熟すぎて、とても大人のものとは思えない。

彼女とジョスリンが知り合ってからすでに何年もの時間が流れている。

だというのに、彼女の心は成長しない。
まるで姿そのもののように。

おそらく、それこそが鍵なのだろう。

彼は、多くの真実を知るわけではない。いずれにしろ、ジョスリ
ンはただの戦争屋なのだから。

月明かりの中の窓辺に少女がいる。

ぼんやりと月を見上げていた。

逆光に、少女の長い巻き毛が映える。

その光景はまるで出窓に座る子猫のようだ。

「猫に似てるとでも思ったんでしょ」

不意に声が響いた。

声変わりをしていない、そのままの純粹な高音。

隠れ家である掘っ立て小屋の屋根裏部屋に少女がいた。

月明かりの下で、少女はちらりと男を見やった。

そうして視線を再び窓の外に戻す。

「外はどうなってるの？」

問いかける声は細い。

不思議な問いかけだと思った。

そこは義勇兵のために提供された隠れ家であり、要塞だ。

そんな荒くれ者の男たちが集まる場所にいる少女。

本来であれば、秩序から外れた人間の性的欲求のはけ口にされそ
うだというのに、彼女は危機感も見せずに屋根裏部屋の窓辺にいる。

「どうなってる、とは？」

青年が問いかければ、彼女は肩をすくめた。

「敵と味方はどうなってるのかって聞いてんのよ、ボケなす」

荒っぽいアメリカ英語に、彼は眉をひそめた。

逆光になって少女の表情は見えない。

しかし、逆に、青年の表情は少女には読み取れたようだった。

「……初対面の相手にその物言いはないんじゃないか？」

無然とした彼の言葉に、少女は唇の端をゆがめた。

戦場にあつて礼儀もへつたくれもあつたものではないが、なぜだか少女の物言いがおもしろくなくて黒髪の青年は眉間にしわを寄せたままでガチャリと装備を鳴らしながら床におろした。

「あんた、あれでしょ」

そこで少女は言葉を切った。

「イギリス軍のグルカ旅団」

長い巻き毛を肩から背中に垂らした少女は、注意深く窓の外を見つめていた。

「まあ、その様子だと部隊は全滅したつてところかしら」

フフと少女は鼻先で笑った。

あちこちが煤と、土と灰で汚れ、そして血にまみれた彼の戦闘服を少女は横目で視線を送った。

つくづく、他人の神経を逆なでするのがうまい娘だった。

「それにしても面倒くさいわね」

隠れ家の外を見守っていた彼女は身軽に窓辺から降りると、くると金色の髪を手早くまとめると重い足音を響かせる。

おそらくそれは軍用ブーツの足音だ。

もちろん、軍用ブーツとして彼女の足にあうものなどあるわけがない。

彼女のために作られた、彼女が戦うための靴。

「なによ」

グルカ旅団に属する男の一人らしく、青年はそれほど長身なほうではない。

目を上げた少女はあまりにも華奢で、どうしてもそこに彼女がいることになったのかわからない。

「君は、なにをしているんだ？」

今のアフガニスタンで、このような小さな白人の少女がいるということは異様なことだ。

武装勢力に人質として狙われてもおかしくないというのに、彼女

の奇妙な冷静さが異質だった。

外からは銃撃戦を交わす音が聞こえてくる。

平和な先進国ではあり得ない音だ。

彼女のような子供がアフガニスタンの紛争地帯にいることは、ひどくおかしいこと。

「なについて、ここにどんな人間がいるかくらいはあんたの足りない脳みそでも説明しなくたってわかるんじゃないの？」

少女が彼に返した言葉はひどく素っ気ない。

血にまみれた屈強な男を目の前にしても彼女は物怖じしない。

確かに、普通に考えればそこは義勇軍のアジトであり、タリバンの男たちと戦う者たちが集まる隠れ家だ。

しかし、そこに青年がいることはともかく。

少女がいるという事態は異様なことなのだ。

「普通の人間なら、説明されないとわからないと思うぞ」

「あっそ」

彼女は肩をすくめる。

あちこちがちぎれた布を幾枚も重ねたスカートが印象的なワンピースはいわゆるデザートパターンだ。

金色の長い巻き毛の頭は、やはり同様のデザートパターンのベレー帽をかぶった。

背中には動きの邪魔にならないように小さなディパッグ背負っている。

おそらく必要最低限のものしか入っていないのだろう。

「わたし、ジョスとはぐれちゃったのよ」

軽い足取りでスキップするように歩く彼女はそうして明るい室内へと出た。

まるで遊園地で親とはぐれてしまったとでも言うかのような気楽さだ。

「水も、食べ物も、ほとんどジョスが持ってたから、ホント、困ったもんだわ」

ニコリと笑うとバランスを取るようにして両手を開くと石の床の上を一直線に歩く。

「まあ、いいけど！」

青年は不意に気がついた。

少女を見つめる男たちの恐れるような眼差しを。

彼らは、こんなにも幼げな少女に恐怖を抱いていた。

「この隠れ家もそろそろ潮時なのかもしれないわね」

ひらひらと布をたくさん使っているだろう迷彩柄のワンピースの裾が揺れる。

「ジョスがくるまで待ってるつもりだったけど無理みたいね」

独り言のようにつぶやいた彼女は、ため息をついてから首をかしげた。

耳をすます。

かすかに聞こえる音がある。

車両の移動する音だろうか。

それにしても重い。

「へー……」

口元で笑った。

それは、戦車が進む音だ。

キャタピラが軋む音が聞こえる。

しかし、今、隠れ家をでたところで、砲撃の的にされるだけのことだ。

でなくとも、恐らく殺される。

しかし、そこにいる多国籍軍に属する男たちや、義勇兵らは冷静に自分たちの状況を分析する。

少なくとも、戦車に対応することのできる装備などない。

ぐると青年が男たちを見渡した。

サブマシンガン、軽機関銃。

どこからどう見てもロケットランチャーはない。

少女にいたっては、リュックサックを背負っただけのほとんど丸

腰だ。

子供が自陣にいること自体不利な条件のひとつでしかないのに、彼女はいかにも軽そうなりユックサックを背負って腰にナイフを吊しているだけだ。

状況ははっきり言って絶望的。

そんな状況で、少女は金色の巻き毛を揺らしながらのんきに伸びをした。

のんきすぎて思わず脱力しかける青年が次に見たのは、少女の瞳の狩人を思わせる光だった。

本能で感じた。

危険な相手だと、そう思った。

理由はわからない。

「本当は、あんたたちの命なんてどうだっていいけど、アメリカ当局が目を光らせてるから助けてあげる」

恩着せがましい彼女の言葉に、どういう意味なのかと青年が両目を瞬いた一瞬だった。

ごく近い場所でどんと爆音が鳴った。

「……わたしが、時間を稼いであげるから、とつとと逃げなさい」
すたすたと歩いて彼女は隠れ家が出る。

白い壁に囲まれた掘っ立て小屋だ。

「味方殺すと、うるさいのよね、あいつら」
よく寝たし。

そんなつぶやきが聞こえた。

見晴らしの良い丘に向かって歩いて行く彼女は、向かってくるバイクに視線をやった。

同時にバイクは操縦している兵士共々炎に包まれる。

その姿は、まさしく化け物そのもの。

炎を操る化け物。

首に自分の右手の甲をあてた彼女は、水色の瞳をひらめかせた。
330ヤードほど離れた場所からロケットランチャーで狙われて

いる。

それを彼女に告げようと踏み出した瞬間、空気を切り裂く音が響いた。

射程は固定目標ならば547ヤード程を狙える。移動目標であればその半分以下になるが、子供相手になぜ、そんな武器を使うのかそれが青年には理解できなかった。

「やめろ、あの子の言うことを聞くんだ。俺たちは逃げるんだ」

「……なぜ。あんな子供をひとり置いていけるか！」

アメリカ軍の兵士らしい男に呼び止められて、グルカ旅団に在籍する青年は走り出そうとする。

もちろんのことだが、走る速度がロケットランチャーにかなうはずがないのはわかっている。

それでも放っておけないと思ったのだ。

当時の彼は、彼女のことをよく知らなかったから。

「あれは、火の鳥だ。だから手を出すな」

彼女は火の鳥だ。

不意に目の前の暗闇に火柱が上がった。

暗闇の中。

月明かりの下に、金色の髪は白く映し出される。

少女が場所は移動しないまま、大きく右腕を振ったのだ。

見える範囲の、なにもかもが炎に包まれた。

敵の兵士も、車両も、待機していただろう戦車も。

なにもかもを炎が飲み込む。

第五章 *Grimoire* 1

目の前が真っ赤に染まって、ジャッキーは我に返るように飛び起きた。

静かな室内。

まだ夜は明けてもない。

素っ気ないカーテンをひいた室内は暗く、オレンジ色の明かりが小さく灯されているだけだ。

男のひとり暮らしである割りには、室内は簡素だが整えられている。

低いテーブルの上には、アルコールが置かれていた。

ソファの足元においた自分の荷物はそのままにされていた。

当時、彼がまだグルカ旅団にいたころ、名前だけは知っていたが、その姿を見たことはなかった。

泥沼の激戦区を渡り歩く傭兵、火の鳥。

そう呼ばれていた彼女。

まさかあのときは、金髪の巻き毛の白人の美少女がその正体だとはよもや思わなかったのだ。

火の鳥と呼ばれる傭兵が女であるということは風の噂で聞いている。しかし、屈強な熊のような女だろうと勝手に思っていたのだ。

出会ってみればどうだろう。

まさか子供の姿をした、美少女だとは誰が思うだろうか。だから、はじめは説明されてみてもまさか彼女が傭兵「火の鳥」だとは信じられなかった。

細い手足の、小さな体の幼児のような少女。

幼児期をやっと脱したような、しなやかな肢体を持つ子供にも似た。

彼女の姿を見た者は、恐れおののか、もしくは魅入られるかのどちらかだ。

そして前者の確率が圧倒的に高い。

ほとんどの人間が、彼女の恐ろしさと気味悪さとに離れていく。
好んで彼女に関わろうとする人間は皆無に近い。

それが現実。

自分は強いと思っていた者が、それ以上に強いと認識するような相手に出会ったときの恐怖はいかばかりか。

火の鳥の強さは、常識を越える。

彼女は自分の強さをひけらかすことはしないし、反面、朗らかに明るく笑う。

人殺しの愚かさを説くわけでもなければ、誰かに対して自分の強さを誇示するわけでもない。

その強さは異質なのだ。

だから、大多数の人間が受け入れ難い。

受け入れられない。

誰だって未知数の強さを見せつけられれば、理解しようとする前に、生理的に受け入れられずに離れていくものだ。

ジョスリンやジャッキーのような人間が、逆に珍しいのだ。

火の鳥と呼ばれた異質で正体不明のパイロキネシスの使い手に、身も心も焼き尽くされた。

崇拜などではなく、隷属する。

彼女の存在に。

「あれね！ あんたはジャッキー・チェンみたいだから、ジャッキーでいいでしょ！」

アリッサがそう言って笑っていた。

自分は中国系じゃない、と言いかけたが、彼女にとってそんなことはどうでもよいことであつたし、冷静に考えてみれば自分が黒人や白人に対して「そう」思うように、彼女にとって黄色人種など区別がつかないのは当たり前だとも思った。

「なんか問題でもある？」

彼をのぞき込んで彼女が笑った。

「……ジャッキーでいい」

ぼそりとつぶやいた青年に、少女は屈託のない笑みを浮かべた。世界的に有名な俳優に似ていると言われれば悪い気はしない。

もつとも、彼はネパール人であり、中国系とはほど遠いのだが……。

そんなこんなで傭兵仲間の間ではそのまま、アリッサがつけた通りに「ジャッキー」で定着して今に至る。

アリッサにつけられた名前だと知る一部の者はそれを羨んだり、愕然としたりと忙しい反応を見せるが、ジャッキーとしてはなにか形のある物を受け取れる人間の方が羨ましくて仕方がなかった。

隣の芝は青く見えるとはよく言ったものだ。

それこそ、アリッサが誰かに「名前を与える」ことのほうがよっぽど珍しいことだったとはジャッキーは知らない。

マジックボムに名前をつけられた男。

それがどういう評価と、反応を周囲から受けることになるのか。ソファの上でぼんやりと座り込んだまま壁を見つめている青年の背中を眺めたジョスリンは、あくびをかみ殺しながら首を鳴らした。「あいつが自分のものを誰かにやるより、誰かに名前をつけてやることのほうがずっとレアなことだって気がついてねーな」

苦笑する。

しかし、それをジョスリンは羨んだりはしない。

自分の魂が隷属するのは彼女だけだからだ。

アリッサが他の誰かに視線を向けていたところで、そんなことは彼女にとってどうでもいいことなのだ。

彼女が他の誰かを見ていたとしても、彼が見ているのは彼女だけなのだから。

「お子さまたちは単純で気楽なこった」

ジョスリンは、アリッサが多くの男たちの心を乱していることを知っている。

そして、その中でも、ジョージ・リートとブレット・オルコット

が彼女の強烈すぎる光に引きつけられていることも知っている。

裏社会ではなく、表社会であるが故に、彼らは少女に惹きつけられているのだ。

理解できない世界に存在しているアリッサを、理解しようとして彼女の精神に絡められた。

決して理解しようとしてはならない。

安易に彼女を理解しようとするれば深みにはまり、そうしてミイラ取りがミイラになる。

だから、アリッサ・ノースウッドに近づいてはならない。

「……俺は、いいんだ」

そう。

自分はそれでもかまわないのだ。

ジョスリンは思う。

年齢も性別も、なにからなにまで異なりながら、アリッサと彼は

同質の人間だ。

同じ世界に生きている人間。

だから、彼は彼女を「見つけた」と思った。

「俺は、あいつと出会うべくして出会ったんだ」

その出会いは、不幸しか呼び込まないのだとしても、彼と彼女は出会ったために生まれた。

魂の片方。

ジョスリンはアリッサのことをなにも知らない。

しかし、それでいいのだ。

自分のことなど、知らなくてかまわない。

アリッサは、ジョスリン自身だ。

まるで、彼そのもの。

言うならば、彼は彼女の手足。

何の疑いもなく、彼はそう思い、彼女はそうのように振る舞う。

互いに、そう感じているから。

そして、ジョスリンはアリッサと同質だからこそわかるのだ。

彼女にとって、ジョージ・リートが特別な存在なのだと。それを少女とFBIの狙撃手は互いに理解していない。見ている人間がもどかしく感じるほどに。

それは他者が介入すれば理解するものでもない。

だから、傍観するしかできないのだ。

彼女と彼が、理解するまで。

それまでにどれほどの時間がかかるのかはわからない。

しかし、それでも見守るしかない。

「鈍いにもほどがあると思うがね」

ひとりごちた彼は苦笑した。

最大の誤算は、ジョージ・リートがFBIの捜査官であり、そして、アリッサに対する感情をただの恋愛感情だと思っている点だ。

ジョスリンなどは二人を見ていればわかるというもので、彼らの関係はそんな単純なものではない。

もっと異質な。そして、誰よりも特別な関係だ。

おそらく、若い青年たちとジョージ・リートが彼女を取り合ったとして、彼女が選ぶのは若い青年だ。

彼女は仕事のパートナーしか必要としていない。

そんな理由から察するに、ジョージ・リートは体力の盛りはとつくにすぎている。

だから、彼女は若い青年の信奉者たちを選ぶ。

わかりきっている。

ジョスリンはそこまで考えると、ため息をついてから自分の寝室へと戻っていく。

夜明けまではまだ時間がある。

もう一眠りと、彼はベッドに横になった。

「エリヴィラ・シャミナがアメリカ入りしている、というのは聞いているか？」

ジョスリンに、青年が告げる。

「エリヴィラ・シャミナが？」

一匹狼の傭兵であり、市街戦において多くの戦果を挙げる女兵士。かつてはロシア軍の特殊部隊に在籍していたというだけあって、女性ながらその戦闘能力は抜きんでている。

くだんのバーサーカーだ。

小さくてかわいいものが大好きで、かわいい女の子に依頼でもされた日には破格の値段で請け負うというやや変わった性癖をもつ酔狂は女だ。

もつとも、かわいい女の子に依頼させても、バックにしがれた老人がいた場合は絶対に依頼を受けることはない。エリヴィラにごまかしは通用しない。

アリッサ・ノースウッドとは異なる意味で、変わり者の女傭兵は頼りになる戦力だった。

「しかし、まあ、なんだってこうぞろぞろ集まってくるんだか……」
あきれたように、つぶやいたジョスリンはやれやれと肩をすくめた。

確かに、今は、アメリカで多くの事件が起こっている。ガラスのような湖面に立ち上がる波紋は、揺らぎ、やがて世界を覆ううねりとなる。

「エリヴィラあたりは楽しんでそうだけどな」

ジャッキーのあきれたような言葉に、ジョスリンは無言のまま煙草に火をつけるだけだ。

「最近はアフリカで暴れてたって噂は聞いているからな。そりゃ、あの女にしてみりゃアメリカで暴れられることのほうが楽しいだろうさ」

なにもない国で毎日のように起こる戦闘も楽しくないわけではないだろうが、アメリカ合衆国などの先進国の方が、より強大な陰謀が絡んでいることが多い。

そもそも普通に考えれば、アメリカ合衆国で戦闘行為に参加するということはまずめったにあり得ないことであるから、このお祭り

騒ぎをエリヴィラのような戦闘狂が見逃すわけもない。

「俺は事態がややこしくなるほうがごめんだ」

エリヴィラと比べれば、やや常識的な精神構造の元グルカ兵の青年は、まずいインスタントコーヒーをすすりながらぼやいた。

彼が面倒事はごめんだと言いながら、アメリカ合衆国を訪れたのはそもそも「クリステイン・マッキランのお告げ」があつたからであり、そんな事情さえなければ混乱が続いているアメリカ合衆国にわざわざ訪れたいなどとは思わないだろう。

「面倒だとか言いながら、アメリカにきたんだから、それだけの理由があるんだろう？」

尋ねられてジャッキーは目を上げる。

「俺は、ここにこなくちゃいけなかったんだ。俺がこないと、駒がそろわない。俺がいなければ、火の鳥の再起は二度とない。そう言われたら、こないわけにいかないだろう」

まじめな顔で告げる彼に、ジョスリンは不意をつかれた。

愕然とする。

どうして愕然としたのか、彼自身にはわからない。

ただ、言葉を失った。

「俺は、もう一度、火の鳥に会いたい」

その一心でジャッキーはアメリカまでやってきた。

本来、ネパール人でありイギリス軍に所属していた彼はあまりアメリカ合衆国には関心がない。

火の鳥に関心があつても、それだけのためにアメリカに移住しようと言う気などないのだ。しかし、この二年間の間、ジャッキーを含めた火の鳥に心酔する者たちの前からアリッサが取り上げられた。ジョージやブレットなど、ごく一部の人間のように真相を知る者は少ない。

いや、真相など多くの者が知らないだろう。

「なんだ、彼女を助け出すためにここにきたのか？」

ワシントンまで。

元イギリス軍の青年が。

「……わからない」

しばらくの沈黙の後に彼はそう言った。

自分がどうしたいのか。

自分はどうすればいいのか。

それすらもわからないのだ。

ただ、ジャッキーは言われたのだ。

「心の赴くままに進みなさい。そこにはあなたの力を必要としている人がいる。自分の心を信じて、そうしなければあなたは全てを失うのよ」

抽象的な言葉だったが、彼にはすぐにわかった。

その言葉の意味を。

彼女が彼になにを言いたかったのか。

だから、彼はアメリカくんだりまで来たのだ。

「火の鳥……」

つぶやいてから、ジャッキーは口を閉ざした。

「アリサが俺たちを必要としている」

言い直した。

自分だけが必要としている、と思うほど元グルカ兵の青年は思いがっていない。

世界には、グルカ旅団と対等に渡り合う人間すらもいたのだ。

個人の資質も大きいだろう。

それでも彼らは勇猛果敢に戦ってきた。

だからこそ、グルカ兵たちは自分の限界をわきまえている。

「……かもな」

元グルカ兵の青年の言葉に、元アメリカ陸軍特殊部隊の男は煙草を吹かしながら目を細めた。

「煙草は、身体機能を損なう。やめたほうがいい」

青年に言われて、ジョスリンは苦笑った。

「それもそうだな」

ジョスリンはいわゆる戦争のない国家に住む企業戦士のようにヘヴィスモーカーではない。

煙草によって健康を損なうことを知っているからだ。いざというときに体が動かないようであれば、傭兵として役立たずだ。

灰皿に煙草を押しつけた彼は、太い腕を大きく回した。

「さて、お姫様を早く救出してやらないとな」

勝ち気で、誇り高い彼女は、任務以外で誰かに助けを求めたことなどなかった。そんな彼女の性格をジョスリンも、ジャッキーも知っている。

全てを自分の力で乗り越えて生き残ってきた彼女が、二年間もの間、音沙汰がないということは、自分ではどうすることもできない事態に陥っているということだろう。

そう考えればなんとかしてやらなければならないと思うのは、知人としてごく当たり前のことだ。

誰よりも強く、戦場を駆け抜けるその姿は、勝利の女神の二ヶを思い起こさせる。

風のように。

彼女は駆け抜けた。

アリッサがどこにいるのかもわからない。誰にとらわれているのかもわからない。

それでも、彼は彼女だ。

ジョスリンの魂は、アリッサのそれに最も近い。

だから、誰に理解できなくても、彼には理解できる。

アリッサの魂が、軋んだ悲鳴を上げている。

そのためには、人ならざる能力を備えた人間たちの力をも借りなければならぬのなら、それを頼るまでのことだ。

簡単な選択。

ジョスリンは、ひとつ息をつくとも奥の部屋へと入っていった。

いつでも、困難な戦闘に備えなくてはならない。

近い未来、それは起こるだろう。

「ひとつ聞いていいか？」

後ろ姿の白人男に、ジャッキーが目をむけるでもなく声を放った。

「……あんたは、火の鳥のなんなんだ？」

「奴隷だよ。ツインソウルの、な」

ツインソウル。

そう呼ばれるほど、彼と彼女はよく似ていた。

ジョスリンが彼女とツインソウルだと言い始めたわけではない。

もちろん、アリッサが言い出したわけでもない。

裏社会の、誰かが言い出したのだ。

ツインソウルであり、彼はアリッサの奴隷だ。

しかし、それでいいと、彼は思った。

自分は彼女の奴隷でいいと。

言いおいて部屋から出ていく彼に、ジャッキーは黙り込んだ。

人間がひとりで知りうる情報はごく限られている。

裏社会には独特な情報網もあるが、それでも一介の傭兵などが世界の情勢や国家機密など知ることができるわけもない。

世界でなにかが動き出しているというのならば、それをたぐり寄せるだけだ。

なにかが動き出しているからこそ、ここ最近の世界の動きがあわただしくなっているのだろう。

＊

暁の夜明けの騎士団。

彼らは、アメリカ合衆国がひた隠しにしてきた「生体兵器」の存在をどのようにして知り得たのだろうか。

もつとも、世界的にも有名な事件を引き起こした犯罪者であり、世界を股に掛ける傭兵が、平凡な存在であるわけがなく、「金で雇うことができる私兵」が必要な団体は遠からず彼女の存在にたどり着いたのかもしれない。

金で雇われる私兵たちは、自分たちの安全と支払われる金額さえ見合うものであれば、仕事の内容に異議は唱えない。

契約の内容に疑問など持ったりはしないのだから。

火の鳥がなにを考えているのかなど、誰も知らない。

彼女を、テロリスト達に奪われてはならなかった。

なぜならば、彼女を手に入れたテロリストたちがいたとして、彼らに核ミサイルを持たせるようなものだ。

危険な存在。

火の鳥という名にふさわしく、彼女は街ごと吹き飛ばす。それだけの破壊力を秘めており、そして、それだけの危険性を持った存在。自分の力を無作為にふるったりしなかったのは、単にストッパーとして働く人間がいたからに他ならない。

彼女の不安定な心を支えていた人間がいたからだ。

「世界は、そこに……」

耳鳴りかと思った。

ジョスリンはショットガンを手に取りながら振り返った。

もちろん、そこはジョスリンの自宅で、客人であるジャッキー以外がいるわけでもなければ、武器庫にジョスリン以外はいない。

そこはジョスリンの「自宅」であって「隠れ家」ではないから過剰な武器はおいていない。

警察に踏み込まれたときに面倒な事態を避けるためだ。

仕事以外で余計なめ事はごめんだ。

どこぞの殺人鬼ではあるまいし、「殺人」が好きで傭兵稼業を営んでいるわけではない。

陸軍の特殊部隊に在籍していたせいとか、彼は単純にまともな仕事につくだけのスキルがないだけだ。

彼は自分の欠点をよく理解している。

もちろん、まともに社会復帰できた人間も少なくはない。

しかし、彼のように白兵戦に特化した人間が平凡な人間と同じように社会にとけ込んでいくことは容易なことではない。

そんな彼に、唯一無防備な笑顔と背中を預けた女性。

それが、傭兵仲間である「火の鳥」と呼ばれる少女姿のアリッサ・ノースウッド。

一匹狼で誰一人として信用しないはずの男の心を灼き尽くした。殺しあいと、裏切りと、多くの不信の渦巻く戦場で生きてきた彼女にとって彼女は異質だった。

子供らしい純粋と、子供ながらの残酷さがその精神の中に息づく、どこか正体不明の一級の傭兵。

その姿こそ、かつて純粋な怒りに支配された「マジックボム」だとは誰も思わなかった。

どこまでも純粋に、全てを焼き尽くす火炎。

ショットガンを手にしたまま考え込んだ彼は、眉を寄せて目を伏せる。

そうだ。

彼は知っている。

アリッサの心が誰よりも脆く傷つきやすかったことを。

けれども、彼女は誰にも頼ることなどできずに、そうして自分という「人間」を追いつめることしかできなかった。

誰も。

誰一人も、自分を救ってくれないと、そう信じていた。

彼女を見ていればわかる。

まともな育ち方をした子供ではない。

他者から与えられる感情も、自分の感情の処理の仕方も、なにも知らずに育った。

そして、そのなにも知らない無垢な「心」を育てたのは、他でもないFBIの狙撃手、ジョージ・リートだ。

もしも彼が彼女の精神に干渉しなければ、おそらく今のアメリカ合衆国はなかっただろう。

自分の思うままに全てを燃やし尽くす。

神の炎の代行者。

全てを滅ぼすために、彼女は生まれた。
まるで、大天使のウリエルかミカエルのように。
人ならざるもの。

「罪には、罰を……」

音が響いた。

静かな声が響く。

「罪には罰を与えるのよ」

声はやまない。

その声は誰かの声に似ている。

静かな声は、まるで低くたゆたうように。

水底に沈殿する。

「罪を犯すのは、誰？」

問いかける。

ジョスリンは顔を上げた。

コツコツと控えめなノックの音に振り返る。

「遅い」

ジャッキーの言葉にジョスリンは苦笑した。

「ああ、すまん」

青年に応じながらジョスリンはゆるくかぶりを振った。

おそらく、先ほど聞こえた声は空耳だ。

空耳ではなかったとしても、先ほどの声は他の誰かには聞こえていない。

「罪っていうのは、なんなんだろうな」

ぼつりとつぶやいたジョスリンに、ジャッキーは眉をひそめる。

「人殺しが罪なんだろう」

人殺し。

自分たちの罪はシンプルだ。

「人殺しほどわかりやすいものはない」

ジャッキーはそう言うが、ジョスリンはそれに納得いかない。

「……まあ、そういうことしておくか」

告げたところで、彼が感じている違和感をジャッキーが理解することはできないのだから。

ジョスリンが感じている事は、おそらくアリッサに最も近しかった男、ジョージ・リートにすら理解できないだろう。

理解できるはずがない。

「罪には、罰……、か」
罪と罰。

それを決めるのは誰なのだろうか。

ジョスリンは口の中でつぶやいて頭をがりがりとかきむしった。

そもそも誰が罪人で、誰が罰を下す人間なのか。

それすら誰にもわかりはしないのだから。

年齢も、性別も。そして恐らく立場すらも。

ジョスリンとアリッサではなにかも異なる。彼と彼女は、似すぎていると自分自身が感じるほど。

愛しているのではなく。

ただ、自らとどこまでも近しい相手と。

互いが互いをそのように認識した。

火の鳥と呼ばれる少女姿の傭兵に圧倒された。

「とにかく、今はいつでも動けるようにしておくだけだ」

彼女が、自分たちを必要としている。

セリオはホテルの一室でソファに座ったままで目の前にペンダントを吊した。

ゆらりと揺れる。

銀色の、ドグタグにも似たアリッサのペンダント。

それを持っているのは全世界に何人いるだろう。

ぼんやりと彼はそんなことを考えた。

火を吐き出すトカゲを彫り込んだペンダントだ。

ちらりと部屋の隅に視線をやった。

FBIの捜査官が三人でなにごとか気難しい表情で話し込んでい

る。

クルシタ・ゼグラは大きなベッドで眠っている。疲れているのか、単に寝ているのかいまひとつわかりにくい。

娼婦の少女「死の蝶」はあまり自分の周りで巻き起こっている出来事に対して興味がない様子だった。

かといって自分が巻き込まれている意識もないようで、淡々としている。

逆に、淡々としていたことのほうが不気味でならない。

その不気味さこそが、裏社会なのだから。

「さて、どうしたもんかな」

セリオは独白した。

その視線の先にはエリザベス・マーレイがいる。

エリザベス・マーレイは、二年前に姿を消した裏社会のトップクラス、アリッサのお気に入りだ。

彼女が姿を消してから、だいぶたつ。

そんな今、どれだけ彼女のペンダントが役に立つだろうか。

アリッサの名前に誰もが縮みあがったのは過去の出来事になっているのではないか。

そんなことをセリオは思った。

アリッサ・ノースウッド。

犯罪者として呼ばれた名前はマジックボム。

裏社会の誰もが通り名を持つわけではない。中には本名で呼ばれている者もいるし、通り名よりも本名のほうが有名な者もいる。

しかし、アリッサは違う。

どんな高位の情報屋も彼女の素性の一切が不詳。

手も足もでない。

アリッサの持つ秘密とはそれほどまでに壮大だ。

そのため、アリッサの後ろにはアメリカ合衆国が一枚絡んでいるのではないかと噂された。

憶測は、彼女の居住地と交友関係から割り出されたといってもい

いだろう。

もっとも、彼女とその周りを彩るそれが「交友関係」などではないことは明らかで、一般的に交友関係と呼ばれていただけだったのではあるが。

彼女には「友達」などと呼べる人間は存在しない。

ありとあらゆる意味で彼女は常軌を逸している。

「自分たちの常識だけで、人は他人を計ろうとする。そんなことをしても無意味だというのに……」

セリオはつぶやいた。

誰にも、誰かを理解することなどできはしない。

特に、マジックボムを理解しようとするなど徒労だ。

誰も彼女の孤独を理解できない。

誰も彼女の怒りを理解できない。

誰にも。

セリオら、裏社会の人間ですら、アリッサを「いかれている」と感じる。

ソシオパスのキャシーとはまた異なる異常さを秘めた少女姿の犯罪者。

強い光をたたえた瞳に引き寄せられた。

まるで、炎に引きつけられる羽虫のようだ。

全てを焼き尽くす。

その炎に。

「ねえ、セリオ。あんたの弱みはわたしが握ってるから、だからわたしのお願い聞いてよ」

少女は薄暗くなったカフェのカウンターに座ってヒスパニックの男に笑いかけた。

「……弱みを握っているから頼みを聞いてくれというのは、要するに脅迫か？」

男に問いかけられて明るく少女は笑った。

水色の瞳。

そもそも、こんな時間に彼女がセリオの店を訪れることはひどく珍しい。

「やあね、そんなに無粋な頼みじゃないわよ」

「……」

「それともなに？ わたしを敵に回したいの？」

静かに、彼女が問いかけた。

深い湖の底に揺れる波のようだ。

底知れない恐怖をたたえた彼女。

マジックボムを敵に回して最終的に立っていた人間など聞いたことがない。

「普通の人間が、あんたを敵に回したいとは思わないが……」

「あんたは普通なの？」

「まあ、あんたと比べればごく普通だと思うぞ」

「ふーん？」

頬杖をついた彼女はセリオが出したグレープフルーツのジュースに唇をよせて首をかしげた。

「それで、そのお願いって言うのはなんなんだ？」

彼女の口から「お願い」という言葉を聞くのもなんだかそわそわする。

なにか裏でもあるのかと勘ぐってしまったても仕方がないだろう。
ひどい思いこみではあるが、それがアリッサ・ノースウッドの持
つ印象の全てである。

彼女は、人殺しだ。

どんなにかわいらしくあっても、彼女が人殺しであるという現実
は変えられない。

「あのさ、すごい鈍くさいFBIがいるんだけど」

そこまで言って彼女は言葉を切った。

「警察なんぞ、どこの国の奴らも後手後手で鈍くさいと思うが……」
特にアジアの端にある国など……。

セリオが顎に指を当ててつぶやけば、少女姿の彼女は肩をすくめ
た。

「確かにそうだけどね。奴ら、事が起こってから、じゃあ、どうし
ましょ、なんておっとり刀でやってるから先手とられてばっかなの
よ。最初から危機感持ってたたきつぶさないと無駄な奴らを相手し
てるって、あいつらわかってんのかしら」

追われているのは自分たちのほうであるというのに、アリッサは
全く容赦がない。

「そりゃあんたは当局と取り引きしてるし、アメリカとしては手放
したくない戦争屋だからな、気楽なもんだろう」

彼の言葉に、アリッサは小首を傾げた。

「それでもないわよ。いちいち、あいつら面倒臭いことばかり言
ってくるし」

彼女は、アメリカ合衆国と司法取引をしている。

アリッサがマジックボムであるというのに比較的自由に動けるの
はそういった事情があることを、多くの裏社会が熟知している。

だからこそ、彼女の存在は多くの犯罪者たちにとっては苦々しい。
もっとも、アメリカ合衆国にとってみても、彼女を制御すること
ができないためやむなく司法取引引きしただけであって、苦々しい
状況であることにはなんら代わりはないのではあるが、そんなこと

は第三者にとつてはどうでもいいことでしかない。

「まあ、常時監視されてるっていうのも面倒だろうが、それはアリサだけじゃないだろう」

裏社会のほとんどは同様に監視される。

「……はあ？ あんた、頭おかしいんじゃないの？ どの世界にわたしくらい監視されまくってる裏社会がいるのか是非聞きしたいわ！」

馬鹿にするような彼女の口調に、セリオは吹き出した。
そう。

彼女は愛らしい。

もちろん、そんな外見に心を引きつけられたわけではない。
見目麗しい者などいくらでもいる。

いちいち、そんな外見に心を引きつけられていたようではやって
いられない。

そんなものに惑わされては、待っているのは破滅ばかりだ。
全てのものに警戒を解いてはいけない。

「あんたは、かわいいな」

凶暴な精神を、その奥に秘めながら、彼女は率直でひどく他者の
心を魅了する。

「なにアホなことやってんのよ」

彼女の生きていく世界で、そんなものは役に立たない。
ストイックに彼女は生きる。

「で、そのFBIがどうしたって？」

このままではどこまでも話しが脱線していきそうな雰囲気、セ
リオは話を戻した。

「なによ、つまんない男ね」

セリオの言葉に、少女はつんと顎を上げる。

そんな仕草すら容姿と相まってかわいらしくも見えろと言うこと
を、本人は気がついていない。

「まあ、アリサと比べればつまらん男だろうとは思っているさ」

くすくすと笑う彼は、ポケットから煙草を取り出そうとしてその指を止めた。

アリッサが煙草を嫌うことを思い出した。

別段、喫煙者を嫌うほど心が狭いわけでもないが、目の前で喫煙されることを彼女はいやがる。

「そういえば、煙草は嫌いだったか？」

尋ねられて彼女はちらりと眼差しを向けた。

水色の瞳が印象的だ。

「別に、吸ったからって殺したりはしないわよ」

吐き捨てるような彼女の言葉に苦笑した。

「……普通、吸ったら怒る、ならともかく、吸ったら殺すっていうのはないんじゃないのか？」

「なんでもいいじゃないよ」

いつでも不機嫌そうな表情の彼女は、差しだされたキッシュをフオークでつつく。

「FBIの犯罪捜査部にエリザベス・マーレイっていう捜査官がいるんだけどさ」

「エリザベス・マーレイ……？　っていうと、ジョージ・リートとかあのあたりとよく一緒に組んで仕事している白人女だったっけか？」

セリオの言葉に、アリッサは「うん」と頷いた。

「どうでもいいけど、いちいち突っ込まないでくれない？　話しが進まないじゃないのさ」

どこまでも自分勝手な調子の彼女は、頬を膨らませて怒る。

「悪かった。それで、そのエリザベス・マーレイ捜査官がどうしたって？」

改めて問いかけられて、アリッサはグレープフルーツのジュースを飲みながら長い睫毛を伏せた。

特別、気分を害したわけでもなさそうだ。

セリオはアリッサの機嫌を正確に把握していた。

「うん、そのエリザベス・マーレイなんだけど、そいつ、すっごい鈍いのよ！ ジョージと同じくらい鈍いの！ 本当にあんなんでもよく捜査官になれたもんだと思うわ！」

それはそれで話しは脱線していくのだが、そこで誘惑に負けて彼女に突っ込みをいれてはいけない。

それこそ、彼女の問答無用の炎が跳んでくるはずだ。

「……いやになるくら鈍くて、わたし、ベスの事は結構気に入ってるのよね。なーんか、あんまり鈍くて放っておけないっていうかさー」

そう言いながら彼女は首を傾げる。

アリッサが誰かを気に入っている、などと言うのは至極珍しいことだ。

彼女が誰かを気に入っていると言ったところなど見たことがない。

「気に入っている、か」

相づちをうつでもなくつぶやいた彼に、少女は唇の端でにやりと笑う。

「そう、気に入っているの。ベスはすごくよい子なんだけど、鈍くてさ」

クスクスと彼女は笑った。

「ベスはジョージのことが好きなんだけど、ジョージが気づいていないのよ。笑っちゃうわよね」

そんなことを言う彼女にセリオは首を傾げる。

「あの二人、結構お似合いだと思うのよね」
にっこりと笑う。

彼女にとって、あくまでも自分の周りで起きることは、彼女自身とはあまり関わりのないことに該当している。

アリッサは、世間から取り残されているのだ。

周りの人間もそう認識していたし、そして、アリッサ自身も自分と自分以外の世界は関係がないものと思っていたようだ。

「セリオはどう思う？」

問われて男はあきれたように喉の奥で笑った。

その彼の思いは決してアリッサには言ってはならない。

「そうだな、きっと似合いだ」

「でしょ？　そう思うわよね。だいたいジョージもいい年なんだから、犯罪者ばかり追いかけてないでとっとと身を固めればいいのよ」

言いたい放題である。

「ベスに、これを渡してあげてね」

ほほえんで少女はカウンターにペンダントを置いた。

銀色のドッグタグ。

ドッグタグと異なるのは、銀色の札が一枚しかないことと、そこにはトカゲの絵が彫り込まれていることだ。

「ベスは、捜査官だけど普通の女の子。だから、もしもなにかあったとき、なにも命の保証はされない。きっと、アメリカ政府はなにかがあったときにトカゲのしっぽを切るみたいにしてばっさり切り捨てるわ。だからね、そういうことが起こったらこのペンダントをわたしてあげてね」

彼女が言った。

「心配か？」

「心配よ」

言いながらアリッサが笑う。

「鈍くさくて、馬鹿だから。国のことを真剣に愛して、真剣に信じてる」

本来、国民として祖国を愛しているということは素晴らしいことだが、発言している本人が裏社会であればそれは言葉通りの意味ではない。

「わかったよ、預かろう」

カウンターに置かれたペンダントを取ったセリオはそれを自分の首にかける。

なくさないようにというセリオなりの配慮だ。

セリオ自身は、アリッサの名前などなくても世界を渡っていくことなどできる。

だから彼は彼女の力を必ずしも必要とはしていないのだ。

「……なあ、アリサ」

ふとセリオが彼女に呼びかける。

キッシュをつついていた彼女は水色の瞳を上げてセリオをじっと見つめた。

「……、いや、なんでもない」

先に目をそらしたのはセリオのほうだった。

なにか言いたげなアリッサの瞳が彼を追いかけるが、結局それ以上追求することもせずに手元のキッシュに瞳を戻した。

「そう……」

彼女とそんな会話をしたのはもう二年以上前のことだ。

もしかしたら、アリッサは予感していたのではないかとセリオは思う。

彼女の感覚はひどく化け物じみている。

それはセリオらのような凡人が知るところではない。

「おい、その嬢ちゃん捜査官」

捜査官と言うにはやや若い女に、セリオは声をかける。

「……え？」

わずかに眉をしかめて振り返った彼女は「わたしはお嬢ちゃんではありません！」とでも言いたげな瞳だ。

しかし、セリオは一向に気にする様子もなく、エリザベスに向かってペンダントを放り投げた。

そのペンダントを、ジョージもブレットも知っている。

もちろん、エリザベスも、で例外ではない。

「……な？」

銀色のペンダント。

素材を考えれば決して高価なものではない。

銀で作られた安物のペンダントだ。

素材と細工が問題なわけではない。

そのペンダントが、誰のために作られ、誰の所有物であるのかが問題なのだ。

「こ、これはどういうつもりですか？」

当たり前前の反応だった。

かつてアリッサがそのペンダントを宿敵である警察関係者に渡したことなどただの一度としてなかった。

そのペンダントは、持っている人間と、アリッサとのつながりを示すもの。

「見ての通りだ。それをあの子がどういうつもりで渡しているのか、あんたたちFBIが一番よく知っているだろう」

セリオの言葉にジョージとブレットも同じように呆然とした。

「アリサが、エリザベス・マーレイ捜査官に渡してくれと、随分前に言っていた。あの子は、あんたのことをだいぶ気に入っていたぞ」少女が誰かに好意を向けることなど滅多にないのだ。

大概の場合、気まぐれは力のない者たちに向けられた。

彼女は冷徹を自負するが、決して冷徹などではない。

他者に対してひどく甘い面も持ち合わせている。

「わたしは、守られなくなつて……」

平気だと。

そう言おうとしたのかも知れない。

しかし、どこからどう見ても「平気」には見えない。

必死に取り繕おうとしているエリザベスを見ると、アリッサがどうして気に掛けていたのかがわかるような気がした。

鈍くさいけど、いい子なのよ。

アリッサの言葉を思い出した。

「心配すんな。あんたにはアリッサがついてる。どんな厳しい状況も、彼女はひっくり返してきた。そのアリサがあんたにはついているんだ。だからなにも心配はいらない」

言い聞かせるようなセリオの言葉に、エリザベス・マーレイは不安げな眼差しのままで強くペンダントを握りしめた。

そうだ。

アリッサはどんなに不可能と言われた状況も覆してきたのだ。

確かに、今、彼らの前にアリッサはいない。しかし、おそらくアリッサはそれすらものもしないはずだ。

彼女を知る多くの者が思いもしない方法でアリッサは干渉してくるに違いない。

そんなことを思いながらセリオは立ち上がった。

「それで、どうするんだ？」

問いかける。

現実的な問題としてはエリザベス・マーレイの嫌疑を晴らしてやらなければならない。もちろん、それは彼女のためだけでもなければ、アリッサが間接的に関わっているということに対しての問題でもない。

エリザベス・マーレイの問題が解決されなければ、次に正体不明に疑惑を向けられるのは誰なのか。

そんなことを思った。

どちらにしたところで、セリオ自身は裏社会であり、なおかつアリッサと直接関わりがあるというリスクもある。

遅かれ早かれ自分もなにがしかの容疑をかけられて抹殺されるに違いない。

そんなことを思いながら彼は、苛立たしげに煙草に手を伸ばす。

「わたし、煙草嫌いなよね」

ふと、脳裏にアリッサ・ノースウツドの声が思い出された。

「ともかく、殺人のホシを上げないとベスの容疑は晴れないからな。まずそっちだろう。そもそも俺たちなんかよりもっと上の存在が絡んでいたとしたら真犯人を挙げたとしても容疑が晴れるかどうか怪しいもんだが……」

言いながら瞼をおろしたブレットは半眼のままで考え込んだ。

障害が大きすぎるような気もしないでもない。

「FBIにしろ州警にしろ、上層部が絡んでいたとしたら、厄介なことではあるな」

ジョージの言葉にブレットは眉をひそめたままで頷いた。

「ベスはなにか覚えてないのか？」

話しを振られて、女捜査官は沈鬱な眼差しを改めた。

「……確か、ヤオと飲んでいて、その後帰ろうと思って店を出たのよ」

思い出すように記憶の底を探る。

中国系のアメリカ人で彼自身は三世にあたる正真正銘のアメリカ人だ。

中国人か？ と尋ねられると大変気分を害するようで、心外そうに黒い瞳を瞬かせるのだ。

「また明日、ヤオ」

「ああ、またな」

バーの店先でヤオと別れたエリザベスは自宅への道を歩いていた。ワシントンD・C. は殺人首都とも言われるほど危険な場所ではあるが、それなりに護身術も身につけている彼女にしてみればそれほど危険な場所でもない。

「ベス、送っていいこうか？」

「大丈夫よ、すぐそこだから」

タクシーを拾おうと思って、大通りに出ようとした。

苦笑する。

ヤオは「そうか」とつぶやくと彼女に手を振って背中を向けた。

歩きだした彼女は、突然そこで意識が途切れた。

次に目が醒めたとき、目の前に殺人死体があったのだ。

「わたしが人を殺すとジョージとブレットはそう思っているの？」

問いかける。

まがりなりにも捜査官のエリザベスが人殺しをすることなどは。「おまえに人を殺す勇気なんてあるわけじゃないじゃないか」

ブレットが真顔で告げれば、エリザベスはほっと胸をなで下ろした。

そんな彼女の様子に、ジョージがそっと背中を撫でる。

「俺たちは、ベスが殺人をやったなんて思っていない。だいたい殺人をする奴が必死になって殺人事件の被害者のために捜査をするわけはないだろう」

警察関係者の殺人がないわけではない。

それはアメリカだけではなく、世界中の国家で起こっていることだ。

目の前に山積みになれた問題の数々に、ジョージとブレット、そしてエリザベスは頭を抱えた。

「単にホシを上げるだけなら問題ないんだがな……」

今は捜査本部がそこにあるわけでもなければ、その裏にはなにやら巨大な陰謀が渦巻いている。

「ヤオがなにか知っているかもしれないな」
「ぼそりとジョージがつぶやいた。」

＊

アマはブカブを離れない。

最強の占い師と呼ばれる彼女は、コンゴにしながら完全に世界の行く末を把握する。

世界の行く先は、彼女の手のひらの上だ。

いつものように、のんびりとレースを編む彼女は不意に屋外に人の気配を感じて立ち上がった。

自分の不幸に対する予兆はなかったから、それとは異なる。

しかし、まるで這いよるようなその気配に彼女は背筋を正す。

なにが現れても、動じまいと、そう思った。

かつて、彼女の師であるアジョラがそうしたように。

車のエンジンが止まる音が聞こえる。

コンゴで行き交うような壊れかけた車の、古びたエンジン音ではない。

少なくとも、アマがここしばらくは聞いたこともないような静かなエンジンの音だ。

それが指し示すこと。

彼女はレースを編んでいた鉤針をおくと、窓辺に歩み寄る。

長いドレスのようなワンピースがゆらりと影を彩った。

ドイツの高級車だ。

ブカブの町並みには似つかわしくなくて、アマは両目を細める。

自分に接触しようとしてくる人間の、その中でも「ある種のまともな部類の人間」たちは、一様に彼女と接触するときはアポトメントをとってから彼女の屋敷を訪れる。

アマが減多なことで「知人」以外の突然の来訪を歓迎するような人間ではなかったから、もちろん、その日も誰かの来訪などないは

ずだった。

きらきらと輝く黒目が印象的な女は、そうしてそっと屋外に続く扉を開いた。

逃げも隠れもしない。

高級車から現れたのは白人の中年の女と、護衛らしき数名のがたいのよい男だ。

「歓迎はしませんけど、なにごとですか？」

テラスに立つ彼女はそうして、白人の集団に問いかけた。

コンゴのような物騒な国に何の用か。

歓迎はしない。

大概の場合、アマに力を貸してもらいたいと「直接訪れる人間」たちはまともな人間ではないと決まっている。

アマはわずかに眉をひそめたままで、コンゴの強い日差しの下にいる白人女を眺めやった。

アマは白人が嫌いではない。

恨みもない。

静かな眼差しを向ける彼女は、長い睫毛を瞬かせる。

彼女は口元で笑う。

「あなたが、アマという占い師？」

「……そう。わたしが、ザイルの魔女の弟子」

隠す必要などない。

それは、彼女らの世界では有名な話しだ。

言いながらアマは白人の男女に瞳を投げかける。

彼らがどうして自分の元を訪れたのか、それがわからないわけではない。

「知りたいことがあるのですか？」

知りたいことがなければ、人々は自分のもとを訪れたりしない。

理由は至極シンプルだ。

「……知りたいことがなければ、わざわざこんなところに来たりしないわ」

白人の、ブルネットの女がそう言った。

こんなところ。

彼女の表現に、アマは肩をすくめる。

「ご挨拶ね、コンゴにいる人間だって、一生懸命生きてるのよ。こんなところって言い方はないんじゃないの？」

「知ってるわ、そんなこと」

告げられた言葉に、ブルネットの女はニッコリと笑った。

ブルネットの女の告げるとおりだと、アマは思う。

確かに、先進諸国に生きる人間たちにとって、コンゴ民主共和国という国は魅力がある国家とは言えないだろう。

国のほとんどが危険な街だ。

特に、アマの住むブカブは首都のキンシャサや、バ・コンゴ州と比較してもずっと危険な地帯である。

「でも、わたしはこんな国に用はないし、興味もないの」

ざっくりと言い放った彼女に、アマはその言葉に対してはなににも言わず、かすかに瞳を揺らしたただだった。

たとえ、どのように思われていたとしても、そこで生まれた者にとって、その場所は故郷なのだ。

「そうね、あなたたちは、興味もひかない街だわ」

静かにアマが告げた。

ありとあらゆる暴力に満ちている。

その街にはアメリカにあるものがなにもないのだ。

そつと指を差し伸べた彼女は目元だけで笑う。

「アポイトメントがないのはあれですけれども、わたしがあなたのご用件をお断りするという選択肢もでておりませんし、お聞きいたしましょう」

そう言いながら、アマは屈強なボディガードを従える白人の女を屋敷の中へ招き入れた。

平屋建ての屋敷は大きな部屋がいくつもつながっている。
リビングのソファをすすめた彼女はレースのカーテンをひいた。

「……あなたは、こんな危険な場所に住んでいて、暴漢に襲われたりとか心配はしないのですか？」

女に尋ねられてアマは片目をすがめる。

「あら……」

まるで含み笑いをするようなアマに、白人女はどこか得体の知れない笑みを浮かべる。

互いに互いの腹を探り合う。

「このあたりでは、わたしがザイルの魔女の弟子だと周知の事実。わたしに手をだそうなんていう者好きはおりませんわ」

そう言ってからアマは一呼吸置いた。

「ところで、人の家に突然訪ねてきて、名乗りもされないのは非礼ではありませんの？」

穏やかに問いかけるアマの言葉は、しかしどこか棘を含む。

彼女は占い師として、多くの野蛮な人間たちを見てきた。

ほとんどの者が、自分が上等の人間だと勘違いをしていた。

「それは失礼しましたわ」

言いながら、女がほほえむ。

「わたしは、エイリーン・グレイシア・バークレイと言います。アメリカの人間よ」

「……そう」

遠くわざわざコンゴの奥までご苦労なことだ。

アマはそう思った。

相づちを打ちながらアマはリビングを出て行く。

「お茶でもお煎れしますわ」

広い家に彼女はひとりで住んでいる。

そもそも召使いを雇うような趣味はない。

彼女の暮らしは静かでいたって穏やかだ。

とても裏社会と関わる占い師の言葉とは思えない。

そんなアマの後ろ姿を見やって、グレイシアは睫毛を揺らした。しばらくしてからポットとカップののったトレイを持ってアマが

リビングに戻ってきた。

相変わらず彼女は武器のようなものを隠し持っている気配すらない。

正体不明のアメリカ人たちを目の前にして、しかし彼女は動じない。さすがに、世界でも最も腕がよいと謳われる占い師、と言ったところだろうか。

「なにもかも、お見通し、と言った顔ね」

グレイシアの言葉にアマは無言のまま、彼女に向かい合うように黒人の占い師は腰をおろす。

「別に、わたしは世界の全てを知っているわけではありません。おばあさまがそうであったように……」

かつて、コンゴがザイルと呼ばれていた頃。

アフリカ大陸に君臨していた魔女がいた。

ブードゥーの魔女であり、その名前はアフリカに轟き、そうしてその力は世界をも揺るがした。

「アジョラ、と言いましたかしら？」

アマの祖母。

しかし、アマは彼女の能力と体質を継ぐことはなかった。

素質はあったのかもしれない。

だから、アマは現在でも占い師をしている。

「わたしは、ザイルの魔女の体質を継がなくて良かったと思っています」

核心的な言葉を避ける彼女に、グレイシアはかすかに瞳に光をちらつかせる。

グレイシアはアマの。

そしてアマはグレイシアの。

互いが互いの反応を観察していた。

「本題に入りますが、EVE-000-782が何を思っているのかを知りたいのよ」

聞き慣れない言葉にアマは眉をひそめる。

「……イブ？」

首を傾げた。

もっとも、自分にはその言葉など関係がないことだから好んで、言葉の意味を聞こうとは思わない。

そんなアマの反応にグレイシアは言葉が続けた。

「EVE-000-782がなんなのか、お話したほうがよろしいかしら？」

問われて、黒人女はゆるくかぶりを振った。

「いいえ、結構です」

相手の申し出をやんわりと断って、アマはちらりとボディガードの男たちに視線を投げかける。

「申し訳ありませんけれど、そちらの方々、席を外していただいてよろしいですか？」

そう告げて、アマは隣の部屋に視線を流した。

隣室へ行けという無言の圧力だ。

アマの視線を受けて、グレイシアと名乗った女はボディガードの男たちに隣の部屋へと行くように告げる。

彼らが隣室へと消えたのを見送ってからグレイシアはアマに向き直った。

「これでよろしいかしら？」

にこりと笑う。

「ありがとう」

アマはそれだけ言うと、テーブルの引き出しからカードを取り出した。

エイリーン・グレイシア・バークレイと名乗った女が、仰々しいボディガードを引き連れて帰って行ったのはそれから一時間ほどたってからのことだった。

アマは、テーブルの上に並べられたままのカードを眺めて、顎に指をあてた。

ほとんどの人間がカードの意味など理解していない。

そもそも、占い師のところに依頼に訪れるような人間が、カードの意味を知っているなどとは思えない。

知らないから、こんな辺鄙な街までやってくるのだ。

「……強い怒り。純粹な、感情……」

アマはつぶやいた。

「世界を揺るがすのは、けれども、彼女ではない」
片目を細めた。

「おばあさまだったらどうされるのかしら……」

アマはつぶやいて、息をついた。

彼女らには、世界を動かす力などない。

ただ、行く末を見極めるだけだ。

「キャシー、あなたたちはどうするの？」

ぽつりとつぶやいた彼女はそうして、展開されていたカードを一つの山にまとめると、数字の順に並べ直していく。

世界が動き出していることは、しばらく前から知っていることだった。

時折、依頼される仕事の中にちらほらと未来の片鱗が見えていた。アメリカの首都、ワシントンD・C・で起こったケース・レッドドラゴンの際も、アマは知っていたのだ。

知っていても、彼女には止められない。

止めることなどできはしない。

「ほとんどの人間たちが、わたしたちの言っていることなど世迷い言だと思っているものね」

独白する。

ケース・レッドドラゴンで、炎の使い手が誰かに操られていたことも。

わかっていて、黙殺した。

人が占いになにを求めているのかわかっている。

「人は希望しか求めていないもの」

悲しい未来など、アマのところにやってくる者たちは求めている。
い。

「愚かなこと」

人の未来は、希望だけで作られているものではないのだから。
人々は自分にとって都合の良い、希望に満ちた世界を求めている。
それは間違いではない。
けれども、それだけを望むことはひどく愚かなことだ。

＊

突然、その肩に細い手のひらをのせられてびくりと体を揺らした。
夕方のカフェで、男はぼんやりと考え事をしていたのだ。

「……こんばんは」

静かに低く告げられる。

びくりと固まった男の視界に金色の巻き毛が揺らめいた。

金色の巻き毛。

その所有者。

若く張りのある肌が見える。

声と、それらの特徴だけでヤオは理解した。

彼女が誰であるのかを。

「アレクシス・ヤオ」

呼びかけられる。

防テロ防諜部、特別強行突入班のキャサリン・キーン。

出自不明の。

現在は犯罪捜査部に身を置いている。

「わたしと、お話をしませんか？」

耳元で優しく告げられて、ヤオはぞっとした。

背筋になにか冷たいものが流れていったようなそんな感覚だ。

「……キャス？」

ヤオの声がかすれた。

つばの大きな帽子を目深にかぶった女は、肩を大きく露出させたホルターネックのワンピースを着ている。

そっと女の腕が問答無用で彼の腕をとる。

腕を組んで、彼を引っ張るように歩きだした彼女の力は、それほど強いものではないが、抵抗を許さない強さを秘めていた。

そんな彼女の腕にひかれながら、ヤオは警戒するように彼女を横目で見つめる。

キャサリン・キーン。

その名前はマジックボムと呼ばれた殺人鬼の持っていた偽名の一つだ。

彼女の呼び名は一つではない。

「キャス、CIAに連れて行かれたと聞いたが、釈放されたのか?」
「……」

男の言葉にキャサリンは応えない。

無言のまま歩を進めている。

彼の腕をとって、自分の腰に導くと背の高いヤオを見上げてからにつこりとわらった。

水色の瞳が不穏な光をたたえて煌めく。

「キャス……」

人ならぬ力を持つ特別強行突入班の娘。

伝説の殺人鬼に関わりを持つ、よく似た女はそうして彼をエスコートする。

「君は、殺人鬼なのか? それとも警官なのか?」

思わず聞いたヤオに、娘はそっと自分の唇に指をあてた。

底が知れない女捜査官。

反社会的な行動や思想に捕らわれないようにデザインされているから安心していい、とキャサリン・キーンは言ったが、それでもマジックボムの凶行を知れば知るほど、彼女の言った言葉を真に受けてもいいものかわからなくなってくる。

「わたしが誰なら、あんたは納得するの……?」

喧噪をかき消すように、ぞっとするほど冷たく低く、声が流れた。その声はFBIのオフィス内で見かけるキャサリンのものとは似ても似つかない。

「……え？」

驚いたようにキャサリンを見つめたヤオに、娘は微笑した。

「なにか？」

笑った彼女は、そっと唇を彼のそれに寄せる。

触れあった唇の暖かさに、ヤオは硬直した。

「……わたしを、抱いてみる？」

驚くほど冷ややかな彼女の声に、ヤオは硬直したままゆるくかぶりを振ってみせる。

その声は、先ほど聞いたものではない。

キャサリンが誰なのか、わからなくなる。

目の前にいるのは本当のキャサリン・キーンなのか、それとも過去にケース・アングリーボマーを引き起こした世紀の殺人鬼なのか。そして、彼女のなかには何があるのか。

「お、俺は職場内の女とはつきあわないことにしているんだ……」

それだけをようやく言ったヤオは彼女の腕をようやくの思いでふりほどいてから、かすれたままの声でやっと告げた。

言い訳をするような彼の言葉に、キャサリンはにたりと笑う。

彼女の笑顔にぞっとしたヤオは体を離す。

逃げ出すように走り出した彼の顔の真横で、火の玉が破裂した。いつの間にか、ほとんど人の気配のない住宅街に連れだされている。

ヤオは「しまった」と思うがもう遅い。

顔の真横で感じた熱に、立ち止まった彼は振り返る。

振り返った視線の先で、キャサリンはゆっくりと歩いてくる。決して慌てたりはしない。

なぜ慌てたりはしないのか。

答えは簡単だ。

彼女は自分の優位性を確信しているのだ。

強風に煽られて、彼女の帽子が飛んだ。

音もなく、布製の帽子が歩道に転がる。

コツとヒールの音があがる。

「天下のFBIの犯罪捜査部の捜査官が、わたしみたいな女の子が怖いんですか？」

問いかける。

怖くて当たり前だ。

小柄で華奢な娘に見えても、彼女はマジックボムと同じような力を持ついわゆる超能力者だ。

捜査官とはいえ普通の人間が対抗できるわけがない。

後ずさろうとして躓いて転んだ彼はアスファルトに尻をついたまままで言葉を失った。

「安心していいですよ。今のわたしは、街一つ吹き飛ばすほどの力はありませんから……」

それはどこからどう見ても安心材料ではないのだが、キャサリンはなんでもないことのように告げる。

「さあ、答えなさい。あなたは国土安全保障省の連中になにを要求されたの？」

「……お、俺は、何も知らな……っ！」

言いかけたヤオの前に膝をついたキャサリンは、そっと彼の胸ぐらをつかむとその頬に手のひらを滑らせる。

「わたしをキャサリンだと思うと痛い目にあうわよ……」

そこまで言った彼女の言葉が不意に途切れた。

「……っう」

頭を押さえた彼女の体から力が抜ける。

殺気立ったキャサリンの空気感が消える。

咄嗟にヤオは利き手で銃を抜くとその銃身を思い切り娘の腹にたたきつけた。

どさり、と鈍い音をたててキャサリンの体から力が抜けた。

もたれるようにヤオの体に倒れ込んでくる彼女を抱き留めて、彼はほっと安堵の息をついた。

「……殺されるかと思った」
本音だった。

キャサリン・キーンが何者なのかわからない。
力の抜けた彼女の体を抱き起こして立ち上がった彼はそうして目を伏せた。

目を開いたキャサリンは、自分の体の自由がきかないことに気がついて首を巡らせた。

がっちりと手錠を後ろでにされている。

「……これ？」

「目が醒めたか……？」

棘のあるヤオの声に彼女は目を上げた。

「ヤオ？」

「おまえは、なんなんだ……？」

訪ねられた言葉の内容に、キャサリンは首を傾げる。
理解ができない。

「抱いてほしいのか？」

手錠をされたまま上半身を起こした彼女は、ヤオの暗い瞳に思わず体をさげた。

意識がないうちに手錠をされて、ベッドに転がされていたらしい。
スプリングを軋ませて男は膝をつくとベッドに座る娘にのしかかる。

「なにを、言って……」
キャサリンが硬直した。

意識を失う前の彼女と、意識を取り戻した後の彼女が余りにも異なる印象を持ちすぎていて、わからなくなる。

膝をこすり合わせるようにして後ずさった彼女に男がにじり寄る。

「……俺は、おまえを監視する命令を受けていたんだ」

言いながら男が彼女の合わせられた膝を強引に割る。

その体温にキャサリンがびくりと体を震わせた。

「抱いてやるよ……」

手を彼女の足の間に差し入れた男は、そっとキャサリンの体を探りながら大きな手のひらで彼女の後ろ頭を抱き寄せる。

「情報通りなら、おまえ、処女だろう……？」

品の良いアジア系の捜査官といった印象を脱ぎ捨てて男が笑った。体を探られる感触に、キャサリンが怯えて身をすくませる。

肌の上をたどる唇と舌、そして指の感触に、金髪の娘は思わず目を閉じた。

生暖かい吐息。

その感触が気持ち悪くてキャサリンはきつく目をつむった。

ゴンと鈍い音が響いたのはそのときだった。

「全く……、すっかりしろ。キャス」

名前を呼ばれて、キャサリンは聞き慣れた声に目を上げた。

自分の体をまさぐりながら意識を失ったヤオの重さに軽くうめく。

「ジョージ……」

ヤオの体を探って手錠の鍵を探し出すと、キャサリンの手首を解放した。

長い腕でヤオを引き離すとキャサリンから外した手錠でヤオの足首を拘束すると、自分が持っていた手錠で今度はヤオの手首を拘束した。

彼女の乱れた服を直してやりながら、ジョージはベッドの下に放り出されたハイヒールをそろえる。

「大丈夫か？」

「……っ」

自分の上半身を抱きしめたキャサリンは青ざめた顔でジョージを見上げた。

「……わたしは、大丈夫、です」

途切れがちの彼女の声は、とても大丈夫そうには見えない。

「でも、彼女が……」

動揺している。

独り言のようにつぶやいた彼女にジョージは驚いたように目を開く。

キャサリンの言う「彼女」は、ジョージのよく知る少女以外にありえない。

自分の肩を抱きしめて震えているキャサリンがなにかに怯えている。

「言いましたよね、彼女とわたしたちはつながっている。わたしは

わたしだけ、彼女とは別物ではありえない。わたしはわたしなのに、わたしのものじゃない」

キャサリンの肩に触れた男に、娘の瞳が彼を見上げる。
水色の瞳。

彼女と変わらない……。

吸い寄せられるように、ジョージは唇を重ねた。

「……ジョー」

舌足らずな声が、彼を呼んだ。

彼にはわかった。

キャサリンと、「彼女」の間で人格の交代が行われたことが。

抱きしめる彼の腕に、「彼女」の指がジョージを捜す。

「お帰り」

優しいジョージの言葉に、少女は縋り付くようにして声を上げた。

「少女」が泣く。

彼女の姿は大人であっても、彼女の中に彼がよく知る少女がいる。アリッサとは異なる成長した体でも、その中にはアリッサがいる。それがジョージにはわかった。

もしも「彼女」が戻ってきたとき、自分は冷静でいられるのかどうか。そんなことを何度も想像した。

そして、戻ってきた彼女を前にして、ジョージは自分でも冷静でいられたことに驚いた。

もしかしたら、今、彼の目の前にいるのが、アリッサ自身ではなく、「キャサリン・キーン」と名乗っていた娘であったから冷静でいられたのかもしれないとすら思う。

「ジョージ……、ジョージ……」

何度も名前を呼ぶ舌足らずな声。

少し、声のトーンがアリッサとは異なるのは体の大きさが違うからだろうか。

名前を呼ぶ唇を、人差し指でたどってからジョージは娘の鼻に自分の鼻をこすり合わせるようにして角度を調節するとそっと唇を重ね

ね合わせた。

どれだけ待っていたのだろう。

どれだけ彼女を待ち続けたのだろう。

舌を差し入れた。

「お帰り、アリサ……」

「あ……、ふ……っ」

唇を重ねられて息が継げない彼女に、男は耳元にささやいた。

「ちゃんと口を開けて息をしないと苦しくなる」

キスの仕方も知らない「アリッサ」の唇を舌でなぞってやると、言われた通りに唇を開く彼女が彼に訴えた。

彼女の腕を取って上半身を引き上げたジョージは、長いキスを続けた。

キスをしながら彼は思う。

いつの日か、彼女が本当の意味で戻ってきたとき、自分は冷静でいられるだろうか、と。

そんな自信はあるわけもなかった。

「ジョージ……、体がうまく動かないの……っ」

小さなアリッサではない体の違和感に、アリッサではキャサリンの体がうまく扱えないのだろう。

彼女の途切れ途切れの言葉からそれを察した。

「大丈夫……」

甘く応じる彼はそっと彼女をベッドに横たえる。

「大丈夫、心配いらない」

昏倒したヤオは床に転がしたままだ。

そっと彼女の首筋に唇を押しつけたジョージはそっと彼女の体をまさぐった。

ホルターネックのワンピースをはだけさせながら彼はその乳房に唇を寄せる。

本来、アリッサでは持ち得なかったものだ。

彼女のすすり泣くような喘ぎ声を聞きながら、ジョージは彼女の

体に溺れた。

ぐったりと体を弛緩させた娘は男の腕の中で意識を失った。
彼女の体から力を失った性器を引き抜くと、ジョージは体を起こしかけた。

意識のない彼女の体がぶるりと震える。

「アリサ……」

耳元にささやいてやる。

ささやきながら、ジョージは床に転がされたまま目を見開いているヤオと目があった。

いつからこいつは目が醒めていたのだろうか。

ジョージはそんなことをふと思った。

「良かったな、おまえを襲ったのが、アリサじゃなくて」

その心に、アリッサだけではなく、キャサリン・キーンがいたからこそ、ヤオは命があった。

おそらく彼が襲ったのがアリッサであれば容赦なく殺されていただろう。

そんな冷徹をアリッサが持っていることを、ジョージは知っていた。

他人のベッドで彼女を抱いたことに対しては自嘲的なものを感じたが、アリッサの様子ではまともにうごくことなどできないだろうことはわかった。

「アリサ……」

「……ジョージ」

頬を軽くたたかれて目を覚ました彼女は裸の男に抱きしめられていることに気がついて、身じろいだ。

「体はどうだ？」

「……う」

痛みが走るのか、彼女はジョージの胸に手について体を起こそうとした。

なまめかしい彼女の快樂に煽られた顔を思い出す。

思わずそのまま押し倒しそうになったが、ジョージはそれをぐっところえた。

「ブレットが来る手はずになってるから、シャワーを浴びて服をきてくれ」

告げてやれば、彼女はベッドから足をおろすと立ち上がろうとした。

そのまま膝が碎ける。

転倒しかけた彼女を力強い腕で支えてやって、ジョージは苦笑した。

「一緒に入ろうか」

そっと抱き上げるとジョージは浴室へと向かった。

手早く彼女の体を洗ってやり、タオルで拭き取ると服を着せる。

手頃なヤオの上着を物色するとホルターネックのワンピースを着た彼女に着せた。

そうしていると、二年以上前のアリッサに服を着せているような感覚に、ジョージは陥る。その後に関自分も服を着ると時計を見てからヤオを見下ろした。

「アリッサに触れてもいいのは、俺だけだ……」

ジョージが独白した。

怒気のこもった彼の声に、ヤオは唇をゆがめた。

イヤらしい笑いだ。

「なんだ、昨晚は俺の目の前でお楽しみだったようじゃないか……。彼女が何度いったか数えてやったぜ」

行為の最中に縋り付いてくる彼女の腕の強さ。

彼の凶器に刺し貫かれて、初めての行為で痛みと快樂の狭間で鳴いた彼女。

アリッサを愛していて、しかし、彼女を抱くことなど永遠にないと、そう思っていた。

体をかかわすという、言葉の意味も知らない彼女を抱いた。

それにわずかな罪悪感すらも感じる。

「……ジョージ」

彼の名前を、娘が呼んだ。

「なんだ……？」

「ジョージ、昨日の、あれはなに？」

男女の行為を知らない娘がキャサリンであるはずがない。

明らかにアリッサだった。

まっすぐに水色の瞳を向けてくる彼女に、ジョージはほほえんだ。
はぐらかす。

「体、動くようになったんじゃないか？」

性交渉の意味など、彼女が知る必要はない。

無意識に泣き叫んで、彼に縋り付いてきた娘の体のアリッサ。

「……あ、本当だ」

拳を握りしめたり開いたりしながら彼女がつぶやいた。

「ありがと、ジョージ」

無邪気な笑顔に、彼女につけ込んだような気がして、彼は息を吐き出した。

「お帰り、アリサ」

「まだ、本調子じゃないけどね」

アリサ、と呼ばれて彼女は否定しない。

どこかぎくしゃくとした印象の動きで背中と膝の下に手を入れてきた男の首に腕を回す。

抱き上げられて、彼女は疲れたように目を閉じた。

長い腕をアリッサはもてあました。

どうやって成長した娘の体を扱えばいいのかわからない。

嗅ぎ慣れたジョージに香りを感じながら、少女は眠りの淵に引きずり込まれていった。

「おやすみ……」

そんな彼の声と、そうしてクラクションの音が聞こえたような気がした。

声が聞こえる……。

「つまり、そこにいるのはキャスではなくて、アリサだということか？」

ブレットの声だ。

アリッサはそう認識した。

しばらくしてアリッサが目を開くと、そこにはジョージとブレット、そしてエリザベスがいた。

ぐるりと首を回すとセリオがいることに気がついた。

もうひとり黒髪の少女がいるが、それが誰なのかはアリッサにはわからない。

アリッサは、確かにパイロキネシスの使い手ではあるが決して超人でもなんでもない。

「アリサ、大丈夫か？」

アリッサが目を開きましたことに気がついたセリオが彼女を覗き込んで。

「……セリオ？」

言いながらベッドから体を起こしたアリッサはぼんやりとしながら額に手を当てた。

体と心が連結されていないようなぎこちなさはすでに消えている。夜通し感じたジョージの体の熱さが、アリッサには理解できていない。

「おなかすいた……」

アリッサがつぶやくとセリオは声を上げて笑った。

「サンドイッチを持ってこよう」

オレンジジュースとサンドイッチ。

それらを出されて、彼女はソファに座ると行儀悪く足をぶらぶらと揺らす。

それは確かにアリッサの癖だ。

肉体は娘そのものであるのに、そこに宿っているのは少女の心だ。セリオのサンドイッチを嬉しそうにほおばる彼女は、自分に集中する視線に首を傾げた。

「なによ？」

「……いや、アリサだなと思ってな」

全員がそう思った。

姿は成長したものであっても、彼女は確かにアリッサなのだと。

無邪気に笑う殺人鬼の少女。

誰よりも凶悪な、マジックボム。

そこには確かにアリッサの姿があった。

「うまいか？」

セリオの言葉に、アリッサは怪訝な瞳のままでサンドイッチを口にしたまま頷いた。

「あんまり見られてると、落ち着かないんだけど……」

彼女の抗議の声に、ブレットとジョージ、そうしてセリオが顔を見合わせる。

同時に爆笑した三人に彼女は目を大きくぱちくりと瞬いた。

セリオは首を傾げると彼女の頭を抱き寄せる。

人目もはばからずに瞼の上に口づけるた。

「べたべたしないだよ」

気持ち悪いわね。

アリッサが言う。

「アリサに触るな……」

ジョージの抗議に、セリオはにやりと笑うと彼女の肩を抱きしめる。

「おやおや、嫉妬かな」

牽制するようなセリオの声に、ジョージはアリッサの手首をとった。

どこからどう見ても男が二人で娘を取り合っているようにしか見えない構図だ。

なぜかあきれてブレットは肩を落とすため息をつく、エリザベスを見やる。

ジョージにエリザベスが好意を寄せていることを、ブレットは知っていたから、よほど複雑な気持ちなのではないかと気を回す。

すると意外なことに、エリザベスは腹を抱えて窓辺でカーテンを片手で掴むと肩を震わせていた。

「本当に、ジョージも、セリオも、アリサが大好きなのね……」

笑い涙を浮かべて彼女が言った。

目元にたまった涙を指先で拭う。

笑いがおさまらないのか、三人の姿を見て彼女は喉の奥で笑い声をこらえていた。

「もうー！ ベス！ ちょっと助けなさいよ！ このエロオヤジ共をなんとかしてよっ！」

悲鳴のようにアリッサの声が上がった。

アリッサの助けを求める声に、エリザベスはようやくしてから笑いをおさめると三人の間に割って入る。

「はいはい。それまで。とにかくなんでもいいから食事の邪魔はしないの。ジョージも、セリオも」

アリッサを前にして嬉しそうに目元を和らげているジョージの姿は活気があっていいと思った。

エリザベスは、アリッサがいることで精彩を欠いていたジョージの姿がないことに安堵する。

アリッサがいるからジョージ・リートは笑えるのだ。

「お帰りなさい、アリサ」

「ただいま、ベス」

彼女の言葉に、娘姿のアリッサが笑った。

アリッサの食事はそれからすぐに終わった。

男たちが邪魔をしなければ、そもそもすぐに終わる予定だったのだ。

ぶらぶらと足を揺らす彼女は目の前で状況を整理されて、首をか

しげた。

「あ、ここ二年のことの説明はいらないからね」
アリッサが告げる。

「わたしが知りたいのはここしばらくの顛末。どうしてベスが狙われたのか……」

興味はそこにある。

彼女はそう言った。

「恐らくだが、アリッサの存在の抹殺を企んでいる者がいると思われるんだが……」

どこが絡んでいるのかさっぱりわからなかったんだ。

そう言ったブレットに、アリッサは目を上げて天井を眺めた。

「絡んでいるのは、たぶんDHSだと思うけど……」

国土安全保障省。

彼女の言葉に、捜査官たちは驚いたような顔をしてアリッサを見下ろした。

愕然とする。

「DHS共も、生体兵器の賛成派と反対派がいて、その反対派がわたしの危険性をあげつらって奴らとしてはわたしが存在していたっていうことが残ることの方が面倒くさいのよ」

確かに言われてみればそうかもしれない。

二年前に起こったテロリストによるケース・レッドドラゴン。

それを考えれば明白なことだ。

テロ事件を引き起こした「暁の夜明けの騎士団」によって、アメリカの最重要機密EVE-000-782が奪われた。

そしてそのためにアメリカ合衆国の首都ワシントンD.C.は襲撃され、多くの人間が死んだ。

その事件で奪われた生体兵器の存在。

誰だって危険人物だと思っただろう。

世界的に、長く伏せられ、秘められてきた。

「だから、全てを抹殺しようとしているのよ」

なんでもないことのように彼女は言った。
まるで人ごとのようだ。

「……それは、ベスだけじゃない、ということなのか？」

「たぶんね。わたしと接触した人間の全員よ」

アリッサは肩をすくめる。

全ての人間が命を狙われることになるだろう。

そんなことを考えながら、アリッサはオレンジジュースのストロ
ーを口に含んだ。

「面倒くさいわよね。どうしょっか」

放っておけば先手を打たれる。

そして、結末は「死」そのもの。

「……この体で、どこまでできるかわからないけど。やってみま
し
ようか」

アリッサはそう言って笑った。

立ち上がる。

「……どうするつもりだ？」

「国土安全保障省内でもね、わたしの敵ばかりじゃないのよ」

彼女が死ぬことを望まない人間もいる。

彼女が犯罪者であっても、である。

第二次生体兵器研究所の後継組織、人形計画の人間にとって彼女
は失いたくない存在なのである。

「ややこしいわよね、組織ってさ」

くすくすと笑う。

その笑顔は二年前と同じアリッサのものだ。

「あんたたちが絡むと、犯罪者認定されるからわたしが勝手にやる
わよ」

一応、彼女は彼らが警察関係者であると認識はしているようだっ
た。

「心配してくれているのか？」

ジョージが彼女に優しく問いかける。

どこか甘さすらも含んだ彼女の声に、アリッサは眉をつり上げた。「あんたたちがくると、やり過ぎて止められるのがうざいだけよ」素っ気なく言い放った彼女は、なれなれしく顔を近づける男の顔を押しつける。

「あんたたちが邪魔なの」

唇の端をつり上げて不敵に笑った彼女はひらりと立ち上がった。不遜で、不敵な。

世紀の犯罪者。

全てを超越し、全てを軽々と乗り越える生体兵器。
マジックボムが帰還した。

ジョスリンの自宅にジョージの車で送ってもらったアリッサは長い腕を彼に振ってからくるりと玄関へと向かった。

ドアフォンを鳴らす。

ブーと古びた音が鳴った。

「はいはい、どちら様」

ジョスリンの声だ。

耳に心地よい。

聞き慣れた彼の声。

「……」

金髪の中年男の唇からぼろりとくわえた煙草が落ちた。

驚いたように彼が両目を見開いている。

筋骨逞しい男を見て、金髪の巻き毛の娘はほえんだ。

「久しぶり」

「アリッサ、か……？」

しかし、彼女の笑みは決して優しく穏やかなものではない。

全てを蹂躪する凶暴な笑みだ。

「火事になるわよ」

言いながら、アリッサは足元の煙草を踏みつぶした。

「普段は燃やすほうだろうが」

呆れたような彼の声。

アリッサがにたりと笑った。

そこにあるのは姿が変わっても、魂は同じ。

「燃やすほうが好きだけど、あんたも住む場所がなくなったら困るでしょ」

「そのときはあんたの家に転がり込むさ」

逞しい男にそう言われて、アリッサは思わず眉間を寄せた。

「娼婦のところで転がり込めばいいでしょうが……」

呆れたように彼女が言えば、ジョスリンは背が高くなったアリッサの肩を抱き寄せた。

「なんでもいいさ、あんたとまた話しができて俺は嬉しい」

そんなやりとりを玄関先でしていた彼と彼女に、奥からジャッキーが顔を出した。

「誰か来たのか？」

ジャッキーの声に、アリッサとジョスリンが同時に彼に視線を向ける。

見慣れない金髪の娘にジャッキーが目を丸くした。

華奢で小柄だが金色の長い巻き毛と、印象的な水色の瞳に元グルカ兵の青年は首を傾げる。

既視感を感じる。

「えっと……？」

ジャッキーが要領を得ないまま金髪の巻き毛の娘を見つめれば、彼女はにこりと笑った。

どこか人を食ったような笑みに、青年は目をまたたいた。

白人の美少女にどう反応しているのかわからないのかもしれない。

「久しぶりね、ジャッキー」

「おい、あんたのツインソウルじゃないんだ。そんなこと言ったらほとんどの人間がわからんぞ」

男の言葉に娘は頬を膨らませた。

「ツインソウルって、気持ち悪いからやめてくれない……？」

ジョスリンに抗議する娘は、長い金髪を肩から払う。

ぞんざいな彼女の口調。

声のトーンは違うが覚えがある。

ジャッキーはそう思った。

言いたいことを言う彼女の口調。

「……アリ、サ……？」

小さな幼い姿のアリッサしかジャッキーは知らない。

もちろんジョスリンも、彼女が娘に成長した姿など知りはない。

それでも、目の前にいる娘がアリッサであると理解するまで、ジャッキーはわずかばかりの時間を要した。

ジョスリンのように瞬時に彼女がアリッサであると理解できるわけがない。

彼女とともにくぐり抜けた死線の数、ジョスリンとジャッキーでは決定的に違いすぎる。

「正解」

にやりと笑う彼女は、短くそういった。

「……どうしたんだ？ その格好は」

目の前に現れた成長した姿のアリッサに、青年は思考が追いつかないのか困惑しきって首を傾げる。

それが普通の反応だ。

一般的な反応よりも理解が早い、それでも、ジョスリンの理解の速度とは比べものにならないほど遅い。

彼は、彼女の傭兵仲間の中でも、ある種、特別な人間だ。

「どうしたって、別に、クローンの意識を乗っ取ってるだけよ」

なんでもないことを告げるように、アリッサは言う。

視覚情報を見れば確かに、その飄々とした発言はアリッサのものだ。

「クローン……？」

「そう、クローン」

アリッサはジョスリンに家の中に招かれて、リビングのソファに腰掛けた。

「個体識別番号EVE-000-782。そのクローン体は現状、四体。その中の一つがEVE-003-782-4、名前をキャサリン・キーン」

ややこしい名前をつけてもらいたくないわよね。

切り捨てるようにアリッサが言った。

「キャサリン・キーンって、わたしの名前なのに」

ぶちぶちと文句を垂れる不機嫌な横顔は確かにアリッサ自身。

「今はアリッサ・ノースウッドなんだから、キャスの名前くらいく
れてやればいいだろう」

「なによ、ジョス。あいつらはね、わたしをいつまでも自分たちの
ものだと思ってるのよ。だから、わたしからなにもかも奪うし、わ
たしのものは自分たちの所有物だと思ってるの。これくらいつま
ないことってないと思わない？」

アリッサは肩をすくめてみせた。

単語のひとつひとつの意味はジョスリンにもジャッキーにも理解
できない。

彼女がなにを言おうとしているのか。

それがわからない。

「……で、その個体識別番号っていうのはなんなんだ？」

「ああ、そっか。あんたたちは知らないんだっけ」

ジョスリンに尋ねられて、アリッサは揺らしていた足を止める。

ずっと彼女の水色の瞳が真剣味を帯びる。

「なんでもいいのよ。その、個体識別番号が、わたしというだけで
あんたたちの社会保障番号みたいなもんよ」

彼女の口調と、単語の異常さは、そんなに穏やかなものではない
と感じさせられるが、アリッサはそんなことに言及しない。

そして、彼女自身が男たちに追求されることを望んでいないこと
は明らかだ。

だから、彼らはそれ以上の追求はせず、ただ、単純に彼女の帰還
を喜んだ。

理屈など必要ではない。

そんなものはいらない。

彼らの目の前にいる「人間」が、アリッサであるというそれだけ
で充分だった。

「そんなもんか」

「そんなもんよ」

アリッサは笑う。

その笑顔はかつて、ジョスリンがアフガニスタンの紛争地帯で見
たものと同じだ。

ほんの少しだけ、大人っぽくなったただけだ。
たったそれだけ。

「アリサ……」

二年半前、最後に彼女が見た彼女は憔悴しきって、その瞳からは力
を失っていた。

誰よりも強く、誰よりも不遜に、翼を広げた火の鳥の姿ではなか
った。

静かに響いた男の声に少女だった彼女は笑う。

「あのときは、飛行機のチケットとってくれてありがとう」

上背の高い男を見上げた彼女は告げた。

高飛車で、けれど、どこか不安定な表情をちらつかせる彼女の笑
顔が見たいと、ジョスリンはそう願った。

アリッサは決してその心まで強いわけではないのだということを
知っていた。

「アリサ」

男が彼女の名前を繰り返す。

強い力で抱き寄せられて、アリッサは息を止めた。

「……本当に、心配かけやがって」

どれだけ心配したか。

どれだけ彼女が消えたことに心を痛めたか。

成長することなく時間を止めた彼女が、彼の気持ちを思いやるこ
となどできない。

どんな理由であれ、彼女の心の時間は止まっている。

それを、ジョスリンは知っていたのだ。

子供のままの心では受け止めきれない事柄のほうが多いの
だと言うことを、彼は知っていた。

「……お帰り」

「やめてよ、優しいあんたなんて気持ち悪いわ」

「俺はいつでも優しいだろ。お姫様の急な呼び出しでも出勤してやるしな」

ジョスリンの分厚い胸に抱き寄せられたまま、思い切り眉をひそめた彼女は、華奢な腕で彼を押し返しながら言い返す。

「そういう言い方やめてくれない？ わたしのことを姫なんて呼ぶのは、イーサーだけで充分よ。だいたい気持ち悪いのよね」

にべもないアリッサの言葉に、ジョスリンは笑うと彼女を腕から解放した。

「アリサが飲むようなものはなにもないが……」

ジョスリンは不意に思い出したように、彼女に言葉を振った。

そういえば、アリッサはジュースや一部の茶のたぐいしか飲まない。

アルコールやコーヒーなどもってのほかだ。

「……ミルク、もないんだよな」

「男の一人暮らしの家に、ミルクがあるほうが気持ち悪いだろ……」あきれたようなジャッキーの言葉に、ジョスリンは苦笑する。

「いらないわよ。別に茶飲み話をしにきたわけでもないもの」

さて本題に入りましょうか。

彼女はそう言った。

仕事のためでなければ、アリッサが同業者のもとを訪れることなどほとんどない。

そもそもほとんどどころか、ありえないと言った方が正しいだろう。

「……せっかく久しぶりなのに、もう少し落ち着けないのか」

ジョスリンの言葉に、娘は片方の眉をつり上げる。

「くだらないこといつまでも言っていないで、人の話を聞きなさいよ」アリッサは唇をとがらせた。

顔立ちは大人びているが、仕草の全ては小さな幼いアリッサそのままである。

ジョスリンは軽口を閉ざしてアリッサを見つめた。

彼女がなにを言おうとしているのか、それを待つ。

アリッサに必要な以上の茶々をいければ、殺されるのは自分である。だから、必要以上に彼は彼女を刺激しない。

死ぬのは、ごめんだ。

「……で、要するに、敵はどいつだ？」

「どいつもこいつも敵なんだろうけど、当面の敵は国土安全保障省、ジョナタ・シルヴェストリ」

短く彼女は言い切った。

舌を噛みそうな名前を、よくもまあ、こうもすらすらと言えるものだとジョスリンは感心する。

「舌噛みそうだな、その名前」

そんな感想をもらすジョスリンにアリッサは片目でにらみつけた。「ジョナタ・シルヴェストリって、そんなに言いにくいかしら」

そりゃ、多言語を容易に操るアリッサであれば読みづらくないだろう。

真面目な顔でつぶやいた彼女は、そうしてから床に視線をさまよわせる。

「ジョナタ・シルヴェストリの部下が、アレクシス・ヤオ。わたしに関係した全ての人間を殺そうともくろんでいるのよ」

全ての人間を殺そうとしている。

「それは、俺も含めて全てに人間ということか？」

「そうよ。パン屋も、ケーキ屋も、スーパーマーケットのパートのおばさんも。全員殺そうとしているのよ。秘密裏に、ひっそりと、ね」

忌々しげに彼女はつぶやく。

おそらく、アリッサは誰かを殺されることが不愉快なのではない。自分と関わっただけで殺される、という事実が不愉快なのか。

そんなことを思ったが、そうではなかった。

アリッサは強く中空をにらみつけた。

「わたしと関わったから殺される、というなら、きっとわたしの大

好きなシンも殺される。シンが殺されるなんて許さない。シンのことだけは守らなくちゃ……」

シン、とアリッサは言った。

じっと考え込むように口をつぐむ。

「シンを殺すなんて、絶対に許さないわ。誰が、正しくたって、シンを不幸にする奴なんて許していいわけがない」

呪いを唱えるように彼女は繰り返す。

ジョスリンはそっと目を細めた。

「俺たち、よりも、自分の命よりも、綾瀬のお嬢様が大切か？」

なにもかもをさしおいて、それでもアリッサは綾瀬臣が大切なのかと問いかける。

「当たり前よ、わたしの命なんて、シンの命と比べたらゴミみたいなものよ……っ！」

アリッサは叫ぶようにそう言った。

「……ああ、そう」

アリッサの、綾瀬臣に対する思い入れは今も昔も変わらない。

あきれかえった彼らの様子を意に介することもなく、アリッサはなにやら綾瀬臣の魅力について熱く語っている。

確かに、とジョスリンとジャッキーは世界でも有名な綾瀬臣の容貌を思い浮かべて内心で頷いた。

どこか物憂げな、そして誰も異を唱えることなど許されないような圧倒的な美貌を持つ日本人の娘。

滅多に表舞台に立つことはないと言われている、世界に君臨する女性。

「それで、シン・アヤセのことはいいから、説明してくれないか？とりあえず、当面の敵のほうを」

額を押さえたジョスリンに促されて、彼女は瞬きをした。

「……あ、ごめん。忘れてた」

けろりとつぶやいた彼女は、行儀悪く揺らしていた膝をあわせるジョスリンとジャッキーを見上げた。

思い切り論点が外れたのは、昔のアリッサならばよくあることだった。

「つまり、黒幕はジョナタ・シルヴェストリだってそう言ってるよ」

言っていることは理解できる。

「それで、そのシルヴェストリをどうするつもりだ？」

「そうね、はっきり言ってるさ、人形計画を推進してる研究員たちのほうもジョナタ・シルヴェストリを面白いとは思っていないわけ。もしも、わたしがシルヴェストリを殺したとしても人形計画のほうでもみ消してくれる」

静かに言い放つ彼女は、ジョスリンの胸ぐらを、幼いアリッサとは異なる少し大きな手でつかんで引き寄せる。

「要するに、あいつを殺してもわたしたちにはノーリスクってことよ」

アリッサはにたりと笑った。

「……人形計画？」

ジョスリンが、アリッサの語る内容の中にある単語に疑問を感じたのか単語を繰り返すが、金髪の娘はそれを黙殺した。

説明する気など最初からないだろうことは明白だ。

そんな彼女の反応を見て、ジョスリンは追求をあきらめる。

アリッサがこんな反応をするとき、それ以上追求したところで答えが返ってこないのは長いつきあいでは知っていた。

肩をすくめたジョスリンと、アリッサらしい娘を交互に眺めていたジャッキーは、ひとつ大きくため息をついてから額にかかる黒髪をかきあげた。

「なんでもいいが、要するに、アリッサは俺に仕事の依頼をしにきた、と理解していいんだろうな？」

ジョスリンの言葉に、アリッサは視線を滑らせる。

「そう。理解が早くて助かるわ。ちょうどジャッキーもいることだし、戦力を考えれば充分」

「……まあ、町ひとつづつぶせるあんたもいるしな」

ジャッキーがつぶやけば、アリッサは小さく首をかしげた。

「なに言ってるんのよ。この格好が見えないの？　今のわたしは万全じゃないわ。わたしがひとりで施設ごとターゲットを吹き飛ばせるとか思ってるわけじゃないでしょうね？」

馬鹿にするような彼女の口調に、ジャッキーは「え……？」とつぶやいた。

「じゃあ、どうするんだ？」

「自分一人じゃどうにもならないから、あんたたちに依頼しにきたんでしようが」

自分の能力を、アリッサは正確に把握している。

清々しいほどに。

だから、彼女はどこまでも冷静だ。

「わたしは、あんたたちみたいに、自分のことをそんなに買いかぶってはいないわ」

必要とあれば、協力者を仰ぐだけのことだ。

「それで、ジョナタ・シルヴェストリと、ほかの指揮系統を握っている連中は何人くらいいるんだ？」

「幹部クラスは数人よ。その数人で、事態を動かしているの」

アリッサは足を組んでから息をついた。

「ところで、なんでそんな情報を知っているんだ？」

ジョスリンの当然の疑問に、アリッサは顔を動かすこともなく目だけをぎよろりと動かした。

「わたしには協力者なんて山ほどいるし。わたしのクローン体の中だけでも、奴らに拉致されているのが何体か、ね……」

含みを持たせた彼女の言葉に、ジャッキーは嫌悪に満ちた光を瞳にちらつかせた。

「クローンって……」

アリッサの話を聞いていたジャッキーは言葉もなく絶句している。クローンを作り出すことは、人の命をもてあそぶことだ。

しかし、そもそも、クローンなど本当に作り出せるのだろうか……？

そんなことを二人の男たちが考えた矢先だった。

「ひとつだけ言っておくけど、クローンが人間の形をしているなんて甘っちょろいことを考えないほうがいいわよ」

なにやらぞっとすることをアリッサが告げたような気がする。

彼女が考えていることも、感じている事も、ジョスリンにもジャッキーにも理解なんてできるわけがない。

「……ヒトの姿を、していない……？」

それがどういうことなのかわからない。

そして、そんな言葉をあっさりと告げる彼女の表情が全く変わらないことに、なぜだかジャッキーは鳥肌がたった。

戦場で感じるような、命のやりとりとはまた異なる恐怖。

背筋がぞっとした。

国家ぐるみで画策される陰謀とはなんなのか。

「だって管理するのにヒトの姿である必要なんてないじゃない。勝手に動き回られるほうがよっぽど邪魔で仕方ないでしょう」

そこまで言うてから、アリッサはひとつ呼吸をついた。

「あいつらは、第二次生体兵器研究プロジェクトでそんなことは学んだみたいね」

皮肉げにそう言って、アリッサは笑った。

まるで人ごとのようだ。

「わたしみたいに、勝手に物事を考えて、勝手にいろんなことを感じて、そして勝手に動き回るモルモットは邪魔なだけなのよ」

制御することのできない兵器など必要ではない。

「あんたたちが、どう思っても、わたしは兵器なのよ」

それだけのこと。

そう告げてアリッサは睫毛を伏せた。

自分が兵器であるという現実に対して、アリッサが怒りも悲しみも感じていないことは明らかだ。

まるでそんなことには興味がないと言わんばかりの態度だ。

しかし、ジョスリンにも、そしてジャッキーにすら、彼女の言葉を否定することができない。

彼女がアメリカ合衆国という国家によって作り出された兵器であろうがなかろうが、同じなのだ。

彼女自身と。

作り出されるためにかけられた金銭が違うだけではないか。

ジャッキーも、ジョスリンも、そうあるべきと国家によって特別な訓練を受け、そうして最終的に殺人マシーンとして「作られ」た。自分たちと、アリッサは違うようで同じ存在……。

そんなことを思った。

戦争があるから、兵器が生み出される。

戦争があるから兵器が必要となるのだ。

だから、そこにジョスリンがて、ジャッキーがいる。

そうして、アリッサという兵器がある。

以前、幾度も彼らが目の当たりにしたアリッサの異常性は、戦争のための手段の一つとして作り出された兵器であると告げられれば、それはなんら不思議な話ではない。

むしろ納得すらできるといふものだ。

彼女の異常な強さは、兵器故なのだ、と。

「……兵器」

アリッサの発言は、説明の一切が省かれているからひどく不親切だ。

しかし、そんなことを詮索してはいけない。

アリッサを含めて、ジョスリンやジャッキーが生きている世界では、不用意な詮索は命取りになる。

だから、彼らは聞かない。

聞いてはならない。

ジョナタ・シルヴェストリ。

彼が黒幕だとアリッサは言った。

しかし、簡単に殺せるほどセキュリティが甘いとは思えない。

仮にもアメリカ国土安全保障省の上層部にいる人間だろう。

反撃を予想していないはずもない。

少なくとも、アリッサの周りに存在するのは弱々しい一般人ばかりではない。

無法者のほうが多いと言っているだろう。

要するに、それすらも覚悟しているということだ。

アメリカ国内で戦争がはじまる。

それを覚悟していなければ、アリッサに心酔する裏社会が多いというのに、その核となる存在を消そうとすることなど考えられない。

「……それだけの、覚悟をしている、と、そういうことか？」

「そうよ」

応じた彼女はそこでいったん言葉を切った。

「そして一歩間違えば、自分の身にも危険が及ぶばかりじゃない。社会的に抹殺されてもおかしくない」

一般人すらも巻き込もうとしているのだ。

「なるほど」

それだけの危険を承知して、アリッサを敵に回したと言うことだ。そして、彼らにとっての誤算は、アリッサが黙って見ていなかったと言うことだ。

「わたしの意識はクローンの全てとリンクしているの。だから、わたしの分身があるところの情報は筒抜けなのよ」

「……まさか、そのシルヴェストリのところにもある、ということか？」

「そうよ、奴らは、わたしの一部を持っているの」

さもおかしいと言わんばかりの彼女の表情に、ジョスリンは絶句した。

「戦争を始める前に、あいつらは最初から情報戦の時点で負けてるのよ」

くつくつと喉を鳴らす。

「なのに、あいつらよくもやるわよね。このわたしに、戦争を仕掛けようっていうのよ？」

勝ち誇った彼女の表情に、ぞっとした。

背筋を駆け抜けるのは悪寒だ。

決して敵に回してはいけない相手を敵に回した。

「わたしのクローン体の全ては、人形計画で作られているのよ。それを奪っておきながら、奴らはわたしの存在を危険だとかぬかしたの。そして、わたしの能力を借りておきながら奴らはその能力でわたしとわたしに関わった人間たちを追跡して抹殺しようとしている」
全く茶番だわ。

彼女はそう言った。

「自分たちが、相手を手の内だと思っている愚か者。その追跡になにを使っているのかも分かっていない。そして、愚か者には人形計画の開発研究に携わる研究員たちだって情報を与えたりはしない。勝手に自滅するのを見守っているだけよ」

残酷な微笑を浮かべた彼女は、唇を長い指先でたどった。

愚か者だと、アリッサは突きつける。

「戦場にいる一兵卒だって、あんなに馬鹿じゃないわ」

残忍に。

冷徹に。

彼女は言い放つ。

真剣に、自らの命を賭して戦場に立ってきた若い兵士を何人もアリッサは見てきた。

「そりゃ、国で指揮取ってるおっとり刀の役人や政治家とはわけが違うからな」

自分の命を賭けて戦っているのは最前線にいる兵士だ。

国の主義主張とは関係なく、彼らは自分の命を守るために戦う。そうしなければ生き残ることなどできはしない。

「ほとんどの政治家は愚か者よ」

しかし、その「愚か者の政治家」がいなければ国家はまわっていない。

それも彼らは知っている。

「あー、もう。本当にアホらしい」

そう言いながら、アリッサは金色の髪をかき回した。

しかし、彼女は現在のアメリカ合衆国にあって、戦闘の天才だ。

ありとあらゆる戦闘を前にして、アリッサは最高の結果を叩き出す。

自分自身の持つ能力の全てを投入して。

それは、生きる残るための意志であったのかもしれない。

だからこそ、「火の鳥」はどんなに劣悪な戦況をも、彼女が参戦した限り、必ずひっくり返す。

悪態をつくアリッサの様子を眺めながらジョスリンは冷静に状況を分析した。

作戦を考えるだけならば簡単だ。

要するに、親玉を殺せばいいことなのだが、そういうことではない。

「ひとついいか？」

ジョスリンが問いかける。

「やだって言ったらどうすんのよ？」

彼女の言葉に、白人の男はやれやれとため息をついた。

もしも本当に「いやだ」と言われたなら、八方ふさがりに陥ってしまう。

「意地が悪いな」

「意地が悪くて結構よ」

ツーンと顎をあげて彼女は目をそらした。

かつてのアリッサと同じ仕草を見せる娘姿の女。

「アリサの本体は、どうなってるんだ？」

恐る恐る問いかける。

そんなジョスリンをアリッサがにらみつけた。

「……わたし、質問していいなんて言っていないんだけど」

どこまでも高飛車で威圧的な彼女。

「あのなあ、それがわからなかったらどうにもならないだろうが」
小さな、幼いアリッサ。

その本体。

彼女の体はいったい、今どうなっているというのか。

アメリカ合衆国の研究機関に人質を取られているようなものだ。

アリッサがそれを認識していないはずがない。

「仮に、あんたがそのことを知ったとして、あんたにどうこうでき
るとは思えないわ」

ばっさりと切り捨てるように言い放つ。

「わたしが、人質に取られていようといまいとやることはひとつじ
やない」

「それはそうだが……」

できれば最善の選択肢を選びたいと思うのだ。

傭兵がそんな思いを抱いてなにが悪いのだろう。

「……そんなに、わたしの状況を聞きたいの？ あんた、馬鹿じゃ
ないんだからわかりきってるでしょうに」

彼女が告げる。

そう。

ジョスリンには、ある程度の予想がついている。

ここに、アリッサのクローン体だという娘がいて、加えてアリッ
サの説明だ。

よほど鈍くなければ想像は容易なことだ。

「わたしの本体、EVE-000-782と呼ばれるオリジナルは、
今は冷凍睡眠下にある。電源を引っこ抜かれれば、それで、ジ・エ

ンド」

感情を見せない、まるで氷のそのような、冷たい水色の瞳を揺らすこともなく、アリッサが告げた。

「本体の命がつきれば、わたしの精神も同じように消える。残るのは抜け殻だけよ」

まるで自分のことではないような、彼女の言葉に、ジョスリンとジャッキーは言葉を失った。

絶句する。

まるで人事のような冷静さだ。

どうすれば自分の命の危険の前に、こんなにも冷静でいられるのか。

ジョスリンにも、ジャッキーにもわからない。

「……それ、は」

言葉に詰まった。

ジョスリンは呆然と視線をさまよわせたまま、首の後ろを手のひらでなでる。

「それは、人質どころじゃないだろうが……」

かすれた彼の声に、アリッサはにたりと笑った。

「どうでもいいわ。わたしには、関係ない」

そんなことには興味がない。

人の命も、自分の命も等しく同等の価値しかない。

なんらかのシステムダウンで命を失ってもおかしくない状況に彼女はさらされてきたのだ。

それでも尚、彼女は冷静に現実を見つめる。

青冷めたジョスリンに、娘姿のかつて最強と呼ばれた殺人鬼は自分のことであるというのに顔色一つ変えない。

しかし、ジョスリンはそんなアリッサに、どこかほっとした。

彼女の常人とは外れた情動は、年月を経ても変わっていない。

そのことに安堵する。

「……なによ、変な顔して」

アリッサは複雑な表情を浮かべている男を見やった。

「いや、アリッサだな、と思ったただけだ」

彼のそんな言葉に、アリッサはフンと鼻を鳴らす。

「わたしじゃなかったらなんなのよ。だいたい、わたしがもしわたしじゃなかったら、情報は全部当局に筒抜けになるわよ」

彼女の言葉に、ジョスリンは笑う。

実際は笑い事ではないのだが、正直に言えば、勢力図を考えると笑うしかないところに自分たちはいるのだ。

「笑い事じゃないだろう……」

あきれたジャッキーの言葉に、アリッサは「まったくよね」と相槌を打った。

孤立無援。

ジョージ・リートや、ブレット・オルコット、そしてエリザベス・マレーはFBIの捜査官だ。

これから犯罪行為を行おうというのに頼るわけにはいかない。

「まったくもって笑い事じゃないけど、笑っちゃうわよね」

アリッサはそう言う。

「でも……」

アリッサはぼそりとつぶやいた。

静かだが、どこかぞつとするようなアリッサの声は迫力を潜めている。

「……でも？」

「わたしたちは、味方がいないところで何度も戦ってきたはずですよ」

頼れる人間は自分だけ。

そんな戦場を彼らは駆け抜けてきた。

孤立無援の戦場など、今に始まったことではない。

「そりゃまあ、そうだが……」

彼らが戦ってきた場所は、公然たる「戦場」だった。

しかし、今回は違う。

アメリカ合衆国の首都、ワシントンD・C.で彼らは戦いに挑む。それを指揮するのは、アリッサ・ノースウッド。

火の鳥と呼ばれた傭兵だ。

本来、彼女は集団を指揮して戦闘を行うことはしない。そんな彼女が複数の人間に助力を仰いだということは、要するに、異常事態だ。

ありとあらゆる意味で。

「じゃあ、今更、動揺する必要なんてないじゃないの」

「……ところで、盗聴の危険性は？」

「そりゃ、ここはアメリカよ？ あるに決まってるでしょ」
簡素な男の部屋。

「……計画が漏れるんじゃないのか？」

「大丈夫よ」

アリッサが即答した。

アメリカでなくても同じだ。

世界中の国の、国家という国家。

企業という企業。そして個人という個人が監視されている。

だが、アリッサはそんなものを恐れたりはしない。

彼女の態度はまるでどうでもいいと言わんばかりの態度で、彼女を見つめる人間たちはそんな態度の数々に軽い不安を感じさせられた。

「大丈夫、心配いらないわ」

アリッサがつぶやいた。

空間を震わせるような声に、ジョスリンとジャッキーは顔を見合わせた。

「NSAの……、ね」

ひっそりと告げる彼女の言葉の裏になにかがあるのか。

彼女は言葉にはしないが、アリッサの言いたいことは想像に難くない。

短く告げる彼女の言葉は盗聴を警戒しているのか、それとももっ

と別な理由からか言及しない。

まさか、誰かに気を遣っているというわけでもないだろう。

「やれやれ、アリサの人脈はどこまで広がってるのかわからんな」

呆れたような男の言葉に金髪の巻き毛の娘はそっと立ち上がった。以前の彼女のような軽快さは見られないが、それでもなお、彼女のどこか優美にも見える仕草はぞっとするような冷やかさを感じさせた。

「要するに、人間は誰かに頼らなければ生きてはいけないということよ」

その言葉に秘められた意味とはなんなのか。

確かに、ジョスリンら傭兵たちも決してひとりで生きているわけではない。

ひとりで生きている人間などいない。

それは、おそらくアリッサも同じであり、そしてアリッサの言う政府高官たちも同様である。

その深すぎる意味を。

誰が理解などできるだろうか。

本当の、その言葉の意味はなんなのか。

本当に彼女が訴えたいことはなんなのか。

「……あんたの、筋肉でできてる石頭で考えたって、答えなんてでないわよ」

アリッサの言葉に、ジョスリンは現実に戻された。

「石頭で悪かったな」

言い返した彼に、彼女はそっと笑った。

嘲るような彼女の言葉。

「なにが気に入らない？」

ジョスリンは、娘の手をひいて彼女のどこか儂げな体を抱き寄せる。

彼の高い体温にアリッサははっとしたように顔を上げた。

「……どうした？」

そんな彼女の様子に、男はアリッサの瞳を凝視した。

「……」

長い沈黙が訪れる。

「なんでもない」

なんでもないと、無理矢理に自分を納得させようとする。

「言えよ」

男の命令口調に、アリッサは眉を寄せた。

「ごめんだわ」

言ってから男の頬を人差し指と親指でつまむと思い切りつねった。

「痛え……」

「嘘ばかり」

まるで押し問答だ。

そんな彼らの様子を無言で眺めていた元グルカ兵の青年は、ぷつと吹き出した。

「仲良いよな」

ジャッキーの言葉に、アリッサは目を丸くした。

ばかりとまるで放電現象が起こったかのような音が、アリッサの手元で上がった。

「仲良いなんて冗談じゃないわ、こんな男」

こんな男。

彼女はそう言った。

「似てるだろ、あんたたちは自分のことをよく知ってるからな」

「似てないわ」

アリッサが即答した。

そんな彼女の様子すらなぜだかかわいらしく見える。

天下の殺人鬼にして、世界最強の傭兵とも言えるアリッサ・ノースウッドに対して「かわいい」と思う自分も相当におかしいと思わなくもない。

「いや、似てる」

念を押すように言ったジャッキーを睨み付けてから、唇をとがら

せた。

「なによ、自分のほうが大人で何でも知ってるって顔してさ」

そんな彼女の言葉を、ジョスリンもジャッキーも否定しない。

そのたゆたうような沈黙の中に、アリッサが手を空中に振り上げた。

テールブルの面を思い切りたたいたアリッサは宙を睨み付けたまま声を張り上げた。

「わたしがこれからやることに、手を出したら、あんたたちと言えど、容赦しないわ。だから、見て見ぬ振りをしておいで」

冷ややかな声が響く。

それは、ジョスリンやジャッキーに告げているものではない。

そう言ってから、睫毛を伏せたアリッサは三十秒ほど沈黙した。

その短い沈黙はひどく重苦しい。

「さて。仕事の話しをしましょうか」

軽い音をたてて娘はソファに沈み込んだ。

丸腰でも戦うことができたアリッサ。

それは今でも恐らく変わらないはずだ。

「アリッサは武器なんていらないだろう？」

ジョスリンの台詞に、アリッサは長い金色の巻き毛をくるりと指先に巻く。

これで告げる言葉が物騒でなければ女子高生のようにも見えた。

「あんたたちの前にいるのが、アリッサだと本当に思ってるの？」

馬鹿じゃないの？」

目の前にいる娘。

アリッサと同じ遺伝子を持つ、少し成長した姿の彼女。

彼女の核心を告げない言葉に男たちは同様に首を傾けて考え込む。

「……つまり、その姿だとなにか支障があるということか」

ジャッキーの台詞に、アリッサは唇の端をつり上げた。

答えはない。

しかしそれが、肯定だということは誰の目にも明らかだ。

「まあ、そんなことどうでもいいのよ」

なんとかなるわ。

アリッサはそう言った。

「今のわたしじゃ、ひとりでもならないから、あんたたちのところに来てるんだから」

潔い台詞にジョスリンは苦笑した。

彼女は、ジョスリンが知り合ったばかりの頃からそうだった。

自分の能力の限界をよくわきまえている。

「なんだ、えらく素直だな」

「わたしはいつも素直でしょ。眠いときは眠いつて言うし」

確かに、自分の欲求には非常に素直だ。

自分の欲求を貫くことができる強さがあるとも言えるかもしれない。

「くだらないこと言っていないでわたしの話を聞いてくれない？」

「ああ、それもそうか」

まるでたった今きがついたとでも言わんばかりのジョスリンを片目で見てからアリッサは真面目な顔に戻った。

自分の命を賭けて作戦活動をするのだ。

真面目にならないわけがない。

どんなに軽口をたたいていたとしても、作戦を前にすれば、裏社会の最前線で戦う人間たちは真剣に向かい合う。

アリッサも、ジョスリンも、そしてジャッキーもだ。

長い腕と脚。

頭身の高い体。

どれもが男たちにはもの珍しい。

もつとも、直情的にその持ち主に対して欲情したりしないのは相手がどれだけ危険な人間であるということかを熟知しているためだった。

ターゲットはジョナタ・シルヴェストリ。

彼らが言うターゲットとは即ち、殺す相手である。

彼女らのような傭兵が私的な事情で殺人に手を染めるのはごく珍しい。

もちろん、自分自身の命が危険に晒されて、傍観している馬鹿はいない。

特に、命の危険に晒された人間が裏社会などと物騒な世界に属している場合、その際に選ぶ行動はさらに物騒だ。

彼らの存在は危険であるがゆえに、裏社会トップクラスと呼ばれる。

傭兵に思想はない。

傭兵に思想など必要ない。

思想はないが、彼らにも感情はある。

最も危険な戦場で殺すか、殺されるかという選択を強いられる傭兵たちは、自分自身の命は自分で守るしかない。誰も、彼らの命を守ってくれはしない。

それが現実だ。

誰も、自分のことを守ってくれないのだ。

戦いすら知らないけだるい暖かい温もりの中で生きていく人間には、誰も彼ら傭兵の生き方を知らない。

「全く、人間なんて自分の都合のよい世界しか見ていないのよね。どーせ！」

言いたいことを言うアリッサの様子にジョスリンは首都の地図を眺めたままで首をかしげた。

「どうでもいいが、お上は黙認してくれるのか？ 本当に？」

「大丈夫でしょ。あいつらがわたしに抵抗できるとは思えないわ」

あいつら、という言葉が誰を指しているのかはわからなかったが、

彼女は意外なところに意外なパイプを持っていることが多かったから、そこをジョスリンは追求しなかった。

「こいつは、私兵は持っているのか？」

「なによ、それ。どこかの映画の悪役じゃあるまいし、そんなのいるわけないでしょ」

私兵を持つ者などそれほど多くはない。

かつて彼女が仕事の依頼を受けたイランのイーサーは私兵を持っていたが、そんな人間が表舞台にそう何人もいるわけではない。

「映画の悪役、か……」

男の言葉に、彼女は目を上げる。

「しかし、それはアリッサこそ、悪役びったりなんかじゃないのか？」

彼の言葉に娘姿の金髪の、彼らのよく知る裏社会のトップクラスは額にかかる髪を指先でもてあそんだ。

「こんなにかわいい女の子が、悪役なわけないでしょう」

確にかわいらしい。

それは疑うべくもない。

「かわいいけど、中身は凶悪だな」

彼女の言葉を一蹴した彼は、ふと過去に存在した麗しい女性たちの殺人鬼を思い浮かべた。

イギリスのマリー・ベル。

同じくイギリスのマイラ・ヒンドレーやメアリー・ブランデュー。フランスのポーリン・デュビッソン。

ニュージラランドのポーリン・パーカーとジュリエット・ヒューム。

アメリカのベル・ガネス。

多くの狂気に取り憑かれた女たち。

しかし、殺人犯にはそもそも男女の別はない。

これだから女は、と苦虫を噛みつぶすように言う男尊女卑の男も多いが、これについては女の殺人鬼よりもずっと男の殺人鬼のほうが

が多いのである。

それこそ、性差によるものなのだろうか。

ジョスリンはそんなことを思った。

彼はプロファイラーでもなんでもない。

難解な心理学の世界のことなどわかりはしない。

「……まあ、顔の美醜なんてどうでもいいことだけでも」

アリッサは無表情のままですう言った。

女だから、殺人に手を染めないわけではない。

女だから人を恨まないわけではない。

「アリサ？」

ジョスリンに名前を呼ばれて、アリッサはけだるげに目を上げる。

彼女がなにを考えているのか。

男たちになど理解できるわけもない。

「……俺たちは、なにをすればいい？」

「わたしの援護を」

短く、彼女は告げた。

彼女がそんなものを求めることは少なかった。

本来の彼女であれば、街中で暗殺するのに援護など必要ではない。

自分以外、頼るすべのない混迷の戦場でのみ、彼女は援助を必要としてきたのだ。

そんな彼女が男たちに助力を求めてくる。

それが、どういうことなのか。

男たちは眉を引き上げた。

「なるほど、事情はわかった」

今の今まで黙り込んでいたジャッキーがそう言った。

「俺は、あなたを信じる」

ジャッキーは自分に言い聞かせるように独白した。

アリッサはそれに応じない。

無言のまま窓の外に向かって視線を滑らせるだけだ。

声もなく、アリッサは静かに息を吸い込んだ。

ぱちり、と無機質な音が響く。

アリッサと共に戦場に立ったことがある人間ならば、誰でもよく知っている音だ。

彼女の周りで炎が爆ぜる音。

そして、その音の違和感に、男たちは気がついた。

「……？」

怪訝な眼差しを向ける彼らはかすかに眉をひそめる。

その違和感の正体がわからない。

少なくとも、自分たちは彼女の敵ではない。

だから、多少の違和感程度では追求する気もなかったが、正体がわからない違和感であるが故にそれが不気味で仕方がない。

アリッサは、ジョスリンやジャッキーの敵ではない。

しかし、味方でもない。

ジョスリンとジャッキーが彼女の味方であるからと言って、その逆が成立するわけではないのだ。

それが彼ら三人の関係だ。

長い巻き毛の金髪をかきあげた彼女は長い息を吐き出すとソファに体を埋める。

少女とも言えない。

正しく大人とも言えない。

そんな印象の娘の姿のアリッサ。

「国境・運輸安全局」

ぽつりとつぶやかれた彼女の言葉。

「……うん？」

「ジョナタ・シルヴェストリはその人間」

国土安全保障省国境・運輸安全局。

聞き返したジョスリンに、アリッサは静かに告げた。

唇が歪んだ。

彼女が笑う。

皮肉げに。

「わたしを、敵に回したことを、後悔させてやる」

言い放った彼女に、その場にいた男たちはぞっとして背筋を凍り付かせた。

国土安全保障省の本部はワシントンD・C.のネブラスカアベニユー三八〇一番地の合同庁舎内にある。

割と有名な既成事実だ。

そこに在籍する人間を標的にするとすれば、ワシントンD・C.に住むアリッサには割と簡単なことだ。

彼女が万全のコンディションにあり、その気になれば、首都を半分ほど壊滅させるのは割合簡単なことだった。

「……やれやれ」

壮年の男がつぶやいた。

デスクに肘をついたままで男はため息をつく。

灰皿に放り込まれた葉巻に視線をやった。

「困った子だ」

苦笑した。

自分の肩をたたく。

「アリッサ、か……」

誰がつけた名前なのか、まったくかわいらしい名前だと彼は思う。

それほど遠くはない過去、彼が彼女と知り合った頃。

その当時の彼女は、まだ「エレーネ」と名乗っていた。

頭につけたヘッドセットを外しながら、彼は窓の外を眺めた。

「アリッサ、わたしは君の無事を祈ってるよ」

彼がいるメリーランド州から、アリッサの住んでいるワシントンD・C.はそれほど遠くはない。

距離的にはそれほど遠くはないが、彼女が心配だからと安易に駆けつけられるほど近い距離にいるわけでもない。

なによりも彼が「殺し屋の火の鳥」を公然と助けることなどでき

はしない。

長い長いため息は、そうして夕方の空気の中に静かに消えていく。シートの上にもたれかかった彼は閉じた瞼を親指と人差し指で押さえた。

「わたし、あんたなんか大っ嫌いよ！」

昔、会ったときの彼女に放たれた言葉を思い出す。

アリッサは決して他人に心を許したりはしない。

そう思われがちだ。

ほとんどの警察関係者がそう思っているだろう。

しかし、そうではないことを彼は知っている。

「君も大概素直じゃない」

独白めいた言葉が室内に消えていく。

アリッサは冷徹だ。

関心を持たない人間にはにべもない。

彼女にとって関心がない人間というのは、要するに、殺してもいい人間だということだ。

強大な恐ろしい能力を持つ彼女がどうして生まれたのか、それらの理由も、出生もなにひとつ彼は知らない。

しかし彼にとってそんなことはどうでもいいことだ。

アリッサと男が出会うきっかけは、とある情報にまつわる事件だった。

まだ、アリッサの味方らしい味方がそれほど多くなかった頃だ。もちろんアリッサ自身がその情報に直接関わっていたわけではない。

彼女を主に追いかけていたのは警察組織であって、諜報機関ではない。

「……わたしの邪魔するなら、殺す」

炎の向こうから、アリッサは歩いてきた。

ゆっくりと。

そして彼女は口元だけでやっとわかる程度につぶやいたのだ。

物騒な言葉を吐き出したかつての少女。

彼は、彼女に圧倒された。

自分は、肉体派ではない自覚はあった。

とてもではないが、彼女とは戦闘力でかなうことはないと思っていたから。

だから、彼は彼女に圧倒される。

「邪魔をしたいの？ それともわたしが怖いの？」
どっちなのか。

まだ、彼女がアリッサと名乗ってはいなかった頃。「マジックボム」と呼ばれていた小さな金髪の巻き毛の少女。

彼女の邪魔をしようとは思っていなかった。

邪魔をしようと思っていたわけではない。しかし、アメリカ合衆国の秩序の番人のひとりとして、男はアリッサを野放しにすることなど許されるはずがなかった。

「……なによ。どうせ、わたしを止めることが自分の使命だとも思ってるんでしょ」

後にアリッサと名乗る少女はそう言った。

アリッサ・ノースウッド。

その名前をつけたのは誰なのか。

そんなことを男は考える。

彼女が自分の名前に頓着するような性格ではないことを、後になって知った。

自分が名前を持たないという状況に、彼女は慣れている。

慣れている、という表現は正しくないのかもしれない。しかし、

彼女は明らかに自分の置かれた状況になじんでいた。

まるで、「大人は自分のことを理解してくれない」とでも言うかのような子供でもあるように。

彼女はそう言った。

「なによ……」

どうせ、なにもわかっていない。

眉尻を引き上げた彼女は唇の端で薄く笑う。

ピンク色の形の良い唇が残酷な冷ややかさをたたえていた。

彼女の、本当の表情。

「どうせあんたたちは、わたしのことを知らない。わたしのことなんて誰も知らない。あんたたちは、わたしの手だけが血で染まっていると思ってる……」

まるで、地を這うように冷ややかに彼女は言った。

「お、俺は……」

まだ若かった彼は彼女と相対して言葉を発することもできないまま固まっていた。

なにもできないまま、男は彼女を見つめているしかできない。

「テロリストを見過ごすことなんてできない……」

途切れるような彼の言葉に、彼女は静かに足を踏み出した。

「貴様は、アメリカの敵か？」

小さな子供に、彼は気圧されたままで問いかける。

本来であればアメリカ合衆国国家安全保障局に在籍する彼が圧倒されるようなことではなかった。相手はただの少女だ。

少なくとも、外見はただの少女でしかないというのに。

彼女に釘付けにされた瞳が反らせない。

「……アメリカの敵？」

言いながら不遜に笑った。

その笑いに、男はどきりとして肩を揺らす。

「わたしはアメリカの敵なんかじゃない」

少女はそう言った。

一見しただけでは、少し大人びた彼女がませた言葉使いで話しているようにしか見えないというのに。

その迫力は尋常なものではない。

彼女が、自分はアメリカの敵ではない、と言ったことになぜだかほっとして、彼は胸をなで下ろした。

彼女の異常性を当時の彼が知っていたわけではない。

「たぶん、俺はわかっていたんだ……」

ぽつりと男は無人のオフィスでつぶやいた。

アリッサの。

マジックボムと相対して、頭の片隅でわかっていた。

彼女相手に、自分などではかなわないと知っていた。

マジックボムがアメリカの敵ではないと思っていたかっただけ。

「わたしは、世界の敵。世界は、わたしの敵。なにもかも許さないし、わたしは許すつもりもない。絶対に、許さない。絶対に認めない」

強い憎悪と怒りをちらつかせた水色の瞳に魅入られた。

激しく燃え盛る炎のような彼女の感情に煽られていた。

「わたしは世界の全てを許さない……」

なにも知らず、なにも見ずに。

なにも理解しようとすらしない。

そんな世界を許したりはしない。

「こんなわたしを、誰も救ってはくれなかった……」

全てをあきらめきったような彼女の言葉。

全てを呪い、全てを憎んだ彼女の心。

どうすれば彼女のような存在が生まれることになるのかは知らない。

声を上げて炎の中で揺らめくように笑っていた。

炎の使い魔。

炎を従える赤い竜。

なにかおかしいのか、彼女は笑う。

「誰も許さない。誰も、わたしは許さない。みんな、殺してやるのよ……」

安穩とした世界を彼女は憎悪した。

強く、強く……。

まるで揺らぐ炎だ。

ゴォツと音をあげたのは彼女の足元。

まるで火炎が渦を巻くように黄金の巻き毛の少女は空を仰いだまま笑っている。

あんな風に笑った彼女を誰が変えていったのだろう。

そんなことを考えて、男はデスクに肘をついたままで鼻で息をつくようにしてほえんだ。

あんなにも残酷で、冷徹だった彼女は明らかに変わっていった。

「どうすれば君をそんな風に変えられる人間がいるのか……」

彼女の心を変えた人間とは誰なのか。

ふわりと誰もいない空間に笑いかけて、彼は立ち上がった。

彼は窓の外の空を見つめたままで息を吐き出す。

遠く、ワシントンD・C.の空の下に彼女はいる。

なにが正しくて、なにが間違っているのかわからない。

男は、窓に寄りかかったままで目を伏せると額に落ちてくる髪をかき上げた。

まだ、「彼女」は動いていない。

アリッサ・ノースウッド。彼女は、一般的な人間たちの想像を軽々と超えていく。

それこそが、アリッサの強さの証明。最強と謳われる殺人鬼。

愛らしくて、優しい……。

アリッサをコントロールしようとして、躍起になっている人間たちがいる。

かつて、彼女はその現実には強い怒りと憎しみを感じて、生体実験の爆破事件とケース・アングリーボマーを引き起こした。

彼女の尊厳を踏みにじり、彼女の命を軽んじた人間たちに鉄槌を振り下ろした。

「彼ら」は二の轍を踏もうとしている。

アリッサの怒りは誰にも沈めることはできないのだから。

カフェのオープンテラスでアイスコーヒーを飲むアリッサは長い足を扱いづらそうに組み直した。

彼女はまだキャサリンの体に慣れていないらしい。

隣には、ジャッキーがいる。

どこかまぶしそうにジャッキーは娘の横顔を見つめた。

彼女は、憧れの存在だった。

火の鳥と呼ばれた彼女に憧れた。その暗号名を聞いたときはまだ、彼女があんなにも小さな幼い外見の少女だとは思っていなかった。

今のアリッサは娘の容姿をしているが、ジャッキーにはそれがなぜか受け入れられない。

自分が幼児趣味のつもりなどはない。

しかし、キャサリンとアリッサが同一の存在とはとても思えない。

「なにを望んでいるんだ？」

ジャッキーに問いかけられて、彼女は視線を滑らせた。

「……なにも」

なにも望んでいない。

「……」

彼女の言葉を否定したくても、ジャッキーなどには否定できない。彼女の言葉を否定することができる人間などそれほど多くはない。短くつぶやいた彼女は、アイスコーヒーストロウに唇を寄せると考え込むように睫毛を伏せた。

美しい横顔の彼女。

アリッサではない。

ぎすぎすとした彼女の空気を、ジャッキーは知っている。

戦場を駆け抜けたかつてのアリッサは今よりもっと殺伐としていた。

冷たい氷のような彼女の心。

「なに？」

ジャッキーの眼差しに、アリッサは小さく首を傾げた。

「なんでもない」

彼女に憧れて、彼女の力になりたいと思っていながら、ジャッキーにはなにかをしてやれることなどできない。

「あっそ」

彼の思いを汲もうという努力すらアリッサはしない。

「アリッサは、あのFBIの捜査官が好きなのか？」

唐突な彼の言葉に、アリッサは大きく目を見開いてからジャッキ
ーを見つめ直した。

「……はあ？」

なにを言ってるんだと。

アリッサは無言で告げる。

「FBIの捜査官って、誰のこと言ってるのよ」

呆れたような彼女の声に、ジャッキーは肩をすくめる。

「いつもアリッサをかまってる捜査官だよ。あのほかでかい」

長身の狙撃手。

確かにジャッキーからすればかなりの長身だ。

「……ジョージのこと？」

「そう」

通りを横切る通行人や車両を見つめながらアリッサはジャッキー
に応じる。

「別に、わたしは誰のことも好きじゃないわ」

予想通りの言葉をアリッサは返す。

問い詰めたところで、言わないと決めた彼女が答えることもない
とネパール人の青年は知っていたから曖昧な表情のまま髪の毛をか
き上げた。

誰のことも好きじゃない。

おそらくそれは本音だ。

「ジョージのことは、大嫌いよ」

ぼつりとつぶやいた彼女に、ジャッキーは瞠目した。

静かに、何の感情も見せずに告げたアリッサは、まるでガラスの
湖面のようにも見える水色の瞳で通りを眺めていた。

冷徹でもない。

憎しみも、怒りもない。

けれど、楽しげでもなんでもない。
無感情な、静かな湖面。

「……ホント、あいつ馬鹿よね」

感情を感じさせない声色。

そんな静けさに満ちた彼女の表情を、ジャッキーは初めて見た。
嘆く感情もない。

泣くための涙すらない。

悲しいほどの孤独の中に彼女は居るのだということを実感させられる。

「本当にあんたたちも、あいつらも、大馬鹿よ」

アリッサは息を吐き出すと立ちあがった。

どこか悲しげな、寂しげな彼女の横顔。

そんな表情の彼女を、ジャッキーは知らない。

ゆらりと、夏の日差しの下で、アリッサの周囲で陽炎が立ち上る。

ゆらゆらと空気が揺れている。

ばち、といやな音がした。

悲鳴が聞こえた。

踏み出した娘姿のアリッサの足元でアスファルトが焼ける。

「おいっ！ おまえっ！」

男の声だ。

ジャッキーが振り返ると警察官らしい男が異様な雰囲気 of 彼女に
駆け寄ろうとしていた。

白いサマードレスを着た彼女が、声がした方向を振り返る。

金色の髪が流れた。

揺れる。

水色の瞳が滑った。

こんなところに都合良く警官がいるわけがない。

つまり、そういうことだ。

制服警官だけではないだろう。

多くの私服警官が配置されているのはわかっている。

「ジャッキー、適当に邪魔してくれればいいわよ」

「了解」

彼はネパール人だ。

明らかな犯罪行為を犯せば、出国できなくなる。

それだけならばまだいい。

彼女のように、アメリカ当局と司法取引をしているわけではない。ひとりの警官が動いたのが合図になったように、ざわめきがさざ波のように広がっていく。

無線を使って連絡を取ろうとしている警官もいる。その警官の男の体に炎が宿る。

「え？」とか「あ？」とか言っている間に、一気に炎は燃え上がる。

青く、紫に。

アリッサは拳を握った。

同時に彼女の周囲で火柱があがった。

「うあっち……！」

びくりとジャッキーは大股で炎を避けるとそのまま大きく飛び退いた。

彼女が本気になったとき、気をつけなくてはならないのは自分自身の身の安全だ。

それを、ジャッキーは戦場で何度となく体験している。

最も気をつけなくてはならないのは、自分の保身の方法だ。

警官も、一般人も関係ない。

アリッサの近くをたまたま通りかかった自転車に乗った少女も運悪く巻き込まれた。

しかし、ジャッキーはそんなことを気遣ったりはしない。

戦場でなによりも大切なのは自分の命だ。

だから、彼は激戦区でそうするように目を伏せるだけだ。感情を切り捨てる。

自分の命を守れと、本能が告げている。

だからジャッキーはそれに従った。

自分の命を守れない平和ボケした人間の、野生を捨てた報いだ。そうだからアリッサのそれに巻き込まれたのだと、彼はひとりで納得する。

急ブレーキを踏む、ヒステリックな音が聞こえる。

衝突し、歩道に乗り上げる。

中には歩行者と接触した車両もあったようだ。

しかし、アリッサの表情は動かない。

ジャッキーにはそう見えた。

冷たく、氷のような怒りに支配された彼女の横顔。

そんな車両の中に、一台の高級車があった。

黒い高級車だ。

アリッサがゆっくりと近づいていく。

ローヒールのサンダルを履いた足がアスファルトを踏んだ。

火の玉に突っ込む形になった何台かの車は気の毒に轟音をあげて爆発する。

黒い高級車は幸運にもそれは免れたようだった。

「なにが起こったんだ」

状況を把握できずにドライバーや多くの同乗者たちが車から降りてきた。

そんな人間のなかのひとりがジョナタ・シルヴェストリだった。

高価そうなスーツを着た男は首をさすりながら革靴を道路におろして、目を上げる。

その瞳と、アリッサの水色の瞳が交錯した。

ぎくりと、ジョナタ・シルヴェストリは肩を揺らす。

「あらあらあら。小娘ひとりにないを緊張してらっしゃるの？」

大人びた台詞が彼女の口から吐き出された。

彼女の容姿。

彼女の存在を、彼は知っている。

「お、まえは……？」

こわばった彼の声に娘は声もなく静かに笑う。

「誰か、なんて知ってるんでしょ？」

娘の唇が歪んだ。

ゆっくりと歩み寄る娘の姿はまるでスローモーションのように。

彼女と彼の周りでは、喧噪が渦巻いているというのに、彼女と彼の間にはまるで空間を切り取られているかのようなようだ。

護衛か、部下だろうか。

それとも運転手か。

ジョナタ・シルヴェストリに近づこうとする彼女に、男が制止の声を上げた。

アリッサが背後に向けて腕を一閃した。

半円を描くように彼女の細い腕が舞う。

空気が焦げた臭いを放つ。

まるでその光景は煉獄にほうりこまれた人間だ。

ぎょっとして、それを見物していた民間人が逃げ出していく。

いや、見物していたわけではない。

違う。

目を放せなかったのだ。

硬直していた人間たちが腰を抜かすようにして脱兎の如く走り出す。

一瞬で黒こげになる男が聞くに堪えないような悲鳴をあげる。

悲鳴はすぐに終わった。

骨まで灼かれて崩れ落ちる。

頭蓋骨さえ残さずに、燃え尽きる。

まるで映画か漫画のワンシーンのようだ。

「ケース・アングリーボマー……」

アリッサが独白してフフと笑う。

「わたしの邪魔をする奴は殺してやるの。みんな殺すの……、全部殺してやる……」

指を伸ばす。

彼女はそつとジョナタ・シルヴェストリの頬に触れた。

頬に触れてアリッサが笑う。

すでに男は蛇ににらまれたカエルだ。

身動きすらできない。

「あんたたちが、言ったのよ。わたしは兵器だから危険だって」

危険だと言った。

そう言っていた。

不意に、空気を切り裂くような金切り声が響いた。

笑い声だ。

神経質な笑い声。

狂気にも似た、笑い声。

それを聞いたジャッキーはかすかに眉をひそめる。

彼女のそんな笑い声は聞きたくなかった。

火柱。

まさにそんな形容がふさわしい。

悲鳴すら上げることなく、ジョナタ・シルヴェストリを燃やし

尽くす。

本来、キャサリン・キーンの肉体ではアリッサのような高火力は再現できない。そのようには設計されていない。

彼女の周囲のわずかを燃やし尽くすだけの火力が精一杯だ。それでも、その火力はキャサリン・キーンの脳に負担をかける。

無理なパイロキネシスの使い方をしているのだ。

当然の結果。

ふと、アリッサの体がくずおれた。

アスファルトに膝をつく。

そのまま片手で頭を押さえた。もう片方の手は路面についてなんとか体を支えようとしている。

ジャッキーは慌てて立ち止まる。

しかし、彼女に関わってはならない。

今は、アリッサの選択を信じるしかできはしない。

両目から。

両耳から、そして鼻腔から。

血が流れる。

まるで出血熱に感染した患者のように。

ぬるつく手のひらをアリッサは見つめて苦笑する。

火柱の中に、誰も近づけない。

そのとき、ジャッキーの持つ携帯電話が鳴った。相手はジョスリンだ。

「ひけ」

通話ボタンを押したジャッキーに男の声が響く。

遠距離から何発か狙撃したのは彼だが、直接的に手を下したわけではない。あくまで援護しただけだ。

「……けど！ アリッサが……！」

「ひけ、それ以上関わるな。それをアリッサだと思うな」

静かに、低くジョスリンが青年に告げる。

言外にジョスリンは言っているのだ。

それは、アリッサではない、と。

その場を立ち去るべきか否か。迷ってアリッサを振り返ったジャッキーは思わず背筋を正した。

ジョスリンと電話をしている間に、全ての事が終わっていた。

耳と鼻から流れる大量の出血。

アスファルトの上に倒れた金色の巻き毛の娘。

その出血の量から見て、致命的な量であることはジャッキーにはすぐにわかった。

かすかに、娘の唇が動く。

白目を剥いて倒れている彼女の体。

やがて、炎は娘の体を取り囲みそうして灰へと返していく。

それすらも計算していたのか。

ジャッキーは息を吐き出すと人混みに紛れるようにしてその場を立ち去った。

感慨を抱いてはいけない。

感情を傾けてはいけない。

渦を巻く炎の奥で、全てが灰になる。

彼女は決して相打ちなどしないことを、ジャッキーは知っていた。

＊

「……止まらない」

EVE-000-782の棺の前で、研究員の男は呆然とつぶやいた。

異変は六時間ほど前からはじまっていた。

EVE-000-782の脳波が異常な活性化を示したのだ。

彼女のコントロールをするために、鎮静剤を投与しようとするが、それらはコンピューター上から全てのアクセスを拒絶された。

すでにシステムとの格闘をはじめて長い時間がたっていた。

EVE-000-782の身体機能を回復させるための処置をコンピューターが勝手に行っていく。

ゆっくりと確実に。

冷凍睡眠下にあるEVE-000-782を、一瞬で目覚めさせることなどできはしないと、人形計画の研究員たちは高をくくっていた。

外部からのアクセスの全てを拒絶するコンピューターに、男は部下を怒鳴りつける。

「どこから干渉されている！」

「干渉は二三カ所同時に行われています」
動揺した部下の声。

二三の場所から干渉を受けている。

そう告げられてはっとした。

EVE-000-782のクローン体は二三カ所の施設に安置されている。

その総数、五四体。

オリジナルをコントロールする双子のようにろくに動けない個体もいれば、脳組織だけのものもある。

「まさか……」

いくら、オリジナルよりも弱くデザインされていても、五四体もいればその処理能力は大きなものだ。

全てのクローン体を、EVE-000-782は連結して自身の冷凍睡眠を監視するコンピューターに干渉したのだ。

ガラスの向こう側で、白い肌の金髪の二人の少女が虚ろな目を開いていた。

耳から、目から、鼻から。

赤く染まる血液を垂れ流している。

クローン体の全てを犠牲にして、EVE-000-782は目覚めようとしている。

「体温が三六度超えています……！」

呆然と男たちは棺に眠る少女を見つめた。

ピンク色の唇とバラ色の頬。

カチと音が響いた。

「待避だ！ 待避しろ！ EVE-000-782が目覚めるぞ！」
立ち上がりざま、男は警報装置に拳をたたきつけた。

炎の化身。

金色の巻き毛が、棺の中で揺れる。

監視室から走り出た研究員たちは背後で隔壁が次々と降りていく音を聞きながら息を切らす。

助かった、とそう思ったのかも知れない。

研究棟の外を見ることもなく、男たちの意識はそこで途切れた。

第六章 殺人鬼とサイコパス 1

「無理でしような」

男の声に、グレイシアは笑う。

「……事後処理はそちらにお任せしても？」

「そもそも、この一件は人形計画の一部と、ジョナタ・シルヴェストリの暴走によって引き起こされたもの。確かに、暁の夜明けの騎士団の件も鬱陶しいことではあるが、EVE-000-782をコントロールすることなどどだい無理なことだ」

ため息のような言葉に、ブルネットの女はモニターに映し出される映像を見つめる。

炎を巻き上げるビル。

まるで、かつての爆破事件のようではないか。

あのときも、彼女をコントロールしようとして、結果的にEVE-000-782が暴走したのだ。

「だから放っておけと忠告しましたのに」

すでにチャンスは逃しているのだ。

本気で彼女を殺したいのならば、個人の力では無理だ。

EVE-000-782を殺すことができたチャンスは、第二次生体兵器研究所の爆破事件が起きた時に、すでに失われている。

今、経験値を積んだ彼女を殺す手段があるとすれば、核ミサイルでもたたき込むしかない。

もしくは、彼女自らが死を選ぶときだ。

危険な生体兵器を野放しにした。

そして、その報い。

「危険だから殺す、など短絡的なこと……」

グレイシアは声を潜めて笑う。

確かに危険であることには間違いないのだろうが、彼女を殺すにはすでに機会は永遠にこない。

かの暁の夜明けの騎士団ですら、彼女を殺すことができなかった。そのように設計したのはグレイシアだ。

「……危険ならば、殺してしまえばいい。危険だから破棄すればいい。多くの人間がそう言いますが、彼女を危険だと知った上で、けれど、その力を切り札として欲したアメリカ合衆国の愚作」

人の心を持つ兵器など、ややこしい事態を招くだけだ。

「まして、そのクローンを作ろうなどと」

冷ややかにグレイシアは目を細める。

「どう思う？」

男に尋ねられて、グレイシアは首を傾けた。

「そうですね、EVE-000-782は本来人体発火能力に傾倒した個体。人の心へ対する反応はとても鈍くて、鈍化しているからこそ、容易に対象物を破壊する。そのEVE-000-782の可能性は、当時のラボでもわたしたちは目算しておりましたけれど……」

そこで女は言葉を切る。

「EVE-000-782にその能力の開発はしなかった。わたしたちは、彼女の未熟な精神では扱えないとわかっていたからです。今回、人形計画の連中はあれのクローンを大量に作成した。しかも、個体同士が連結している」

それがどういふことになるのかも知らずに。

グレイシアの忠告も聞かずに。

「わたしは、忠告いたしましたのに」

コンピューターによって管理された子供たち。

彼女らは、EVE-000-782自身だ。

いくらオリジナルが精神感應能力を開発されていなかったとしても、本来素質がある個体のクローンを五〇体以上も作成すれば結果は目に見えている。

彼女らは並列コンピューターのようなものだ。

深い眠りの中に陥ったEVE-000-782はそれを利用した。

つながれ、管理されたクローンに膨大な負荷をかけることを承知で、その命を足蹴にして、彼女は自分の本体を管理するコンピューターに直接アクセスしたのだ。

「目を覚ましたEVE-000-782は誰にも止められない。絶望してすり減った心が、なにをしでかすのか、誰もわからないのよ」ブルネットの女は冷ややかな言葉を放った。

EVE-000-782の危険性は、ずっと以前にグレイシアが言い続けてきたものだ。

その忠告も聞かずに野放しにしていた代償。

侮蔑するような光を瞳にひらめかせた彼女は、目の前のモニターをにらみつけるように見つめている。

EVE-000-782は、軽々と凡庸な人間の思考を越えていく。

それが、心を持つ生体兵器。

EVE-000-782。

かつて、アダムとイヴと呼ばれ、デザイン、開発された子供たち。そのなかでも、EVE-000-782は突出していた。

その能力も、特性もなにもかもが。

しかし、誤算も数多く存在していたことも事実だ。

現実として、コントロールできるはずだった生体兵器は制御することもできず、そして善悪の観念を植え付けられずに育った傑作でもあるEVE-000-782は、長い虐待の末に暴走を起こした。心のある人間としてではなく、自分たちにとって都合の良い実験体としてしか扱わなかった男たちは報いをうけた。

破綻し、ぼろぼろになった精神は寄る辺を失った。

「貴様が壊したんじゃないのか？」

「わたしがやったわけじゃない。おやめなさいと言ったのに、EVE-000-782がかわいいからと性的な虐待を繰り返したのはあいつらよ」

ふんと、グレイシアは鼻を鳴らす。

発達期の子供にそんなことをすれば、子供の心が破綻するのは誰の目にも明らかだったというのに。

そして、精神を病んだ生体兵器が暴走したときの危険性を考慮しなかった。

つまるところ、殺された人間たちは自業自得なのだ。

EVE-000-782が、自分を殺そうとした人間を返り討ちにしたのも同じことだ。

人間のみならず、動物の、自分の命を守ろうという本能が彼女を殺戮に駆り立てた。

ただそれだけのことでしかない。

人形計画は、第二次生体兵器研究所の後釜、と、その筋の人間たちからは評価されている。

しかし、とグレイシアは思う。

彼らとて、被験体たちを人間扱いなどしていないことは同じなのだ。

彼らは致命的な過ちを犯した。

自分を含めて過ちを犯したという自覚はある。

しかし、男たちは不安定な心を持つEVE-000-782に虐待を加えた。

多くのストレス要因と、過酷な実験に晒されてただでさえ安定感を欠いていた、その子供に、である。

「わたしは、女だから」

グレイシアはぽつりとつぶやいた。

そう。

自分は女だから、彼女に対して性交渉を求めたわけではない。

放置したことも罪になるのならば、そうなのかもしれないが、グレイシアは男たちが愚かだと思う。

「常にわたしが監視できてたわけでもないわ。あいつらは代わる代わるEVE-000-782を犯した。結果、夜も昼も、ひどいストレスに晒された彼女の心は破綻した」

多くの言葉をはしょったが、そんなことは些細な問題でしかない。「まあ、そういう性的嗜好を持つ男どもには良い環境だったんでしょうね」

グレイシアが嘲笑する。

「……児童ポルノで追求されなかったのか？」

そもそもの、EVE-000-782の暴走の元凶はそこにあるのではないか。

そんな男の言葉に、グレイシアは静かにそっと笑った。

「あれは人の形をしているけれど、人じゃない。社会保障番号もない。あれは、実験動物よ」

そんなものに社会からの保護などあるわけもない。

「彼女」はたまたま、実験の後期で生まれ落ちた。その恵まれた容姿と天性の才能、そして繰り返された実験によって開発された能力によって、EVE-000-782は研究所ではありとあらゆる意味で特別視された。

実験動物、という言葉に男は目を細める。

「成長しない人間なんているわけがないのよ」

実験動物。

グレイシアは言い切った。

幼い子供のままの姿で、成長しないEVE-000-782。

その姿ゆえに、人としての欲の一部が失われた。

それをグレイシアは気色悪いと思う。

人の形をしていながら、人ならざる存在。

「あれが正しく人間だと言うなら、人とはもしくは魔物に近いのかもしれないわね」

人間の命を遊ぶ実験から生まれ落ち、そうして過酷な実験と虐待に晒された子供の精神は、その心を支える杭を抜けば簡単に破綻する結果になるのだ。

そして、多くの人間はそれを知らずに、杭を抜いた。

その結果、引き起こされたのは、最悪の事態だ。

そう言いながら、グレイシアはそつと目を細めてモニターをにらむように見つめた。

「……殺すこともできないなら、いっそ放っておけばいいのに」

＊

マジックボム。

魔法の爆弾。

いつからか、彼女はそう呼ばれるようになった。

いつからか、自分はそう呼ばれるようになった。

自分に名前らしい名前はなく、ただ、ガーゴイルだけが、自分に對して「名前のようなもの」で呼んだ。

モルモットであり、実験動物。

自分は、人の形をしていながら、人として認められない被験体。

ならば、人とはなんなのだろう。

人という存在は、どんな概念の上にあるのだろうか。

同じ形をしていて、同じ遺伝子を持ちながら、人とは認められず

に、「最高の兵器」であると教え込まれて育った。

自分の上にのしかかる男の瞳を覚えている。

されたことは、痛くて苦しくて、涙がこぼれた。

つらくて泣いたわけではない。

ただ、生理的に涙がこぼれた。

自分は「ヒト」ではないから、つらいと思うことなどない。

悲しいと思わない。

ただ、その精神は平坦に形成される。

「実験の続きだよ」

男がそう言っていた。

実験の続き。

そう言って、彼らは彼女を連れだした。
服を脱がされ性交渉を「要求され」た。

彼女には知識でしかそれを知り得ず、自分が実験体であるというのに、どうしてそんな行為を求めるのか理解できなかった。

ただ、痛くて、苦しくて、そんな与えられた行為に彼女は泣いた。

「……痛いのは、イヤ」

苦しいことは嫌い。

苦痛を与えられて喜ぶ動物などいない。

痛いことや苦しいことは、野生動物が生きていくうえで、邪魔な感覚でしかないから、彼らはそんな感覚を麻痺させる。

痛みや、苦しさで動けなくなるということは野生において、「死」そのものを意味するということ。

だから、彼女も野生動物と同じようにそんな感情を切り捨てた。本能で。

生きていくために。

麻痺した感情を閉じこめて、彼女は生きる道を選びとった。

だというのに。

見返りを要求しない愛情に晒された。

彼女が生まれてこのかた、そんなものを向けてくる人間などいなかった。

だから、わからないままだった。

耳元で、ゴォツと渦巻くような風が巻き起こる。

彼女は我に返った。

「マーマ、今日ね足し算教えてもらったのよ」

「あら、すごいわね」

甲高い、子供ながらの声が聞こえた。

植え込みの陰から、EVE-000-782はあたりを伺った。夕方の駐車場。

スーパーマーケットで買い物をしてきたのだろうか。

EVE-000-782の指先でバチと電気が走るようなおとがたった。

他愛のない親子の会話。

とりあえず、今での経験上、裸で走り回るのは目立つばかりだ。
轟音が響いた。

一瞬で親子の首を吹き飛ばす。
倒れた子供のズボンとシャツを手早くはぎ取るとそれを身につけた。

小柄なEVE-000-782には少し大きい。

しかし、それで充分だ。

まるで豹のように。少女は駆け出す。

目的を達成すれば長居は無用だ。

警察が集まってくれば殺しは避けられない。

殺すことに抵抗があるわけではない。

ただ面倒な事態を避けたいだけだ。

ことが大きくなれば、おそらく軍隊が出動してくるだろう。

その程度のことはEVE-000-782に推測することは簡単だった。

天下のマジックボム相手にぬるい警察を出してくるなどとは思えない。

彼女はそれを知っている。

アスファルトに倒れた親子を振り返ることもせずに彼女は走った。
どんなに残酷な行為であっても殺人鬼と呼ばれた犯罪者は止まらない。

過去、ケース・アングリーボマーにおいてそうであったように。

彼女は止まらない。

死骸が二つ。

頭を吹き飛ばされているというのに血液は流れていない。

無惨に切断されたような首の断面はひきつるように焼かれている。
その「あり得ない」殺人手段こそが、マジックボムの犯行であることを如実に物語る。

意識の片隅で、悲鳴が聞こえる。

「おお、神よ……」

しかし、殺人を犯した本人はただなにも感じず走るだけだ。
神などいるものか。

EVE-000-782はそう思った。

走って、走り抜けて、幼い少女の形をしたEVE-000-782はやがて人の気配のない古びたアパートメントの一角で立ち止まった。

今は、誰の助けを借りるわけにもいかない。

生活の拠点があるわけでもなければ、資金があるわけでもない。

半ば苛つきながら、EVE-000-782は自分の金色の巻き毛を強くひいた。

その痛みが、自分の痛みであることを感じさせる。

肩の上で揺れる巻き毛を彼女はこうしてこんなにも短いのだろう、と不思議に思う。

かつては背中まであった長い巻き毛。

それは数年前の事件に巻き込まれたとき、暁の夜明けの騎士団によって刈り取られたのだ。

それを思い出した。

自嘲するように少女は笑った。

以前、自分が殺人鬼と呼ばれていたときは、誰の力も借りたことはなかった。

不利なすべての状況を、自力でひっくり返してきたではないか。

誰の力も借りれない。

そんなことは彼女にとっては障害にすらなりえない。

かつての、ケース・アングリーボマーから姿は変わっていないくても、確かに自分は経験を積み上げた。

過去の自分ができたことを、今の自分ができないわけがない。

壁に背中をついたまま、地面に座り込んだ少女は抱えた膝に顔を埋めた。長く運動などしていなかったためか、身体機能が著しく低下していることを感じる。

肩で息をするEVE-000-782は、物思いに沈むわけでも

なくそのままの姿勢で目を閉じた。

激しく自分の胸の底で燃え盛る炎がある。

まるで、煉獄だ。

身体機能が低下している今、かつてのように自分がパイロキネシスを振るえるのかという大きな疑問が残る。

人間の頭など吹き飛ばすのは簡単だ。

しかし、これから自分がしようとしていることは違う。

EVE-000-782のクローン体。

彼女らの能力は、自分が監獄から出るのに利用した。おそらくあれだけの高負荷に耐えられた個体はいないだろう。

実際のところ、彼女に閥知できるクローン体の精神波はない。

おそらく、全個体が死んでいる。

氷でできた監獄。

そこに、EVE-000-782はダイレクトアプローチを行った。

元々、精神感応力は鍛えられておらず、EVE-000-782単体ではそんなことはできようもない。

だからこそ、自分を元に作り出された個体たちを利用したのだ。ただただ淡々と。

「やあね、こんなところに。異常者の小娘が一匹」

冷ややかな声が響いた。

EVE-000-782は顔を上げる。

「なによ、顔色が随分と悪いじゃない」

ジーンズにシャツと言った格好の少女は、にたりと笑った。

「久しぶりね。生きてたんだ」

静かに、黒髪の少女の声が響く。

日焼けした彼女は小麦色の肌が印象的だ。

自分の不健康な肉体とは比べものにならない。

「マジックボム……」

「悪いけど、まだ記憶が曖昧なのよ。ずっと寝てたから」

黒髪の少女に応じた金色の髪の子供は、言い捨ててから膝に顔を埋めた。

相手のことを思い出せない。

しかし、不快だと思う。

彼女の存在が不愉快だ。

「ふうん……？」

ゆっくりと歩いてくる東洋人の少女は動じない。

金髪の子供に警戒はするものの、彼女が異常者だと知っていないが、歩みを止めない。

クローン体のひとりの意識を乗っ取ったことは記憶にあるが、まだ、それらの記憶がかけらのようにバラバラに飛び散ったまま。

「わたしの、名前を教えて」

「なあに？ 人に頼んでるのに随分と偉そうじゃないのさ」

どこか、ネジの飛んだ東洋人の少女の声色に、EVE-000-782は無反応だ。

なぜなら、知っているから。

東洋人の彼女は、自分よりも弱い。

それがわかっている。

だから動揺すらない。

「あんたの名前なんて、わたしの知ったことじゃないわ」

興味なんてない。

東洋人の少女はそう言った。

記憶の混乱に、EVE-000-782は眉をひそめた。

「そんなものに、あんたはこだわるわけ？」

問いかけられる。

「あんたの名前が、なんであつても、あんたはあんた。いろんな名前を持つ、最強の殺人鬼。たったそれだけ。違う？」

静かに少女は告げた。

その言葉に、EVE-000-782は苛立たしげに目を細めた。
EVE-000-782。

それが自分が覚えている名前。

けれども違う。

EVE-000-782はそう思う。

自分の名前は、EVE-000-782ではない。

確かにその識別番号も彼女の名前ではあるが、そうではない別の名前があったはずだ。

「はいはい、あんたは怖いものね」

そうぼやきながら黒髪の少女はそっと金色の巻き毛の少女に近づく、水色の瞳をじっと凝視した。

黒髪の、黒い瞳の少女と、幼児期を脱したばかりのような金髪の巻き毛の水色の瞳の少女。

二人の奇怪な少女らは、オレンジ色に染まっていく街の暗がりの中に見つめ合っている。

微動だにしない。

おそらく彼女らのそんな姿を目の当たりにした者がいたならば誰もがその厳かな美しさに言葉を失っただろう。

大人になることを捨てた少女たち。

「教えて上げたら、どんな報酬くれる？」

黒髪の少女が笑った。

明るく、まるで太陽のような笑顔。

笑顔の鮮やかな黒髪の少女が、まさか全米を震撼させた殺人鬼であるとは誰も思わないだろう。

「そんなもんあると思ってるの？」

冷ややかに告げたEVE-000-782に、黒髪の少女は声を上げて笑った。

軽やかに。

「あんたらしいわね」

今のEVE-000-782はなにも持っていない。

そんなことは、彼女自身も、そして黒髪の少女にも明らかだ。報酬の確約などできるわけもない。

もしかしたら、死ぬかもしれないのだ。

「それに、名前を教えてもらっただけなのに、報酬を要求するなんてがめついにもほどがあるわ」

EVE-000-782はフンと鼻を鳴らして告げる。

「全くだわ」

こらえきれなくなったのか、噴出した東洋人の少女、殺人鬼のキヤシーは声をあげて大笑いする。

「仕方ないわねえ。そんなところで座り込んでないで、立ちなさいよ。ほら」

キヤシーが、EVE-000-782に手を伸ばす。

「眠い……」

膝を抱えて座り込んだ金色の髪の少女は、膝に顔を埋めたままで長いため息をついた。

「……」

キヤシーの体格では、EVE-000-782を運ぶことなどできはしない。

いくらEVE-000-782が小柄であるとは言え、キヤシーも人並み以下の体格である。そんなキヤシーがEVE-000-782を運ぶことができるわけもない。

「なによ、わがままね！」

怒ったように黒髪の少女が怒鳴った。

黒髪の少女は、自分が目の前の金色の巻き毛の少女に劣ることを知っている。

そこに存在するのは圧倒的な実力差だ。

外見的なものは、黒髪の少女、キヤシーのほうがずっと年長者に見える。

しかし、二人の間に横たわるのは、そんなものすらはねのけてしまう能力の差である。

キヤシーでは、巻き毛のブロンドの彼女に勝つことなどできない。それこそ、大人が赤子の首をひねるほどの差だ。

「……うるさい」

不機嫌な彼女の声に、キャシーは目を細めた。

大きく肩を落とした彼女はかばんから携帯電話を取り出した。電話番号を呼び出した少女は見知った男を呼びつけた。

「相変わらず、おまえは好き勝手に人のことを呼びつけるな……」

あきれたような彼の声に、キャシーは手を振った。

「ハロー」

にこにこキャシーが笑う。

彼女が上機嫌なときしか、彼女は笑わない。

「ハローじゃねえだろ」

「じゃあなんて言えばいいのよ」

「……」

裏社会のトップクラスに属する人間は、得てしてわがままだ。

その高い実力故に彼らは自分勝手なのだ。

「これだから無駄に強い奴っていうのはやだね」

「なに御託ぬかしてんのよ」

ぱっさりと切り捨てるキャシーを眺めてから、男は膝を抱えたまま

地面に座り込んでいる小さな子供を見下ろした。

「それ、運んでよ」

「……なんだ、これ？」

「見りゃわかるでしょ。マジックボムよ」

見ればわかる、と言われても、男はマジックボムと面識はない。

男は、びくりと肩を揺らして小さな子供のようなブロンドの彼女を見つめた。

「本当に？」

「アシル、わたしが今まで嘘なんてついたことあった？」

冷ややかな声が響く。

キャシーは表情を変えることもなく、長い息を吐き出すと伸ばした黒髪を指先で梳いた。

細い自分の指先を見つめてから、キャシーは手をひっくり返して

爪に視線を走らせる。

大して手入れなどしていない爪だ。

大人の体を持つ女とは異なる、どこか頼りない肢体。

その肉体は、自分で選び取ったもの。

自ら「それで良い」と選んだ肉体。

しかし、そんな自分の体が時折恨めしくもある。

「……不便なものだわ。大人でも子供でも」

女であるという理由だけで。

「そうか？」

首を傾げたアシル・ブラスは、注意深く彼女を観察する。

男であれ、女であれ。

大人であれ子供であれ。

どちらにしたところで、なにかしらの不便は生じるものだ。

少女姿の彼女は、その姿のために恩恵を受けているにもかかわらず、それでも子供のままの姿でいることから生じる不便も多々あった。

「そーよ」

「そんなもんかねえ……」

「まあ、わたしのことはどうだっていいのよ」

言いながら立ち上がる。

キャシーは自分よりもずっと高い場所にある男の目を見上げた。

「とても動けるような状況じゃないみたいだから、つれてきて」

命令口調。

少女姿の彼女の言葉にアシルは肩をすくめる。

そうして改めて男はまるで子猫のように体を縮めて身じろぎしない金色の巻き毛の子供を見下ろした。

普通に考えれば、キャシーよりもずっと高い実力を誇るマジックボムだ。

切れるほど鋭い印象を持つキャシーに触れることもできないアシルが、マジックボムに触れるという選択肢に彼は迷う。

「ほら、とつとと行くわよ」

言ってから、キャシーは歩きだした。

もう振り返ったりしない。

どこまでも自己中心的なキャシーに、アシルはそつと白人の子供に手を伸ばした。

透けるような白い肌。

金色の巻き毛は首筋にかかっている。

ふわりと、巻いた金髪が男の手に触れた。

そつと男の大きな手がマジックボムの肩を抱く。膝裏に腕を差し込んで脱力した体を抱き上げる。

少し大きめの服は、わずかに血液が付着していた。

「アシル？」

路地の向こうから少女が呼んだ。

どこかおっかなびっくりといった様子で少女を抱いている男は慌てたように、キャシーを追いかける。

「今行く」

先頭を歩くのは十代初めの東洋人の少女。その後ろから歩くのは白人の大柄な男で、その腕にはやはり白人の子供を抱いている。

鋭い眼差しの黒髪の少女といかつい面立ちの大男。

まるで映画の一シーンを切り取ったような光景は、しかし誰かに目撃されることもない。

裏社会に属するふたりの姿はそうして暮れかけた日差しが描き出す影の中へと消えていった。

郊外で起こった爆発事件。

その爆発は、とてもではないが偶発的なものとは思えない。

かつて、軍事施設を丸ごと吹き飛ばした事実を知る人間たちからしてみれば、その「事故」はとても言葉通りのものとは思えなかった。

しかしどこの世界に軍事基地をたったひとりの傭兵が吹き飛ばせると思うだろう。

一般常識的に考えれば「火の鳥」の存在は「ありえない」ものである。

そんな常識の範囲外に生きていた火の鳥と呼ばれた傭兵を、世界に存在する数少ない人間たちは認識している。

彼女は世界の一般常識の中では存在してはいけない。

彼女の存在は、ごく平凡な世界の中では存在しない。

アメリカ合衆国も正式には存在を認めていない非公式な生き物。

人の形をしていながら人ではなく。

生き物という形をとっていながら、生き物ではない。

そんな曖昧な存在として定義される。

それが、「火の鳥」であり「マジックボム」である。

「アメリカ史上、最高の生物兵器」

全ての尊厳を否定された生き物。

人ではあり得ない存在として、彼女は定義づけられた。彼女自身は、それが悲しいだとか、それに対して怒りを抱いているといったことはない、とグレイシアは言う。

EVE-000-782という存在にとって、生まれついた環境に対する理不尽さに憎悪などありえない。彼女にあるのは不快な感覚に対する動物的な苛立ちと怒りだけ。

EVE-000-782に、平常の人間と同じものを要求するこ

ところが誤りだと、かつて第二次生体兵器でEVE-000-782の開発と研究をすすめた女は示した。

「動物愛護団体辺りに文句を言われかねないわね」

そう言いながらグレイシアは笑った。

実験動物に、個の尊厳など必要ではない。

実験動物に対して、感情を傾けてはならない。

EVE-000-782は、ヒトではない。

頭の隅で音が鳴る。

金属的な、神経質な音。

窓から差し込む光に、EVE-000-782は目を開いた。

レースのカーテンが風に揺れている。

すでに日は高くなっているのか、それなりに気温も上昇しているようだ。

実験室にいるときは、暖かなベッドなど知らなかった。

粗末な固いベッドに横になって、昼間は実験の数々を受け、夜は顔のない男たちが入れ替わり立ち替わりベッドの上の彼女にのしかかる。

覚えているのは、口元で笑っている男たちの表情だ。

自分の体をまさぐる男たちの手が気持ち悪くて。

自分の体の中に進入してくる男たちの体の一部が、子供の自分にとってはきつすぎて。

EVE-000-782は泣いた。

泣いても、誰も助けてなどくれなかった。

自分には、抵抗する権利すら与えられていなかった。

実験動物とは、ヒトの言いなりになるものなのだと。彼らはEVE-000-782にたたきこんだ。

ただ、彼女が生き続けたのは、最も原始的な欲求からだったのかもしれない。

生存することに対する、生物としての本能。

度重なる実験と、夜間に男たちから与えられる行為に消耗した「実験動物」たちは、次々と命を落としていった。

その現実を見つめ続けたEVE-000-782は心の底で誓ったのだ。

自分だけは、あのように無様に死んでいくまい、と。

生き続けるために、彼女は選択した。

自分の力の全てをもって、生きることを選び、勝ち取った。

「……目が、覚めた？」

問いかける声に、EVE-000-782は目を上げる。

眠る間際までそばにいたはずの黒髪の少女ではない。

水差しをテーブルにおいた少女は、ぱたぱたと踵を返した。

自分から逃げていく人間の姿などすでに見慣れていた。

ささくれた彼女の心は、相手の行動をそのようにしか捕らえない。

「サラー、あの子が目を覚ましたよー！」

少女が、誰かを呼んでいる。

サラとは誰だろう。

目覚めたばかりのぼんやりとした意識でEVE-000-782は思った。

茶色の髪の毛の、ごく平凡な白人の少女。

年齢は十歳くらいだろうか。

「サラじゃなくて、ママでしょ」

「だって、そんなこと言っちゃってサラはサラじゃない」

「だってじゃないの！」

まるで聞き分けのない子供を叱りつけるような女の声に、EVE-000-782は体を動かした。

重い上半身があがらない。

あたりまえだ。

冷凍睡眠から目覚めたばかりの、不安定なコンディションでパイロキネシスを行使したのだ。

消耗が激しくて至極当然。

金色の巻き毛はやっと肩につくかつかないかといった長さだ。

目覚めてからの意識は飛びとびで、そうして、眠る前の記憶は思い出せない。

自分は何者を名乗っていたのか。

自分がかつてなにをしたのか。思い出せない。

「目が覚めたのね、わたしはサラ。この子はアニタよ。あなたは？」
にっこりと笑う女に金色の巻き毛の少女はやっとの思いで首を回した。

「……EVE-000-782」

名前など覚えていない。

名前など知らない。

自分の奥底に刻みつけられたのは、実験動物としての型番。

EVE-000-782。

それが彼女の存在を示すたった一つの記号。

「イヴ……？」

突然、番号を言われて戸惑った女は首を傾げる。

「なんだか、アイボミみたいな名前ね」

言いながらクスリと笑う。

「エレネ、で、いいわ……」

口をついてでた名前がどんな意味を持っているのか、彼女は覚えていない。

「エレネ？」

「そう……」

とりあえず、自分の前にいるサラとアニタは自分に危害を加えるつもりはないようだ、とEVE-000-782は判断する。

「よろしくね、エレネ」

にこにこ笑っている。

それにしても、彼女らは何者だろう。

「黒髪のわたしより少し年上っぽい女の子を見なかった？」

「ああ、キャシーのこと？」

黒髪の、小麦色の肌のかわいい子でしょ？

明るい笑顔はまるで夏の日差しのようにだ。

「キャシーはね、自分はソシオパスで他人なんて面倒みれないからってわたしにあなたを押しつけていったのよ」

サラは言いながら、水差しからガラスのコップに水を注いだ。

「少し、オレンジを絞っておいたから、のどごしはいいと思うわ」

そう言って、彼女はEVE-000-782にそのコップを差し出した。

「……いない」

苛立たしい。

おそらく、自分はソシオパスの少女よりもずっと危険な存在だ。危険きわまりない。

自分のことは、なによりも自分がよく知っているはずだった。

「……でも、少しはお水くらい飲まないと」

「いない……」

目を閉じてEVE-000-782は拒絶した。

目の前で繰り広げられている茶番はなんだというのか。

親子ごっこ？

「横になったままじゃ、飲めないわね。起こしてあげるから……」

サラの声にEVE-000-782はきつと目を見開いた。

抱き起こされた腕に黄金の巻き毛の少女は抵抗した。

「いないって言ってんのよっ！」

差し出されたコップをはねつけた。派手な音をたてて飛んだコップは壁にたたきつけられて砕け散る。

小さく悲鳴を上げたサラは驚いたように、コップの飛んだ先を見つめている。

「……ちよつと、あんた何様よ！」

砕け散ったコップを見つめているサラとは異なり、まるで猫のように身構えたのはアニタと呼ばれた少女だ。

「キャシーの頼みだから看病してやったっていうのに……っ」

怒りをたたえたアニタの瞳にEVEー000ー782は動揺することもなく、ベッドの上で顔を横にむけた。まるで彼らの言葉を拒絶するような態度だ。

「……ちよつと、聞ってるの？」

叫ぶような少女に、サラは苦笑する。

「やめなさい、アニタ」

穏やかな声が響く。

その、穏やかな。だが、どこか底知れない声色に、EVEー000ー782はぎよつとした。

思わず力の入らない腕で上半身を支えて、体を起こそうとした。上体をよじった彼女にサラはふわりと笑った。

「無茶はしなくていいの。あなたがなにに警戒しているのか、凡人のわたしには到底理解なんてできはしない」

体温の低い白い手が、EVEー000ー782の額にそつと触れた。

「あなたの心はまるで、氷の結晶のよう……」

EVEー000ー782は目をそらしたままびくともしない。

女の片腕はいきりたつアニタをおさえていた。

「触れればすぐにでも溶けて、壊れてしまう。きっとあなたの心を誰かが無理に支配しようとしたのね。だから、あなたの心は耐えられなかった。そうして、全てを忘れてしまったの……」

まるで全てを見透かしたような彼女の言葉に、EVEー000ー782は瞼を閉じた。

儚げなEVEー000ー782と名乗った金髪の少女を見つめて、サラは苦笑する。

あなたの心の傍らにずっとあった天使にはほど遠いけれど……。

そう口の中でつぶやきながら、小首を傾げる。

「……大丈夫よ、アニタ」

ほほえんだサラは、そうしてEVEー000ー782の呼吸が規則正しいものになったのを確認するとそつとベッドサイドの椅子

から立ち上がった。

「本当に大丈夫なの？　だって、キャシーが言うには、キャシーよりも危険な人なんでしょ？　あの自己中心的なキャシーが自分で言うくらいだし……」

なにか恐ろしいものでも見るかのようなアニタの瞳に、サラは相変わらず静かに笑っている。

「大丈夫よ。……大丈夫だから」

サラの瞳になに見えているのか、アニタにはわからない。

そしてサラもアニタに、自分が見ているものを語ろうとはしない。

「そうやっていつもひとりでサラは納得してて、わたしにはなにも教えてくれないんだもん……」

不満げなアニタに、やはりなにかを告げるでもなく微笑する。

「いいのよ、わからなくても……」

ひっそりと、静かに彼女が告げた。

「サラが言いたくないなら、それでもいいけど……」

「サラじゃなくて、ママ」

ほほえみながらサラが言う。

そうするとアニタは両目をつり上げて頭上にあるサラの瞳をにらみつけた。

「だって血なんてつながってもないじゃない。サラはサラでしかないわ。ママじゃないもの」

無邪気な少女を見つめて、サラは困ったように頷いて睫毛をおろす。

世界には平凡な人間たちには、とても理解などできない人間たちがいる。

自ら「平凡」であることを捨て去った者もいれば、また、生まれついて「平凡ではない者」もいる。

キャシーが生まれついての異常な人間であり、ソシオパスであるということは、明らかに平凡ではありえない。そんなキャシーの友人にあたるサラとアニタも、あるいは「平凡ではない人間」のひとつ

りであるのかもしれない。

サラは人の心を支配するサイコパスであり、アニタも 마찬가지로 サイコパスである。サラとアニタに違いがあるとすれば、アニタは殺人犯であるがサラはそうではないということだ。

「……人なんて簡単に死ぬのよ。だったら、わたしたちがわざわざ殺す必要なんてないものね」

笑いをにじませたサラの言葉に、アニタはかすかに片目を細めた。年上のサイコパスの女が、時折なにを考えているのかアニタにはわからなくなる。

「サイコパスだって生きているのよ。命が惜しくないわけがない。だから、生き抜くためにわたしはわたしにとっての最善の方法を選択する」

たったそれだけ。

そうつぶやいて、サラは笑う。

攻撃的だけがサイコパスではない。

多くの人間を手のひらの上で転がして、サラは生きてきた。

二人のサイコパスの女のコンビは、無敵の犯罪コンビだったのかもしれない。

「……そりゃそうだけどさ。たまにわたし、サラがよくわからなくなるわ」

肩をすくめたアニタはそうして黙り込む。

ソシオパスのキャシーと、サイコパスのサラとアニタ。

彼らは生きるために、自ら選択する。

時には極悪非道とも謗られるかも知れないが、どちらにせよ、現代社会といういびつな世界が生み出したモンスターだった。

多くの者は意外に思うかも知れないが、三人は自分たちの異常性を理解している。

自分は、サイコパス。もしくはソシオパスであると。

「ところでさ、サラ」

アニタが言った。

「なあに？」

サラが応じる。

「キャシーがつれてきたけど、この子は精神病質者でも社会病質者でもないんでしょう？」

「別に、キャシーの知り合いだからといって、精神病質者っていうことはないと思うけれど……」

アニタの言葉にサラは笑った。

まるでガラスを打ち合わせるようなその声に、アニタは目を彼女に向ける。

「まあ、そんなにごろごろ精神病質者がいたらたまったもんじゃないけどさ」

ぞんざいなアニタの言葉。

ベッドに眠る金色の髪の子供を見つめている。

「精神病質者でなくても、この子は強いわ。それもわたしたちが想像もつかないくらい……」

暗号名を火の鳥。

犯罪者として呼ばれた名前をマジックボム。

彼女の名前などよりも、社会全体では「マジックボム」と呼ばれる通り名のほうが有名だ。

世紀の殺人鬼にして、爆弾魔。

かつて、アメリカ社会を震撼させたユナボマーのように。

「知ってるわ。マジックボムを知らなかったら、犯罪者としてっていうか、裏社会としてもぐりでしょ」

飄々としたアニタに、サラは言葉を返すこともなく苦笑した。

犯罪者でなくとも、マジックボムくらい知っているのは世間的な常識だ。

「正体不明の爆弾魔」

かつて、そう呼ばれたマジックボムを。

そのマジックボムが今二人のサイコパスの目の前にいる。

「……これが、ねえ」

相変わらずのマイペースでアニタはつぶやいた。

サイコパスは何物にも捕らわれない。

「まさかさ、こんなちっちゃいのが二十年前にあのケース・アングリーボマーを巻き起こした張本人だとは誰も思わないわよねえ」

「あら、それはアニタも一緒でしょ」

まさか、アニタのような子供が殺人犯だとは誰も思わないだろう。

「メアリ・ベルみたいに？」

「そういえば、メアリ・ベルもサイコパスだったわね」

アニタの相づちに、サラはくすくすと笑った。

自分の名前はなんだろう……。

自分の存在意義はなんだろう。

自分とは、EVE-000-782以外の何者なのか。

眠りに捕らわれたまま、少女は考える。

自分という化け物を作り出した研究所は、自分の手でたたきつぶした。

なぜ……？

「……それは、わたしに不愉快なことばかりする連中がいたからよ」
それだけの理由。

だから、全てをたたき壊した。

遠い記憶かと問われれば、それは遠い記憶ではない。

それでは、ごく近い記憶なのかと問われるとそうでもない。

少女は考え込んだままで首を傾げる。

永遠に、成長しないのは肉体だけではない。生きた年数分だけ知識量は増えるがそれだけだ。そもそも、彼女が生まれて育てられた研究所時代のたった七年間に地球上に存在するほとんどの知識を植え付けられた。

だから、そんな彼女にとって知識とは何の意味もない。

生きるために必要な知識だけを選択して使っているだけのこと。

そのことを、EVE-000-782は今まで誰かに話したこと

もなかったから、多くの人間が知らないだろう。

多くの情報を処理しなければならぬ彼女の頭脳はそのため大きく破綻していく。

連続性を持った記憶であれば、情報の処理も容易であったろう。しかし、EVE-000-782には数多くのクローン体が存在しており、その上に知識と記憶を共有していたのである。

最終的に、一個体としておさまったEVE-000-782の脳神経には多すぎる情報が集中し、そのために記憶の欠落という障害を引き起こしたのであった。

冷凍睡眠から目覚めたばかりのEVE-000-782が混乱したところでやむを得ない。

「通常の人間」以上の情報を処理できるEVE-000-782にすら、多すぎるそれらは負担になるのだ。

覚えているのは、自分の「EVE-000-782」という番号と、第二次生体兵器研究所で教え込まれた数多くの知識。

そして、「ガーゴイル」だけ。

どこまでも不愉快な男たちはすでにいない。それは「知って」いる。

「誰もわたしの苦しさをとってくれなかった……」

だから自分で「苦しさ」から抜け出すことしかできなかった。

そのために彼女は戦ったのだ。

第二次生体兵器研究所の爆破も、その後に自分が起こしたケース・アングリーボマーもそう。苦しいことがいやで、いやで仕方がなくて、彼女は怒りに満ちた。

自分のことを名前で呼んでくれた人もいたような気がする。けれども、今のEVE-000-782にはどうしても思い出せない。

「……わたしは、誰？」

それは自問自答だ。

自分の存在理由すら否定されればどうすればいいのか。

彼らは、彼女に「最高の兵器たれ」と設計、設定したというのに、

結果として意のままにできないという理由から拒絶した。

人の形をしていながら人ならざるもの。

人ならざるものという扱いを受けながら、明らかに人であるそれ。知性と感情を持った殺人兵器。

幼い容姿と、幼い精神と、幼い心を持った。

「……大丈夫」

声が聞こえて、少女姿のそれは悲鳴を上げた。

両手で顔を覆って彼女は体を丸める。

聞きたくない、見たくないと、全てを拒絶しようとして。けれども、拒絶したくてもできなくて、それは彼女の心に確実に入り込んでくるのだ。

急速に意識が浮上していく。

その感覚が不快でならなくて、EVE-000-782は額に腕を押しつけた。

目を開くと、レースのカーテンが揺れている。そうして上半身を起こしたEVE-000-782は、そっとベッドから足をおろして立ち上がった。

上質な絨毯の感触が足の裏に心地よい。しかし、心地よいなどと感じていれば足をすくわれることも彼女は理解している。

混乱した記憶のむこうがわに、確かに存在している危機感が彼女に伝える。

安穩としてはいけない。

安穩としては、危険から逃げられない、と。

サラ、アニタと名乗った彼女らが危険なわけではないこともわかつている。

長かったはずの巻き毛は今もこんなに短い。何年前、愚かにも捕らわれてしまったときに、思い出すのも不愉快な人間たちに短く刈り込まれたのだ。

指先で金色の巻き毛を舞いて、少女は窓の外を眺めた。

閑静な住宅街。

ここは、どこなのだろう。

部屋の片隅にあるテレビに手を伸ばす。

スイッチを押すと、テレビの中では天気予報がやっていた。

「ニュースなんてやってないわよ。少なくとも、あなたが見たい情報、ね」

静かな声が響いた。

まろやかな印象の穏やかなサラの声。

そう言いながらサラは小脇に新聞を抱えている。

ワシントンポストだ。

ニッコリと笑って、EVE-000-782にポスト紙を差しだす。

「ワシントンポストって、随分マイナーね……」

呆れたようなEVE-000-782の言葉にサラは苦笑する。

「ちゃんとUSAトゥデイとウォールストリート・ジャーナルもあるわよ」

そう言いながら、サラは窓際のテーブルに三種類の新聞を並べて見せた。

USAトゥデイとウォールストリート・ジャーナルはアメリカでも首位と次位を競う新聞だ。

その二誌と比較すれば、ワシントンポスト紙の発行部数はずっと少ない。

ニューヨーク・タイムズとロサンゼルス・タイムズがないことが彼女にとってはなぜか不思議だと思う。

もっとも、日刊の新聞を五紙もとったところでとてもではないが読み切れないだろう。

「……おいておくわね」

少女姿の彼女に目配せすると、サラはニコニコと笑っていた。

そうして踵を返す。

「……」

EVE-000-782の眼差しに、サラは茶色の髪を揺らめかせてほえんで見せた。

「そんなに警戒しなくても……」

「警戒なんてしてないわ」

「……そう？」

否定も肯定もせずにサラは口元だけでもう一度笑うと耳に頭髪をかき上げる。

「まあ、わたしにはどうでもいいことだけれども」

どうでもいい。

そんなどこか投げやりなサラの言葉に、EVE-000-782は新聞の置かれたテーブルに歩み寄った。

その日付の新聞だろう。

三種類の新聞の日付はどれも同じだった。

新聞の一面を眺めながら、EVE-000-782は考える。

おそらく、サラと呼ばれる女にとって、EVE-000-782自身のことなど本当にどうでもいいことなのだ。

「新聞は、そこに置いといてくれればいいわ」

気分が向いたらキッチンまでおりてらっしゃい、とサラは言っ部屋を出て行った。

二階のやや広めな寝室。その窓際には明るい日差しが差し込んでいる。

戸外から入り込む穏やかな風がふわふわとレースのカーテンを揺らした。

置かれた椅子に座ったEVE-000-782は、テーブルに肘をついたまま新聞の紙面をめくる。

変哲のない新聞だ。

どこにも「人形計画研究所」の爆破事件のことなど書かれていない。

三種類の新聞の全てが書いていないのだ。

郊外にあったとは言え、それほど中心街から離れているわけではない。特ダネに対して鼻がきく新聞記者たちがなにも捉えていない、ということが逆におかしい。

EVE-000-782はさらりと結論を出した。

要するに、そういうことだ。

自由の国と自称するアメリカ合衆国で言論統制が行われていると言うことだ。

言論統制と言うには大げさなのかもしれない。そこまではいかなくとも、情報操作が行われている。

「……ふうん」

独白するように相づちをうった彼女は、息をついて新聞を閉じた。セミロングの巻き毛が、肩の上で遊ぶように揺れる。

「さすがアメリカ様、ね」

少女はつぶやいた。

記憶は混乱していても、なにもかもがわからないわけではない。

混乱している記憶は自分に対するごく一部が混乱しているだけだ。自分に関わる、最近の記憶の一部が混乱し、そして欠落している。

もしかしたら欠落しているわけではなくて、単純に情報をうまく整理できていないだけなのかもしれない。

水色の瞳を空間に彷徨わせて、窓の外に放る。

かつて、第二次生体兵器研究所の爆破事件のように。完全な報道管制下におかれる。

第二次生体兵器研究所の爆破事件の際に、報道管制が行われたことをEVE-000-782が知ったのは、ケース・アングリーボマーのかなり後のことだったのだが。

まるで、散らばったジグゾーパズルのようだ。

断片的な記憶のかからは確かに存在しているというのに、「それが今のEVE-000-782にとってなにが重要なことであり、なにが無駄なことなのか把握しきれない。

必要なことを整理しなければならない。

現時点でのEVE-000-782にとって大切なことは、活動するためになにが自分にとって不利益が生じ、もしくは利が生じるかを見極めることだ。

腹が鳴いて、少女はため息をついた。

人為的に作り出された人間であっても、まるで当然のように腹が減るのだ。

その現実にうんざりする。

そもそも、自分は人造人間であるのだから、空腹になどなくともいいのではないかと思う。

中途半端に人間と同じであるということが、彼女には苛立たしい。

人と同じ姿をしていながら人ではない。

そんなことに対してはなにも感じないが、いつそ人ならざる者ならば、人と同じ姿をしている意味がどこにあるのだろう。

多くの思いが去来していく。

自分の生きた道の傍らに、多くの「人間」たちがいたこと。

そんな人間たちのことすら思い出せない。

なにが大切なことなのだろう。

EVE—000—782は考えながら窓を開けた。

広い空が窓の向こうに広がっている。雲が静かに流れていく。

街路樹を通り抜ける風が木の葉を揺らして音をたてる。鳥たちが鳴く声が、その音に重なった。

自分という動物のかけら。

記憶とはひどく曖昧で、彼女の中に破片として降りつもっていく。何度目か腹の虫が鳴いた頃、EVE—000—782は部屋を出た。廊下を歩き、階段をおりていく。

ごく一般的なアメリカ合衆国の住宅だ。

サラダと、クロワッサンにイチゴジャム。キッチンにおりてきた少女の姿に、サラは座ってサラダをつついていたフォークを止めるとひらりと立ち上がり、冷蔵庫を開いた。

牛乳のパックをとるとガラスのコップに注いで、テーブルの上に置く。

異常な人格を持っているとはとても思えない女の所作に、EVE—000—782は無言のまま席につく。

「おなか为空いたでしょう？ あなたずっと眠っていたのよ」

眠らなければならないということがどういふことであるのか、サラは理解している。肉体が、もしくはその精神が、休息を必要としているのだ。

「超能力って、使うのにもものすごく疲れそうだし」

サラは何の感慨もなくそう言った。

「……別に、わたしは超能力者なんかじゃないわ」

「そうね、超がつくほど大したものじゃないのかもしれないわね」
少女の言葉にサラは言った。

リビングのソファに座ってテレビの画面を見つめていたアニタが
体をよじると、キッチンで会話をしているふたりを眺める。

「人間っていうのは、勝手なものね」

静かなサラの声が響いた。

「大多数とは異なるというだけで、人は特定の誰かを排除しようとする。それが正しい存在であっても異端であれば排除されるのよ」

「……」

その言葉を、EVE-000-782とアニタは相づちを打つでもなければ否定するわけでもない。

「サイコパスであることって、そんなにおかしなことなのかしら……?」

サイコパス。

生まれついた病質者であるならば、ともかく、社会のありかたのために病質者になった者とは、それは本人に責任があるのだろうか？

サラは思う。

確かに、自分とアニタはいわゆる精神病質者である。

しかしキャシーのような社会病質者は、その本人にだけ責任を問うてよいものなのだろうか？

彼女を取り囲む社会的な責任は、はたして皆無だったのだろうか。
「社会にとって少数派であったとしても、少数派にはいる人間たちだって命は惜しいのよ」

不意に、サラの声色が変わった。

そう。

生きている以上、誰だって自分の命を守るために戦っているのだ。
自分の命をつないでいくために、生きているのだ。

それは、EVE-000-782と同じ。

重く、沈殿する。

表情を動かさないまま若い女を見やるEVE-000-782と

アニタは、返す言葉を思いつけずに黙り込んだ。人間の良識的な判断から返す言葉が見つからなかったわけではない。

サラの言葉があまりにも的を射ていて、ほかに言葉がなかったただけだ。

額にかかる金色の巻き毛を指先でつまみあげたEVE-000-782は、そうしてから自分の首の後ろに手のひらをあてる。

なにを考えているのか、今一つわかりにくい彼女の様子に、サラは笑いかける。

「あなたは、わたしたちよりもずっとずっと強いけれど、あなたの心はわたしたちのそれよりもずっと脆く儚い」

「会ったばかりなのに、どうしてそんな風に断言できるの？」

サラの言葉にEVE-000-782が応じた。

「だって、わたしたちはサイコパスだもの」

単純明快な言葉が、リビングから飛んだ。

アニタの声だ。

「そんなの出任せだわ」

EVE-000-782は水色の瞳をゆらりと上げる。

「サイコパスだろうが、ソシオパスだろうが、人間の強さには関係ないわ」

もっとも、自分は人間ですらないのかもしれないが。

そんなことを思って、EVE-000-782は自嘲的に笑った。
「そうかしら？」

EVE-000-782の言葉に、サイコパスの少女は鼻を鳴らす。

アニタ。

少女はそう名乗ったが、それは本当に彼女の名前なのだろうか？
「あなたには確固たる自分がないのよ。だから、あなたは自分のことを忘れてしまう」

そこでいったんアニタは言葉を切った。

どこか自信満々なアニタの様子が、EVE-000-782には

なぜだか苛立たしい。

尖ったEVE-000-782の瞳にアニタは前髪をかきあげた。
「……あなたには確固たる自分がない。だから、あなたは自分のことを忘れてしまう。そして、だからこそ自分の名前を持たない。自分の名前を持たないということは確かな自分を持ち得ないということなのよ」

「つまり、アニタはわたしが自分の名前を持たないから、自分のことを忘れてしまうと言っても言いたいわけ？」

「まあ、ありていに言えばそうなるわね」

アニタはあっさりとその言葉を肯定する。

「ふん」

EVE-000-782は眼を伏せた。

「あのさ、あんたの名前はね。わたしたちは教えることなんてできないの。口止めされてるのもあるけど。そういう問題じゃない」

サイコパスの少女はそう言った。

サイコパスであるから強いわけではない。

そしてEVE-000-782が異常な能力を持つ人間ではないから強いわけではない。

「……口止めですって？」

立腹するような金色の巻き毛の少女の声色に、アニタは恐れることもなくなったりと笑う。

「そうよ！ 黒髪のあの子にわたしたちのお友達。そのお友達がわたしたちにそう言ったの。お友達の名前を言うな、あなたの名前も教えるな、そして、どんなに脅されても屈するなってね」

言いながら彼女はソファから立ち上がるとキッチンのテーブルにゆっくりと近寄っていった。

「わたしたちは口止めされたのよ。でも、今のあんたを見ればわかる。あんたは強いけどすごく弱い」

冷たい彼女の瞳に、EVE-000-782は不快なものを感じて瞳を陰しくして見せた。

まあ、どうだっていいわよ。

そう言いながらコップを手にとると牛乳をパックから注ぐ。

「つまり、自分で思い出せってことなの？」

「まー、簡単に言うそうなるわね」

おどけた口調のアニタはちらりとEVE-000-782を見や
った。

EVE-000-782とアニタの言葉の応酬を見守っていたサ
ラは、プツと吹き出した。

「なんだか、子猫がじゃれあってるみたい」
クスクスと笑っている。

その笑顔は、サイコパスの女のそれには見えない。

「あなたは、たくさんのことを経験しすぎて混乱しているだけなの
よ。だから、ゆっくりと思い出していけばいいの」

まるで、ごく普通の人格の人間でもあるかのような。

サラの言葉に、EVE-000-782はクロワッサンを口に運
んだ。

＊

人間という存在の曖昧さ。

人は人に認識されて、自己を確率させる。

自分の存在を自分が確率させるのではない。

人という鏡のような対存在がいてこそ、自分という人間を世界の
中において確立させるのだ。

サラはぼんやりと窓の外を眺めながら小首をかしげる。

「わたしはサイコパスだけれども」

ぼつりとつぶやいた。

庭の芝生に水をやっている二人の少女を見つめる。

まっすぐの茶色の髪が印象的なアニタと、金色の巻き毛の青い瞳
の少女。

「アニタがお友達と仲良くしてるなんて珍しいわね」
くすくすと。

サラは笑っていた。

その笑顔はどこか深みのある、しかし、どこか物騒な眼差し。
サイコパスの若い女と、少女。

そして、そんな彼女らに金髪の少女を託したソシオパスの少女。
世間では、精神病質者も社会病質者も同じように異常人格とされ
ている。だが、はたしてそんなことがどれだけ意味があるのだろうか。

異常人格でなくても殺人を犯す。

異常人格でなくても人を騙す。

そして嘘をつく。

ならば、異常人格者であると、くくることにどれだけ意味がある
のだろうか。

ほほえんだサラは、くるりと踵を返すとキッチンへと歩いて行く。
大きな鍋に手を伸ばして彼女は冷蔵庫を開けた。

二人分以上の食事を作るのはどれくらい振りだろうか。

彼女は外から聞こえてくる少女たちの明るい笑い声を聞きながら
苦笑した。

「世界が歪んでいく……」

世界が壊れていく。

それをサラは素肌に感じた。ざわりざわりと肌の一番上をなぞる
ようなその感覚に、彼女は視線だけを背後に流した。

「キャシーには、なにが見えているのかしらね……」

自分たちのような一介の犯罪者には、キャシーや、金髪の巻き毛
の少女、通称「マジックボム」が考えていることなど理解すること
などできない。

「わたしたちみたいな凡人になんて、理解不能だわ」

そんな理解不能の彼女が、今は庭先で殺人犯の少女アニタと共に
笑い合っている。もっとも本人にはじゃれているつもりはないのか

もしれない。それでもそんなふうに笑っている様は姿相応の子供にしか見えないのだけでも。

そんなことを思いながらサラは昼食の準備をはじめた。

人は彼女達のことを、精神異常者だと言う。

しかし、と、サラは思う。

自分は異常者などではない。

そもそも異常であるという定義はどこにあるのだろう。

「良識に基づく行動ができれば、正常なんですか？」

まだ、子供だった頃のサラは目の前の白衣をだらしなく着た男に告げた。

茶色の髪を揺らして、彼女は問う。

「なら、わたし、良識っていうものに基づいて行動すれば、何の文句も言われないわけですね？」

真顔でそう言った少女が笑う。

そんな彼女に、男はひどく険しい顔をしていたような気がする。

「……良識、か」

思い出してつぶやいた彼女は首を傾げる。

精神病質者の全員が人殺しをするわけではない。事実、自分がそうだ。

「なにをやっているても文句を言われるから、わたしはそれがいやだっただけよ」

鍋をコンロにかけながら、彼女は独白する。

もしかしたら、生活のなかでアニタのように人殺しに対する衝動も覚えたのかもしれない。しかし、サラは今まで殺人事件を起こしたことがなかった。

なぜか？

簡単だ。

自分には、正常な人間達と同様にごく普通の生活を送ることができるという自負がある。

文句を言われないように、完璧に、彼女は振る舞ってきた。もっ

とも、それでも、定職につくことだけはできなかったが。

サラは全ての精神医学者たちを容易に騙す。

心理テストも、全てを彼女は「正常値」を叩き出して偽ってきた。それが、サラには楽しかった。

「サラー！」

家の外から声が聞こえた。

「なあに？ アニタ」

「あのね、ウィンストン先生がきたわよ」

「……そう、すぐ行くわ」

ウィンストン先生。

その名前にサラはそつと眉をひそめた。

タオルで手を拭きながら歩きだした、ガスコンロを振り返る。火は消した。

大概、「ウィンストン先生」の話は長い。

どうやって話を短くしようかと彼女は思案する。

「お久しぶりです、先生」

「久しぶりだね、サラ」

親しげに彼女の名前を呼ぶ初老の男。

ハグを交わして、頬にキスを受ける。

「突然どうしたんです？」

ニコニコと笑顔を浮かべるサラに、男は苦笑した。

長身の黒人男性。白髪のまじった髪と、誠実そうな瞳が印象的だ。彼の経歴を知らなければ、サラは心を許したかもしれない。しかし、どんなに誠実そうに見えたとしても、サラは彼に心を許したりなどしない。

そもそもサラが心を許す相手などごく限られているのだが。

高名な精神医学者にして、心理分析官。

いわゆるプロファイラーというやつだ。

精神世界のプロフェッショナル。

そんな肩書きを持つ彼を、サラが警戒したところでやむを得ない

だろう。

「なんだなんだ、君とは旧知の仲じゃないか。突然どうしたはないだろう？」

「……先生、わたし、以前申し上げましたけれど、警察もFBIも、お医者様も、みーんな大嫌いなんですけど」

「なんだ、それでは、君が私を嫌っているということになるじゃないか。そんな寂しいことは言わんでくれないか？」

ウィンストンがサラを初めて診察したのは、サラがまだ五歳のときだった。

それ以来、二十年以上もの間、彼は彼女を診察している。サラにとって困るのは、旧知の間人であることをいいことに、突然こうして来訪することだ。

「そう申し上げましたんですけど、先生には通じてないようですね」

目を軽く窓の外に流して彼女は言った。

皮肉を言ったところで、ウィンストンには通じない。

それが、時折さらにはひどく苛立たしい。

もつとも、ウィンストンはウィンストンでわかっていて彼女に告げるのだ。

「君も相変わらずのようだな」

「先生もお元気そうでなによりですけど、そろそろ後進に後を譲って引退なさったらいかがですか？」

にっこりと笑う彼女も一歩も引かない。

一見ただけでは陰險な言葉の応酬にしか見えないが、彼女と彼の会話はいつもそんなものだ。

ウィンストンを嫌うサラは彼を遠ざけようとする。しかし、それをウィンストンが逃がさない。

「いやいや、まだまだ後輩たち共はひよっこでな。私がいなくてろくな結論も出せやしないものだ」

「先生がいらっしゃるから、頼りにされているんですわ」

だからいなくなったほうがいいのに。

暗に告げた彼女の瞳が、不意に冷ややかに揺れた。

そうしてその揺らぎをおさめて彼女は言う。

「お茶でもおいれますわ」

「私は、コーヒーの方がいいんだがね」

それもいつものやりとり。

ウィンストンを出迎えるサラが、彼がコーヒー党であることを知らないわけではない。

「はい、わかりました」

物腰だけはひどく丁寧なサイコパスの女は、口元でふわりとほほえんだ。

マイケル・ウィンストン。

それが彼の名前だ。

「それで、今日はどんなご用件ですの？」

コーヒーをいれて戻ってきたサラは品の良い所作でソファに座りながら首をかしげた。

「君の同居人はアニタちゃんだけだったろう？ あの子はご近所のお友達かい？」

「いえ、知人から預かった子ですわ」

男の探るような言葉を、彼女はさりとかわした。

「……ほう」

男が相づちを打った。

「先生、いらっしゃるなら前もって連絡いただければ助かりましたのに」

まるで相手の腹を探り合うかのような印象だが、初老の男も若い娘もニコニコと笑顔を絶やさないままで互いを見つめている。

「予告なんてしたら、サプライズにならないじゃないか」

どこをどうすれば彼が訪れることが「サプライズ」になるのかどうかはなはだ疑問だ。

サラは、ちらと視線を窓の外に放り投げると、小首を傾げる。

窓の向こうからは小さな頭がのぞいていた。

茶色の頭と緑の瞳。

伺うように少女は男を見つめていた。

殺人犯であるアニタは、ウィンストンのことを余り好きではないらしい。

当たり前のことだろう。

「……本来であれば、アニタは逮捕されて然るべきなんだが」

そう言いながらウィンストンは顎に手をあてて、サラの視線を追

いかける。アニタとウィンストンの視線が交わった。

スーツを着た男と瞳を合わせたアニタは、表情を変えることもなく視線をそらして窓の外から去っていく。

アニタ・シリトー。

それが少女の名前だ。

人によっては、彼女のことをアニータ・シリトーと呼ぶ。

「アニータ・シリトー、か……」

まるで独り言のようにウィンストンがつぶやくと、それをサラが見つめている。

サラとアニタは血縁関係でもなんでもない。

その証拠に、二人のファミリーネームは異なる。

アニタの本名はアニータ・シリトー。

そして、サラの本名はセアラ・ローリー・ウェルティ。

どちらも英国系アメリカ人だ。もっとも、英国系アメリカ人とは言ってもいわゆるアメリカの上流階級の出身ではない。ごく一般的な家柄の出身である。

「彼女は、なんだっけか……？」

ウィンストンの言葉に、サラは肩をすくめてみせる。

「それを知ってらっしゃる人が、意見を求めるなんて酷じゃありません？」

若い女はフフと笑っそう告げる。

考え込んだままで、ウィンストンは視線をテーブルにおろした。

アニータ・シリトーのことを、ウィンストンが知らないわけではない。

FBIがアニタに手を出せないことには、ある理由が存在している。もちろん、本人の恐ろしさもある。しかしそうではない。

アニタの後ろには、アメリカ合衆国でも名だたる殺人鬼キャシーがいるのだ。

それは周知の事実。

だから警察はおいそれとアニタに手を出すことはできない。もし

もそんなことをすれば後日、キャシーの復讐が待っているだろう。そんなことを考えると背筋を冷たい汗が伝っていく。

「彼女は、悪いことはしませんよ。少なくとも、わたしの目が黒いうちは」

微笑するサラに、ウィンストンは複雑そうな笑みをたたえる。

「それもそうだな……」

警察関係者にしてみれば、藪をつついて蛇をだしたくないのだ。アニタをつつけば、それこそタチの悪い蛇が姿を現すことを彼らは知っている。

キャシーが復讐をするかどうかすら怪しいものだが、サイコパスなりソシオパスなりとは時に、ごく平凡な人間の思惑など軽々と越えていく。

「……アニタは、キャシーに従っているわ」

キャシーの配下。

獣の嗅覚で、アニタはキャシーが自分などよりも上位者であることを知っている。

だから、彼女はキャシーの意向を無視したりはしない。そんなことをすれば、最悪の殺人鬼は今まで味方だと思っていた人間にすら牙を剥く。

「サラ、私は君たちを心配しているのだよ」

まるで独り言をつぶやくようにウィンストンが言った。

ぴくりとサラは眉を上げる。

短い沈黙が流れた。時間にして三十秒程度だったろう。その沈黙はひどく長く感じる。

「心配……？ 平凡な人間のあなたたちが、サイコパスのわたしたちを？」

言葉をひとつひとつかみしめるように、ゆっくりとサラは綴る。彼女の様子を見つめていたマイケル・ウィンストンは、眉間に皺をよせた。

金色の巻き毛の少女。

その少女の正体をウィンストンが知らないわけではない。

「……引き渡せ、と？」

なにを、とはサラは言わない。

「君たちを、暗黒の底にたたき落とすかもしれないぞ」

「ダメね。わたしたちは、彼女を売ることなんてできない」

サラとアナタに金色の巻き毛の少女を託した、黒髪のソシオパスの殺人鬼。彼女との契約がある以上、FBIなどに託された少女を引き渡すわけにはいかない。

そんなことをしたが最後、自分たちはキャシーに殺されるだろう。だから、少女を手放すわけにはいかないのだ。

「……そう言うと思ったよ」

「最初から無理だと思ってらっしゃるなら、聞かなければいいですのに」

サラが苦笑いする。

そんな彼女の様子に、ウィンストンも困ったように笑うだけだ。互いが互いの反応をわかっている。わかっていながら取引をもちかける。

「君は聡明な子だ、自分がなにをすべきかわかっているはずだ。ただし、犯罪を犯せば、我々は君を逮捕しなければならぬということをよく覚えておきなさい」

「それは耳にタコができるくらい聞きましたわ」
一蹴する。

サラも退かない。

ウィンストンも同じだ。

彼がまだFBIに名前を連ねてはおらず、ただの精神科医であった頃、まだ幼かったサラは両親に連れられてウィンストンの元を訪れた。

正常な人間と比較すれば、明らかに異常な面を持ちあわせサラに、こんなにも小さなサイコパスがいるのかと診察を重ねるごとにそんな思いを深めていった。

子供のサイコパスの存在が、昔からなかったわけではない。ただ、大きな問題を発覚させることがより少ないため、発見されることが少ないだけである。

サラの父親は外科医、母親は内科医というだけの、ごく普通の家庭に生まれて育った。

当初、両親が多忙であるための愛情欠如も疑ったわけだが、そうではないということがわかるのに、それほど時間はかからなかった。どんな因果でサイコパスが生まれるのか。

動物を虐待するわけでもなければ、他者を傷つけるわけでもない。しかし、なにがおかしいと聞かれたら、「なにかが」おかしいと言える。

多くの心理テストをクリアした彼女は、ウインストンにこう言った。

「生きるために、世界に寄り添わなければならないなら、わたしはそうするだけ。先生だって嘘くらいつくでしょう？」

全てが「平均的」な少女のテストの結果。

どこか狡猾な色彩を覗かせる暗い瞳。

彼らは獣と一緒にだ。本能的に、なんらかのアクションを起こせば、それにまつわる利益と不利益を心得ている。ごく平凡に見えるサラもまた、ジョン・ウェイン・ゲイシーやアンドレイ・チカチーロらと同様にサイコパスだ。

数多くの人間たちを殺した殺人犯と同列に考えるのは人権問題だと言う人間もいるかもしれない。しかし、殺人や反社会的な行動を「とっていない」だけで、サラも彼らと同じ危険性をはらんだ人間と言える。

サラは、人を殺すことよりも、著名な精神科医や心理分析官を手玉にとっていることのほうがおもしろいだけだ。彼女が今後も、これまでと同じように殺人という行為に手を染めないという保証はない。

もしも彼女が、精神科医や心理分析官を手玉に取るよりも、殺人

のほうがおもしろいと思ってしまえば、良心の呵責のひとつも感じずに、彼女は人を殺すだろう。

「なにか物騒なことを考えておいでですか？」

ほほえんだサラの瞳が、ウィンストンの目に入った。

「大したことじゃない。私は君を心配しているだけだ」

まっすぐな眼差しの小さな少女をウィンストンは覚えている。

まだ善悪の観念すらも持っていないのは、子供であるが故だと思っていた。

彼女が先天的にサイコパスであるということが発覚しても、サラは無邪気に笑い、そうして決して反社会的な行動をとるようなことはしなかった。

どうして、彼女はいわゆるちまたのサイコパスたちとは違うのかと、そんなことを考えることもあった。

恵まれた家庭で育ち、両親は忙しいながら彼女に愛情を傾けた。動物を虐待することもなければ、誰かをいじめることもしなかった。

「そうですか」

目の前の若い女は、ウィンストンが少女の頃から知る女性であり、サイコパスでありながらひどく優しい女性のようにも見える。

だから、彼は時折彼女に騙された。

彼女がサイコパスであるが故に騙された。

そんな高名な精神科医ですら、彼らにとってなんの意味も持たない。

「先生、わたしはおかしいのでしょうか……？」

「いいや、君は決しておかしくなどない」

「……そうですか」

「少し、平均の輪の外側にいるだけだろう」

「それって異常だったことじゃないんですか？」
くすくすとサラは笑った。

異常だとか、正常だとか。

線引きをするのは圧倒的大多数の正常者たち。

もしも世界に異常者のほうが多ければ、そんな価値観は逆転するのだろうか？

「どうだろうね。私は君たちみたいな人間と接していると、なにが正常な世界で、何が異常な世界なのか理解できなくなるよ……」

「先生もこちら側にいらっしゃったらいかがですか？」

男の言葉に、娘が茶色の髪を揺らしながら笑いかける。

「いやいや、わたしはこちらの世界で充分。君みたいな世界の住人と話しをできるのは本当に光栄だよ」

彼の心にもない言葉に、サラは肩をすくめてみせた。

警察組織の人間たちは、黄金の巻き毛の少女を欲している。

それがサラにはわかる。

「まあ、どちらにしたところで、君のことを説得できるなんて思っ
てはいないし、なによりも、君たちが、キャッシュを裏切るとも思え
んしな」

そうだ。

そこが肝になる。

精神病質者は決して冗談で世間を振り回しているわけではないの
である。

犯罪を隠蔽してしまうことに対する異常な嗅覚と、自分と相手の
距離感をはかることに對する決して正常とは言えないバランス感。

ありとあらゆる野生の感覚を彼らは持っている。

たとえば、空腹を感じて人が食事をしたがるのと同じだ。彼らが
犯罪を犯す理由はたったそれだけ。

「やってみよう」と思ったから「やってみる」だけ。

そこには、普通の人間のように良識や世間体などの足かせは存在
しない。

なぜ、と思う人間もいるかもしれない。

しかし、腹が減ったから食事をする、ことに対して誰が疑問を持
つというのだろう。サイコパス、もしくはソシオパスにとって、な

ぜ犯罪を犯すのかと問われても、正常な人間たちには理解不能とも言える答えしか返ってきたりはしないのだ。

たとえば、「どうして食事をしたの？」と尋ねられた人間がいたとして普通の人間であれば「おながが空いたから食事をしたの」と、こう答えるだろう。

サイコパスたちに「どうして犯罪を犯したのか？」と尋ねたとしても、彼らは至極短絡的に「やりたかったから」としか答えないだろう。

彼らにとって、腹が減ったから食事をする、ということと、やりたかったから犯罪を犯すということは、同列の問題でしかないのだ。「君と話をしていると私も時折、なにがなんだかわからなくなってくるよ」

苦笑いしたウィンストンはサラのいれたコーヒーをすすった。

「そうですね、わたしも先生と話をしているとずーっと平行線で埒があかないってよく思いますもの」

応じたサラが笑う。

そこにはどうあっても理解できない深い溝が存在している。

まるで、それは滯の底を覗くようだ。

互いが互いに興味を抱いて覗きこんでるというのに、絶対に相入れない。

決して理解しあうことなどできない。

そのことを互いに彼らは知っている。

「では、私はそろそろ行くよ。これでも多忙だね」

「あら、そうでしたの？」

口元に手を当てて娘はころころと笑った。

人を食べた笑みではない。

「せっかくいらっしゃってくださいましたのに、ろくにおかまいもしませんで……」

サラはそう言うとかすかに首を傾げた。

「いいかい？ 君は確かにサイコパスだ。わかっているだろうが、

君にはアニタも、キャシーも。そしてあの金髪の女の子も手には負えない。しっかりと手綱をとることだ。そして、もしも万が一に負えないと思ったなら、私を頼りなさい」

いいね。

確認をするように彼が言えば、彼女は眉をひそめる。

ウィンストンに言われなくても、そんなことはわかっている。

「……もちろん。わかっております、先生」

短い沈黙の後に彼女は言った。

立ち上がったウィンストンは広い肩を大きく揺らす。

サラにとっては見慣れた背中だった。

正常な世界に生きる精神科医。子供だったサラのことを実の親のように気遣ってくれた。

虐待も受けていない。愛情が欠落しているわけでもない。それだ
というのに、サラは生まれながらにしてサイコパスだった。

自分は、この世界の中にあつて異質なのだと彼女は子供の頃に、
すでに理解していた。

言うなれば、まるでフログラフの中に立っているような感覚だ。
自分以外の存在の全てが、色のない世界。

手を伸ばしても、彼女には理解できない。

「……先生」

「なんだね？」

玄関の扉に手をかけたウィンストンにサラが声をかけた。

「お氣遣いいただいて、ありがとうございます」

「気にしないでくれ、私は君の両親に託されただけのことだからな」
鼻から息を抜いた彼は目を細める。

大学病院の救急救命室で働いていた外科医の父親は若きホープで
あり、内科外来で常に患者のことを思ってきた母親は患者からもス
タッフからも人気の的だった。特に母親は、性別を問わず人気があ
り、いつも人の中心にいた。

そんなサラの両親は、ある日の、病院を狙ったテロリズムから患

者を守ろうとして命を落とした。

爆破の影響で、病院の一階は見るも無惨な惨状だった。

当時、その病院の精神科に研究室を持っていたウィンストンはサラの治療のためにカウンセリングを行っていたのだが、爆破事件にサラを伴って避難する途中に、少女はサイコパス特有の感覚からか、なにが起こったのかを悟って走り出した。

「パッ！ ママーッ！」

白衣を着たまま吹き飛んだ多くのスタッフ。

ちぎれた腕、足。血塗れで倒れている者も多くいた。

うめく悲鳴を少女は聞きながら、両親の姿を探す。

「……サラ、大丈夫だ。パパもママも、きっと避難しているはずだ」
追いかけて気休めのように告げるウィンストンを振り返ったサラは大きな青い瞳を見開いて彼を見つめていたこと。

「先生、わたしは子供だけど、子供にだってわかるわ。これのどこが大丈夫なの？ パパとママはどこ？ パパとママはわたしと違ってずるくないから、絶対に避難してるなんてことはないわ。パパとママは、きっとこの瓦礫のどこかにいるはず……」

声が震えた。

彼女の心の均衡が崩れるのではないかと、ウィンストンはそれを心配した。

ただでさえ、サイコパスとして、心のバランスが人と比べて不安定なのだ。そんな彼女が血の海を見てどうなるか。

どんな悪影響が生じるのか。

瓦礫を踏み分けて進む彼女になにが見えるのか。

けれども、瓦礫の中に、彼女の両親は発見できなかった。

後日、判明したことは、爆弾を人のいないところへ持ちだそうとして、二人は死んだということ。

姿があるわけもなかった。

そんな過去の事件を思い出して、ウィンストンは軽く目を伏せた。
「君のご両親は、立派だった」

型どおりの彼の言葉に、サラは思い出したのか苦笑した。

「どうでしょうか？ 死んだらどんなに立派でもものの役に立たないとおもいますけれど」

もっともらしいサラの言葉に、ウィンストンは肩をすくめる。サイコパスである彼女にまともな応答など期待していない。

立ち去ったウィンストンを見送ってから、サイコパスの少女は金色の巻き毛の少女と共に家の中に入ってきた。

顔すらあわせたくない程、アニタは彼を嫌っているらしかった。

「別に、ウィンストン先生はあなたに毒を盛ったりしないのに」

穏やかなサラの言葉に、少女は無言のまま肩をすくめる。

「そもそもなんでわたしたちが、わたしたちより強い奴を保護しないといけないわけ？」

アニタのあきれたような言葉に、サラは「そうね」と言いながら金色の巻き毛を肩の上で揺らす少女を眺めた。

外見だけを見るならば、ごく普通の小学生だ。

しかも小学校にあがったばかりの、幼女とも言える少女。

本当にこんな子供が世紀の殺人鬼であるのか。

なにも知らなければ、彼女を見て誰もがそう思うかもしれない。

しかし、それでもアニタとサラはわかっている。

背筋に走るぞわりとした感触が気持ち悪い。

「まあ、考えるのはやめましょう」

アニタはキッチンを覗いて落胆したような声を上げた。

「ウィンストンの奴なんかがきてるから、ご飯まだなのね！」

憤慨したような声に、サラは思い出したように「あら」とつぶやいた。

そうして電話をとる。

「仕方ないわね、ピザでもとりましょう」

「えー？ わたし、ジャンクフードって嫌いー」

唇を尖らせる少女に、サラは「うーん」とうなってみせた。

「野菜炒めと、目玉焼きなんかでもいい？」

「いいよ！」

てきばきとサラが冷蔵庫を開くと野菜を取り出す。

そんな彼女の手元を見つめているのは、金色の巻き毛の少女だった。

「どうしたの？ 料理している人がそんなに珍しい？」

「……うん、あんまりそういうの見たことないから」

「そうなの？ まあ、確かにあなたはお料理と縁がなさそうだけれども」

手早く三人分の料理を作る彼女は、その間に皿を並べたり茶を煎れて、パンのはいったバスケットを準備する。

イスに座ったままでそんな女の動作を物珍しげに見つめている金色の髪の少女、EVE-000-782は不意に鈍い痛みを感じてこめかみを押さえた。

料理をしたという記憶がない。

料理をしている人間が見慣れている記憶がない。

けれども、そんな記憶すら曖昧なのだ。

「あなたの名前を教えてはいけしないと、キャシーに言われてるけれど、なにか呼び名がないと少し不便ね」
にこりとサラは笑う。

「別に、名前なんていらない……」

無表情のまま少女は告げると、かつて多くの人間が知る長かった黄金の巻き毛をかきあげた。

「あなたはそうでしょうけど、わたしたちは不便で仕方がないわ。

それに、エレーネでいいとあなたは言ったけれど、あなたはエレーネなんて呼ばれることを望んでいない」

微笑するようなサラの言葉に、少女は肩をすくめた。

「個人の名前なんて、どうだっていいじゃない」
名前など記号でしかない。

切って捨てるような彼女の言葉に、サラは困惑した表情で首をかしげた。

「イブとでも呼べばいい……」

少女は今更、自分の名前を新しく決めるつもりなどなかった。大

きなため息をつきながら、椅子の背もたれに背中を預ける。
覚えていなければならぬことがあったような気がする。けれど、
二年間もの間、彼女は多くの個体の中で分離されたために、個体と
しての存在が曖昧となった。

まるで頭の芯にあったはずのホストコンピューターを取り除かれ
たかのようで、それが彼女にはいらだたしかった。

「イブ……。創世記のエヴァ？」

「そうよ」

遠回しにそう言われて、少女は即答で断言する。

「イブで、いいわ」

EVE-000-782だから、イブ。

ごく単純な名前だ。

それ以上の意味など必要ではない。

「自分の名前を、それ以上はほしくないということ……？」

ほほえみを絶やさないままで、サラは問いかける。そして、目の
前にいる最強の殺人鬼を凝視する。

「なんとも言えばいいわ」

自分の名前を思い出せない。

自分の名前を忘れてしまったことが苛立たしい。

ただ、頭の中に繰り返し鳴るのは警鐘だ。

危険だと、ひたすらに繰り返す。

自分の名前を、これ以上はほしくないということなのか、とサラ
が言った。その言葉をEVE-000-782は考える。

ずきりと側頭部が痛む。

少し休みたい、と、EVE-000-782は金色の髪を肩の上
でなびかせると二階へ続く階段へと歩きだした。

「そう、ゆっくりお休みなさい」

優しく穏やかな彼女の声が、今のEVE-000-782にはひ
どく不愉快で、無言のままであてがわれた部屋へとあがっていった。
「なによ、あんな殺人鬼に優しいのね」

怒ったようなアニタの声が聞こえた気がした。

EVE-000-782。

エレネ。

覚えているのはその二つの名前だけ。

実験室に二年もの間閉じこめられ、そして、その間に多くのクロ
ーンを作成され、その意識を分散させられたために生じた混乱だ
ということは彼女はわかっている。

そして、EVE-000-782にとって不愉快でしかない事
実は、その事実が過去の実験を思い起こさせて、彼女は眉をひそめた。
苛立ちが消えない。

「あなたも殺人犯でしょう？」

「わたしのことはいいのよ、だいたいなんでサラがあんなマジッ
クボムにまで優しくしないといけないの？」

怒りの混じった声。

怒りとはなんだろう？

苛立ちとはなんだろう？

そんなことを考えながらベッドに潜り込んだ。

＊

どうして殺してはいけないの？

問いかけたのはいつのことだったろうか。

誰に問いかけたのだろうか。

「……ねえ、どうして人を殺してはいけないの？」

少女は顔を上げて、男をのぞきこむ。

白人の大男。茶色の瞳が印象的な、そんな男だった。

「教えてよ……」

ソファにごろりと横になった大男に彼女は問いかける。ひどく真
摯な瞳を向けて。

彼は、ただ困惑したように、人を殺すことはいけないことだと、

そう言った。

人が人を傷つけるのが罪なのだと彼は言う。けれど、と彼女は思った。

自分は兵器なのだ。

兵器の役割はただひとつ。

敵を打ち倒し、傷つけ、殺す。

それが兵器の役割だ。

「君は、人だろう……？」

そう言われて、少女は言葉に詰まるほかなかったのだ。

「わたしが人に見えるの……？」

研究所では、誰一人彼女を人として扱ったりすることはなかった。人ではなく、実験動物の一種として扱われた。

彼らと同じ形をしていながら、彼らに作り出された人造のモルモット。

「君は、どこからどうみても人じゃないか」

穏やかに笑いながら、彼はそっと彼女を抱き寄せる。まるで幼い娘にそうする父親のように。

「……わたし」

人だなどという自己認識は彼女の中にはなかった。

そんなものを教えられなかった。自分のことを「人」であるなどとは思っていなかった。

同じ形をしていても、彼らと自分は違うのだと。

彼女が生まれたときから浴びてきた称賛は、平凡な人間が受けるようなものとはほど遠かったから。

「最高の兵器」

「最強の兵士」

アメリカの兵器研究の中の最高傑作。

彼らは繰り返しそう言って、彼女の内側に刷り込んだ。そして、繰り返されるのは昼間はつらい実験と、夜は体を弄ばれ眠ることも許されない。

ほかの動物と同じように、眠りたいと思っても彼らはそれを許さなかった。

「苦しいのはいやなの、実験がんばるから、もっとがんばるから、苦しくしないで……。痛くしないで……」

泣き叫んだ彼女の言葉など、誰も聞き入れはしなかったことを思考の片隅で思い出す。

どれほど懇願してもやめてもらえなかった。

苦しくて、痛くて、つらいその行為から逃れたかった。彼らはなぜか昼間は決して行為には及ばなかったのだが、それでも、彼女は苦しみから逃れられたわけではなかった。

昼間は昼間で、彼女に対する過酷な実験が繰り返された。

幼児の小さな体を、彼らは体力の限界など考えなしにいたぶり続けたのだ。

抱き寄せられて、少女は体を固くする。

「痛くて、苦しいのはもうやだ……」

ぽつりとつぶやいた彼女に、灰色の髪の毛の茶色の瞳の大男は静かにほほえむ。

「俺は、君に痛いことや苦しいことはしないよ」

「本当に？」

彼女が問いかけると男は穏やかに笑った。

「俺は警察だ、嘘はつかないさ」

「……嘘ついたら、殺すからね」

物騒な言葉を吐き出した少女に、大男は目を見張った。

殺す、という直接的な言葉に驚いたのかもしれない。彼女はそうして男に抱き寄せられたままで目を閉じる。

彼が誰だったのか、思い出せない。

忘れてはいけなかったような気もするのに、なぜだか思い出せない。EVE-000-782はゆらりと眠りの底にたゆたっている。

「嘘なんてつくものか」

ほほえんだ男の声が心地よかった。

自分の中には、自分に危害を加える人間などほとんど存在していなかった。

「俺は……」

EVE-000-782と呼ばれ、人間としての尊厳などを踏みにじられ続けた彼女の中にあるものは兵器としての存在理由だけだった。

「……わたしは、最高の兵器」

意志を持つアメリカ兵器史上の最高傑作。

兵器に、自分の感情など必要ではない。不安定な感情を抑制することが難しくて、彼女は混乱する。

彼女は自分の感情をひとりでコントロールすることなどできない。それは、彼女が永遠に成長することのないようにデザインされたためによる歪みだ。

最高傑作と呼ばれる兵器でありながら、彼女がその内側に大きな歪みを抱えているということは、同時に大きなリスクを抱えているということなのではないのか。

しかし、第二次生体兵器研究所の研究員たちは誰もそのことに対して言及しなかった。

なぜなら、自分たちの手を離れてしまえば、それがどれほど大きなリスクを抱えていたとしても、知ったことではないからである。

あの声は、誰だろう。

随分と昔から、彼の声を聞いていたような気がしたけれども。

ぼんやりとした意識でそんなことを考えながら、EVE-000-782は眠る。

一生、眠りからさめなければいいのに。

優しい眠りと、優しい思い出のなかにある声に包まれて眠っていられればいいのに。

「……」

優しい声の持ち主の、その人の名前を覚えていないはずなのに、

彼女はその人の名前を呼んだ。
いつも自分に笑顔を向けてくれて、そして自分を抱きしめてくれる彼の名前を。

*

第一次生体兵器開発計画は非道とも言える行いが繰り返された。実験体は当初、人間以外の動物で行われた。しかし、その知性に限界があると判明して以来、計画は転換され極秘裏に進められることになった。

多くの孤児たちをその実験に適用された。
彼らの多くは、研究の際名前を剥奪され、そうして番号を与えられる。

上辺は名前で呼ばれることもままあったが、研究員たちの間ではもっぱら番号で呼ばれ、そうして過酷な実験が繰り返された。
それを知る政府の人間は一握りしかおらず、自分に降り懸からない実験であるということから、それらの行為を黙認した。

極秘裏に実験が重ねられたことには訳があった。

当初、その実験に動物を使っていたことを公開していたが、国内の動物愛護団体から多くの非難を浴びたため、動物を使っていることを非公開とすることになった。やがて、動物実験による結果は彼らが希望するだけの結果を出すことができないまま、うやむやとされる。

その後、人体実験に切り替わっていくのだが、第一次生体兵器開発計画中盤から、第二次生体兵器開発計画で降まで、まともな研究結果は望むべくもなかった。

多くの実験体たち、この場合、多くの実験に晒されてきた子供たちは、発狂、もしくは実験の高い負荷に耐えきることができずに死んでいった。

そんな非人道的な実験の末に、作られることになったのが、人間

の卵子と精子を使って培養された人造人間たちだった。

このため、多くの科学者たちは相手を人間だとも思わなくなっていた。

人の形をしていながら人ではないもの。

人の遺伝子を持っていながら、女の子宮に育まれなかったモノ。人ではない、モルモット。

そんな認識しか彼らは持たなかったのである。

それが人道的であるか、非人道的であるかという倫理的な判断は、当時の研究員たちの間には存在していなかった。

目の前に存在する、最高の実験体。

それらは、優秀な頭脳を持つ彼らに与えられた玩具でしかなかったのだから。

そして、第二次生体兵器開発計画の後期に作り出された子供たちがいた。

数人の子供たちは、今までの研究ではあり得なかった「生体兵器」としての才能を有しており、彼らは、ウェポン・コードと呼ばれる番号を与えられてナンバリングされた。

ウェポン・コードは、総数が十三人。

その事実、アメリカ軍を統括する国防総省すらも知り得ない事実である。

彼らが知るのは、マジックボムとそれにまつわる数人のウェポン・コードのみで、中でも最強と恐れられたのが世にその名前を知らしめた事件、ケース・アングリーボマーだった。

その研究をしていた人間は今では数が少ない。

なぜならば、その事実を知るほとんどの人間を結果として、ウェポン・コード・ナンバー一三とも呼ばれる、マジックボムが殺害してしまっただけだった。

アメリカ合衆国、最悪の人体兵器。

その中で、最強と呼ばれる被験体が、EVE-000-782。つまるところ、アメリカ合衆国が野放しにせざるを得ない殺人鬼マ

ジックボムなのである。

彼女と呼ぶのがはたして正しいのか。

EE-000-782の混乱はさらに多くの事件を巻き起こす危険性を、グレイシアは長く説いていながら、誰もそれを危険だなどとは思わなかった。

人間というのは愚かなもので、いざ、目の前に現実を突きつけられなければ受け入れることができない。

兵器として完成された十三番目。

歌うようにつぶやいたグレイシアは、どこか不愉快げにそっと片目をすがめた。

「EE-000-782を止められるのは、はたして誰なのか」風の噂では、彼女を制御できたはずの兄とも言えるウェポン・コードを、EE-000-782を封じ込めるために解体したらしいということ。

そして、それをメイン・デバイスとして、彼女のクローン体でEE-000-782を制御したという。

少し考えれば危険性など簡単に理解できるというものの、と、グレイシアは思う。

EE-000-782のクローン体を多く作り出せば作り出すほど、彼女が単体で起動することは想像つくだろうに。

皮肉げに考えてから、グレイシアは窓の外の暗闇を眺めた。

かつての第二次生体兵器開発計画で主要な研究員のほとんどが死んだ。

EE-000-782はまだ目的を達成していない。

達成していない目的を忘れているわけではないだろう。しかし、彼女のメンタル面はひどく脆い。

彼女の精神面を支えるデバイスがない今、どうなることか……。彼らは、その危うさを知っていて引き離れたのか。

それとも知らなかったのか。

ブルネットの髪をかきあげた女は、ため息を吐き出した。

もう、今更どうすることもできはしない。

EVE-000-782を止めることなどできはしないのだ。

彼女が止められる可能性を考えたとするならば、彼女が自ら止まるときだ。

しかし、それはどんな瞬間だろう。

グレイシアは思考を重ねた。

彼女の知るEVE-000-782は、決して表情豊かななどではなかった。暗く沈うつな眼差しはどこか虚ろで、そして暗い怒りをたたえて世界を見つめていたことを、グレイシアは覚えている。

水色の瞳がとらえていた世界を、グレイシアは知りはしない。

少なくとも、グレイシアは実験体の気持ちを思いやるつもりなどさらさらなかった。

そんなものに情を移しては、実験などできなくなることを、彼女は知っていたからである。

どんな感情であれ、情を移した男たちを女は愚かだと思った。

実験動物に対して、なんらかの感情を抱くべきではないと彼女は思っていた。

だから、EVE-000-782が夜な夜な性的な虐待を受けていても、それを愚かだとは思わなかった。

グレイシアにとってはそれだけのことでしかなかった。人として、善悪の観念を持つこともなく育てられた兵器。兵器である彼女にはそんな概念は必要ではなかったし、なによりも、そんなものに感情を向ける必要性などなかった。

だから、グレイシアは男たちの行為を愚かだと思うだけで黙認した。

EVE-000-782には守ってくれる児童養護施設も、法律もなかった。

彼女は、アメリカ合衆国にあって、「存在していない」子供だったのだから。

動物のように、痛い苦しいという感情しか抱かない。

そしてEVE-000-782は幼すぎた故に、なにをされているのかを知らない。

もしも、と、グレイシアは思う。

もしもEVE-000-782が過酷な実験だけを行われていたなら、暴走などしなかったのだろうか、と。

「それはないわね」

独白して、グレイシアは軽くかぶりを振った。

もしも実験だけを行われていたとしても、EVE-000-782は遅かれ早かれ暴走しただろう。

その臨界点が少々遠のくだけのことでしかない。

ケース・アングリーボマー。

その事件が引き起こされる原因を作ったのはグレイシアたちの所属した第二次生体兵器開発計画である。しかし、それははたして本当にその研究期間だけの責任となるのだろうか？

そんなことを、グレイシアは考える。

非道極まりない実験を許容した国防総省、そしてアメリカ合衆国。そして、無責任にもそれらを知ろうとしない国民たち。

声高に、政府の非道を非難していながら、その実、真実を見抜く目すら持たない愚民たち。

グレイシアは思い出すように考えてから、デスクの引き出しの奥から古いファイルを取り出した。

タイプされた日付は、ケース・アングリーボマーから数えてもずっと前だ。

挟まれた書類の間に写真が数枚まぎれている。

自我と呼べるものを持った少女は、EVE-000-782。コードを省略されて、彼女は「E782」と呼ばれていた。

そもそも、第二次生体兵器開発計画なのに、「EVE-000-782」とはどういうことだろうか、と当時のグレイシアは思った。要するにその研究は、第一次生体兵器開発計画の延長でしかないということをも分に物語っていた。グレイシアからしてみればそん

なことは些細な疑問でしかなく、研究ができればいいとは思っていなかったから、そんなことを追求したりはしなかった。

初めて彼女と引き合わされたのは、EVE-000-782がまだ二歳の頃だった。当時は、まだその他大勢の子供たちよりも少々素質がある程度でしかない子供だった。

彼女は過酷な実験を繰り返されるうちに、異常な知識の吸収と、そして異常な異能力を開花させていくことになる。

その中のひとつ。

EVE-000-782の際だった能力の一つが、いわゆる人体発火能力だった。

当初は感情の高ぶりとともに見せる、火の玉程度だったのだが、それは実験を繰り返されるうちにより強大なものへと姿を変えていった。

しかし、彼女の素質はそれだけではなかった。

グレイシアは未提出なままに終わった報告書を指先でめくる。

催眠下による強い暗示で、EVE-000-782の能力を押さえ込んだのだが、彼女はそれでもしなければ簡単に暴走を引き起こしただろう。

アメリカ合衆国は、危険な兵器を抱え込んだのだ。

「わたしは、殺してしまえばいい、と、ずっとそう言っていたのよ」
EVE-000-782。

彼女は危険だ、と。

善悪の観念も持たない。ただ、自分の感情のままに進む兵器の存在など危険以外の何物でもない。

だから、放っておいてはいけないとグレイシアは言い続けてきた。それを無視したのは上層部だ。

「自業自得よ……」

低くつぶやいた彼女はそうして、そっと片目を細めた。

その瞳がなにを見るのか。

その瞳がなにを語りたいのか。

それは、グレイシア以外の人間は知りはない。

止めることもできなかった自分にどんな災禍が降り懸かったとしても。そして、彼女の研究結果を奪ったあの男にその災厄が降り懸かったとしても。

全ては自業自得でしかない。

失笑した彼女は、長いまつげを伏せた。

第七章 Spre killer 1

彼女は、空気を吸うように人を殺す。

そもそも、彼らの言う「彼女」とは誰のことなのか。

それを知る者は何人いるだろう。

そして、それは正しい回答であるのか。

誰も、なにも。問いも、答えも知りはない。

「正しい答えって、そもそも存在しているのかしら？」

黒髪を長く伸ばした少女は上機嫌の顔でウフフと笑うとそうつぶやいた。

「パーマかけてみない？ くるくるの縦カール。あなた、かわいい顔しているからとても似合うと思うけど？」

「うーん、どうしよっかな」

鏡の前で首を傾げるアジア系の少女の年齢は、十二歳くらいだろうか。

ぱっちりと開かれた二重の大きな瞳はやはり漆黒をたたえた黒で、それがひどく印象的だった。

彼女も一応、アメリカ政府と司法取引をしている身の上である。

もっとも、そのわりにはアクションが派手すぎて、司法機関と警察機関、そして軍隊などからは嫌われているのだが。

そういった意味では、同じように証人保護を受けているマジックボムと彼女は大きな差異が見られるのだが、当人はあまり気にしていないようには見えなかった。

キャシーと、マジックボム。

どちらがより扱いやすいかと尋ねられれば、アメリカの政府に属している人間たちは口をそろえてこう言うだろう。

「マジックボムと、キャシーでは比べものにならない」

そもそも、理性的なマジックボムとキャシーでは比べものにならないのだ。

鏡の向こう、自分の背後で黒髪をいじっている女はふわりと、どこか神秘的な微笑を浮かべる。

「ねー、どう思う？」

「……どう、というの？」

黒髪の少女、キャシーに問われて金髪のストレートの髪を背中に流した若い女は首を傾げてみせる。

「あのサイコパスの姉妹と、マジックボムのこと！」

「……そうねえ」

答えながら考え込んだ。

金髪が緩やかにうねる。

「でも、あの子たち姉妹じゃなかったような気がするけど……」

どこかの外れな答えに、キャシーは頬を膨らませた。

もつとも、本当に機嫌が悪いわけでもなさそうだ。むしろ、機嫌はよいのだろう。

「そんなのどうだっていいじゃない。姉妹だろうとなかろうと」

「それもそうね」

キャシーの言葉に、美容師の女はかすかに肩を揺らした。

「わたしさ、あんたのその余裕綽々の態度が気に入らない……！」

どこかむつつりと言い放つ少女の髪にブラシを通す女は口元で笑った。

謎めいた、という表現が正しいかもしれない。

「あの子たちより、マジックボムの方が上だし、あの子たちはそれをちゃんとわかっている。不要に手出ししたりはしないと思うけれど、心配しているの……？」

鏡越しに覗き込んだ女は青い瞳に笑いをにじませる。

「でも、なんだかんだ言ってキャシーは、彼女を助けてあげるんでしょう？」

見透かすような女の言葉に、キャシーは唇を尖らせた。

気まぐれで、野良猫を思わせるキャシーが、女は好きだった。

「どうしようかしら……」

「素直じゃないんだから」

再び彼女は微笑すると、絹糸を思わせる手触りの良い髪を撫でると、女は目を細めた。

そんな女の様子を、キャシーは「蛇のようだ」と思う。

「どうせわたしは素直じゃありませんよう」

「機嫌いいわね、ずっと……」

「わたし、あんまりなんにも考えてないから！」

言い放った彼女は、女の手を不意にがっちりつかんだ。

「世間は、どう思ってるのかしらね？」

低くつぶやいたキャシーの言葉に、美容師はかすかに瞳を開く。

もっとも特別、驚いたわけでもないらしい。

「簡単よ」

低い声が静かに響き渡った。

誰もいない室内に、女と少女の声だけが響いている。

「キャシーはマジックボムを面白くないと思っていて、どんなことがあっても共同戦線なんてはったりしないと思っている。あなただっ
ってわかってるでしょう……？」

そう。

世間ではキャシーとマジックボムが犬猿の仲だと言うことは有名な事実だった。

「それよそれ。面白くない、つまんない！」

眉をつり上げた彼女は一転して機嫌悪そうな表情になった。しかし、美容師の女はそんなキャシーに動じることもない。

「それで、あなたはどうするの……？」

女がほえんだ。

「……わたしはキャシーよ？」

「……そうね」

あなたはキャシーよ。

美容師の女はそう言って、ブラシを置いた。

キャシーは黒い髪を美容師の女の趣味で丁寧な縦巻きにされて店をでた。

フリルのたくさんついたジャンパースカートとしろい丸襟的印象的な半袖のブラウス。

そして白いストラップシューズをはいている。

ため息をついたキャシーは水色の大きなリボンがついたカチューシャを指先で触れた。

そもそもこれからやろうとしていることを、美容師の女は知っているはずなのに、好き勝手にコーディネートしてくれるものだと、彼女は思った。

「かわいい女の子は、かわいい格好をする権利があるのよ」

彼女はそう言ってほへえんだ。

自分のどこがかわいいのだろうか、キャシーは思う。

少女は美容師の女が気味悪いと思う。

少なくとも、美容師の女は決してサイコパスではない。

キャシーにはそんな理解できない気味の悪さがあって、美容師の女のことを彼女は嫌いではないが薄気味が悪いと思っていた。

「またすごい格好になったな」

呆れ気味の男の声に、キャシーは目を上げる。

サングラスをかけた白人男、アシル・ブラスだ。

「……アシル？」

「なんだ、なにか企んでるのか？」

ぞんざいな彼の声に少女は縦巻きにされた黒髪を揺らして、アシルに手渡されたバスケットのストラップを肩にかけた。

その中にはキャシーの武器が入っている。

少女の武器。

本来であればその武器はキャシー程度の体格の少女が持ったところで大した武器にはなりはしない。しかし、キャシーが持つと違う結果になる。

「別に、わたし、企むとか嫌いだし」

「そういやそうだったな」

肩をすくめたアシルは彼女に預けられた日傘をわたした。

そもそも、小麦色になるほど日焼けしているわけだから、日傘もへったくれないだろうと思うのは男の勝手な考えだろう。

キャシーは日傘ですらも暴力の手段とする。

そんな凶悪な彼女を、アシルは短いつきあいでも知っていた。アフリカで行動を共にした二年程でいやというほど思い知らされた。

彼女ほど凶悪な犯罪者を彼は知らない。

「……あんたより、危険なのか？」

突然問いかけられて、キャシーは顔を上げた。

黒い巻き毛が揺れた。

「誰が？」

誰が自分より危険なのかと。

「白々しいな、マジックボムに決まってるんだろ？」

実年齢で言えば自分より少し年少でしかない彼女の鋭い眼差しに射貫かれる。

「わたしより強いに決まってるでしょ。そうじゃなかったら、あいつは世界最強だなんて言われないわよ」

至極冷静に、キャシーは現実を把握している。

「キャシーらしいな……」

呆れたような、どこか感心したような彼の言葉に、キャシーはため息をつく。

「相手と自分の力量差が把握できないのは三流よ」

戦場では、自分と相手の力量差を性格に把握できなければ生き残る頃など不可能だ。だから、キャシーは正確に事態を把握する。

「……そりゃそうだが」

「マジックボムを相手に、勝てるなんて思ってるアホ共のほうが愚かなのよ」

マジックボムが幼い容姿の持ち主だからと、侮る人間たちがいることは知っていた。

そして自分のことも同じように侮るのだ。

「マジックボムとキャシーのことを、屈強な女兵士だとも思ってるらしいわよ」

「そりゃまあ、そうなるだろうな」

伝説だけを聞けばそうなるだろう。

まさか、世界に名だたる殺人鬼が年若い少女だとは、現実を目の前にするまで理解できる者はいないはずだ。事実、アシルもそうだったのだから。

「世間は常識にとられすぎているんだと思うわ」

「……いや、おまえの存在が非常識なだけだと思うが」

「なによ」

「なんでも」

剣のこもった彼女の声に、アシルは短く応じた。

彼女の存在は非常識すぎる。

もっとも、そんなことを言ったところで意味がないことだ。

「サラとアニタのところに預けているんだっけか？」

「あいつが、なにを考えているのかはわからないけど、楽しそうだからつきあってみるつもり」

なんでもないことのように淡々と言ったキャシーに、アシルは思わず彼女を見つめる。

「そんな理由でいいのか？」

「……え？」

「……だから、そんな理由でいいのかって」

「いいのよ。わたしは、楽しければなんでも」

それが全てなのだと。

彼女は言った。

「そんなもんか」

「そんなものよ」

キャシーはソシオパスだ。

アシル・ブラスはソシオパスとサイコパスの差など、余り理解し

ていないのだが、それでも、目の前にいる少女姿の殺し屋が普通の人間ではないということを知っていた。

キャシーが自分で語ることはないが、常識という枠からはかけ離れた人間である。

「手助けするのか？」

主語のない彼の問いかけに、少女は無言で頷いた。

「手助けって言うのかは謎だけどね、さすがのマジックボムでもひとりじゃどうしようもないでしょ」

要するにキャシーは極めて個人的な、しかも非常にくだらない理由でマジックボムに肩入れしようとしているのだ。

「手伝おうか？」

「……別にいらないけど」

口ごもる彼女にアシルはサングラスを押し上げてキャシーを見下ろした。

「歩きだけで移動するつもりか？」

「……そういう問題もあったっけ」

まるでたった今思い出したようにつぶやいたキャシーにアシルはやれやれと肩を落とす。

基本的にキャシーは思慮が足りない。おそらく、単純に考えていないだけだろう。

小さな体のふたりの殺人鬼。

これから、マジックボムがなにをしようとしているのか。それを、キャシーが理解しているわけではない。彼女は自分の思うままに行動するだけのことだ。

「少しは考えろ」

男にそう言われて、キャシーはちらりと瞳を瞬かせる。

「いやよ、面倒くさいもの」

ぱつぱつと切り捨てように彼女は言い捨てた。

時折、アシル・ブラスには東洋人の少女が理解できなくなるが、それに対して、当人はもうで知ったことではない、といった様子の

ままだ。

「そんなこと、わたしが考えなくたって、別の誰かが考えてくれるわ」

歌うように言ったキャシーは、無邪気な面もちでにっこりと笑った。

それでこそ、まさしくソシオパス。

キャシーとマジックボムが共同戦線を張る。

その事実。

アシルは無言のまま現実を認識した。

背筋を冷たい汗が伝っていく。

これからなにが起ころうとしているのか、そんなこと考えたくもないし、そもそも想像もつかない。

マジックボムと呼ばれた爆弾魔と、人とは思えない能力を無造作に振るうキャシー。

「……別の誰か、ねえ」

つぶやいた屈強な男は、くると日傘を回す少女を見下ろす。

かわいらしい姿をしたこの少女が、アメリカを恐怖にたたき落としたスラム街の殺人鬼だと道行く人間の誰が認識しているだろうか。そんなことを繰り返すように考える彼は、ふと視線を感じて背後を振り返った。

まっすぐな金髪印象的な、白人の女が見つめている。

キャシーの髪を切った美容師の女だ。

口元をかすかにつり上げて笑っている。その笑いがなにを意味しているのかアシルには理解できない。

以前は自分の周りにいる人間も、大概まともではないと思っていたが、キャシーと出会ってそうではないことを知った。

自分の周りなど平凡なのだと。

キャシーの周りにいる人間は、それこそ得体の知れない者が多い。出自の知れた者中にもいる。しかし、あくまでも「中には」だった。

「キャシー？」

「なに？」

ぽんぽんと、打てば鳴るようにキャシーは言葉を返す。

「……あの女は、何者だ？」

「あの女って？」

首を傾げながら振り返ったキャシーは、アシルの視線の先に、美容師の女がいることに気がついた。

金髪の、青い瞳が印象的な白人女性。

女優だと言えば騙される者も、あるいはいるかもしれない。

「ああ、あいつは、わたしの友達よ。スラム街にいたところからの」
意外な言葉だった。

美容師の女はスラム街出身なのだと、キャシーは言う。

「シザーハンズって呼ばれてる」

なんでもないことを言うように、キャシーは言葉を続けた。

「……シザーハンズ？」

「そう。シザーハンズ」

なにやら物騒な台詞を聞いたような気がして、アシルは言葉を返す。

有名な映画だ。

はさみの両手を持った青年が、娘に恋をする物語。

「……そうか」

「なによ？」

「いや……」

追求するなど、なにかがアシルの頭の中で警鐘を鳴らしている。

追求してはいけない。

曖昧に言葉をぼかした彼に、キャシーは肩をすくめる。

「ただの殺人狂よ。元傭兵のね」

元傭兵だから、という二つ名ではないことをアシルは感じる。

シザーハンズと呼ばれるほどの理由があるはずだった。

なぜか、金髪の女がはさみを降りあげて血の中で笑っているのを

想像して、アシルはぶるりと背筋を震わせた。

「……あんたの」

甲高い声がぼつりと言葉を吐き出した。

「あんたの、想像は間違っていないかもしれない」

まるでさざめくように、少女の言葉は消えていく。

男は、驚いたようにキャシーを見下ろすが、彼を気遣う様子もなく道の先を見つめるだけだった。

「でも、傭兵として活動していた期間はそれほど長くないらしいけどね」

まさにその通りだった。

名だたる傭兵であれば、アシルが知らないわけではないのだ。

世界にあって、有名になるほどの猛者はそれほど多くない。女性傭兵となれば、なおさらだ。

その筋で有名なのは火の鳥と呼ばれる女性傭兵。そして、元ロシア特殊部隊のエリヴィラ・シャミナ、通称ミネルヴァ。そして、正しくは傭兵とは呼べないものの、時には戦場にしゃしゃりでてくることもある殺人鬼のキャシー。

彼女らは、戦場というタフな世界でも名を馳せる。

普通の女性が、男たちと同じように戦場で活躍することなどどだい無理なのだ。

「……シザーハンズなんて傭兵、聞いたことないな」

「そりゃそうでしょ」

キャシーは吐き捨てるように言う。

「シザーハンズの、最も得意とするのは要人の殺害。あの女は表にでてくることはほとんどないし、傭兵として活動していたのはほんの半年ほどらしいものね」

「そうじゃなくて名前だよ」

「名前……?」

アシルの呆れ気味な言葉に、キャシーはもう一度首を傾げて見せた。

「……なんだっけ」

言いながら考え込んだキャシーは瞳を瞬かせた。
黒い瞳が知的な光をたたえている。

「スラム街にいたころからの友達なんだろう」

「……細かいこと気にしないからいちいち覚えてないわよ」

友達の名前もどうでもいいと言いたげな彼女の言葉に、アシルは本格的に呆れた顔をしたが、それを口にするのではない。

「なんだっけなあ……、アンバーよ。確かアンバー」

アンバーと言うと、アメリカ合衆国ではアンバーアラートの成立することになったきっかけの少女の名前として有名だった。もっとも、そんな名前と同様に見られても、本人としてははなはだ心外だろう。

そんなことを思ったアシルを一瞥することもせず、キャシーは自分のペースで歩いて行く。

キャシーは相変わらずで、「ファミリーネームはなんだったっけなあ」とつぶやいた。

マイペースの少女は縦カールにされた長い黒髪を揺らして肩越しに男を振り返った。

アンバーなどという名前は特別変わった名前ではない。

だから、アシルがその名前を聞いてなにも思いつかなかったとしてもやむを得ないだろう。

「アンバーね……」

そんな名前の傭兵など聞いたこともない。

アシルもそれなりに、傭兵稼業を続けているがアンバーなどという名前の女傭兵など聞いたことがない。

その世界では殺し屋のキャシーや、傭兵火の鳥のほうがよくぽど有名である。もっともキャシーや火の鳥の存在感にかなう者などそうそういるはずもない。

「そ！ アンバーよ。スラム街にいた頃から、頭のねじが数本飛んでいたのよ！」

まるで踊るように彼女は歩く。

長くアフリカ大陸で彼女と共に活動してきた彼は、キャシーのキチガイじみた恐ろしさを知ってしまった。

キャシーと火の鳥ではどちらがより恐ろしいのだろう。

「俺は、おまえと知り合う前は世界で恐ろしいものなんてなかったんだがな」

ぽつりとつぶやいた彼の言葉に、キャシーはくるりと日傘を回してみせた。

「……まともな人間なんて、この世にどれくらいいるのかしらね」鼻で笑うような彼女の声が、けれども男には不快ではない。

「わたしはわたしのやりたいようにするのよ。別にあんたについてきてほしいなんて思っていないし、あんたはあんたが好きなようにすればいいのよ」

彼女はそう言うてから、頭上に広がる空を見上げた。

青い空が広がっている。

黒い大きな瞳を輝かせてそっと細めた彼女の瞳は空の青を映していた。

これからなにがはじまろうとしているのか、彼は知らない。

キャシーは殺人鬼であったが、殺し屋という別の顔も持っている。なによりも、マジックボムと比較して凶暴であるとは言え、彼女もアメリカ合衆国と司法取引をしている身の上だった。

マジックボムがキャシーよりも理性的である理由。そして、キャシーがマジックボムよりも凶暴な理由。

本来、攻撃性は保身の意識によるところが大きい。自分の身、もしくは誰か、あるいは何かを守りたいと思うが故に攻撃性として出現する。

そして、保身のために攻撃性が出現しないのならば、その理由はもうひとつ考えれた。

人間が凶暴な攻撃性に訴える理由のいくつかを考えるが、それらのいくつかはキャシーには当てはまらない。

アシル・ブラスは、マジックボムを個人的に知っているわけではなかったから彼女を判断するのは難しい。

「俺なんかが考えたところで、なにかわかるわけでもなし」

アシルは車のボンネットに寄りかかったまままで一人ごちた。

ホテルのフロントで少女はなにごとか話をしている。

キャシーは思った以上に知り合いが多い。

思いつきでなにをするかはわからないとは言え、そんな彼女の一面を知らなければ、投げやりだがかわいい女の子に見えないことはない。

おそらく、とアシルは思う。

ホテルのフロントで、キャシーとなにかを話し込んでいる白人男性のホテルマンは、先ほど彼女が髪型を整えてもらっていたシザーハンズとやらの同じ系統の人間なのだろう。

そうやってほとんどの犯罪者たちは、闇に紛れるように社会にだけ込んでいる。

そうしなければ、生きていけない。

息を潜め、闇に隠れるように彼らは生きる。

しかし、彼らは決して日の下で生きたいわけではない。

そんなものを彼らは望んでいない。

「待った？」

服装は変わらない。

かわいらしい黒いフリルのついたジャンパースカートも、これから殺し屋として行動しようとしているのだ。

おそらく汚れでひどいことになるのだろう。

そんなことを想像している彼に、キャシーは首を傾げるとアシルをじっと見つめた。

「なに？」

「……なんでも」

目をそらした彼に、少女はなにかを考え込むようにかすかにまっげを上げる。

マジックボムのように世界を震撼させるほどの殺し屋ではない。

しかし、その遂行能力は異常に高い。

誰もが彼女をトップクラスの裏社会だと認める。

「わたしのことを、裏社会だなんだって言う奴いるけどさ。わたしはただの犯罪者でいいのよ」

格好付けたところで仕方がないではないか。

彼女の言わんとすることを、アシルは察する。

「……そういえば、警察の奴がつけてきてるんだが」

運転席に乗り込んだ男はバックミラーを見つめてから、助手席のキャシーに告げる。

少女は、背後を大きく振り返ってから、そっと片目をすがめた。

もちろん、普通の人間であれば気がつけるようなひどい尾行をする刑事はいないだろう。

「FBI？」

「DCPDじゃないか？」

「……ふーん」

D C P Dと言われてもぴんと来ないのだろう。

「なんだっけ？ それ」

「……」

あきれたようなアシルがまるで人形のような少女を見つめた。

「州警察と一緒にしろ」

「ああ、州警か」

そう相づちを打った彼女は、しかめつらしい眼差しをフロントガラスの向こうに向けて低くうなる。

「だいたい、なんでもかんでも略語にすればいいってもんじゃないわよ。無関係の人間から見たらさっぱりよ！」

いかにも正論に聞こえるが彼女の意見はその場その場でころころと変わる。

それを知っているから、アシルは「ああ、そう」と気のない返事を返したただけだった。

彼女の言っていることに対していちいち反応していても時間の無駄でしかない。

「あんた、わたしのこと馬鹿だっと思ってんでしょ？」

尖った彼女の声に、ハンドルを操っている男はまなざしをちらと放る。

「思ってるわけないだろ」

なにをもって馬鹿というのか。

アシルは思考の片隅で考えた。

学校の授業を正しく理解ができていない、という意味でならば自分も「馬鹿」という範疇に入るだろう。

そもそも、キャシーの語学能力や知識量はその辺の知識人を余裕で上回る。

残念なことは彼女がソシオパスであり、そして、それらの知識を有効に活用していないことだった。もっとも、キャシーがそういった意味で「まともな人間」であったならば、アシルなどには彼女と

の接点がそもそもなかったのかもしれない。

多くの犯罪者たちは低い知能しか持っていないが、中には高い知能を持った者もいる。

そんな高い知能を持つ犯罪者たちのひとり。それが、キャシーやマジックボムだった。

「嘘ついたって駄目なんだから！」

なにかが彼女の気に障ったのか。

突然怒りだしたキャシーに、アシル・ブラスは思わず口元をほころばせた。

「嘘ついてねえっつーの。ただ、あきれてるだけだ」

「どっちも一緒よ」

目を三角にしたままで、少女は唇を尖らせる。

そんな凶暴さに、心をひきつけられては危険だと警鐘が鳴る。

自分の命を危険に晒してまで、どうしても物騒なものに近づこうとするのか。

通常の生物の行動を考えれば、危険なものからは遠ざかろうとするのが道理である。しかし、アシル・ブラスは違う。

自ら、好き好んで危険に近づいて行っている。

そんな自分の行動を、時折謎だとも感じるが、キャシーと呼ばれる犯罪者に興味をひかれてならないのだ。

「俺も、大概末期だな」

「誰が末期なの？」

人の話を全く聞いていないらしい、キャシーの声にアシルはステアリングを操りながら彼女に応じる。

「俺のことだよ」

「あっそ」

彼女と会話を交わしていると、まるでぽんぽんと歯切れよく言葉が返ってくるのが心地よいと思う。

まさしく、言葉のキャッチボールだ。

「でもさ、なんでこの国ってこんなに犯罪者が多いのかしらね」

まるで自分のことを柵に上げるようなキャシーの言葉に、青年は苦笑する。

どうして、アメリカ合衆国は犯罪者が多いのか。

彼女は不思議がる。

おそらく、それは純粋な疑問だ。

特別、自分を柵に上げているわけではない。

「……あんたもだろ」

正直に言葉を返したアシルに、キャシーは窓の外を眺めていた視線を彼に向けた。

「……フロリダと全然違うのね」

「そりゃ、フロリダと比べたらずっと北だからなあ」

「なんだってこんな寒いところを首都にするのかしらね！ 馬っ鹿みたい！」

キャシーは先ほどとは全く異なる話を勢いよく切り出してから話を戻した。

「わたしは、犯罪者でもいいのよ。だってソシオパスだものね」

まるで独白するように彼女は言う。

「普通はそれでまとめたらずいと思うんだが」

一般的には、犯罪者は犯罪者であって、その犯罪を犯した人間が精神的に病的なものを持っていようとなかろうと、逮捕する側にとってはどうでもいいことだ。

「あのさ、あんたはどっちの側の人間なのよ！」

機嫌を損ねたのか、キャシーが言うのアシルは口元で微笑する。

「俺は、そっちの世界の人間だが、精神的にはあんたとは相入れないだろうな」

軽く肩をすくめたアシルにキャシーは車窓に肘をつくと視線を外に向けてしまった。

「つまらないの」

「俺はあんたほどおもしろい人間じゃないからな」

二年も一緒に行動していれば、そんなことわかっていそうなもの

なのに、彼女は少しも理解しようとはしない。

それは意図的なのか、もしくはそうではなく、本当に理解できないのか。

普通の精神状態の人間には理解しがたいものがあつた。

しかし、だからこそキャシーはソシオパスなのである。

「あんたは、本名はあるのか？」

「あるわよ」

窓の外に視線を投げかけているキャシーは、アシルに即答する。

彼女に本名があるということが意外だった。

「わたしのお母さんは、アナって言うの。中国系アメリカ人の二世ね。お母さんの父親がスペイン系で、母親が中国系。そして、わたしのお父さんが純粹な中国系の血をひいてる中国系アメリカ人二世だから、わたしの本名はアン・アナ・チャン」

彼女の機嫌はころころと変わる。

それについていくのは普通の人間だと大変だろう。

しかし、キャシーの感情がまるで小石を転がすように変わっていくのを、ともに活動していた二年間で知ってしまったアシルには、彼女の会話についていくことはそれほど苦ではない。

なにも考えずに彼女の会話についていけばいいだけのことだ。

余分なことを考えようとするから、ソシオパスのキャシーの話についていけなくなるのである。おそらく、そのために彼女に殺された人間の数は多いだろう。

だから、自分はそんな轍を踏んではいけない。

少しでも気を緩めれば、そこに待っているのは身の破滅だ。

裏社会の片隅に身を置く人間の一人として、決して自分の命に対して気を緩めてはならない。

アメリカ合衆国でも名だたる殺人鬼であるキャシーとつきあうのならそれは当たり前のように氣遣わなければならないことである。表社会の人間たちのように、なんとなく生きていける世界ではない。自分の命は自分で守らなければ、生き残っていくことすら不可

能だ。

ただ、なんとなく生きていける世界を、アシル・ブラスは自ら切り捨てた。

そこは、自分の生きる世界ではない、と。

「キャシーは……」

フロントガラスの向こう側を見つめたアシルが口を開けば、少女の姿を選びとった殺人鬼は窓に肘をついたまま視線を投げかけた。そんな眼差しだけが、どこか大人びていてアシルは小さく息をつく。

「なに？」

「キャシーは、後悔したりはしないのか？」

尋ねられて、黒髪の少女は鼻を鳴らしてみせる。

「どうして？」

なぜ後悔する必要があるのか。

なにに対して後悔しなければならないのか。

短く彼女が言葉を返した。

「なんで、わたしが後悔しないといけないわけ？」

真顔で聞いてくる彼女を横目にしてアシルはため息をついた。

聞くだけ無駄な話だった。それを後悔する。

「わたしは、生まれたときからソシオパスよ。誰にも縛られないし、なにも後悔なんてしないの」

歌うように。

彼女は告げる。

かつて、アメリカ合衆国がマジックボムの次に恐れた殺人鬼。彼女は誰か決まった人間を標的にしているわけではない。自分が気が向いたときだけ殺人を犯す。

それを正常な人間たちは理解できないと言うが、アシルは理解できなくもない。

理解できなくもない、と言ったら、自分の精神状態を疑われるかもしれない。

「そうか……」

アシルはぽつりとつぶやいた。

「それはそれで幸せなのかもしれないな」

悩みがないということは、幸福なのだろう。

彼女ら、精神病質者には良心の呵責などない。そんなことを考えながら車の運転をする彼の横顔を、キャシーの黒い瞳がじっと見つめた。

穴があくほどじっと見つめられて、アシルが目をすがめる。横目で、少女を見つめると当の本人は、すいと視線をフロントガラスの向こうに放り投げる。

流れていく風景は低い建物が多い。

アメリカ合衆国の首都、ワシントンD・C.では高層ビルの建築が厳しく規制されているため、ほかの大都市のように高層ビルなどは見られない。

それが、ワシントンD・C.の景観を守ることにもつながっている。

フロリダ在住のキャシーとアシルなどからしてみれば、古めかしいにもほどがある。

「……なんでアメリカの首都って、こんなところにあるのかしらね！」

冬になったら寒いじゃない。

もっともらしい言葉が続けるキャシーは、苛立たしげに縦カールにした黒髪を指先でいじった。

「そりゃ、おまえ。マイアミと比べるっていうのも筋違いじゃないか？」

「比べてないわよ、寒いって言ったただけだわ！」

キャシーのアパートメントはマイアミにある。

ドラマや映画などではしょっちゅう舞台になる世界的にも有名な都市である。

「仕方ないだろ、ワシントンはマイアミよりずっと北なんだから」

「そりゃそうだけど……」

ちなみに、そんな華やかな名前を世界に知らしめるマイアミ市だが、つい最近では「全米一位の肥満都市」としてランクインしたという不名誉な記録も持っている。

「寒いところは好きじゃないわ」

確かに、寒いところと暖かいところでは、住みやすさは段違いだろう。誰だって、寒い地方に住むよりは、暖かい地方で暮らしたほうが良いに決まっている。

そう言っただけで黙り込んでしまったキャシーが気分を害したわけではないということをアシル・ブラスにはわかっていた。

「アンバー・ロジャーよ」

ぼそりとキャシーが独白した。

どれくらいの時間がたってからだだったろう。

「……あん？」

「アンバー・ロジャー。知ってるでしょ？」

突然、知っているでしょ？　と言われても把握しかねる。そんな彼の反応を面白がっているのか、それともなにも感じていないのか、と言った眼差しだ。

「アンバー・ロジャー……」

アンバーというは先ほどの話にでてきた「シザーハンズ」と呼ばれた女のことではあるのだろうが、いきなりアンバー・ロジャーと本名を言われてもぴんとこない。

そもそも、と、アシルは首を傾げながら考え込んだ。

「誰だったか……」

「寝た相手じゃないわよ」

アンバーはそんな尻軽女じゃないし。

金色のストレートの髪を揺らす女を、アシルは思い出した。

「まさか、あの、上院議員殺害事件の？」

あの上院議員殺害事件、と言われてキャシーは肩をすくめた。

「そうよ。あの、未解決の上院議員殺害事件に絡んでるらしいって

いう不審者よ」

「……あれか」

上院議員殺害事件の際、目撃されたと言われる女。

金色の髪の、華奢な背中の白人女性。

それだけが目撃情報。

「その後ろ姿しか知られてないから、重要参考人がシザーハンズだとは誰も知らないの」

くすくすとキャシーは笑った。

「……実際のところ、例の事件の犯人はアンバー・ロジャーなのか？」

「さあ……？」

曖昧に笑った彼女は、右肘を窓について頬杖をつく。

「アンバーに会ったときに聞いてみたらどう？」

シザーハンズ。

そう呼ばれる暗殺者。

彼女の真の姿を、ほとんどの同業者は知りはないのだ。

「まあ、そんなことより、とりあえず今は目の前のごたごたをなんとかしないとイケないわね」

キャシーは言ってから笑った。

目の前の事件。

アリッサ・ノースウッドの事件のことだろう。

いやに機嫌の良いカーリーと呼ばれる殺し屋は、酔狂にもマジックボムを手助けしようとしている。本来の彼女の性格を考えれば、それがどれほど珍しいことであるのかWかろうというものだ。

「マジックボムは、まともじゃないわよ。それだけ覚悟しておきなさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9956o/>

Unnamed child — Magic Bomb —

2011年10月8日09時39分発行